



DS
859
B35
1929
v.4

Rai, San'yo
Nihon gaishi shinshaku

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

DS
857
R338
1929
v.4

大禮記念

昭和漢文叢書

LIBRARY
APR 26 1971
UNIVE...



日本外史新釋

貞

文學士　賴成一著

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/nihongaishishins048800

日本外史新釋　貞册（一）

目次

日本外史新釋 卷十五

安藝 賴山陽先生原著
賴成一解義

德川氏前期

豐臣氏上

豐臣氏出於尾張。尾張愛智郡有中邑。邑多銀杏樹。因或呼銀杏村。享祿・天文之際、村民有彌助者焉。彌助無子。與其妻祈之於天。妻夢日輪入其懷。已而有身。天文五年正月朔、生一男兒。因名曰日吉。日吉生而英異、八歲失父。其母挈日吉、轉寄食邑人。邑人患之。同閭有筑阿彌者。爲國主織田信秀之僕、以疾歸耕。邑人爲議、納爲繼父。生一男一女。乃託日吉于邑傍光明寺、欲使爲僧。

訓讀 豐臣氏は尾張より出づ。尾張愛智郡に中邑有り。邑に銀杏樹多し。因つて或は銀杏村と呼ぶ。享祿・天文の際、村民に彌助といふ者有り。彌助子無し。其の妻と之を天に祈る。妻、日輪其の懷に入ると夢む。已にして身む有り。天文五年正月朔、一男兒を生む。因つて名づけて日吉と曰ふ。日吉生れて英異、八歳父を失ふ。其の母日吉を挈へ、轉じて邑人に寄食す。邑人之を患ふ。同閭に筑阿彌といふ者有り。國主織田信秀の僕と爲り、疾を以て歸耕す。邑人爲めに議り、納れて繼父と爲す。一男一女を生む。乃ち日吉を邑傍の光明寺に託し、僧爲らしめんと欲す。

通釋 豐臣氏は尾張から出てゐる。尾張の國愛智郡に中村といふ所があつて、その村には銀杏樹が澤山あつた。そこで銀杏村と呼ぶ者もあつた。享祿・天文の頃、其の村民に彌助といふ者があつた。彌助には子が爲かつた。その妻と二人で天に子の出來るやうにと祈つた。ある時其の妻は、太陽が自分の懷に入つた夢をみた。すると間もなく身重と成つた。天文五年の正月朔に一人の男の子を生み落した。そこで名前を日吉とつけた。この日吉といふ子は生れ付き氣性が並々でなく人に勝れてゐて、八歳の時に父を失つた。母は日吉を伴れて、あちこちと村人の家に居候となつて食べさして貰つてゐた。村の人々もこの母子を厄介者扱ひにしてゐた。その頃同村に筑阿彌といふ者が居つた。この男は國主の織田信秀の下僕となつてゐたが、その時病氣の爲め暇が出て村へ歸つて農耕に從事してゐた。そこで村の人達は彼の爲めに相談して、彼を彌助の後に入り婿として世話をし、日吉の繼父となした。一男一女が生れた。そこで日吉を村の近傍の光明寺に預けて、坊主にしようと思つた。

語釋 享祿・天文（後奈良天皇の年號。）〇閭（里門、轉じて里・村そのものを指す。）〇一男（長秀）〇一女（徳川家康に嫁す。）

日吉機敏而不曉誦梵。每聞人談武事、輙傾聽之、慨然歎曰「僧乞丐徒耳。大丈夫生於亂世、安學乞丐爲」於是游嬉任意、與人諍、輙毆擊之、欲使僧厭苦己、僧遂議逐歸其家。日吉恐繼父怒己也、大言曰「果逐我、我且焚寺、悉擊殺群僧」僧頗懼、乃託事辭謝、予衣物、禮而歸之。

訓讀 日吉機敏にして誦梵を曉らず。人の武事を談ずるを聞く每に、輙ち之を傾聽す。慨然として歎じて曰く「僧は乞丐の徒のみ。大丈夫、亂世に生れ、安んぞ乞丐を學ぶを爲さん」と。是に於て、遊嬉意に任せ、人と諍へば輙ち之を毆擊し、僧をして己を厭苦せしめんと欲す。僧、遂に其の家に逐ひ歸さんと議す。日吉、繼父の己を怒るを恐るゝや、大言して曰く「果して我を逐はゞ、我れ且に寺を焚き、悉く群僧を擊殺せんとす」と。僧頗る懼れ、乃ち事に託して辭謝し、衣物を予へ禮して之を歸す。

通釋 所が此の日吉は中々機轉のきく敏ばしこい子供で、お經を讀むことなどには頭が廻らぬ。人が戰の事を話すを聞く每に、いつも首を傾けて熱心に聽いた。慨然として歎いて曰ふのに「坊主などといふ者は乞食の仲間に過ぎない。此の亂れた世の中に男一匹と生れて、そんな乞食を勉强して何んとする」と。そこで勝手氣儘に遊び戲れ、人と喧嘩をすれば直ぐに相手を毆つたりして、和尙に自分をやり切れぬ奴だと思はせようとした。とうとう和尙らは日吉を家に逐ひ歸さうと相談した。日吉は、繼父の筑阿彌に怒られるのを心配して、大きなことを言つていふには「本當に俺を逐ひ出したら、俺はきつと寺を燒いて、坊主共を殘らず打ち殺してやるぞ」と。僧

侶どもは非常に怖がつて、そこで外の事にかこつけて寺に置くことをことわり、着物や品物をやつて丁寧に挨拶して日吉を家に歸した。

【語釋】誦梵（梵はけがれなき清淨の義から轉じて、佛教、寺、僧侶に關することにいふ。誦梵は讀經のこと。）

日吉時甫十歲。父素貧不能共存。復遣爲人奴、所至皆數月而去、轉徙於尾張・美濃之間。比二十歲、遂如遠江、爲士豪松下之綱家奴。之綱愛其才幹、每事使之。命名與助。之綱一日從容問曰「女尾張人也。知織田氏所用鎧何樣耶」與助對曰「天下之鎧皆桶皮。尾張獨用胴圓。施縢右肋、屈伸如意」之綱曰「吾欲得胴圓一領。女爲吾往買來」即附黃金六兩遣之。與助行自計曰「吾攘此金以資仕進、苟得意、他日償之易耳。小節不足拘也」乃入尾張、就其叔父謀焉。叔父可之、因勸仕織田氏。

【訓讀】日吉時に甫めて十歲。父素より貧にして共に存する能はず。復遣はして人の奴と爲す。至る所、皆數月にして去り、尾張・美濃の間に轉徙す。二十歲の比、遂に遠江に如き、士豪松下之綱の家奴と爲る。之綱其の才幹を愛し、事毎に之を使ふ。名を與助と命ず。之綱、一日從容として問うて曰く「女は尾張の人なり。織田氏用ふる所の鎧、何樣なるを知るや」と。與助對へて曰く「天下の鎧は皆桶皮なり。尾張は獨り胴圓を用ふ。縢を右肋に施し、屈伸意の如し」と。之綱曰く「吾れ胴圓一領を得んと欲す。女、吾が爲めに往いて買ひ來れ」と。即

ち黄金六兩を附して之を遺る。與助行く〳〵自ら計つて曰く「吾れ此の金を攘み、以て仕進に資し、苟も意を得ば、他日之を償ふこと易きのみ。小節拘るに足らざるなり」と。乃ち尾張に入り、其の叔父に就いて謀る。叔父之を可とし、因つて織田氏に仕ふるを勸む。

【通釋】日吉はその時漸く十歳であつた。父はもと〳〵貧乏で日吉を家に置くわけにゆかなかつた。そこでまた出して人の家に奉公させた。どこへ行つても皆數ケ月で飛び出し、尾張と美濃の邊を轉々としてゐた。二十歳の頃、とう〳〵遠江國に行つて、その土地の豪族の松下之綱の下僕に爲つた。之綱は彼の才氣を愛して、何事にも日吉を使つた。名を與助とつけた。ある日のこと、之綱が打ちくつろいで問うて曰ふには「お前は尾張の者である。だから知つてゐようが、織田家で使つて居る鎧はどんな鎧ぢや」と。與助はそれに對へて曰ふのに「日本何處でも鎧は皆桶皮と相場がきまつてゐます。尾張だけは胴丸を使用致します。これは紐を右脇につけて、伸び縮みが自由自在でござります」と。すると之綱はいふのに「余はその胴丸が一領欲しいと思ふ。お前行つて買つて參れ」と。卽坐に黄金六兩を渡して使に出した。與助は路々考へていふのに「俺はこの金を盜んで、どこかへ奉公する支度金にし、もし出世したら、その時に之を辨償することはわけのない話だ。小さな節義には餘り拘泥する必要はなからう」と。そこで尾張の國に入り、叔父の家に行つて相談をした。叔父は彼の意見に贊成をして、因つて織田家に仕へることを勸めた。

【語釋】桶皮（全體が桶のやうになつてゐて、胴ばかりである。鐵を打ちのべて作る。）○胴圓（胴圓とも胴丸とも云ふ。小さい札を綴ぢて竹の筒のやうに胴に合せて作る。袖も草摺もついてゐる。）○縢（とぢ目の紐。）○叔父（靑木勘兵衞。）

當此時、信秀既歿、信長嗣立、攻略四疆。與助亦以爲、非信長、無足與成功名者。於是、用其金、辨刀劍衣服、自造姓名、曰木下藤吉。瞷信長出、跪謁道側、曰、臣父筑阿彌、嘗爲君先公奴。臣幼流寓他方、不能自達君門。願君復收臣爲奴。信長熟視、笑曰、汝面類猴。其心必捷矣。乃收爲奴。常挈鞋以從。以其筑阿彌子也、呼曰小筑。藤吉奉仕甚勤。依託近臣、給其使令。信長嘗侵晨獨出。從者未屬、而藤吉輒從之。如此者數。信長寢親近之。

訓讀 此の時に當り、信秀既に歿し、信長嗣いで立ち、四疆を攻略す。與助亦おもへらく「信長に非ずんば與に功名を成すに足る者なし」と。是に於て其の金を用て、刀劍衣服を辨じ、自ら姓名を造り木下藤吉と曰ふ。信長の出づるを瞷ひ、道側に跪謁して曰く「臣の父筑阿彌は、嘗て君の先公の奴と爲る。臣、幼より他方に流寓し、自ら君の門に達する能はず。願はくは君、復臣を收めて奴と爲せ」と。信長、熟視し、笑つて曰く「汝の面、猴に類す。其の心必ず捷ならん」と、乃ち收めて奴と爲す。常に鞋を挈つて以て從ふ。其の筑阿彌の子なるを以て、呼んで小筑といふ。藤吉、奉仕甚だ勤む。近臣に依託し、其の使令に給す。信長嘗て晨を侵して獨り出づ。從者未だ屬せざるに、藤吉輒ち之に從ふ。此くの如きこと數なり。信長寢く之を親近す。

通釋 此の當時、織田信秀は既に歿し、信長が嗣いで立ち、四方の隣國を攻め取つてゐた。與助も「信長でな

ければ共に功名を成し遂げるに足る者はない」と思つてゐた。そこで預つた金で刀劍衣服を買ひ求め、自分で姓名を造つて木下藤吉と曰つた。信長の外出するのを覗つてゐて道側で跪きお目通をして曰ふに「臣の父の筑阿彌と申しまする者は、以前お殿樣の御先代樣の下僕で居りました。臣は幼時より他國に流浪うてゐまして、お殿樣の御門下へ參上致すことが出來ませんでした。何卒臣の父同樣臣をお取り上げ下され下僕となし下さらば誠に有り難き仕合せに御座います」と。信長が熟と視て、笑つて曰ふには「其の方の顏は猿によく似て居る。其の心も屹度す早いことであらう」と。そこで採用して下僕とした。彼は常に草履を取つて信長に從つてゐた。彼が筑阿彌の倅であるといふので、小筑と呼ぶことにした。藤吉は大層勉强して御奉公をした。近侍の家來に賴み込んで、信長の御用命をさせて貰つた。信長が嘗て朝迚も早く獨りで出かけたことがあつた。供の者はまだ續かなかつたのに、藤吉だけは、すぐにお供をした。斯樣な事が度び重なつた。信長は段々親しみ近づけるやうになつた。

語釋 自達（吾れと自ら出て行くこと。）○挐レ鞋（挐、音ダ、取り持つこと。）

其明年、信長所居清洲城、壁壞可百步、命吏發卒補之。彌月不成。藤吉從過城下、仰視而歎曰「嘻、危矣」因獨語久之。信長微聞之、呼藤吉面詰曰「小筑、汝欲何言」藤吉畏憚左右、不敢答。信長佯怒、拉其手近之。藤吉乃曰「方今君國、東有今川・武田、西有齋藤・淺井・六角、日窺我隙。然而弛備如此。有司爲君謀不忠」信長默然。既而歸舍、召藤

吉曰「使汝司工事、則汝能速竣之乎」藤吉曰「能」信長曰「吾今日、命汝司工事矣」藤吉拜謝、徑詣吏、告曰「主公命僕司工事、願諭徒屬、使聽僕令」吏意惜之曰「子好爲之、吾不復管也」藤吉乃盡會役徒、以君命賜之酒食、乃分爲十隊、以一隊充十步、身自奬勵督促之、兩日而成、信長適獵歸、見而大驚曰「猴奴乃能如此」因加俸、升爲吏、是歲、永祿二年也。

（訓讀）その明年、信長居る所の清洲城、壁壞るゝこと百歩可り、吏に命じ卒を發して之を補はしむ。月を彌りて成らず。藤吉從つて城下を過ぎ、仰ぎ視て嘆じて曰く「噫、危し」と。因つて獨語すること久しうす。信長、微かに之を聞き、藤吉を呼び、面のあたり詰つて曰く「小筑、汝、何を言はんと欲する」と。藤吉、左右を畏憚し、敢て答へず。信長佯り怒り、其の手を拉きて之を近づく。藤吉乃ち曰く「方今、君の國、東に今川・武田有り、西に齋藤・淺井・六角有り、日に我が隙を窺ふ。然り而して備を弛ぶる此くの如し。有司、君の爲に謀つて不忠なり」と。信長、默然たり既にして舍に歸り、藤吉を召して曰く「汝をして工事を司らしむれば、則ち汝、能く速に之を竣らんか」と。藤吉曰く「能くせん」と。信長曰く「吾れ今日、汝に命じて工事を司らしむ」と。藤吉拜謝し、徑に吏に詣り、告げて曰く「主公、僕に命じて工事を司らしむ。願はくば徒屬に諭し、僕が令を聽かしめよ」と。吏、意に之を惜んで曰く「子、好く之を爲せ。吾れ復管せざるなり」と。藤吉乃ち盡く

く役徒を會し、君命を以て之に酒食を賜ふ。乃ち分ちて十隊と爲し、一隊を以て十歩に充て、身自ら之を獎勵督促す。兩日にして成る。信長、適々獵して歸り、見て大に驚いて曰く「猴奴乃ち能く此くの如し」と。因つて俸を加へ、升せて吏と爲す。是の歲、永祿二年なり。

通俗譯 其の翌年、信長の居た所の清洲の城で、城壁が百間ばかり破壞したので、役人に命じて兵卒を繰り出して壞れた所を修繕させた。所が月を越しても出來上らなかつた。藤吉は信長にお供をして其の城下を通つて、城の壞れた所を仰ぎ見て歎息して曰ふのに「あゝ、危險なことだ」と。そこで獨りでブツ〳〵獨言を大分久しく言つてゐた。信長が、かすかにそれを聞いて、藤吉を呼び寄せ面前でそれを詰問して曰ふのに「小筑、其の方は何か申し度いことでもあると見ゆるな、言つて見ろ」と。藤吉は信長の左右の臣を恐れ憚つて、お答へしようとしなかつた。信長は、わざと怒つたふりして、藤吉の手を引つぱつて、引き寄せた。そこで藤吉が曰ふのに「目下、お殿樣のお國には、東には駿河の今川義元、甲斐の武田信玄といふ强敵が居り、西には、美濃の齋藤道三、越前の淺井長政、近江の六角義賢といふ强敵が居り、それが皆日々に我が隙間を覘つて居ります。それであるのにあのやうに油斷して城の備へを弛めてゐます。月を越しても出來上らぬなど、役人共はお殿樣の爲めに謀つて誠に不忠であります」と。信長は默つてゐた。そのうち信長は家に歸つて、藤吉を呼び入れて曰ふのに「其の方にこの工事をやらせれば、其の方は急速に此の工事を仕上げることが出來るか」と。藤吉がいふのに「やつて御覽に入れます」と。信長がいふのに「それでは今日、余は其の方に此の工事を司ることを申しつける」と。藤吉は拜しお禮を陳べて、直ちに役人の所に行つて、告げて曰ふのに「お殿樣が我が輩に工事を掌るやうにお申し附けになつた。何卒人夫達にさう言つて、拙者の言附けをよく聽くやうに命じて貰ひ度いものぢや」と。役人は心

中藤吉を憎んでいふのに「そんなことは君が好いやうに爲されたらよからう。身共の預り知つたことではない」と。そこで藤吉は皆人夫を集めて、御殿樣の御命令であると曰つて彼等に酒食を馳走した。そこで人夫を十組に分け・一組に十間の間隔を振り充て、自分自身出張つて勵まし褒め、監督やら、せき立て抔した。二日間で立派に出來上つて終つた。信長は丁度獵から歸つて來て此の樣を見て大に驚いて曰ふのに「猿め、中々仕出かし居るぞ」と。そこで俸祿を加へ登用して役人とした。この歲は永祿二年であつた。

語釋 清洲（尾張）○永祿（正親町天皇の年號。）

三年、藤吉又上言曰「清洲城之水、徒小牧便」信長已欲之而憚勞費未果、且患人知之水也、乃叱曰「猴奴何知、敢進妄言罪當死」凡藤吉言事、輒見叱斥衆目笑之曰「彼面皮何厚也」藤吉不以爲意、獨欲深結於信長。信長之士、前田利家・淺野長勝、與藤吉善。淺野養中邑人杉原某二女、利家悅其長女欲娶之。女不肯。强之不已。淺野患之。藤吉權謂利家曰「子舍諸。吾已通之矣」利家笑曰「吾未之知也。苟然子盍速婚嬬吾爲子媒焉」藤吉亦不甚辭、遂因柴田勝家請信長見允。藤吉家貧。成婚之夕、夫妻布藁于簀而坐、以瓦缸敗盞相酬。妻知其非常人也、事之甚謹。後淺野養近江人安

井長政者一爲レ子、妻以二其少女一。於レ是、淺野・加藤・福島・小出諸人、皆以二外戚一屬二藤吉一。

訓讀 三年、藤吉又上言して曰く「清洲城は水に乏し。小牧に徙ること便なり」と。信長已に之を欲す。而れども勞費を憚りて未だ果さず。且つ人の水に乏しきを知るを惡み、乃ち叱して曰く「猴奴、何をか知らん。敢て妄言を進むるは、罪、死に當す」と。凡そ藤吉事を言へば輒ち叱斥せらる。衆之を目笑して曰く「彼の面皮何ぞ厚き」と。藤吉以て意と爲さず、獨り深く信長に結ばんと欲す。信長の士、前田利家・淺野長勝・藤吉と善し。淺野、中邑の人杉原某の二女を養ふ。利家其の長女を悅び之を娶らんと欲す。女肯んぜず。之を強ひて已まず。淺野之を患ふ。藤吉、權に利家に謂つて曰く「子諸を舍け。吾れ已に之に通ぜり」と。利家笑つて曰く「吾れ未だ之を知らず。苟も然らば、子盡ぞ速に婚媾せざる。吾れ子が爲めに媒せん」と。藤吉も亦甚だ辭せず、遂に柴田勝家に因つて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻藁を簀に布きて坐し、瓦缸敗盞を以て相酬ゆ。妻其の常人に非ざるを知るや、之に事ふること甚だ謹む。後淺野、近江の人安井長政なる者を養ひて子と爲し、妻はすに其の少女を以てす。是に於て、淺野・加藤・福島・小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

通釋 永祿三年、藤吉は又獻言して曰ふには「清洲城は水が少なう御座います。小牧にお徙りになつた方が上策でございます」と。信長は前から矢張りさう思つてゐた。併し費用の問題でまだ實行しなかつたのである。それに他人が水の乏しいことを知るのを嫌がり、叱つて曰ふには「猴奴が何を知るものか。むやみに出鱈目を申すと死罪に當て行はるゝぞ」と。一體藤吉の言ふ事は何でも叱られて退けられた。皆の者は彼を目くばせして笑つて曰ふには「奴の面の皮は何といふ厚さだらう」と。藤吉はそんなことは意にもかけず、ひとり深く信長と心を

通じ合はうとした。信長の家來の前田利家・淺野長勝は藤吉と仲が善かつた。淺野は、中村の人の杉原某の娘二人を養つてゐた。利家がその長女の方を好いて娶らうとした。併し女が言ふことをきかぬ。利家は無理に所望して止まない。淺野はこれにはホト〱閉口してゐた。すると藤吉が嘘をついて曰ふには「君はあれは止しとけ。俺がもう關係してゐるのだ」と。利家は笑ひながら曰ふには「それは知らなかつた。さういふ事なら早速結婚したがよい。俺が仲人になつてやらう」と。藤吉もひどくは辭退せず、到頭柴田勝家を通して信長に願つた。許された。併し藤吉は家が貧しかつた。婚禮の夜、夫婦は藁を簀の上に布いてそれに坐り、素燒の德利に缺け猪口で酒をすゝめ合つた。妻は彼が並々の人でないことを知つて、非常に慇懃に仕へた。淺野はその後、近江の人安井長政といふ者を養子にし、妹娘の方と結婚させた。そこで、淺野・加藤・福島・小出等の人々は、皆妻方の親戚といふことで藤吉に屬することとなつた。

語釋 小牧（尾張）○權（一時の間に合せ。）○布藁于簀（こもを簀の上に布いたのである。簀は牀板（ゆかいた）である。）

六年夏、信長閱兵河洲、戲以藤吉爲將。藤吉部勒指麾之、如老於兵法者。其九月、信長出舍洲股。近臣福富某、失其刀笄、意藤吉。藤吉急赴津島市、密懸金購之。有一卒、來粥刀笄。藤吉驗之、乃盜刀笄者也。卽執縛之、候信長還、携卒要謁、俯伏垂泣。信長問故。藤吉具對曰「臣唯貧。故爲人所意」信長憫之、爲償其懸金、遂賜以百貫邑。信長方

行儉富國。患薪炭費多、命藤吉司之。費省十七。因試之數事、皆效。然未使將兵也。藤吉私制一旗、集少年自從。信長觀之怒其妄、命斫其旗。藤吉意色自如。

訓讀 六年夏、信長兵を河洲に閲し、戯に藤吉を以て將と爲す。藤吉之を部勒指麾すること、兵法に老いたる者の如し。其の九月、信長出でゝ洲股に舍す。近臣福富某其の刀笄を失ひ、藤吉を意ふ。藤吉急に津島の市に赴き、密に金に懸けて之を購ふ。一卒有り、來つて刀笄を粥ぐ。藤吉之を驗するに、乃ち刀笄を盜める者なり。即ち之を執縛し、信長の還るを候ひ、卒を携へて要謁し、俯伏垂泣す。信長故を問ふ。藤吉具に答へて曰く「臣唯だ貧し。故に人の意ふ所と爲る」と。信長之を憫み、爲めに其の懸金を償ひ、遂に賜ふに百貫の邑を以てす。信長方に儉を行ひ國を富まさんとす。薪炭の費多きを患へ、藤吉に命じて之を司らしむ。費、十の七を省く。因つて之を數事に試みるに、皆效あり。然れども未だ兵に將たらしめず。藤吉私に一旗を制し、小年を集めて自ら從ふ。信長之を觀て其の妄を怒り、命じて其の旗を斫らしむ。藤吉意色自如たり。

通釋 六年の夏、信長は河の砂原で閲兵を行ひ、ためしに藤吉を指揮官にしてみた。藤吉はその軍隊を部署指麾すること宛も兵法に老練な大將のやうであつた。其の年九月、信長は洲股に出かけて宿つた。近臣の福富某が自分の刀につけた笄を紛失して、藤吉の所爲ではないかと疑つた。そこで藤吉は急いで津島の町に往き、こつそり懸賞金附で探し求めた。一人の兵卒がやつてきて、刀の笄を賣りつけた。藤吉がそれを檢べて見ると、其奴が笄の盜人であつた。早速捕へて縛り上げ、信長の歸り途にその兵卒をつれて待ちうけ、拜謁し、地にひれふして涙を流した。信長がわけを尋ねると藤吉はくはしく事情を話した上、曰ふには「私は貧乏で御座いま

す。だから人に疑はれるのでございます」と。信長は可哀相に思ひ、藤吉の爲めにその懸賞金を償つてやり、更に千石の領地を賜はつた。信長はその頃儉約を行つて國を富まさうと考へてゐた。それには燃料の入費の嵩むのを心配して藤吉にその方面を監督させることにした。藤吉は全入費の中、十分の七の無駄を發見して省いた。そんなことで信長はその外に色々な方面に使つてみると皆顯著な效果を擧げた。併しまだ軍隊の指揮はさせなかつた。藤吉は勝手に一本の旗を作り、子供らを集めて大將の眞似をしたりした。信長はそれを見付け、勝手な振舞に腹を立て、其の旗を切り捨てさせた。藤吉は驚きもせず、平氣な顏付をしてゐた。

語釋 部勒（部は區分、勒は整頓すること。）○洲股（美濃）○津島（尾張）

信長既克今川氏、定尾張、西攻齋藤氏於美濃、踰洲股河用兵、數不得志。因會諸將、謀築壘于河西、以一將守之。諸將人人自危、莫敢當者。信長密謀之藤吉。藤吉對曰「孤壘斗入敵地。我兵必不欲往。卽往不諳其地形險易、一敗莫復往者。不若因其土人用之。臣嘗寓美濃、與其豪俠・大盜相識。宜誘爲我用。」因屈指擧其姓名、得蜂須賀小六・稻田大炊・梶原隼人・青山新七以下六十餘人。其黨屬千二百人。信長曰「吾亦聞有此輩矣。誰將此者。」曰「臣願當之。」信長許之。

訓讀 信長既に今川氏に克ちて尾張を定め、西齋藤氏を美濃に攻む。洲股河を踰えて兵を用ひ、數志を得

ず。因つて諸將を會し、壘を河西に築き、一將を以て之を守らしめんと謀る。諸將人人自ら危み、敢て當る者なし。信長密に之を藤吉に謀る。藤吉對へて曰く「孤壘敵地に斗入す。我が兵必ず往くを欲せず。即し往くも、其の地形の險易を諳んぜず、一敗せば復往く者莫からん。其の土人に因つて之を用ふるに若かず。臣嘗て美濃に寓し、其の豪俠・大盜と相識る。宜しく誘ひて我が用を爲さしむべし」と。因つて指を屈して其の姓名を擧ぐるに、蜂須賀小六・稻田大炊・梶原隼人・青山新七以下六十餘人を得たり。其の黨屬千二百人あり。信長曰く「吾も亦此の輩ありと聞く。誰か此に將たる者ぞ」と。曰く「臣願はくは之に當らん」と。信長之を許す。

〔通釋〕その中に信長は今川氏（義元）を敗つて尾張を統一し、西に向つて美濃の齋藤氏を攻めた。洲股河を渡つて戰をしかけたが、何度も失敗した。そこで諸將を集め、壘を川の西側に築き、大將一人にそこを守らせたいものだと相談した。大將達は皆夫々危ながつて、思ひ切つてその任に當る者がゐない。そこで信長は人知れず之を藤吉に相談した。藤吉は對へて曰ふには「獨立の壘で、而も地勢が敵地に突き込んだやうな所ですから、我が軍が行きたがらないのは當然で御座います。よしまた行くものが有つても、その地形の案內を知らないので、一と敗けでもしますともう行く者はございますまい。それよりはその土着の人間の中から軍隊を組織して用ふるのが一番宜いと存じます。私は以前美濃に一時滯在してをりましたので、その土地の名ある男達や大盜共と知合になつてをります。まづ此の者共を勸めて使つたら宜しいでせう」と。さう言つて指を折つて名前を擧げて見ると、蜂須賀小六・稻田大炊・梶原隼人・青山新七以下六十人餘を得た。それ等の者の手下は千二百人もあつた。信長がいふには「余もこの連中のあることを聞いてゐた。此の者共の大將は誰に致さうか」と。藤吉は「私にして戴き度うございます」と言つた。信長はそれを許した。

語釋 斗入（斗の如く入り込む。）

九年九月、發卒築壘。敵將守近邑者、以八千人出而沮之。我兵且戰且築、數日而成。於是、授藤吉以甲士五百、戒而遣之。藤吉乃招聚所識者。壘兵凡可三千。敵欲誘出而陷之、以輕卒挑戰。藤吉不肯出。即夜、聚其衆、議曰「敵必疲矣。且以我爲怯、不復設備。可襲而破也。」乃令小六等以數十人襲敵城。戒曰「莫使敵尾入我壘。」大炊曰「公勿憂。開門、可容二三人、以待之。臣請殿焉。」藤吉曰「前言以主公意爾。不行危道、莫以爲大功。自固而棄士、吾所不爲也。公等勉之。」衆踴躍而出。頃之邑中火起。大譟。藤吉又遣兵援之。衆大獲而至。乃效首虜於信長。信長賜藤吉一旗、就壘傍賜三千貫。命名曰秀吉。

訓讀 九年九月、卒を發して壘を築く。敵將の近邑を守る者、八千人を以て出で、之を沮む。我が兵且つ戰ひ且つ築き、數日にして成る。是に於て、藤吉に授くるに甲士五百を以てし、戒めて之を遣る。藤吉乃ち識る所の者を招聚す。壘兵凡そ三千可り。敵誘出して之を陷れんと欲し、輕卒を以て戰を挑む。藤吉肯て出でず。即夜其の衆を聚め、議して曰く「敵必ず疲れたらん。且つ我を以て怯と爲し、復備を設けざらん。襲ひて破るべきな

り」と。乃ち小六等をして、數十人を以て敵城を襲はしむ。戒めて曰く「敵をして我が壘に尾入せしむること莫かれ」と。大炊曰く「公憂ふる勿れ。門を開き二三人を容るべくして以て之を待て。臣請ふ殿せん」と。藤吉曰く「前の言は主公の意を以てするのみ。危道を行はずんば、以て大功を爲す莫し。自ら固めて士を棄つるは、吾が爲さざる所なり。公等之を勉めよ」と。衆、踴躍して出づ。頃くして邑中火起り、大に囂し。藤吉又兵を遣はして之を援く。衆大に獲て至る。乃ち首虜を信長に效す。信長、藤吉に一旗を賜ひ、壘傍に就いて三千貫を賜ふ。名を命じて秀吉と曰ふ。

通譯 九年九月に人夫を遣つて壘を築くことになつた。その近村を守る敵將が、八千人の兵を率ゐてそれを邪魔した。我が兵は敵の來る度びに戰つては築くといふ具合にして、數日かゝつて壘を拵へ上げた。そこで信長は藤吉に武裝した兵五百人を與へくれぐれも注意して遣はした。そこで藤吉は昔の知合共を呼び集めた。壘兵は皆で三千人許りになつた。敵は之を壘外に誘ひ出してやつゝけようと思ひ、身輕にした兵隊を繰り出して戰を挑んだ。藤吉は中々出ない。その晩に部下を集めて相談をして曰ふには「敵は（晝の働きで）きつと疲れてをるに違ひない。それに我が軍を臆病だと思つて、もう備をしてをらぬだらう。一番攻めかけて破ることができる」と。そこで小六等に數十人を附けて敵の城を夜不意に擊たせた。そのとき注意を與へていふのには「味方の壘に敵が後を追つかけて飛び込まぬ樣にしてくれ」と。大炊がいふのに「大將御心配なさるな。二三人位しか通れぬ程門を小さく開けてお待ち下されよ。私が殿を承つて歸つて來ます」と。藤吉が曰ふのに「今言つた言葉は信長公の御注意によつて言つたまでのことだ。危い藝當をやらねば大きな手柄は立てられない。自分ばかり用心堅固にして家來を見殺しにするなんてことは余の性分に合はないから出來ないことだ。君等は精出してしつかり賴

む」と。そこで皆勇み立つて出かけて行つた。程なく村の中に火が起り、ひどく騷がしくなつた。藤吉は又兵を送つて加勢させた。皆の者は澤山の獲物をして歸つて來た。そこで敵の首級や捕虜を信長に送り屆けた。信長は藤吉に旗一旒を賜はり、又墨の附近に三千貫の領地を賜はつた。そして名を命じて秀吉といつた。

美濃豪傑大澤某、據宇留間城、爲信長所患。秀吉以計降之、携謁信長。信長大喜、其夜密召秀吉曰、「大澤叛服不可必。不若速殺之。」對曰、「叛則誅之耳。今而殺之、無復來者。」不聽。秀吉歸舍、不佩刀而召大澤曰、「吾於子之身、有所不安。子第速亡。吾爲子留爲質。」大澤即亡去。諸豪傑聞之、多願屬秀吉。竹中重治者好奇計、從齋藤氏不見遇。亦來屬焉。

【訓讀】美濃の豪傑大澤某、宇留間城に據り、信長の患ふる所たり。秀吉計を以て之を降し、携へて信長に謁す。信長大に喜び、其の夜、密に秀吉を召して曰く「大澤は叛服必す可からず。速に之を殺すに若かず」と。對へて曰く「叛かば則ち之を誅せんのみ。今にして之を殺さば復來る者なからん」と。聽かず。秀吉舍に歸り、刀を佩びずして大澤を召して曰く「吾れ子の身に於て、安んぜざる所有り。子、第速に亡げよ。吾れ子が爲めに留つて質と爲らん」と。大澤即ち亡げ去る。諸豪傑之を聞いて、多く秀吉に屬せんと願ふ。竹中重治といふ者奇計を好む。齋藤氏に從ひて遇せられず。亦來り屬す。

通釈 美濃の豪傑大澤某といふ者が宇留間城に立て籠つてゐて、信長の心配の種であつた。秀吉は計略で以て此の男を降し、連れて信長にお目通りした。信長は大層喜び、その晩こつそり秀吉を呼んで曰ふには「大澤は背いたり降服したりして當てにはならぬ。直ぐ殺して終つたがよい」と。秀吉は對へていふには「若し叛いたらその時殺して終ふまでゝ御座います。今降參して來たばかりで殺しますと、この後もう慕つて來るものは無くなります」と。信長は承知しなかつた。そこで秀吉は家に歸り、無刀のまゝ大澤を呼んで曰ふには「私はあんたの一身に就て不安を感じてゐることがある。あんたは直ぐこゝからお逃げなさい。私があんたの人質になつてこゝに居るから」と。大澤は早速逃げて終つた。諸豪傑はこの話を聞いて、秀吉に屬かうと願ふものが多かつた。竹中重治といふ男は、人の意表に出る計略が巧みであつた。齋藤氏に從つて好い待遇を受けなかつた。この男も亦秀吉に來り屬いた。

語釈 宇留間城（美濃）

十一年、從信長擊六角義賢。爲先鋒、與諸將攻箕作城拔之。信長擁立將軍足利義昭于京師。三好氏兵屢犯之。十二年、義昭謂信長曰「爲吾置一將智勇兼備者、以鎭京師。」信長曰「諾。」將擇以進。衆意擬柴田勝家・丹羽長秀・佐久間信盛三人。至命發、則木下藤吉也。衆大驚。秀吉既拜命、即日詣足利氏、面謁義昭。裁決京師事、無不立辨。

三好氏不敢犯。衆妬之、譖其自用太過。信長斥不納。尋修大内。以秀吉及村井貞勝監工焉。八月、從擊伊勢、攻淺香城、先登。

訓讀 十一年、信長に從ひて六角義賢を擊つ。先鋒と爲り、諸將と箕作城を攻めて之を拔く。信長、將軍足利義昭を京師に擁立す。三好氏の兵屢〻之を犯す。十二年、義昭、信長に謂つて曰く「吾が爲めに一將の智勇兼備の者を置いて、以て京師を鎭せよ」と。衆、意に柴田勝家・丹羽長秀・佐久間信盛の三人を擬す。命發するに至れば、則ち木下藤吉なり。衆、大に驚く。秀吉既に命を拜し、即日足利氏に詣りて義昭に面謁す。京師の事を裁決するに、立ちどころに辨ぜざる無し。三好氏敢て犯さず。衆之を妬み、其の自ら用ふること太だ過ぐるを譖す。信長斥けて納れず。尋いで大内を修む。秀吉及び村井貞勝を以て工を監せしむ。八月、從ひて伊勢を擊ち、淺香城を攻めて先登す。

通釋 十一年、信長に從つて六角義賢を擊つた。この時は先鋒と爲り、諸將と箕作城を攻めて陷れた。信長は將軍足利義昭を京都に守り立てた。三好氏の兵隊が度々足利氏を攻め犯した。十二年、將軍義昭は信長に向つて曰ふには「余の爲めに智勇兼ね備はつた者を置いて京都を鎭護して貰ひ度い」と。信長が曰ふには「承知仕りました」と。一將を擇んで進めようとした。すると皆の者は心中に柴田勝家・丹羽長秀・佐久間信盛の三人を豫想してゐた。然るに命令が出て見るとそれは木下藤吉であつた。皆の者は非常に驚いた。秀吉は命を拜すると即日足利家に行つて義昭にお目通りをした。京都の事を裁き定めるのに、一つとして遲滯逡巡するやうなことはない。そこで三好氏も敢て將軍の威を犯さなかつた。皆の者はそれを妬んで、彼の氣儘な遣り方は非常に出過ぎ

てゐると讒訴した。信長は一向それを取上げなかつた。次いで内裏を修復をすることになつた。秀吉と村井貞勝とを工事の監督とした。八月、秀吉は信長に從つて伊勢を撃ち、淺香城を攻める際、先登を切つた。

語釋 箕作城（近江）〇撃伊勢（北畠氏を撃つた。）〇淺香城（伊勢）

元龜元年四月、從擊朝倉義景于越前、爲先鋒拔手筒城。會淺井長政發兵斷後。信長欲班軍、恐義景尾擊曰「誰留拒義景者。」衆不敢答。秀吉進曰「願命臣。」乃以三千人留當義景。義景不肯出。遂引兵而西。參河國主德川公、以客將殿信長軍。秀吉與之合兵行擊土寇、達于京師。以功食愛智川三萬石。木村・生駒・前野諸人屬之。六月、從擊淺井・朝倉二氏于姉川、因守橫山。九月、淺井長政・朝倉義景合兵圍信長于大津。秀吉赴援、圍解而歸。二年五月、淺井長政發兵攻鎌羽城。城距橫山頗遠。秀吉以輕兵馳遶山背、立旗於城後。敵驚潰走。八月、從攻淺井氏山本城。三年七月、又攻之。朝倉義景來救。逆擊破之。

訓讀 元龜元年四月、又從ひて朝倉義景を越前に擊ち、先鋒と爲りて手筒城を拔く。會〻淺井長政兵を發して後を斷つ。信長軍を班さんと欲し、義景の尾擊せんことを恐れて曰く「誰か留りて義景を拒ぐ者ぞ」と。衆敢て

答へず。秀吉進んで曰く「願はくは臣に命ぜよ」と。乃ち三千人を以て留りて義景に當る。義景背て出でず。遂に兵を引いて西す。參河の國主德川公、客將を以て信長の軍に殿たり。秀吉之と兵を合せ、行く〳〵土寇を撃つて京師に達す。功を以て愛智川の三萬石を食む。木村・生駒・前野の諸人之に屬す。六月、從ひて淺井・朝倉二氏を姉川に撃ち、因つて横山を守る。九月、淺井長政・朝倉義景兵を合せて信長を大津に圍む。秀吉赴き援け、圍解けて歸る。二年五月、淺井長政兵を發して鎌羽城を攻む。城は横山を距ること頗る遠し。秀吉輕兵を以て馳せて山背を遶り、旗を城後に立つ。敵驚いて潰走す。八月、從ひて淺井氏の山本城を攻む。三年七月、又之を攻む。朝倉義景來り救ふ。逆へ撃つて之を破る。

通釋 正親町天皇の元龜元年四月、秀吉は又信長に從つて朝倉義景を越前に撃ち、先鋒と爲つて手筒城を陷れた　その時丁度淺井長政が軍隊を出して後方を斷ち切つた。信長は軍を引き返さうと思つたが、義景に追撃されるのを恐れていふには「誰かこゝに留つて義景を拒ぐ者は居らぬか」と。誰も思ひ切つて返事をする者はなかつた。秀吉が進み出て曰ふには「どうぞ私にお命じ下さい」と。そこで三千人の兵を率ゐて義景に當ることになつた。義景はとう／＼出て來なかつた。それで、遂に兵を連れて西に戻つた。參河の國主德川公家康は、加勢の大將として信長の軍の殿を承つてゐた。秀吉はそれと兵を合せて、途中土匪をうち平らげ乍ら京都に着いた。秀吉はこの功によつて愛智川の三萬石を領することになつた。木村・生駒・前野などは、秀吉に從屬することになつた。六月又信長に從つて淺井・朝倉二氏を姉川に撃ち、因つて横山を守つた。九月、朝井長政・朝倉義景が兵を合せて信長を大津に取り圍んだ。秀吉は援けに行き、その爲めに圍みが解けて信長は歸つた。元龜二年五月、長政が兵を繰り出して鎌羽城を攻めた。この城は秀吉の守つてゐる横山から隨分離れてゐた。秀吉は身輕

な兵隊をつれて山かげを廻り、城の後に旗を押し立てた。敵は驚いて崩れ逃げた。八月、秀吉は信長に從つて淺井氏の山本城を攻めた。三年七月、又之を攻めた。朝倉義景が援けに來た。秀吉はそれを迎へ擊つて破つた。

【語釋】手筒城（越前）（）愛智川・姉川・横山・大津・鎌羽・山本（近江）

天正元年、以信長命廢將軍義昭、徙之若江。淀城爲義昭守不下。往說降之。八月、朝倉氏滅。秀吉攻拔小谷、獲淺井長政父子。秀吉距二氏有年。使信長無北顧之憂、得以經營畿內。以功食淺井氏故地十八萬石。明年、城于長濱居焉。三年五月、信長援德川氏、與武田勝賴戰于長篠。秀吉爲左先鋒有功。八月、朝倉餘黨大起越前。信長攻之至敦賀。秀吉受命、以舟師遶出敵後、上岸毀舟、襲河野取之、遂拔龍門諸城皆潰。是歲、除筑前守、更氏羽柴。

【訓讀】天正元年、信長の命を以て將軍義昭を廢し、之を若江に徙す。淀城、義昭の爲めに守つて下らず。往き說いて之を降す。八月、朝倉氏滅ぶ。秀吉攻めて小谷を拔き、淺井長政父子を獲たり。秀吉、二氏を距ぐ年有り。信長をして北顧の憂なく、以て畿內を經營するを得しむ。功を以て淺井氏の故地十八萬石を食む。明年、長濱に城いて居る。三年五月、信長德川氏を援けて、武田勝賴と長篠に戰ふ。秀吉左先鋒と爲りて功有り。八月、

朝倉の餘黨大に越前に起る。信長之を攻めて敦賀に至る。秀吉命を受け、舟師を以て遶つて敵後に出で、岸に上り舟を毀ち、河野を襲ひて之を取り、遂に龍門を拔く。諸城皆潰ゆ。是の歳筑前守に除せられ、氏を羽柴と更む。

通釋　正親町天皇の天正元年、信長の命に依つて將軍義昭を廢して若江に移した。所が淀城は、義昭に義理を立てゝ守つて降參しなかつた。そこで出向いて之を諭し、降した。八月、朝倉氏が滅んだ。秀吉は又小谷を陷れ、淺井長政父子の首を獲た。秀吉は大分久しい間この二氏を距いでゐた。その間に信長をして北方の心配なく畿内を料理することを得しめたのである。その功で、淺井氏の舊領十八萬石を貰つた。翌年、長濱に城を築いて住んだ。三年五月信長は德川氏を援け、長篠で武田勝頼と戰つた　秀吉は左先鋒となつて功を立てた　八月、朝倉の殘黨が越前で騷動を始めた。信長は之を攻めて敦賀まで行つた。秀吉は命令を受け、海軍を率ゐて、敵の後方に迂廻し、上陸するや否や、その舟を壞し、(決死の覺悟を示し)河野を不意に攻めて之を陷れ、遂に龍門を攻め下した。その他の諸城は皆潰えて終つた。この年、秀吉は筑前守に任ぜられ、氏を羽柴と變へた。

語釋　若江(河内)　○淀城(山城)　○小谷・長濱(近江)　○河野・龍門(越前)

秀吉以桐爲號、以金瓠爲馬表。毎一捷加一瓠。曰「吾必積至千矣」。因稱千瓠。織田氏之出軍也、桐號瓠表、敵望而避之。前後加封、總二十二萬石。秀吉私與其謀臣議曰「主公外優裕而内猜客。吾受大封。必不能保終」。因從容白信長曰「臣敢請。養次郎爲子、讓之以臣祿」。信長喜、因問曰「汝祿如何」。曰「君命臣西征者、西國二三州、可指日而

取レ取輒獻レ君、臣請二其餘一耳。信長乃以二其少子秀勝一爲二秀吉義子一。

訓讀 秀吉桐を以て號と爲し、金瓢を以て馬表と爲す。一捷每に一瓢を加ふ。曰く「吾れ必ず積んで千に至らん」と。因つて千瓢と稱す。織田氏の軍を出だすや、桐號瓢表、敵望んで之を避く。前後封を加へ、總て二十二萬石。秀吉私に其の謀臣と議して曰く「主公は外、優裕にして、內、猜吝なり。吾れ大封を受く。必ず終を保つ能はじ」と。因つて從容として信長に白して曰く「臣敢て請ふ。次郎を養ひて子と爲し、之に讓るに臣の祿を以てせん」と。信長喜び、因つて問うて曰く「汝が祿は如何」と。曰く「君、臣に西征を命ぜば、西國二三州、日を指して取るべし。取らば輒ち君に獻じ、臣其の餘を請はんのみ」と。信長乃ち其の少子秀勝を以て秀吉の義子と爲す。

通釋 秀吉は桐を紋所とし　金箔を塗つた瓢簞を馬表としてゐた。戰爭で一度勝つ度にその瓢簞を一つ增した。そして曰ふには「余はきつと千まで增して見せる」と。それで千成瓢簞と言つてゐた。織田氏が軍隊を進める時、桐の紋・瓠の馬表を見ると敵は戰はないで之を避けた。前後貰つた封を加へると全體で二十二萬石になつた。秀吉は人知れず自分の謀臣と議つて曰ふには「殿は表面は如何にもゆつたりと心廣く見えるが、實は內心疑ひ深く吝嗇である。然るに余はこんなに大きい祿を受けてゐる。屹度このまゝ無事に濟むまい」と。そこで或る時ゆつくり信長に申し上げるには「私は是非、御願ひ致し度い儀が御座います。二の丸樣を養子に致して、私の祿をお讓り申したいと存じます」と。信長は喜び、因つて問うて曰ふには「お前自身の祿は如何致すのだ」と。秀吉が曰ふには「殿が私に西國征伐をお命じ相成りますれば、西國の二つ三つは日限を切つて取ることが出來ま

す。取りました上は早速殿に獻上し、私はその殘り物を頂戴致せば宜しうございます」と。そこで信長は年の少い秀勝を秀吉の養子にした。

【語釋】少子（二男であつた。）

當是時、毛利輝元、割據山陽・山陰十餘州、浮田直家、以備前・美作附之。播磨人赤松義祐・別所長治・小寺政職等、恐被其兵、送款於織田氏。政職使者黑田孝高有器略。因秀吉說毛利氏可擊狀曰「臣請爲之鄕導」秀吉具語之信長。信長終決意西征。五年、以秀吉爲征西大將、使取播磨、以自封。十月、秀吉入辭。信長授以記幟、曰「功成則擧中國予汝。汝遂進取九州。若其援師、當依請遣之」

【訓譯】是の時に當り、毛利輝元、山陽・山陰十餘州に割據し、浮田直家、備前・美作を以て之に附く。播磨の人赤松義祐・別所長治・小寺政職等、其の兵を被るを恐れて、款を織田氏に送る。政職の使者黑田孝高、器略有り　秀吉に因つて毛利氏擊つべきの狀を說く。曰く「臣請ふ、之が鄕導を爲さん」と。秀吉、具に之を信長に語る。信長、終に意を決して西征す。五年、秀吉を以て征西大將と爲し、播磨を取り以て自ら封ぜしむ。十月、秀吉入りて辭す。信長、授くるに記幟を以てし、曰く「功成らば、則ち中國を擧げて汝に予へん。汝遂に進んで九州を取れ。其の援師の若きは、當に請に依つて之を遣はすべし」と。

通釋 此の當時毛利輝元が山陽・山陰十餘ケ國の土地に割據して、浮田直家は備前・美作を以て輝元に附いてゐた。播磨の人赤松義祐・別所長治・小寺政職等が輝元に攻められることを恐れて織田氏に內通した。政職の使者の黑田孝高は中々器量、策略のある男であつた。そして曰ふには「臣が何卒道案內仕り度い」と。そこで秀吉は詳しくこれを信長に取り次いで話した。そこで信長は終に決心して西の毛利を征することになつた。天正五年、信長は秀吉を征西大將となし、播磨を攻め取つて自分の領地となさしめることにした。十月、秀吉は入りて信長にお暇乞をした。信長は自分の紋所のついた幟を授けて曰ふには「うまく成功したならば、中國は皆其の方に與へるぞ。其の方は尙ほ進んで九州を取れよ。其れに要する援軍の如きはお前の方からの申出によつて幾らでも出してやるであらう」と。

語釋 黑田孝高（號を如水といつた器量人。）

秀吉拜而對曰、「君不以臣鄙陋、舍勳舊諸將、而命大任於臣。臣敢不竭力。臣辱記幟之貺。是君使臣得專制也。討叛撫服、臨機制變、以定中國、在臣度內耳。君之近臣森・矢部・福富諸人、積功累勞、未有所報。中國既定、願以封此輩。臣則直進、乘勢遂下九州。九州下、則願賜其一歲之入。蓄糧仗、造舟艦、濟海入朝鮮。君欲賞臣功、願以朝鮮爲請。臣乃用朝鮮之兵、以入於明。庶幾倚君威靈、席卷明國、合三國爲一。是臣之宿

志也」信長笑曰「秀吉又復大言乎」遂許便宜從事。

【訓讀】秀吉、拜して對へて曰く「君、臣が鄙陋を以てせず、勳舊の諸將を舍いて、大任を臣に命ず。臣敢て力を竭さざらんや。臣、記幟の貺を辱うす。是れ君、臣をして專制を得しむるなり。叛を討ち服を撫し、機に臨み變を制し、以て中國を定めんこと、臣の度内に在るのみ。君の近臣森・矢部・福富の諸人、功を積み勞を累ね、未だ報ゆる所あらず、中國已に定まらば、願はくは以て此の輩を封ぜよ。臣は則ち直に進み、勢に乘じて遂に九州を下さん。九州下らば、則ち願はくは其の一歲の入を賜へ。糧仗を蓄へ、舟艦を造り、海を濟りて朝鮮に入らん。君、臣の功を賞せんと欲せば、願はくは朝鮮を以て請を爲さん。臣乃ち朝鮮の兵を用ひ以て明に入らん。庶幾はくは君の威靈に倚り、明國を席卷し、三國を合せて一と爲さん。是れ臣の宿志なり」と。信長笑つて曰く「秀吉又復大言するか」と。遂に便宜、事に從ふを許す。

【通釋】秀吉は拜して、それにお對へして曰ふには「我が君には臣の身分卑しいのも關はず、他の勳功ある故參の大將を差し置いて、此の大任を臣にお命じ下さりました。此の上は何うして力を竭さない譯に行きませうぞ。臣は辱くも御紋所入りの幟を拜領致しました。これはつまり臣に何んでも思ふ存分にやつて宜い、專制の權を下し置かれたことであります。叛者を征伐し、服從する者を慰撫し、其の時機時機に應じて非常の事變を處理し、かくして中國を平定することは、私の胸の内に在ることに御座ります。お殿樣の近臣の森・矢部・福富の方々は、長年功勞を積み累ねてゐられまするが、まだ其の勞に報いられてゐられぬやうです。中國が既に平定致しましたなら、何卒其の地は此等の方々に與へて戴き度い。臣は則ち直ちに進んで勢ひに乘じてその先

き九州迄も平定致しませう。九州が降參しましたら何卒九州の一年の上り高を頂戴致し度いものに御座います。臣は兵糧武器を蓄へ軍艦を作つて海を渡り朝鮮に攻め入りませう。お殿樣が臣の功勞をお賞め下さらうと御思ひ遊ばすならば、何卒朝鮮を戴き度いもので御座います。そこで臣は朝鮮の兵を使ひまして明に攻め入りませう。冀くは御殿樣の御威光によりまして明國を卷くし取り、日本、朝鮮、支那の三國を合併して一つと致しませう。是れが臣の年來の志に御座います」と。信長が笑つて曰ふには「秀吉が又例の大きな事をいふか」と。遂に一々信長に伺ひを立てゝ仕事をせずとも、便宜に從つて事を處理して宜いと許した。

語釋 度内（胸算用。）

於是、秀吉將兵數千、入播磨、至于御著。政職中悔、走歸毛利氏。黑田孝高與其父宗圓居姬路。迎說秀吉曰「臣所居形勝之地也。君宜據爲根本、西面以圖毛利氏」秀吉從之、予孝高以宍粟郡。十一月、秀吉將兵、攻佐用拔之、進取上月。浮田直家在岡山。發兵來援。孝高逆戰。秀吉赴援、令隊將堀尾吉晴進擊。我兵少卻。秀吉自後呼曰「今日始與中國兒戰。勿貽濃尾之羞」我兵奮前、擊走直家兵、遂拔上月而還。已而直家襲而復之。六年正月、秀吉大城姬路。故出雲國主尼子勝久、以兵來屬、取上月。以乏

糧退還。城復爲直家有。二月、秀吉赴攻、盡焚殺其兵、以城予勝久。

訓讀 是に於て、秀吉兵數千に將として、播磨に入り、御著に至る。政職中ごろ悔い、走つて毛利氏に歸す。黑田孝高・其の父宗圓と姫路に居る。迎へて秀吉に說いて曰く「臣の居る處は形勝の地なり。宜しく據つて根本と爲し、西面以て毛利氏を圖るべし」と。秀吉之に從ひ、孝高に予ふるに宍粟郡を以てす。十一月、秀吉兵に將とし、佐用を攻めて之を拔き、進んで上月を取る。浮田直家岡山に在り、兵を發して來り援く。孝高逆へ戰ふ。秀吉赴き援け、隊將堀尾吉晴をして、進み擊たしむ。我が兵少しく卻く。秀吉後より呼んで曰く「今日始めて中國兒と戰ふ。濃尾の羞を貽す勿れ」と。我が兵奮ひ前み、擊つて直家の兵を走らせ、遂に上月を拔いて還る。已にして直家襲ひて之を復す。六年正月、秀吉大に姫路に城く。故の出雲の國主尼子勝久、兵を以て來り屬し、上月を取る。糧乏しきを以て退き還る。城、復直家の有と爲る。二月、秀吉赴き攻めて、盡く其の兵を焚殺し、城を以て勝久に予ふ。

通釋 そこで秀吉は數千の兵を率ゐて播磨に入り御著に到着した。小寺政職は（一旦信長に欵を通じたもの）その後それを悔い、走つて毛利氏に投じた。黑田孝高は其の父宗圓と共に姫路に居つた。秀吉を迎へて曰ふには「私の居る所は至極地の利を得た所であります。君にはそこを根據地と爲し西に向つて毛利氏をやつつける算段をなされたら宜しいでせう」と。秀吉はその言に從ひ、孝高に宍粟郡を與へた。十一月、秀吉は兵に將となり佐用を攻めて之を陷れ、進んで上月を取つた。浮田直家は岡山に居つた。兵を繰り出して援けにきた。孝高はそれを迎へ戰つた。秀吉も援けに行き、隊將の堀尾吉晴をして進擊させた。我が軍はそこで少し退却氣味になつ

た。その時秀吉は後から怒鳴つて曰ふには「中國の奴輩と戰ふのは、今日が始めてだ。美濃・尾張の羞を殘さぬやうにしろ」と。我が兵は元氣を奮つて進み、直家の兵を擊ちはらひ、遂に上月を陷れて歸つた　その内に直家が不意に攻めて來て之を取り戾した。六年正月、秀吉は大々的に姬路に城を築いた。前の出雲の國主、尼子勝久が兵をつれて來り、味方して上月を陷れた。兵糧が少かつた爲めに退却して歸つた。從つて城は又直家のものとなつた。二月、秀吉は擊つて出で、城兵を殘らず燒き殺し、この城を勝久に與へた。

語釋 宍粟郡・佐用・上月(播磨)

三月、別所長治叛附毛利氏、聚族黨八千、據三木城。城甚險、而野口・志方・神吉・櫛橋等諸寨、皆應之。秀吉按地圖議曰「彼欲竢我攻三木、而襲其後也。吾當反其計以制勝矣」。乃攻野口下之。四月、毛利氏族將吉川元春・小早川隆景、與直家合兵七萬、攻上月。秀吉留兵備三木、而自赴援之、陣于高倉山。信長使攝津守荒木村重等來助。五月、更遣其三子信忠・信雄・信孝來援。相持不戰。秀吉以爲敵兵衆食足。未可勝。卽勝、非吾功也。乃請信長班師、陣于書寫山、攻拔神吉・志方。八月、秀吉將二萬人攻三木。直家知秀吉終不可抗、欲送款焉。會〻堺港藥商子小西彌九郎者、養於岡山賈人。

其生父老於京師。秀吉微時、數館其家、與彌九郎親善。直家因用充使者赴三木。秀吉爲請信長許之。伯耆國主南條元續亦以國降。而荒木村重爲明智光秀所讒、得罪叛應毛利氏。

訓讀 三月、別所長治叛いて毛利氏に附き、族黨八千を聚めて三木城に據る。城甚だ險にして、野口・志方・神吉・櫛橋等の諸寨、皆之に應ず。秀吉地圖を按じて議して曰く「彼れ我が三木を攻むるを俟つて、其の後を襲はんと欲するなり。吾れ當に其の計に反して以て勝を制すべし」と。乃ち野口を攻めて之を下す。四月、毛利氏の族將吉川元春・小早川隆景、直家と兵七萬を合せて、上月を攻む。秀吉兵を留めて三木に備へ而して自ら赴いて之を援け、高倉山に陣す。信長、攝津守荒木村重等をして來り助けしむ。五月、更に其の三子信忠・信雄・信孝を遣はして來り援けしむ。相持して戰はず。秀吉以爲へらく「敵は兵衆く食足る。未だ勝つ可からず。即し勝つも、吾が功に非ざるなり」と。乃ち信長に請うて師を班し、書寫山に陣し、攻めて神吉・志方を拔く。八月、秀吉二萬人に將として三木を攻む。直家、秀吉の終に抗すべからざるを知り、款を送らんと欲す。會々堺港の藥商の子小西彌九郎なる者、岡山の賈人に養はる。其の生父は京師に老す。秀吉の微なりし時、數々其の家に館し、彌九郎と親善なり。直家因つて用ひて使者に充て三木に赴かしむ。秀吉爲めに信長に請うて之を許す。伯耆の國主南條元續も亦國を以て降る。而して荒木村重は明智光秀の讒する所と爲り、罪を得叛いて毛利氏に應ず。

通釋 三月、別所長治が叛いて毛利氏に附き、一族郎黨八千人を集めて三木城に立て籠つた。城は非常に要害

で、その上、野口・志方・神吉・櫛橋などの壘も皆之に應じて兵をあげた。秀吉は地圖をしらべて、相談して曰ふには「敵は我が軍が三木を攻めるのを待つて、その留守を襲はうと言つてゐる。こつちはその裏をかいて勝利を得てやらう」と。そこで野口を攻めて之を下した。四月、毛利氏の一族の將吉川元春・小早川隆景が直家と共に七萬の軍勢を合して上月を攻めた。秀吉は兵を殘して三木に備へ、自分は上月を助けに出かけて高倉山に陣取つた。信長は攝津守荒木村重等をして來り援けしめた。五月、更に三人の子の信忠・信雄・信孝を派遣して援けさせた。對陣してゐて戰を交へなかつた。秀吉は考へるのに「敵は人數が多い上に食物も十分ある。だからまだ勝つわけには行かぬ。もし勝つたとしても（こんなに援兵が來ては）自分の手柄にならない」と。そこで信長に願つて軍を還し、書寫山に陣取り、神吉と志方を攻め落した。八月、秀吉は二萬人に將として三木を攻めた。直家は、秀吉には結局かなはぬと悟つて、内通をしようと思つた。丁度其の時、堺港の藥種屋の倅の小西彌九郎といふ者が岡山の商人の家に養はれてゐた。その實父に當る者は京都で隱居をして居つた。秀吉がまだ微賤であつた頃、度々その家に宿つたことがあつて、彌九郎とは親しい仲であつた。そこで直家はその彌九郎といふ者を使者として三木に行かせた。秀吉は信長に願つてこれを許した。伯耆の國主、南條元續も、國を擧げて降參した。荒木村重は明智光秀に讒言され、罪に處せられたので、叛いて毛利氏に應じた。

語釋　三木城・野口・志方・神吉・櫛橋・高倉山・書寫山（播磨）

十一月、信長自將討村重。秀吉往見信長曰「臣識村重非叛者也。是必有故。臣請說降之。」乃輕裝赴伊丹、面諭村重。村重謝曰「織田公豈終釋然於我哉。」秀吉泣、別而出。

伊丹人請殺之。村重曰「彼肯輕身來此。殺之不義」。秀吉更遣黑田孝高説之。村重囚之。孝高不屈。秀吉乃歸三木、休戰築長圍困之。長治與村重通、自間道潜出、城于淡河・丹生、互爲應援。

訓讀 十一月、信長自ら將として村重を討つ。秀吉往いて信長に見えて曰く「臣、村重の叛くものに非ざるを識る。是れ必ず故あらん。臣請ふ、説いて之を降さん」と。乃ち輕裝して伊丹に赴き、村重を面諭す。村重謝して曰く「織田公、豈に終に我に釋然たらんや」と。秀吉泣き、別れて出づ。伊丹の人之を殺さんと請ふ。村重曰く「彼れ肯て身を輕んじて此に來る。之を殺すは不義なり」と。秀吉更に黑田孝高を遣はして之に説かしむ。村重之を囚ふ。孝高屈せず。秀吉乃ち三木に歸り、戰を休め長圍を築いて之を困ましむ。長治、村重と通じ、間道より潛に出で、淡河・丹生に城き互に應援を爲す。

通釋 十一月、信長は自ら軍を率ゐて村重を討たうとした。秀吉は出かけて行つて信長に拜謁して曰ふには「私は、村重が謀叛などをするやうな人間でないことをよく存じてをります。これには屹度譯があることで御座いませう。私がよく話して降參させて見ませう」と。そこで伴など手輕にして伊丹に出向き、村重に直接會つて口説いた。村重は禮を言つて曰ふには「織田公は降服してみた所で、結局底までさつぱりなされるとは思はれぬ」と。秀吉は涙を流し、別れを告げて出て行つた。伊丹の人は秀吉を殺させてくれと願つた。村重が曰ふに「彼は私の爲めに身命を輕んじこゝへ來てくれたのである。それを殺すのは不義理な話だ」と。秀吉は更に黑

田孝高をやつて說かせた。村重はそれを捕へて押し込めた。併し孝高は屈しなかつた。そこで秀吉は三木に歸り、戰をやめ、長い圍みを築いて苦しめた。城主長治は村重と聯合し、拔け道からこつそり出て、淡河や丹生に城を築き、雙方互に應援をし合つた。

語釋 伊丹・丹生(攝津) (淡河(播磨)

七年正月、長治出襲秀吉。秀吉與異父弟秀長、逆擊大破之、斬其銳兵八百。二月、秀吉以風雨夜、襲取丹生、使秀長以五百騎攻淡河。不利。守將亦收入三木。乃命加藤光泰、築寨以絕其糧道。九月、村重棄伊丹、走保華隈。孝高乃得歸。先是、竹中重治死。孝高獨爲謀主。村重與長治、皆告急於毛利氏。毛利氏不能援、獨送糧食。襲破平田寨。長治引兵出取其糧。秀吉以麾下邀擊于大村。近士脇坂安治、斬敵驍將魚住源吾。秀吉因大破之、獲別所氏族十人、徙壘逼城。八年春、遂陷之、使長治自殺、以免城兵。於是、盡定播磨。乃令浮田直家以備前・美作兵、西圖毛利氏、城于兒島。小早川隆景、數攻之。乃遣淺野長政、率舟師赴援、擊走之。

訓讀 七年正月長治出で、秀吉を襲ふ。秀吉、異父弟秀長と、逆へ擊つて大に之を破り、其の銳兵八百を斬

る。二月、秀吉風雨の夜を以て、襲うて丹生を取り、秀長をして五百騎を以て淡河を攻めしむ。利あらず。守將も亦收めて三木に入る。乃ち加藤光泰に命じ、寨を築いて以て其の糧道を絕たしむ。九月、村重伊丹を棄て、走つて華隈を保つ。孝高乃ち歸るを得たり。是より先き、竹中重治死す。孝高獨り謀主たり。村重・長治と皆急を毛利氏に告ぐ。毛利氏援くる能はず、獨り糧食を送る。襲うて平田の寨を破る。長治兵を引い、出でゝ其の糧を取る。秀吉麾下を以て、大村に邀へ擊つ。近士脇坂安治、敵の驍將魚住源吾を斬る。秀吉因つて大に之を破り、別所氏の族十人を獲、壘を徙して城に逼る。八年春、遂に之を陷れ、長治をして自殺せしめ、以て城兵を免れしむ。是に於て、盡く播磨を定む。乃ち浮田直家をして、備前・美作の兵を以て、西毛利氏を圖り、兒島に城かしむ。小早川隆景數之を攻む。乃ち淺野長政を遣はし、舟師を率ゐて赴き援けしめ、擊つて之を走らす。

【通釋】七年正月、長治は三木城を出て秀吉を襲つた。秀吉は異父弟の秀長と迎へ擊つて大に之を破り、敵の銳兵八百人を斬り殺した。二月、秀吉は風雨の激しき夜に丹生を不意に攻め取り、秀長をして五百騎をつれて淡河を攻めさせた。うまく行かなかつた。守將も兵をまとめて三木城に入り込んだ。そこで加藤光泰に命じ、壘を築いて城の兵糧道を絕たせた。九月、村重は伊丹を棄てゝ走つて華隈を保持した。それで孝高はのがれ得ることが出來た。これより前、既に竹中重治は死んだ。從つて孝高だけが秀吉の參謀となつた。村重・長治共に毛利氏に急を知らせた。毛利氏はそれを助けることができないので、唯だ糧食を送つた。味方は不意に擊つて平田の寨を破つた。長治は兵を連れて出でその兵糧を奪ひ取つた。秀吉は旗下の兵を率ゐて大村に迎へうつた。近侍の脇坂安治は、敵の勇將魚住源吾を斬つた。これに乘じて秀吉は大に敵を破り、別所氏の一族十人を捕へ、壘を移して城に迫つた。八年の春、遂に之を陷れ、長治をして自殺させ、城兵は免してやつた。こゝに於て播磨を全部一

統したわけである。そこで浮田直家をして、備前・美作の兵を用ひて、西の方毛利氏をやつつけようと、兒島に城を築かせた。小早川隆景が度々之を攻めた。そこで淺野長政を遣はし、海軍を率ゐ、行つて援けさせ、撃つて隆景を走らせた。

語釋 異父弟（母と築阿彌との子。）〇華隈（攝津）〇兒島（備前）

時山名氏據但馬・因幡、屬毛利氏。於是、秀吉自將撃山名祐豐于但馬、攻竹田城。四月、撃山名豐國于因幡。因幡質子在鹿野城。秀吉攻而取之。七月、再入但馬、拔諸城。山名祐豐以出石城降。遂定但馬、再入因幡、至鳥取城、縛所取質子於城外、諭降之。豐國乃出降。而城兵未下。乃引兵還。九年春、令海賈齎金數千兩、赴因幡、索粟、倍價糴之。因幡人大喜、爭糴。

訓讀 時に山名氏但馬・因幡に據つて、毛利氏に屬す。是に於て、秀吉自ら將として山名祐豐を但馬に撃ち、竹田城を攻む。四月、山名豐國を因幡に撃つ。因幡の質子鹿野城に在り。秀吉攻めて之を取る。七月、再び但馬に入りて諸城を拔く。山名祐豐出石城を以て降る。遂に但馬を定め、再び因幡に入りて鳥取城に至り、取る所の質子を城外に縛し、諭して之を降す。豐國乃ち出で、降る。而して城兵未だ下らず。乃ち兵を引いて還る。九年春、海賈をして金數千兩を齎し、因幡に赴いて粟を索め、價を倍して之を糴せしむ。因幡の人、大に喜び、爭う

て糶す。

通釋 その頃、山名氏は但馬・因幡に據つて毛利氏に屬いてゐた。そこで秀吉は自ら大將となつて但馬に出かけ、山名祐豐を討ち、竹田城を攻めた。四月因幡に行き山名豐國を討つた。毛利氏に納れた因幡豐國の人質は鹿野城に居つた。秀吉は攻めてそれを捕へた。七月、又但馬に入つて諸城を陷れた。山名祐豐も出石城を擧げて降參した。遂に但馬を平定したので、再び因幡に入つて鳥取城に至り、捕へた人質を城の外に縛りつけ、穩やかに降服するように話をして諭した。そこで豐國は城を出て降參した。けれども城兵はまだ降らなかつた。そこで秀吉は兵をつれて歸つて行つた。九年春、貿易商人に、金數千兩を持たせ因幡に行つてもみ米を倍の値段で買ひつけさせた。因幡の人は大に喜んで我れ勝ちに賣り込んできた。

語釋 鹿野城（因播）〇出石城（但馬）〇粟（米の皮を取らざるもの、もみをいふ。）〇糴、糶（買ひ入れると賣り出すと。）

七月、秀吉乃以兵五萬攻鳥取、使秀長攻丸山。二城食乏。我牙兵加藤清正等、日夜攻擊。清正杉原氏戚屬也。襁褓喪父母、秀吉妻取育之。是役甫十八。與城兵戰、多獲首級。十月、吉川元春發兵來救。未至而城陷。秀吉進入伯耆、助南條元續、軍于鵜山、與元春相持。天已寒。定因幡、使降將宮部繼潤守之而還。

訓讀 七月、秀吉乃ち兵五萬を以て鳥取を攻め、秀長をして丸山を攻めしむ。二城食乏し。我が牙兵加藤清正

等、日夜攻擊す。清正は杉原氏の戚屬なり。襁褓にして父母を喪ひ、秀吉の妻取りて之を育す。是の役甫めて十八。城兵と戰ひ、多く首級を獲たり。十月、吉川元春兵を發して來り救ふ。未だ至らずして城陷る。秀吉進みて伯耆に入り、南條元續を助け、鵠山に軍して、元春と相持す。天已に寒し。因幡を定め、降將宮部繼潤をして之を守らしめて還る。

通釋 七月、秀吉は五萬の兵を率ゐて鳥取を攻め、秀長に丸山を攻めさせた。この二城は兵糧に缺乏してゐた。我が旗下の兵加藤清正等が晝夜の分ちなく攻擊した。清正は杉原氏の親戚である。襁褓の頃父母に死に別れたので、秀吉の妻が引き取つて育てたのである。この戰にやうやく十八歲であつた。彼は城兵と戰つて多くの首を取つた。十月、吉川元春が兵を繰り出して二城を援けに來た。まだ着かぬ内に城が陷つて終つた。秀吉は進んで伯耆に入り、南條元續に加勢して、鵠山に陣取り、元春と相對持した。その内に寒い時候になつた。因幡を平定し、降將の宮部繼潤に守備させて自分は還つた。

語釋 丸山(因幡) ○鵠山(伯耆) ○守之(鳥取城を守らせた。)

秀吉以五歲定五國。十二月、赴安土、卽夜、謁信長。信長呼而前之、撫其面曰「女面目非復昔日藤吉。明日、我且以客禮饗女矣。」旦日、秀吉獻寶刀一、鞍馬百、土物五千、布旅蔽地。信長自城樓視之、欣然謂左右曰「此大膽藤吉所獻者乎。」饗而遣之。十年正月、直家病卒。秀吉爲請立其子秀家。

【訓読】秀吉五歳を以て五國を定む。十二月安土に赴き、卽夜、信長に謁す。信長呼んで之を前め、其の面を撫して曰く、「女が面目復昔日の藤吉に非ず。明日、我れ且に客禮を以て女を饗せんとす」と。旦日、秀吉寶刀一、鞍馬百・土物五千を獻じ、布旅して地を蔽へり。信長城樓より之を視、欣然として左右に謂つて曰く「此れ大膽藤吉の獻ずる所の者か」と　饗して之を遣る。十年正月、直家病んで卒す。秀吉爲めに請ひて其の子秀家を立つ。

【通釋】秀吉は五年間で五ケ國を平定した。十二月、安土に往き、その晩、信長にお目通りをした。信長は間近に彼を呼び寄せ、その顔を撫で、曰ふには「お前の面膽は最早昔の藤吉ではなくなつた。明日は余がお客に對する禮でお前に御馳走をしよう」と。翌日、秀吉は寶玉で飾つた太刀一振、鞍を置いた馬百頭、土地の名産五千品を獻上し、それを地上一杯に陳列した。信長は安土城の櫓からそれを見下し、上機嫌で左右の近臣に向つて曰ふには「これは大膽藤吉の獻上品か」と。よくもてなして還した。十年正月、浮田直家が病死した。秀吉は信長に願つてやつて、その子の秀家に相續させた。

【語釋】布旅（旅は陳ねること。）〇五國（攝津、播磨、但馬、因幡、伯耆。）

宮部繼潤使人來告吉川元春欲攻鳥取。秀吉曰「彼攻之於北。吾將救之於南也」乃引兵入淡路、二十日定之。四月、將六萬人入備中、攻宮地下之、遂攻冠山。加藤清正先登、浮田氏兵繼之。冠山兵盡走高松城。秀吉隨圍城。城傍平田多池沼、而甲部河在其西。秀吉登山、熟視曰「是可灌也」五月、自移營于蛙鼻岡、築巨防於城南、引河水

灌レ之、使下淺野某以レ舟載ニ大礮一、撃中碎城樓上。

訓讀 宮部繼潤人をして來つて、吉川元春鳥取を攻めんと欲すと告げしむ。秀吉曰く「彼れ之を北に攻む。吾れ將に之を南に救はんとす」と。乃ち兵を引いて淡路に入り、二十日にして之を定む。四月、六萬人に將として備中に入り、宮地を攻めて之を下し、遂に冠山を攻む。加藤清正先登し、浮田氏の兵之に繼ぐ。冠山の兵盡く高松城に走る。秀吉隨ひて城を圍む。城傍平田にして池沼多く、而して甲部河其の西に在り。秀吉山に登り、熟視して曰く「是れ灌ぐべきなり」と。五月、自ら營を蛙鼻岡に移し、巨防を城南に築き、河水を引いて之に灌ぎ、淺野某をして舟を以て大礮を載せ、城樓を擊碎せしむ。

通釋 宮部繼潤が使者を立てゝ、吉川元春が鳥取を攻めようとしてゐると知らせた。秀吉が曰ふには「彼は北から鳥取を攻めるといふ。余は南から之を救つてやらう」と。そこで兵をつれて淡路に入り、二十日間でそこを平定した。四月になつて、六萬人を率ゐて備中に入り、宮地を攻めて之を下し、遂に冠山を攻めた。加藤清正が先登を承り、浮田氏の軍が之に續いた。冠山の兵は全部高松城に逃げ込んだ。秀吉はその後を追つかけて城を取り圍んだ。城の附近は水田で池沼が多く、又甲部河が西側に流れてゐる。秀吉は山に上つて、ぢつと見入つて曰ふには「こいつは水攻めに出來るぞ」と。五月、自ら陣營を蛙鼻岡に移し、大きな堤防を城の南に作つて、川の水を城と堤の間に引き之に水を灌ぎ、淺野某に大砲を舟に乘せて城の櫓を擊ち壞させた。

語釋 吾將レ救ニ之於南一（吉川元春は因幡に居れば鳥取城を攻むるには北に向つて進むことゝなる。秀吉はその北上の勢を削ぐ爲め元春の後部即ち南をつゝくこととなる。）〇宮地・冠山・高松城・甲部河・蛙鼻岡（備中）〇淺野某（長政。外史著者は淺野の家來である。三十五頁に出してあるからこゝでは其の名を諱んで記さなかつたのである。）

於是、吉川元春乃舍因幡而來救、與小早川隆景合兵陣于庚山。輝元在其後。秀吉分二萬人當之、益築防使峻、城兵結柵而坐。元春・隆景數挑戰。秀吉固壘不出、因謀曰「吾連取數國、今又舉毛利氏、則功大而身危。不若請主公於此而爲之先鋒」。乃馳使白信長曰「城陷在旦夕。而毛利大舉來援。請出大旆分軍爲二、一以當城、一以擊援師、不出一歲、而中國可舉」。信長大喜、使堀秀政先往。乃命明智光秀・筒井順慶・池田信輝・中川清秀・高山友祥等、率兵三萬五千援秀吉、而自以百餘人入京師、館于本能寺、將親繼之也。

訓讀　是に於て吉川元春乃ち因幡を舍てゝ來り救ひ、小早川隆景と兵を合せて庚山に陣す。輝元其の後に在り。秀吉二萬人を分ちて之に當り、益〻防を築いて峻からしむ。城兵、柵を結びて坐す。元春・隆景數〻戰を挑む。秀吉壘を固くして出でず。因つて謀つて曰く「吾れ數國を連取し、今又毛利氏を舉ぐれば、則ち功大にして身危し。主公を此に請ひて、之が先鋒と爲るに若かず」と。乃ち使を馳せ信長に白して曰く「城陷る旦夕に在り。而して毛利大舉來り援く。請ふ、大旆を出だせよ。軍を分ちて二と爲し、一は以て城に當り、一は以て援師を擊たば、一歲を出でずして中國舉ぐ可し」と。信長大に喜び、堀秀政をして先往かしむ。乃ち明智光秀・筒井

順慶・池田信輝・中川清秀・高山友祥等に命じ、兵三萬五千を率ゐて秀吉を援けしめ、而して自ら百餘人を以て京師に入り、本能寺に館す。將に親ら之に繼がんとするなり。

通釋 そこで吉川元春は因幡をすてゝ來援し、小早川隆景と軍を合せて庿山に陣取つた。毛利輝元はその後方に控へてゐた。秀吉は二萬人を分けてその方に當らせ、堤防を益々高く築かせた。城兵は木の枝などに巢のやうなものを造つて、その上に坐つてゐた。元春・隆景は度々戰を仕掛けた。秀吉は壘の防備を堅固にして少しも出なかつた。そこで相談して曰ふには「余は數ヶ國を續け樣に取つた上、今又毛利氏を亡ぼしたら、手柄が大きくなり過ぎて自分の身が危い。此所へ殿のお出でを願つて、自分は殿の先鋒になるのが最上策である」と。そこで使を飛ばして信長に申すには「城の陷落する日は今明日に迫つてをります。而して毛利が大軍を擧げて援けに參りました。どうぞ總大將の御旗をお出し下さい。御來援の上、全軍を二手に分け、一手で城を攻め、一手で援軍を攻めたならば、一年も出ぬ中に中國は完全にこちらのもので御座います」と。信長は大層喜び、堀秀政をして先きに行かせた。そこで明智光秀・筒井順慶・池田信輝・中川清秀・高山友祥等に命じて、三萬五千の軍隊を率ゐて秀吉を援けさせ、そして自分は百人餘りを連れて京都に入り、本能寺に宿した。前記諸將に續いて自身出馬の心算であつたのである。

語釋 庿山(備中)〇橾(巢と同じ。水につかるから巢を作つた。)

初光秀以事怨望。至是亦不欲往。信長迫而遣之、使歸丹波治兵而西。當是時、高松城不漸水數尺、東西之軍相去可百步。毛利氏聞東軍大擧且至、遂使使議和。秀吉

未之許也。六月、有人、稱京師使者馳入軍門。秀吉覽之、所知宗仁者變報也。曰「光秀反、以丹波兵攻右府于本能寺弑之。」右府者、信長也。秀吉大驚。而未宣言。明日、率數十騎巡視堤防。是日、城陷、城將自殺。而毛利氏猶張軍不去。明日、遣使者來治前議。秀吉御之曰「當竢明日議之。」明日、使者復至。秀吉自度、事終泄、不若自我發之。乃具告使者以變故、使返報曰「事已至此。公等猶與我和乎。若欲擊我、則莫今日若也。公等徐計之。」使者返報。

訓釋　初め光秀事を以て怨望す。是に至つて亦往くを欲せず。信長迫つて之を遣り、丹波に歸り兵を治めて西せしむ。是の時に當り、高松城の水に漸されざること數尺、東西の軍相去る百歩可り。毛利氏、東軍大擧して且に至らんとすと聞き、遂に使をして和を議せしむ。秀吉未だ之を許さず。六月、人あり、京師の使者と稱し、馳せて軍門に入る。秀吉之を覽れば、知る所の宗仁といふ者の變報するなり。曰く「光秀反し、丹波の兵を以て右府を本能寺に攻めて、之を弑す」と。右府とは信長なり。秀吉大に驚く。而れども未だ宣言せず。明日、數十騎を率ゐて堤防を巡視す。是の日、城陷り、城將自殺す。而して毛利氏、猶ほ軍を張りて去らず。明日、使者を遣はし、來りて前議を治めしむ。秀吉之を御けて曰く「當に明日を竢つて之を議すべし」と。明日使者復至る。秀吉自ら度るに、事終に泄れん、我より之を發するに若かずと。乃ち具に使者に告ぐるに變故を以てし、返り報ぜ

しめて曰く「事已に此に至る。公等猶ほ我と和するか。若し我を撃たんと欲せば、則ち今日に若くはなし。公等徐に之を計れ」と。使者返り報ず。

【通釋】初め光秀はある理由で信長を怨んでゐた。こんど命ぜられても、亦行くのを嫌がつた 信長は無理强ひに、丹波に歸つて、軍を纏めて西下せしめた。此の當時、高松城はもう五六尺で皆な水に沒して終ふといふ所まで水攻めにされてゐて、兩軍の陣は相去る百歩ほどに接近してゐた。援軍の毛利氏は、東軍が大擧して、まさに到着せんとするのを聞き、遂に使者を立てゝ媾和を申し込んだ。秀吉はまだそれを許さなかつた。六月、京都の使者と言つて陣屋に馳け込んだ者があつた。秀吉がその男を見ると、知り合の長谷川宗仁といふ人で、本能寺の事變を知らせて來たのであつた。彼が曰ふのに「光秀が謀叛をし、丹波の兵を引きつれて右大臣を本能寺に攻めて之を弑しました」と。右大臣といふのは信長のことだ。秀吉は仰天した。併しすぐには發表しなかつた。翌日、秀吉は數十騎を引きつれて堤防を巡視した。この日に城は陷落して城將は自殺をした。そして毛利氏はまだ陣を張つたまゝ引上げようともしない。その翌日又使者をよこして前の和睦の相談をさせた。秀吉は之を歸して曰ふには「明日になつたら一つ御相談をしよう」と。翌日使者が又やつて來た。秀吉は考へるのに、結局これは知れる事だから、こつちから先手を打つて言ひ出した方がいゝ」と。そこでくはしく使者に變事の次第を話し、歸つて言はせるには「萬事はかういふ事情になつたのだ。それでも貴公らは私と和睦をされるか。もし私を討たうとならば、今が最も好い機會だ。ゆつくりと御相談なされよ」と。使者はその通りを、歸つて報告した。

【語釋】以レ市怨望（織田紀に詳しく出てゐる。）〇宗仁（長谷川刑部卿法眼宗仁。）〇城將（清水宗治）

輝元大喜、謀於諸將。諸將皆曰、「我與信長和。非與秀吉和。今信長死。彼軍情沮廢、危疑萌起。我乘是時掩擊之、必獲秀吉。是天幸我家也。不可失矣」隆景曰、「吾所見異於此。信長之死、非天幸我家。乃幸於秀吉也。何則應仁以來、七道分離、爭亂相踵、至今日而極矣。天將生一豪傑、以掃蕩天下。吾視秀吉舉動、得非是乎。信長既死。其子弟將佐、孰出秀吉右者。夫和議發於外、而變故起於內。使常人處之、必深秘其事、速成前議。今正告不隱。任吾從違。其量豈可測哉。吾使人候視其陣、不異平日。今與之戰、我曲彼直、讎我必深。敢死來戰。能保必獲之乎。苟不獲之、使其脫歸、異日雲蒸龍變、我無遺類矣。以吾計之、莫如從前約。彼遭際禍難、多我不違約、必厚遇我。功名富貴、將與我共。是我與彼同慶幸也」輝元然之、乃送質成和、且弔之。於是、秀吉欲還討光秀、因乞毛利氏、假弓銃各五百・旗三十・騎士一隊。輝元如其言。

訓讀 輝元大に喜び、諸將に謀る。諸將皆曰く「我れ信長と和す。秀吉と和するに非ず。今信長死す。彼が軍情沮廢し、危疑萌起せん。我れ是の時に乘じて之を掩擊せば、必ず秀吉を獲ん。是れ天我が家に幸するなり。

失ふ可からず」と。隆景曰く「吾が見る所は此に異なり。信長の死は、天我が家に幸するに非ず。乃ち秀吉に幸するなり。何となれば則ち應仁以來七道分離し、爭亂相踵ぎ、今日に至つて極れり　天將に一豪傑を生じ以て天下を掃蕩せんとす。吾れ秀吉の擧動を視るに、是に非ざるを得んや。信長既に死す。其の子弟將佐、孰か秀吉の右に出づる者ぞ。夫れ和議、外に發し、而して變故、內に起る。常人をして之を處せしめば　必ず深く其の事を秘して、速に前議を成さん。今、正しく告げて隱さず、吾が從違に任す。其の量豈に測るべけんや。吾れ人をして其の陣を候視せしむるに、平日に異ならず。今之と戰はゞ、我は曲彼は直、我を讎とすること必ず深からん。敢死して來り戰はゞ、能く必ず之を獲るを保せんや。苟も之を獲ずして、其をして脫歸し、異日雲蒸龍變せしめば、我れ遺類なからん。吾を以て之を計るに、前約に從ふに如くはなし。彼れ禍難に遭際し、我の約に違はざるを多とせば、必ず厚く我を遇せん。功名富貴、將に我と共にせんとす。是れ我れと彼と慶幸を同じくするなり」と。輝元之を然りとし、乃ち質を送りて和を成し、且つ之を弔ふ。是に於て秀吉還つて光秀を討たんと欲し、因つて毛利氏に乞ひ、弓銃各〻五百・旗三十・騎士一隊を假る。輝元其の言の如くす。

【通釋】輝元は非常に喜んで諸將に相談をした。諸將が皆曰ふには「我が軍の媾和の相手は信長であります。秀吉ではありませぬ。今總大將　信長が死にました。敵軍の士氣は滅入り、危ぶみ疑ふ氣分がきざしてゐるに違ひない。我が軍がかういふ時に乘じて不意討をかけたなら、きつと秀吉をやつゝけることが出來ます。我が毛利家に天が幸を降し給はつたのであります。この時機をはづしてはなりませんぞ」と。隆景が曰ふには「私の意見は少し違つてゐる。信長の死は、我が家の幸ではない。却つて秀吉の幸である。何故かといふのに、應仁此の方、國內七道は相離反し、爭亂はつぎ〳〵起り、今日の情勢は全く極端に達してゐる。かういふ時には誰か

飛び抜けた力の強い人間が現れて、天下の大掃除をする役目を引き受けるものである。私は秀吉の行動を見てゐると、どうもその圖抜けた男らしい。信長は死んで終つた。その子弟諸將の中には秀吉に優る者は居らない。一體媾和の申込が敵方から爲されてをり、そして變事が味方に起つてきた。斯ういふ場合に普通の人間ならば、きつとその變事を押し隱して、直ぐ樣申込まれた相談を纏めるであらう。然るに彼は本當の事を隱さず知らせた。そしてこちらの自由裁量に一任した。度量の大きいことは一寸見當がつきかねる。私は彼の陣を偵察させてみた所、少しも平生と變つたところがない。（意氣阻喪の樣は少しも無い）。今戰爭をするとなると、こちらは不義で向ふは義理に合つてゐるからして、こちらを怨む心は必ず深い。それで死を覺悟して攻めて來たら、彼を討ち取ることは保證できないであらう。もしも失敗して彼を取り逃がし、他日めき〳〵大物になつたら、我々は一人の同族も生き殘らぬことになるかも知れない。私の考では前の相談を進める方がよいと思ふ。彼れ秀吉もこんな災難に出會つて、こちらの信義に厚いことを感じたなら、きつと惡いやうには取り計らはぬであらう。功名も富貴も一人占めにするやうなことはなく我と共にするであらう。かうすれば双方共慶び幸が同じくすることゝなる」と。輝元はそれに贊成し、人質を送つて媾和を成し、同時に悔の言葉を述べさせた。そこで秀吉は返つて光秀を討たうといふことになつたので、毛利氏に、弓鐵砲五百宛、旗三十、騎馬武者一隊を借りたいと賴んだ。輝元は承知してその言葉通りに貸し與へた。

〔語釋〕應仁以來（山名細川の爭ひ以來。）○七道（東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海、西海、）○子弟（信雄、信孝、長益。）○發二於外一（毛利方より發する。）○我曲（自から發議して自ら破るから。）○雲蒸龍變（雲が起つて龍と化すること。微賤より生じて天下に雄飛するに至るをいふ。）

秀吉會諸將士、垂泣謂之曰「吾受右府之恩、無物可比、汝輩所知也。今日致死復仇、非吾而誰。天下之事、在此一擧。汝輩其爲我勉之」乃引兵上途、兼程疾行、至於尼崎。當是時、光秀既弑信長及信忠、遂進陷安土、收其寶貨而西、屯于京師、施行政令、復引兵適安土。織田氏公族將帥、皆觀望相仗、莫敢先發。秀吉既至尼崎、發哀斷髮毀形、使人周告諸將曰「明智光秀蔑棄洪恩、敢行大逆、天地所不容、人神所共憤也。秀吉義不與光秀共戴天。悉發領國之兵、自將至此。願與諸公倶一戰、必梟豎子、以弔先君之靈」於是、諸將帥盡會尼崎。

訓讀 秀吉、諸將士を會し、泣を垂れ之に謂つて曰く「吾れ右府の恩を受くる、物の比すべきなきは、汝が輩の知る所なり。今日、死を致して仇を復するは、吾に非ずして誰ぞ。天下の事、此の一擧に在り。汝が輩、其れ我が爲めに之を勉めよ」と。乃ち兵を引いて途に上り、兼程疾行し、尼崎に至る。是の時に當り、光秀既に信長及び信忠を弑し、遂に進んで安土を陷れ、其の寶貨を收めて西し、京師に屯し、政令を施行し、復兵を引いて安土に適く。織田氏の公族將帥、皆觀望して相仗り、敢て先發するなし。秀吉既に尼崎に至り、哀を發し髮を斷ち形を毀り、人をして周く諸將に告げしめて曰く「明智光秀、洪恩を蔑棄し、敢て大逆を行ふ。天地の容れざる所、人神の共に憤る所なり。秀吉、義、光秀と共に天を戴かず。悉く領國の兵を發し、自ら將として此に至

れり。願はくは諸公と俱に一戰し、必ず豎子を梟し、以て、先君の靈を弔せん」と。是に於て、諸將帥、盡く尼崎に會す。

【通釋】秀吉は諸將士を集めて、涙を流して之に向つて曰ふには、「余が右大臣殿の御恩を受けたことは、譬へやうもない程であることは、お前方の熟く知つて居る所である。今日生命を捨て、此の仇を復へすは、余より外にはないのである　天下の事は此の一と戰で決するのである。お前等は其のつもりで余の爲めにシッカリ働いて呉れよ」と。そこで兵を引きつれて出發し、二日に行く所を一日で行く程急いで行き、尼崎に着いた。この時には、光秀は既に信長及信忠を弑し、進んで安土城を陷れ、其の寶物財貨を沒收して又西へ戻り、京都に駐屯し、政治、命令を施し行ひ、再び兵を引き連れ安土へ赴いた。織田氏の一族大將共は、皆形勢を觀望し、互に讓り合つて誰も吾こそはと打つて出る者がゐない。秀吉は既に尼崎にやつて來て、信長の死んだ披露をなし自ら頭髮を斷ち切り姿を壞し、人をやつて諸大將に漏れなく告げしめて曰ふには「明智光秀は信長公の大恩をないがしろにし、敢て大逆罪を行つた。これは天地の容れることを許さゞる所、人も神も皆憤慨する所のことである。秀吉は斯樣な光秀とは共に同じ天を戴いて生存して行くことは出來ぬ。だから自分は全部領分の兵士を繰り出して、その大將となつて此の尼崎にやつて來た。何卒諸君と一緒に一たび戰ひ、必ずともに野郎の首を獄門に曝して、先君信長公の御靈を弔ひたいものである」と。そこで諸將帥は皆尼崎に集つた。

【語釋】相仗（互に誰れか旗揚げするだらうと人を當てにすること。）〇毀レ形（姿をやぶつて哀痛の意を現はす。）

初光秀之發レ難也、與二其衆一謀曰「方今、柴田勝家當二上杉氏一、瀧川一益當二北條氏一、羽柴

秀吉當毛利氏、而丹羽長秀佐信孝、將赴四國。我出空虛之地、得以成大事、天下不足圖也。至是、聞秀吉在攝津、大驚、使其從子光春守安土、而自至洞嶺。十二日、遂入淀城。秀吉遣使告光秀曰「明日、會戰于山崎。」光秀諾之、乃聚將士。其將齋藤利三在洞嶺、諫曰「秀吉大衆新來。其鋒甚鋭。戰必無利。不如且避之、退入坂下、以爲後圖。」光秀怒曰「天下視右府如鬼神。而吾一擊獲之。天下誰能敵我。汝速來戰。何畏藤吉也。」利三不得已來會。遂以見兵一萬六千、分爲六隊、夜半、冒雨渡桂川、至山崎。筒井順慶、擧大和兵萬人、軍洞嶺、爲其後援。

訓讀 初め光秀の難を發するや、其の衆と謀つて曰く「方今、柴田勝家は上杉氏に當り、瀧川一益は北條氏に當り、羽柴秀吉は毛利氏に當り、而して丹羽長秀は信孝を佐け、將に四國に赴かんとす。我れ空虛の地に出で、以て大事を成すを得ば、天下は圖るに足らざるなり」と。是に至つて、秀吉、攝津に在りと聞き、大に驚き、其の從子光春をして安土を守らしめ、而して自ら洞嶺に至り、十二日、遂に淀城に入る。秀吉、使を遣はして光秀に告げて曰く「明日、山崎に會戰せん」と。光秀、之を諾し、乃ち將士を聚む。其の將齋藤利三、洞嶺に在り、諫めて曰く「秀吉の大衆新に來る。其の鋒甚だ鋭し。戰ふも必ず利なからん。且らく之を避け、退いて坂下

に入り、以て後圖を爲すに如かず」と。光秀怒つて曰く「天下、右府を視ること、鬼神の如し。而るに吾れ一擊して之を獲たり。天下、誰か能く我に敵せん。汝速に來り戰へ。何ぞ藤吉を畏れんや」と。利三、已むを得ずして來り會す。遂に見兵一萬六千を以て、分ちて六隊と爲し、夜半、雨を冒し、桂川を渡りて、山崎に至る。筒井順慶、大和の兵萬人を擧げて、洞嶺に軍し、其の後援を爲す。

通釋 初め光秀が謀叛を起した時に、其の部下の衆と謀つて曰ふのに「今日の形勢は、柴田勝家は上杉氏に當つてゐるし、瀧川一益は北條氏に當つてゐるし、羽柴秀吉は毛利氏に當つてゐるし、そして丹羽長秀は信孝を輔佐して、將に四國に行かうとしてゐる。我はその空になつてゐる所に乘り出して、此の大事（信長を弑すること）を成就することが出來たなら、天下を取るは誠に造作のないことである」と。斯くて秀吉が攝津に來てゐると聞いた時、光秀は非常に驚き、甥の光春をして安土城を守らしめ、自分は洞嶺に行き、十二日に遂に淀城に入つた。秀吉は使を遣つて光秀に告げしめて曰ふには「明日、山崎で戰爭しようではないか」と。光秀は之を承知し、そこで將士を集めた。其の大將の齋藤利三は洞嶺にゐたが、諫めて曰ふには「秀吉の大軍は今非常の勢で攻めて來たばかりである。其の鋒先きは非常に鋭い。今之と戰つたとて都合よくは行きますまい。今暫く彼を避けて、坂下まで退却し、そして後の計畫をなされた方が宜しいと存じます」と。光秀が怒つて曰ふのに「天下の者が右大臣殿を見ることは全るで鬼神のやうであつた。けれども自分は一と擊ちで彼を滅すことが出來たのである。その我に天下誰れか敵ふものがあらうぞ。お前は速く此ちらへ來て一緒に戰へよ。何もアノ藤吉など畏れることはない」と。利三は止むを得ず光秀の所へ來り會した。遂に有り合はせの兵一萬六千人を六隊に分け、夜中に雨を衝いて桂川を渡り山崎に着いた。筒井順慶は大和の兵一萬人を連れて、洞嶺に陣取り、その後楯をな

した。

語釈 洞嶺（山城・河内の境。）○淀（山城淀町。）○山崎（山城大山崎村。）

黎明、秀吉統諸將而至。高山友祥爲先鋒、中川淸秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝以次相屬。兵各數千。秀吉自將騎卒二萬居其後。已而兩軍皆陣。秀吉北瞻天王山、指謂左右曰「今日之戰、使敵先獲此、非吾利也。」言未畢、賊旗幟登焉。乃命堀尾吉晴往奪之。吉晴應聲而起、單騎馳赴之、則賊兵先上者已千餘人矣。吉晴顧其兵、能屬者十五六騎、弓銃手二十人。進躡其後。賊弓銃在前、不可用。吉晴全兵、與堀秀政皆至、大呼奮擊。賊兵遂棄山走。吉晴等代陣焉。友祥爲先鋒、關山崎南門、不聽他隊先進。聞天王山軍聲起、乃開門而進、與賊左陣大戰、殺傷相當。淸秀踰坂而進、賊左陣不能進。信輝亦濟川衝其右陣、合擊大破之、斬其三將。洞嶺軍觀望勝敗、不戰而走。

訓読 黎明、秀吉、諸將を統べて至る。高山友祥、先鋒となり、中川淸秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝、次を以て相屬す。兵各數千。秀吉自ら騎卒二萬に將として、其の後に居る。已にして兩軍皆陣す。秀吉、北のかた天王山を瞻て、指して左右に謂つて曰く「今日の戰、敵をして先づ此を獲しめば、吾が利に非ざるなり」

と。言未だ畢らざるに賊の旗幟登る。乃ち堀尾吉晴に命じ、往いて之を奪はしむ。吉晴、聲に應じて起ち、單騎馳せて之に赴けば、則ち賊兵先づ上る者已に千餘人なり。吉晴、其の兵を顧みるに、能く屬する者十五六騎、弓銃手二十人なり。進んで其の後を躡す。賊の弓銃は前に在りて、用ふべからず。吉晴の全兵、堀秀政と、皆至り、大に呼んで奮擊す。賊兵遂に山を棄てゝ走る。吉晴等代り陣す。友祥先鋒と爲り、山崎の南門を闔して、他隊の先づ進むを聽さず。天王山の軍聲起るを聞き、乃ち門を開いて進み、賊の左陣と大に戰ひ、殺傷相當る。清秀、坂を踰えて進む。賊の左陣進む能はず。信輝も亦、川を濟りて、其の右陣を衝き、合擊して大に之を破り、其の三將を斬る。洞嶺の軍、勝敗を觀望し、戰はずして走る。

【通釋】夜が明けると、秀吉は諸々の將を統べ率ゐてやつて來た。高山友祥が先鋒となり、中川清秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝が順序を以て相續いた。皆各々兵數千人を率ゐてゐた。秀吉は自ら騎卒二萬人に大將となつて、その後に控へてゐた。その内に兩軍は皆陣取つた。秀吉は北方・天王山を見上げて、指し左右の臣に向つて曰ふには「今日の戰爭で、敵にアノ山を先き取りされたら、此方の不利となる」と。その言葉のまだ終らぬ内に、賊の旗や幟が山を登つて行つた。そこで堀尾吉晴に命じて、行つて此の山を奪はしめた。吉晴は其の命令の聲と共に立ち上り、一騎で驅けて天王山に行つて見れば、賊は早や千餘人から先きに登つてゐる。吉晴が自分の兵を振り顧みると、能く屬いて來てゐる者は十五六騎で、弓方、鐵砲方が二十人であつた。けれども進んで賊の後を尾けて登つた。賊の弓方や鐵砲方は先登に立つて山を登つてゐるから下から攻め上つてゐる敵に對して射ち出すことが出來ず、全く用をなさなかつた。(後ろの味方が邪魔になつて射てない。味方の頭を越して射たねばならぬから)吉晴の全ての兵士と、堀秀政とが皆やつて來て、大に叫んで奮ひ擊つた。賊兵はとう／＼山を見棄て

ゝ逃げた。そこで吉晴等が代つて陣取つた。高山友祥が先鋒となつて山崎の南方の入口を塞いで他の軍隊が自分より先きに進み入るを許さなかつた。天王山の矢たけびの音が起つたのを聞いて、そこで急に門を開いて進み、賊の左翼の軍と大に戰ひ、その殺傷の數は互角であつた。清秀は坂を越して進んだ。賊の左翼はそれが爲めに進むことが出來ない。信輝も亦川を渡つて賊の右翼を衝いて、一緒になつて撃つて大に之を破り、大將三人を斬り殺した。洞嶺で後楯をする筈であつた筒井順慶の軍は、此の勝負を遙に望み觀て、戰はないで逃げて終つた

語釋 瞻（見上げること。）

秀吉追北、直逼光秀。光秀怒、欲親戰。比田某叩其馬曰「敵鋒不可犯。請且入勝龍城」。光秀惶惑曰「勝龍安在」。比田騎而前導。我兵充塞前後。比田等戰且走、纔得達城。上閣而望、則我兵已圍城數重。城兵稍稍散亡、所餘僅百人。卽夜、光秀與十餘騎、潰圍北出、馳向坂下、至于小栗栖。土兵四起、自林中以槍刺其肋、墜馬死。

訓讀 秀吉、北ぐるを追ひて、直に光秀に逼る。光秀怒り、親ら戰はんと欲す。比田某、其の馬を叩へて曰く「敵鋒犯す可からず。請ふ、且く勝龍城に入れ」と。光秀、惶惑して曰く「勝龍は安にか在る」と。比田、騎して前導す。我が兵、前後に充塞す。比田等戰ひ且つ走り、纔に城に達するを得たり。閣に上りて望めば、則ち我が兵已に城を圍むこと數重。城兵稍稍散亡し、餘す所僅に百人のみ。卽夜、光秀、十餘騎と圍を潰して北に出で、

馳せて坂本に向ひ、小栗栖に至る。士兵四もに起り、林中より槍を以て其の肋を刺し、馬より墜ちて死す。

通釋 秀吉は逃げるのを追かけて、直ちに光秀に逼つて行つた。光秀は怒つて親ら戰はうと思つた。比田則が其の馬を押へて曰ふのに「敵の勢は中々強くて迚も犯すことが出來ませぬ。何卒暫らく勝龍城にお入りなされよ」と。光秀は恐れて途方に暮れ乍ら曰ふのに「勝龍は何處にあるか」と。比田が馬に乘つて先き驅けをした。我が兵（豐臣氏の兵）は前後一杯充ち塞がつてゐる。比田等は且つ戰ひ且つ逃げ、やつとのことで勝龍城に達することが出來た。城閣に上つて遙かに望み見ると我が豐臣の兵が勝龍城を既に幾重にも取り圍んでゐた。それ許りでなく、城兵が次第次第に散り亡げ、餘す所は僅かに百人のみであつた。これは敵はぬと見て取つて、其の晩光秀は十餘騎と圍を突いて北方に出で、驅けて坂本に向ひ、小栗栖迄來た。その時その土地の農兵が四方から出て來て、林の中から槍で以て光秀の肋を突き刺したので、光秀は馬から墜ちて死んで終つた。

語釋 勝龍・小栗栖（山城）

秀吉既破光秀軍、收信長屍于灰燼中殯之、進陣于園城寺、聞光秀子光慶在龜山、遣兵攻之、斬光慶。又聞從子光春在安土、令堀秀政將萬人伐之。會光春于大津擊破之。光春騎渡湖水、入坂下、手刄光秀妻孥、火城自殺。齋藤利三亦被捕伏誅。而光秀首至。秀吉乃奏捷朝廷、徇光秀首京師、梟于本能寺。去信長薨日十有三日矣。遂

留幕于山崎寶寺、誅支黨、納降附。

訓讀　秀吉既に光秀の軍を破り、信長の屍を灰燼中に收めて、之を殯し進んで園城寺に陣す。光秀の子光慶、龜山に在りと聞き、兵を遣して之を攻めしめ、光慶を斬る。又從子光春、安土に在りと聞き、堀秀政をして萬人に將として之を伐たしむ。光春に大津に會し、撃つて之を破る。光春、騎して湖水を渡り、坂下に入り、手づから光秀の妻孥を刄し、城を火いて自殺す。齋藤利三も亦、捕へられて誅に伏す。而して光秀の首至る。秀吉乃ち捷を朝廷に奏し、光秀の首を京師に徇へて、本能寺に梟す。信長の薨ぜし日を去ること十有三日なり。遂に留りて山崎の寶寺に幕し、支黨を誅し降附を納る。

通釋　秀吉は既に光秀の軍を破り、信長の死骸を燒跡の灰の中から搜し出して、之を一時假りに葬ひ、進んで園城寺に陣した。光秀の子の光慶が龜山にゐると聞いて、別に兵をやつて之を攻めしめ、光慶を斬り捨てた。又光秀の甥の光春が安土にゐると聞いて、堀秀政をして萬人の大將となし之を伐たしめた。堀は光春に大津で會つて、撃つて之を破つた。光春は馬に乘つて琵琶湖を渡り坂下に入り、自分の手で光秀の妻子を殺し、城を燒いて自殺した。齋藤利三も捕へて誅殺された。その中に光秀の首が着いた。秀吉は朝廷に勝利の旨を奏上し、光秀の首を京都中に引き廻して本能寺の前に梟した。丁度信長が薨じた日から十三日目であつた。そこで軍を留め、山崎の寶寺に陣取り、細かい同類共を誅し、降參し附く者は味方に納れてやつた。

語釋　龜山（丹波）〇寶寺（山城天王山の下。）

當是時、秀吉威震畿內、四方兵士來聚山崎者、凡六七萬人。天子嘉其功、詔叙從四

位下、任右近衛中將。秀吉辭不敢拜。

訓讀 是の時に當り、秀吉の威畿内に震ひ、四方の兵士山崎に來り聚る者凡そ六七萬人、天子其の功を嘉し、詔して從四位下に叙し、右近衛中將に任ぜらる、秀吉辭して敢て拜せず。

通釋 この時分には、秀吉の威名は畿内に轟き、四方の國々の兵士が凡そ六七萬人も山崎に集つて來た。天皇は彼の手柄を賞せられ、詔して從四位下に叙し、右近衛中將に任ぜられた。秀吉は辭退して拜命しようとはしなかつた。

秀吉以信長繼嗣未定、與諸將領會于淸洲、議事。八月、瀧川一益・柴田勝家、皆引兵會焉。議、信雄冒北畠氏、信孝冒神戸氏、皆信長庶子。不宜立。乃以信忠遺命、立其長子秀信爲嗣、居安土焉。而信雄攝之。柴田・丹羽・池田氏、與羽柴氏更置吏于京師。信雄以下、各分遺地領之。秀吉自略定播磨・但馬・因幡・丹波諸州。至是、皆爲其有。則不復受分地。諸將乃使浮田秀家及丹後國主細川藤孝附庸之。長濱爲秀吉舊領。勝家以其南出便地奪之。

訓讀 秀吉、信長の繼嗣未だ定らざるを以て、諸將領と淸洲に會して事を議す。八月・瀧川一益・柴田勝家、

皆兵を引いて會す。議す、信雄は北畠氏を冒し、信孝は神戸氏を冒す。皆信長の庶子なり。宜しく立つべからずと。乃ち信忠の遺命を以て其の長子秀信を立て、嗣を爲し、安土に居らしむ。而して信雄、之を攝す 柴田・丹羽・池田氏、羽柴氏と 更〻吏を京師に置く。信雄以下各〻遺地を分つて之を領す。秀吉自ら播磨・但馬・因幡・丹波の諸州を略定す。是に至り、皆其の有と爲る。則ち復分地を受けず。諸將、乃ち浮田秀家、及び丹後の國主細川藤孝をして之に附庸せしむ。長濱は秀吉の舊領爲り。勝家其の南出の便地を以て之を奪ふ。

通釋 秀吉は信長の繼嗣がまだ定らぬので、諸大將と清洲に會合して相談することにした 八月、瀧川一益・柴田勝家など皆兵を率ゐて集つて來た。そこで相談をするのに、信雄は北畠氏を名乘つてをり、信孝は神戸氏を名乘つてをる。兩方とも信長の妾腹の子である。だから繼嗣に立てることは出來ぬといふことであつた。そこで信忠の遺言通り、その長男の秀信を繼嗣と定めて安土城に居らせた。信雄が後見人となつた。柴田・丹羽・池田とそれに羽柴氏とが、代り番に京都に役人を置くことにした。信雄以下各々信長の遺して置いた土地を分けて銘々の領地にした。秀吉は播磨・但馬・因幡・丹波の四國を自分で攻め取つたのである。そこでこれらの國は皆彼の領地になつた。だからそれ以上には土地の配分を受けなかつた。そこで諸大將は浮田秀家と丹後の國主細川藤孝とを秀吉の屬侯とさせた。長濱は秀吉の舊領地であつた。勝家は、南方に討つて出るのに便宜な土地である所からそれを奪つて終つた。

語釋 信忠遺命（前田玄以に命じて三法師を抱いて二條城を逃がせたことをさす。）○附庸（大國に附屬する城主。）

勝家威望最於諸將。號曰鬼柴田。是日、踞而飮酒、以謾言挑秀吉。長秀附秀吉耳語

曰「予欲定國家、卽斬勝家」秀吉哂而不答。諸將視耳目非是、促罷其宴。信雄歸近江、信孝歸美濃、勝家歸越前、一益歸伊勢、長秀歸若狹、秀吉與池田信輝歸攝津。勝家聞秀吉在長濱、不敢北。秀吉乃遣義子秀勝爲質。勝家拉而北行、尋而還之。初秀吉自長濱徙姫路、未移其家。本能寺之變、阿閉長之・京極高次、欲取長濱應光秀、家皆亡匿於伊吹山。長之取其貲財、從光秀、戰山崎、敗走而死。於是、秀吉族長之、降高次、而歸山崎。

訓讀 勝家の威望、諸將に最たり。號して鬼柴田と曰ふ。是の日、踞して酒を飲み、謾言を以て秀吉を挑む。長秀、秀吉の耳に附き語つて曰く「予、國家を定めんと欲せば、卽ち勝家を斬れ」と。秀吉哂つて答へず。諸將、耳目の是に非ざるを視、促して其の宴を罷む。信雄近江に歸り、信孝美濃に歸り、勝家越前に歸り、一益伊勢に歸り、長秀若狹に歸り、秀吉は池田信輝と攝津に歸る。勝家、秀吉の長濱に在るを聞いて、敢て北せず。秀吉乃ち義子秀勝を遣はして質と爲す。勝家拉して北行し、尋いで之を還す。初め秀吉、長濱より姫路に徙り、未だ其の家を移さず。本能寺の變、阿閉長之・京極高次、長濱を取つて光秀に應ぜんと欲す。家皆亡げて伊吹山に匿る。長之其の貲財を取つて、光秀に從ひ、山崎に戰ひ、敗走して死す。是に於て、秀吉、長之を族し、高次を降して山崎に歸る。

通釈 勝家は諸大將の中で最も威勢が旺んであつた。渾名を鬼柴田といつた。この日は膝を立て、酒を飲み、人を馬鹿にしたやうな言葉を吐いて秀吉に喧嘩をふつかけた。長秀は秀吉の耳に口をつけて曰ふには「貴公は國家を一統しようといふ氣があるならば、勝家をお斬りなさい」と。秀吉は笑つて返事をしなかつた。諸大將は一座の空氣の穩かならぬのを察し、もう宴を止めようと促して止めて終つた。信雄は近江に歸り、信孝は美濃に歸り、勝家は越前に歸り、一益は伊勢に歸り、長秀は若狹に歸り、秀吉は池田信輝と一緒に攝津に歸つた。勝家は秀吉が長濱に居ると聞いて、頑張つて北に歸らぬ。そこで秀吉は養子の秀勝を人質にやつた。勝家はそれを引きつれて北に還つたが、程なく彼を返してよこした。初め秀吉は長濱から姫路に移つたが、まだ家族は移さずにいた。本能寺の變事の時阿閉長之と京極高次とが長濱を占領して光秀に內應しようとした。秀吉の家族の者は皆逃げ出して伊吹山に隱れた。長之はその財產を奪ひ取り、光秀に從つて山崎に戰つたが、負けて逃げ、途で死んだ。そこで秀吉は長之の一族を殘らず殺し、高次を降服させて山崎に歸つた。

語釈 耳目非是（耳語目視のけはひ穩ならぬこと。）

十月、詔叙従五位下、任左近衛少將。秀吉拜命、因請追贈信長爵位、告公族諸將、葬于大德寺。無來會者。秀吉自爲喪主、使弟秀長帥卒萬人監護之。既而三氏皆罷其吏、一決於秀吉。秀吉又與信雄協心、以佐秀信。勝家嫉忌之。信孝亦與信雄爭權相惡。於是、信孝遂與勝家・一益、及佐佐成政・氏家行廣・稻葉通朝等、倶圖秀吉及信雄、

約期並起。信雄謀之秀吉。秀吉曰「越前多雪。彼今未能出兵。請及此時伐美濃」。乃與池田・丹羽・筒井・細川諸將、合五萬人攻岐阜。行廣・通朝皆降。信孝佯請和。丹羽長秀贊之。和成。秀吉乃取其質子歸山崎。勝家欲出援之、阻雪不能出。視冰雪輒憤怒。乃遣人說長秀、連兵西向。長秀不肯。

訓讀 十月、詔して、從五位下に叙し、左近衛少將に任ぜらる。秀吉命を拜し、因つて信長に爵位を追贈せられんことを請ひ、公族諸將に告げて大德寺に葬る。來り會する者なし。秀吉自ら喪主と爲り、弟秀長をして卒萬人を帥ゐて之を監護せしむ。既にして三氏皆の其の吏を罷め一に秀吉に決す。秀吉、又信雄と心を協せて以て秀信を佐く。勝家、之を嫉忌す。信孝も亦信雄と權を爭ひ相惡む。是に於て、信孝、遂に勝家・一益、及び佐佐成政、氏家行廣、稻葉通朝等と、倶に秀吉及び信雄を圖り、期を約して竝び起る。信雄之を秀吉に謀る。秀吉曰く「越前は雪多し。彼れ今未だ兵を出だす能はず。請ふ、此の時に及んで美濃を伐たん」と。乃ち池田・丹羽・筒井・細川の諸將と、五萬人を合せて岐阜を攻む。行廣・通朝皆降る。信孝、佯り和を請ふ。丹羽長秀之を贊す。和成る。秀吉乃ち其の質子を取りて、山崎に歸る。勝家出でゝ之を援けんと欲し、雪に阻てられ出づる能はず。冰雪を視て輒ち憤怒す。乃ち人を遣はして長秀に說き、兵を連ねて西向せしめんとす。長秀肯んぜず。

通釋 十月 詔して秀吉を從五位下に叙し、左近衛少將に任命せられた。秀吉は命を拜した序に、信長に爵位をお贈り下さるやうにお願ひ申し、（從一位太政大臣を賜る）一族諸將に知らせて大德寺に埋葬式を行つた。誰も

會葬するものがなかつた。そこで秀吉は自分で喪主になり、弟秀長に兵卒一萬人を率ゐて守護させた　その内に柴田・丹羽・池田の三氏とも京都の役人を廢めて終つたので、萬事秀吉の一存にて決定することになつた。秀吉は又信雄と心を合せて秀信を助けた。そこで勝家は彼に嫉妬憎惡を抱くやうになつた。信孝も信雄と權力爭ひをして仲が惡かつた。そこで信孝はとう〳〵、勝家・一益、それから佐々成政・氏家行廣・稻葉通朝らと一緒に、秀吉・信雄討伐の計畫を起し、時期を定めて一度に兵をあげた。信雄は之を秀吉に相談した。秀吉が曰ふには「越前は雪の多い所です。勝家はまだ兵を出すことは協ひません。一つこの時機に美濃の信孝を討つことに致しませう」と。そこで池田・丹羽・筒井・細川の諸將と、五萬人の兵を合せて岐阜を攻めた。行廣も通朝も降參した。信孝は伴つて和睦を申込んで來た。丹羽長秀は之を賛成した。かくて和睦は成立した。そこで秀吉は人質を取つて山崎に歸つた。勝家は國を出て助けようとしたが、雪に妨げられて出來なかつた。それが爲め、氷や雪を見れば直ぐ腹を立てるといふ風であつた。そこで、使をやつて長秀に說き、軍を連合して西に向はせようとした。併し長秀はそれを承知しなかつた。

語釋　公族（織田一族。）〇三氏（柴田・丹羽・池田。）

一益以書致勝家曰、不若伴和、及來歲雪解、出其不意、夾攻之。勝家然之、使前田利家等五輩來山崎、請釋憾協心、共輔幼主。秀吉許之。使者還報。勝家兵備稍懈。秀吉既遣使者、謂左右曰、彼欲怠我而來襲焉爾。吾且破其膽。十一月、引兵至長濱。勝家

養子勝豐守ル焉。勝豐素ヨリ與ニ勝家ニ有リ隙。秀吉招二降シテ之ヲ一、復タ取リ長濱ヲ一、益〻築キ城堡ヲ一、備ヘテ其ノ糧仗ヲ一、以テ距グ越前ノ衝路ヲ一。十二月、還リ、獻二遣ス秀信及ビ諸將ニ一。遇ヘバ勝家ノ所ノ親シムル在ル京畿ニ者ニ一、故ニ仇二視ス之ヲ一。

【訓讀】一益・書を以て勝家に教へて曰く「偽り和し、來歳、雪の解くるに及んで、其の不意に出で、之を夾み攻むるに若かず」と。勝家之を然りとし、前田利家等の五輩をして、山崎に來り、憾を釋き心を協せ、共に幼主を輔けんと請はしむ。秀吉之を許す。使者還り報ず。勝家兵備稍〻懈る。秀吉既に使者を遣はし、左右に謂つて曰く「彼れ我を怠らしめて來り襲はんと欲するのみ。吾れ且に其の膽を破らんとす」と。十一月、兵を引いて長濱に至る。勝家の養子勝豐守る。勝豐素より勝家と隙あり。秀吉之を招降して、復長濱を取り、益〻城堡を築き、其の糧仗を備へて以て越前の衝路を距ぐ。十二月、還り、秀信、及び諸將に獻遣す。勝家親しむ所の京畿に在る者に遇へば、故に之を仇視す。

【通釋】一益は手紙で勝家に教へて曰ふには「偽りの和睦をしておいて、來年の春雪が解けた時分に不意に夾み討を喰はせるのが上策でせう」と。勝家はそれに贊成し、前田利家等五人に、山崎に行つて秀吉に、遺恨を忘れ協力して幼主秀信を輔け度いと賴ませた。秀吉はそれを許した。使者は歸つてその通り報告した。勝家の兵備はいくらか怠り氣味になつた。秀吉は勝家の使者を歸してやつてから、左右の近臣に向つて曰ふには「奴は余に油斷をさせて置いて急に攻めて來ようとする腹ぢや。こつちも一つ奴の膽を取り凌いでくれよう」と。十一月、兵を引きつれて長濱に行つた。勝家の養子の勝豐が守つてゐた。が、勝豐は元來勝家と仲違ひをしてゐた。秀吉は勸めて降參させ、長濱を取り戻し、益〻堡壘を築き固め、糧食武器を準備して、越前から衝き出て來る道を堅固に

防いだ。十二月、秀吉は山崎に歸つて、秀信や諸將に贈物をした。そして京都にゐる勝家の親しくしてゐる者に遇ふと、わざと仇扱ひにしてゐた。

語釋 五輩（前田利家・柴田勝豊・金森長近・不破氏次・原元治。）○與勝家有隙（初め勝家は勝豊を子となし、後佐久間盛政を勝豊以上に愛寵した。盛政も自己の勇を誇り勝豊を侮つた。これ等が隙を生ずるもとである。）

十一年正月朔、歸姬路、撫循士民、頒賞賜酺。七日、入朝京師、遂至安土、議及雪未解取一益、及雪已解圖勝家。乃徵內外將士、會于草津、部兵七萬爲三隊、三道入伊勢。一益在長島。分拒諸城。秀吉留兵備之、而進至桑名、縱火城下、退而爲營。誡其衆曰「瀧川亦老於兵者、今夜必來。」一益謂其下曰「我已分兵、在者甚寡。以寡擊衆、不如夜襲。」卽夜、潛兵赴秀吉陣、視其有備、乃去。

訓讀 十一年正月朔、姬路に歸り、士民を撫循し、賞を頒ち酺を賜ふ。七日、京師に入朝し、遂に安土に至り、雪未だ解けざるに及んで一益を取り、雪已に解くるに及んで勝家を圖らんと議す。乃ち內外の將士を徵し、草津に會し、兵七萬を部して三隊と爲し、三道より伊勢に入る。一益、長島に在り。分ちて諸城を拒ぐ。秀吉兵を留めて之に備へ、進んで桑名に至り、火を城下に縱ち、退いて營を爲る。其の衆を誡めて曰く「瀧川も亦兵に老いたる者、今夜必ず來らん」と。一益、其の下に謂つて曰く「我れ已に兵を分ち、在る者甚だ寡し。寡を以て衆を擊つは、夜襲に如かず」と。卽夜、兵を潛めて秀吉の陣に赴き、其の備あるを視て、乃ち去る。

【通釋】十一年正月元日、姫路に歸つて士民を優しくいたはつてやり、褒美を分けたり酒食を與へたりした。七日、京都に入り、進んで安土城に入り、雪が解けぬ中に一益を降し、雪が解けてから勝家をやつゝけようと議決した。そこで近畿内外の將卒を召集して草津に集め、七萬人を分けて三隊とし、三道から伊勢に入り込んだ。一益は長島にゐた。手分けして諸城を守らせた。秀吉は一部の兵を殘してその方に備へ、桑名に進んで城下に火をかけ、少し退いて陣取つた。そして部下に注意して曰ふには「瀧川も戰に慣れた奴だから、今夜きつと攻めて來るだらう」と。一益はその部下に向つて曰ふには「余はもう兵をあちこちに分けて終つたので、こゝにゐる者は非常に少い。小勢で多勢をうつには夜襲が一番だ」と。すぐその晩こつそり兵を連れて秀吉の陣に近寄つたが準備をさく〳〵怠りないのを見て、そのまゝ立ち去つて終つた。

閏月、秀吉攻下龜山、納之信雄。令蒲生氏鄕・關萬鐵攻嶺城。嶺城未下。勝家聞之、發兵南出。二月、令佐久間盛政將步騎二萬、出陣柳瀨。前田利長爲先鋒、縱火關原、而退陣于木本。秀吉乃留氏鄕以下七將、以當一益、而自引諸軍、赴柳瀨。自與老兵十餘騎上山、望北軍曰、「是不可以速戰勝也。」乃勒兵爲十三隊、據湖山形勢、築連珠砦、而自屯長濱。

【訓讀】閏月、秀吉攻めて龜山を下し、之を信雄に納る。蒲生氏鄕・關萬徹をして嶺城を攻めしむ。嶺城未だ下

らず。勝家之を聞き、兵を發して南に出づ。二月、佐久間盛政をして歩騎二萬に將とし、出で、柳瀬に陣せしむ。前田利長先鋒たり。火を關原に縱つて退き、木本に陣す。秀吉乃ち氏郷以下の七將を留めて以て一益に當らしめ、而して自ら諸軍を引いて柳瀬に赴く。自ら老兵十餘騎と山に上り、北軍を望んで曰く「是れ速戰を以て勝つ可からざるなり」と。乃ち兵を勒して十三隊と爲し、湖山の形勢に據り、連珠砦を築いて、而して自ら長濱に屯す。

【通釋】閏月。秀吉は龜山を攻め下して、之を信雄の物とした。蒲生氏郷、關萬徹に嶺城を攻めさせた。城はまだ落ちぬ。勝家はそれを聞き、兵を出して南に討つて出た。二月、佐久間盛政を歩騎二萬人の大將として柳瀬に陣取らせた。先鋒は前田利長である。關ケ原に火をつけ、木本まで退陣をした。そこで秀吉は氏郷以下の七將を殘して、一益に當らせ、自分は諸軍を引きつれて柳瀬に向つた。自身、經驗を積んだ老兵十餘騎と山に上り、北軍の方を眺めて曰ふには「こいつは急いで戰つて見ても勝てさうもないわい」と。そこで兵を手分けして十隊にし湖（餘吾湖）と山の地勢に據つて連珠砦といふ壘の配置をつくり、そして自分は長濱に駐屯してゐた。

【語釋】嶺城（伊勢）○柳瀬・木本（近江）○連珠砦（多數の砦を適當に配列して、珠を連ねたやうにしたもの。）

三月、勝家悉引レ兵至二柳瀬一。我兵堅レ壁不レ出。丹羽長秀來而助レ之。四月、信孝復擧レ兵、應二於勝家・一益一。其十七日、秀吉以二其軍一南攻二信孝一、至二大垣一。盛政欲三進擊二諸壘一。勝家不レ許。是時、柴田勝豐養レ疾在二京師一。其部下山路將監者叛降二北軍一、在二盛政營一。來中謂二盛政一

曰「聞、神戸君舉兵應我、而秀吉往擊之。子豈得不赴援哉」盛政曰「固也。道路阻絶、敵充塞其間、我將如之何」將監進附其耳語曰「敵諸壘皆固。獨中川清秀之壘、在賤岳之麓、去我尤遠、而其備不固。吾潛兵趨之、出其不意、必獲志矣。秀吉在大垣、不能速來。子急擊勿失」盛政大悅。十九日、往告勝家。勝家曰「可也。吾與利家、留當諸壘。汝則往擊。擊而勝速還。愼勿留也」

【訓讀】三月、勝家、悉く兵を引いて柳瀬に至る。我が兵壁を堅くして出でず。丹羽長秀來つて之を助く。四月、信孝復兵を舉げて勝家・一益に應ず。其の十七日、秀吉其の軍を以て南信孝を攻め、大垣に至る。盛政進んで諸壘を擊たんと欲す。勝家許さず。是の時、柴田勝豊疾を養ひて京師に在り。其の部下山路將監といふ者叛いて北軍に降い、盛政の營に在り。衆中、盛政に謂つて曰く「聞く神戸君、兵を舉げて我に應じ、而して秀吉往いて之を擊つと。子豈に赴き援けざるを得んや」と。盛政曰く「固よりなり。道路阻絶して、敵其の間に充塞す。我れ將に之を如何せんとす」と。將監進み其の耳に附いて、語つて曰く「敵の諸壘皆固し。獨り中川清秀の壘は賤岳の麓に在り。我を去る尤も遠くして其の備固からず。吾れ兵を潛めて之に趨き、其の不意に出でば必ず志を獲ん。秀吉は大垣に在り、速に來ること能はず、子、急に擊つて失ふ勿れ」と。盛政、大に悅ぶ。十九日、往いて勝家に告ぐ。勝家曰く「可なり。吾れ利家と、留つて諸壘に當らん。汝則ち往いて擊て。擊つて勝たば、

速に還れ。愼んで留る勿れ」と。

【通釋】三月、勝家は全部の軍隊を引きつれて柳瀬に到着した。我が軍は砦の壁を堅固にして出なかつた。丹羽長秀が助けに來た。四月、信孝が再び兵をあげて、勝家・一益に呼應して立つた。四月十七日、秀吉は手下の軍をつれて信孝を攻めんとし、南下して大垣まで來た。盛政はその虚に乘じて諸壘を攻めようとした。勝家はそれを許さなかつた。當時柴田勝豊は病氣保養で京都に居つた。その部下の山路將監といふ者が叛いて北軍に降り、盛政の陣屋に居た。この男が人の多勢居る所で盛政に向つて曰ふには「聞く所によると神戸氏信孝公は兵を擧げて我が軍につかれ、そうして秀吉がそれを攻めに參るさうです。貴公はなんとしても援けに參らぬわけには行きますまい」と。盛政が曰ふには「それは勿論である。道が通じてゐない上、その途中は敵が至る所にゐる。私はどうしようといふのでせう」と　すると將監は身を進め、盛政の耳に口をつけて話して曰ふのに「敵の壘はどれも皆堅固です。唯だ中川淸秀の壘は賤岳の麓に在ります。こゝから一番遠く、そのため備も大したことはありません。吾が軍が人に知られぬやうに潛行し、不意を襲つたらきつと成功するでせう。秀吉は大垣に居るから急には來られません。とに角急いでやらぬと機會を取り逃しますぞ」と。盛政は大層悦んだ。十九日に勝家の所に行つて、その話をした。勝家が曰ふには「よろしい。余は利家と一緒に殘つてゐて、他の諸壘に當らう。お前は行つて擊て。擊つて勝つたら直ぐ歸れ。よく〳〵氣をつけ、決して留つてゐてはならぬぞ」と。

【語釋】賤岳（近江）

盛政乃與從弟勝政、將萬人、乘夜至余吾湖東、循湖而馳。比曉至岳麓。中川氏卒、方

飲馬于湖盛政先鋒執斬之。其一人逃返告急。清秀與高山友祥、以數千人出戰。盛政謂其部將曰「長篠之戰、火鳶巢而捷。是可傚也」遣人燒其壘下營。我軍顧而敗。友祥走依秀長。秀長等惶急、不敢援。清秀苦戰終死。盛政既勝、因留不還。勝家召還之。盛政答以日傾兵疲、當竢明還。勝家曰「直路不過一里。何不亟還」盛政笑曰「老怯過慮、何足爲意。」使者五反而日已暮矣。

訓讀 盛政乃ち從弟勝政と、萬人に將として、夜に乘じて余吾湖の東に至り、湖に循ひて馳す。曉くる比、嶽麓に至る。中川氏の卒、方に馬を湖に飲ふ。盛政の先鋒執へて之を斬る。其の一人逃れ返り急を告ぐ。清秀、高山友祥と、數千人を以て出で、戰ふ。盛政其の部將に謂つて曰く「長篠の戰に鳶巢を火いて捷つ。是れ傚ふ可きなり」と。人を遣はして其の壘下の營を燒かしむ。我が軍顧みて敗る。友祥走つて秀長に依る。秀長等惶急して敢て援けず。清秀苦戰して終に死す。盛政既に勝ち、因つて留りて還らず。勝家之を召還す。盛政答ふるに日傾き兵疲る、當に明を竢ちて還るべきを以てす。勝家曰く「直路一里に過ぎず。何ぞ亟に還らざる」と。盛政笑つて曰く「老怯の過慮、何ぞ意と爲すに足らん」と。使者五反して日已に暮る。

通釋 そこで盛政は從弟の勝政と、一萬人を率ゐ、夜の闇にまぎれて余吾湖の東岸に出で、湖に沿うて馳せた。夜の明ける頃、賤岳の麓に着いた。中川氏の兵卒が丁度湖水で馬に水を飲ましてゐた。盛政の先鋒が捕へて

之を斬つた。その中の一人が逃げ歸つて急を知らせた　清秀は高山友祥と共に、數千人を率ゐて壘を出て戰つた。盛政が部將に向つて曰ふには「長篠の戰の時に鳶巣の砦を燒いて勝利を得た。今もあの方法をやるべき時だ」と。部下をやつて壘の下にある陣屋を燒かせた。我が軍は、後から火が上つたので見返つてゐる中に敗け足がついた。友祥は秀長の所に逃げてきた。秀長等はあはてゝ進んで助けようともしなかつた。清秀は苦戰をしてとう〳〵討ち死して終つた。盛政はすつかり勝つて、そのまゝ留つて歸らぬ。勝家は之を呼び返させた。盛政は、もう日もぼつ〳〵西に傾き、兵隊もくたびれてゐますから、夜が明けるのを待つて歸ることにしますと答へた。勝家が曰ふには「眞つ直ぐにして一里を出ない。何故直ぐ歸らないのか」と。盛政は笑つて曰ふには「年を取つて臆病風がついたと見え、心配も念入りなことで、そんなことはちつとも氣にするに足らない」と。使者は勝元と盛政の間を五度往復したが、その内に日はとつぷり暮れて終つた。

語釋　余吾湖（近江）○長篠之戰（信長が武田勝頼を破つた戰。）

當是時、秀吉欲攻岐阜。會大雨、呂久河漲、未濟。午時報至。秀吉方食、問使者曰「盛政退未」。曰「未」。秀吉乃投箸而起、拔刀踴躍曰「吾得大勝矣」。即命駛卒五十人先往、募沿道民曰「吾將赴賤岳。炬火導我、酒食餉我」。遂令堀尾吉晴留當岐阜、而自提輕兵一萬五千、擧鞭疾馳。及藤川而昏黑。山谷皆炬、餉者爭至。兵皆立食。秀吉行、且呼曰「記

其ノ里閭ヲ吾レ將ニ凱旋シテ賞セント之ヲ」

【訓讀】是の時に當り、秀吉、岐阜を攻めんと欲す。會〻大雨あり、呂久河漲りて、未だ濟らず。午時に報至る。秀吉方に食す。使者に問うて曰く「盛政退くや未だしや」と。曰く「未だし」と。秀吉乃ち箸を投じて起ち、刀を拔き踊躍して曰く「吾れ大勝を得たり」と。卽ち駛卒五十人に命じて先づ往き、沿道の民を募らしめて曰く「吾れ將に賤岳に赴かんとす炬火もて我を導き、酒食もて我に餉せよ」と。遂に堀尾吉晴をして留りて岐阜に當らしめ、而して自ら輕兵一萬五千を提げ、鞭を擧げて疾く馳す。藤川に及んで昏黑なり。山谷皆炬、餉者爭ひ至る。兵皆立ちながら食ふ。秀吉行くゆく且つ呼んで曰く「其の里閭を記せよ。吾れ將に凱旋して之を賞せんとす」と。

【通釋】その當時、秀吉は岐阜を攻めようとしてゐた。その時丁度大雨に降られ、呂久河が增水したゝめ、まだ渡河しなかつた。午前十二時頃に賤岳の敗報が屆いた。秀吉は丁度食事をしてゐた。使者に聞いて曰ふには「盛政は、歸つたかどうか」と。「いゝえ、まだ返りませぬ」と。秀吉はそれを聞くや否や箸を投げすてゝ起ち上り、太刀を拔き、足を踏み踊らして曰ふには「味方は大勝利を得たぞ」と。直ぐに足早の卒五十人に命じて、先發して、路々の士民に檄を飛ばさせて曰ふには「我が軍はこれから賤岳に向ふ所だ。炬火をつけて案內し、酒食の用意をして置いてくれ」と。遂に堀尾吉春に殘つて岐阜に當らせ、そして自分は身輕な兵卒一萬五千を引きつれ、鞭を振つて急に馳せた。藤川まで來るとすつかり夜になつた。山も谷も皆炬火で明々としてゐて、食事の振舞をするものが我れ勝ちにやつて來た。兵士は皆立つたまゝぱくついた。秀吉は步き乍ら怒鳴つて曰ふには「その村

の名前を覺えてをけ。凱旋の時に褒美を取らせるから」と。

語釋 呂久河（美濃） ○藤川（近江）

北軍相驚曰「濃路諸山、多炬火。秀吉來矣」。盛政大駭、將乘暗拔軍而北。適月已出。我軍覩之、進躡其後。盛政留銃隊殿之、引兵上岳北陣。勝政在麓、欲與之合。而金瓠馬表、已在岳南。銃丸亂發。勝政兵立死者二百餘人。其陣稍亂。秀吉顧左右、縱兵乘之。加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟谷武則・片桐且元、爭先奮擊、多所斬獲。諸軍從進、遂大破之、擒勝政、進蹙盛政、又大破之。斬首五千級。遂進赴勝家。

訓讀 北軍相驚いて曰く「濃路の諸山炬火多し。秀吉來る」と。盛政大に駭き、將に暗に乘じ軍を拔いて北せんとす。適月已に出づ。我が軍之を覩、進んで其の後を躡む。盛政銃隊を留めて之を殿せしめ、兵を引いて岳北に上りて陣す。勝政、麓に在り、之と合せんと欲す。而して金瓠の馬表、已に岳南に在り。銃丸亂發す。勝政の兵、立ちどころに死するもの二百餘人。其の陣稍亂る。秀吉左右を顧み、兵を縱つて之に乘ぜしむ。加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋武則・片桐且元、先を爭うて奮擊し、斬獲する所多し。諸

軍從ひ進み、遂に大に之を破り、勝政を擒にし、進んで盛政に薄り、又大に之を破る。斬首五千級。遂に進んで勝家に赴く。

〔通釋〕北軍ではてんでに驚いて曰ふには「美濃路の山々に炬火が澤山ついた。秀吉が來たのだ」と。盛政はひどく吃驚し、暗闇にまぎれ軍隊をそつくり引き拂つて北に逃げようとした。所が合憎月が出て終つた。我が軍はそれを見付けてその後をつけた。盛政は銃隊を後に廻して殿させ、賤岳の北部に上つて陣取つた。勝政はまだ麓になつたが、山上の盛政と一緒にならうとした。するともう千成瓢簞の馬表がすでに山の南まで來てゐた。鐵砲玉を矢鱈に飛ばせた。勝政の兵士はそれに打たれて即死する者が二百人餘りも出た。その陣形が少し亂れた。秀吉は左右の部下を見廻し、その隙に乘じて兵を放つて突擊を命じた。加藤清正・福島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟谷武則・片桐且元の七人が先を爭つて奮擊し、斬り殺したり首を擧げることが夥しかつた。他の諸隊も從つて進み、遂に大に之を破り、勝政を生捕にした上、更に進んで盛政の軍に迫り、又これをも大に破つた。首を擧げること五千級であつた。なほ進んで勝家に向ひ、押し寄せた。

勝家在核山。聞賤岳軍大崩危之。已而敗卒交至。勝家曰「盛政果敗我事矣」。遂北走。過見前田利家于府中、請其馬馳入北莊。秀吉追走至府中、單騎打城門、連呼利家俗字曰「又左、又左」。利家乃出迎之、以其兵從。諸城望風解走。且日、秀吉至北莊、自上其後山、令堀秀政縱火乘煙迫城。或縛盛政及勝家義子權六、獻麾下。秀吉視之城

中勝家遂自燒殺。

訓讀 勝家核山に在り。賤岳の軍大に衄しきを聞いて之を危ぶむ。已にして敗卒交〻至る。勝家曰く「盛政果して我が事を敗る」と。遂に北に走る。過りて前田利家を府中に見、其の馬を請ひ、馳せて北莊に入る。秀吉走るを追ひ府中に至り、單騎城門を打ち、利家の俗字を連呼して曰く「又左、又左」と。利家乃ち出でゝ之を迎へ、其の兵を以て從ふ。諸城、風を望みて解走す。旦日、秀吉北莊に至り、自ら其の後山に上り、堀秀政をして火を縱ち、烟に乘じて城に迫らしむ。或ひと、盛政及び勝家の義子權六を縛して麾下に獻ず。秀吉之を城中に視す。勝家遂に自ら燒殺す。

通釋 勝家は核山に居つた。賤岳にゐる軍が非常に喧しいので不安に思つてゐた。その内に敗けた兵が後から〱逃げてきた。勝家が曰ふには「盛政め、案の定余の大事をこはして終つた」と。遂に北に逃げ出した。府中を通るとき、前田利家に對面し、その馬を貰ひ、馳せて北莊の城に入つた。秀吉は逃げるのを追つかけて府中につき、唯〻一騎で城門を打ち、利家の俗名を續け樣に怒鳴つて曰ふには「又左、又左」と。そこで利家も止むなく出迎へ、城兵を引きつれて從つた。諸城もかゝる威勢を望んで皆守を解いて逃げ走つた。翌日、秀吉は北莊について、自らその後の山に上り、堀秀政をして、火をつけてその烟につけ込んで城に攻め寄せさせた。すると或る者が盛政と勝家の養子權六とを縛つて秀吉の幕營に獻じて來た。秀吉はそれを城内の者に見せつけた。勝家は遂に火をかけて自ら燒け死んだ。

語釋 核山（近江）〇府中（越前、利家の治所。）〇北莊（越前、勝家の治所。）〇後山（城後の山、愛宕山といふ。）

秀吉見城中火起、則引兵北徇加賀・能登、盡下之。信孝出走自殺、一益降。於是、秀吉還軍坂下。六月、叙從四位下、任參議。七月、大賞戰功、予北莊于丹羽長秀、大垣于池田信輝、澤山于堀秀政、金山于森長可、賜近臣七人秩各五千石。世呼曰賤岳七槍。於是、近畿粗定。山陽・山陰將士、來尋去歳之盟。上杉氏・徳川氏、皆使使賀戰捷。

訓讀 秀吉城中に火の起るを見、則ち兵を引いて北、加賀・能登を徇へ、盡く之を下す。信孝出で走つて自殺し、一益降る。是に於て、秀吉還つて坂下に軍す。六月、從四位下に叙し、參議に任ぜらる。七月、大に戰功を賞し、北莊を丹羽長秀に、大垣を池田信輝に、澤山を堀秀政に、金山を森長可に予へ、近臣七人に秩各〻五千石を賜ふ。世呼んで賤岳の七槍と曰ふ。是に於て近畿粗定る。山陽・山陰の將士來つて去歳の盟を尋む。上杉氏・徳川氏、皆使をして戰捷を賀せしむ。

通釋 秀吉は城中に火の起るのを見ると、（もうそれには構はないで）兵を引きつれて北に向ひ、加賀・能登を巡り歩いて威を示し、すべて降參させた。信孝は岐阜を飛び出して逃げたが自殺を遂げ、一益は降參した。そこで秀吉は戻つて坂下に陣取つた。六月、從四位下に叙し、參議に任ぜられた。七月大に論功行賞をなし、丹羽長秀には北莊を、池田信輝には大垣を、堀秀政には澤山を、森長可に金山を與へ、近臣七人に五千石宛の祿を賜はつた。世間では之を呼んで賤岳の七本槍と言つた。こゝに於て近畿は大體平定された。山陽道・山陰道の諸將士もやつて來て、去年取り結んだ盟約を溫めた。上杉氏も徳川氏も、皆使をよこして戰勝の祝を述べさせた。

【語釋】澤山（今の彦根。）○金山（美濃）○近臣七人（上文加藤清正等の七人。）○尋（温なり。前盟の冷やかにならぬ内に又温めること。）

秀吉有下霸二天下一之志上。謂「京師狹迫不レ便二漕運一。且無下列二邸第一之地上。大阪北帶二大河一、西控二海水一、地勢宏壯可三以管二攝七道一。」十一月、遂起二十餘州卒一城二大阪一。成而徙焉。

【訓讀】秀吉天下に霸たるの志あり。謂へらく、京師は狹迫にして漕運に便ならず。且つ邸第を列するの地なし。大阪は北、大河を帶び、西、海水を控へ、地勢宏壯にして以て七道を管攝すべしと。十一月、遂に十餘州の卒を起して大阪に城く。成りて徙る。

【通釋】秀吉は天下の旗頭となつて、號令する志があつた。だから秀吉は考へるのに「京都は四方が山で狹く、それに舟の便利が宜くない。第一屋敷を並べる餘地がない。大阪は北に大河が流れ、西には海を控へ、地勢は廣々としてゐるから、七道を支配し取締るに適してゐる」と。そこで十一月、遂に十餘ケ國の人夫を徴發して大阪に築城することになつた。城が出來上るとそこに移つた。

【語釋】大河（淀河。）

信雄視二秀吉威權日隆一、心不レ能レ平。其下有二三驍將一。秀吉厚遇レ之。信雄疑二其有一レ私。十二年三月、殺三三將與二秀吉一絕一、乞二援於德川氏一。池田信輝・森長可・堀秀政、皆爲二秀吉一距二信

雄。信雄將瀧川雄利、初送質於秀吉。秀吉屬之脇坂安治。於是、雄利詐奪還之、據其邑上野。安治怒、以從者二十人入伊賀、夜募士兵、襲上野城、拔之、走雄利。秀吉令安治留定伊賀。信輝・長可亦拔犬山守之。秀吉遣尾藤知定、監二人軍曰「彼必負勇浪戰。汝往制之。」遂欲親將而東。會南海盜起。乃令中村一氏等當南面、浮田秀家當西面、丹羽長秀・前田利家當北面、而自將東下、至犬山。德川氏・北畠氏、合兵陣小牧、對壘未戰。秀吉遣書請戰。德川氏不肯。

【譯文】信雄、秀吉の威權日に隆なるを視て、心平なる能はず。其の下に三驍將あり。秀吉厚く之を遇す。信雄其の私あるを疑ふ。十二年三月、三將を殺して秀吉と絕ち、援を德川氏に乞ふ。池田信輝・森長可・堀秀政皆秀吉の爲めに信雄を距ぐ。信雄の將瀧川雄利、初め質を秀吉に送る。秀吉之を脇坂安治に屬す。是に於て、雄利詐つて之を奪還し、其の邑上野に據る。安治怒り從者二十人を以て伊賀に入り、夜、士兵を募り、上野城を襲ひて之を拔き、雄利を走らす。秀吉、安治をして留りて伊賀を定めしむ。信輝・長可も亦犬山を拔いて、之を守る。秀吉、尾藤知定を遣はし、二人の軍を監せしめて曰く「彼れ必ず勇を負みて浪に戰はん。汝往いて之を制せよ」と。遂に親ら將として東せんと欲す。會〻南海に盜起る。乃ち中村一氏等をして南面に當り、浮田秀家をして西面に當り、丹羽長秀・前田利家をして北面に當らしめ、而して自ら將として東下し、犬山に至る。德川氏・北畠

氏、兵を合せて小牧に陣す。壘を對して未だ戰はず。秀吉、書を遺り戰はんことを請ふ。德川氏肯ぜず。

通釋 信雄は秀吉の威權が日毎に強くなるのを見て、心中何となく穩でなかつた。信雄の部下に三人の勇將が居つた。秀吉は彼等を遇すること甚だ手厚かつた。信雄は何か內證事があるのではないかと疑つた。十二年三月、この三將を殺して秀吉と絕緣し、德川氏に助を求めた。池田信輝・森長可・堀秀政は何れも秀吉の爲めに信雄の軍勢を拒いだ。信雄の部將の瀧川雄利は初め秀吉に人質を送つてゐた。秀吉はそれを脇坂安治に預けてゐた。雄利はその人質をだまして取り返し、自分の領地の上野に立てこもつた。安治は腹を立て、從者二十人をつれて伊賀に入り、夜、土民の兵を募集し、上野城を襲擊して之を陷れ、雄利を走らせた。秀吉は安治をして留つて伊賀を平定させた。信輝と長可も犬山城を陷れてそれを守つた。秀吉は尾藤知定を遣つて二人の軍を監督させて曰ふには「彼等はきつと勇氣に任せて矢鱈な戰をやるに違ひない。お前行つて抑へて置け」と。そこでいよ〳〵自身大將となつて東に向はうとした。丁度其の時南海道に土匪一揆が起つた。そこで中村一氏等をして南方に當らせ、浮田秀家をして西方に當らせ、丹羽長秀と前田利家をして北方に當らせて、そして自身は兵を率ゐて東下し、犬山まで來た。德川氏と北畠氏（信雄）とは軍を合せて小牧に陣取つてゐた。東西兩軍は壘を相對したまゝまだ戰を始めなかつた。秀吉は手紙をやつて戰を求めた。德川氏はそれに應じなかつた。

語釋 三驍將（岡田重喜・津川義永・淺井多宮。）○上野（伊賀）○犬山（尾張）○南海（紀伊四國）○西面（山陰山陽）○北面（佐々木氏等。）○小牧（尾張）

四月、信輝自請間道擣參河。秀吉不答。明日、復請。乃許之。信輝率壻秀政・長可以往。曰「親戚赴軍、無他證左。」秀吉乃令三好秀次助之。秀次秀吉妹子也。臨發誡信輝

曰「宜寨于篠木・柏井、募士兵、縱火東參河。勿侮敵輕進、恃勝不備」既遣之、自從陣樂田。信輝・長可進拔岩崎。或走告德川公。公與信雄伺其懈、襲擊于長湫、殺之。其將佐曰「秀吉敏軍機。今必來矣」乃收兵退。

訓讀　四月、信輝自ら間道より參河を擣かんと請ふ。秀吉答へず。明日、復請ふ。乃ち之を許す。信輝、二壻秀政・長可を率ゐ以て往く。曰く「親戚軍に赴き、他の證左なし」と。秀吉乃ち三好秀次をして之を助けしむ。秀次は秀吉の妹の子なり。發するに臨み信輝を誡めて曰く「宜しく篠木・柏井に寨し、士兵を募り、火を東參河に縱つべし。敵を侮りて輕進し、勝を恃みて備へざる勿れ」と。既に之を遣はし、自ら從つて樂田に陣す。信輝・長可、進んで岩崎を拔く。或ひと走つて德川公に告ぐ。公、信雄と其の懈るを伺ひ、襲うて長湫に擊ち、之を殺す。其の將佐曰く「秀吉、軍機に敏し。今必ず來らん」と。乃ち兵を收めて退く。

通釋　四月、信輝は裏路から行つて參河を攻擊したいと願つた。併し秀吉は返事をしなかつた。翌日又願つた。今度は許した。信輝は二人の壻秀政と長可とをつれて出かけた。その時曰ふには「親戚許りで戰に行くので、後日の證據となる人がない」と。そこで秀吉は三好秀次をして彼等を助けさせた。秀次は秀吉の妹の子である。出發に際し秀吉は信輝に注意を與へて曰ふには「可成、篠木と柏井に砦を造つて、土民の兵を募集し、東參河に火をつけるがよい。敵を侮つて輕はづみに進んだり、又一寸した勝に傲つて用意を怠つたりしてはならぬ」と。彼等を派遣して後、秀吉は自分も陣を樂田に移した。信輝・長可は進んで岩崎を陷れた。それを誰かゞ走つて

徳川公家康に知らせた」家康は信雄と共に、敵軍の勝に乘じて油斷するのを窺つて、不意に長湫を襲撃して二將を殺した。部下の大將達が曰ふには「秀吉は戰の懸引に全く拔目が無い。まもなくきつとやつて參りませう」と。そこで兵をまとめて退いた。

語釋 證左(功を樹てゝも證人がないといふ意。) ○篠木・柏井・樂田・岩崎・長湫(參河。)

秀吉得敗聞、奮袂起曰「敵亂次而來。吾迎而疾擊、可以鏖之」急抽精兵二萬、自將赴長湫。聞敵退入小幡、欲隨攻之。稻葉通朝諫以日暮兵疲。乃止。下令曰「旦日、攻擒二帥」參河將士爭請襲秀吉陣。徳川公不肯曰「秀吉勇略不世出。其可狃而輕之乎」夜退還小牧。秀吉亦還樂田。

訓讀 秀吉敗聞を得、袂を奮ひ起つて曰く「敵、次を亂して來らん。吾れ迎へて疾く擊たば以て之を鏖にすべし」と。急に精兵二萬を抽き、自ら將として長湫に赴く。敵退いて小幡に入ると聞き、隨つて之を攻めんと欲す。稻葉通朝諫むるに、日暮れ兵勞るゝを以てす。乃ち止む。令を下して曰く「旦日、攻めて二帥を擒にせよ」と。參河の將士爭うて秀吉の陣を襲はんと請ふ。徳川公肯ぜずして曰く「秀吉の勇略は不世出なり、其れ狃れて之を輕んず可けんや」と。夜退いて小牧に還る。秀吉亦樂田に還る。

通釋 秀吉は敗報を得ると袖を奮つて起ち上り曰ふには「敵は軍の順序を亂して攻めて來るに違ひない。我が

軍は之を迎へて猛烈な攻撃を加へるなら、敵を皆殺しに出來る」と、大急ぎで精兵二萬をより拔き、自身指揮して長湫に出向いた。敵は退いて小幡に入つたと聞き、追つかけて攻めようとした。稻葉通朝が、日も暮れたし兵も疲れたからと言つて諫めた。そこで中止した。命令を下して曰ふには、「明日攻撃して、家康と信雄とを生捕りにしろ」と。參河の將士は我れ勝ちに、秀吉の陣を襲撃したいと願つた。德川公家康は承知をせずして曰ふには「秀吉の膽の太い機略は世に又とないものである。一遍勝つたからといつて、狃れ輕んじてはならぬ」と。夜、退軍して小牧に歸つた。秀吉も樂田に戻つた。

語釋 小幡（尾張）

五月、留諸將守樂田、引兵攻拔利井・嶺・神戶・松島・竹鼻諸城。六月、以竹鼻予一柳直末、令森長可弟忠政襲兄邑、封蒲生氏鄕于松島、食十二萬石、統攝傍近諸城。秀吉自陣大垣、往來伊勢・尾張間、修諸城砦。遣脇坂安治徇志摩、移大和國主筒井定次于伊賀、以大和賜弟秀長、以志摩賜九鬼嘉隆。

通釋 五月、諸將を留めて樂田を守らしめ、兵を引いて攻めて利井・嶺・神戶・松島・竹鼻の諸城を拔く。六月、竹鼻を以て一柳直末に予へ、森長可の弟忠政をして、兄の邑を襲がしむ。蒲生氏鄕を松島に封じ、十二萬石を食ましめ、傍近の諸城を統攝せしむ。秀吉自ら大垣に陣し、伊勢・尾張の間を往來して、諸城砦を修む。脇

坂安治を遣して志摩を徇へしめ、大和の國主筒井定次を伊賀に移し、大和を以て弟秀長に賜ひ、志摩を以て九鬼嘉隆に賜ふ。

通釋 五月、秀吉は諸將を留めて樂田を守らせておき、自分は兵を引き連れて、利井・嶺・神戸・松島・竹鼻の諸城を陥れた。六月、竹鼻を一柳直末に與へ、森長可の弟の忠政をして兄の領地を相續させた。(長可が死んだから。) 蒲生氏郷を松島に封じて十二萬石を與へ、附近の諸城を統一支配させた。秀吉は自ら大垣に陣取り、伊勢と尾張の間をあちこちと往來し、諸所の城や砦を修繕した。脇坂安治をやつて志摩を示威降參させ、大和の國主筒井定次を伊賀に移して、大和を弟秀長に與へ、志摩は九鬼嘉隆に與へた。

語釋 利井・竹鼻(美濃)　○嶺・神戸・松島(伊勢)

十月陣羽津、信雄陣桑名。其君臣内相猜疑、軍中數驚。秀吉乃謂富田知信・津田信季曰「我爲先君復仇、務鎮定國家。而諸郎聽細說、遽欲誅我。我不得已、起與之較。神戸君既不良死。我至今悼焉。爲我謝北畠君、盍捐細故與共富貴。」二人往告之信雄。信雄許之、相見于矢田河原、和成。德川公使使賀之。公尋送其子秀康爲質。

訓讀 十月羽津に陣し、信雄桑名に陣す。其の君臣、内に相猜疑し、軍中數驚く。秀吉乃ち富田知信・津田信季に謂つて曰く「我れ先君の爲めに仇を復し、務めて國家を鎮定す。而して諸郎細説を聽き、遽に我を誅せん

と欲す。我れ已むを得ずして、起つて之と較す。神戸君既に良死せず。我れ今に至つて悼む。我が爲めに北畠君に謝せよ、盍ぞ細故を捐て丶、與に富貴を共にせざる」と。二人往いて之を信雄に告ぐ。信雄之を許し、矢田河原に相見て、和成る。德川公、使をして之を賀せしむ。公、尋いで其の子秀康を送りて質と爲す。

通釋 十月、秀吉は羽津に陣取り、信雄は桑名に陣取つた。信雄方は君臣同志が内心に猜疑し合ひ、陣中にあつて度々騒ぎを起した。かういふ情勢なので秀吉は、富田知信と津田信季とに向つて曰ふには「余は若殿の爲めに仇を討ち、懸命に國家を鎭定するに努力してゐる。それだのに若殿連は詰らぬ噂を眞にうけて、突然余を殺さうと思はれた。余も致し方なく、戰を起して勝負を爭つたわけだ。神戸殿（信孝）はすでに良からぬ死に樣をされてゐる。余は今になつてみると全く氣の毒に思ふのだ。だから余の爲めに北畠殿（信雄）の所に行つて謝つてくれ。つまらぬ意趣を棄て丶共に富貴を樂むことにしたら如何なものか」と。二人は出向いてその通り信雄に話した。信雄はその申出を許し、矢田河原で會見をして、和解ができた。德川公家康は使をやつて祝を述べさせた。家康は續いて其の子の秀康を送つてきて人質とした。

語釋 （羽津・矢田河原（伊勢））（細故（こま〴〵しい事柄。））

秀吉之東スル也、南海ノ盜數〻攻ム二岸和田一ヲ。土佐ノ國主長曾我部元親略二定シ四國一ヲ、發シテレ兵ヲ援ケレ之ヲ、窺フ二大阪一ヲ。中村一氏守リ二岸和田一ヲ、擊チテ卻クレ之ヲ。佐佐成政亦以テ二越中一ヲ應ジ二北畠氏一ニ、將トシテ二兵萬餘一ヲ攻ム二末盛城一ヲ。城ハ屬ス二前田利家一ニ。城將奥村永福與ニ二其ノ妻一、奬二勵シテ士卒一ヲ固守ス。利家赴キ救ヒ、大ニ破ル二成政一ヲ。成政

求援於徳川公。公辭之。

訓讀 秀吉の東するや、南海の盜數岸和田を攻む。土佐の國主長曾我部元親四國を略定し、兵を發して之を援け、大阪を窺ふ。中村一氏、岸和田を守り、擊つて之を卻く。佐佐成政も亦越中を以て北畠氏に應じ、兵萬餘に將として、末盛城を攻む。城は前田利家に屬す。城將奥村永福其の妻と、士卒を奬勵して固く守る。利家赴き救ひ、大いに成政を破る。成政、援を徳川公に求む。公、之を辭す。

通釋 秀吉が東國に行つてゐた時に、南海道の土匪が度々岸和田を攻めた。土佐の國主長曾我部元親は四國を占領平定した上、軍隊を繰り出してこの一揆の尻押しをなし、ひそかに大阪をねらつた。中村一氏は岸和田を守り、それを擊退した。佐佐成政も、越中を率ゐて信雄に味方し、一萬餘の兵を率ゐて末盛城を攻めた。この城は前田利家の配下であつた。城將の奥村永福は妻と共に、士卒をはげまして嚴しく守つた。利家が助けに行き、成政を大敗せしめた。成政は徳川公家康に援を求めた。家康はそれを斷つた。

語釋 岸和田（和泉）〇末盛城（能登）

十一月、秀吉進從三位、任大納言。十三年二月、進正二位、陞內大臣。於是、議用兵於南海・北陸、欲先定南海。南海賊根來・雜賀最强。聞羽柴氏且來、築三寨于千石壕、悉銳守之。三月、秀吉將兵十萬南伐、令秀次備三寨、而直指根來寺。寨兵以弓銃要之。

秀次縱騎傍撃、遂合兵圍寨。我軍發火箭、中賊硝櫃。賊悉焚死、諸寨皆解走。秀吉則以生兵六萬、急襲根來、焚之、遂攻下雜賀、引紀伊川、灌大田壘、磔其魁首五十人、進下熊野・高野、撤諸關寨、以紀伊・和泉加賜秀長、以近江賜秀次。四月、歸大阪。

訓讀 十一月、秀吉從三位に進み、大納言に任ぜらる。十三年二月、正二位に進み内大臣に陞さる。是に於て、兵を南海・北陸に用ひんと議し、先づ南海を定めんと欲す。南海の賊は根來・雜賀最も強し。羽柴氏且に來らんとすと聞き、三寨を千石壕に築き、鋭を悉して之を守る。三月、秀吉兵十萬に將として南伐し、秀次をして三寨に備へしめて、直に根來寺を指す。寨兵、弓銃を以て之を要す。秀次、騎を縱つて傍撃し、遂に兵を合せて寨を圍む。我が軍火箭を發し、賊の硝櫃に中つ。賊悉く焚死し、諸寨皆解走す。秀吉則ち生兵六萬を以て急に根來を襲ひ之を焚き、遂に攻めて雜賀を下し、紀伊川を引きて大田の壘に灌ぎ、其の魁首五十人を磔す。進んで熊野・高野を下し、諸々の關寨を撤す。紀伊・和泉を以て秀長に加賜し、近江を以て秀次に賜ふ。四月、大阪に歸る。

通釋 十一月、秀吉は從三位に進み、大納言に任ぜられた。十三年二月には、正二位に進み、内大臣に昇進した。さてそこで、南海・北陸の二道を征伐しようと評議し、先づ南海道を平定することになつた。南海道の土匪の中では根來と雜賀が一番強かつた。羽柴氏がまさに攻めよせてくると聞くと、三ケ所の寨を千石壕に築き、精鋭の兵を殘らず動員してそれを守つた。三月、秀吉は兵十萬を率ゐて南伐を始め、秀次に命じて前記の三つの寨に當らせて、自分はそのまゝ眞直に根來寺に向つた。千石壕の寨の兵隊は弓鐵砲でその本軍を待ち伏せした。秀

次は騎兵を放つて側面から撃たせ、そのまゝ兵を合せて寨を取り圍んだ。我が軍は火箭を射て、賊の煙硝箱に當てた。賊は全部燒け死に、他の寨も皆守を解いて逃げた。それで秀吉は戰に加はらなかつたあら手の兵六萬人を引きつれ、急に根來に攻めかけて燒き拂ひ、それから又雜賀をも降し、紀伊川を引き込んで大田の壘を水攻めにし、その親玉五十人を張付けにした。更に進んで熊野・高野を降し、多くの關や寨を取り拂つた。紀伊・和泉を秀吉に加封し、近江を秀次に與へた。四月に大阪に歸つた。

語釋 根來・雜賀・千石濠・大田壘（紀伊。）

秀吉遂以書諭長曾我部元親。當獻伊豫・讚岐來朝天子。否則有罰。元親不聽。五月、秀吉令秀長・秀次以舟師六萬往討之、自阿波入。又令浮田秀家自讚岐、小早川隆景自伊豫、竝攻元親。元親將兵距羽津。秀次攻和氣、秀長攻一宮。皆降之、合攻木津、又降之。諸城解走。仙石秀久前受封淡路。七月、以其兵拔屋島。秀家・隆景亦陷數城。諸軍刻期萃于羽津。元親乃乞降、送質遂入朝。秀吉讓曰「來何晩也」。乃奪其三國、賜阿波于蜂須賀家政、讚岐于仙石秀久・十河存保、伊豫于小早川隆景・來島康親。以伊豫正木賜加藤嘉明、以淡路洲本賜脇坂安治。南海盡定。

【訓讀】秀吉遂に書を以て長曾我部元親に諭す。當に伊豫・讚岐を獻じて天子に來朝すべし。否ざれば則ち罰あらんと。元親聽かず。五月、秀吉、秀長・秀次をして、舟師六萬を以て往いて之を討ち、阿波より入らしむ。又浮田秀家をして讚岐より、小早川隆景をして伊豫より、並に元親を攻めしむ。元親兵に將として羽津に距ぐ。秀次は和氣を攻め、秀長は一宮を攻む。皆之を降し、合して木津を攻め、又之を降す。諸城解走す。仙石秀久、前に封を淡路に受く。七月、其の兵を以て屋島を拔く。秀家・隆景亦數城を陷る。諸軍、期を刻して羽津に萃る。元親乃ち降を乞ひ質を送りて遂に入朝す。秀吉讓めて曰く「來ること何ぞ晩きや」と。乃ち其の三國を奪ひ、阿波を蜂須賀家政に、讚岐を仙石秀久・十河存保に、伊豫を小早川隆景・來島康親に賜ひ、伊豫の正木を以て加藤嘉明に賜ひ、淡路の洲本を以て脇坂安治に賜ふ。南海盡く定る。

【通釋】遂に秀吉は手紙をやつて長曾我部元親を諭した「伊豫・讚岐を獻上して天子に參内をせよ　もしさうしなければ罰があたるであらう」と。元親は承知しなかつた。五月、秀吉は秀長と秀次に舟軍六萬を率ゐさせて元親を討伐にやり、阿波から四國に入らせた。又浮田秀家に讚岐から、小早川隆景に伊豫から並行して攻めさせた。元親は自ら大將となつて羽津で拒いだ。秀次は和氣を攻め、秀長は一宮を攻めた。兩方とも降し、兵を合せて木津を攻め、又これを降した。諸ゝの城は守を解いて逃げた。仙石秀久は以前、淡路島を領地に貰つてゐた。七月、その兵を率ゐて屋島を陷れた。秀家・隆景の軍も亦數城を陷れた。そしてこれらの諸軍は期日を定めて羽津に集つた。そこで流石の元親も降參を申し出で、人質をよこし遂に參内をした。秀吉は詰つて曰ふには「何故、早く來なかつたか」と。そこで元親の領分の三國を奪ひ、阿波を蜂須賀家政に、讚岐を仙石秀久と十河存保に、伊豫を小早川隆景と來島康親に與へ、伊豫の正木を加藤嘉明に、淡路の洲本を脇坂安治に與へた。南海方面がこ

れで全部平定した。

語釋 羽津(佐土) ○和氣・一宮・木津(伊豫)

初秀吉起微賤無姓氏。始稱平氏、中稱藤原氏。於是欲爲征夷大將軍。右大臣藤原晴季素與秀吉善。爲之謀曰「故事大將軍非源氏不可。公稱藤原氏。宜爲關白。」秀吉曰「關白何物。」晴季曰「位亞天子、統御百官。」秀吉大喜。時藤原昭實爲關白。晴季諷辭其官、以秀吉代之。朝廷重違其意、遂詔許之。秀吉具騶從、入朝謝恩。奏請授子弟將士以官爵。秀吉羞冒他姓、請賜新姓。曰豐臣。

訓讀 初め秀吉微賤より起りて姓氏なし。始め平氏を稱し、中ごろ藤原氏を稱す。是に於て、征夷大將軍とならんと欲す。右大臣藤原晴季素より秀吉と善し。之が爲めに謀つて曰く、「故事に、大將軍は源氏に非ざれば不可なり。公は藤原氏を稱す。宜しく關白と爲るべし」と。秀吉曰く「關白とは何物ぞ」と。晴季曰く「位天子に亞ぎ、百官を統御す」と。秀吉大に喜ぶ。時に藤原昭實關白たり。晴季諷して其の官を辭せしめ、秀吉を以て之に代らしむ。朝廷其の意に違ふを重かり、遂に詔して之を許す。秀吉、騶從を具へ、入朝して恩を謝す。奏請し、子弟將士に授くるに官爵を以てす。秀吉他姓を冒すを羞ぢ、新姓を賜はらんことを請ふ。豐臣と曰ふ。

通釋 秀吉は元來微賤な身分から出たので、姓も氏もなかつた。それで始めの頃は平氏を名乘り、その後藤原

氏を名乘つてゐた。今や、征夷大將軍と爲りたいと思つた。右大臣の藤原晴季は以前から秀吉と親しかつた。秀吉の爲めに謀つて曰ふには「從來の慣はしに、大將軍は源氏でなければならぬことになつてゐます。貴公は藤原姓を名乘つてゐる。關白になつたが宜しい」と。秀吉が曰ふには「關白といふのはどんな位ですか」と。晴季が曰ふには「天子の次の位で、文武百官を支配するものです」と。秀吉は大に喜んだ。當時藤原昭實が關白であつた。晴季はそれとなく當てこすつて止めさせ、代りに秀吉にやらせようとした。朝廷でもその意向に逆らうことを心配して、遂に詔してそれを許した。秀吉は騎馬の伴人を具し連れ、參內して皇恩を拜謝した。又子弟將士どもに官爵を授け下さるやう奏請した。秀吉は他人の姓（藤原氏）を用ふることを潔しとせず、新しい姓を賜はらんことをお願ひ申した。そこで豐臣と名乘ることになつた。

語釋 昭實（二條關白。）〇具騶從（僕御儀衛を揃へること。）

置吏五人、奉行政令。淺野長政・石田三成・增田長盛、掌諸訟獄、長束正家掌錢穀、前田玄以掌僧祝。長政任彈正少弼、後封甲斐。玄以稱德善院、任法印、嘗爲織田氏吏。後封篠山。正家任大藏少輔。嘗爲丹羽氏吏。後封水口。三成任治部少輔、後封澤山。長盛任右衛門尉、後封郡山。秀吉戒五人曰「大事會議決之。小事不必然。勿使有留滯。勿納贈賄。勿挾恩仇。訟獄之事、無貧富貴賤、一切從事。」當是時、豐臣氏歲入二百

萬石、府庫稱レ之。曰「吾不レ可ニ獨自封殖一」遂下レ令、分ニ金五千枚、銀三萬枚於諸將士、償ニ其軍費一設ニ場于京師第門一、一日悉散レ之。

【訓讀】吏五人を置いて、政令を奉行せしむ。淺野長政・石田三成・增田長盛、諸々の訟獄を掌り、長束正家錢穀を掌り、前田玄以僧祝を掌る。長政は彈正少弼に任ぜられ、後に甲斐に封ぜらる。玄以は德善院と稱し法印に任ぜらる。嘗て織田氏の吏たり。後に篠山に封ぜらる。正家は大藏少輔に任ぜらる。嘗て丹羽氏の吏たり。後に水口に封ぜらる。三成は治部少輔に任ぜられ、後に澤山に封ぜらる。長盛は右衞門尉に任ぜられ、後に郡山に封ぜらる。秀吉五人を戒めて曰く「大事は會議して之を決せよ。小事は必ずしも然らず。留滯有らしむること勿れ。賄賂を納るゝ勿れ。恩仇を挾むこと勿れ。訟獄の事は貧富貴賤となく、一切事に從へ」と。是の時に當り、豐臣氏の歲入二百萬石、府庫之に稱ふ。曰く「吾れ獨り自ら封殖すべからず」と。遂に令を下し、金五千枚、銀三萬枚を諸將士に分ちて、其の軍費を償ふ。場を京師の第門に設け、一日に悉く之を散ず。

【通釋】そこで役人を五人置いて君命を體して政治命令を行はせることにした。淺野長政・石田三成・增田長盛の三人は訴訟のことを司り、長束正家が賦税を司り、前田玄以が宗教方面を司ることになつた。長政は彈正少弼に任ぜられ、後甲斐に封ぜられた。玄以は德善院と稱し法印に任ぜられた。以前は織田氏の役人であつた。後篠山に封ぜられた。正家は大藏少輔に任ぜられた。前には丹羽氏の役人をしてゐた。後水口に封ぜられた。三成は治部少輔に任ぜられ、後澤山に封ぜられた。長盛は右衞門尉に任ぜられ、後郡山に封ぜられた。秀吉はこの五人に注意を與へて曰ふには「大事が起つたら五人會議して決するがよい。小事はさうせずとも獨斷で

やれ。事務を滯らせてはならぬ。賄賂を受けてはならぬ。私の恩仇を抱いてはならぬ。訴訟のことは貧富貴賤の區別なく、一切その事の是非善惡を照し公平な態度で取扱へ」と。當時豐臣氏の一年の收入は二百萬石あつて、倉庫の貯藏高も略之と同量あつた。秀吉が曰ふには「余ばかり財產を殖やしてはならぬ」と。そこで命令を下し、黃金五千枚・銀三萬枚を諸將士に分けて、彼等の戰の費用を償つてやることにした。京都の自邸の門に場所をしつらへ、一日の內に全部を分ち與へて終つた。

語釋　彈正少弼（賴山陽は淺野家の臣であるので、以下長政の名を諱んで彈正とか少弼とか記されてゐる。この事は例言に斷つてある。）○法印（僧正の次席。）○澤山（近江）○郡山（大和）

八月、自將騎卒十萬北伐。北畠信雄以尾張・伊勢兵、前田利家以能登・加賀兵、皆會焉。佐佐成政據富山、築三十餘壘于栗殼嶺。秀吉張疑兵當之、而航海直襲富山。成政惶駭、削髮出降。乃加賜越中于利家子利長。以丹羽氏有罪奪越前、割其半予堀秀政、令村上・溝口二氏屬之、以鎭北陸。而越後國主上杉景勝未來。秀吉既勝成政、則與石田三成等十餘騎、踰險直入越後、謂其疆上吏曰「吾秀吉也。汝主已通使於我。我故來見、欲面議事」。吏馳使告景勝。景勝大驚、遂來盟。秀吉屏左右與語。既畢西還。使金森長近略飛驒、攻其國司姉小路頼綱滅之、因封長近焉。

【訓読】八月、自ら騎卒十萬に將として北伐す。北畠信雄は尾張・伊勢の兵を以て、前田利家は能登・加賀の兵を以て皆會す。佐佐成政富山に據り、三十餘壘を栗殼嶺に築く。秀吉疑兵を張りて之に當て、而して海に航して直に富山を襲ふ。成政惶駭し、髪を削りて出で降る。乃ち越中を利家の子利長に加賜す。丹羽氏罪あるを以て越前を奪ひ、其の半を割いて堀秀政に予へ、村上・溝口の二氏をして之に屬せしめ、以て北陸を鎭す。而して越後の國主上杉景勝未だ來らず。秀吉既に成政に勝ち、則ち石田三成等十餘騎と、險を踰えて直に越後に入り、其の疆上の吏に謂つて曰く「吾は秀吉なり。汝が主已に使を我に通ず。我れ故に來り見て事を面議せんと欲す」と。吏、使を馳せて景勝に告ぐ。景勝大に驚き、遂に來りて盟ふ。秀吉左右を屛けて與に語る。既に畢りて西に還る。金森長近をして飛驒を略せしめ、其の國司姉小路頼綱を攻めて、之を滅し、因つて長近を封ず。

【通釈】八月、自ら歩騎十萬を率ゐて北征することになつた。北畠信雄は尾張と伊勢の兵を、前田利家は能登と加賀の兵をそれ〴〵率ゐて集つた。佐佐成政は富山にたてこもつて、三十餘ケ所の壘を栗殼嶺に築いた。秀吉はその方面には模擬の兵を立て並べておき、こつそり海上を渡つて一路富山を襲つた。成政は仰天して、頭を坊主にして城を出て降參した。そこで越中を利家の子の利長に加增した。丹羽氏に罪があつたので越前を奪ひ、その半分を堀秀政に與へ、村上・溝口の二氏を秀政に隷屬させて北陸を鎭定させた。所が越後の國主上杉景勝は未だに出向いて來なかつた。秀吉は成政を敗つて終つてから、石田三成等十餘騎と、險阻な山道を越えて一直線に越後に入り、その國境の役人に向つて曰ふには「余は秀吉だ。お前の主人が先刻使を寄來して來た。だから余は出向いて來て直接會つた上相談しようと思ふのだ」と。役人は使を飛ばせて景勝に知らせた。景勝は大いに驚いて、出で、盟約をなした。秀吉は左右のものを遠ざけて二人だけで話をした。すつかり事が定つてから西に戻つ

た。金森長近をして飛驒を征伐して、國主姉小路頼綱を攻め滅させ、因つて長近をその領主とした。

語釋　粟殼嶺中（四）（二）丹羽氏有罪（織田氏記に詳である。）

先是、信濃豪族眞田昌幸來送款、納子幸村爲質。昌幸自父幸隆、屬武田氏。及武田氏亡、屬德川氏、領上田。攻北條氏、取沼田。德川氏與北條氏婚、令昌幸還致沼田。答曰「公之所賜上田掌大之地耳。至沼田我以吾兵力取之。焉得予他人哉」德川公怒、率步騎七千來攻。閏月、上杉景勝以秀吉旨發兵援昌幸。昌幸延之內城、而自居外城、植柵城內、伏兵城外、而出羸卒誘敵。敵進入城。柵內銃發、敵陣亂。二城夾擊破之。敵走出伏起、又破之。昌幸子信幸亦迎擊北條氏兵于沼田破之。

訓讀　是より先き、信濃の豪族眞田昌幸來つて款を送り、子幸村を納れて質と爲す。昌幸、父幸隆より武田氏に屬す。武田氏の亡ぶるに及んで德川氏に屬し、上田を領す。北條氏を攻めて沼田を取る。德川氏、北條氏と婚し、昌幸をして沼田を還し致さしむ。答へて曰く「公の賜ふ所の上田は掌大の地のみ。沼田に至りては我れ吾が兵力を以て之を取る。焉んぞ他人に予ふるを得んや」と。德川公怒り、步騎七千を率ゐて來り攻む。閏月、上杉景勝、秀吉の旨を以て兵を發して昌幸を援く。昌幸之を內城に延き、而して自ら外城に居り、柵を城內に植て、

兵を城外に伏せ、而して羸卒を出して敵を誘ふ。敵進んで城に入る。柵内より銃發し、敵陣亂る。二城夾み撃つて之を破る。敵走り出づ。伏起り、又之を破る。昌幸の子信幸も亦、北條氏の兵を沼田に迎へ撃つて之を破る。

通釋 これより前に、信濃の豪族の眞田昌幸がやつて來て修好を求め、子幸村を差出して人質とした。昌幸は父幸隆の時から武田氏に屬してゐた。武田氏が亡んでから徳川に屬して上田を領してゐた。別に北條氏を攻めて沼田を取つた。徳川氏は北條氏と縁組して、昌幸に沼田を北條氏に返させようとした　すると答へて曰ふには「貴公の下さつた上田は猫の額のやうな土地です。沼田は私が自分の兵力で取つたものです。人になぞやれるものですか」と。徳川公家康は立腹し、歩騎七千人を率ゐて攻めて來た。閏月・上杉景勝は秀吉の意向に依り・出兵をして昌幸を助けた。昌幸はその援軍を本丸に入れて、自分は二の丸に居た。それから城内に柵を結ひまはし、城外に伏兵を置き、弱い兵隊を出して敵を誘つた。敵が城内に進み込んだ。柵の中から鐵砲を放つたので、敵の陣が亂れた。そこで本丸と二の丸とで挾みうちにして大に破つた。敵は逃げ出した。伏兵が起つて、又之を破つた。昌幸の子信幸も北條氏の兵を沼田に迎へうつて之を破つた。

語釋 上田(信濃)〇沼田(上野)〇二城(内城外城。)

九月、景勝自將來援。敵軍退去。小笠原貞慶亦因昌幸、送款、與景勝竝連衡於豐臣氏、以圖關東。徳川氏・北條氏、懼而約從。十一月、徳川氏將石川數正來奔、其國大擾。秀吉乃謂信雄曰「吾既定中州、東西未服。近日將西伐。宜先與徳川和、以距北條也。

子爲レ我圖レ之。信雄乃遣二二使一、諭二德川公一。公恐三其有二變一、不二敢來一。

【訓讀】九月、景勝自ら將として來り援く。敵軍退き去る。小笠原貞慶も亦昌幸に因つて款を送り、景勝と並に豐臣氏に連衡して、以て關東を圖る。德川氏・北條氏、懼れて從を約す。十一月、德川氏の將石川數正來り奔り、其の國大に擾る。秀吉乃ち信雄に謂つて曰く「吾れ既に中州を定む。東西は未だ服せず。近日將に西伐せんとす。宜しく先づ德川と和し、以て北條を距ぐべし。子、我が爲めに之を圖れ」と。信雄乃ち二使を遣はして、德川公を諭す。公其の變あらんを恐れて、敢て來らず。

【通釋】九月、景勝は自ら大將となつて來援した。敵軍は退却し去つた。小笠原貞慶も昌幸を通じて好を求め、景勝と共に豐臣氏と東西に聯合して、關東に食指を動かした。德川氏と北條氏とは恐怖を感じて、南北の同盟を結んだ。十一月、德川氏の部將石川數正が逃げて來たので、その國が大變亂れた。その時秀吉は信雄に向つて曰ふには「私はすでに中州を平定しました。併し東北方面と九州とはまだ降服してなりません。ついては近い中に西伐を始めます。それには先づ德川と和睦して、北條を拒ぎ止めて置いた方が宜しい。貴方は一つ私の爲めにこれを取りもつて頂きたいものです」と。信雄はそこで二人の使者をやつて、德川公家康に話をつけた。併し家康は變事を恐れて、容易には來なかつた。

【語釋】合從・連衡（從はタテ、衡はヨコ、支那戰國時代六國が連合して西の秦に當つたのが合從、秦が西諸侯と連和するのが連衡、それを假り來つたのである。）○中州（こゝでは、本州の東北を除きたる部分を指す。次の東西は、その東北と及び九州を意味する。）

是歲、毛利氏遣二小早川隆景・吉川元長一來二大阪一。元長ハ元春ノ子也。秀吉善待レ之。曰「天主

閣新成。當使卿等一觀。乃自從一侍女、導隆景・元長、及其從者數十人上閣、指示遠近山海、因謂元長曰「吾予乃叔以伊豫。乃翁未有所予。吾數與乃翁治兵。常恨不相見以談往日戰略。明年、吾將伐九州。煩乃翁爲先鋒、事平予之筑前也」

訓読 是の歳、毛利氏・小早川隆景・吉川元長を遣はして大阪に來らしむ。元長は元春の子なり。秀吉善く之を待つ。曰く「天主閣新に成る。當に卿等をして一觀せしむべし」と。乃ち自ら一侍女を從へ、隆景・元長及び其の從者數十人を導いて閣に上り、遠近の山海を指示し、因つて元長に謂つて曰く「吾れ乃叔に予ふるに伊豫を以てす。乃翁には未だ予ふる所あらず。吾れ數乃翁と兵を治む。常に相見て以て往日の戰略を談ぜざるを恨む。明年、吾れ將に九州を伐たんとす。乃翁を煩して先鋒と爲し、事平がば之に筑前を予へん」と。

通釈 この年、毛利氏が小早川隆景と吉川元長を大阪に寄越した。元長は元春の子である。秀吉は厚く待遇した。秀吉が曰ふには「天主閣が新規に出來上つた。一つ君がたに見て戴かう」と。そこで自身腰元を一人連れて、隆景と元春及びその從者數十人を案内して天主に上り、あちこちの山や海を指し示し、因つて元長に向つて曰ふには「余はあんたの叔父さんに伊豫を上げた。併しあんたのお父さんにはまだどこも上げてゐない。余は以前度々あんたのお父さんと戰爭をした。しみ〴〵會つて昔の戰爭話をする機會のないのをいつも殘念に思つてゐる。來年は、余は一つ九州を征伐する覺悟ぢや。その時はお父さんに先鋒になつて戴いて、無事平定したら筑前を差上げる心算ぢや」と。

語釋 乃叔（お前の叔父といふ意。謙景をさす。）○乃翁（お前の親父、元春をさす。）

十四年二月、内野第成。命名聚樂。秀吉將請天子幸焉、率諸侯朝之也。是歲、又建方廣寺、以木造大佛。高十六丈。興卒數萬人、四方工人盡集。四月、以其妹妻德川公。

訓讀 十四年二月、内野の第成る。名を聚樂と命ず。秀吉、將に天子の幸を請ひ、諸侯を率ゐて之に朝せんとす。是の歲、又方廣寺を建て、木を以て大佛を造る。高さ十六丈。卒數萬人を興し、四方の工人盡く集る。四月、其の妹を以て德川公に妻はす。

通釋 十四年二月、内野の屋敷が出來上つた。聚樂といふ名前をつけた。秀吉は天子樣の御出でを願ひ、諸大名を引きつれて拜謁を致さうと考へた。この年又方廣寺を建て、木で大佛を拵へた。その高さは十六丈もあつた。人夫數萬人を使ひ、四方の大工が殘らず集つて來た。四月、秀吉は妹を德川公家康と結婚させた。

語釋 内野（京都の西北。）○方廣寺（京都の東南。）○四方工人（二十一ケ國の工人。）○其妹（始め佐治日向に嫁した女である。德川記に詳である。）

五月、上杉景勝入覲。先是、豐後國主大友義鎭亦入覲、初島津義久自薩摩起、侵食九國。義鎭與肥前國主龍造寺政家、歲被其兵、竝乞援於秀吉。窟城主高橋鎭種・立花城主戸次宗茂、皆來送款焉。於是、秀吉將西伐、下教列國、竝固守以竢。七月、義久

遣弟義弘・家久略二筑、降秋月氏・筑紫氏、乃攻鎭種。鎭種自殺。宗茂固守、來使告急。秀吉乃遣黑田孝高、趣毛利輝元・吉川元春・小早川隆景。

【訓讀】五月、上杉景勝入覲す。是より先き、豐後の國主大友義鎭も亦、入覲す。初め島津義久、薩摩より起り、九國を荐食す。義鎭、肥前の國主龍造寺政家と、歲々其の兵を被り、並に援を秀吉に乞ふ。窟城主高橋鎭種・立花城主戸次宗茂、皆來つて款を送る。是に於て、秀吉將に西伐せんとし、敎を列國に下し、並に固く守りて以て竢たしむ。七月、義久、弟義弘・家久を遣はして二筑を略し、秋月氏・筑紫氏を降して、乃ち鎭種を攻む。鎭種自殺す。宗茂は固く守り、使を來して急を告ぐ。秀吉乃ち黑田孝高を遣はし、毛利輝元・吉川元春・小早川隆景を趣す。

【通釋】五月、上杉景勝が入京謁見をした。その前豐後の國主大友義鎭も謁見をした。島津義久は元薩摩から起り、頻りと九州を攻め取つて行つた。義鎭と肥前の國主龍造寺政家とは年々義久の兵害を受け、共に秀吉に援助を求めた。窟城主の高橋鎭種・立花城主の戸次宗茂も皆やつて來て好みを送つた。そこで秀吉はいよ〳〵西伐を始めんとし、これらの國々に、皆しつかり守つて待つてゐるやうにと告げしらせた。七月、義久は、弟義弘と家久を派遣して筑前筑後を攻め取り、秋月氏と筑紫氏を降したので、鎭種を攻めた。鎭種は自殺した。宗茂はよく守つて、使を寄越して急を知らせた。そこで秀吉は黑田孝高を遣つて、毛利輝元・吉川元春・小早川隆景に出兵を催促させた。

【語釋】窟城（筑前）〇立花城（肥前）

九月、又遣加藤嘉明・脇坂安治、趣長曾我部元親・十河存保、皆發兵西向。遂遣書義久曰「關白問、何以不朝貢。何以坐取官爵。何以縱出兵、攻略鄰國。」使仙石秀久齎書往。因誡秀久曰「彼若不服、且勿與戰。退以竢我。」

訓讀 九月、又加藤嘉明・脇坂安治を遣はし、長曾我部元親・十河存保を趣し、皆兵を發して西向せしむ。遂に書を義久に遺つて曰く「關白問ふ、何を以て朝貢せざる。何を以て坐ながら官爵を取る。何を以て縱に兵を出し隣國を攻略する」と。仙石秀久をして、書を齎し往かしむ。因つて秀久を誡めて曰く「彼れ若し服せずば、且く與に戰ふ勿れ。退いて以て我を竢て」と。

通釋 九月、又加藤嘉明・脇坂安治をやつて、長曾我部元親と十河存保を催促し、皆兵を出して西に向ふやうにさせた。遂に義久に手紙を送つて曰ふには「關白として問ふことがある。何故に入京して貢物を獻上せぬのか。何故に國に居たまゝで官爵を受けるのか。何故に勝手に出兵して隣國を攻め取るのであるか」と。仙石秀久にその手紙を持つて行かせた。それに就て秀久を誡めて曰ふには「彼がもし降服をしなかつたならば、戰爭は一時見合はせて置け。そして退いて私の行くのを待つてをれ」と。

秀久至。義久投書於地曰「我族國于此十四世矣。促朝貢者獨有近衛氏。猴冠者、敢欲屈致我乎。」秀久憤恚、以大友氏兵進擊家久。元親・存保從之。元親子信親、與存保

皆敗死。元親走伊豫、秀久走豊後。嘉明・安治力戰而退。義久遂大擧入豊後、下十六城。大友義鎭既死。其子義統出戰、大敗。事聞。秀吉怒、奪秀久邑、予之尾藤知定、終議西伐、益促徳川公入朝。

訓讀 秀久至る。義久、書を地に投じて曰く「我が族、此に國する十四世なり。朝貢を促すもの獨り近衞氏あるのみ。猴冠者、敢て我を屈致せんと欲するか」と。秀久憤恚し、大友氏の兵を以て進んで家久を撃つ。元親・存保、之に從ふ。元親の子信親、存保と皆敗死す。元親は伊豫に走り、秀久は豊後に走る。嘉明・安治、力戰して退く。義久遂に大擧して豊後に入り、十六城を下す。大友義鎭既に死す。其の子義統出で、戰ひ、大に敗る。事聞す。秀吉怒り、秀久の邑を奪つて、之を尾藤知定に予へ、終に西伐を議し、益々徳川公の入朝を促す。

通釋 秀久は薩摩に到着した。義久はその手紙を地面に投げすてゝ曰ふには「我が一族はこの國を領すること十四代に及んでゐる。この我に朝貢を求め促して然るべきものは近衞氏だけである。猴面冠者め、俺を呼び附けようといふ氣なのか」と、秀久はむら〳〵と腹を立て、大友氏の兵を連れて家久を討つた。元親と存保がそれに從つた。戰の結果は、元親の子の信親及び存保は敗けて死んだ。元親は伊豫に逃げ、秀久は豊後に逃げた。嘉明と安治とは懸命に戰つて退いた。義久はそのまゝ大軍を率ゐて豊後に入り、十六城を降した。大友義鎭はその時にはもう死んでゐた。その子の義統が出て戰つたが、大敗した。この報告が秀吉の所へ屆いた。秀吉は立腹し、命令に反いた秀久の領地を奪つて、尾藤知定に與へ、いよ〳〵九州征伐の具體的相談をとげ、益々徳川公家康の

入京を催促した。

【語釋】十四世（忠久、忠義、久經、忠宗、貞久、氏久、元久、久豐、忠國、立久、忠昌、忠治、勝久、貴久、義久、父子相續ぐを一世といふことからすれば十四世、實は十五代。）〇奪二秀久邑一（戰ふなといふ命令に背いて敵に勝を得させたから。）

十月、公從二萬餘人一而發。秀吉母曰二大廳一、往問二女于岡崎一、以安二其國人一。德川公到二京師一。秀吉從二數人一就二其館一、握レ手款語、遂呼レ酒、召二其諸將一、談二小牧之戰一、盡レ歡而出。十一月、德川公入二謁于聚樂第一、畢レ禮而去。

【訓讀】十月、公、萬餘人を從へて發す。秀吉の母を大廳と曰ふ。往いて女を岡崎に問ひ、以て其の國人を安んず。德川公京師に至る。秀吉數人を從へて其の館に就き、手を握りて款語し、遂に酒を呼び、其の諸將を召し、小牧の戰を談じ、歡を盡して出づ。十一月、德川公聚樂の第に入謁し、禮を畢へて去る。

【通釋】十月、家康は一萬人餘りの兵をつれて出發した。秀吉の母は大廳と呼ばれてゐた。この時岡崎に娘（家康夫人）を訪ねて行つて、その國人に（家康に害なしといふ）安心を與へた。德川公家康が京都に到着した。秀吉は數人の供を從へただけでその館を訪問し、手を握つて親しげに物語りをなし、遂に酒を持ち出させ、德川の諸將を座に呼んで小牧の戰を談じ合ひ、十分に愉快を盡して立ち歸つた。十一月、家康は聚樂の邸に入り、謁見の禮を濟ませて歸つた。

【語釋】安二其國人一（參河の民を指す。秀吉は母を人質に與へて、異變のないことを示した。）

先是、皇太子殂。是月、天皇禪位于皇太孫。皇太孫卽位。是爲後陽成天皇。十二月、天皇詔以秀吉爲太政大臣。關白職如故。於是、秀吉奏請曰「臣徵島津義久入朝。義久不奉命。臣請、自將伐之」。乃令越中・尾張以西三十七國、發兵、以明年二月會大阪。命石田三成・大谷吉隆・長束正家、掌糧餉、小西隆佐・建部壽德掌漕運、先赴小倉、具三十萬人糧・二萬匹馬芻、使可支一歲。十五年二月、兵會大阪者十五萬人。秀吉下令、禁鹵掠、止鬪諍、又置吏于沿道驛舍、使軍行莫蹇滯。乃遣秀長、將前軍先發。

訓讀 是より先き、皇太子殂す。是の月、天皇位を皇太孫に讓る。皇太孫位に卽く。是を後陽成天皇と爲す。十二月、天皇詔して秀吉を以て太政大臣と爲す。關白の職故の如し。是に於て、秀吉奏請して曰く「臣、島津義久を徵して入朝せしむ。義久命を奉ぜず。臣請ふ、自ら將として之を伐たん」と。乃ち越中・尾張以西三十七國に令し、兵を發し、明年二月を以て大阪に會せしむ。石田三成・大谷吉隆・長束正家に命じて糧餉を掌らしめ、小西隆佐・建部壽德に漕運を掌らしめ、先づ小倉に赴き、三十萬人の糧・二萬匹の馬芻を具へて、一歲を支ふべからしむ。十五年二月、兵大阪に會するもの十五萬人。秀吉令を下し、鹵掠を禁じ、鬪諍を止め、又吏を沿道の驛舍に置き、軍行をして蹇滯莫からしむ。乃ち秀長を遣はし、前軍に將として先づ發せしむ。

通釋 此れより先き、皇太子は亡くなられた。この月に、天皇は御位を皇太孫に讓り給うた。皇太孫が御卽位

なされた。是を後陽成天皇と申上る。十二月、天皇は詔して秀吉を太政大臣となされた。關白職は從前の通りである。そこで秀吉は西征のことを決するや、天子に奏請し奉つて申すには「私は島津義久に入京朝見致すやう命じました。義久はそれに服從致しませぬ。よつて私は自ら大將となり彼を討ちたいと存じます」と。そこで越中尾張以西の三十七ケ國に命令して、出兵の準備を爲し、明年二月に大阪に會合する樣に傳へた。石田三成・大谷吉隆・長束正家の三人に糧食のことを掌らしめ、小西隆佐と建部壽德の二人に舟運のことを支配させ、この者達は先づ小倉に行つて三十萬人分の食糧と、二萬匹のまぐさを準備して一年の間、事缺かぬやうにさせた。十五年二月、大阪に集つた軍隊は十五萬人であつた。秀吉は命令を下して、掠奪・爭鬪を禁じ、又道筋の宿場に役人を置いて行軍に滯りの無いやうにさせた。そこで秀長に前軍を率ゐて先發させた。

語釋 天皇（正親町天皇。）○皇太孫（諱周仁。正親町天皇の皇子誠仁親王の第一子。）

三月朔、秀吉自將諸軍、發京師、水陸倶下。義久既逐大友義統、居豐後府内、發兵四出。聞豐臣氏前軍至豐前、乃使家久守耳川、引兵而退。秀長至耳川、諸將先濟。家久夜襲南條・宮部氏營。南條敗、宮部撃卻之。明日、秀長乃濟。敵遂退保高城、既而又退。二十五日、秀吉至赤間關。留增田長盛守關戸城、丸毛某・城戸某守門司城、徵國人質子、濟海入豐前。廿八日、陣于馬岳、分兵並進。時秋月種實招島津氏兵、據岩石城。

城跨豐前・筑前之間、以險固聞。秀吉遣義子秀勝攻之、令蒲生氏鄉・前田利長輔之、自以麾下登杉原山。

訓讀 三月朔、秀吉自ら諸軍に將として京師を發し　水陸倶に下る。義久既に大友義統を逐ひ、豐後の府内に居り、兵を發して四出す。豐臣氏の前軍豐前に至ると聞き、乃ち家久をして耳川を守らしめ、兵を引いて退く。秀長　耳川に至る。諸將先づ濟る。家久、夜、南條・宮部氏の營を襲ふ。南條は敗れ、宮部は擊つて之を卻く。明日、秀長乃ち濟る。敵遂に退いて高城を保つ。既にして又退く。二十五日、秀吉赤間關に至る。增田長盛を留めて關戶城を守り、丸毛某・城戶某に、門司城を守らしめ、國人の質子を徵し、海を濟りて豐前に入る。二十八日、馬岳に陣し、兵を分ちて竝び進む。時に秋月種實、島津氏の兵を招き、岩石城に據る。城は豐前・筑前の間に跨り、險固を以て聞ゆ。秀吉、義子秀勝を遣はして之を攻めしめ、蒲生氏鄉・前田利長をして之を輔けしめ、自ら麾下を以て杉原山に登る。

通釋 三月一日、秀吉は諸軍の總大將となつて京都を出發し、水軍陸軍相竝んで西下した。義久は大友義統を逐ひ拂つて終ふと、豐後の首都に居り、兵を四方に出して攻めた。豐臣氏の前軍が豐前に到着したと聞き、家久に耳川を守らせて、自分は兵をつれて退いた。秀長の軍は耳川に着いた。部下の諸將が先づ川を渡つた。家久は夜、南條・宮部氏の陣營を不意討ちした。南條は敗れ、宮部はこれを討ち退けた。そこで翌日秀長は渡つて行つた。敵はとう〱退却して高城を守つた。その中に又そこも退却して終つた。二十五日、秀吉は赤間關まで來た。增田長盛を留めて關戶城を守らせ、丸毛某と城戶某に門司城を守らせ、土地の人民から人質を差し出させ、

海を渡つて豐前に入つた。二十八日馬岳に陣取り、兵を分けて並行して進んだ。その時、秋月種實が島津氏の兵を呼んで岩石城に立てこもつてゐた。この城は豐前と筑前の間に跨つてゐて、有名な堅固な城であつた。秀吉は養子の秀勝をやつて攻めさせ、蒲生氏郷と前田利長に助力せしめ、自分は旗下の兵を引きつれて杉原山に登つた。

語釋 耳川・高城（日向）〇赤間關・關戸（長門）〇門司・馬岳・杉原山（豐前）

四月、氏郷攻其南、利長攻其北。城兵能拒。氏郷先入其郭。秀吉自山上望見其徽號、自脱其袍、使人齎馳賜之曰、「被此以登內城。」氏郷感激、身先士卒。會風大起。縱火焚城。城卽陷。秀吉乃進至小熊。種實遁走、使子種長以城降。秀吉悉收其地、進軍高良山。龍造寺政家以肥前兵來會焉。肥後諸城皆解走。

訓讀 四月、氏郷は其の南を攻め、利長は其の北を攻む。城兵能く拒ぐ。氏郷は先づ其の郭に入る。秀吉山上より其の徽號を望見し、自ら其の袍を脱ぎ、人をして齎し馳せて之を賜はしめて曰く、「此を被て以て內城に登れ」と。氏郷感激し、身士卒に先だつ。會〻風大に起る。火を縱つて城を焚く。城卽ち陷る。秀吉乃ち進み小熊に至る。種實遁走し、子種長をして城を以て降らしむ。秀吉悉く其の地を收め、進んで高良山に軍す。龍造寺政家、肥前の兵を以て來り會す。肥後の諸城皆解走す。

通釋 四月、氏郷は岩石城の南を攻め、利長はその北を攻めた。城兵はよく拒いだ。氏郷は先づ城の外郭に攻め入つた、秀吉は山の上からその旗じるしを見付けると、自分の着てゐた陣羽織を脱ぎ、それを部下に走つて持たせてやり氏郷に與へて曰ふには「これを着て本丸に攻め上れ」と。氏郷は感激の餘り、部下の眞先に飛び出した。丁度風がひどく吹いて來た。火をつけて城をやいた。城はあつけなく陷落して終つた。秀吉は小熊まで進んだ。種實は逃げて終ひ、子供の種長に城を擧て降參させた。秀吉は其の土地をすつかり取り上げ、更に進んで高良山に陣取つた。龍造寺政家が肥前の兵を引き連れてそこへやつて來た。肥後の諸城は皆守を解いて逃亡した。

語釋 小熊(筑前) ○高良山(筑後)

薩摩驍將新納忠元・伊集院忠棟、守合子城。走保八代、與島津征久合兵堅守。秀吉以兵艦攻之。忠元等夜遁。秀吉入其城、謂諸將曰「吾征誅僻遠之國。苟期於鏖盡、勢有所不可。且見吾狹也。宜從優容、速成大功。」乃榜于衢路曰「名門故家、脅從於敵者、及豪俠大盜、聚徒結黨者、一切皆宥、聽其自新。」令初下。軍門如市。秀吉進入薩摩、降島津忠良。五月、進至千代河。河接海港、前所發漕舶盡湊焉。乃命水軍將加藤嘉明・脇坂安治・九鬼嘉隆、造浮梁濟軍、建牙于太平寺、環布軍營、塡池澤夷丘阜。方二里

餘。中開門巷、縦横四達。遠近望風而潰。乃遣水軍三將、攻桂忠昉于平佐。脇坂安治先登。忠昉降。

訓讀 薩摩の驍將新納忠元・伊集院忠棟、合子城を守る。走つて八代を保ち、島津征久と兵を合せて堅く守る。秀吉兵艦を以て之を攻む。忠元等夜遁る。秀吉其の城に入り、諸將に謂つて曰く「吾れ僻遠の國を征誅す。苟も塵盡を期せば、勢不可なる所有り。且つ吾が狹を見す。宜しく優容に從ひ、速に大功を成すべし」と。乃ち衢路に榜して曰く「一名門故家、敵に脅從する者・及び豪俠大盜、徒を聚め黨を結ぶ者、一切皆宥し、其の自新を聽す」と。令初めて下る。軍門市の如し。秀吉進んで薩摩に入り、島津忠良を降す。五月進んで千代河に至る。河は海港に接し、前に發する所の漕艦盡く湊る。乃ち水軍の將加藤嘉明・脇坂安治・九鬼嘉隆に命じて、浮梁を造らしめて軍を濟し、牙を太平寺に建て、軍營を環布し、池澤を塡め丘阜を夷ぐ。方二里餘。中に門巷を開き、縦横四達す。遠近風を望んで潰ゆ。乃ち水軍の三將を遣はし、桂忠昉を平佐に攻めしむ。脇坂安治、先登す。忠昉降る。

通釋 薩摩の驍將新納忠元と伊集院忠棟は合子城を守つてゐた。八代に走り移り、島津征久と兵を合せて嚴重に守つた。秀吉は軍艦でそれを攻めた。ところが忠元等は夜中に逃げて終つた。秀吉はその城に入つて諸將に向つて曰ふには「今度の戰は都を遠く離れた國々を征伐するのだ。なんでもかんでも殘らずやつゝけて終ふといふことになると　得てして出來兼ねる所がある。それ許りでなく、秀吉といふ男は重箱の隅をほじくるやうな人間だといふことになる。何んでも寛大に取り扱つて、早く大功を擧げるやうにせねばならぬ」と。そこで四辻に

高札を立てゝ、曰ふには「名門や故家で、脅迫されて敵に從つてゐる者も、又、豪俠大盗にして、仲間を集めて徒黨を組む者も、全部その罪を宥し、自ら過を改めて降參したいものにはそれをさし許す」と。命令が一度下つた。陣營の門は市場のやうに賑はつた。秀吉は進んで薩摩に入り、島津忠良が降した。五月、更に千代川に進んだ。この川は港に續いてゐて、前に出發した運送船が殘らずそこに集つた。そこで水軍の大將の加藤嘉明・脇坂安治・九鬼嘉隆に命じ、舟橋を造らせて軍隊を渡し、總大將の旗を太平寺に立て、まはりにぐるりと陣屋を配置し、池や澤を埋め、岡や小山を切り崩して平らかにした。二里四方許りである。その中に門や小路を開き通じ、交通は縱横十文字に四通した。この盛んな樣子に打たれて遠近の諸軍は潰えるものが多かつた。そこで水軍の三將をやつて、平佐の桂忠昉を攻めさせた。この時脇坂安治が先登した。忠昉は降參した。

〔語釋〕合子城・八代（肥後）〇千代河・平佐（薩摩）〇三將（嘉明、安治、嘉隆。）

於是、秀長以日向故主伊東祐丘為先鋒、以五萬人自日向入。前田利長與淺野彈正、以龍造寺政家為先鋒、以五萬人自大隅入。家久以佐土原降。義弘退陣求庥。諸軍合而南下、臨於鹿兒島。島津氏將佐交勸義久乞降。乃遣伊集院忠棟、因秀長謝罪。秀吉曰「吾初欲誅不庭之臣、使無遺類。吾聞、島津氏源右大將之遠裔也。四百歳名族、一日滅之、吾亦不忍也。其宥之」義久大喜、削髮被僧衣、從近臣五六人、詣太平

寺ニ降ル秀吉延見シ、以テ温言ヲ慰藉シ之ヲ、命ジテ以テ義弘ヲ爲サシム嗣ト琉球國馳セテ使ヲ修ム貢獻ヲ

【訓讀】是に於て、秀長は日向の故主伊東祐丘を以て先鋒と爲し、五萬人を以て日向より入る。前田利長は淺野彈正と、龍造寺政家を以て先鋒と爲し、五萬人を以て大隅より入る。家久、佐土原を以て降る。義弘退いて求麻に陣す。諸軍合して南下し、鹿兒島に臨む。島津氏の將佐、交々義久に勸めて降を乞はしむ。乃ち伊集院忠棟を遣はし、秀長に因つて罪を謝す。秀吉曰く「吾れ初め不庭の臣を誅し、遺類なからしめんと欲す。吾れ聞く、島津氏は源右大將の遠裔なりと。四百歲の名族、一日にして之を滅すは、吾れ亦忍びざるなり。其れ之を宥さん」と。義久大に喜び、髮を削り僧衣を被り、近臣五六人を從へ、太平寺に詣りて降る。秀吉延見し、温言を以て之を慰藉し、命じて義弘を以て嗣と爲さしむ。琉球國、使を馳せて貢獻を修む。

【通釋】そこで秀長は日向の前領主伊東祐丘を先鋒として、五萬の軍勢で日向から薩摩に攻め入つた。前田利長は淺野彈正と共に、龍造寺政家を先鋒として、之れ亦五萬の軍勢で大隅から攻め入つた。家久は佐土原を提供して降參を申し出した。義弘は退いて求麻に陣取つた。諸軍はこの時合して一とつて、南に下り、鹿兒島に迫つた。島津氏の諸將幕僚は代る代る義久に降參することをすゝめた。そこで伊集院忠棟をやり、秀長を通じて謝罪せしめた。秀吉が曰ふのに「余は初めは臣にして入朝謁見をしない不埒な奴を一族一人も殘らず誅伐してやらうと思つてゐた。だが、聞けば島津氏は右大將賴朝公の末裔ださうである。余も四百年の名族を一日に滅して終ふには忍びない。まあ赦してやらう」と。義久は大層喜び、頭を剃り僧服を着け、近臣五六人を從へて、太平寺の本陣に來て降參した。秀吉は引見し、やはらかな言葉で慰めてやり、義弘を後繼にするやうに命じた。琉球國も急ぎ

使を寄越して貢物を獻じて好を通じた。

語釋 佐土原（日向）○求麻（肥後）

六月、凱旋至太宰府、盡收九州質子、大論功罪。令島津氏因故土領薩摩・大隅・日向、削其侵地、賜肥後于佐佐成政、筑前于小早川隆景、豐前于黑田孝高・森勝信、筑後于毛利秀包・立花宗茂。而大友義統・高橋統增・伊東祐丘・龍造寺政家、皆復舊領、差有增損。使政家族鍋島直茂攝國事。及政家夭、乃立直茂。耳川之事、尾藤知定敎秀長不卽救。因奪其讚岐、後以賜生駒親正。丹羽長重犯軍法。因奪其若狹、賜之淺野氏。削阿蘇大宮司邑、律彥山僧徒。大村氏私舍西蠻妖賊。奪其長崎邑、磔賊二十餘人于邑中、使鍋島氏監外國互市焉。禁天主敎、遂大修西海政令。

訓讀 六月、凱旋して太宰府に至り、盡く九州の質子を收め、大に功罪を論ず。島津氏をして、故土に因つて薩摩・大隅・日向を領せしめ、其の侵地を削り、肥後を佐佐成政に、筑前を小早川隆景に、豐前を黑田孝高・森勝信に、筑後を毛利秀包・立花宗茂に賜ふ。而して大友義統・高橋統增・伊東祐丘・龍造寺政家、皆舊領を復して差增損あり。政家の族、鍋島直茂をして國事を攝せしむ。政家の夭するに及び、乃ち直茂を立つ。耳川の事、

尾藤知定、秀長をして卽ち救はざらしむ。因つて其の讚岐を奪ひ、後に以て生駒親正に賜ふ。丹羽長重軍法を犯す。因つて其の若狹を奪ひ、之を淺野氏に賜ふ。阿蘇大宮司の邑を削り、彦山の僧徒を律す。大村氏、私に西蠻の妖賊を舍す。其の長崎の邑を奪ひ、賊二十餘人を邑中に磔し、鍋島氏をして外國の互市を監せしむ。天主教を禁じ、遂に大に西海の政令を修む。

通釋 六月、太宰府に凱旋し、九州の人質を全部收め納れ、大に功罪の評定をやつた。島津氏には、元の領地を變へずに薩摩・大隅・日向を領有させて、彼が侵した所は削つて終ひ、肥後を佐佐成政に、筑前を小早川隆景に、豐前を黑田孝高と森勝信に、筑後を毛利秀包と立花宗茂に與へた。大友義統・高橋統增・伊東祐兵・龍造寺政家達は皆舊領を取り戾したが、少しづゝ增したものも減らされたものもある。龍造寺の家は一族の鍋島直茂に國事を後見させた。政家が若死すると直茂にその後を嗣がせた。耳川の敗戰の際、尾藤知定は秀長をして卽坐に救援するやうな處置を取らせなかつた。その理由で、その領地の讚岐を取り上げ、後にそれを生駒親正に與へた。丹羽長重は軍法を犯した。それでその若狹を取り上げて、淺野氏に與へた。阿蘇大宮司の領地を減らし、彦山の僧徒は掟で以て束縛した。大村氏が祕密に西洋の妖術者を宿せしめた。そのかどによつて、その長崎の領地を奪つて、怪術者二十餘人をそこで磔にし、鍋島氏に外國貿易を監督せしめた。天主教を禁じ、遂に九州一圓の政治法令に大斧鉞を加へた。

語釋 耳川之事（南條元續の敗けた時のこと。）○西蠻妖賊（西洋の切支丹宗の教徒。）○天主教（キリスト教、ジエスイツト派。）

七月、復命于京師。天皇遣使郊勞之。八月、德川公自來賀戰捷。是歲、西海諸侯皆就

國。秀吉誡成政、善待士豪、勿擾國民。成政違敎、士民皆叛。踰年粗定。秀吉譲之賜死、以肥後分賜加藤清正・小西行長。清正爲主計頭、行長爲攝津守。行長卽彌九郎也。秀吉謂二人曰「他日將有以用汝也。」

訓讀　七月、京師に復命す。天皇使を遣はして之を郊勞せらる。八月、徳川公自ら來つて戰捷を賀す。是の歲、西海の諸侯皆國に就く。秀吉、成政を誡め、善く士豪を待し、國民を擾す勿らしむ。成政敎に違ひ、士民皆叛く。年を踰えて粗定る。秀吉之を譲めて死を賜ひ、肥後を以て加藤清正・小西行長に分賜す。清正主計頭と爲り、行長攝津守と爲る。行長は卽ち彌九郎なり。秀吉二人に謂つて曰く「他日將に以て汝を用ふる有らんとす」と。

通釋　七月、京都に報告に歸つて來た。天皇は使を差立てゝ郊外に於て勞らひ給うた。八月、徳川公家康が自らやつて來て戰勝を祝した。この年九州の諸侯は皆國入りをした。秀吉は成政を誡めて、土地の豪族を厚遇し、國人を落着けねばならぬと言つた。然るに成政はその敎に違ひ、士民が皆反いた。次の年になつてあら方鎭まつた。秀吉はその不都合を詰つて、自刄を命じ、肥後を加藤清正と小西行長とに分ち與へた。清正は主計頭と爲り、行長は攝津守と爲つた。行長といふのは例の彌九郎である（堺港の藥屋の子）。秀吉はこの二人に向つて曰ふには「後日お前達を使ふ折があるぞ」と。

語釋　他日云々（朝鮮征伐の兩先鋒のことを暗に斥す。）

十六年正月、秀吉遂奏請臨幸。時承大亂之後、典籍殘亡。乃令前田玄以與公卿雜議、用足利義滿・義敎故事。四月十四日、天皇幸聚樂第。關白秀吉率文武百官扈從。扈從者蓋新典也。遠近縱觀。父老或有流涕者。曰「吾儕聞有行幸之儀久矣。今得親覩之」。卽日、行享禮、使伶人奏五常・太平諸樂。明日、秀吉早盛服出、侍于御座之右、盡召天下牧伯、使列於前。內大臣信雄・大納言家康・大納言秀長・中納言秀次・左近衞中將秀家・右近衞少將利家・侍從元親・侍從義統以下、以次而進。盟曰「奉戴皇恩、竭力王事、莫敢或怠。皇家之邑、莫敢或侵。侵者相共詰責之、戒囑子孫、莫敢或渝。關白所令、事無大小、莫敢或不奉。所違斯盟者、六十六州神祇、大罰殛之、覆其家國、莫能享其祿」。明日、宴諸牧伯。天皇賜歌、關白以下皆賡之。車駕駐五日還宮。

訓讀 十六年正月、秀吉遂に奏して臨幸を請ふ。時に大亂の後を承けて、典籍殘亡す。乃ち前田玄以をして、公卿と雜議せしめ、足利義滿・義敎の故事を用ふ。四月十四日、天皇、聚樂の第に幸す。關白秀吉文武百官を率ゐて扈從す。扈從は蓋し新典なり。遠近縱觀す。父老或は流涕する者あり。曰く「吾が儕行幸の儀あるを聞くこと久し。今親しく之を覩るを得たり」と。卽日、享禮を行ひ、伶人をして、五常・太平の諸樂を奏せしむ。明

日、秀吉早に盛服して出で、御座の右に侍し、盡く天下の牧伯を召して、前に列せしむ。内大臣信雄・大納言家康・大納言秀長・中納言秀次・左近衛中將秀家・右近衛少將利家・侍從元親・侍從義統以下、次を以て進み、盟つて曰く「皇恩を奉戴し、力を王事に竭し、敢て怠る或る莫し。皇家の邑、敢て侵す或る莫し。使す者は相共に之を譴責し、子孫を戒囑し、敢て渝る或る莫し。關白の令する所、事大小と無く、敢て奉ぜざる或る莫し。斯の盟に違ふ所の者は、六十六州の神祇、大に之に罰殛し、其の家國を覆し、能く其の祿を享くる莫らしめん」と。明日、諸牧伯を宴す。天皇歌を賜ひ、關白以下、皆之に賡ぐ。車駕駐ること五日にして宮に還る。

【通釋】十六年正月、秀吉はいよ〳〵奏上して聚樂の第に御臨幸のことをお願ひ申した。當時は戰國大亂の直後で、典據とすべき書物は損はれたり亡くなつたりしてゐた。そこで前田玄以に公卿と樣々に相談させて、足利義滿・義教の故事に倣ふことにした。四月十四日、天皇は聚樂第に行幸せられた。關白秀吉は文武百官を率ゐて天子のお供をした。このやうなお供の式はこの時初めて行つた儀禮である。遠近の人民が皆思ひのまゝに見物をした。年寄り達の中に涙を流してゐるものもあつた。その者たちが曰ふには「己達は行幸の儀式といふものが有ることは聞いてゐた。しかし本當に見るのは今が始めてだ」と。お成りのその日に酒宴の儀を行ひ、樂人に五常樂や太平樂などを奏せしめた。翌日、秀吉は朝から盛裝して、御座の右に侍り、天下の大小諸侯を全部召し出して前に列ばせた。内大臣信雄・大納言家康・大納言秀長・中納言秀次・左近衛中將秀家・右近衛少將利家・侍從元親・侍從義統以下順次に進み出で盟つて申すには「皇恩を推し戴いて、王事に力をつくし、決して怠るやうなことは御座いません。皇室の御領分は決して侵すやうなことは致しません。もし侵すものがあれば互に責め正し、子孫に戒め置いて違へることは決して致させません。又關白の御命令は大小を論ぜず、決して反くことは御座い

ません。この盟に違ふ者があれば、日本六十六州の神々がその者に罰を與へ、その國を亡し、決して幸を受けることの出來ぬやうになされても異存は御座いません」と。その翌日諸侯を饗應した。天皇は御製の歌を賜り、關白以下皆之に和した。御車の駐らせらるゝこと五日で、還幸遊ばされた。

【語釋】義滿・義教故事（應永中、後小松天皇、義滿の邸に幸す。永享中、後花園天皇、義教の邸に幸せらる。）○五常・太平（樂曲の名。）○賡（續いて歌ふこと。一律の返歌、書經益稷に見ゆる語。）

秀吉以京師戸税、奉供御、以其戸租為上皇湯沐邑。以近江高島郡充廷臣采田。凡金帛珍貴之獻、前後無算。九月、諭毛利氏、割其出雲・伯耆、予族吉川廣家。廣家、元春子元長弟也。十月、大張茗燕于北野。十七年五月、復分金銀各三十六萬五千兩于文武百官。

【訓讀】秀吉京師の戸税を以て供御に奉じ、其の戸租を以て、上皇の湯沐の邑と爲す。近江の高島郡を以て廷臣の采田に充つ。凡そ金帛珍貴の獻、前後算なし。九月、毛利氏に諭し、其の出雲・伯耆を割いて族吉川廣家に予へしむ。廣家は元春の子元長の弟なり。十月、大に茗燕を北野に張る。十七年五月、復金銀各三十六萬五千兩を文武百官に分つ。

【通釋】秀吉は京都の家屋税を天皇の御膳部の御費用に差上げ、商業税その他を上皇の御沐浴の御料とした。近江高島郡を公卿等の知行の田とした。その他金帛珍貴の獻上品は、事の前、事の後、合せて數へ切れぬ程であつ

た。九月、毛利氏に話をつけ、その出雲と伯耆を割いて吉川廣家に與へさせた。廣家は元春の子元長の弟である。十月、北野に大茶會を開いた。十七年五月、再び金銀三十六萬五千兩を文武百官に分ち與へた。

是時、秀吉威令幾遍天下。東北豪傑、佐竹・里見・結城・那須・岩城・葦名・松前諸族、爭修使幣。秀吉禁其私鬪、使之朝覲。而獨北條氏政據關東八州、伊達政宗據陸奥・出羽、不肯降。天子幸聚樂之次月、秀吉遣富田知信・津田信季、赴相摸、諭氏政曰「吾子席五世之勢、擅有八州、而不修朝貢、不義。今天子新立。天下莫不嚮歸。吾子宜速入覲。」氏政與子氏直議、不敢堅對。八月、氏政使使來請曰「眞田昌幸取我沼田。請令昌幸返之。然後入朝。」諸將皆忿曰「氏政亡狀。請發兵討之。」秀吉曰「未也。」

【訓譯】是の時、秀吉の威令幾ど天下に遍し。東北の豪傑、佐竹・里見・結城・那須・岩城・葦名・松前の諸族、爭つて使幣を修む。秀吉其の私鬪を禁じ、之をして朝勤せしむ。而して獨り北條氏政關東八州に據り、伊達政宗、陸奥・出羽に據り、肯て降らず。天子聚樂に幸するの次月、秀吉、富田知信・津田信季を遣はし、相模に赴き、氏政を諭さしめて曰く「吾子五世の勢に席り、擅に八州を有して、朝貢を修めざるは不義なり。今、天子、新に立つ。天下嚮歸せざるは莫し。吾子、宜しく速に入覲すべし」と。氏政、子氏直と議し、敢て堅對せ

す。八月、氏政、使をして來り請はしめて曰く「眞田昌幸我が沼田を取る。請ふ、昌幸をして之を返さしめよ。然ろ後入朝せん」と。諸將皆怒つて曰く「氏政亡狀。請ふ、兵を發して之を討たん」と。秀吉曰く「未だし」と。

【通釋】この時秀吉の威光命令は、殆ど日本國中に行き渡つてゐた。東北の豪傑、佐竹・里見・結城・那須・岩城・葦名・松前の諸族は、我れ勝ちに使者贈物を遣はした。秀吉は彼等に勝手な戰爭を禁じ、入朝謁見させた。唯だ關八州に據る北條氏政と、陸奥・出羽に據る伊達政宗のみは降參しようとしなかつた。天子が聚樂第に行幸遊ばされた翌月、秀吉は富田知信と津田信季を相模にやつて、氏政に諭させて曰ふには「貴君は五代續いた勢を傘に着て勝手に八ケ國を領有し、その上入朝して貢物を奉らないのは不忠である。今天子は新に御即位なされた。天下歸服せぬものはない。貴君も速に入朝せらるゝが宜からう」と。氏政は、子の氏直と相談して、しかとした返事をしなかつた。八月、氏政は使をよこし、願つて來て曰ふには「眞田昌幸が我が沼田を取つて終つた。どうか昌幸をして返させて下さい。さうしたら入朝致しませう」と。諸將は皆憤つて曰ふには「氏政の無禮者め。是非共軍勢を出して征伐致したい」と。秀吉が曰ふには「いや／＼まだ早い」と。

【語釋】五世（長氏、氏綱、氏康、氏政、氏直。）○天子新立（天正十四年十一月、後陽成天皇御禪りを承け給ふ。）

是年七月、復使知信・信季就昌幸諭之。昌幸奉命、致沼田于北條氏。於是、二使遂徃小田原、趣其入朝曰「不朝則有罰」。氏政與其親族將領議曰「我與彼相距遼遠。彼何輒來。且彼特能服畿內西國耳。古稱、關八州可敵天下。且箱根天險也。彼果來乎、我

以八州勁兵、要諸箱根、彼何能爲。在昔平氏、發大軍來攻源氏、至富士川、聞鵝鴨起、遂恇怯而潰。關白亦如此爾。乃不禮使者。使者微聞其言、歸報秀吉。秀吉怒曰、「氏政以吾比平維盛邪。吾將示之我技倆也。」徳川公數勸氏政入朝。不肯。是歲、伊達政宗滅葦名氏、幷會津四郡、滅二階堂氏、幷仙道七郡。佐竹・岩城諸族討之皆敗。秀吉使使責讓政宗、命其入朝。政宗亦不肯。

訓讀 是の年七月、復知信・信季をして、昌幸に就いて之を諭さしむ。昌幸命を奉じ、沼田を北條氏に致す。是に於て、二使遂に小田原に往き、其の入朝を趣して曰く「朝せずんば則ち罰あらん」と。氏政、其の親族將領と議して曰く「我れと彼れと相距ること遼遠。彼れ何ぞ輒ち來らん。且つ彼れ特に能く畿内西國を服するのみ。古稱す、關八州は天下に敵すべしと。且つ箱根は天險なり。彼れ果して來らんか、我れ八州の勁兵を以て、諸を箱根に要せば、彼れ何ぞ能く爲さん。在昔平氏、大軍を發し來つて源氏を攻む。富士川に至り、鵝鴨の起るを聞いて、遂に恇怯して潰ゆ。關白も亦此くの如きのみ」と。乃ち使者を禮せず。使者微に其の言を聞き、歸つて秀吉に報ず。秀吉怒つて曰く「氏政、吾を以て平維盛に比するか。吾れ將に之に我が技倆を示さんとす」と。徳川公數氏政に入朝を勸む。肯んぜず。是の歲、伊達政宗、葦名氏を滅して、會津四郡を幷せ、二階堂氏を滅して、仙道七郡を幷す。佐竹・岩城の諸族之を討ちて皆敗る。秀吉、使をして政宗を責讓し、其の入朝を命ぜし

む。政宗も亦肯んぜず。

【通釋】この年七月、更に知信と信季に昌幸の所に行つて、沼田を返してやれと話させた。昌幸は命令に從つて北條氏に返した。そこで二人の使はその足で小田原に行き、入朝を催促して曰ふには「入朝しなければ罰を受けられるであらう」と。氏政は、親族や諸將と相談して曰ふには「我が領地は秀吉の居る所から非常に遠い。やすやすと來ることは出來ない。それに奴は大きなことを言つてゐるが、なに唯だ畿内や西國の弱蟲共を降參させただけなのだ。古から關八州は天下を相手にすることが出來ると言はれてゐる。且つ又、箱根は天然の要害である。奴が本當に來たとて、俺が八州の諸兵を率ゐて箱根に待ち受けたら、奴らに何が出來ようか。昔平氏が大軍を發して源氏を攻めに來た。富士川で家鴨や鴨の飛び起つのを聞いて震え上つて逃げ出して終つた。關白だつてこんなものだらうさ」と。それで使者を禮遇しなかつた。使者はうす／＼その言葉を聞き、歸つてから秀吉に報告した。秀吉は立腹して曰ふには「氏政は余を平維盛扱ひにしたか。ようし余の腕前を奴に見せてやる」と。德川公家康は度々氏政に入朝を勸めた。併し承知しなかつた。此の年、伊達政宗は葦名氏を滅して會津の四郡を併合し、二階堂氏を亡して仙道の七郡を併呑した。佐竹や岩城の諸族は彼を攻めたが皆敗けた。秀吉は使をやつて政宗を詰り入朝を命じた。政宗も肯かなかつた。

【語釋】在昔平氏云々（維盛の頼朝を伐つたのを斥す。）○會津四郡（會津、耶麻、大沼、河沼。）○仙道七郡（白川、石川、磐瀬、安達、安積、伊達、信夫。）

十月、眞田昌幸來告曰「沼田有那胡桃城。爲臣墳墓之地。北條氏將守沼田者、欲遂取之。臣曰、殿下命致沼田。未聞致那胡桃也。彼不聽。遂攻取之。敢告」。秀吉大怒、遂奏

請討氏政。氏政使者石卷康昌在京師。懼陳謝之。秀吉不聽。押送康昌相摸、遣書氏政、絕之曰「秀吉起微賤、爲先右府所拔擢、攻城野戰、立功弓馬之間。既而遇變故、提兵東上、誅夷逆臣、以答右府恩眷。遂忝太政之任、佐天子以定亂逆。叛者伐、服者撫。七道豪傑、無不從我所麾。汝氏政負險恃力、敢不修朝貢、狡詐貪婪、輕蔑天子之命。夫天地之際、一有違詔勅者、而漏於誅討、秀吉恥之。修乃城池、勵乃甲兵。明年、吾將操王節、率諸軍、以正汝氏政之罪。」書至相摸。氏政不以爲意。曰「彼欲以虛聲脅我。彼誠來、大舉則少食。小舉則少力。是易與耳」。

訓讀 十月、眞田昌幸來り告げて曰く「沼田に那胡桃城有り。臣が墳墓の地たり。北條氏の將沼田を守る者、遂に之を取らんと欲す。臣曰く、殿下命じて沼田を致さしむ。未だ那胡桃を致すを聞かずと。彼れ聽かず。遂に之を攻め取る。敢て告ぐ」と。秀吉、大に怒り、遂に奏して氏政を討たんと請ふ。氏政の使者石卷康昌京師に在り。懼れて之を陳謝す。秀吉聽かず。康昌を相摸に押送し、書を氏政に遺り、之と絕ちて曰く「秀吉微賤より起り、先右府の拔擢する所と爲り、攻城野戰、功を弓馬の間に立つ。既にして變故に遇ひ、兵を提げて東上し、逆臣を誅夷して、以て右府の恩眷に答へ、遂に太政の任を忝くし、天子を佐けて以て亂逆を定む。叛する者は伐

ち服する者は撫す。七道の豪傑、我が麾く所に從はざるは無し。汝氏政、險を負み力を恃み、敢て朝貢を修めず。狡詐貪婪、天子の命を輕蔑す。夫れ天地の際、一も詔勅に違ふ者ありて、而して誅討に漏るゝは、秀吉之を恥づ。乃が城池を修め、乃が甲兵を勵ませ。明年、我れ將に王節を操り、諸軍を率ゐて以て汝氏政の罪を正さんとす」と。書、相模に至る。氏政以て意と爲さず。曰く「彼れ虛聲を以て我を脅さんと欲す。彼れ誠に來るとも、大擧すれば則ち食少し。小擧すれば則ち力少し。是れ與し易きのみ」と。

【通譯】十月、眞田昌幸が來て知らせて曰ふには「沼田に那胡桃城といふのが有ります。これは私の先祖代々の墓所であります。然るに沼田を守る北條方の者は之をも取らうと致します。そこで私は、關白殿下は沼田を返せと命ぜられた。那胡桃もやれよとは仰せられなかつた、と申しました。併し、向ふでは聞き入れませぬ。とうノ＼攻め取つて終ひました。御報告申し上げます」と。秀吉は大に怒り、遂に氏政討伐のことを奏請した。氏政の使者石卷康昌といふものが京都に居つた。恐れてその事件をあやまつた。併し秀吉は聽き入れなかつた。康昌を相模に護送し、氏政に手紙をやつて國交斷絶を申し渡して曰ふには「秀吉は微賤の身分から起つて亡き右府殿に拔擢せられ、攻城や野戰に武功を立てた。さうしてゐる中に明智謀叛の變事に遇つたので、軍勢をつれて東上し、逆臣明智光秀を誅して亂を平らげ、以て先殿樣の御恩に報い、その後忝くも太政大臣に任ぜられ、天子樣をお輔けして亂臣逆賊を平定して來た。叛するものは飽くまでも討つが、降參する者はいたはるやうにしてゐる。それが爲め全國七道の豪傑にして、我が指揮に從はぬ者は居ない。氏政、貴樣は要害の地をたのみにし、力にうぬぼれて、何んとしても入朝して貢物を奉ることをせぬ。わる賢く慾深く、天子の命令を無いがしろにして居る。體余は、天地の中で、一人でも詔に背き乍ら誅罰を免れてゐるやうな者があれば誠に恥づかしく思

ふ。貴様の城や堀をよく直し、貴様の軍兵をよく練つて置け。來年、余は節刀を賜はつて諸軍の總大將となり、貴様の罪を糾明してやる」と。この手紙が相摸に着いた。氏政は別に氣にもしなかつた。曰ふには「彼は懸聲だけで俺を威さうとしてゐる。本當に來たところが、大軍を率ゐて來れば糧食が足りぬ。小勢で來ればその力は恐るゝに足らぬ。心配は要らぬ、いつでも相手になつてやる」と。

秀吉遂令駿河・越後以西四十五國、發兵以明年三月會京師。其遠京師者、便道直赴關東。命長束正家、運粟二十萬石至駿河。又出金一萬枚、糴於海道諸國。時海路久絶、民皆憚風濤之險曰「海龍王爲祟」。秀吉笑曰「吾受王命討不庭。何物龍王、敢得沮我也」。作檄授之、投海而進。使水軍三將與長曾我部元親、護糧船以東。

訓讀 秀吉遂に駿河・越後以西の四十五國に令し、兵を發して明年三月を以て京師に會せしむ。其の京師に遠きものは、便道より直に關東に赴かしむ。長束正家に命じ粟二十萬石を運びて駿河に至らしむ。又金一萬枚を出だし、海道諸國に糴す。時に海路久しく絶え、民皆風濤の險を憚りて曰く「海龍王祟を爲す」と。秀吉笑つて曰く「吾れ王命を受けて不庭を討つ。何物の龍王ぞ、敢て我を沮むを得ん」と。檄を作りて之を授け、海に投じて進ましむ。水軍の三將と長曾我部元親とをして、糧船を護して以て東せしむ。

通釋 秀吉はいよく、駿河・越後以西の四十五ケ國に命令し、軍隊を出して明年三月に京都に集らせた。京

都から離れてゐる國は、都合の好い道から眞直關東に向はせた。長束正家に命じて、もみごめ二十萬石を駿河に運ばせた。又小判一萬枚を出して、東海道の諸國で米を買ひ上げさせた。當時海路は久しく絶えてゐたので、「海龍王が祟をする」といつて波風の危險を恐れてゐた。秀吉は笑つて曰ふには「余は君命を受けて入朝せぬ者を討伐するのである。龍王が何物であつても、この余を邪魔することが出來るものか」と。さとしぶみを書き與へ、それを海に投げ込んで進ませた。水軍の三將と長曾我部元親とをして、兵糧船を護つて東に向はせた。

語釋 海龍王（海神の名。）○水軍三將（前出、嘉明等。）

十二月、徳川公來請約束。氏直因公謝罪、請入朝。秀吉弗許。於是、會徳川公以下將帥、開關東地圖、指畫部署。眞田昌幸素與徳川公惡。時在下座、不得窺圖。秀吉呼前之曰「吾以家康爲海道先鋒、以汝爲山道先鋒。」昌幸感喜、退而謂人曰「得殿下一言、多於得百萬封矣。」十八年正月、徳川公送其嗣子爲質。秀吉賜之姓羽柴氏、名秀忠、遣歸之。曰「卿以其與氏直有姻焉乎。吾何疑卿哉。」徳川公乃空海道諸城、除道供帳以待。二月、秀吉召毛利輝元守京師、弟秀長守大阪、令徳川・北畠・前田・上杉諸將以其兵先發。三月朔、自戎服入朝、受節刀于陛、拜辭、起出闕上馬、率騎卒十七萬而東。

部伍整肅、鎧仗鮮明、使士民縱觀之。

訓譯 十二月、徳川公來つて約束を請ふ。氏直、公に因つて罪を謝し、入朝を請ふ。秀吉許さず。是に於て、徳川公以下の將帥を會し、關東の地圖を開いて指畫部署す。眞田昌幸、素より徳川公と惡し。時に下座に在り、圖を窺ふを得ず。秀吉呼んで之を前めて曰く「吾れ家康を以て海道の先鋒と爲し、汝を以て山道の先鋒と爲す」と。昌幸感喜し、退いて人に謂つて曰く「殿下の一言を得たるは、百萬の封を得るより多る」と。十八年正月、徳川公、其の嗣子を送りて質と爲す。秀吉之に姓を羽柴氏と賜ひ、秀忠と名づけて、之を遣歸す。曰く「卿其の氏直と姻あるを以てか。吾れ何ぞ卿を疑はんや」と。徳川公乃ち海道の諸城を空しうし、道を除し供帳して以て待つ。二月、秀吉、毛利輝元を召して京師を守らしめ、弟秀長に大阪を守らしめ、徳川・北畠・前田・上杉の諸將をして、其の兵を以て先づ發せしむ。三月朔、自ら戎服入朝し、節刀を陛に受け、拜辭し、起つて闕を出でて馬に上り、騎卒十七萬を率ゐて東す。部伍整肅、鎧仗鮮明。士民をして之を縱觀せしむ。

通釋 十二月、徳川公家康がやつて來て、色々の取り定めを求めた。氏直は（それを聞き）公を通じて罪を詫び、入朝致し度いと申し出た。秀吉は許さなかつた。そして家康以下の大將達を集め、關東の地圖を開いて、指先でさし乍ら部署を定めた。眞田昌幸は元から家康と仲が惡かつた。この時下座の方に居て、地圖を見ることが出來なかつた。所が、秀吉は彼を呼び進めて曰ふには「余は家康を海道の先鋒となし、お前を山道の先鋒にしてやる」と。昌幸は肝に銘じて嬉しく思ひ、退出してから人に向つて曰ふには「殿下にこの言葉をかけて戴いたのは、百萬石の領地を貰ふよりも有難かつた」と。十八年正月、家康は繼嗣を人質によこした。秀吉は羽柴氏の姓

を與へ、秀忠と名をつけて送り返した。そして曰ふには、貴公は氏直と縁組をされてゐるのを氣にされてか。余は何うして貴公を疑ふやうなことをしようや」と。家康はその言を聞いて感激し、海道の諸城は皆人拂ひをなし、道を掃除し、歡迎の宴を開くために色々の設備をなし幕を張つたりして待つた。二月、秀吉は毛利輝元を呼んで京都を守らせ、弟秀長に大阪を守らせ、徳川・北畠・前田・上杉の諸將に、夫々軍勢を率ゐて先發せしめた。三月一日、自身軍服をつけて參内し、節刀を階段の下に頂戴して、お暇乞ひをなし、身を起し宮門を出て馬に跨り、そのまゝ歩騎十七萬人を率ゐて東に向つた。隊伍よく揃つて緊張し、甲冑武器は色鮮かな新しき品であつた。その花々しい有樣を士民に自由に見物させた。

語釋 海道諸城（東海道筋の諸城を皆明け渡したのである。）

氏政盡召八州城主、集于小田原、遣親信將帥、拒箱根諸城、以兵數萬守其後。二十七日、秀吉至沼津。明日、自上山候視敵城寨、即夜下令、令秀次以五萬攻山中、信雄以三萬攻韮山、而徳川公以二萬五千直蹈箱根。明日、諸將蓐食並發。秀次以中村一氏爲先鋒、令徙陣近城。城上銃丸雨注。一柳直末死之。一氏屬兵攻破其郭、斬敵將間宮好高、進薄内城。其騎士渡部了攀堞而上。秀次乃麾軍齊登、走城將北條氏勝。信雄亦破韮山郭。徳川公陷三城、至酒勾。戍兵皆潰。

【訓讀】氏政盡く八州の城主を召して、小田原に集め、親信の將帥を遣はして、箱根の諸城を拒ぎ、兵數萬を以て其の後を守る。二十七日、秀吉沼津に至る。明日、自ら山に上りて、敵の城寨を候視し、即夜令を下して、秀次をして五萬を以て山中を攻め、信雄をして三萬を以て韮山を攻め、而して德川公をして二萬五千を以て直に箱根を踰えしむ。明日、諸將蓐食して竝に發す。秀次、中村一氏を以て先鋒と爲し、陣を徙して城に近づかしむ。城上より銃丸雨注す。一柳直末、之に死す。一氏衆を勵して攻めて其の郛を破り、敵將間宮好高を斬り、進んで內城に薄る。其の騎士渡部了、堞を攀ぢて上る。秀次乃ち軍を麾いて齊しく登らしめ、城將北條氏勝を走らす。信雄も亦韮山の郛を破る。德川公三城を陷れ、酒匂に至る。戍兵皆潰ゆ。

【通釋】氏政は八州の城主を全部小田原に召し集め、特に近親で信用のおける大將達をして箱根の諸城を守らせ、兵數萬を指揮してその背後を守ることにした。二十七日、秀吉は沼津に到着した。翌日、自ら山に上つて敵の城や寨の配置を偵察し、その晩すぐ命令を下し秀次は五萬人で山中を攻め、信雄は三萬人で韮山を攻め、家康は二萬五千を率ゐて眞直ぐ箱根を越える樣に言ひ渡した。翌日これら諸將は朝まだき寢床の上で食事を取つて一樣に出發した。秀次は中村一氏を先鋒にし、陣を城の近くに移させた。城の上からは鐵砲玉を雨と注いで射つた。一柳直末はそれに中つて死んだ。一氏は部下を勵まして外城を破り、敵將の間宮好高を斬り、更に進んで內城に迫つた。騎馬武者渡部了が城の上の女牆を攀ぢ上つた。秀次は軍を指圖して一齊に登らせ、城將の北條氏勝を走らせた。信雄も韮山の外城を破つた。德川家康は三城を陷れて酒匂まで進んだ。酒匂の守備兵は皆逃げ崩れた。

【語釋】山中・韮山（伊豆）〇三城（新莊、足柄、鷹巢。）

四月、秀吉率諸軍抵小田原、建牙于石垣山、夜令萬卒築城焉、糊紙于壁、望之如壘。城兵驚以爲神。秀吉携德川公登城樓、下視曰「關東八州、在我目中、不日取以予卿耳。」德川公拜曰「幸甚。」秀吉附其耳語曰「卿亦居小田原乎。」曰「然。」秀吉曰「不可。我嘗觀地圖、自此迤東可二十里有地、曰江戶、襟帶河海、地濶土肥。卿宜居此。」德川公曰「謹奉教。」於是、令諸軍圍城數重。水軍將士、又破沿海諸城而來會焉。

訓讀 四月、秀吉諸軍を率ゐて小田原に抵り、牙を石垣山に建て、夜、萬卒に令して城を築き、紙を壁に糊す。之を望むに壘の如し。城兵驚いて以て神と爲す。秀吉、德川公を携へて城樓に登り、下視して曰く「關東八州、我が目中にあり。不日に取つて以て卿に予へんのみ」と。德川公拜して曰く「幸甚だし」と。秀吉其の耳に附き語つて曰く「卿も亦、小田原に居るか」と。曰く「然り」と。秀吉曰く「不可なり。我れ嘗て地圖を觀るに、此より迤に東二十里可りに地有り、江戶と曰ふ。河海を襟帶し、地濶く土肥ゆ。卿、宜しく此に居るべし」と。德川公曰く「謹んで教を奉ぜん」と。是に於て、諸軍に令して城を圍むこと數重。水軍の將士、又沿海の諸城を破つて來り會す。

通釋 四月、秀吉は諸軍を率ゐて小田原に行き、總大將の旗を石垣山に建て、夜、一萬人の人夫に命じて、城を築き、壁に紙を張らせた。遠方から見ると丁度白土を塗つた様に見えた。敵の城兵は吃驚して神の仕業かと思

つた。秀吉は家康を伴つて城の櫓に登り、下の方を見渡し乍ら曰ふには「關東八州は私の目の中に入つてゐる。その中に取つたら君に上げよう」と。家康はお辭儀をして曰ふには「有難い仕合せです」と。秀吉は家康の耳に口をつけて話して曰ふには「貴公も小田原に居る積りか」と。家康は曰ふには「さうする積りです」と。秀吉が曰ふのに「それはいけない。私は以前地圖を見た所、こゝから斜東の方二十里許りに江戸といふ土地がある。河が貫き海に沿うてゐて、場所も廣く地味が肥えてゐる。貴公はこゝに居られるが宜しい」と。家康が曰ふには「ではさういふことに致しませう」と。さて諸軍をして小田原城を幾重にも圍ませた。水軍の將士も、沿海の諸城を破つて集つて來た。

語釋 石垣山（小田原の西岸。）○沿海諸城（伊豆相模の沿岸諸城、田子、下田等の城。）

上杉景勝・前田利家將北陸兵三萬、以眞田昌幸爲先鋒、入上野。大導寺政繁以松枝降、導入武藏、下七城、攻鉢形。秀吉遣淺野彈正少弼・木村常陸介助之。二將別徇武藏、攻岩築。淺野氏嗣子幸長稱左京大夫。甫十五、先登遂拔之。二將遂徇上野、至二總・安房、一月下六十餘城。而小田原固守不下。有流言、曰「徳川・織田通款城中。」衆情疑懼。秀吉卽從近臣數人、與信雄俱飮于徳川氏營、明日、與徳川公俱飮于織田氏營。衆疑卽釋。

【訓讀】上杉景勝・前田利家、北陸の兵三萬に將として、眞田昌幸を以て先鋒と爲して、上野に入る。大導寺政繁、松枝を以て降り、導いて武藏に入り、七城を下し、鉢形を攻む。秀吉、淺野彈正少弼・木村常陸介を遣はして之を助けしむ。二將別に武藏を徇へ、岩築を攻む。淺野氏の嗣子幸長、左京大夫と稱す。甫めて十五、先登して遂に之を拔く。二將遂に上野を徇へ二總・安房に至り、一月に六十餘城を下す。而して小田原固く守りて下らず。流言有り、曰く「德川・織田、款を城中に通ず」と。衆情疑懼す。秀吉卽ち近臣數人を從へ、信雄と俱に德川公の營に飲み、明日、德川公と俱に織田氏の營に飲む。衆疑卽ち釋く。

【通釋】上杉景勝と前田利家は北陸の兵三萬人を率ゐ、眞田昌幸を先鋒として上野に入つた。大導寺政繁は松枝を擧て降服したので、それを道案内として武藏に入り、七城を下し、鉢形を攻めた。秀吉は淺野彈正少弼と木村常陸介をやつて援助させた。この二將は別に武藏を觸れ下し、岩築を攻めた。淺野氏の嗣子幸長は左京大夫と名乘つてゐた。年漸く十五で先登して、とう〳〵この城を攻め落した。それからこの二人は上野をも觸れ下し、上總・下總・安房に入り込み、一月に六十餘城を下した。併し小田原は守りが固くて降らぬ。その中に噂が立つて曰ふには「德川と織田が城中に内通してゐる」と。多勢の者は心に疑ひ懼れた。秀吉は早速、近臣數人だけを從へて、信雄と一緒に德川氏の陣屋に酒宴をし、翌日は德川公家康と一緒に織田氏の陣で酒盛をした。皆の者の疑は忽ちに解けて終つた。

【語釋】鉢形・岩築（武藏）〇左京大夫（これも幸長と書くのを諱んで、以後大夫と記す爲めに揭げらる。）

遂令諸軍休戰、築長圍更番游息、徵海道妓樂、置酒高會。秀吉與德川公以下造歌

詞被之、謹呼連晝夜以示據久之意。城兵大困。徳川公初度大衆久屯、穀價必騰、私命其吏多蓄糧餉。已而長束正家掌漕轉、米粟狼戾。乃服秀吉善用人也。當是時、豐臣氏軍環城而陣者幾三十萬。山陵林麓、莫非兵者。關以東望風降附。相馬・秋田・南部・津輕諸族、或執謁軍門、或使使納幣、項背相望。

訓讀 遂に諸軍に令して戰を休め、長圍を築いて更番に游息し、海道の妓樂を徵し、酒を置いて高會す。秀吉、徳川公以下と歌詞を造りて之に被らせ、謹呼晝夜を連ねて以て據久の意を示す。城兵大に困しむ。徳川公初め大衆久しく屯し、穀價必ず騰るを度り、私に其の吏に命じて多く糧餉を蓄へしむ。已にして長束正家漕轉を掌り、米粟狼戾す。乃ち秀吉の善く人を用ふるに服す。是の時に當り、豐臣氏の軍、城を環りて陣する者幾ど三十萬。山陵林麓、兵に非ざる者莫し。關以東、風を望みて降附す。相馬・秋田・南部・津輕の諸族、或は謁を軍門に執り、或は使をして幣を納れしめ、項背相望む。

通釋 そしてとう／＼、諸軍に命令して戰を中止し、長圍ひを造つて交代に休むことにし、海道の藝妓を呼んで酒宴を張つた。秀吉は徳川公家康以下の諸將と、歌の文句を作つて樂器の調に合せ、大騷ぎを晝夜打つ通しにやつて、腰を据ゑて頑張る決心を示した。城兵はそれを見て大に弱つた。家康は初めから、大軍が長く駐屯する爲め穀物の値段がきつと上ると考へて、人には言はずに役人に多量の兵糧を蓄へておかせた。その中に長束正家が運送の方を手廻しゝて穀類が有餘るやうになつた。徳川公は秀吉が人の使ひ方に上手なのに敬服した。その當

時、豐臣方の軍隊で城のまはりに陣を構へてゐる者は凡そ三十萬人程であつた。山でも岡でも林でも麓でも軍隊の駐屯して居らぬ所はなかつた。箱根の關から東の者共は皆この盛んな模樣に打たれて降參した。相馬・秋田・南部・津輕の諸族は、或は陣屋にお目通りを乞ひに來るものもあるし、又は使に獻上品を持ち込ませて來るものもあつて、それ等の往來が絶えぬ有樣であつた。

語釋 項背相望（お互に背中とうなじとを見顧ることよりして、往來の頻繁にして絶えぬことをいふ。）

伊達政宗使人覘形勢、還報。則大懼、乃肯修使幣、就德川氏乞降。德川公戒使者曰「不可不亟來謁。」六月、政宗與百餘騎入下野。路塞不得通。還由越後・信濃間行至箱根、請謁秀吉。秀吉問謁者曰「政宗狀貌如何。」曰「齡可二十歲。眇而被髮、奇偉甚。」秀吉不許輒見。使人詰責之曰「吾受王命、經略天下。雖遐方絶域之人、莫不來歸。汝屈强東北、擁兵數萬、未嘗發一介之使。葦名義廣歸心王室。而汝擅攻之。是何故。」

訓讀 伊達政宗、人をして形勢を覘はしむ。還り報ず。則ち大に懼れ、乃ち肯て使幣を修め、德川氏に就いて降を乞ふ。德川公使者を戒めて曰く「亟に來り謁せざる可からず」と。六月、政宗百餘騎と下野に入る。路塞つて通ずるを得ず。還つて越後・信濃より間行して箱根に至り、秀吉に謁せんと請ふ。秀吉、謁者に問うて曰く「政宗の狀貌如何」と。曰く「齡二十歲可り。眇にして髮を被り、奇偉甚だし」と。秀吉輒く見るを許さず。人

をして之を詰責せしめて曰く「吾れ王命を受けて、天下を經略す。遐方絶域の人と雖も來歸せざるは莫し。汝東北に屈強し、兵數萬を擁して未だ嘗て一介の使を發せず。葦名義廣、心を王室に歸す。而るに汝、擅に之を攻む。是れ何の故ぞ」と。

通釋 伊達政宗は人をやつて樣子を見させた。その者が歸つて報告をした。政宗は非常に恐怖を感じ、澁々使者幣物を整へて德川氏を通して降を乞うた。德川公は使者を戒めて曰ふには「早速本人が拜謁に來ねばならん」と。六月、政宗は百餘騎をつれて下野に入つた。路が塞つてゐて通ることができない。戻つて越後・信濃の方から人目に付かぬやうに旅して箱根に到着し、秀吉に拜謁を願ひ出た。秀吉は取り次ぎ役に問うて曰ふには「政宗の顏付きや身體付きはどんなか」と。答へて曰ふには「年は二十歲ばかりです。片目で散らし髮をしてをつて、實に堂々としてをります」と。秀吉はたやすく目通りさせることを許さなかつた。人に詰責させて曰ふには「余は天子の命を受けて、天下を經營攻略する者である。いかなる遠方邊地の者でも降參して來ぬ者はない。お前は東北に頑張つて數萬の軍隊をかゝへ、未だかつて一人の使者をもよこしたことがない。葦名義廣は皇室に歸服したものである。それを汝勝手に攻めた。一體如何なる理由であるか」と。

政宗答曰「義廣納臣之叛將、結佐竹・岩城以圖滅臣。臣欲討二本松氏以復父仇。又爲義廣所距。故臣日夜攻擊、終得克之。臣在敵中不知四方事。及殿下東伐、然後知天下有所歸也。是以來謁」。秀吉又使言之曰「汝之所陳果無僞也、則盡獻所侵會津・

仙道之地耳。不則亟歸汝國、徐修守備、吾討滅北條氏、然後見汝於戎馬之間也。」政宗曰「臣生死唯殿下之令。況邑土乎。」致其侵地、乃入見。

【訓讀】政宗答へて曰く「義廣、臣の叛將を納れ、佐竹・岩城に結びて以て臣を滅さんと圖る。臣、二本松氏を討つて以て父の仇を復せんと欲す。又義廣の距ぐ所と爲る。故に臣日夜攻撃し、終に之に克つを得たり。臣、敵中に在りて四方の事を知らず、殿下の東伐に及び、然る後天下の歸する所あるを知る。是を以て來り謁す」と。秀吉、又之に言はしめて曰く「汝の陳ずる所果して僞なくんば、則ち盡く侵す所の會津・仙道の地を獻ずるのみ。不らずんば則ち亟に汝の國に歸り、徐に守備を修めよ。吾れ北條氏を討滅して、然る後に汝を戎馬の間に見ん」と。政宗曰く「臣の生死は唯殿下の令のまゝ。況や邑土をや」と、其侵地を致す。乃ち入りて見ゆ。

【通釋】政宗は答へて曰ふには「義廣は私の反いた大將を匿くまひ、佐竹・岩城と結んで私を亡ぼさうと企てました、又私は二本松氏を討つて父の仇を返さうと思ひました。所が義廣に悉つかり邪魔をされました。それ故私は日夜之を攻めてとう／＼打ち敗ることが出來ました。かく私は敵に取り圍まれてゐて外部のことを知りませんでした。殿下の東征遊ばされることによつて漸く天下は何處に歸するかといふことを覺つたわけであります。それでかく拜謁に罷り出でました」と。秀吉は又言はせるには「お前の述べることにもしも僞が無いならば、お前の侵した會津・仙道の地を全部獻上致せ。それがいやならば直ぐ歸國の上、ゆつくり守備を整へろ。余は北條を亡ぼしてから、お前と戰場で會はう」と。政宗が曰ふには「臣の生死はひとへに殿下の命のまゝであります。まして領土などなほ更で御座います」と。自分の侵し取つた土地を獻上した。そこで拜謁することにな

つた。

語釋 叛將（大内重綱。）○父仇（政宗の父は二本松義繼の爲めに殺された。）

秀吉便服而坐、慰勞之問曰「卿在陸奥幾戰。」曰「三十餘戰。」秀吉曰「是村巷小鬭耳。意未知部勒大兵之法也。」因起、引政宗而出下臨廣壑。秀吉在前指示曰「彼畿內軍也。彼坂以西軍也。彼海道軍也。」政宗唯唯、莫敢仰視。既罷遣歸。諸將交勸留之不遣。曰「遣之、是猶縱虎於野已。」秀吉哂曰「吾不用寸兵而取五十四郡。非汝輩所知也。」政宗退謂人曰「關白天威也。」遂去之國。

訓讀 秀吉便服して坐し、之を慰勞して、問うて曰く「卿陸奥に在りて幾たび戰ふ」と。曰く「三十餘戰」と。秀吉曰く「是れ村巷の小鬭のみ。意ふに未だ大兵を部勒するの法を知らざらん」と。因つて起ち、政宗を引き出で、廣壑を下臨す。秀吉前に在りて指示して曰く「彼は畿內の軍なり。彼は坂以西の軍なり。彼は海道の軍なり」と。政宗、唯唯敢て仰ぎ視る莫し。既にして罷めて遣歸す。諸將、交〻之を留めて遣らざるを勸む。曰く、「之を遣るは、是れ猶ほ虎を野に縱つがごときのみ」と。秀吉哂つて曰く「吾れ寸兵を用ひずして五十四郡を取る。汝が輩の知る所に非ざるなり」と。政宗退いて人に謂つて曰く「關白は天威なり」と。遂に去つて國に之く。

通釋 秀吉はふだん着のまゝで坐つてゐて、政宗を勞つてから尋ねて曰ふには「貴公は陸奥にをつて幾度戰を

されたか」と。「三十餘戰で御座います」と答へた。又曰ふには「それは村内の小喧嘩のやうなものであらう。多分まだ大軍を部署する方法は御存知あるまい」と。そこで起ち上つて政宗を外へ連れて出て、廣い平野を見下した。秀吉は政宗の前に立つて指さして曰ふには「あれは畿内の軍隊だ。あれは大阪以西の軍隊だ。あれは海道の軍隊だ。」と。政宗ははい／＼と言ふのみで顔を上げることもできなかつた。兎角して事が濟むと彼を歸してやつた。諸將は交る／＼彼を引き留めておくことを勸めた。曰ふには「そんなことを爲さるのは虎を野に放すやうなものです」と。秀吉は笑つて曰ふには「余は一人の兵をも使はないで五十四郡を取つた。お前達の知つたことではない」と。政宗は退出して人に向つて曰ふには「關白は自然に備つた御威光で恐れ入つた」と、そのまゝそこを去つて國に歸つた。

石田三成・大谷吉隆・長束正家等、於是攻降館林、遂攻忍城。城將成田長康在小田原、其兵留守不下。秀吉令彈正少弼父子助攻、終降之。景勝・利家亦降鉢形以下諸城、幷降附五萬人來謁。秀吉不甚賞。二人頗嗛之。秀吉謂近臣曰「二人非無功。然降輒受之。不足稱勤勞。或降或屠、恩威並行、然後可賞耳。」二人聞之復發、屠八王寺城、還效首級。秀吉乃賞之。

訓讀 石田三成・大谷吉隆・長束正家等、是に於て館林を攻め降し、遂に忍城を攻む。城將成田長康小田原に

在り。其の兵、留守して下らず。秀吉、彈正少弼父子をして助け攻めしめて終に之を降す。景勝・利家も亦鉢形以下の諸城を降し、降附五萬人を并せて來り謁す。秀吉甚だしく賞せず。二人頗す之に嗛らず。秀吉近臣に謂つて曰く「二人、功無きに非ず。然れども降つて輒ち之を受く。勤勞と稱するに足らず。或は降し或は屠り、恩威竝び行ひて、然る後に賞すべきのみ」と。二人之を聞いて復發し、八王寺城を屠り、還つて首級を效す。秀吉乃ち之を賞す。

通釋　それから石田三成・大谷吉隆・長束正家等は館林を攻め下し、遂に忍城を攻めた。忍の城將の成田長康は小田原に居た。それで部下の者が留守を守つて中々下らなかつた。秀吉は彈正少弼父子に助太刀させてとうとう陷落させた。景勝・利家も鉢形以下の諸城を降し、降參した五萬人を合せて拜謁に來た。秀吉は大して賞めもしなかつた。二人は頗る不滿足に思つた。秀吉は近臣に向つて曰ふには「二人は功が無いわけではない。併し降參したのをその儘味方に付けたのである。それでは骨折とは言へない。降すこともあり、攻め殺すこともあり、恩と威とを兩方行つてこそ賞に價するのだ」と。二人はそれを聞いて又もや出發し、八王寺城を攻め毀ち討ち、取つた首を持つて歸つた。秀吉はそれを見て二人を賞めた。

於是、八州諸城大半皆破。而其將士在小田原城內。我兵虜其父母妻子視之。將士逃降相踵。我侍史山中某與成田長康善。秀吉命陰以書招之。長康乃送款。秀吉使德川公以其降書遺氏直曰「子之將帥、皆有貳心。事已危迫。子盍早自爲計」。氏直與

氏政議、召長康不至。乃環柵長康營、置兵監護。自是城中人人相疑。秀吉遣黑田孝高・羽柴勝雅、入城、見氏政父子、說以禍福。氏政不肯。七月、氏直遂出、就德川氏營乞降。德川氏避嫌不敢通。使之因勝雅。勝雅以告。秀吉許之、使氏政致城而出。因謂諸將曰「吾此行、欲誅不庭之臣。今而釋之、是失信天下也。吾欲誅氏政而釋其餘。」諸將曰「善。」乃遣使者四輩、就氏政舍賜死。秀吉覽其首、罵曰「汝輕蔑王命、敢笑侮我。今如何也。」使石田三成齎之京師、梟于一條戻橋。

【譯】是に於て、八州の諸城大半皆破る。而して其の將士小田原城内に在り。我が兵其の父母妻子を虜にして之を視す。將士逃降相踵ぐ。我が侍吏山中某、成田長康と善し。秀吉命じて陰に書を以て之を招かしむ。長康乃ち款を送る。秀吉、德川公をして其の降書を以て氏直に遺らしめて曰く「子の將帥皆貳心有り。事已に危迫す。子、盍ぞ早く自ら計を爲さゞる」と。氏直、氏政と議し、長康を召すに至らず。乃ち柵を長康の營に環し、兵を置いて監護せしむ。是より城中の人人相疑ふ。秀吉、黑田孝高・羽柴勝雅を遣はして、城に入り、氏政父子を見て、說くに禍福を以てせしむ。氏政肯ぜず。七月、氏直遂に出で、德川氏の營に就いて降を乞ふ。德川氏、嫌を避けて敢て通ぜず。之をして勝雅に因らしむ。勝雅以て告ぐ。秀吉之を許し、氏政をして城を致して出でしむ。因つて諸將に謂つて曰く「吾れ此の行、不庭の臣を誅せんと欲す。今にして之を釋すは、是れ信を天下に失ふな

り。吾れ氏政を誅して其の餘を釋さんと欲す」と。諸將曰く「善し」と。乃ち使者四輩を遣はし、氏政の舍に就いて死を賜ふ。秀吉、其の首を覽、罵つて曰く「汝、王命を輕蔑し、敢て我を笑侮す。今如何」と。石田三成をして之を京師に齎らしめ、一條の戻橋に梟す。

通釋 是に於て關東八州の諸城は大半陷つた。そしてその將士は主として小田原城内に居た。我が兵は彼等の父母妻子を捕へて來てそれを見せ付けた。それが爲め城内の將士は逃げたり降つたりするものが續々と出た。我が軍の祐筆の山中某は成田長康と仲が善かつた。秀吉は山中に言ひつけて手紙を書かせ、人知れず成田を招かせた。そこで長康は内應した。秀吉は家康に言ひ付けその降參狀を氏直に送つて曰はせるには「貴公の大將達は皆二心を抱いてゐる。事既に差し迫つてゐる。貴公は早速處置をつけねばなるまい」と。氏直は氏政と相談して長康を呼んだが來ない。そこで長康の陣の周りに柵を結び廻し、兵を置いて番をさせた。それからといふものは、城中の人々が互に疑ぐり合ふやうになつた。秀吉は黑田孝高と羽柴勝雅を城の中へ遣り、氏政父子に會つて降參すれば福來り、頑張れば禍であることを話させた。氏政は承知しなかつた。七月、氏直はとう〳〵城を出て、德川氏の陣屋に行き降參を乞うた。德川氏は親戚の關係である所から嫌疑をかけられまいために自分では取次をしなかつた。それで勝雅に賴ませた。勝雅はその由を知らせた。秀吉はそれを許し、氏政に城を開け渡して外へ出でさせた。因つて諸將に向つて曰ふには「余の此の度の征伐は人臣にして入朝をしない不埒な者を誅殺せんが爲めである。然るに今になつて降參したからといつて、その者を赦してやるといふのは天下に對して不信用を招くことになる。だから余は氏政を誅して、他の奴等は赦してやらう」と。諸將が皆曰ふには「それが宜しう御座います」と。そこで氏政の宿へ使者四人を遣つて死を賜はつた。秀吉はその首を見て罵倒して曰ふには「貴樣は

天子の御命令を輕蔑し、生意氣にも余を馬鹿にしたことを申した。今、この有樣は何のざまぢや」と。石田三成をして京都へ持つて行かせて、一條戻橋で梟首にした。

氏規聞小田原既下、亦以韮山降。乃縱氏直・氏規等三十人于高野、給俸百口、尋給萬石。乃擧北條氏故地八國、以賜德川氏、別以十萬石、爲其湯沐邑。擧德川氏故地五國、以賜信雄。信雄不肯受。秀吉怒曰「卿才不可爲民上。吾特以先右府之子也、欲厚封之。卿乃薄之乎」。乃放之秋田、賜駿河于中村一氏、甲斐于加藤光泰、尾張及北伊勢五郡于秀次、參河于池田輝政・田中吉政、遠江于堀尾吉晴・山内一豐・有馬豐氏、信濃于森忠政・石川數正・仙石秀久。論關東諸豪功罪、黜陟之。執大導寺政繁、詰之曰「汝以北條氏舊將、而首降於我。我之功臣、乃北條氏之叛臣。叛臣天下罪人。吾不能私釋焉」。乃誅之于櫻田。遂引兵東下、至宇都宮。伊達政宗・南部信直等、皆迎謁焉。

訓讀 氏規小田原既に下ると聞き、亦韮山を以て降る。乃ち氏直・氏規等三十人を高野に縱ち、俸百口を給し、

尋いで萬石を給す。乃ち北條氏の故地八國を擧げて、以て德川氏に賜ひ、別に十萬石を以て、其の湯沐の邑と爲す。德川氏の故地五國を擧げて以て信雄に賜ふ。信雄肯て受けず。秀吉怒つて曰く「卿の才は民の上と爲る可からず。吾れ特に先右府の子なるを以て、厚く之を封ぜんと欲す。卿乃ち之を薄しとするか」と。乃ち之を秋田に放ち、駿河を中村一氏に、甲斐を加藤光泰に、尾張及び北伊勢の五郡を秀次に、參河を池田輝政・田中吉政に、遠江を堀尾吉晴・山内一豐・有馬豐氏に、信濃を森忠政・石川數正・仙石秀久に賜ふ。關東諸豪の功罪を論じて、之を黜陟す。大導寺政繁を執へ、之を詰めて曰く「汝、北條氏の舊將を以て、首として我に降る。我の功臣は、乃ち北條氏の叛臣なり。叛臣は天下の罪人なり。吾れ私に釋す能はず」と。乃ち之を櫻田に誅す。遂に兵を引いて東下し宇都宮に至る。伊達政宗・南部信直等皆迎謁せり。

【通釋】氏規は小田原が遂に陷つたと聞き、韮山を以て降つた、そこで、氏直・氏規等三十人を高野山に追放して百人扶持を支給したがその後一萬石をやることになつた。さてそれから北條氏の舊領八ケ國を全部德川氏に與へ、その他に十萬石をやつて湯浴の料とした。德川氏の舊領五ケ國を信雄に與へた。信雄はそれを肯て貰はなかつた。秀吉は腹を立てゝ曰ふは「貴公の腕前は民の頭になるには十分といへない。けれども余は、特に貴公が先殿樣右大臣公の子でゐられる爲めに十分領地を上げたいと思つてしたことである。それを貴公は不足とされるのか」と。さういつて信雄を秋田に追放した。駿河を中村一氏に、甲斐を加藤光泰に、尾張及び北伊勢五郡を秀次に參河を池田輝政と田中吉政に、遠江を堀尾吉晴・山内一豐・有馬豐氏に、信濃を森忠政・石川數正・仙石秀久に夫々分ち與へた。又關東の諸豪傑の功罪を評定して、功有る者は待遇をよくし、罪有る者は削つた。大導寺政繁を捕へて責めて曰ふには「貴樣は北條氏の譜代の大將たる身を以て、一番先きに我が軍に降參した。我が軍に

とつては功臣であるが、同時に北條氏の叛臣である。そして叛臣である以上天下の罪人なのだ。余は一個の私情でお前を許すわけに行かぬ」と。そこで彼を櫻田に於て誅した。遂に兵を引き連れて東下し、宇都宮まで行つた。伊達政宗・南部信直等が皆出迎へて拜謁した。

八月、至白河。命淺野彈正少弼・大谷吉隆・石田三成、檢陸奥・出羽地。問諸謀臣曰「吾欲擇一將鎭撫東北。卿等皆陳所見」衆所對各異。秀吉曰「皆非也。非蒲生氏郷無可者」賜氏郷以會津・仙道十一郡、以葛西・大崎賜木村秀俊。政宗因故土。賜米澤・長井。謂氏郷曰「爲我守東門」因指授方略、戒德川・前田・上杉氏、爲之應援。終整諸軍凱旋。至岡崎。吉川廣家受命守焉。則迎饗之。明日、以鞍馬三百餘匹送秀吉。秀吉擇黑馬騎焉、屛其徒御、獨吉川氏卒栗棲武格者爲之圉、行入尾張。秀吉指路傍聚落、謂武格曰「此名中邑。吾所生長也。吾欲一往觀。汝能從我乎」武格曰「謹諾」於是、秀吉騎入中邑、留武格于閭首而入、周馳街巷、出遂召邑中父老。父老皆惶恐俯伏。秀吉曰「比吾少時、邑閭甚整、戸口亦似滋息也」因賜之酒及物、與語舊故而去。

九月、復命於京師。

訓読 八月、白河に至る。淺野彈正少弼・大谷吉隆・石田三成に命じて、陸奥・出羽の地を檢せしめ、諸謀臣に問うて曰く「吾れ一將を擇んで東北を鎭撫せしめんと欲す。卿等皆見る所を陳べよ」と。衆對ふる所各〻異なり。秀吉曰く「皆非なり。蒲生氏郷に非ざれば可なるもの無し」と 氏郷に賜ふに會津・仙道の十一郡を以てす。葛西・大崎を以て木村秀俊に賜ふ。政宗には故土に因つて米澤・長井を賜ふ。氏郷に謂つて曰く「我が爲めに東門を守れ」と。因つて方略を指授し、德川・前田・上杉氏を戒めて之が應援を爲さしむ。終に諸軍を整へ、凱旋して岡崎に至る。吉川廣家命を受けて守る。則ち迎へて之を饗す。明日、鞍馬三百餘匹を以て秀吉に送る。秀吉、黑馬を擇んで騎し、其の徒御を屛け、獨り吉川氏の卒栗棲武格といふもの之が圉と爲り、行いて尾張に入る。秀吉路傍の聚落を指し、武格に謂つて曰く「此を中邑と名づく。吾が生長せし所なり。吾れ一たび往き觀んと欲す。汝能く我に從ふか」と。武格曰く「謹んで諾す」と。是に於て、秀吉騎して中邑に入り、武格を閭首に留めて入り、街巷を周馳し、出でゝ遂に邑中の父老を召し、笑つて曰く「吾は藤吉なり」と。父老皆惶恐俯伏す。秀吉曰く「吾が少時に比すれば、邑閭甚だ整ひ、戸口も亦滋息するに似たり」と。因つて之に酒及び物を賜ひ、與に舊故を語りて去る。九月。京師に復命す。

通釋 八月、秀吉は白河に到着した。淺野彈正少弼・大谷吉隆・石田三成の三人に陸奥・出羽の測量を命じ、參謀達に問うて曰ふには「余は一將を擇んで東北を鎭撫させようと思ふ。お前等は誰れがよいと思ふか意見を言つて見よ」と。人々の答は夫々違つてゐた。秀吉が曰ふには「皆間違つてゐる。蒲生氏郷でなくては駄目だ」と。

氏郷に會津・仙道の十一郡を與へた。葛西と大崎とは木村秀俊に賜はつた。政宗には舊領の關係で米澤と長井を與へた。氏郷に向つて曰ふには「余の爲めに東の出入口を固めてくれ」と。そして計を教へ、德川・前田・上杉の三氏に注意して、その應援をさせた。すつかり終つてから諸軍を整頓して岡崎に凱旋して歸つた。吉川廣家が命を受けて守つてゐた。凱旋したので出迎へて饗宴をした。翌日、鞍を置いた馬三百餘頭を秀吉に送つた。秀吉は黑馬を擇んで跨り、從者馬丁を退け、吉川氏の兵卒の栗棲武格といふ者が一人別當になつて、進んで尾張に入つた。秀吉は路傍の村里を指し武格に向つて曰ふには「こゝが中村といふ所だ。余の生れ育つた所だ。一遍行つて見たいと思ふ。お前ついて來られるか」と。武格が曰ふには「はい、承知仕りました」と。そこで秀吉は馬のまゝ中村に入り、武格は村の入口に留めて自分だけが、村の中の通りや小路を馳せ廻り、そこから出て來て村中の年寄共を呼んで曰ふには「余は藤吉ぢやよ」と。年寄達は皆恐れ入つて土下座をした。秀吉が曰ふには「余の子供の時分に比べると、村が非常にきちんとして、人口も増えたやうぢやな」と。そこで酒品物を與へ昔話をして立ち歸つた。九月、京都に歸つて天皇に御奉告をした。

語釋　葛西・大崎（陸奥）○長井（羽前）○檢地（土地の廣狹、肥瘦を檢定すること。）

於是、東國盡定。而伊達政宗心懷觖望、陰誘士兵作亂。少弼豫度陸奥必亂、造十餘砦、留兵守之而西。大谷吉隆猶留、檢田甚急。十月、土兵四起。葛西・大崎亦苦秀俊之政、叛攻其城。秀俊走保佐沼、告急於氏郷。氏郷卽發。會雪橇行至井繩、察政宗有異

心、遣人促使會師。政宗不得已、出次吉岡。氏鄉身往其陣面議事。政宗大驚。氏鄉破賊二壘、乘勝而進。政宗稱疾不從。氏鄉行布陣以備之、進破名生壘。政宗追躡、視其陣堅不敢擊。氏鄉乃迎秀俊、置之名生。政宗數謝無他。氏鄉使立功自效。乃攻下宮崎城。賊黨悉潰。少弼時至駿河、聞亂卽還。

訓讀 是に於て、東國盡く定る。而して伊達政宗心に觖望を懷き、陰に士兵を誘ひて亂を作さしむ。少弼豫め陸奥必ず亂るゝを度り、十餘砦を造り、兵を留め之を守らしめて西す。大谷吉隆猶ほ留り、田を檢すること甚だ急なり。十月、士兵四に起る。葛西・大崎も亦秀俊の政を苦しみ、叛いて其の城を攻む。秀俊走つて佐沼を保ち、急を氏鄉に告ぐ。氏鄉卽ち發す。會々雪ふり、輕行して井繩に至り、政宗の異心あるを察し、人を遣はして促して師に會せしむ。政宗已むを得ず、出でゝ吉岡に次す。氏鄉身ら其の陣に往き事を面議す。政宗大に驚く。氏鄉賊の二壘を破り、勝に乘じて進む。政宗疾と稱して從はず。氏鄉行くゆく陣を布いて以て之に備へ、進んで名生の壘を破る。政宗追躡し、其の陣の堅きを視て敢て擊たず。氏鄉乃ち秀俊を迎へ、之を名生に置く。政宗數他なきを謝す。氏鄉功を立て、自ら效さしむ。乃ち攻めて宮城城を下す。賊黨悉く潰ゆ。少弼時に駿河に至り、亂を聞いて卽ち還る。

通釋 是に於て東國は全部平定した。政宗は內心不平を抱いてをり、こつそり士民の兵を煽動して亂を起させた。少弼は前から、きつと陸奥が亂れると考へて十ケ所餘りの砦を造り、兵を留めて守らせて西に向つた。大谷

吉隆はまだ殘つてゐて田の檢地が非常に嚴重であつた。そこへ十月、土兵が四方に起つた。葛西と大崎も秀俊の政治に苦しみ、叛いてその城を攻めた。秀俊は逃げて佐沼を守り、氏鄕に急を知らせた。氏鄕は即刻出發した。丁度雪が降つたので橇で井繩まで行き、そこで政宗に變心の有るのを感づいたので、人をやつて出兵に參加するように催促した。政宗は仕方なく出て來て吉岡に宿つた。氏鄕は自身その陣に出かけて直接面會の上相談を始めた。政宗は大層膽を冷した。氏鄕は叛軍の二壘を破り、勝に乘じて進んだ。政宗は病氣といつて從軍しなかつた。氏鄕は行軍の都度に陣を配置して政宗を警戒し、進んで名生の壘を破つた。政宗は後を追ひかけたが、氏鄕の陣の嚴重なのを見て、思ひ切つて攻めかゝらなかつた。そこで氏鄕は秀俊を呼び迎へて名生に置いた。政宗は度々他心の無いことを辯明した。氏鄕は、手柄を立てゝ自ら徵をなさしめた。それで政宗は宮崎城を攻め下した。賊の仲間は全部四散潰滅した。少弼はその時駿河に着いてゐたが、亂を聞いてすぐ引き返した。

語釋　佐沼・井繩・名生・宮崎（陸奥）

十二月、氏鄕欲歸、而慮政宗有變。少弼乃令政宗納質。十九年正月、氏鄕取其質、還會津。秀吉得警報、遣秀次赴討、使石田三成促德川公會師。聞氏鄕已定亂、則皆途還。閏月、氏鄕來京師上狀。秀吉奪木村氏封、予之氏鄕。氏鄕又獻政宗通賊手書。秀吉怒、馳使召政宗。政宗卽發、二月至。曰「吾自分誅戮也」。作貼金磔柱、使人揭前行。及

詰問ニ陳謝甚ダ辯ズ。乃チ示ス二其ノ手書ヲ一。政宗佯リ愕イテ曰ク「其ノ書甚ダ肖タリ。特ダ華押有リ二微シク異ナル者一。」驗スルニレ之ヲ果シテ然リ。秀吉卽チ釋スレ之ヲ。

訓讀 十二月、氏鄕歸らんと欲すれども政宗の變あるを慮る。少弼乃ち政宗をして質を納れしむ。十九年正月、氏鄕其の質を取りて會津に還る。秀吉警報を得、秀次を遣はして赴き討たしめ、石田三成をして德川公を促して師に會せしむ。氏鄕已に亂を定むと聞き、則ち皆途より還る。閏月、氏鄕京師に來り狀を上る。秀吉、木村氏の封を奪ひ、之を氏鄕に予ふ。氏鄕又政宗の賊に通ずる手書を獻ず。秀吉怒り、使を馳せて政宗を召す。政宗卽ち發し、二月至る。曰く「吾れ自ら誅戮を分とするなり」と。貼金の磔柱を作り、人をして掲げて前行せしむ。詰問に及び陳謝甚だ辯ず。乃ち其の手書を示す。政宗佯り愕いて曰く「其の書甚だ肖たり。特だ華押微しく異なる者あり」と。之を驗するに果して然り。秀吉卽ち之を釋す。

通釋 十二月、氏鄕は國に戻らうとしたが、政宗が變事を起すのを心配した。少弼はそこで政宗に人質を出させた。十九年正月、氏鄕はその人質を取つて會津に歸つた。秀吉は知らせを聞き、秀次をやつて討伐させ、石田三成をして家康も參加するやう催促させた。所が氏鄕が亂を平定したと聞いて皆途中から引き返した。閏月、秀鄕は京都に來て實狀を報告した。秀吉は木村氏の領地を取り上げて氏鄕に與へた。氏鄕は又、政宗が叛徒に送つた自筆の手紙を獻上した。秀吉は腹を立て、使を飛ばせて政宗を呼びよせた。政宗はすぐ出發して二月到着した。そして曰ふには「自分は縛り首を覺悟してゐる」と。金張りの張付柱を造り、それを押し立てゝ行列の前を歩かせた。詰問せられると非常に辯解がましいことを言つた。そこで、その自筆の手紙を突きつけた。政宗は大

佯驚いた振りをして曰ふには「手はまことに似てをります。たゞ書き判が一寸違つてをりまする」と。調べて見ると本當にその通りであつた。秀吉は直に疑を解いて許してやつた。

先是、南部氏族九戸政實叛。氏郷與少弼攻而下之。是歳五月、復叛據福岡城。葛西・莊內應之。秀吉命秀次赴討曰「必勦之、使莫復萠」。命德川公助之。曰「命卿掌東北三道軍務。其便宜從事」。乃奏以政宗爲四位侍從、與氏郷俱爲先鋒。令少弼及堀尾吉晴監其軍。因密諭氏郷曰「吾知政宗反計矣。顧彼膽略可愛。故釋不問。以安反側。事平則奪其地予之汝耳」。八月、秀次入陸奧、陣三迫。氏郷・政宗攻下五城。上杉氏奉命會師、擊平莊內諸將。遂圍福岡、誘降政實以下魁首三十人、效之三迫。秀次斬以徇、焚殺其餘黨。以秀吉命徙政宗于葛西・大崎、以其地加賜氏郷、幷食百萬石。遂巡視國內、按撫士民、課東邊諸侯、築城大崎、以置政宗、然後歸。

【訓讀】是より先き、南部氏の族九戸政實叛く。氏郷、少弼と攻めて之を下す。是の歳五月、復叛いて福岡城に據る。葛西・莊內之に應ず。秀吉、秀次に命じ赴き討たしめて曰く「必ず之を勦し、復萠す莫からしめよ」と。德川公に命じて之を助けしむ。曰く「卿に命じて東北三道の軍務を掌らしむ。それ便宜事に從へ」と。乃ち奏し

て政宗を以て四位侍從と爲し、氏郷と倶に先鋒と爲らしめ、少弼及び堀尾吉晴をして其の軍を監せしむ。因つて密に氏郷を諭して曰く「吾れ政宗の反計を知る。顧ふに彼れ膽略愛す可し 故に釋して問はず。以て反側を安んず。事平がば則ち其の地を奪ひ、之を汝に予へんのみ」と。八月、秀次陸奥に入り三迫に陣す。氏郷・政宗攻めて五城を下す。上杉氏、命を奉じて師に會し、撃つて莊内を平ぐ。諸將遂に福岡を圍み、政實以下の魁首三十人を誘降し、之を三迫に效す。秀次、斬つて以て徇へ、其の餘黨を焚殺し、秀吉の命を以て政宗を葛西・大崎に徙し、其の地を以て氏郷に加賜し、幷せて百萬石を食ましむ。遂に國内を巡視し、士民を按撫し、東邊の諸侯に課して城を大崎に築き以て政宗を置いて、然る後歸る。

通釋 これより以前、南部の一族の九戸政實が叛いた。氏郷は少弼と共に攻め下した。是の年の五月に再び叛いて福岡城に立てこもつた。葛西と莊内とがそれに味方した。秀吉は秀次に討ちに行くやう命じて曰ふには「是非根絶やしして、もう芽を出させぬやうにしなさい」と。家康に援助を命じて曰ふには「貴公に命じて、東北三道の軍務をしめくゝりさせる、適當に事を運んで下さい」と。さて奏上して政宗を四位侍從と爲し、氏郷と共に先鋒とし、少弼と堀尾吉晴とにその軍の監督をさせた。それから人知れず氏郷に諭して曰ふには「余は政宗の謀叛の企を知つてゐたのだ。考へて見ると、彼の太い膽力、策略には中々愛すべき所がある。だから余は赦して追及しなかつた。そして謀叛に組した連中で、露顯を懼れてゐる者を安心させてやつたのだ。事落着の上は、その土地を取り上げてお前にやつて終ふ」と。八月、秀次は陸奥に入つて三迫に陣取つた。氏郷と政宗は五つの城を攻め下した。上杉氏も命に從つて戰爭に參加し、莊内を討ち平げた。それから諸將はいよ〳〵福岡を包圍し、政實以下の親分株三十人を誘つて降參させ、彼等を三迫に送致した。秀次は斬り殺して威を示し、餘黨を燒き殺

し、秀吉の命令で政宗を葛西・大崎に移し、その舊領を氏郷に加增し、前後合せて百萬石を領有させた。その足で國內を巡視し、士民の心を土地に落つけ、東邊の諸侯に割りあてて大崎に城を築かせ、そこに政宗を置いてそれから歸つた。

語釋 福岡（陸奥）○莊內（羽後）○東北三道（東海・東山・北陸の三道）○三迫（陸奥）

是歲四月、大納言秀長卒。以秀次弟秀俊爲嗣、襲其封。十一月、秀吉大獵于參河。初秀吉定關西、召松下之綱、賜邑于丹後。及定關東、更賜遠江・伊勢之一萬石。曰「償攫金也」。

訓讀 是の歲四月、大納言秀長卒す。秀次の弟秀俊を以て嗣と爲し、其の封を襲がしむ。十一月、秀吉大に參河に獵す。初め秀吉關西を定め、松下之綱を召し、邑を丹後に賜ふ。關東を定むるに及んで、更に遠江・伊勢の一萬石を賜ふ。曰く「攫金を償ふなり」と。

通釋 是の年四月に、大納言の秀長が歿した。秀次の弟の秀俊を繼嗣として、秀長の領地を繼がせた。十一月、秀吉は參河で盛大に狩をした。最初秀吉が關西を平定した時、松下之綱を呼びよせて丹後に領地を與へた。關東を平定すると、更に遠江・伊勢の一萬石を與へた。曰ふには「盜んだ金を返すのだ」と。

日本外史新釋卷十五終

日本外史新釋　卷十六

德川氏前期

豐臣氏中

秀吉之在關東也、遊於鎌倉、觀源頼朝塑像、進撫其背曰、若我友也。徒手取天下、唯有吾與若而已。然若承藉名族。不如吾起人奴也。吾欲遂略地至明。若以爲何如。

【訓讀】秀吉の關東に在るや、鎌倉に遊び、源頼朝の塑像を觀、進んで其の背を撫して曰く、「若は我が友なり。徒手にて天下を取りしは、唯だ吾と若と有るのみ。然れども若は名族に承藉す。吾が人奴より起れるに如かざるなり。吾れ遂に地を略して明に至らんと欲す。若以て何如と爲す」と。

【通釋】秀吉が關東に居つた時、鎌倉に遊び、源頼朝の土で作つた像を觀て、進んで其の背を撫でゝ曰ふには

「お前は吾が友である。素手で天下を取つたのは唯だお前と私とのみである。が併しお前は清和源氏の正統で名望ある家筋に生れてその後を承け續いたのだ。（からそこに名族といふ力強い助けになるものがあつた。）自分は左樣ではなく、下僕から起つて天下を取つたのであるからお前は其の點で私に及ばない譯である。自分はこれから進んで地を略し取り明に迄攻め行かうと思つてある。お前はそれを如何思ふかね」と。

〔語釋〕在關東（北條氏を討つた時のこと。）○塑像（土で造へた像で鶴ケ岡にあつた。）○承藉（音ショウシャ、承は承け續ぐこと、藉はよること。名族を承けつぎ其の勢によること。）

初秀吉爲織田氏徇山陽、請攻韓及明。後常思成其志。明主嘗與足利氏修好。而韓兩屬其間、常奉朝貢於我。及足利氏衰、我西南海盜、數侵明境。明・韓皆與我絕。而海賈互市不絕。我對馬島、距韓甚邇。島主宗氏、世置吏于韓釜山浦。至豐臣氏時、明民或有來投者。秀吉聞明主朱翊鈞失政、武備不具、益思窺之。其定畿內、以橘康廣嘗諳韓事、擢爲使者、徵朝貢于韓。不得要領而返。秀吉疑其與韓有私、族誅之。及定西海、宗義智送款焉。秀吉命掌使事。將伐關東、遂遣義智與僧玄蘇往韓。會琉球人貢。秀吉囑其國求通於明、曰「明不聽我言、我當發兵伐之」。琉球王尙寧告之明。明不聽。義智至韓。韓王李昖乃使其大臣黃允吉・金誠一、隨而入貢。

【訓讀】初め秀吉の織田氏の爲めに山陽を徇ふるや、韓及び明を攻めんことを請ふ。後常に其の志を成さんと思ふ。明主、嘗て足利氏と好を修む。而して韓其の間に兩屬し、常に朝貢を我に奉ず。足利氏の衰ふるに及び、我が西南の海盜、數明境を侵す。明・韓、皆我と絕つ。而して海賈の互市は絕えず。我が對馬島は、韓を距ること甚だ邇し。島主宗氏、世吏を韓の釜山浦に置く。豐臣氏の時に至り、明の民或は來り投ずるものあり。秀吉、明主朱翊鈞、政を失ひ、武備具らずと聞き、益々之を窺はんことを思ふ。其の畿內を定むるや、橘康廣、嘗て韓の事を暗んずるを以て、擢んで使者となし、朝貢を韓に徵す。要領を得ずして返る。秀吉、其の韓と私ありと疑ひて、之を族誅す。西海を定むるに及び、宗義智、款を送る。秀吉、命じて使事を掌らしむ。將に關東を伐たんとするとき、遂に義智と僧玄蘇とを遣はして韓に往かしむ。會々琉球入貢す。秀吉其の國に囑し、明に通ずるを求めしめて曰く「明、我が言を聽かずんば、我れ當に兵を發して、之を伐つべし」と。琉球王尙寧、之を明に告ぐ。明、聽かず。義智、韓に至る。韓王李昖、乃ち其の大臣黃允吉・金誠一をして、隨つて入貢せしむ。

【通釋】初め秀吉が織田氏の爲めに山陽道を攻めた時、韓及び明を攻めんことを信長にお願ひした。後いつもこの志を成し遂げようと思つてゐた。明の天子は前に足利氏と使聘を通じて交通してゐた。そして韓は日本と支那との間にあつて兩方に屬き、常に日本に入朝し貢物を持つて來てゐた。足利氏が衰へるやうになつて、我が日本の西南地方の海賊が度々明の海岸を侵した。そのやうな次第で明も韓も我が國と交通を絕つた。けれど船乘り商人の交易は止まなかつた。我が國の對島は韓を去ること非常に近い。島主の宗氏は代々役人を韓の釜山浦に置いて居つた。豐臣氏の時となつて、明の民で我國に來り歸化する者がゐた。秀吉は明主の朱翊鈞が政治を失くじり、軍備も不充分であると聞き、益々明を窺ひ攻めようと思つた。秀吉が畿內を平定した時に、橘康廣が以前韓の

ことをよく心得てゐたので、拔擢して使者となし、韓に對し、日本に貢物を持つて入朝するやうに催促した。併し要領を得ないで返つて來た。秀吉は康廣が韓と何か祕密の關係でもあるのではないかと疑つて、一族を全部誅殺した。秀吉が西海を平定した時に、宗義智が降服して來た。そこで秀吉は命じて朝鮮への使者のことを掌らしめた。秀吉が關東を征伐しようとした時、遂に義智と僧の玄蘇とをやつて韓に往かしめた。丁度その時、琉球が貢物を持つて來朝して來た。秀吉は琉球に賴んで明に交際を求めさせて曰ふには、「明が我が要求の言を承知しないならば、余は屹度、兵を繰り出して攻めてやるぞ」と。琉球王の尚寧は之を明に告げた。併し明は聽き入れなかつた。やがて義智は韓に行つた。そこで韓王の李昖は大臣の黃允吉・金誠一をして義智に附き從つて我國へ入貢せしめた。

語釋　徇二山陽一（毛利氏討伐のこと。）○足利氏（義滿、義教、義政の時。）○朱翊鈞（明神宗。）

秀吉既至レ自レ伐二關東一、見二韓使者一。乃命レ史作レ書、以答レ之。曰、「日本豐臣秀吉、謹答二朝鮮國王足下一。吾邦諸道、久屬二分離一、廢二亂綱紀一、阻二格帝命一。秀吉爲レ之憤激、被レ堅執レ銳、西討東伐、以二數年之間一、而定二六十餘國一。秀吉鄙人也。然當二其在一レ胎、母夢二日入一レ懷。占者曰、日光所レ臨、莫レ不二透徹一。壯歲必耀二武八表一。是故戰必勝、攻必取。今海內既治、民富財足。帝京之盛、前古無レ比。夫人之居レ世、自レ古不レ滿二百歲一。安能鬱鬱久在レ此乎。吾欲下假二道貴國一、超

越山海、直入于明、使其四百州盡化我俗、以施王政於億萬斯年、是秀吉宿志也。凡海外諸蕃後至者、皆在所不釋。貴國先修使幣。帝甚嘉之。秀吉入明之日、其率士卒、會軍營、以爲我前導。因遣平調信・玄蘇與偕。

訓讀 秀吉既に關東を伐ちてより至り、韓の使者を見る。乃ち史に命じて書を作らしめ、以て之に答ふ。曰く「日本の豐臣秀吉、謹んで朝鮮國王足下に答ふ。吾が邦の諸道、久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻格す。秀吉、之が爲めに憤激し、堅を被り鋭を執り、西討東伐、數年の間を以て六十餘國を定む。秀吉は鄙人なり。然れども其の胎に在るに當り、母、日の懷に入ると夢む。占者曰く、日光の臨む所、透徹せざる莫し。壯歲必ず武を八表に耀さんと。是の故に、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。今、海内既に治り、民富み財足る。帝京の盛なる、前古に比なし。夫れ人の世に居る、古より百歲に滿たず。安んぞ能く鬱鬱として久しく此に在らんや。吾れ道を貴國に假り、山海を超越し、直に明に入り、其の四百州をして、盡く我が俗に化せしめ、以て王政を億萬斯年に施さんと欲す。是れ秀吉の宿志なり。凡そ海外諸蕃の後れて至るものは、皆釋さゞる所に在り。貴國、先づ使幣を修む。帝甚だ之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其れ士卒を率ゐて軍營に會し、以て我が爲めに前導せよ」と。因つて平調信、玄蘇を遣はし、與に偕にせしむ。

通釋 秀吉關東の北條氏を征伐して終つてから歸つて來て、韓からの使者に會つた。そこで書記に命じて書面を作らせて、韓王に答へて曰ふに「日本の豐臣秀吉は謹んで朝鮮國王足下にお答へする。吾が國の諸道は久しい

間バラ〳〵に分かれて群雄諸方に割據してゐて、朝廷の謎を廢て亂し、天子の御命令を隔て拒んでゐた。秀吉は之が爲め激し憤り、堅固な甲を被り鋭い武器を執つて西を討ち東を伐ち、數年の間に日本六十餘國を平定して終つた。秀吉はもと鄙しい人間であつた。併し母の胎内に在つた時に、母が太陽が懷に入ると夢を見られた。占ひをする者がいふのに「日光が臨み照らす所は、どんな所でも其の光の差し込まぬ所はない。此の腹の子は三十代の血氣盛りに屹度武威を八方に耀かし示す事であらう」と。左樣な譯で戰爭すれば必ず勝ち、攻めれば必ず取るのである。今天下既に治まり、人民は富み、財も充分である。天子の都の盛大なることは、これ迄に比べものもない程である。一體人間が此の世の中に生きてゐるのは、昔から百年に足らないものである。その短い壽命であるのに、何うしていつまでも此の日本國内に欝としてゐられようか。自分は貴君の國の道を通して貫つて、山や海を越し、直ちに明國へ入り、支那四百州を全部我が日本の風俗に化せしめ、而して王者の御政治を億萬年も先き〳〵まで施したいと思つてゐる。これが秀吉の年來の志である。凡そ海外に在る諸々の蕃夷で、後れて日本へ朝貢する者は、どこの國でも皆決して許しはしないのだ。貴國は最先きに使者を寄越し、禮物を持參した。天子樣は大層お喜び遊ばされてゐる。この秀吉が明へ攻め込む時には、貴君は士卒を率ゐて我が軍營に集まり來り、我が爲めに道案内をなされへ」と。そこで平調信・僧玄蘇を遣はし、韓の使者と一緒に朝鮮へ行かせた。

語釋 數年之間（光秀を誅し北條氏を滅す迄九年間。）○八表（八方の國。）○億萬斯年（斯は語助で、意はない。）○平調信（柳川氏なり。）

韓王得書疑懼。誠一以爲虛喝王使之私饗二人、探其情實。調信曰「我主欲通明。明不答禮。故欲伐之耳。貴國盍居間和解之。」誠一依違。玄蘇厲聲言曰「今日之議、不得

首鼠兩端。不欲講和、乃欲戰耳」因辭訣返。韓始懼、稍修邊備。明亦聞之、申嚴海防。天正十九年夏、秀吉復遣義智責昖。在釜山旬餘、不得報。怒而返。秀吉志益決。

訓讀 韓王書を得て疑懼す。誠一以て虚喝と爲す。王之をして私に二人を饗し、其の情實を探らしむ。調信曰く「我が主、明に通ぜんと欲す。明答禮せず。故に之を伐たんと欲するのみ。貴國盍ぞ間に居て之を和解せざる」と。誠一依違す。玄蘇聲を厲まして言つて曰く「今日の議、首鼠兩端するを得ず。講和を欲せずんば、乃ち戰はんと欲するのみ」と。因つて辭訣して返る。韓始めて懼れ、稍く邊備を修む。明も亦之を聞き、海防を申嚴す。天正十九年夏、秀吉復義智を遣はし昖を責めしむ。釜山に在ること旬餘にして報を得ず。怒つて返る。秀吉志益く決す。

通釋 韓王はこの手紙を見て疑ひ、懼れもした。誠一はから脅かしだと考へた。王は誠一に二人を非公式に饗應させて本當の事情を探らせた。調信が曰ふには「我が主人は明と交際せんとせられてゐる。然るに明が答禮をせぬ。それ故に討伐せんとされるのである。貴國は間に居り乍ら何うして兩國を和解させないのか」と。誠一は承知したやうなせぬやうな曖昧な態度であつた。玄蘇は聲を荒らげて曰ふには「今日の相談は、どつちつかずの日和見は許されぬ。講和せぬならば戰爭するのみだ」と。そして別れを告げて歸つて終つた。韓は始めて怖くなつて、ぼつ〳〵國境の防備に手を付けた。明もその事を聞いて海岸の防禦をいよ〳〵嚴重にした。天正十九年夏秀吉は再び義智を派遣して韓王李昖を責めさせ、征明の先棒になることを督促させた。所が釜山に十日餘りもゐたが何の返事もなかつた。そこで怒つて還つて來た。秀吉の朝鮮征伐の腹は益々決まつて終つた。

秀吉初無子。先是、姫人淺井氏生男鶴松。秀吉絶愛之。是歳鶴松夭。乃悲哀累月、心忽忽不樂。因屢出遊以自遣。一日、登淸水寺閣、西望謂從者曰、「大丈夫、當用武萬里之外。何自悒鬱爲。」乃還、大會諸將帥、謂之曰、「吾藉諸君之力、平定海内、亦可以休矣。特諸醜夷有阻王化者。吾深羞之。吾欲以邦治委内府、而自將入朝鮮、以其兵爲先鋒、以入於明。彼拒我命、則擊滅之、遂自遼東直襲北京、奄有其國、多割土壤、以予諸君、使諸功臣皆厭其望。不亦快乎。我籌之已熟。事非甚難。諸君其能爲我出力耶。」諸將帥愕眙、相視莫敢對者。浮田秀家進曰、「殿下擧此無前之事。誰不努力者。」衆莫敢異議。内府謂秀次也。秀次時爲内大臣、敍正二位。

訓讀 秀吉初め子なし。是より先き、姫人淺井氏、男鶴松を生む。秀吉、絶だ之を愛す。是の歳、鶴松、夭す。乃ち悲哀月を累ね、心忽忽として樂しまず。因つて屢出遊し、以て自ら遣る。一日、淸水寺の閣に登り、西望して從者に謂つて曰く、「大丈夫、當に武を萬里の外に用ふべし。何ぞ自ら悒鬱するを爲さん」と。乃ち還り、大に諸將帥を會し、之に謂つて曰く、「吾れ諸君の力に藉り、海内を平定す。亦以て休すべし。特だ諸醜夷、王化を阻む者あり。吾れ深く之を羞づ。吾れ邦治を以て内府に委ね、而して自ら將として朝鮮に入り、其の兵を以て先

鋒と爲し、以て明に入らんと欲す。彼れ我が命を拒まば、則ち擊つて之を滅し、遂に遼東より直に北京を襲ひ、其の國を奄有し、多く土壤を割き以て諸君に予へ、諸功臣をして皆其の望に厭かしめん。亦快ならずや。我れ之を籌ること已に熟す。事甚だ難きに非ず。諸君其れ能く我が爲めに力を出すや」と。諸將帥、愕眙し、相視て敢て對ふる者莫し。浮田秀家進んで曰く、「殿下、此の無前の事を擧ぐ。誰か努力せざる者ぞ」と、衆敢て異議する莫し。內府とは、秀次を謂ふなり。秀次、時に內大臣と爲り、正二位に敍せらる。

通釋 秀吉には初め子がなかつた。これより先き妾の淺井氏が男子鶴松を生んだ。秀吉は非常にこの鶴松を愛した。所が此の年卽ち天正十九年に鶴松が早や死した。そこで秀吉は悲しみ嘆き、數ケ月に及んで、心がうと〳〵して何事も手につかず、面白からず暮してゐた。そこで度々外出して遊び自ら憂を晴らしてゐた。或る日淸水寺の閣に登り西の方を望み、供の者に向つて曰ふには「大丈夫たる者は武威を萬里の外に用ふ可きである。何うして自ら鬱いで計りゐようや」と。そこで歸つて、大いに諸將帥を集め、之に謂つて曰ふには「余は諸君の力によつて天下を平定した。だから休息したつてよいのである。たゞ諸外國に我が日本の天子樣の御政道を拒む者がある。余は左樣な者のゐる事を非常に羞ぢるのである。余は日本國の政治を內大臣に委せて、自身大將となつて朝鮮に攻め込み、其處の兵を先鋒として明に攻め込まうと思ふのである。朝鮮が若し我が命令を拒んで受け入れなければ之を擊ち滅し、それから尙ほ進んで遼東から、直ちに北京を襲擊し、明國を掩ひ取り、其の土地を多く割いて諸君に與へ、多くの功臣をして鱈腹、望みに飽かしめ度い。どうぢや、亦愉快ではないか。余は隨分前から十分に胸算用してゐる。此の事は決して難かしい事ではないのだ。諸君どんなものぢや、能く余の爲めに力を出して働いて吳れるか」と。諸將帥は呆氣に取られ眼を見張り、互に見あつて誰れこそ、それにお對へしようとする

者もない。浮田秀家が進んで曰ふのに「殿下は此のこれ迄にない事をなされる。誰れが努力しない者ですか」と。多くの者も敢て異議を挾むものは一人もなかつた。内大臣といふのは秀次のことである。秀次は其の時内大臣となり、正二位に敍せられてゐた。

【語釋】淺井氏（茶々といひ、後淀君といふ。）○自遣（遣悶、遣憂、うさはらし。）○醜夷（外國を輕蔑していふ。）○奄有（奄は覆ふことで、大に領して餘りあること。）○秀次（秀吉の甥。）

於是、秀吉奏請、遣諸將之國、各具兵食、命九鬼嘉隆、造大艦數千艘。大廳聞秀吉赴海外、憂恐至廢寢食。乃議使秀家代往。而自出陣肥前、以爲策應。乃大築于那古耶、建爲行營。

【訓讀】是に於て、秀吉、奏請し、諸將を遣はして國に之き各兵食を具へしめ、九鬼嘉隆に命じて、大艦數千艘を造らしむ。大廳、秀吉、海外に赴くと聞き、憂恐して寢食を廢するに至る。乃ち議して、秀家をして代り往かしめ、而して自ら出で、肥前に陣し、以て策應を爲す。乃ち大に那古耶に築き、建てゝ行營と爲す。

【通釋】そこで秀吉は天子樣にお願ひ申し、諸將を皆夫々の領國へ遣つて、武器食糧を準備させ、九鬼嘉隆に命じて大きな軍艦數千艘を造らしめた。大政所（秀吉の母）が秀吉が海外へ行くと聞き心配し恐れて夜の目も合はず、食は喉を通らぬといふ有樣であつた。そこで相談をして秀家をして代り往かせることにし、自分は出でゝ肥前に陣取り、遙かに計略を通じ合ふことにした。そこで大に那古耶に城を築き、そこを假りの本陣とした。

十二月、分朝鮮地圖于諸將、部署其所嚮。分西南四道兵、爲八軍、以嚮韓之八道。主

計頭加藤淸正將第一軍。攝津守小西行長將第二軍。鍋島直茂・相良賴定屬淸正、宗義智・松浦鎭信・有馬義純屬行長、兩軍迭爲先鋒。大友義統・黑田長政將第三軍。島津義弘・毛利高政・伊東祐丘將第四軍。福嶋正則・長曾我部元親將第五軍。蜂須賀家政・生駒親正將第六軍。小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂將第七軍。毛利輝元將第八軍。別置水軍、以九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親將之、秀俊將藤堂高虎、率大和軍屬焉。水陸九軍、總十五萬人。織田秀信・中川秀政・石田三成・增田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元、與淺野左京大夫將游軍六萬、以備應援。而秀吉自以秀俊及德川公・前田利家・蒲生氏鄕・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等、畿內東北三道將士十萬自衞。以明年三月盡會行營。秀吉乃上書乞骸骨、讓關白職于秀次、自稱太閤。於是、宗義智戒釜山吏卒、稍稍引返。韓人來窺其府、闃然無人。乃驚恠、修守備益急。

訓讀　十二月、朝鮮の地圖を諸將に分ち、其の嚮ふ所を部署す。西南四道の兵を分ちて八軍と爲し、以て韓の

八道に嚮はしむ。主計頭加藤清正第一軍に將たり。攝津守小西行長第二軍に將たり。鍋島直茂・相良賴定は清正に屬し、宗義智・松浦鎮信・有馬義純は行長に屬し、兩軍迭に先鋒と爲る。大友義統・黒田長政第三軍に將たり。島津義弘・毛利高政・伊東祐丘・第四軍に將たり。福島正則・長曾我部元親第五軍に將たり。蜂須賀家政・生駒親正第六軍に將たり。小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂第七軍に將たり。毛利輝元第八軍に將たり。別に水軍を置き、九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親を以て之に將とし、秀俊の將藤堂高虎、大和の軍を率ゐて屬す。水陸九軍、總て十五萬人。織田秀信・中川秀政・石田三成・增田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元は、淺野左京大夫と游軍六萬に將とし、以て應援に備ふ。而して秀吉自ら秀俊及び徳川公・前田利家・蒲生氏郷・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等畿内東北三道の將士十萬を以て自ら衞る。明年三月を以て盡く行營に會せしむ。秀吉乃ち上書して骸骨を乞ひ、關白職を秀次に讓り、自ら太閤と稱す。是に於て、宗義智、釜山の吏卒を戒め、稍稍引き返らしむ。韓人來つて其の府を窺ふに、闃然として人無し。乃ち驚き恠しみ、守備を修むること益〻急なり。

【通釋】十二月、朝鮮の地圖を諸將に分けて、各〻の向ふべき所を手分けした。西南四道、山陰・南海（四國）・西海（九州）の兵を分けて八軍とし、それを韓の八道に向はせることにした。主計頭加藤清正は第一軍の將となつた。攝津守小西行長は第二軍の將である。鍋島直茂と相良賴定は清正の手につき、宗義智・松浦鎮信・有馬義純の三人は行長の配下となり。この兩軍は交互に先鋒となることゝした。大友義統と黒田長政は第三軍の將。島津義弘・毛利高政・伊東祐丘は第四軍の將。福島正則・長曾我部元親は第五軍の將。蜂須賀家政・生駒親政は第六軍の將。小早川隆景・毛利秀包、立花宗茂は第七軍の將。毛利輝元は第八軍の將。別に水軍を置き、九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉

明・來島康親の四人をその將とし、秀俊の部將たる藤堂高虎が大和の軍勢を率ゐてその手に屬した。水陸九軍全部で十五萬人である。織田秀信・中川秀政・石田三成・增田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元は淺野左京大夫と共に豫備隊六萬人の將となつて、必要の場合に備へることになつた。秀吉自身は、秀俊及び、德川家康・前田利家・蒲生氏鄕・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等、畿內と東北三道の將士十萬を率ゐて國內の警備に當ることになつた。翌年三月　全部名古耶の本營に集合させることにした。そこで秀吉は書面を差し出して辭職をお願ひし、關白職を秀次に讓つて自ら太閤と呼んだ。こゝに於て宗義智は、釜山に置いた役人兵卒に注意を怠らぬやうにさせ、だん〳〵とそれを引上げさせた。韓人が（へんに思ひ）やつて來て役所をのぞくとしんとして人氣が無かつた。そこで吃驚して怪み、益々嚴重に守備を固めることになつた。

語釋　西南四道（山陰、山陽、西海、南海。）○韓の八道（李成桂纂奪即位の時、國郡を分つて道と爲す。全羅・忠淸・慶尙・京畿・黃海・平安・咸鏡・江原。）○太閤（唐制では三公を閣下と云ふ。大殿下を大殿といふことから、太閤下を太閤と云つたものだ。關白が辭任して其の子が又關白となる場合、前の關白を太閤と云つたのである。一體ならこれも宣下あつて後稱すべきであるが、こゝは自らとあるから、この宣下を待たなかつたものと見える。）

文祿元年正月、秀吉召加藤淸正、賜之記幟曰「吾伐毛利氏時、先右府所賜也」。召小西行長、賜之名馬曰「以驅突醜虜」。淸正素鄙行長不相善。於是、謂之曰「予用賜幟爲號。子號何用」。行長對曰「我起藥商。當用藥囊耳」。自是益相隙也。二月二十八日、秀吉發京師。或曰「盍以善漢文者從」。秀吉笑曰「吾此行、將使彼用我文耳」。四月、至安藝、謁

嚴島祠、投百錢祝曰「吾而勝明、面者居多」乃投。皆面矣。衆大喜。蓋豫糊合兩錢也。遂至那古耶諸軍會者、凡五十萬人、糧食稱之。

【訓讀】文祿元年正月、秀吉、加藤清正を召し、之に記幟を賜ひて曰く「吾れ毛利氏を討ちし時、先右府の賜ひし所なり」と。小西行長を召し、之に名馬を賜ひて曰く「以て醜虜を驅突せよ」と。清正素より行長を鄙みて相善からず。是に於て之に謂つて曰く「予賜幟を用ひて號と爲す。子が號何を用ふる」と。行長對へて曰く「我は藥商より起る。當に藥囊を用ふべきのみ」と。是れより益々相隙す。二月二十八日、秀吉、京師を發す。或ひと曰く「盍ぞ漢文を善くするものを以て從へざる」と。秀吉笑つて曰く「吾が此の行、將に彼をして我が文を用ひしめんとするのみ」と。四月、安藝に至り嚴島祠に謁し、百錢を投じて祝して曰く「吾にして明に勝たば、面する者多きに居れ」と。乃ち投ず。皆面す。衆、大に喜ぶ。蓋し豫め糊にて兩錢を合はせしなり。遂に那古耶に至る。諸軍の會する者、凡そ五十萬人、糧食、之に稱ふ。

【通釋】文祿元年正月、秀吉は加藤清正を召して、紋所の入つてゐる所の幟を與へて曰ふには「余が毛利を伐つ時、先殿樣右大臣信長公から下さつたものである」と。又小西行長を召し、之に名馬を與へて曰ふには「頰ひげの毛唐共を追ひとばせ」と。清正はふだんから行長を卑しんで仲が善くなかつた。そこで行長に向つて曰ふには「俺は下され物の幟をしるしに致す。貴公はどんなしるしをお使ひになるか」と。行長が答へて曰ふには「俺は藥屋から身を起したのだ。藥囊でも使ふことに致さうわい」と。この後は益々相怨むやうになつた。二月二十八日、秀吉は京都を出發した。或る人が曰ふのに「何故漢文の達者な者を連れておいでになりませぬか」と。秀吉

が笑つて曰ふのに「今度の軍は、彼れに吾が國のいろはを使はせようとするのである」と。四月、安藝に至り、嚴島神社にお參りし、百錢を投げて、祈つて曰ふのに「私が明に勝つことが出來ますなら面を向く方が多くありますやうに」と。そこで投げて見た所皆面を向いた。多勢の者は大喜びであつた。思ふに前以て糊で一枚の錢に粘り合はせ、どちらを向いても表面が向くやうに仕組んであつたのである。それから進んで那古耶に着いた。諸軍の集まる者凡そ五十萬人からあり、兵糧も之に稱ふだけあつた。

語釋　文祿（後陽成天皇の年號。）○文（文字のこと。文字のことは書とか、名とか、單に文とか、字とか、文字など〻色々に稱せられる。一つは時世によつて違ふのである）

於是、先遣水陸九軍、發大礮閧而揚帆、蔽海而渡。至于風本、阻風十日。風稍定。行長與義智素諳海路。潛拔其軍、不告衆先發、至豐崎。平明、諸將乃覺之。淸正怒而發。風益甚、不得進。行長促舵師發豐崎、冒濤而進。十三日、達于釜山。釜山守將鄭撥出獵、聞警馳返。行長隨攻其城、立拔之、生擒鄭撥。遂分兵徇慶尙道、陷西生・多大二浦、斬多大守將尹興信。問其捕虜以要害城寨。曰「東北有東萊。距此三十里」。行長謂其衆曰「諸君戰疲。當休。然使東萊爲備、吾力不能下。而諸將隨至、則奪功於人矣。宜急擊取之」。衆奮從之。乃進攻東萊、半日拔之。斬首千餘級。守將宋象賢不屈死。行長收

葬之、進陷梁山、至鵲院韓兵據險拒之。我兵攀山、廻出其背韓兵顧而潰。韓巡察使金晬聞東萊急、自晉州來援。不及。乃諭諸郡縣避我兵。

訓讀 是に於て先づ水陸九軍を遣り、大礮を發し鬨して帆を揚げ、海を蔽ひて渡る。風本に至り、風に阻らるゝこと十日。風稍々定まる。行長・義智と素より海路を諳んず。潛に其の軍を拔き、衆に告げずして先發し豐崎に至る。平明、諸將乃ち之を覺る。清正怒つて發す。風益々甚しくして進むを得ず。行長舵師を促して豐崎を發し、濤を冒して進む。十三日釜山に達す。釜山の守將鄭撥出獵し、警を聞いて馳せ返る。行長隨つて其の城を攻め、立ちどころに之を拔きて鄭撥を生擒す。遂に兵を分ちて慶尙道を徇へ、西生・多大の二浦を陷れて、多大の守將尹興信を斬る。其の捕虜に問ふに要害の城塞を以てす。曰く「東北に東萊有り。此を距る三十里」と。行長其の衆に謂つて曰く「諸君戰ひ疲る。當に休ふべし。然れども東萊をして備を爲さしめば、吾が力下す能はず。而して諸將隨つて至らば、則ち功を人に奪はれん。宜しく急に擊つて之を取るべし」と。衆奮つて之に從ふ。乃ち進んで東萊を攻め、半日にして之を拔く。斬首千餘級。守將宋象賢、屈せずして死す。行長收めて之を葬り、進んで梁山を陷れ、鵲院に至る。韓兵險に據りて之を拒ぐ。我が兵山を攀ぢ、廻りて其の背に出づ。韓兵顧みて潰ゆ。韓の巡察使金晬、東萊の急を聞き、晉州より來り援く。及ばず。乃ち諸郡縣に諭して我が兵を避けしむ。

通釋 そこで先づ海陸九軍を出發させることになり、大砲を放ち（出陣の式、勢をつける）鬨の聲を揚げ船に帆を張り、海を蔽うて出發した。風本に着いてから風の爲めに十日間妨げられた。漸く風が鎭まつた。行長と義智は元より海路をよく心得てゐる。こつそり自分の軍だけを引き拔いて誰にも言はずに拔けがけして豐崎に着い

た。しら〳〵明ける頃に諸將は漸く氣がついた。淸正は怒つて出發した。風が次第に激しくなつて進むことができなかつた。行長は舵手をせきたてゝ豐崎を出發し、大波を凌いで進んだ。十三日に釜山に到着した。釜山の守將鄭撥は獵に出てゐたが、知らせを聞いて馳せ戻つた。行長はその後から城を攻めつけ、忽ちに陷れ鄭撥を生捕にした。それから兵を分けて慶尙道を巡り降し、西生と多大の二つの浦を陷れて多大の守將尹興信を斬つた。その捕虜に肝心要害な城寨を訊ねた。曰ふには「東北に東萊といふ所があります。こゝから三十里です」と。行長は麾下に向つて曰ふには「諸君は戰で疲れてゐる。本當なら休息すべき所だ。併し東萊にすつかり防備を固めさせたらこの軍勢の力では降すことは出來ない。又その中に諸將がやつて來たら、人に手柄を奪はれて終ふ。だからこれから直ぐ樣討ち取るのが宜いと思ふ」と。一同は勇氣を奮つて之に從つた。そこで進んで東萊を攻め半日で陷れた。斬首千餘級であつた。守將の宋象賢は屈服しないで討ち死した。行長はその死骸を收容し埋葬してやり、それから進んで梁山を陷れ、鵲院に至つた。韓兵は險阻な地に據つて拒いだ。我が兵は山をよぢ登りぐるりとその後方に廻つた。韓兵は後に出られて潰滅して終つた。韓の巡察使の金晬は東萊の危急を聞いて晉州から援けに來た。併し間に合はなかつた。そこで諸郡縣にふれいを廻して我が兵の危險から避けるやうにと命じた。

語釋 風本（壹岐）○豐崎（對島）○西生・多大・東萊・梁山鵲院・晉州（慶尙道。）

淸正後行長三日至釜山。聞行長已前進、切齒曰「悔爲豎子所先。吾豈踐其迹乎。」乃轉取別路、縱火慶州、走其守將、斬首千五百級。轉鬪而進、所向皆靡。秀家聞行長深

入、謂其將佐曰、「彼自我家起身。吾爭功而不援、使彼死於敵、不獨負太閤寄任之意也」。乃踰次發舟。八軍相繼上陸。韓諸道競報警於國都。韓王命李鎰・申砬爲大將、使金誠一距慶尙右道、金玏距慶尙左道。

訓讀 清正、行長に後るること三日にして釜山に至る。行長已に前進すと聞き、切齒して曰く「悔ゆらくは豎子の先んずる所と爲る。吾れ豈に其の迹を踐まんや」と。乃ち轉じて間路を取り、火を慶州に縱つて其の守將を走らす。斬首千五百級。轉鬪して進む。向ふ所皆靡く。秀家、行長の深く入るを聞き、其の將佐に謂つて曰く「彼れ我が家より身を起す。吾れ功を爭うて援けず、彼をして敵に死せしめば、獨り太閤寄任の意に負くのみならざるなり」と。乃ち次を踰えて舟を發す。八軍相繼いで陸に上る。韓の諸道競うて、警を國都に報ず。韓王、李鎰・申砬に命じて大將と爲し、金誠一をして慶尙の右道を距ぎ、金玏をして慶尙の左道を距がしむ。

通釋 清正は行長より三日遲れて釜山に着いた。行長が早くも前進したと聞いて齒を喰ひしばつて殘念がつて曰ふには「失敗つた、野郎に出し拔かれたか。奴の跡なんかついてゆくものか」と。そこで方面を變へて別の道を進み、慶州に火をつけて、その守將を追ひ拂つた。斬首千五百級。それから、あちこちと戰ひつゝ進んだ。向ふ所皆閉口して開きなびいた。秀家は行長が深入りするのを聞いて部將參謀達に向つて曰ふには「彼は余が身内から身を起した者だ。もし余が功名を彼と爭つて援の手を出さず、敵中に死なせる樣なことになつたら、太閤が余に任せられた重任の心に背馳する許りでなく、個人としても薄情な人間になるだらう」と。そこで順序を飛ば

して船を繰り出した。八軍が續々上陸をした。韓の諸道は我れ勝ちに國都京城に警報した。韓王は李鎰と申砬とを大將に命じ、金誠一に慶尙の右道を、金玏に慶尙の左道を夫々を距がせた。

語釋 慶州（慶尙道。）

行長方圍金海。黑田長政援至。刈禾塡塹以陷之、引兵出左右道之間、絕其應援、進陷尙州。鎰已至州城北、覩城中火起、遣騎來候。行長望視之曰「我且奪其膽」。潛使銃卒伏橋下、銃之墮馬。鎰軍動。行長以大衆出、張二奇兵劫之。鎰駭走、歸申砬於忠州。砬收忠淸道兵八千、欲守鳥嶺。聞尙州陷、不敢進。行長進至鳥嶺、覩其險阨、使輕卒先行、周踐山谷。無敵。笑曰「朝鮮兵不要我于此。吾知其莫能爲也」。乃踰嶺至丹月驛、分兵爲二、擊申砬于彈琴臺下、斬之、遂取忠州而與淸正會。

訓讀 行長方に金海を圍む。黑田長政の援至る。禾を刈り塹を塡めて以て之を陷れ、兵を引いて左右道の間に出で、其の應援を絕ち、進んで尙州を陷る。鎰、已に州城の北に至り、城中、火起るを覩、騎を遣はして來り候ふ。行長之を望み視て曰く「我れ且に其の膽を奪はんとす」と。潛に銃卒をして橋下に伏し、之を銃して馬より墮さしむ。鎰の軍動く。行長、大衆を以て出で、二奇兵を張りて之を劫す。鎰、駭き走り、申砬に忠州に歸す。砬、忠淸道の兵八千を收め、鳥嶺を守らんと欲す。尙州陷ると聞き敢て進まず。行長進んで鳥嶺に至り、其

の險陋を視、輕卒をして先行し、周く山谷を踐ましむ。敵無し。笑つて曰く「朝鮮の兵我を此に要せず。吾れ其の能く爲す莫きを知るなり」と。乃ち嶺を踰えて丹月驛に至り、兵を分ちて二と爲し、申砬を彈琴臺下に擊つて之を斬り、遂に忠州を取りて清正と會す。

【通釋】行長が丁度金海城を包圍してゐた。黑田長政の援兵が來た。稻を刈り、それで堀を埋めてこの城を陷れ、それから兵を引き連れて慶尙の左道と右道の間に出で、敵の援軍の連絡を斷ち、進んで尙州城を陷れた。李鎰はその時州城の北邊までやつて來たが、城中に火の起るのを見たので、騎兵をやつて偵察させた。行長はそれを遠くから見つけて曰ふには「一つ奴の膽玉を潰してやらう」と。ひそかに銃兵を橋の下に隱し、この斥候兵を打つて馬から落させた。鎰の軍はそれを見て動搖した。そこを行長は大勢で打つて出で、二箇所に不意討の兵を設けて威かした。鎰は驚いて逃げ出し、忠州に行つて申砬と合した。砬は忠淸道の兵八千を軍勢に加へて鳥嶺を守らうと思つた。併し尙州が陷つたと聞いて思ひ切つて進まなかつた。行長は進んで鳥嶺に至り、その險阻な要害を見て、身輕な兵卒をして先に行かせ、山や谷を殘らず偵察させた。併し敵は一人も居なかつた。彼は笑つて曰ふには「朝鮮の兵は、こんな善い場所で我が軍を待ち受けない。して見ると朝鮮の兵もよく〳〵やくざなことが分る」と。そこで峠を越えて丹月驛に至り、兵を二手に分けて申砬を彈琴臺のほとりに擊つて之を斬り、それから遂に忠州城を攻め取つて清正と會つた。

【語釋】金海・尙州・鳥嶺（慶尙道。）○忠州・丹月驛・彈琴臺（忠清道。）

諸將皆至。乃相見于城外、議進取其京畿。清正曰、攝津守多功矣。至攻國都、先鋒當

見屬僕也」。行長曰「吾與子竝受約束。子何擅更之」。對曰「子之不告而發、亦出約束乎」。二人忿欲鬭。諸將解之曰「大敵在前。何私鬭爲」。鍋島直茂曰「太閤令二公迭爲先鋒。今盍分道往。聞道有二。自南者遠、自東者近。近者有漢江之險。唯二公所擇」。清正曰「吾寧取險而近者」矣。議乃定。行長間使人先馳之漢江、奪其南岸舟。清正遂發。遇韓使李應舜于途。捕之。初行長獲蔚山守將李彥誠、送書韓王、招降之。使彥誠齎去。彥誠不敢白。及取尙州、乃獲應舜、予之太閤劵書、使還責彥誠之報、且召李德馨。德馨嘗接我使人者也。韓王乃遣德馨乞降。途聞忠州陷、使應舜先往詗之。乃爲清正所捕。遂誅之也。德馨走去。

【訓讀】諸將皆至る。乃ち城外に相見、進んで其の京畿を取るを議す。清正曰く「攝津守功多し。國都を攻むるに至つては、先鋒は當に僕に屬せらるべきなり」と。行長曰く「吾れ子と竝に約束を受く。子何ぞ擅に之を更ふ」と。對へて曰く「子の告げずして發するは、亦約束に出づるか」と。二人忿り鬭はんと欲す。諸將之を解いて曰く「大敵前にあり。何ぞ私鬭を爲す」と。鍋島直茂曰く「太閤、二公をして迭に先鋒と爲らしむ。今盍ぞ道を分ちて往かざる。聞く、道二あり。南よりする者遠く、東よりする者近し。近き者漢江の險ありと。唯だ二公

の撰ぶ所」と。清正曰く「吾れ寧ろ險にして近きものを取らん」と。議乃ち定まる。行長間に人をして先づ馳せて漢江に之き、其の南岸の船を奪はしむ。清正遂に發す。韓の使李應舜に途に遇ひて之を捕ふ。初め行長、蔚山の守將李彥誠を獲、書を韓王に送り、之を招降せんとして、彥誠をして齎し去らしむ。彥誠敢て白さず。尙州を取るに及び、乃ち應舜を獲、之に太閤の劵書を予へ、還つて彥誠の報を責めしめ、且つ李德馨を召す。德馨は嘗て我が使人に接せし者なり。韓王乃ち德馨を遣はして降を乞はしむ。途に忠州陷ると聞き、應舜をして先づ往いて之を詗はしむ。乃ち清正の捕ふる所と爲る。遂に之を誅す。德馨走り去る。

【通釋】諸將が皆到着した。そこで忠州城外で相談をし、進んで京畿道を攻め取ることになつた。清正が曰ふには「攝津守(行長)は澤山な手柄を立てた。國都を攻めるのに、その先鋒は是非共私に任して貰ひ度い」と。行長が曰ふには「私は貴公と同じやうに命令を受けた。貴公は何で勝手にそれを變へようといふのだ」と。清正は答へて曰ふに「貴公が皆に默つて出掛けて終つたのはやはり命令に由るのか」と。二人は腹を立て勝負をしようとした。諸將はそれをなだめて曰ふのに「大敵が眼前に居る。何で私の喧嘩などするのか」と。鍋島直茂が曰ふには「太閤殿下はお二人に交互に先鋒になるやう言はれたのだ。今違つた道をば進んだなら好いではないか。聞く所によると道は二つあるといふことだ。南から行く方は遠く、東から行くものは近い。併し近い方には途中に漢江の難所が有るさうである。どちらでもお二人の好きな方を選んだら宜いでせう」と。清正が曰ふには「俺はいつそ難儀でも近い方を選ぶ」と。そこで相談が纏つた。行長はひそかに人を漢江に急行させて、その南岸の舟を奪ひ取らせた。清正はいよ〳〵出發した。途中で韓の使の李應舜といふ者を捕へた。最初行長は蔚山の守將李彥誠を捕へたので、書面を韓王に送つて、降參をすゝめて見ようと思ひ、彥誠にその書面を持つて行かせた。所

が彦誠は敢てそれを申し上げなかつた。後尙州を占領した時應舜といふものを捕へ、之に太閤の朱印のある書面を與へて、返つて彦誠の報告を求めさせ、又同時に李德馨といふ者を呼びよせた。德馨は前に日本の使者に應接してゐた者であつた。韓王は遂にその德馨を遣はして降參を乞はせた。德馨は途中で忠州が陷つたと聞いて應舜をして先づ行つてその樣子を見させた。斯くして淸正に捕へられたのである。淸正は遂にそれを誅した、德馨は逃げ去つた。

語釋 漢江（京畿道。）○蔚山（慶尙道。）○責彦誠之報（彦誠に持たせて歸した手紙の返事を要求したのである。）

韓已聞李鎰敗、大怖、而猶屬望申砬。晦日有騎、馳入都門。民迎問。對曰「申總兵死矣。關白軍將來矣」。都城大擾。王與世子夜駕奔平壤、告急於明。遣王子徵兵諸道。留都元帥金命元・副元帥申恪、以舟師扼漢江。命元聞淸正至、措疑兵遁。淸正抵江。無舟可渡。立望北岸久之。笑曰「敵舟有鳧。是無兵也」。令善泅者往取其舟以渡。五月四日、至都城南大門。有兵守門。視其旗幟、皆小西氏號也。蓋行長渡驪川、走敵將元豪、先一日自東大門入。王已遁矣。淸正益怒。

訓讀 韓已に李鎰の敗を聞き大に怖れ、而して猶ほ望を申砬に屬す。晦日騎有り、馳せて都門に入る、民迎へ問ふ。對へて曰く「申總兵死せり。關白の軍將に來らんとす」と。都城大に擾る。王、世子と夜駕して平壤に奔

り、急を明に告ぐ。王子を遣はして兵を諸道に徴さしむ。都元帥金命元・副元帥申恪を留め、舟師を以て漢江を扼せしむ。命元・清正至ると聞き、疑兵を措いて遁る。清正江に抵る。舟の渡るべき無し。立つて北岸を望むこと之を久しうして笑つて曰く「敵舟に鳧有り。是れ兵無きなり」と。善く泅ぐ者をして、往いて其の舟を取らしめて以て渡る。五月四日都城の南大門に至る。兵有り門を守る。其の旗幟を視るに、皆小西氏の號なり。蓋し行長、驪川を渡り、敵將元豪を走らせ、先だつこと一日東大門より入る。王已に遁れたり。清正益〻怒る。

通釋 韓は早くも李鎰の敗を聞いて大に恐れたが、まだ申砬に望をつないでゐた。晦日に騎兵が城門を馳せ入つた。人民が迎へて戰況を尋ねた。答へて曰ふには「申指揮官は討ち死した。關白の軍が追付け來るのであらう」と。都中大變な騷ぎになつた。王と世子とは夜、駕に乘つて平壤に逃げ、明に危急を知らせた。一方王子を遣つて諸道に於て兵を募らせた。王は都元帥の金命元と副元帥の申恪とを留めて舟軍で漢江を固めておかせた。命元は清正が來たと聞いて疑兵を配置して逃げて終つた。清正は川邊まで來て見た。渡るべき舟がない。立つたまゝやゝ暫し北岸を物色してゐたが、やがて笑つて曰ふには「敵の舟に鴨がゐる。つまり軍隊がゐないからだ」と。泳ぎの達者な者に向岸まで行て其の舟をとつて來させて渡つた。五月四日、都城の南大門まで來た。その門を兵士が守つてゐた。その旗指物を見ると、皆小西氏の紋章であつた。思ふに行長は驪川を渡つて敵將元豪を驅逐し清正より一日前に東大門から入城したのである。王はとうに逃げて終つてゐた。清正は益〻腹を立てた。

語釋 平壤（平安道。）○都城（京城は支那式に都の周圍に城壁があつて、それに東大門、南大門等の入口がある。依つて都城といふ）○疑兵（敵をまどはす爲めに設ける模擬の兵卒の軍隊をいふ。）○驪川（京畿道。）

居ルコト十餘日、諸將皆至ル。秀家自ラ居リ國都ニ、使ムニ諸將ヲシテ各〻圖ラ進取ヲ。金命元退イテ守リ臨津ヲ、呼ブ申恪ヲ。恪

不從、獨屯楊州。命元怒恪違節度、請王誅之。會咸鏡南道兵使李煇、來援恪、與浮田氏兵戰、大破之。而命元遂斬恪。王聞捷、遽赦之。不及。乃遣申硈及韓應寅、助命元守津北。我兩先鋒與長政合兵、軍津南、相持十餘日。伏精兵而佯卻。硈欲追之。其裨將劉克良止之。不聽而渡。應寅亦濟。遇伏驚走。三將還擊、大破之、擒硈及克良。其兵死傷、若溺者萬餘人。命元・應寅走歸平壤。我軍乃濟、至安城驛、乃探圖定軍所向。行長得平安道、清正得咸鏡道、而長政得黃海道。皆引兵北入。而韓將李洸・尹國馨・金睟、以全羅・忠清・慶尙三道兵五萬騎、入援王城、至龍仁。見我兵壘山上、挑戰。我兵不出。已而瞰其懈、出擊、大破之。

【訓讀】居ること十餘日、諸將皆至る。秀家自ら國都に居り、諸將をして各進取を圖らしむ。金命元退いて臨津を守り、申恪を呼ぶ。恪從はず、獨り楊州に屯す。命元、恪の節度に違ふを怒り、王に之を誅せんと請ふ。會く咸鏡南道の兵使李煇、來りて恪を援く。浮田氏の兵と戰ひて大に之を破る。而して命元遂に恪を斬る。王、捷を聞いて遽に之を赦す。及ばず。乃ち申硈及び韓應寅を遣はし、命元を助けて津北を守らしむ。我が兩先鋒、長政と兵を合せて津南に軍し、相持すること十餘日。精兵を伏せて佯り卻く。硈、之を追はんと欲す。其の裨將劉

克良之を止む。聽かずして渡る。應寅も亦濟る。伏に遇ひて驚き走る。三將還り撃つて大に之を破り、硈及び克良を擒にす。其の兵の死傷し若しくは溺るゝ者萬餘人。命元・應寅、走つて平壤に歸る。我が軍乃ち濟り、安城驛に至り、乃ち鬮を探りて軍の向ふ所を定む。行長は平安道を得、清正は咸鏡道を得、而して長政は黃海道を得たり。皆兵を引いて北に入る。而して韓將李洸・尹國馨・金睟、全羅・忠淸・慶尙三道の兵五萬騎を以て、入りて王城を援けんとし、龍仁に至る。我が兵の山上に壘するを見て、戰を挑む。我が兵出です。已にして其の懈るを瞰ひ、出で撃つて大に之を破る。

〔通釋〕それから十餘日經つと諸將が皆到着した。秀家は自ら京城に陣を置き、諸將に銘々進軍占領を圖らせた。金命元は退いて臨津を固め、申恪を呼んだ。恪はその命令に從はずに一人楊州に兵を駐めてゐた。命元は恪が規律に違ふのを怒つて王に彼を誅せんことを請うた。丁度その時咸鏡南道の兵使李渾が恪を援けに來たので兵を合せて浮田氏の軍と戰ひ大に之を破つた。而して命元は遂に恪を斬つた。王は捷報を聞いて急に赦免の命を發した間に合はなかつた。そこで申硈と韓應寅をやつて、命元を助けて臨津の北を守らせた。我が兩先鋒加藤・小西は、長政と兵を合せて臨津の南に陣取り、對陣すること十餘日に及んだ。我が軍では精兵を隱して退却して見せた。硈は追ひかけようとした。その副將の劉克良がそれを止めた。きかないで渡つた。應寅の軍も渡つた。伏兵にぶつつかつて驚いて逃げた。加藤・小西・淺野の三將は引き返して攻め大に破つて硈と克良とを生捕にした。敵兵で死傷したり、溺れた者は萬餘人に達した。命元と應寅とは平壤に逃げ返つた。そこで我が軍は全部渡り、安城驛まで行つて、くじを引いて軍の向ふ方向を定めた。行長は平安道に當り、清正は咸鏡道に當り、長政は黃海道に當つた。そこで皆夫々兵を引きつれて北に向つた。所が韓の大將、李洸・尹國馨・金睟が全羅・忠淸・慶尙の三道の

兵五萬騎を率ゐて王城を救はうといふので、龍仁までやつて來た。そして我が兵が山上に壘を構へてゐるのを見て戰を挑んだ。我が兵はそれに應じなかつた。その中に韓軍の油斷を見すまして、壘から出で撃つて大に之を破つた。

語釋 臨津・楊州・龍仁（京畿道。）〇安城（黃海道。）

當是時、自國都至釜山數十城、烽火相應、皆爲我兵所守、以與行營通聲息。秀吉乃遣石田三成・增田長盛・大谷吉隆、引游軍六萬赴援。伊達政宗亦請而往。三奉行入韓、宣令襃功。

訓讀 此時に當り、國都より釜山に至るまでの數十城、烽火相應じ、皆我が兵の守る所と爲り、以て行營と聲息を通ず。秀吉乃ち石田三成・增田長盛・大谷吉隆を遣はし、游軍六萬を引いて赴き援けしむ。伊達政宗も亦請うて往く。三奉行韓に入り、令を宣べ功を襃す。

通釋 この當時、國都から釜山までの間の數十城は、全部我が兵に守られ、烽火を擧げて合圖をし合ひ、那古耶の大本營と通信を交した。秀吉はそこで石田三成・增田長盛・大谷吉隆の三人に豫備隊六萬を率ゐて援けに行かせた。伊達政宗も願ひ出て出かけた。上記の三奉行は韓に入つてから、秀吉の命令を傳へ宣べ、功を褒賞した。

行長既徇平安、至大同江、遣書於平壤、復召李德馨、使平調信・玄蘇相見江中、招降

之議不諧。二人曰、若主、第導我伐明。不則併夷滅之。乃還。六月、韓王留左相尹斗壽・元帥金命元守平壤、而自走寧邊、欲入咸鏡。聞清正在焉、乃走義州、令右相柳成龍發兵益於命元、固守以竢明援兵。命元與行長等夾江相持。伺我兵稍怠、夜遣精兵濟襲之。行長叱衆起、令義智絶其後、撃破韓兵。韓兵亂淺而走。行長曰「是可亂也」。舉軍從之。斗壽・命元、棄守走。

訓讀 行長既に平安を徇へ、大同江に至つて書を平壤に遣り、復、李德馨を召し、平調信・玄蘇をして、江中に相見て、之を招き降さしむ。義諧はず。二人曰く「若が主、第我を導いて明を伐て。不らざれば則ち併せて之を夷滅せん」と。乃ち還る。六月、韓王、左相尹斗壽・元帥金命元を留めて、平壤を守らしめ、而して自ら寧邊に走り、咸鏡に入らんと欲す。清正在りと聞き、乃ち義州に走る。右相柳成龍をして兵を發して命元に益し、固く守りて以て明の援兵を竢たしむ。命元、行長等と江を夾みて相持す。我が兵の稍怠るを伺ひ、夜、精兵を遣はし濟つて之を襲はしむ。行長、衆を叱して起ち、義智をして其の後を絶たしめ、撃つて韓兵を破る。韓兵淺きを亂つて走る。行長曰く「是れ亂るべきなり」と。舉軍之に從ふ。斗壽・命元、守を棄てゝ走る。

通釋 行長は最早平安道をすつかり平げて終ひ、大同江に至つて手紙を平壤にやつてまた李德馨を呼びよせ、平調信と玄蘇とをして大同江の江上で會見して韓王を招き降さうとした。併し相談は纏まらなかつた。二人が曰ふには「貴方の主君は唯だ日本軍を案内して明を伐てばよい。それが不承知なら一緒に滅してやる」と。そうい

つて返つて來た。六月、韓王は左相尹斗壽と元帥金命元をして平壤を守らせ、自分は寧邊に走り咸鏡道に入らうとした。清正が居ると聞いて義州に逃げた。右相の柳成龍をして軍を出して命元に加勢し・嚴重に平壤を守つて明の援兵の來るまで支へさせた。命元は行長等と大同江を挾んで對陣してゐた。我が兵がいくらか氣が緩んだのを偵察し、夜精兵を遣はし、我が陣を襲はせた。行長は麾下を怒鳴り散らして激勵し、義智をして敵の後方連絡を絶たせ、韓兵を打ち破つた。韓兵は淺瀨を渡つて逃げた。行長が曰ふには「これは渡ることが出來る」と。全軍敵を追うて河を横切つた。斗壽・命元は守備を放擲して遁走した。

語釈 大同江・寧邊・義州(平安道。)

行長入城、得韓積粟十餘萬石。使使還趣國都諸將、欲與俱西曰「太閤志主伐明。今已取平壤。平壤以西莫復支者。自鴨綠江至明北京、不過百餘里。吾之全軍卷甲趨之、使彼不及備、可以得志矣」秀家與三奉行答曰「全羅・江原二道未定。我未可深入。我水軍將循全羅而北會于黃海。然後水陸竝進、是萬全之策也」乃分諸將守國都・平壤間諸城。大友義統守鳳山、黑田長政守白川、小早川隆景守開城、以備應援。

訓読 行長城に入り、韓の積粟十餘萬石を得たり。使をして還つて國都の諸將を趣さしめ、與俱に西せんと欲して曰く「太閤の志は明を伐つを主とす。今已に平壤を取る。平壤以西復支ふる者莫し。鴨綠江より明の北京に

至る、百餘里に過ぎず。昔の全軍、甲を卷いて之に趣き、彼をして備ふるに及ばざらしめば、以て志を得べし」と。秀家、三奉行と答へて曰く「全羅・江原の二道未だ定まらず。我れ未だ深く入るべからず。我が水軍將に全羅に循ひて北黄海に會せんとす。然る後に水陸竝び進む、是れ萬全の策なり」と。乃ち諸將を分ちて、國都・平壤間の諸城を守らしむ。大友義統は鳳山を守り、黑田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守り、以て應援に備ふ。

通釋 行長は城に入つて、韓の積み蓄へた兵糧米十餘萬石を分捕つた。使を後方へやり、國都京城にゐる諸將を促さしめて一緒に西に向はうと思つて曰ふには「太閤の志は明を伐つのが主である。今すでに平壤を取つた。平壤から西はもう持ちこたへる者はゐない。そして鴨綠江から明の北京までは百餘里に過ぎぬ。我が全軍が鎧を卷き擔いで急行し、敵をして防備の暇を與へないやうにすれば立派に目的を遂げることが出來る」と。秀家は三奉行と共に答へて曰ふには「全羅と江原の二道がまだ平定せぬ。我が軍はまだ深入りすべき時機ではない。又我が水軍は今や全羅道の岸に沿うて、北方黄海に會するはづである。それを俟つて水陸相竝んで進んだならば、これが萬々過ちなき方法である」と。そこで諸將を手分けして、京城と平壤の間の諸城を守らせることにした。大友義統は鳳山を守り、黑田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守つて應援に備へた。

語釋 鳳山・白川（黄海道。）○開城（京畿道。）

行長曰、望水軍至。水軍諸將既發釜山、與慶尙右水使元鈞戰破之、遂出全羅。藤堂
高虎聞韓候船在唐島、以飛船赴之、奪其百餘艘、上島焚虜營。全羅水軍節度使李

舜臣、以艨艟鬭艦數千艘在巨濟洋。諸將集飲于毛利勝信營議進戰。脇坂安治曰、「先以大船巨炮挑戰、然後奪其船。」加藤嘉明曰、「是劫而去之。非挑而奪之。挑而奪之者、宜以小船示弱、及敵近決戰。不則太閤謂水軍將士不欲戰也。」安治曰、「此事至重、一敗則陸軍亦不能振。子胡猖狂乃爾。」嘉明怒。高虎居間和解。勝信曰、「諸公受命於千里海外、忠告不隱、務利公事。太閤多良臣如此。何憂於戰。」因侑酒。酒數行、九鬼嘉隆曰、「今夜三鼓解纜、旦日進戰、船之大小隨宜耳。」嘉明潛起如厠、招其軍吏、先期而進、比曉以走舸三艘直衝敵列艦、奪其二十艘。諸將繼進。舜臣卻。我軍追之入洋中。舜臣乃縱左右翼、以巨熕擊碎我船。來島康親死之。安治苦戰、亡其衆而退。舜臣因屯閑山、以距我水軍。我水軍是以不能合陸軍。陸軍亦未遂能進也。

訓讀 行長日に水軍の至るを望む。水軍の諸將既に釜山を發し、慶尚右水使元鈞と戰つて之を破り、遂に全羅に出づ。藤堂高虎、韓の候船唐島に在りと聞き、飛船を以て之に赴き、其の百餘艘を奪ひ、島に上り虜營を焚く。全羅水軍節度使李舜臣、艨艟鬭艦數千艘を以て巨濟洋に在り。諸將毛利勝信の營に集飲して進戰を議す。脇坂

安治曰く「先づ大船巨砲を以て戰を挑み、然る後に其の船を奪はん」と。加藤嘉明曰く「是れ劫して之を去らしむるなり。挑んで之を奪ふに非ず。挑んで之を奪ふ者は、宜しく小船を以て弱を示し、敵の近づくに及んで決戰すべし。否らずんば則ち太閤、水軍の將士は戰を欲せずと謂はん」と。安治曰く「此事至重、一たび敗るれば則ち陸軍も亦振ふ能はず。子、胡ぞ猖狂乃ち爾る」と。嘉明怒る。高虎、間に居て和解す。勝信曰く「諸公命を千里の海外に受け、忠告して隱さず、務めて公事に利す。太閤、良臣多きこと此くの如し。何ぞ戰を憂へん」と。因つて酒を命む。酒數行、九鬼嘉隆曰く「今夜三鼓纜を解いて、旦日、進み戰ひ、船の大小宜しきに隨はんのみ」と。嘉明、潛に起つて厠に如き、其の軍吏を招き、期に先だちて進み、曉くる比走舸三艘を以て直に敵の列艦を衝き、其の二十艘を奪ふ。諸將繼ぎ進む。舜臣卻く。我が軍之を追うて洋中に入る。舜臣乃ち左右の翼を縱ち、巨熕を以て我が船を擊碎す。來島康親之に死す。安治苦戰し、其の衆を亡ひて退く。舜臣因つて閑山に屯し、以て我が水軍を距ぐ。我が水軍是を以て陸軍に合する能はず。陸軍も亦未だ遂に進む能はざるなり。

【通釋】行長は毎日水軍の到着を待つてゐた。水軍の諸將士はその以前すでに釜山を出發し、慶尙右水使の元均と戰つて之を敗り、いよ／＼全羅道の海上に出た。藤堂高虎は韓の偵察船が唐島に居ると聞き、早舟をつれてそこに急行し、敵の百餘艘を分捕り、島に上つて敵の陣屋を燒き拂つた　全羅水軍節度使の李舜臣は戰船數千艘を率ゐて巨濟洋にゐた。諸將は毛利勝信の陣屋に會合酒宴をして進み戰ふべき方法を相談した。脇坂安治が曰ふには「先づ大船と大砲とで戰を挑んだ後でその船を奪ひ取らう」と。加藤嘉明が曰ふには「それは恐怖を與へて逃がして終ふことになる。戰を挑んで敵を奪ふ方法ではない。本當に挑んで奪ひ取らうといふには、小さい舟を出してこちらの弱さを見せ、敵が近づいて來た時決戰をするが宜しい。さうでもしなければ太閤は水軍の將士

は戰を嫌がつてゐると思はれるだらう」と。安治が曰ふには「此は非常に大切な事であつて、一度敗け軍になつたら陸軍の方もその影響を受けて活動ができなくなる。それを貴公は何故さう無鐵砲な事を言はれるのか」と。嘉明は腹を立てた。高虎が間に入つて二人を仲直りさせた。勝信が曰ふには「諸公は海外千里も遠方の土地に征討の命を受けられ、互に腹にためずに忠告し合ひ、力めて公事に利益あらしめんとせられてゐる。太閤殿下にはかくの如く良臣が多い。故に戰に就ては何も憂ふる所はない」と。さういつて酒をすゝめた。酒が數回座を廻ると九鬼嘉隆が曰ふには「今夜十二時に纜を解いて出發し、明日になつたら進んで戰ひ、船の大小はその時の便宜によつて定めよう」と。嘉明はそれを聞いてそつと立つて厠に行き、部下を呼んで約束の時刻より先きに進み、早船三艘で眞直敵の列艦に突き進んでその中二十艘を奪つた。諸將がそれに續いて進み、夜明頃に及んだ。舜臣は退却した。我が軍はそれを追うて洋上に出た。そこで舜臣は左右の翼に包圍され、大砲を放つて我が軍の船を擊ち碎いた。來島康親はそれが爲めに討死した。安治は苦戰し、その部下を失つて退いた。舜臣はそれに乘じて閑山島に錠泊して我が軍を拒いだ。我が水軍は平壤の陸軍と合することが出來なくなつた。陸軍もその爲めに遂に進むことができなかつた。

【語釋】唐島・巨濟洋・閑山（慶尚道。）○三鼓（今の午後十二時。）

明主翊鈞聞秀吉兵入韓則恐。會其國西北邊有亂。大將李如松率諸軍屯寧夏、國都兵寡。明主召其大臣、問韓當援否。大臣曰「和窺明久矣。而明之屏在韓。韓先被和

兵而明不援、韓且折而入和。和韓爲一、分利於明、合兵戮力、以出遼東、則勢如建瓴水于屋矣。顧韓民畏和兵而心不服焉。我遣一將、助韓王以招聚之、因其力以捍禦東北、是名以明援韓、而其實以韓援明也。明何患於和哉。明主從之、遣其將祖承訓・史儒算將援韓。而下書於琉球・暹羅、爲侵和之勢、以縻秀吉、使其勿航海西北嚮而大廳有疾。謂秀吉已航海也、憂疑疾篤。秀吉聞之、馳歸覲之。至則已薨。

通釋 明主翊鈞、秀吉の兵韓に入ると聞いて則ち恐る。會々其の國の西北邊に亂有り。大將李如松、諸軍を率ゐて寧夏に屯し、國都兵寡し。明主其の大臣を召し、韓の當に援くべきか否かを問ふ。大臣曰く「和、明を窺ふこと久し。而して明の屛は韓に在り。韓先づ和兵を被りて明援けざれば、韓且に折れて和に入らんとす。和韓、一と爲り、利を明に分ち、兵を合せ力を戮せ、以て遼東に出でば、則ち勢瓴水を屋に建すが如し。顧ふに韓民、和兵を畏れて心に服せず。我れ一將を遣はし、韓王を助けて以て之を招聚し、其の力を因つて以て東北を捍禦せん。是れ名は明を以て韓を援け、而して其の實は韓を以て明を援くるなり。明何ぞ和を患へんや」と。明主之に從ふ。其の將祖承訓・史儒算を遣はし、將に韓を援けんとして、書を琉球・暹羅に下し和を侵すの勢を爲し、以て秀吉を縻し、其をして海を航して西北に嚮ふ勿らしむ。而して大廳疾有り。秀吉已に海を航すと謂ふや、憂疑して疾篤し。秀吉之を聞き、馳せ歸りて之に覲す。至れば則ち已に薨ぜり。

通釋 明國の天子翊鈞は秀吉の軍隊が韓に入つたと聞いたので恐れをなした。丁度その時、明國の西北の邊境に亂があつた。大將の李如松が諸軍を率ゐて寧夏に屯してゐたので、都には兵が少なかつた。明主は大臣を召して、韓を救つてやるが好いかどうかと問うた。大臣が曰ふには「日本は久しく明を覦つてをります。そして明の防禦地は韓であります。韓が先づ日本兵に攻められて明が援けなかつたなら、韓は氣勢挫けて日本に加擔するでせう。日本と韓が同盟をして明國から利益を分ち取らうと致すことに定め、兵を合せ力を合せて遼東に勢揃ひしたならば、その勢は瓶の水を屋根の上からひつくり返すやうなものでありませう。（その勢が急で而かも容易に出來ること）考へて見まするに、韓の人民は日本兵を恐がつてゐるのであつて、心から服從してゐるわけではありますまい。私は一人の大將をやり韓王を助けることにして人民を呼び集め、その力で我が東北の邊境を防禦したいものです。名義上は明が韓を援けることになり、實質に於ては韓をして明を援けしめることになるのです。さうすれば日本のことは少しも心配する必要はありません」と。明はその意見に從つた。そこで指揮官祖承訓と史儒算とをやつて韓を助けることになつた。先づ手紙を琉球・暹羅に送つて日本を攻める樣子をさせ、秀吉が海を渡つて西北に進まぬやうに牽制を試みた。所が秀吉の母大廳が病氣にかゝつた。秀吉が最早海を渡つたことゝ思ひ、心配し疑ひ重態に陷つた。秀吉はそれを聞き、見舞の爲め馳せ歸つた。歸つて見るともう大廳は薨じて終つてゐた。

語釋 瓴水（瓴は瓦の名。瓴水は屋根の瓦の上から流れる水。）〇縻（つなぎ止めること。）〇西北嚮（朝鮮に向ふをいふ。）

當二是時一、承訓・儒算既入二韓一。二將皆遼東勇將、數與レ胡戰有レ功。甚輕二和人一。和人前掠二明

疆者皆海盜、甲仗敝惡。明人狃見之、以爲豐臣氏兵亦如此也。於是、至嘉山間韓人曰「平壤和兵無乃走乎。」曰「否。」承訓擧酒祝曰「天使我成大功也。」進舍順安。營未定。行長偵知、夜遣輕卒劫其營。營亂。乃笑曰「此虜亦易與耳。」明日自往與明軍戰于安定。旗幟偉麗、人馬皆被鬼頭獅面。明馬駭。行長麾兵蹂之。儒算下馬鬪、中丸斃。時霖雨。我兵迫明人於淖、擊鏖之。承訓挺身而走。行長因投書韓王曰「王盍導我伐明。明當我兵、猶羊群放一虎。王所知也。今、遼東既無明隻騎、而我舟師十餘萬、又來自西海。未知大駕將復何逃也。」當是時、韓猛將精兵多在咸鏡道、而爲清正所阻、不能來援韓王。

【訓譯】是の時に當り、承訓・儒算、既に韓に入る。二將は皆遼東の勇將、數胡と戰つて功有り。甚だ和人を輕んず。和人の前に明疆を掠する者は皆海盜、甲仗敝惡なり。明人之を狃見し、以爲らく豐臣氏の兵も亦此くの如きなりと。是に於て、嘉山に至り、韓人に問うて曰く「平壤の和兵乃ち走る無らんか」と。曰く「否」と。承訓酒を擧げ祝して曰く「天、我をして大功を成さしむるなり」と。進んで順安に舍す。營未だ定らず。行長偵知し、夜輕卒を遣はして、其の營を劫す。營亂る。乃ち笑つて曰く「此の虜も亦與し易きのみ」と。明日、自ら往いて明

の軍と安定に戰ふ。旗幟偉麗。人馬皆鬼頭獅面を被る。明の馬駭く。行長兵を麾いて之を蹂ましむ。儒算、馬を下りて鬪ひ、丸に中つて斃る。時に霖雨す。我が兵明人に淖に迫り、撃つて之を鏖にす。承訓身を挺んでゝ走る。行長因つて書を韓王に投じて曰く「王盍ぞ我を導いて明を伐たざる。明の我が兵に當る、猶ほ羊群に一虎を放つがごときは、王の知る所なり。今、遼東既に明の隻騎なし。而して我が舟師十餘萬、又西海より來る。未だ大駕將に復何くに逃れんとするを知らざるなり」と。是の時に當り、韓の猛將精兵、多く咸鏡道に在り。而して清正の阻つる所と爲り、來つて韓王を援くる能はず。

通釋 この當時、承訓・儒算の二人は既に韓に入つてゐた。この二人は共に遼東の勇將で、度々北方蠻族とも戰つて功をあげた。頗る日本人を輕蔑してゐた。前に日本人で明の沿岸に掠奪を働いた者は皆海賊で、甲冑武器などは皆やぶれた粗末なものであつた。明人はそれを見つけてゐるので、豐臣氏の軍隊もそんなものだらうと想像してゐた。さて彼らは嘉山に到着して韓人に問うて曰ふには「平壤の日本兵は逃げて終ひはせんか」と。すると「否」といふ返事なので、承訓は酒盃をあげて祝つて曰ふには「天が俺に大手柄をさせてくれるわい」と。進んで順安に泊つた。まだちやんとした陣屋も決まらなかつた。行長はさぐつて樣子を知り、夜身輕な兵卒を遣はしてその陣營を威かした。敵營は恐れ亂れた。それで笑つて曰ふには「この敵も大した奴ではない」と。翌日自分から出陣して明の軍と安定で戰つた。その旗指物は大きく美しくて、人は鬼の面を馬は獅子の面を被つてゐた。明の馬は恐れて動かなくなつた。行長は兵に號令してそれを縱橫に擊つてかゝらせた。儒算は動かなくなつた馬から下りて戰つたが銃丸に中つて死んだ。その頃丁度長雨であつた。我が兵は明人をぬかるみに追ひつめ、自由を失つた所を討つて皆殺にした。承訓は辛くも身一つで逃れ走つた。行長はそこで手紙を韓王にやつて曰ふには、

「王は何故我が案内をして明を伐たうとせぬのであるか。明が我が軍に當る樣は、丸で羊群に一匹の虎を入れた樣なもので、到底お話にならぬのは王のよく承知の所だ。今や遼東にはもう明の一騎も居らぬ。而も我が助軍十餘萬が又西海からやつて來ることになつてゐる。王は一體どこに逃げ終せる心算であられるのか」と。その當時、韓の猛將精兵は多く咸鏡道に居つた。清正に邪魔をされて韓王を援けに來ることができなかつた

語釋 嘉山・順安・安定（平安道）

清正之入咸鏡道也、虜安城民三人使前導。二人辭。清正立斬之。其一人懼從之。至永興、聞二王子遁咸鏡北道、則大喜、留直茂・賴定守永興、而自以其輕兵日行數百里、至鐵嶺、踰而北。北道兵使韓克諴、以六鎭彍騎逆清正于海汀倉。北兵善射、憑平地馳突。我軍多步兵。不利卻。會日暮、收入倉內。韓兵沓至圍之。矢下如雨。清正排倉粟爲城、發銃拒之。應手斃千餘人。韓兵退、上鐵嶺而陣、欲待旦戰。清正夜分兵數千、環敵而伏。旦大霧。克諴將下嶺。而我兵四面齊起、大破之、追北至鏡城、又大破之、遂擒克諴、縱火焚城。

訓讀 清正の咸鏡道に入るや、安城の民三人を虜にして先導せしむ。二人、辭す。清正立ちどころに之を斬る。

其の一人懼れて之に從ふ。永興に至り、二王子咸鏡北道に遁ると聞き、則ち大に喜び、直茂・賴定を留めて永興を守らしめ、而して自ら其の輕兵を以て日に行くこと數百里、鐵嶺に至り、踰えて北す。北道兵使韓克誠、六鎭の彍騎を以て清正を海汀倉に逆ふ。北兵善く射、平地に憑つて馳突す。我が軍步兵多し。利あらずして卻く。會ゝ日暮れ、收めて倉内に入る。韓兵、沓至して之を圍む。矢下ること雨の如し。清正倉粟を排して城と爲し、銃を發して之を拒ぐ。手に應じて千餘人を斃す。韓兵退き、鐵嶺に上りて陣し、旦を待つて戰はんと欲す。清正夜、兵數千を分ち、敵を環りて伏す。旦大に霧ふる。克誠將に嶺を下らんとす。而して我が兵四面より齊しく起り、大に之を破り、北ぐるを追うて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に克誠を擒にし、火を縱つて城を焚く。

【通釋】清正が咸鏡道に入ると、安城の民三人を捕へて、之に道案内をさせた。二人は之を拒んだ。清正はすぐさま斬つて捨てた。すると殘る一人は懼れをなして命に從つた。永興に行つて二王子が咸鏡北道に遁げたと聞き、清正は大いに喜び、直茂・賴定を殘して永興を守らせ、自ら部下の輕兵を率ゐて日ごとに數百里を急行し、鐵嶺に着き又其處を踰えて北進した。北道兵使韓克誠は六鎭の騎射隊を率ゐて清正を海汀倉に逆へ擊つた。北兵は弓を射ることは上手で又平地を恃んで馳け廻り突き進むのであつた。我が軍は之に反して步兵が多かつた。我が軍は利あらずして退いた。丁度日が暮れたので兵を收めて倉内に入つた。韓兵が重り合つて押寄せ來り我を取り圍んだ。矢は雨の樣に降つた。清正は倉の米俵を積んで城を築き銃を放つて之を拒いだ。手に應じて千餘人を斃した。そこで韓兵も退いて鐵嶺に上つて陣を敷き、明けるのを待つて戰はうとした。清正は夜中に、數千の兵隊を分け敵を取り卷いて兵を隱した。あくる朝大霧が降つた。敵將克誠が嶺から下りようとした。すると我が兵は四方から一齊に起つて大に之を破り、逃げるのを追うて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に克誠を捕へ、火をつけて城

を焚き拂つて終つた。

語釋 永興・鐵嶺・鏡城(咸鏡道。)〇彍騎(馬上弓を射る驍兵隊。)

聞二王子在會寧府、驅而赴之。府韓極北也。行五十日至焉。府使鞠景仁懼、拘二王子、使人來乞降。且曰「府內食盡、王子不食三日。願賜之食。」清正許之、欲自入城。將校皆諫曰「吾窺府內、虜人塡咽。我以寡兵入、恐有變也。」清正曰「虜何能爲。吾已失王。不可又失王子。卽有變吾與王子決死。毋憾也。」乃與十餘騎入城。令饋者數十人人執一器隨而入。韓人危疑、張弓環清正。清正叱之、辯其無他。韓人不能解。清正自開襟當箭、取印於懷、印紙示是。韓人捨弓拜。於是清正拘王子及其大臣黃赫・金貴榮等、使人護送之鏡城。

訓讀 二王子會寧府に在りと聞き、驅つて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと五十日にして至る。府使鞠景仁懼れ、二王子を拘へ、人をして來つて降を乞はしむ。且つ曰く「府內食盡き、王子食はざること三日。願はくば之に食を賜へ」と。清正之を許し、自ら城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く「吾れ府內を窺ふに、虜人塡咽す。我れ寡兵を以て入らば、恐らくは變有らん」と。清正曰く「虜何ぞ能く爲さん。吾れ已に王を失ふ。又王

子を失ふべからず。即し變あらば吾れ王子と死を決せん。憾毋きなり」と。乃ち十餘騎と城に入る。饋者數十人をして人ごとに一器を執り、隨つて入らしむ。韓人危疑し、弓を張つて清正を環る。清正之を叱し、其の他無きを辯ず。韓人解する能はず。清正自ら襟を開いて箭に當り、印を懐より取り、紙に印して是に示す。韓人弓を捨てゝ拜す。是に於て、清正、王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしむ。

通俗釋 二王子が會寧府に居ると聞いたので、馬を驅つて其地へ向つた。會寧府と云ふのは朝鮮の北端である。そして五十日も掛つてやつと到着した。府使鞠景仁は懼れて二王子を拘へ置き、人を派して降服を乞はしめた。そして曰ふには「府内では食糧が盡き、王子も三日間食を取られない。どうぞ願はくは王子に食を與へて下さい」と。清正は之を許し、自身で城中に入らうと思つた。すると將士連は皆諫めて、曰ふには「吾々が府内の様子を窺ひ見るに、虜人がいつぱいに詰つて居ります。それだのにこちらで少數の兵を以つて入つたならば、或ひは變事が起るでせうから、御止めなさい」と。清正が曰ふのに「何、虜共は何が出來るもんか。自分は先きに國王を取り逃した。今又王子を取り逃すことはどうしても出來ないのだ。若し異變あらば、自分は王子と死を決する。さすれば死んでも心殘りはないのだ」と。そこで十騎餘りを引きつれて城内に入つた。又食物を送る者數十人をも、各人に一つづゝの器を持たせて一緒に城内に入らせた。韓人は危ぶみ疑ひ、弓を張つて清正をおつ取り圍んだ。清正は之を叱責して他意無きことを辯解した。それが韓人には通じなかつた。そこで清正は自分の襟を開いて箭の前に立ち塞がり、印判を懐から取出して紙に押して見せた。すると初めて韓人は清正であることを知り、弓を捨てゝ清正を拜した。是に於いて清正は王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしめた。

語釋 會寧府（咸鏡道）○開襟（胸を矢石に當てゝ敵しない意を表はす。）○印紙（別意なき證を示す。）

乃問景仁曰「朝鮮北境盡於此乎」。對曰「然」。曰「北鄰何國」。曰「兀良哈」。清正乃以八千人進入其境、攻一城拔之。既夜、下令曰「勿釋甲」。夜半、胡騎大至。我兵力戰走之。清正曰「虜不意我至。我一捷、足以報太閤矣」。乃收其貨寶、引兵南還。胡騎躡之。清正自殿而退。終至海濱、西南望得高山。韓捕虜曰「富士岳也」。清正下馬、免冑而拜、謂其騎曰「自吾辭太閤、謂日西北行矣。今望岳於西南、覺吾行遼遠也」。乃歸、二十日至鏡城。

讀方 乃ち景仁に問うて曰く「朝鮮の北鏡、此に盡くるか」と。對へて曰く「然り」と。曰く「北隣は何の國ぞ」と。曰く「兀良哈」と。清正乃ち八千人を以て進んで其の境に入り、一城を攻めて之を拔く。既にして夜なり。令を下して曰く「甲を釋くこと勿れ」と。夜半、胡騎は大に至る。我が兵力戰して之を走らす。清正曰く「虜、我が至るを意はず。我が一捷、以て太閤に報ずるに足れり」と。乃ち其の貨寶を收め、兵を引いて南に還る。胡騎之を躡す。清正自ら殿して退く。終に海濱に至り、西南に望んで高山を得たり。韓の捕虜曰く「富士岳なり」と。清正馬を下り、冑を免いで拜し、其の騎に謂つて曰く「吾れ太閤に辭してより、日に西北に行くと謂へり。今、岳を西南に望む。吾が行の遼遠なるを覺ゆ」と。乃ち歸り、二十日鏡城に至る。

通釋 そこで景仁に問うて曰ふには「朝鮮の北の境は此でお終ひか」と。答へて曰ふには「左樣でございます」

と。「それでは北の隣の國は何と云ふ國か」と又問うた。「兀良哈と申します」と答へた。そこで清正は八千人をつれて進んで其の境に入り、一城を攻め落した。其の内に夜になつた。清正は陣中に令して曰ふには「鎧をぬいではならぬ」と。夜半に胡騎が多數押寄せた。我が兵力戰して之を蹴散らした。清正が曰ふには「虜共は乃公が來るとは思ひ設けなかつたのだ。今我れ一たび捷つたことは太閤に報告するに十分だ」と。そこで其の城の寶物を取り上げ、兵を引き隨へ、南を指して還つた。胡騎が後を追ひ掛けて來た。清正は自ら部隊の後方にさがつて退いた。終に濱邊に至つて西南を望むと一つの高山を見つけた。韓の捕虜が「あれは日本の富士山です」と言つた。清正は馬から下りて冑をぬいで仰ぎ拜み、其の騎馬に向つて曰ふには「自分は太閤殿下に暇乞ひしてから毎日西北の方に向つて進んだと思つてゐた。が、今富士山を西南の方向に望む。して見ると我が一行の遠くへ來たことが分る」と。そこで歸路に着き、二十日目に鏡城に到着した。

語釋　兀良哈（朝鮮と地隔てゝゐるので之を疑ふものが多い。一說に邊外の地を朝鮮にてオランカイと稱すといふ。）○一城（宛鄲城。）○海濱（北青浦。）○富士岳（これは傳稱にて事實ではない。）

八月、韓王自義州遣李蓂・李元翼來攻平壤者再。行長輒擊卻之。王亦聞清正已略定咸鏡、恐其與行長幷力來襲也、益告急於明。明既得承訓敗聞、擧朝震驚。大司馬石星說明主曰「秀吉兵乘勝而遠鬪。未可與爭鋒。且寧夏未平。復有事於遼東。不若且議和以紓禍也」。因薦沈惟敬。惟敬越人、慧黠有辯口。遊燕、與燕倡家僕鄭四善。鄭

四嘗在對馬、惟敬以故略知和事、徼幸富貴、其友袁茂、嘗納女於星、星因知惟敬、召而與語、大悅、遂薦之。於是、明主以惟敬爲遊擊將軍、多資金帛、往說我軍、投書平壤、卑辭乞和。行長與宗義智見惟敬於城北。曰「明即欲和、宜使使濟海」因徵數條、惟敬盡順其意、曰「歸取報、五十日復來」乃請界平壤西北十里、和韓俱不相踰、行長許而遣歸、告狀於秀家。

【譯文】八月、韓王、義州より李賓・李元翼を遣はし、來つて平壤を攻むること再びす。行長輙ち擊つて之を卻く。王亦清正已に咸鏡を略定すと聞き、其の行長と力を幷せて來り襲ふを恐るゝや、益々急を明に告ぐ。明既に承訓の敗聞を得、擧朝震驚す。大司馬石星、明主に說いて曰く「秀吉の兵、勝に乘じて遠く鬪ふ。未だ與に鋒を爭ふべからず。且つ寧夏未だ平がず。復遼東に事あり。且く和を議して以て禍を紓べんに若かざるなり」と。因つて沈惟敬を薦む。惟敬は越人、慧黠にして辯口あり。燕に遊び、燕の倡家の僕鄭四と善し。鄭四嘗て對馬に在り。惟敬、故を以て略和事を知り、富貴を徼幸す。其の友袁茂、嘗て女を星に納る。星因つて惟敬を知る。召して與に語り、大に悅び、遂に之を薦む。是に於て、明主、惟敬を以て遊擊將軍と爲し、多く金帛を資し、往いて我が軍に說かしめ、書を平壤に投じ、辭を卑くして和を乞ふ。行長、宗義智と惟敬を城北に見る。曰く「明即し和を欲せば、宜しく使をして海を濟らしむべし」と。因つて數條を徵す。惟敬盡く其の意に順ひて曰く「歸

つて報を取り、五十日にして復來らん」と。乃ち平壤の西北十里を界とし、和韓倶に相踰えざるを請ふ。行長許して遣歸し、狀を秀家に告ぐ。

通鑑覽 八月、韓王は義州から李薲・李元翼を遣はして、平壤を攻めに寄越すこと兩度に及んだ。行長はたちまち之を擊退して終つた。王も亦清正が已に咸鏡を征服したと聞き、從つて清正が行長と力を幷せて來り攻めるのを恐れ、益々急を明に告げ知らせた。明はとつくに承訓の敗報を聞いて、朝廷を擧げて一同震へ驚いたのであつた。大司馬石星は明の王に說いて曰ふには「秀吉の軍は勝に乘じて遠く進んで鬪つてゐます。まだ／＼相手になつて鋒を爭ふべきではありません。その上に寧夏がまだ平定しませぬ。復遼東方面に事件を起すので御座います。これは考慮を要す可きでありまして且らく和平を議して禍をのばしのがれるのが最上の手段であります」と。因つて沈惟敬を推薦した。惟敬は越の人、その性質は狡猾で小才があり、辯舌のなか／＼上手な男であつた。燕の地に遊び其處の遊廓の下僕鄭四といふ者と仲が善かつた。その鄭四は前に對馬に居たことがあつた。從つて惟敬はその爲めに大體日本の事を知り、あわよくば富貴を得んと願ふ心があつた。其の友人袁茂は嘗て娘を石星の側女にした。因つて石星は惟敬を知つたのである。召して相共に語り、大いに投合する所あり、遂に之を推擧したのである。是に於て明主は惟敬を遊擊將軍と爲し、澤山な金帛を資らせて、來つて我が軍に說かしめ、書面を平壤に送つて辭を卑くして和睦を乞うたのである。行長は宗義智と城北で惟敬と面接した。そして曰ふには「明が若し和睦を願ふならば、使者を立てゝ海を渡つて直接に本營に來るやうにせよ」と。そこで和睦の條件數個條を示して要求した。惟敬は盡く行長等の意に順つて曰ふには「一旦歸國して返事を貰ひ受け、五十日たつてもう一度參りませう」と。因つて平壤の西北十里を界として、日本も朝鮮も倶に其の界を踰えない樣に請うた。行長

は此の申出でを許可して歸らしめ、此の狀況を秀家に報告した。

【語釋】義州（平安道。）

於是、我兵在平壤者、不復西下。而韓兵竊發諸道、沈岱者募兵朔寧、計復都城。秀家攻而斬之。鄭湛・邊應井亦聚兵全州。筑紫廣門自慶尙入全羅、與湛・應井戰熊嶺、斬之。而全州未下。九月、應井弟應星敗石田三成于馬灘。元豪敗蜂須賀家政于龜尾浦。遂攻毛利高政于春川。高政伏兵擒豪、遂定江原。鍋島直茂・相良賴定在永興。取德原・咸興等七城、移守咸興。淸正自鏡城以諸俘虜還、至蓮下會。韓兵二萬阨梁養山。淸正擊破之、走其將梅天。直茂・賴定迎之、相見于橋中、賀其無恙。時已十月矣。淸正返軍安邊、乃修全山・橋州諸城、相與協心按據韓人。

【通釋】是に於て我が兵の平壤に在る者、復西下せず。而るに韓兵は竊に諸道を發し、沈岱なる者、兵を朔寧に募り、都城を復せんと計る。秀家攻めて之を斬る。鄭湛・邊應井も亦兵を全州に聚む。筑紫廣門、慶尙より全羅に入り、湛・應井と熊嶺に戰つて之を斬る。而して全州未だ下らず。九月應井の弟應星、石田三成を馬灘に敗り、元豪、蜂須賀家政を龜尾浦に敗り、遂に毛利高政を春川に攻む。高政兵を伏せて豪を擒にし、遂に江原を定む。鍋島直茂・相良賴定、永興に在り。德原・咸興等の七城を取り、移つて咸興を守る。淸正、鏡城より諸俘虜を以て

還り、蓮下に至る。會々韓兵二萬、梁養山を阨す。清正・擊つて之を破り、其の將梅天を走らす。直茂・賴定、之を迎へ、橘中に相見え、其の恙無きを賀す。時已に十月なり。清正・軍を安邊に返し、乃ち全山・橘州の諸城を修め、相與に心を協はせて韓人を按撫す。

通釋　そこで我が兵の平壤に在る者は、復西に下らなかつた。而るに韓兵は竊かに諸道を發足し、沈岱といふ者朔寧で兵を募り集め、都城を回復することを計畫した。秀家は之を攻め殺して終つた。鄭湛・邊應井も亦兵を全州から募集した。筑紫廣門が慶尙から全羅に入り、湛・應井と熊嶺に戰つて之を斬つた。併し全州は未だに降服しなかつた。九月、應井の弟應星は石田三成を馬灘に敗り、元豪は蜂須賀家政を龜尾浦に敗つて、遂に毛利高政を春川に攻めた。高政は伏兵を設けて豪を擒へ、遂に江原道を略定した。鍋島直茂・相良賴定の二人が永興に居つた。德原や咸興等の七城を攻め取り、移つて咸興を守つて居た。清正は鏡城から多くの生捕をつれて還り、蓮下まで來た。すると韓兵二萬人が梁養山を保ち守つて居るのに出會つた。清正は擊つて之を破り、其の將梅天を潰走せしめた。直茂・賴定は清正を迎へて橘中といふ所で會見し、其の無事であつたことを祝賀した。その時はもう十月に入つてゐた。清正は軍を安邊に返し、そこで全山や橘州の諸城を修理し、相與に心を合せて韓人を鎭め安んじ、守りに就いて居た。

語釋　朔寧（京畿道。）〇全州・熊嶺（全羅道。）〇馬灘・龜尾浦・春川・江原（江原道。）〇永興・德原・咸興・蓮下・梁養山・橘中・安邊・全山・橘州（咸鏡道。）

當是時、諸將稟事秀吉。使舸交於海中。是月、秀吉復奏請赴行營。天子詔曰、「征戎之

事一任將佐、勿輕濟海」秀吉拜謝而行。十一月、直茂以三千人與韓將李希得兵三萬戰于咸興北、走之、斬首千餘級。淸正盡收咸鏡二十二管、遂議自北道長驅入遼東、未果。行長亦以惟敬過期不至、乃怒、下令軍中曰「皆修行具。吾將飮馬鴨綠江也」義州聞之、荷擔而立。韓王飛書告明。

訓譯 是の時に當り諸將事を秀吉に稟す。使舸海中に交る。是の月秀吉復奏請して行營に赴く。天子、詔して曰く「征戎の事は一に將佐に任じ、輕がろしく海を濟る勿れ」と。秀吉、拜謝して行く。十一月、直茂三千人を以て、韓將李希得の兵三萬と咸興の北に戰つて之を走らす。斬首千餘級。淸正盡く咸鏡の二十二管を收め、遂に北道より長驅して遼東に入るを議す。未だ果さず。行長も亦惟敬の期を過ぎて至らざるを以て乃ち怒り、令を軍中に下して曰く「皆行具を修めよ。吾れ將に馬に鴨綠江に飮はんとす」と。義州之を聞き、荷擔して立つ。韓王書を飛ばして明に告ぐ。

通釋 是の時に當つて諸將は事情を秀吉に申傳へた。その使者の早船が海上で頻りに行き違つた。是の月、秀吉は再、天皇に奏上してお許を請ひ那古耶の行營に出掛けた。天皇は詔して仰せらるゝに「えびす征伐の事は一切大將どもに任せ、輕々しく海を渡つたりせぬやうに」と。秀吉拜謝して西下した。十一月、直茂は三千の兵を率ゐて韓將李希得の兵三萬と咸興の北方で戰ひ、之を敗北せしめた。斬つた首級が千餘もあつた。淸正は咸鏡二十二郡を全部手中に收め、遂に北道から長驅して遼東に入らうと相談を纏めた。併しまだ果さなかつた。行長

も亦惟敬が約束の期を過ぎてもやつて來ないので怒つて命令を軍中に下して曰ふには「一同出發の用意をせよ。吾はこれから鴨綠江の水を馬に飮ませようとするのだ」と。義州の者は此の事を聞いて荷物を背負つて立ち上り逃げ支度をした。韓王は書面を飛ばして明に告げ知らせた。

語釋 北道（朝鮮北方の街道。）○過期（五十日を經過す。）

明群臣議曰「惟敬說不可信。秀吉殊無退兵意。曩者以暑濕取敗。今天寒馬肥。宜出兵也」翊鈞猶豫未決。懸令「有能獻奇計復東藩者、購萬金、封伯爵、襲之子孫」莫敢應者。衆推少司馬宋應昌曰「應昌去歲上書言秀吉必來。是知兵矣」翊鈞遂拜應昌爲都御史經略東北。劉黃裳・袁黃爲贊畫。而選將兵者、李如松稱材武天下無雙。會其平寧夏而旋。則拜爲大將、率六將軍、東拒秀吉。期以十一月發北京。獨大司馬猶持前議、復遣惟敬至平壤、伺秀吉意。惟敬留平壤城中、與行長密定議以去。而如松等大兵已至遼東。惟敬要之於路曰「媾將成矣。和人約棄平壤界大同江而退」如松方銳意立功、弗懌惟敬言。欲執而斬之。應昌等說曰「宜舍此因怠敵而襲之」如松從之、率渡鴨綠。會降虜爲我耳目者、爲韓相所摘發、皆就拘縛。以故不知明軍至。

訓讀 明の群臣、議して曰く「惟敬の說、信ずべからず。秀吉殊に兵を退くるの意なし。曩者には暑濕を以て敗を取る。今、天寒く、馬肥ゆ。宜しく兵を出すべきなり」と。翊鈞、猶豫して未だ決せず。令を懸く、「能く奇計を獻じ、東藩を復する者有らば、萬金に購ひ、伯爵に封じ、之を子孫に襲がしめん」と。敢て應ずるもの莫し。衆、少司馬宋應昌を推して曰く「應昌は、去歲、上書して秀吉必ず來るを言ふ。是れ兵を知るなり」と。翊鈞、遂に應昌を拜して都御史と爲し、東北を經略せしむ。劉黃裳・袁黃、贊畫と爲り、兵に將たるものを選ぶ。李如松、材武天下無雙と稱す。會〻其の寧夏を平げて旋る。則ち拜して大將と爲し、六將軍を率ゐて、東のかた秀吉を拒がしむ。期するに十一月を以てして北京を發せんとす。獨り大司馬、猶ほ前議を持し、復惟敬を遣はして平壤に至りて秀吉の意を伺はしむ。惟敬、平壤の城中に留り、行長と密に議を定め以て去る。而して如松等の大兵已に遼東に至る。惟敬之を路に要して曰く、「媾將に成らんとす。和人平壤を棄て、大同江を界として退かんと約す」と。如松方に意を功を立つるに鋭くし惟敬の言を懌ばず。執へて之を斬らんと欲す。應昌等說いて曰く「宜しく此を舍し、因つて敵を怠らしめて之を襲ふべし」と。如松、之に從ひ、率ゐて鴨綠を渡る。會〻降虜の我が耳目と爲る者、韓相の摘發する所と爲り、皆拘縛に就く。故を以て、明軍の至るを知らず。

通釋 明の群臣は評議して曰ふには「惟敬の說く所は信じ難い。秀吉は格別兵を退ける意志はないやうに思はれる。前に明軍は暑くて濕氣多くそれが爲めに敗けを取つた。今は秋の末で、氣候は寒く馬も元氣だ。此の際宜しく出兵すべきである」と。然るに明主朱翊鈞は愚圖々々して決心がつかなかつた。命令を制札場に掛けて曰ふには「能く奇計を獻じて朝鮮を恢復する者があるならば、萬金を與へ伯爵に封じ、そして子孫を永く相續させるであらう」と。併して之に應じて、策を獻ずる者は無かつた。結局衆臣は少司馬宋應昌を推擧して曰ふには「應

昌は昨年上書して秀吉がきつと攻め來ると豫言しました。是れは實に兵を知るものであります」と。翊鈞も遂に此の應昌を迎へて都御史となし、東北部を經略させた。劉黄裳・袁黄の二人は贊畫の官に任じ、兵に將となるべき者を選ぶことになつた。所が李如松は人物と言ひ、武勇と言ひ、天下に並ぶものがないと稱されてゐた。其の李如松かその時丁度寧夏を平げて凱旋した。そこで之を拜して大將となし、六人の將軍を率ゐて東の方秀吉の軍を拒がせることゝした。そして十一月を以て北京を發足しようとしてゐた。然るに只大司馬石星は尚ほ前の意見を維持し、再び惟敬を平壤に遣つて秀吉の意中をさぐらしめた。惟敬は平壤の城中に留り、行長と祕密に相談を定めて立ち去つた。其の内に如松の大軍は已に遼東に到着した。惟敬は之を途中に待ち受けて曰ふには「和睦は今出來かゝつて居る。日本人は平壤を棄てゝ、大同江を境界にして兵を退ける約束をした」と。如松は時方に功名を樹てたいと切りに希望して居たので、惟敬の言葉を憚ばなかつた。惟敬を執へて之を斬つて終はうと思つた。應昌等が之を止めて曰ふには「此を許し因つて敵を油斷させ、不意に襲うて打ち破るのが宜いでせう」と。如松もこの議に從ひ、軍を引きつれて鴨綠江を渡つた。其の時丁度降參した朝鮮人で我が軍の手先となつて居た者が、朝鮮の宰相に依つてそれが見破られ、皆縛られて終つた。そんな譯で知らせて呉れるものが縛られてゐるので、我が軍では明兵が來たのを一寸も知らなかつたのである。

語釋　東藩（朝鮮をさす。）○袁黄（袁了。）○前議（和睦の議。）○韓相（柳成龍。）

二年正月朔、如松至肅寧、使裨將査大受先往順安。大受使人來告曰「沈遊擊至、和議成矣」行長喜亦使一將以二十人會順安。大受誘與飲酒。伏起。二十人搏戰亡其

三人走還平壤。行長大驚。丹波人內藤如安、爲行長侍史、冒小西氏、稱飛騨守。於是、行長命如安往詰如松。如松慰解遣還。而六日以諸軍薄平壤。行長與宗義智等急修守備、馳使告急於鳳山。使者未歸。如松已以先鋒攻含毬門。我兵擊卻之。其夜出襲李如栢營。不利。

【訓讀】二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將查大受をして先づ順安に往かしむ。大受人をして來り告げしめて曰く、「沈遊擊至り、和議成る」と。行長喜び、亦一將をして二十人を以て順安に會せしむ。大受誘ひて與に酒を飲む。伏起る。二十人、搏戰して、其の三人を亡ひ、走つて平壤に還る。行長大に驚く。丹波の人內藤如安、行長の侍史と爲り、小西氏を冒し、飛騨守と稱す。是に於て行長、如安に命じ、往いて如松を詰らしむ。如松、慰解して遣り還す。而るに六日、諸軍を以て平壤に薄る。行長、宗義智等と急に守備を修め、使を馳せて急を鳳山に告ぐ。使者未だ歸らず。如松已に先鋒を以て含毬門を攻む。我が兵擊つて之を卻く。其の夜出で、李如栢の營を襲ふ。利あらず。

【通釋】二年正月元日、如松は肅寧に來り、副將查大受を先づ順安に往かしめた。大受は人をして我が軍に來り曰はしめるには「沈遊擊將軍がやつて來て、媾和の約束が出來上りました」と。行長は喜んで、亦一將をして二十人をつれて順安で會見させることにした。大受は誘つて一緒に酒を飲んだ。忽ち伏兵が起つた。二十人は組討ちして戰ひ、其の內の三人を失つたが、逃げて平壤に還つた。行長は大いに驚いた。丹波の人內藤如安といふ者

は、行長のお側の書き役となつて、小西の姓を名乘り、飛驒守と稱してゐた。そこで行長はこの如安に命じて、往つて李如松を詰責させた。如松は之を慰めなだめて還した。而るに六日諸軍を率ゐて平壤に薄つて來た。行長は宗義智等と急ぎ守備を堅めると共に、使を馳らせて急を鳳山に告げた。その使者がまだ歸着しない。その內にもう如松は先鋒部隊を率ゐて含毬門を攻めた。我が兵は之を擊退した。そして其の夜城を出て李如栢の陣屋を襲うた。併しうまく行かなかつた。

語釋 遊擊（遊擊將軍。）○侍史（書佐・祐筆などと同じ。お側付の書記。）○肅寧・順安（平安道。）○沈遊擊（沈惟敬は遊擊將軍。）○一將（適見好官。）○鳳山（黃海道。）○含毬門（平壤城門の名。）

其明、明軍大至。如松攻小西門、如栢攻大西門、吳惟忠、駱尙志攻北門、祖承訓攻南門。承訓欲立奇功償前敗。知我易韓人也、令其兵皆尙韓裝、故踏跙不進。行長以爲韓人也、專距西北、自率銃手擊卻如松。如松益用大礮火箭、毒煙蔽城。我兵殊死戰。承訓則脫韓裝露明甲、鼓譟而登。行長驚急分兵拒之。而西北卽陷。行長退保牡丹臺。明軍四面攀堞。我兵力拒刀槍攢垂。堞如蝟毛。明兵死傷數千人、不能拔。退營城外。行長將木戸某說曰、鳳山兵不來援。吾以孤城抗大敵。終不可支。盍退合於諸將

以圖再擧。行長然之、卽夜潛率衆出城至江。江冰方合。蹈而渡至鳳山。大友義統已遁之國都。黑田長政在白川。聞敗引兵、迎行長、代殿而退。明軍不敢追躡。終至國都。韓人聞之、所在並起、以應明軍。

訓讀 其の明、明軍大に至る。如松、小西門を攻め、如栢、大西門を攻め、吳惟忠・駱尙志、北門を攻め、祖承訓、南門を攻む。承訓、奇功を立てゝ前敗を償はんと欲す。我が韓人を易るを知り、其の兵をして、皆韓裝を倘へ、故に踏跙して進まざらしむ。行長以て韓人と爲し、專ら西北を拒ぎ、自ら銃手を率ゐて、轉つて如松を御く。如松・益大礮、火箭を用ひ、毒烟、城を蔽ふ。我が兵殊死して戰ふ。承訓、則ち韓裝を脫ぎ、明甲を露し、鼓譟して登る。行長驚き、急に兵を分つて之を拒ぐ。而して西北卽ち陷る。行長退き牡丹臺を保つ。明軍、四面より堞を攀づ。我が兵、力め拒ぎ、刀槍攢り垂る。堞、蝟毛の如し。明兵の死傷數千人、拔くこと能はず。退いて城外に營す。行長の將木戶某、說いて曰く「鳳山の兵、來り援けず。吾れ孤城を以て大敵に抗す。終に支ふべからず。盍ぞ退いて諸將に合し、以て再擧を圖らざる」と。行長之を然りとし、卽夜、潛に衆を率ゐて城を出で、江に至る。江冰、方に合す。踏んで渡り、鳳山に至る。大友義統、已に遁れて國都に之く。黑田長政、白川に在り。敗を聞き、兵を引いて行長を迎へ、代り殿して退く。明軍、敢て追躡せず。終に國都に至る。韓人之を聞き所在並び起つて、以て明軍に應ず。

通釋 其の翌日、明軍は大擧押寄せて來た。如松は小西門を攻め、如栢は大西門を攻め、吳惟忠・駱尙志は北門

を攻め、祖承訓は南門を攻めた。承訓は奇功を立てゝ前の敗戰の埋合せをしようと思つてゐた。我が軍が朝鮮人を輕視してゐることを知つたので、部下の兵隊全部に、鎧の上に朝鮮服を着させて故意に愚圖〳〵ためらつて進ましめない様にさせた。行長は朝鮮人と思ひ込んで專ら西北方面を距ぎ、自ら小銃隊を率ゐて如松を擊退した。如松は益々大砲や火矢を用ひて射つたので濛々たる烟が城を蔽うた。我が兵は死を決して戰つた。承訓は此の隙に部下の着てゐた朝鮮服を脫がせ、明軍の鎧を露はして、陣太鼓を打ち鳴らし、喊聲を揚げて登つて來た。行長打ち驚いて急ぎ兵を分けて之を拒いだ。其の内に西北方面が陷つて終つた。行長は後退して牡丹臺に立て籠つた。すると明軍は四面から、城の物見の垣に攀ぢ登つて來た。我が兵は力を盡して守り拒ぎ、垣の下へ刀や槍を集め垂れた。物見の垣に針鼠の毛の様に突き出た。明軍は之に觸れて死傷する者が數千人もあつたので、遂に此處を拔くことは出來なかつた。そこで退き下つて城外に陣取つた。行長の將木戶某なる者行長に說いて曰ふには「鳳山の援兵が來ません。吾々は孤城を以て大敵に對抗してゐます。終には此の城も支へることは出來ますまい。どうして退いて諸將の軍と合し、再擧をお圖りにならないのですか」と。行長は此は尤もなことだと思ひ、其の夜直に潛に衆を率ゐて城を出で、大同江まで來た。河の水が丁度氷つて居た。そこで之を蹈んで渡りやがて鳳山に着いた。すると大友義統は已に國都に遁れて行つた後である。黑田長政は白川に居て此の敗を聞き、軍隊をつれ行長を迎へに來て、行長に代つて後部を守り乍ら退いた。明軍は敢て之を進擊しなかつた。終に國都に到着した。韓人は此の戰の様子を聞いて、至る所一齊に竝び起つて、明軍に呼應した。

語釋　牡丹臺（都城を少し離れた所。）○搘垂（突き落さん爲めに群り集つて下に向けて垂れる。）○白川（黃海道。）

宋應昌等謀曰、秀吉將帥、皆萃王城、而加藤清正者懸孤軍在咸鏡、聲聞不通、可虛喝而取也、使辯士馮仲纓以譯說清正曰、和無故攻韓、韓告急於明、明皇帝大怒、遣大兵救韓、復平壤、復開城、遂復國都、擒浮田・小西、盡逐其兵、令琉球・暹羅諸國壓和境、而足下猶守韓、欲爲誰乎、皇帝聞足下高義、使使臣爲報告之、爲足下計、莫若速返韓王子、收軍歸和、否則明軍四十萬、驅韓兵而東、直萃於安邊、足下雖欲服明得乎、清正使侍史答之曰、清正知奉國命而戰、不知聽明令而和也、歸語明主、我有敝甲凋兵、近苦無事、貴國來伐、已聞命矣、而咸鏡之途險阨、騎不可比行、卒不得成列、兵之來、日一二萬而已、吾迎而擊之、日殺一萬、四十日殲之、日殺二萬、二十日殲之、既殲而西指、度遼破燕、奉大駕於海東、清正可以復命矣、仲纓走歸。

【訓讀】宋應昌等謀って曰く「秀吉の將帥、皆王城に萃る。而るに加藤清正は孤軍を懸けて咸鏡に在り。聲聞通ぜず。虛喝して取るべきなり」と。辯士馮仲纓をして、譯を以て清正に說かしめて曰く「和、故なくして韓を攻む。韓、急を明に告ぐ。明の皇帝、大に怒り、大兵を遣はして韓を救ひ、平壤を復し、開城を復し、遂に國都を復し、浮田・小西を擒にして、盡く其の兵を逐ひ、琉球・暹羅の諸國をして和境を壓せしむ。而るに足下、猶

ほ韓を守り、誰が爲めにせんと欲するか。皇帝、足下の高義を聞き、使臣をして、爲めに之を報告せしむ　足下の計を爲すに、速に韓の王子を返し、軍を收めて和に歸るに若くは莫し。否ざれば則ち明軍四十萬、韓兵を驅つて東し、直に安邊に萃らん。足下、明に服せんと欲すと雖も、得んや」と。清正、侍史をして之に答へしめて曰く「清正、國命を奉じて戰ふを知り、明の令を聽いて和するを知らざるなり。歸つて明主に語げよ。我に敝甲凋兵有り　近ごろ事無きに苦しむ。貴國來り伐つは、已に命を聞けり。而るに咸鏡の途、險阨、騎、比行すべからず。卒、列を成すを得ず。兵の來る、日に一二萬のみ。吾れ迎へて之を擊ち、日に一萬を殺さば、四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば、二十日にして之を殲さん。既に殲して西に指し、遼を度り燕を破り、大駕を海東に奉ぜん。清正以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。

【通釋】宋應昌等は相謀つて曰ふには「秀吉の大將共は皆王城に集つて居る。加藤清正は一軍だけで懸け離れて咸鏡道に居る。音信不通の狀態に置かれて居る。だから之を空おどしに脅かして打ち取ることが出來る」と。辯士馮仲纓を使はし、通譯官を以て清正に說き付けて曰ふには「日本は何等理由もなく韓を攻めた。そこで韓國は急を明に告げた。明の皇帝は大に怒られ、大兵を派遣して韓を救ひ、平壤を恢復し、開城を取り戾し、遂に國都をも恢復して、浮田・小西の兩大將を生擒り、其の兵を全部追つ拂ひ、又琉球や暹羅の諸國に賴んで日本の國境を壓迫させた。それだのに足下は今猶ほ韓土に踏み止まつてゐらるゝが、一體誰の爲めに忠義を盡さうと思つて居られるのか。我が明の皇帝は足下の義に堅い心を聞し召され、私を遣はして足下の爲めに之を報告させられたのである。それで足下の爲めに此の際最もよい計は早速韓の王子を返し、軍隊を收めて日本へお歸りになることである。さもなければ明の四十萬の大軍は韓兵を驅り立てゝ東に向ひ、直に安邊に集まるだらう。其の時になつ

てから、足下が明に降服しようと思つても、最早遲いだらう」と。そこで清正は傍付きの書役をして之に答へしめて曰ふには「清正は日本の國命を奉じて戰ふことだけは知つて居るが、明國の命令に從つて和睦することは知らぬ。歸つて明主に語れ。こちらにはお粗末ながら甲冑もあるし武器もある。近頃は無事に苦しんで居る所だ。そちらでやつて來ることはもう承知した。しかし咸鏡道の途は狹く險しく、騎兵は並んで行くことは出來ぬ。歩卒も列を作つて進むことは出來ぬ　だから君の方の兵がやつて來るのは、精々一日に一萬か二萬だらう。之を迎へ擊つて一日に一萬を殺したら、四十萬の全軍は四十日で皆殺しに出來る。又一日に二萬を殺せば二十日で皆殺しだ。之を皆殺しにした後で西に向つて遼東を過ぎ、燕を打ち破り、そして明王を生捕つて日本に連れ歸らう。斯くてこそ清正は國命にお答へすることが出來る次第ぢや」と。仲纓は驚き走り歸つて行つた。

語釋　凋兵（いたんだ武器、）（）燕（北京は昔の燕國の地。）

當是時、明軍乘勝、鼓行而東。國都將吏令大同以東諸城撤守來會。諸城皆聽命。獨小早川隆景、與毛利秀包・立花宗茂弗肯、曰「吾輩竭力報國、固在今日。且明軍勝而驕、易與耳」。三奉行促之甚急。乃退未至王城三十里而軍。明軍進入開城、遂渡臨津。査大受爲其先鋒、値宗茂于礪石嶺。宗茂擊破之、斬百餘人。如松乃盡引其軍而至。隆景以三萬人邀擊于碧蹄館、大戰良久。宗茂與秀包橫擊之。如松初以火器襲平

壞、一戰得志、謂、和兵不足復畏。乃輕進、不具銃礮、以短兵接戰。我軍兵鋭刃利。縱横揮擊、人馬皆倒。莫敢當其鋒。我兵呼聲動天、遂大破明軍、斬首一萬、殆獲如松。追北至臨津、擠明兵于江。江水爲之不流。如松痛哭徹夜。聚敗軍、退入坡州。韓將相請其再進。不肯。

訓讀 是の時に當り、明軍、勝に乘じ鼓行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤して來り會せしむ。諸城皆命を聽く。獨り小早川隆景、毛利秀包・立花宗茂と、肯んぜずして曰く「吾が輩力を竭し國に報ゆる、固より今日に在り。且つ明軍は勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行之を促すこと甚だ急なり。乃ち退いて、未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍進んで開城に入り、遂に臨津を渡る。查大受、其の先鋒と爲り、宗茂に礪石嶺に値ふ。宗茂擊つて之を破り百餘人を斬る。如松乃ち盡く其の軍を引いて至る。隆景三萬人を以て碧蹄館に邀擊し、大戰すること良久し。宗茂、秀包と、横に之を擊つ。如松、初め火器を以て平壤を襲ひ、一戰して志を得、謂へらく「和兵復畏るゝに足らず」と。乃ち輕しく進んで、銃礮を具へず、短兵を以て接戰す。我が軍は兵鋭く刃利し 縱横に揮ひ擊ち、人馬皆倒る。敢て其の鋒に當る莫し。我が兵の呼聲天を動し、遂に大に明軍を破り、斬首一萬、殆んど如松を獲んとす。北ぐるを追うて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲めに流れず。如松、痛哭して夜を徹す。敗軍を聚め、退いて坡州に入る。韓の將相其の再び進むを請ふ。肯んぜず。

通釋 是の時明軍は勝ちに勢づいて、太鼓を打ち鳴らして東へ進んだ。國都に居つた大將や軍吏は大同以東

の諸城をして守を解いて國都に來り集る樣に命令を發した。從つて諸城の軍は皆命令に從つた。たゞ小早川隆景は毛利秀包や立花宗茂と共にその命令を肯かないで曰ふには「吾が輩が力を竭して國の爲めに報いるのは、もとより今日のやうな場合に於てなさるべきだ。それに明の軍勢は勝つて心驕りたかぶつて居る。相手にし易い。（自分は此の際退軍などするものか）」と。三奉行がきびしく撤退を促した。仕方なく退いて未だ王城まで達しない、其の手前三十里の所に軍を止めた。明軍は進んで開城に入り、遂に臨津を渡つた。查大受が其の先鋒となつて進み、宗茂の軍と礪石嶺で出會つた。宗茂は之を擊破して百人餘りの明兵を斬り捨てた。そこで如松は其の軍全部をつれてやつて來た。隆景は三萬人を率ゐて碧蹄館で迎へ擊ち、稍々久しく大に戰つた。宗茂と秀包とは側面から敵を擊つた。如松は初め銃砲などの火器を以て平壤を攻め、一戰して勝利を博したので、思ふには「日本兵は格別畏れるにも當らない」と、そこで今度は輕卒に進み、鐵砲や大砲を具へなかつた。刀や槍を持つて、間近く押寄せて戰ふのであつた。併し我が軍は兵は鋭く、刃は實に切れ味が良い。縱橫に揮ひ擊つと、人も馬も皆倒れた。我が軍の鋭鋒に當つて來ようとするものもなかつた。我が兵の勇敢な掛聲は天も震ふばかりに轟き渡つて、遂に大に明軍を破り、首を斬ること一萬で又殆んど如松を生捕るばかりの所であつた。敵の逃げるのを追ひ掛けて臨津江に至り、明兵を其の河の中へ押し落した。河の水は之が爲めに流を遮ぎられる位であつた。如松は非常に泣き悲しんで夜を明した。敗軍を引きまとめて坡州に退いた。韓の大將や大臣連がもう一度進んで與れと願つた。併し承知しなかつた。

【語釋】三奉行（石田三成、増田長盛、大谷吉繼。）○礪石嶺・碧蹄館・坡州（京畿道。）

時天雨冰釋。如松託言坡州多泥不可爲營、遂退入東坡。二月、猶雨、明馬多病斃。我兵縱火而進。如松退入開城、遣人還明稱疾請代。而韓人寇我者不衰。我兵在幸州者、亦爲韓將權慄所敗。秀家等乃使使召清正。清正平橘中寇。斬首虜三千餘級。與直茂・賴定、皆之都城。明兵相驚曰「清正自北道繞襲平壤、扼我歸路。」如松大懼、留諸將守臨津、而自退入平壤。

訓讀 時に天雨ふり冰釋く。如松、坡州は泥多く、營を爲すべからずと託言し、遂に退いて東坡に入る。二月、猶ほ雨ふり、明の馬多く病んで斃る。我が兵、火を縱つて進む。如松、退いて開城に入り、人を遣はして明に還らしめ・疾と稱して代を請ふ。而るに韓人の我に寇する者衰へず。我が兵幸州に在る者、亦韓將權慄の敗る所となる。秀家等乃ち使をして清正を召さしむ。清正、橘中の寇を平ぐ。斬首虜三千餘級。直茂・賴定と、皆都城に之く。明兵相驚いて曰く「清正、北道より繞つて平壤を襲ひ、我が歸路を扼す」と。如松、大に懼れ、諸將を留めて臨津を守らしめ、而して自ら退いて平壤に入る。

通釋 其の時、雨が降つて冰が釋けた。如松は坡州は泥沼が多く、陣屋を築くことが出來ないとかこつけ、遂に退いて東坡に入つた。二月になつてもやはり雨が續き、明の馬は隨分病死した。我が兵は火をつけて敵の陣地を燒きながら進んだ。如松は退いて開城に逃げ込み、人を遣はして明に還らしめ、病氣だと言ひ立て代理する人を差し廻すように請はしめた。然るに韓人の我に仇するものは、少しも衰へなかつた。我が兵で幸州に在つた者

も亦韓將權慄に敗られた。秀家等はそこで使をやつて清正を召し寄せさせた。折から清正は橘中の賊を平げた。首を斬ること三千餘。大勝利で直茂・朝定などと一緒に皆都城に向つた。明兵共は相驚いて曰ふには「清正は北道から廻つて平壤を襲ひ、我々の歸り路をおさへふせぐのだ」と。如松は大に懼れをなし、諸將を留めて臨津を守らせ、自分は退いて平壤に逃げ込んだ。

【語釋】東坡（京畿道）○幸州（忠清道）

秀吉使毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等七將赴援。三月、攻晉州。晉州城險。韓王之奔、置其重器、以精兵二萬守之。七將皆大敗、退入都城。都城傍有龍山倉。我兵仰食焉。査大受・李如梅、潛兵火倉。而金命元等軍臨津南、絶我糧道。已而我與明軍皆大疫。三奉行以糧竭、欲退守釜山。光泰曰「糧竭寧食砂。國都不可棄也」。清正亦爭之曰「吾以孤軍破强胡數萬。明韓兵何足爲意。何不奪其糧」。三成曰「公宜往奪。不得取助於人」。清正曰「諾」。卽夜、以手兵襲明軍、奪糧而還。

【通釋】秀吉、毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等の七將をして赴き援けしむ。三月、晉州を攻む。晉州の城は險なり。韓王の奔るや、其の重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將皆大に敗れ、退いて都城に入る。都城の傍に龍山倉あり　我が兵、食を仰ぐ。査大受・李如梅、兵を潛めて倉を火く。而して金命元等　臨津の南に軍

し、我が糧道を絶つ。已にして我れ明軍と皆大に疫す。三奉行、糧竭くるを以て、退いて釜山を守らんと欲す。光泰曰く「糧竭くれば、寧ろ砂を食はん。國都は棄つ可からざるなり」と。清正も亦之を爭うて曰く「吾れ孤軍を以て強胡數萬を破る。明韓の兵、何ぞ患と爲すに足らん。何ぞ其の糧を奪はざる」と。三成曰く「公宜しく往いて奪ふべし、助を人に取るを得ず」と。清正曰く「諾」と。卽夜、手兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪つて還る。

通釋 秀吉は毛利秀元・加藤光泰・細川忠興などの七人の大將をやつて赴き援けさせた。三月、晉州を攻めた。晉州城は元來險固であつた。前に韓王が逃げ出す時に其の大切な器を藏ひ込んで、精兵二萬人を以て之を守らせたのである。七將は皆大敗北して、退いて都城に入つた。都城の傍には龍山倉といふ米倉があつた。我が兵は此處から兵糧の供給を仰いで居たのである。すると査大受・李如梅は兵を潛めて倉に火をつけて燒いてしまつた。そして金命元等は臨津の南に陣取り、我が軍の糧道を絕ち切つた。さうかうして居る內に我が軍も明の軍も大いに疫病の流行に惱まされた。三人の奉行等は兵糧が無くなつたので、退いて釜山を守らうと思つた。光泰が曰ふのに「兵糧が無くなつたら寧ろ砂でも食はう。決して國都を拋棄してはならない」と。清正も亦反對して言ふには「自分は孤立無援の軍隊を以て強い胡ども數萬を破つたのだ。明韓の兵は實際恐るゝに足りない。なぜ敵の兵糧を奪ひ取らないのだ」と。すると三成が曰ふのに「それでは貴公が出かけて取つて來たら宜いだらう。併し人に助勢を請うてはならぬぞ」と。清正が曰ふには「いかにも承知した」と 其の夜すぐ手勢をつれて明軍を襲ひ、兵糧を奪つて返つて來た。

時如松使沈惟敬計和。惟敬赴北京、報曰「秀吉欲封日本國王、如足利氏故事耳」。因

與石星定議、來韓都城、厚賂行長曰「太閤歸韓俘、則割慶尙・全羅・忠淸三道、封爲王。」行長等素不學、不諳封王故事、以爲王於明之謂也。欲許之。已而知其非、惟敬巧彌縫之。淸正不可其議。行長與三奉行皆懷歸、乃報秀吉曰「明人欲尊殿下爲皇帝。」秀吉卽許和。惟敬請解都城兵。諸將乃焚城、更殿而東。如松乃背進。韓相柳成龍請尾擊之。乃遣李如栢等萬餘人、覘我陣。整不敢逼。諸將至慶尙、起蔚山・東萊・金海・巨濟等十八屯、以竢秀吉令。明主以孫鑛代宋應昌、遣劉綎・吳惟忠等、分守星州・居昌諸城、而使謝用梓・沈一貫・沈惟敬來謁秀吉于行營。秀吉饗明使者、還之、遣小西如安與俱、放還淸正所俘二王子大臣以下、以大友義統不救行長、削奪其封、遂令在韓諸將屠晉州、以償前敗。

【訓讀】時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に赴き、報じて曰く「秀吉、日本國王に封ずる、足利氏の故事の如きを欲するのみ」と。因つて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賂ひて曰く「太閤、韓の俘を歸さば、則ち慶尙・全羅・忠淸の三道を割き、封じて王と爲さん」と。行長等素より不學、封王の故事を諳んぜず 以爲へらく「明に王たるの謂なり」と。之を許さんと欲す。已にして其の非を知る。惟敬、巧に之を彌

縫す。清正其の議を可かず。行長、三奉行と、皆歸るを懷ひ、乃ち秀吉に報じて曰く「明人、殿下を尊んで皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉卽ち和を許す。惟敬、都城の兵を解かんと請ふ。諸將乃ち城を焚き、更々殿して東す。如松乃ち背て進む。韓相柳成龍、之を尾擊せんと請ふ。乃ち李如栢等萬餘人を遣はし、我が陣の整ふを視て、敢て迫らず。諸將、慶尙に至る。蔚山・東萊・金海・巨濟の十八屯を起して、以て秀吉の令を竢つ。明主、孫鑛を以て宋應昌に代らしめ、劉綎・吳惟忠等を遣はし、分つて星州・居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓・沈一貫・沈惟敬をして、來つて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を饗して之を還し、小西如安を遣はして與に偕にし、清正の俘ふる所の二王子大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其の封を奪ひ、遂に在韓諸將をして、晉州を屠つて以て前敗を償はしむ。

【通釋】其の時、如松は沈惟敬に和睦のことを計らせた。惟敬は北京に行つて報告して曰ふには「秀吉は足利氏の先例のやうに。日本國王に封じて貰ひ度いと、思つて居るのです。」と。そこで石星と相談をきめ、韓の都城に來て行長に澤山の賄賂を贈つて曰ふには「豐太閤が韓の捕虜を返して下さるなら、慶尙・全羅・忠清の三道を差し上げて王樣に封じませう」と。行長等は元來一片の武將にすぎないので深い學問は無く、王に封ずるといふ故事など知つてゐない。王に封ずるとは、てつきり明の王樣になることだと思ひ込んだ。だから惟敬の言を承諾しようと思つた。その內に其の誤りを悟つた。惟敬は上手に程よく、そこを取り繕つて居た。清正は何としても、其の議を聞入れようとはしなかつた。行長と三人の奉行とは皆日本に歸りたくなり、秀吉に報じて曰ふには「明の者共は殿下を尊んで、皇帝に戴かうと欲して居ります」と。秀吉は早速和睦することを許した。惟敬は都城の兵を解除せられんことを願つた。そこで諸將は城を燒いて、更る〲後詰めになつて東に向つた。そこで、如松は背

へて進出して來た。韓相の柳成龍が日本軍の背後から攻撃したいと申し出た。そこで李如栢等一萬餘人を遣はして見たが、我が陣立の立派に整つて居るのを見て強ひて逼らうともしなかつた。諸將は慶尚道に着いた。蔚山・東莱・金海・巨濟などの十八個所の屯所をこしらへて、秀吉の命令の來るのを俟つた。明主は孫鑛を以て宋應昌に代らせ、劉綎・吳惟忠等を遣はして、分つて星州や居昌の諸城を守らせ、又謝用梓・沈一貫・沈惟敬などの使者をして、秀吉と那古耶の行營に於て謁見させた。秀吉は明の使者を御馳走して之を返し、小西如安を遣はし一緒に明に同行させ、清正が捕へた二王子大臣其他を放ちかへした。又大友義統は鳳山で行長を救はなかつたので、其の罰として領地を取り上げ、遂に在韓の諸將に命令して、晉州を屠り倒して、前の敗北を償ふやうに言ひ渡した。

語釋 金海・居昌（慶尚道。）〇其封（豐前。）

六月、諸將合兵圍晉州。城兵益熾。我軍塡濠、蒙竹栅仰攻。城上矢石如注。清正造龜甲車、牛革包之、載以死士、穿城足。樓櫓崩折。清正與黑田長政先登。諸將繼之、斬城將徐禮元・金千鎰等、鏖六萬餘人、夷城池而還。醃禮元首、獻之行營、仍屯故地。韓王大驚、訴之明。李如松令沈惟敬來見行長曰「公等許和、未十日、有晉州之事何也」行長怒曰「汝請和而明兵入韓者益衆何也」惟敬語塞。去至北京、請石星召還如松以下、獨留劉綎・吳惟忠等萬人。

訓讀 六月、諸將兵を合せて晉州を圍む。城兵益々熾なり。我が軍、濠を塡め、竹楯を蒙りて仰ぎ攻む。城上、矢石注ぐが如し。清正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。清正、黑田長政と先登す。諸將之に繼ぎ、城將徐禮元・金千鎰等を斬り、六萬餘人を鏖にし、城池を夷げて還る。禮元の首を醃し、之を行營に獻じ、仍故地に屯す。韓王大に驚き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來つて行長に見えしめて曰く「公等和を許す。未だ十日ならざるに、晉州の事有るは何ぞや」と。行長怒つて曰く「汝、和を請うて、明兵の韓に入る者益々衆きは何ぞや」と。惟敬、語塞る。去つて北京に至り、石星に請ひ、如松以下を召還し、獨り劉綎・吳惟忠等萬人を留む。

通釋 六月、諸將は兵を一緒にして晉州を取り圍んだ。城中の兵は益々勢が盛であつた。我が軍は城の周圍の濠を埋め、竹製の楯を翳して、城を上に見て攻め寄せた。城の上から矢や石などが降り注ぐやうに飛んで來た。清正は堅い板を以て龜の甲に似せた車を作り、牛の皮でもつて此の車を覆ひ包み、それに決死隊の兵を載せ、城の根に穴を掘らせた。城の樓臺や物見櫓などが崩れ折れてしまつた。清正は黑田長政と共に先頭に立つて登つて行つた。諸將も之につゞき、城將徐禮元・金千鎰等を斬り捨て、六萬餘人を皆殺しにし、又城や濠を押し潰して平らな地面として引き返し、禮元の首を鹽漬にして秀吉の陣屋へ送り、相も變らず故の屯所に陣取つて居た。韓の王は非常に驚いて、之を明に訴へ知らせた。李如松は沈惟敬をして來つて行長と會見させて曰ふには「已に和睦を許された。まだ十日も經たぬ内に晉州の事件が勃發したのはどうしたわけか」と。行長は怒つて曰ふには「お前の方で先きに和睦を請ひながら、明兵の韓に入る者が益々多くなつて行くのは何ういふ理由だ」と。惟敬はさすがにグッと言ひ詰つた。去つて北京に歸り、石星に賴んで如松以下を召しかへし、只劉綎・吳惟忠等一萬人だけ

を留めることにした。

明主疑如安不敢納、舍之遼東。秀吉亦以如安久不還、意惟敬欺己、日夜謀議軍事。黑田孝高私語同僚曰「吾聞、外征諸將有威無恩、所過無不殘滅、夷民逃匿、野毋青草。是得其地、果何益哉。且聞、兩先鋒爭功相鬪、法令牴牾、衆莫知所從。而浮田宰相不能制之。夫浮田、非統御之才也。能堪此任者、非德川則前田、若孝高而已」秀吉側聽而首肯之。已而大召諸將、會議行臺曰「朝鮮之事、如今日狀則何時定乎。乃公不可不自往也。吾留家康使守吾邦、無復所顧慮焉。今舉國內兵、雖少猶可得三十萬。」因顧諸將曰「利家汝將五萬。」曰「氏鄉汝亦將五萬。吾親將十五萬為中軍、左右汝二人、掃蕩朝鮮、直入于明。疾具兵艦。吾意決矣」。

【訓讀】明主、如安を疑ひ、敢て納れず。之を遼東に舍す。秀吉も亦如安久しく還らざるを以て、惟敬、己を欺くと意ひ、日夜軍事を謀議す。黑田孝高私に同僚に語つて曰く「吾れ聞く、外征の諸將、威有つて恩無く、過ぐる所殘滅せざる無く、夷民逃匿し、野に青草毋しと。是れ其の地を得るも、果して何の益ぞや。且つ聞く、兩先鋒、功を爭ひて相鬪き、法令牴牾し、衆、從ふ所を知る莫し。而して浮田宰相、之を制する能はずと。夫れ浮田は、

統御の才に非ざるなり。能く此の任に堪ふる者は、徳川に非ざれば則ち前田、若しくは孝高のみ」と。秀吉、側聽して之を首肯す。已にして大に諸將を召し、行臺に會議す。曰く「朝鮮の事、今日の狀の如くば、則ち何れの時にか定まらん。乃公自ら往かざる可からず。國内の兵を擧ぐれば、少しと雖も、猶ほ三十萬を得べし」と。因つて諸將を顧みて曰く「利家、汝五萬に將たれ。」曰く「氏鄕、汝も五萬に將たれ。吾れ親ら十五萬に將として中軍と爲り、汝二人を左右にし朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ。吾が意決せり」と。

【通俗譯】明主は如安を疑つて敢て聞き納れようとしなかつた。之を遼東に留めて置いた。秀吉も亦如安が長く歸らないので、惟敬が自分を欺したのだと悟り、日夜軍事を謀つて、相談に耽つた。黑田孝高は私に同役の者と語つて曰ふには「外征の諸將は武威はあるが、恩顧を施すこと更に無く、攻め行く所は皆そこなひ滅すことばかりなので夷の民は逃げ匿れ、野山も青草がないほどに荒れ果ててしまつたと聞いて居る。これでは其の土地を取つたとて何の利益にもならない。尙ほ聞く所に依れば淸正、行長の兩先鋒が功を爭つて互ひに鬩ぎ合ひ、軍事の法令は相違つて人々從ふ所を知らない。そして浮田宰相は之を制御することが出來ないのださうだ。元來浮田氏は人を統べ抑へる才能は乏しい人だ。能く此の任に務め堪へることの出來る者は德川公でなければ前田氏だ。或ひは斯く申す自分位ひのものだ」と。秀吉はそれとなく聽き知つて、成程さうかと肯いた。其の内に秀吉は大に諸將を召し集め、假本營に會議を開いた。秀吉は曰ふのに「朝鮮征伐の事が、今日のやうな狀態ならば、結局何時になつたら收まることだらう。斯くなる上は余自ら乘り出さずばなるまい。余は家康を留めて我が國を守らしめて置けば、あとの心配は更にない。今國中の兵隊を全部募つたら、少くとも、猶ほ三十萬は得られるだらう」と。

因つて諸將を顧みて曰ふには「利家・お主は五萬人に大將となれ」と。又曰ふのに「氏郷、お主も又五萬人に大將となれ。余は自ら十五萬人に將となつて中央部隊を率ゐ、お主等二人を左右兩翼として、朝鮮を綺麗さつぱり薙ぎ掃つて眞直に明に攻め入らう。早く軍隊輸送の船を具へろ。余の決心は定まつたぞ」と。

徳川公弗懌。謂利家・氏郷曰「二公擢于群中、榮孰大焉。僕少小事弓馬、今雖老矣、猶足以當一面。何居守爲。二公幸推輓之。」彈正少弼進曰「徳川公勿復言。臣視殿下近狀、彼爲野狐所憑爾。」秀吉怫然扣刀而跽曰「吾爲狐憑、有說乎。無說則死。」少弼對曰「有說也。饒使無說、臣固不辭死。且如臣等頭、雖到十百、何足惜乎。顧天下纔定、瘡痍未愈。人人希休息無爲、而殿下乃興無故之軍、以殘暴異域、使我父子兄弟暴骸骨於海外、哭泣之聲四聞。加之漕轉賦役之相因、所在盡爲荒野。當是之時、殿下一擧趾、則六十州之寇賊、雷動風起。雖有徳川公、安得鎭定之乎。是其所以願外征爾。臣恐殿下舟師未達釜山、而根本之地、已爲他人所據。是勢之最易覩者、使殿下有不昔之心、豈有不察於此。不察於此、故謂之狐憑耳。鄙語曰『鼈欲啖人、反啖於人。』殿

下之謂也」ト

【訓讀】徳川公懌ばず。利家・氏郷に謂つて曰く「二公群中に擢んでらる。榮孰か焉より大なる。僕、少小より弓馬を事とす、今老いたりと雖も、猶ほ以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さん。二公、幸に之を推輓せよ」と。彈正少弼進んで曰く「徳川公、復言ふこと勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼れ野狐の憑る所と爲りしのみ」と。秀吉、怫然として刀を扣へて跪いて曰く「吾れを狐憑となすは、說有るか。說無ければ則ち死せん」と。少弼對へて曰く「說有るなり。饒使說なきも臣固より死を辭せず。且つ臣等の頭の如きは、十百を刎ると雖も、何ぞ惜むに足らんや。顧ふに天下纔に定り、瘡痍未だ愈えず。人人、休息無爲を希ふ。而るに殿下は乃ち故なきの軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして骸骨を海外に暴さしむ。哭泣の聲四もに聞ゆ。之に加ふるに漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野となる。是の時に當り殿下一たび趾を擧ぐれば、則ち六十州の寇賊、雷動風起せん。徳川公有りと雖も、安んぞ之を鎭定するを得んや。是れ其の外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師未だ釜山に達せずして、根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢の最も覩易き者、殿下をして平昔の心有らしめば、豈に此に察せざる有らん。此に察せず、故に、之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く『鼈、人を啖はんと欲し、反つて人に啖はる』と。殿下の謂なり」と。

【通譯】徳川家康は之を喜ばなかつた。利家・氏郷に向つていふには「お二人は大勢の中から拔き出されなすつた。誠に面目此の上もござらぬ。併し拙者とても弱年より弓馬を業とする士である。今年を取つたと言へ、猶ほ一面を引き受けて戰ふことは出來る。どうしてこちらに留まつて守つて居るやうなことを致さうや。御兩所に

は何卒取り持つて、出陣出來るやうに計つて下されよ」と。すると彈正少弼（淺野長政）が進み出て曰ふには「德川殿、もう何もお言ひ召さるな。拙者が此の頃の殿下の御樣子を見ると、どうも殿下は狐にでもつかれてゐられるやうです」と。秀吉はサット顏色を變へて怒り、おつ取り刀で膝頭をついて曰ふには「乃公が狐につかれたとは何んといふ譯か。若しその譯がなければ討ち首だぞ」と。少弼は答へて曰ふに「無論譯がございます。よし言譯が出來ないにしても私は固より死を惜しむものでは御座いませぬ。それに私共の首などは、十や百切つた所で何の惜しいことがありませう。さて思ふに、今、天下はやつと平定したばかりで、人民の傷手もまだ全治しませぬ。人々は只只休息して事なからんことをのみ希つて居る狀態です。然るに殿下は却つて理由のない軍をおこして外國を荒し廻り、我が國の父子兄弟をして骸骨を海外に曝らさしめておいでになる。今その泣き叫ぶ歎きの聲は四方八方に起つてゐます。おまけに運漕のことゝ租稅とが一緒になつて割當てられたので、至る所盡く荒野と變り果てました。此の際、殿下が一度足をあげて朝鮮へお出掛けなられたら、日本六十州の一揆は雷の如く動き風の起る樣に吹き捲つて騷動することでせう。たとひ德川公が居殘つてゐられても、どうして之を鎭めおさへることが出來ませうや。さればこそ德川公も外征を願はれるわけ合ひのものです。私は恐れるのでありますが、殿下の軍勢がまだ釜山にも達せられない内に根據地日本が已に他人の手に奪はれて終ひませう。是は最も見易い天下の大勢で、若し殿下をして昔のやうな心持がおありなさらば、どうしてこの位のことを見拔かれないことはない筈です。之を察しないから狐につかれたと申し上げたまでゝございます。俗間の諺に『鼈が人を食はうとして、却つて人に食はれて終ふ』と申してゐます。此はとりもなほさず殿下のことを申すので御座います」と。

【語釋】 推輓（あとより押し、前より曳く。）

秀吉益怒曰「狐乎、鼈乎、吾且舍諸。以臣罵君、不可舍也。」將拔刀斬之。利家・氏鄕進擁之曰「臣等在此。苟欲行誅戮、不必勞親手。」因斜睨少弼曰「可去矣。」少弼乃徐起還舍。待罪數日。有上變事者、肥後賊梅北舉兵取佐敷城。秀吉大驚、急召少弼、謝曰「吾甚慚於汝也。命汝兒幸長爲大將、往定肥後。」因命德川公以其將本多忠勝助之。未發。肥後人斬梅北來獻。乃止。命少弼按定其國、滅韓戍卒。

【訓讀】 秀吉益々怒つて曰く「狐か、鼈か、吾れ且く諸を舍く。臣を以て君を罵る、舍す可からざるなり」と。將に刀を拔いて之を斬らんとす。利家・氏鄕、進んで之を擁して曰く「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲せば、必ずしも親手を勞せず」と。因つて少弼を斜睨して曰く「去る可し」と。少弼乃ち徐に起つて舍に還る。罪を待つこと數日。變事を上る者あり、肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取ると。秀吉、大に驚き、急に少弼を召し、謝して曰く、「吾れ甚だ汝に慚づるなり。汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往いて肥後を定めしめん」と。因つて德川公に命じ、其の將本多忠勝を以て之を助けしむ。未だ發せず。肥後の人梅北を斬つて來り獻ず。乃ち止む。少弼に命じて其の國を按定せしめ、韓の戍卒を滅す。

【通釋】 秀吉は益々怒つて曰ふには「狐であらうが鼈であらうが、それは暫らく論じない。兎にも角にも臣

下の身分を以て主君を罵ることは差し許すこと罷りならぬ」と。すんでのことに拔刀して之を斬らうとした。利家と氏郷は進み寄つて秀吉を抱き止めて曰ふには「私共がこゝに居ります。若し本統に殺すと思召しますならば、必ずしもお手づからなさらずともよろしうございませう」と。そこで少弼を横に睨みつけて曰ふは「そこを去れ」と。そこで少弼は靜かに起ち上つて陣屋に返つて行つた。少弼は數日罪を待つてゐた。肥後の賊、梅北といふ者が兵を擧げて佐敷城を取つたといふ變事を報ずるものがあつた。秀吉は大層驚き、急に少弼を召し呼んで謝まつて曰ふには「余は甚だお前に恥入る。お前の倅幸長に命じて、大將となし肥後を鎭定に遣はすであらう」と。因つて徳川公家康に命令して徳川公の大將本多忠勝をして之を助けさせた。まだ出發しなかつた。肥後の人が梅北の首を斬り、獻上して來た。そこで此の軍の出立は中止した。少弼に命じて肥後を安んじ定めさせ、又韓の守備兵も減らすことにした。

【語釋】佐敷城（肥後。）

八月、淺井氏復生男。秀吉大喜、使前田利家攝軍事、而自歸大阪。命所生男幼字棄丸、長曰秀頼。韓王乃敢歸都城。清正喪其俘、心甚不懌。又知和議必不成、十一月進攻安康、大破之。虜尤畏清正、呼曰鬼上官。時韓野多尸、虎豹群至。我將士留戍者因大獵之、殺獲無數。檻其尤大者以獻焉。三年正月、大城于伏見、興卒二十五萬人、將

帥萬石以上皆助役。三月、秀吉與秀次及德川・前田諸將遊吉野、四月、浴有馬溫泉。是年、加藤光泰卒。初石田三成以韓都之議不合、隙光泰甚深、遂毒之也。嗣子貞泰猶幼。徙邑美濃、以甲斐賜淺野氏。

訓讀 八月、淺井氏復男を生む。秀吉大に喜び、前田利家をして軍事を攝せしめ、而して自ら大阪に歸る。生む所の男に幼字を棄丸と命じ、長じて秀頼と曰はしむ。韓王乃ち敢て都城に歸る。清正其の俘を喪ひ心甚だ懌ばず。又和議の必ず成らざるを知り、十一月、進んで安康を攻め、大に之を破る。虜尤も清正を畏れ、呼んで鬼上官と曰ふ。時に韓の野に尸多く、虎豹群り至る。我が將士の留戍する者、因つて大に之を獵し、殺獲無數なり。其の尤も大なる者を檻し以て獻ず。三年正月、大に伏見に城き、卒二十五萬人を興す。將帥の萬石以上は皆役を助く。三月、秀吉、秀次及び德川・前田の諸將と吉野に遊び、四月、有馬の溫泉に浴す。是の年、加藤光泰卒す。初め石田三成、韓都の議合はざるを以て、光泰と隙する甚だ深く、遂に之を毒するなり。嗣子貞泰猶幼し。邑を美濃に徙し、甲斐を以て淺野氏に賜ふ。

通釋 八月、秀吉の寵妾淺井氏はまた男の子を產んだ。秀吉は大に喜んで、前田利家をして軍事を代理させて自分は大阪に歸つた。そして產れた所の其の男の子に幼名を棄丸と名附け、成長後は秀頼と呼ばせた。韓の王は和議の成るのを信じて、強ひて都城に歸つた。清正は先に捕へた二王子と大臣を放免したので心中甚だ面白くなかつた。又和睦のことは成立しないものと知つたので、十一月に、進んで安康を攻めて大に之を破つた。朝鮮

人は中でも清正を一番畏れて、鬼上官と呼んでゐた。其の頃朝鮮の野には死骸が澤山ころがつて居たので、虎や豹が群れ集まつて來た。韓に留り守つて居た日本の將卒は、此の虎や豹を澤山獲つて、殺したり生捕つたり、殆んど無數であつた。そして其の内の一番大きな奴を檻に入れて秀吉に獻上した。三年の正月、大々的に伏見に城を築き、人夫は二十五萬人を使つた。一萬石以上の封地を持つて居る大名には皆工事に助勢させた。三月、秀吉は秀次や徳川・前田の諸將と一緒に吉野山に遊び、四月には有馬溫泉に入浴した。この年加藤光泰が死んだ。初め石田三成は、韓の國都に於て議論が合はなかつたので、隨分光泰と不仲になつてゐたが、遂に之を毒殺して終つたのである。其の嗣子貞泰はまだ幼少であつた。其の封邑を美濃國に移し、甲斐は淺野氏に賜はることゝなつた。

當是時、韓戍未撤。韓王數促明定和。十月、明主召如安。石星命沿道供帳。十二月、至燕。星就拜於其館、待以王公禮、厚賂之、使曲成其媾。如安諾之。居數日、明主延見之。如安騎而入至闕。衛士呵下之。如安昂然不下。入見明主。明主令諸將相大臣會于左闕、悉問秀吉意。如安所答、飭副星意。明乃定封王議、遣正使李宗誠、副使楊方亨、以沈惟敬爲導。惟敬觖望、且難星曰「前約七事。今止封冊、事必不成。」星弗聽。如安與三使皆發。

【訓讀】是の時に當り、韓の戍未だ撤せず 韓王、數〻明を促して和を定む。十月、明主、如安を召す。石星、沿道に命じて供帳せしむ。十二月、燕に至る。星就いて其の館に拜し、待つに王公の禮を以てし、厚く之に賂ひ、曲げて其の媾を成さしむ。如安之を諾す。居ること數日、明主之を延見す。如安騎して入り、闕に至る。衞士呵して之を下す。如安昂然として下らず。入つて明主を見る。明主、諸將相大臣をして左闕に會せしめ、悉く秀吉の意を問ふ。如安答ふる所、勉めて星の意に副ふ。明乃ち封王の議を定め、正使李宗誠、副使楊方亨を遣はし、沈惟敬を以て導と爲す。惟敬、觖望し且つ星を難じて曰く「前に七事を約す。今封冊に止めば、事必ず成らざらん」と 星聽かず。如安三使と皆發す。

【通釋】此の當時 韓の守備はまだ撤しなかつた。韓王は何度も明國に催促して、和睦が早く成立するやうにして戴き度いと願つた。十月、明主は遼東に留めて置いた如安を呼び戻した。石星は道筋に命じて充分に接待させた。十二月、北京に到着した。石星はわざ〳〵出掛けて其の旅館で面會し、王公に對する禮儀を以て待遇したり、澤山の賄賂を贈つたりして、無理にも和睦が成り立つ樣に賴んだ。如安は之を承諾した。數日待つて居ると、明主がいよ〳〵面會することになつた。如安は馬に乘つて宮門を入つた。門番の役人は叱りつけて馬から降ろした。如安は鼻高々と威張つて降りようとはしなかつた。そのまゝ通りすぎて、遂に御殿に入つて明主に面會した。明主は將軍や宰相や大官連を左闕に召し集めて、いよ〳〵秀吉の意中を問ひ聞かしめた。如安は出來る丈け石星の思惑に副ふ樣に答へた。そこで明は王に封ずるといふ相談を決定して、正使李宗誠、副使楊方亨を派遣し、又沈惟敬を案內役とすることにした。すると惟敬は之を不滿足に思ひ、且つ石星を非難して曰ふには「前には七ケ條を約束した。今封王の一事だけでは、此の談判はきつと成立しないだらう と。併し石星は言ふことを

聞かなかつた。如安は三人の使者と共に發足した。

【語釋】七事（俘を歸すこと。地を割くこと。入貢すること。封冊すること。他の三事は傳はらない。）

四年二月、蒲生氏鄕卒。幼子秀行嗣。尋徙之下野、以會津封上杉景勝。三月、伏見城成。秀吉徙居、以竢明使者。置淺井氏于淀。世呼淀君。淀君既生秀頼。而秀次無避位之意。以故秀吉城伏見、欲以讓秀次、而予秀頼以大阪也。秀次爲人頑放、其留守聚樂、淫虐日甚。漁色不論貴賤。右大臣晴季女新寡而有孤女。秀次幷取母子嬖之。上皇崩而數日、出獵、手刃近臣、夜出戕行人、自櫓上銃人爲戲、至欲剖孕婦。世呼曰殺生關白。以殺生與攝政音相近也。田中吉政爲其傅。數諫之。乃託事遠吉政。

【訓讀】四年二月、蒲生氏鄕、卒す。幼子秀行嗣ぐ。尋いで之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝を封す。三月、伏見城成る。秀吉徙り居り、以て、明の使者を竢つ。淺井氏を淀に置く。世、淀君と呼ぶ。淀君既に秀頼を生む。而して秀次位を避くるの意無し。故を以て秀吉伏見に城き、以て秀次に讓り而して秀頼に予ふるに大阪を以てせんと欲するなり。秀次人と爲り頑放。其の聚樂に留守するや、淫虐日に甚だし。色を漁するに貴賤を論ぜず。右大臣晴季の女、新に寡となりて孤女有り。秀次、母子を幷せ取りて之を嬖す。上皇崩じて數日なるに、出で丶獵し手づから近臣を刃し、夜出で丶行人を戕し、櫓上より人を銃して戲と爲し、孕婦を剖かんと欲するに至る。

世呼んで殺生關白と曰ふ。殺生と攝政と、音相近きを以てなり。田中吉政、其の傅たり。數〻之を諫む。乃ち事に託して吉政を遠ざく。

【通釋】四年の二月、蒲生氏郷が死んだ、まだ年齒のゆかない秀行が嗣いだ。間もなく之を下野に國替へし、會津には上杉景勝を封じた。三月伏見城が落成した。秀吉はこゝに移り住み、そして明の使者を待つて居た。淺井氏を淀に住ませた。世間の人は之を淀君と呼んだ。淀君は既に秀頼を産んだ。而るに秀次には位を避ける意志がなかつた。そこで秀吉は伏見の城を築いて之を秀次に讓り、そして秀頼には大阪城を與へようと思つたのである。元來秀次の人物といふものは我儘でだらしがなく、聚樂第に留守して居た時などは、色に耽り人を虐げること日增しに甚だしくなつた。女色を漁る時は身分の貴い賤いなどは考へて居らなかつた。右大臣晴季の娘が其の頃夫に死なれて寡婦となり一人の娘の子があつた。秀次は此の母子を一緒に召して妾とし寵愛した。正親町上皇がお崩れになつた時でも、五六日も立たぬ内に狩に出かけ、その上、手づから近臣を殺したり、夜は邸を抜け出て通行人を斬つたり、又物見櫓の上から鐵砲で人を擊ち殺してなぐさみとしたり、遂には孕み女の腹を剖いて見度いといふまでに至つた。それで世間では殺生關白と綽名するやうになつた。つまり殺生と攝政とは音が相似て居るからであつた。田中吉政は秀次のお守役であつた。度々之を諫めた。そこで何とか事にかこつけて吉政を遠ざけて終つた。

【語釋】上皇（正親町天皇、文祿二年崩御。）

秀吉之再赴行營也、外議以爲秀次當代行而殊無行意。黑田孝高說之曰「殿下之

威靈可謂甚矣。文武之轂、相擊于門、天下士民視其喜怒、以爲慶弔殿下。知其故乎」秀次曰「吾爲關白故耳」。曰「否。殿下不以太閤爲叔父、則能得爲關白乎。太閤年已六十、猶枕甲而眠。而殿下恬然獨縱嗜慾、何不自省乎。夫位極乎人臣、而望不厭於天下、怨之所萃、姦之所乘也。臣竊爲殿下危之。爲殿下計者、宜赴那古耶代統軍事。太閤已倦兵事、必喜許之。立功自固、誰得動之。願殿下熟思之」。蒲生氏鄉亦勸其濟海、自請爲其先鋒。秀次皆弗納。有流言、關白謀反。秀吉弗問。及秀賴生、秀次自疑被廢、益不聊賴。石田三成・增田長盛與之有郤。希秀吉旨、數惡之。

【訓譯】秀吉の再び行營に赴くや、外議以爲へらく、秀次當に代り行くべしと。而るに殊に行意無し。黑田孝高之に說いて曰く「殿下の威靈甚だしと謂ふべし。文武の轂門に相撃ち、天下の士民其の喜怒を視て、以て慶弔を爲す。殿下、其の故を知るか」と。秀次曰く「吾れ關白たるが故のみ」と。曰く「否。殿下、太閤を以て叔父と爲さずば、則ち能く關白と爲るを得んや。太閤、年已に六十、猶ほ甲を枕にして眠る、而るに殿下、恬然として獨り嗜慾を縱にす。何ぞ自ら省みざるや。夫れ位人臣を極めて望天下に厭かず、怨の萃る所、姦の乘ずる所なり。臣竊に殿下の爲めに之を危む。殿下の計を爲すには、宜しく那古耶に赴き、代つて軍事を統ぶべし。太閤已に兵に

事に倦めり。必ず喜んで之を許さん。功を立て、自ら固くせば、誰か之を動かすを得ん。願はくは殿下、之を熟思せよ」と。蒲生氏郷も亦其の海を濟るを勸め、自ら其の先鋒と爲らんと請ふ。秀次皆納れず。流言あり、關白、反を謀ると。秀吉問はず。秀頼生るゝに及んで、秀次自ら廢せらるゝを疑ひ、益々聊頼せず。石田三成・增田長盛、之と郤有り。秀吉の旨を希ひ、數々之を惡す。

通釋 秀吉が再び那古耶の假本營に行くやうになると、世間の噂では秀次が當然代つて行くのだらうといふのであつた。併し秀次には決して行く氣は無かつた。黑田孝高は之に說いて曰ふには「殿下、あなたの御威光は誠に大層なものでございます。文官武官の訪問者が多く、天下の士や人民は、あなたの喜びと怒りに從つて、喜んだり悲しんだりして居ります 殿下は其のわけを知つてをられますか」と。秀次が曰ふのに「勿論自分が關白だからである」と。孝高は「いや、いや、あなたも太閤を叔父樣となされないならば、どうして關白となることが出來ませう。太閤はもうお年は六十にもなられたが、今以て戰の道具を身につけてお寢みになるといふ風であります 而るに殿下は安氣に構へて、自分の好みや慾望を縱にして居られます。何故自ら御反省なさらぬか。一體位は人臣として登り詰め、而かも尙ほ天下に望みを持つて厭きることをされない。それでは遂には怨みの集る所となつたり、又奸がしこい家來の乘ずる所となるものであります。私は祕に殿下のために之を心配して居ります。殿下の爲めに考へて見ると、那古耶にお出でになつて、太閤樣に代つて軍事を統べられる事がよろしいです。太閤樣はもう軍のことはお倦きになりました。必ず喜んで之をお許しになるでせう。手柄を立てゝ自分で自分の根本を固くしたら、誰が之を動かすことが出來ませう。どうか殿下よ、之をよくよく考へて下さい」と。蒲生氏郷も亦、秀次が海を越えて朝鮮へ乘り出すことをすゝめ、自分は其の先鋒とならうと申し出た。併し秀次は

いづれも皆聞き納れなかつた。そうかうして居る内に、關白秀次が謀叛をするといふ噂が立つた。秀吉は之を捨てて置いた。秀頼が産れると、秀次は後嗣を廢されるのではないかと疑つて、益々不安に思つて居た。石田三成・増田長盛は秀次と仲が惡かつた。秀吉のお氣に入らうと思つて、度々秀次を讒言した。

語釋 外議（一般の議論。）○相撃（出入多き故敵と撃ち合ふ。）

初常陸介木村重茲、有寵於秀吉、而爲三成奪其寵。乃結於秀次。秀次自知取怨多也、每出遊輒具鎧仗、又厚贈諸侯伯而與之誓。三成・長盛因證其有反形。七月、秀吉使三成・長盛及前田玄以就詰問之。秀次大駭、獻誓書七通。秀吉意稍解。翌夜、重茲乘婦人車入聚樂、盡漏而出。三成偵知以告。比曉秀次促德川氏嗣子、使朝參、欲因劫爲質。嗣子走歸伏見。毛利氏亦獻秀次所擬誓書。秀吉大怒、使使召秀次。秀次愛將吉田修理請假萬人夜襲伏見。弗聽。遂赴謁。不許見。命放之高野、附僧興山監守焉。興山南征時、首納欵者也。於是奏請削秀次在身官爵、廢爲庶人。三成勸遂殺之、潛諷興山、促其自裁。秀吉遂遣福島正則、就賜死。然冀興山乞其命也。正則還獻秀次首。秀吉愕然曰「山僧無情。」三成請而梟之京師、併其妻兒・姬妾三十餘人、皆斬之、

瘞之一坎、名曰畜生冢。

訓読 初め常陸介木村重茲、秀吉に寵有りしが、三成に其の寵を奪はる。乃ち秀次に結ぶ。秀次自ら怨を取ること多きを知るや、出遊する毎に輒ち鎧仗を具へ、又厚く諸侯伯に贈つて之と誓ふ。三成・長盛、因つて其の反形有るを證す。七月、秀吉、三成・長盛及び前田玄以をして、就いて之を詰問せしむ。秀次大に駭き、誓書七通を獻ず。秀吉、意稍解く。翌夜、重茲、婦人の車に乘つて聚樂に入り、漏を盡して出づ。三成偵知し以て告ぐ。曉くる比、秀次、徳川氏の嗣子を促して、朝參せしめ、因つて劫して質と爲さんと欲す。嗣子、走つて伏見に歸る。毛利氏も亦、秀次の擬する所の誓書を獻ず。秀吉、大に怒り、使をして秀次を召さしむ。秀次の愛將吉田修理、萬人を假り、夜、伏見を襲はんと請ふ。聽かず。遂に赴き謁す。見ゆるを許さず。命じて之を高野に放ち、僧興山に附し監守せしむ。興山は南征の時、首として款を納れし者なり。是に於て、奏請して、秀次在身の官爵を削り廢して庶人と爲す。三成遂に之を殺すを勸め、潛に興山に諷し、其の自裁を促す。秀吉遂に福島正則を遣はし、就いて死を賜はらしむ。然れども興山の其の命を乞ふを冀ふ。正則還り秀次の首を獻ず。秀吉、愕然として曰く、「山僧無情」と。三成請うて之を京師に梟し、其の妻兒・姬妾三十餘人を併せて皆之を斬り、之を一坎に瘞め、名づけて畜生冢と曰ふ。

通釋 初め常陸介木村重茲は秀吉に寵せられて居たが、後に其の寵を三成に取られてしまつた。そこで秀次の方へ附くこととなつた。秀次は人に大分怨まれて居ることに氣が附いて、外に出て遊ぶ時にはいつも鎧や兵器を用意して守り、又諸大名に澤山物を贈つて、恩を施し、之と結托するのであつた。三成と長盛は之を利用して其

の謀叛の證據とした。七月、秀吉は三成・長盛及び前田玄以をやつて、詰り問はせた。秀次は非常に驚いて誓ひの書面七通を差出した。秀吉の心は少し解けた。然るに其の次の夜、重玆は目立たぬ様に婦人の車に乗つて聚樂第に入り、眞夜中になつて引き上げた。三成は忍びの者を放つて此の事を知り、秀吉に傳へた。夜明け頃になつて秀次は德川氏の世嗣秀忠に催促して御殿に参上させ、そのまゝ脅しつけて人質に取らうとした。秀忠は走つて伏見に逃げ歸つた。すると毛利氏でも亦秀次から推しつけた誓書の下書きを差し出した。秀吉は非常に怒つて、使をやつて秀次を呼ばせた。秀次が日頃大事に目をかけて居た大將吉田修理は、一萬の軍勢を借りて、夜、伏見を襲撃しませうと願つて見た。秀次は許さなかつた。遂に出かけて秀吉にお目にかゝりに行つた。秀吉は對面を許さなかつた。秀吉は命令して高野山に追放し、僧侶の興山といふ者に預けて監督させた。此の興山といふのは、秀吉の紀州征伐の時に一番最初に内通したものであつた。そこで秀吉は朝廷に願つて、秀次の身に附いて居る、官位や爵を取り上げて、平民に落した。三成は遂に之を殺さんことをすゝめ、潛かに興山にさとして、秀次に自殺を催促させた。秀吉は遂に福島正則をやつて死を賜はらせた。併し秀吉の心の内では興山が命乞ひをするだらうと念じ願つて居た。正則は歸つて秀次の首を獻上した。秀吉は吃驚して、「さて〳〵高野の坊主は無情なもんだ」と嘆いた。三成は願つてその首を京都で曝しものにし、妻、子、妾三十餘人皆一緒に斬り殺して、一つの穴に埋め、畜生冢と名附けた。

語釋 畜生冢（畜生は禽獸をいふ。鄙み惡んでかく名づく。隋文帝が太子廣を罵つて畜生といつたことから人を罵るとき畜生といふ。）

毀聚樂、徙諸邸第于伏見、召賞吉政、分秀次地、予福島正則以清洲、誅夷木村重玆

以下重茲有遺腹子、曰重成。其母嘗乳養秀頼。以故秀吉召祿重成、任長門守、以隸於秀頼。三成既誅重茲、遂誣伊達・最上氏黨秀次。有匿名書、曰「伊達・最上欲分豐臣而覇。」秀吉笑曰「是怨家所爲耳」。乃皆釋之。淺野左京大夫書記芹川藤助者、亡命歸三成。三成使僞作舊主通聚樂書上之、因發兵圍淺野氏。前田利家爲白其冤。秀吉捕鞫藤助、得實。乃還於淺野氏、磔之。先是大納言秀俊卒。秀俊亦昏暴、嘗觀蜻蜓瀑、命左右自投于湫。左右與之俱沒。無嗣。國除。以郡山予增田長盛、以藤堂高虎爲今治城主。

【訓讀】聚樂を毀ち、諸邸第を伏見に徙し、召して吉政を賞し、秀次の地を分ち、福島正則に予ふるに清洲を以てし、木村重茲以下を誅夷す。重茲に遺腹の子有り、重成と曰ふ。其の母嘗て秀頼を乳養す。故を以て、秀吉召して重成に祿し、長門守に任じ、以て秀頼に隸す。三成、既に重茲を誅し、遂に伊達、最上氏・秀次に黨すと誣ゆ。匿名の書有り、曰く「伊達、最上、豐臣を分つて覇たらんと欲す」と。秀吉笑つて曰く「是れ怨家の爲す所のみ」と。乃ち皆之を釋す。淺野左京大夫の書記芹川藤助といふ者、亡命して三成に歸す。三成、僞つて舊主・聚樂に通ずる書を作らしめて之を上り、因つて兵を發して淺野氏を圍む。前田利家、爲めに其の冤を白す。秀吉、藤助を捕鞫して、實を得たり。乃ち淺野氏に還して、之を磔せしむ。是より先き、大納言秀俊卒す。秀俊も

亦昏暴、嘗て蜻蜓の瀑を觀、左右に命じて、自ら湫に投ぜしむ。左右之と倶に沒す。嗣なし。國除かる。郡山を以て增田長盛に予へ、藤堂高虎を以て今治の城主と爲す。

通釋　聚樂第は打ち毀し、他の邸宅は全部伏見に移し、元秀次のお守役であつた吉政を召し出してそれを褒めて秀次の所領であつた地を分ち與へ、福島正則には清洲を與へ、そして木村重茲以下、秀次の家來を殺して終つた。重茲には死後子供が生れ重成と言つた。其の母が前に秀頼に乳を與へたことがあつた。それ故秀吉は、重成を召し抱へて祿をやり、長門守に任命して、秀頼の部下につけた。三成は既に重茲を殺したが、遂に伊達・最上の兩氏も秀次に味方したと僞り告げた。偶々名前を隱した書附が出たが、それには「伊達・最上の二氏が、豐臣の地を分けて、天下に大將とならうとして居る」と書いてあつた。秀吉は之を見て笑つて曰ふには「これは伊達・最上に怨のある者の仕草だ」と。誰も咎めなかつた。淺野左京大夫の書記で芹川藤助といふ者は、國を逃れて三成の處へ來た。三成は此の者に、舊主の淺野が秀次と氣脈を通じた手紙を僞作させて、之を秀吉に奉り、因つて兵を發して淺野氏を取り圍んだ。前田利家は、淺野の爲めに其の無實の罪であることを申し立てた。秀吉は藤助を捕へて責め立て、實を吐かした。そこで藤助は淺野氏に返して磔の刑にかけさせた。是より先き、大納言秀俊が死んだ。秀俊も亦心暗く亂暴な性質であつた。或る時蜻蜓の瀧を見に行つて、左右のお附きの者に命じて、自分から池に飛び込ませた。左右の近臣は秀俊と一緒に飛込んで溺死した。秀俊には後嗣が無かつた。所領は取り上げられた。郡山を增田長盛に與へ、藤堂高虎を今治城主とした。

語釋　蜻蜓瀧（大和吉野山の山中にある。）〇湫（瀧壺）〇郡山（大和）〇今治（伊豫）

當是時、明三使已入韓境、疑懼不敢進。請我撤兵。諸將不得已、約成于釜山、未肯濟海歸。李宗誠貴族子。日夜思歸。惟敬因欲逐而代之。慶長元年正月、小西行長歸告和成。惟敬私從之、以地圖・兵書・蟒服及燕・代良馬三百匹、獻秀吉而去。怵宗誠曰「和敗矣。秀吉兵將來執我輩」四月、宗誠遁去。楊方亭問計於惟敬。惟敬曰「有兩語汝愼記之。舉我大明奉承日本而已」明主遂以方亭爲正使、惟敬副之、多出金帛資惟敬、齎封冊促往、因令韓發使。韓以和議未固、依違不從。獨使黃愼・朴弘長從之、刻日發。

訓譯　是の時に當り、明の三使已に韓境に入り、疑懼して敢て進まず。我に兵を撤せんと請ふ。諸將已むことを得ず、成を釜山に約し、未だ海を濟つて歸るを肯んぜず。李宗誠は貴族の子なり。日夜歸るを思ふ。惟敬因つて逐うて之に代らんと欲す。慶長元年正月、小西行長、歸つて和の成るを告ぐ。惟敬私に之に從ひ、地圖・兵書・蟒服及び燕・代の良馬三百匹を以て、秀吉に獻じて去る。宗誠を怵れしめて曰く「和敗れたり。秀吉の兵、將に來つて我が輩を執へんとす」と。四月、宗誠遁れ去る。楊方亭、計を惟敬に問ふ。惟敬曰く「兩語有り。汝、愼んで之を記せよ。我が大明を舉げて、日本に奉承せんのみ」と。明主、遂に方亭を以て正使と爲し、惟敬を之に副とし、多く金帛を出して惟敬に資し、封冊を齎し促し往かしめ、因つて韓をして使を發せしむ。韓、和議未だ固からざるを以て、依違して從はず。獨り黃愼・朴弘長をして之に從はしめ、日を刻して發す。

【通釋】是の時に當つて、明の使者三名は既に朝鮮の國境に入つたが、疑ひ懼れて強ひて進まうとはしなかつた。日本に撤兵して貰ひ度いと請うた。諸將は已むを得ず、兵を釜山に一纏めにしたが、併しまだ海を渡つて歸るといふことは承知しなかつた。李宗誠は貴族の出であつた。だから日夜國へ歸りたいとばかり思つて居た。それで惟敬は之を逐ひ返して自分が正使にならうと考へた。慶長元年正月、小西行長が日本へ歸つて和議が成立したのを報告した。其の時惟敬は私に之に從ひ來り、地圖・兵書・王侯の禮服及び燕・代地方産の名馬三百頭などを秀吉に獻上して立ち去つた。宗誠を脅して曰ふのに「和睦の事は失敗に歸しました。秀吉の兵は今にもやつて來て我れ等を捕へようとして居ます」と。四月、宗誠は逃げ歸つた。副使の楊方亨が計畫を惟敬に相談した。惟敬の曰ふのに「只一言ある丈けです。君はよく氣を留めて覺えて居られよ。卽ち、我が大明國を擧げて、日本の命を受けるだけのことです」と。明主は遂に方亨を以て正使となし、惟敬を副使とし、澤山金帛を出して惟敬に持つて來させ、又皇帝の詔書を持つて、急き立てる樣にして出發させ、因つて又韓國にも使を出すやうに言つた。韓は和議がまだ確かりしたものでないので、ためらつて從はなかつた。只黄愼と朴弘長をして從はしめることゝし、やがて日を決めて出立した。

【語釋】三使（李宗誠、楊方亨、沈惟敬）〇蟒服（大蛇の章ある服で、王侯の禮服なり。天子の服には龍を畫く。）

五月、秀吉以秀頼朝見。詔叙秀頼從三位、任右近衞中將。六月、明韓使者濟海。我諸將乃留兵釜山而凱旋。行長嫉清正。清正惡於三成。而行長善之。與俱譖之。清正至

伏見。秀吉不許見。乃就增田長盛請申救。長盛曰「子宜謝於治部。」清正曰「吾死不能。」乃歸第竢命。七月、京畿大風霾、地大震。伏見城壞、壓死數百人。清正曰「吾寧犯罪、不可坐視。」乃從卒二百、入省秀吉。秀吉與夫人席地而坐、目清正、呼其幼字曰「阿虎、若來何速。」清正因前訴冤、畫地而語、陳其軍勞。秀吉顧謂夫人曰「彼肥晳丈夫。今至自朝鮮。何黧且悴也。」乃命守其門。三成以下踵至。不得入。有傳命者、特納三成。清正大聲令其卒曰「使短小倭豎入。」且日、秀吉召見清正、推問海外戰狀、泣下曰「阿虎襁褓育於我。乃類我也。」遂愛遇如故。

訓讀　五月、秀吉、秀賴を以て朝見す。詔して秀賴を從三位に敍し、右近衞中將に任ず。六月、明・韓の使者海を濟る。我が諸將乃ち兵を釜山に留めて凱旋す。行長・清正を嫉む。清正、三成に惡しく、而して行長之に善し。與倶に之を譖す。清正伏見に至る。秀吉見るを許さず。乃ち增田長盛に就いて申救を請ふ。長盛曰く「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く「吾れ死すとも能はず」と。乃ち第に歸つて命を竢つ。七月、京畿大に風霾し、地大に震す。伏見城壞れ、壓死數百人あり。清正曰く「吾れ寧ろ罪を犯すとも、坐視すべからず」と。乃ち卒二百を從へ入つて秀吉を省る。秀吉、夫人と地に席して坐し、清正を目し、其の幼字を呼んで曰く「阿虎、若來ること何ぞ速なる」と。清正因つて前んで冤を訴へ、地に畫いて語り、其の軍勞を陳ず。秀吉顧みて夫人

に謂つて曰く「彼れ肥皙の丈夫。今朝鮮より至る。何ぞ黧く且つ悴するや」と。乃ち命じて其の門を守らしむ。三成以下踵いで至る。入るを得ず。命を傳ふる者有り、特に三成を納れよと。清正大聲其の卒に令して曰く「短小の佞竪をして入らしめよ」と。旦日、秀吉清正を召見して海外の戰狀を推問し、泣下つて曰く「阿虎は襁褓より我に育はる。乃ち我に類するなり」と。遂に愛遇すること故の如し。

通釋 五月、秀吉は秀頼をつれて天皇に拜謁した。天皇のお言葉に依つて、秀頼は從三位に叙せられ、又右近衛中將に任ぜられた。六月、明と韓の使者が海を渡ることになつた。我が諸將は兵を釜山に留め置いて凱旋した。行長は清正を嫉み憎んだ。清正は三成と仲が惡るく、行長は三成と仲が善かつた。行長と三成は連合して清正をそしつた。清正は伏見に來た。秀吉は對面を許さなかつた。そこで增田長盛の所へ行つて申し開きをして救けて呉れと賴んだ。長盛は「君は治部（三成）に詫びたらよからう」と言つた。すると清正が曰ふのに「それは死んでも出來ない」と。屋敷に歸つて何分のお仕置を待つて居た。七月、京畿地方で大風が砂を卷き上げて暗くなり、大きな地震が起つた。伏見城は崩れ、潰されて死んだ者が數百人もあつた。すると清正は曰ふに「自分は此の際寧ろ罪を犯すとも、ぢつと見て居るわけにはゆかない」と。そこで二百人の卒を從へつれて、城に入つて秀吉を見舞つた。此の時秀吉は夫人淺野氏と共に地に席を敷いて坐つて居た。清正を見付けて、其の幼名を呼んで曰ふには「虎之助か。お前はマア早く來たではないか」と。清正はそこで進み出て無實の罪を訴へ、土の上に山川や軍勢配置の圖を描いて、在鮮當時の苦勞を述べた。秀吉は夫人を顧みて曰ふには「あれは肥つて色白の男であつた。今朝鮮から歸つて來た。何と色は黑く、やつれて居るではないか」と。そこで門の固めをさせた。三成以下の家來が、次から次とやつて來た。門が締つて居るので入れない。秀吉の言ひつけを傳へる者があつて、殊に三成を

早く入れよと言つた。清正は大聲を張り揚げて其の部下に命じて曰ふには「あのちつぽけな、惡る賢い男を入れろ」と。翌日秀吉は清正を召し呼んで海外の戰況を問ひ、色々其の話を聞いて、遂に涙を流して曰ふには「虎之助は赤坊の時から乃公に育てられた。だから乃公に良く似て居るのぢや」と。遂に寵愛すること昔のまゝであつた。

語釋 霾（土ふること。即ち大風で沙塵を捲くこと。）

時震仍不止。徳川公夜率兵入衞。秀吉曰「不知皇宮何如。吾當與卿省焉。」乃遽出。從者未屬。徳川公以其兵擁之而行。道路昏黑、徳川公從者有掣其袖者。公不敢顧。秀吉談笑而行。脱刀授之曰「吾老矣。覺刀之重矣。以煩卿也。」公不敢執。乃授井伊直政。已而秀吉從兵踵至。遂入朝。還過方廣寺前、見大佛倒裂、罵曰「我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今己身且不能保。何負我也。」因呼弓射之還。乃修伏見城、更作牙城于木幡山。

訓讀 時に震仍止まず。徳川公、夜、兵を率ゐて入衞す。秀吉曰く「皇宮の何如を知らず。吾れ當に卿と省るべし」と。乃ち遽に出づ。從者未だ屬せず。徳川公、其の兵を以て之を擁して行く。道路昏黑、徳川公の從者、其の袖を掣く者あり。公敢て顧みず。秀吉、談笑して行く。刀を脱して之に授けて曰く「吾れ老いたり。刀の重

きを覺ゆ。以て卿を煩さん」と。公敢て執らず。乃ち井伊直政に授く。已にして秀吉の從兵踵いで至る。遂に入朝す。還るとき方廣寺の前を過ぎ、大佛の倒裂を見、罵つて曰く「我れ若の爲めに勞費を憚らず。特に若をして衆生を濟度せしめんとす。今己の身すら且つ保つ能はず。何ぞ我に負くや」と。因つて弓を呼んで之を射て還る。乃ち伏見城を修め、更に牙城を木幡山に作る。

【通釋】其の時地震はまだ止まなかつた。徳川公家康は夜兵を率ゐて城に入つて守つた。秀吉が曰ふのに「皇居の方は如何あらせられるだらう。貴殿と一緒にお見舞申さねばならん」と。急に出かけることになつた。從者がまだ出揃はなかつた。徳川公は其の兵を以て秀吉を護つて行つた。途中、あたりは眞暗であつたので、徳川公の從者はそつと公の袖を引いて、合圖をする者があつた。徳川公は顧みもしなかつた。秀吉は談笑しながら進んで行つた。刀を取り外し徳川公に持たせて、曰ふには「年を取つたもんだ。刀が重くて叶はぬ。どうか御苦勞でも持つて下されよ」と。徳川公は強ひて持たうとはしなかつた。井伊直政に渡した。その內に秀吉の從兵も來た。そして遂に入朝した。歸り途に方廣寺の前を通ると、大佛が倒れて壞れてゐるのを見たので、罵つて曰ふには「自分はお前のために、これまで隨分人夫の勞力や色々の費用を惜しまなかつた。それはお前に諸々の生あるものを、救つてもらはうとしたのであつたからである。今自分の身一つすら保つことが出來てゐない。何と我が望みに背くものではないか」と。そこで弓を取り寄せ、之を射つて歸つた。それから伏見城を修理し、更らに本丸を木幡山に作つた。

【語釋】掣二其袖一（秀吉を殺させようと心づける爲めに家康の袖を引張つたのである。）

八月、明・韓使者共至界浦。二十九日、造伏見。秀吉使柳川調信責韓使者曰、「吾收兵、而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。」二使因行長謝。弗聽。九月二日、使毛利氏列兵仗、延明使者入城。諸將帥皆坐。頃之、秀吉開幄而出。侍衛呼叱。二使慴伏、莫敢仰視。捧金印・冕服、膝行而進。行長助之畢禮。

訓讀 八月、明・韓の使者、共に界浦に至り、二十九日、伏見に造る。秀吉、柳川調信をして、韓の使者を責めしめて曰く「吾れ兵を收むれども、汝の國未だ三道を獻ぜず。今又、王子をして來つて再造の恩を謝せしめず。乃ち微者を遣はし我を辱かしむ。我れ汝の入見するを許さず」と。二使、行長に因つて謝す。聽かず。九月二日、毛利氏をして兵仗を列ね、明の使者を延いて城に入らしむ。諸將帥、皆坐す。頃くして、秀吉、幄を開いて出づ。侍衛・叱と呼ぶ。二使、慴伏し、敢て仰ぎ視る莫し。金印・冕服を捧げ、膝行して進む。行長、之を助けて禮を畢ふ。

通釋 八月、明と韓との使者が連れ立つて界浦に到着し、二十九日、伏見にやつて來た。秀吉は柳川調信をして韓の使者を責めさせて曰ふには「此方は兵を纏めて還つたのに、お前の國ではまだ約束の三道を獻上してよこさぬ。それに今又、王子をして來つて國家再建の恩を謝せしむることをさせない。それどころか、つまらない者

な使ひに寄越して我を侮辱した仕打ちである。余はお前方の入つて來て余に對面するを許さないぞ」と、二人の使者は小西行長に頼んで陳謝した。秀吉は承知しなかつた。九月二日、毛利氏をして武器を持つた兵士を列らべて警固せしめ、明の使者を延き入れて城中へ導いた。諸將帥が皆坐つてゐる。暫らくすると秀吉が幄を開けて出て來た。お附きの護衛が「シッ〳〵」と制止の掛聲をした。二人の使者は慴え伏し、敢て仰ぎ視ることが出來ない有樣であつた。二人は黄金の印と冠と裝束とを捧げ持つて、膝でにぢり乍ら進んで行つた。行長は彼等を助けてこの延見の禮を濟ませた。

【語釋】慶長（後水尾天皇の年號。）○使者（明使は正使楊方亨、副使沈惟敬、韓使は黃愼・朴弘長。）○三道（慶尚・全羅・忠清。）○再造（再生、再建の意、一度取つたものを返して元々通りにしてやつたから。）○二使（前の二使は韓の二人の使者、後の二使は明の二人の使者。）

三日、饗使者。既罷。秀吉藏冕、被緋衣、使德川公以下七人、各被其章服、召僧承兌、讀册書。行長私囑之曰、「册文與惟敬所說、或有齟齬者。子且諱之。」承兌不敢聽。乃入、讀册于秀吉之傍。至曰封爾爲日本國王、秀吉變色立脫冕服、抛之地、取册書扯裂之、罵曰、「吾掌握日本。欲王則王。何待髯虜之封哉。且吾而爲王、如天朝何。」乃召行長、詰讓曰、「汝敢欺罔我、以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者皆誅殺之。」行長股栗、諉罪於三奉行、出書牘數通爲證。承兌亦救解之、事纔得止。而秀吉怒未釋。

【訓譯】三日、使者を饗し、既にして罷む。秀吉、冕を戴き、緋衣を被り、徳川公以下七人をして、各々其の章服を被らしめ、僧承兌を召し、冊書を讀ましむ。行長、私に之に囑して曰く「冊文、惟敬の說く所と、或は齟齬せるもの有らん。子、且く之を諱め」と。承兌敢て聽かず。乃ち入り、冊を秀吉の傍に讀む。爾を封じて日本國王と爲すと曰ふに至つて、秀吉、色を變じ立ちどころに冕服を脫し之を地に抛ち、冊書を取つて之を扯裂し、罵つて曰く「吾れ日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たり。何ぞ髯虜の封を待たんや。且つ吾にして王と爲らば、天朝を如何せん」と。乃ち行長を召し、詰讓して曰く「汝敢て我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲す。吾れ將に汝と明の使者とを併せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長、股栗し、罪を三奉行に諉し、書牘數通を出して證と爲す。承兌も亦、之を救解し、事纔に止むを得たり。而して秀吉の怒未だ釋けず。

【通釋】翌三日に、明の使者を饗應し、それも終つた。秀吉は明から貰つた冠を戴き、長い衣を身につけて徳川公家康以下七人の人々をして各々禮服を衣させ僧の承兌を召して明から持つて來た封冊の書面を讀ましめた。行長がこつそり承兌に依賴して曰ふのに「封冊の文が沈惟敬の曰ふ所と或は食ひ違つた所があるかも知れぬ。そこは貴公一つ飛ばせて讀まないやうにして戴きたい」と。承兌が左樣なことは眞平御免と承け入れなかつた。そこで座に入り、封冊の文を秀吉の傍で讀んだ。文中の「お前を封じて日本國王にして遣はす」といふ所へ來ると、秀吉の形相、見る〳〵變り、其の場で冠も裝束も脫ぎ棄て、それを地に擲げつけ、其の封冊の文書を取り上げてズタ〳〵に引き裂き、罵つて曰ふのに「余は今日本を手中に收めてゐる。王にならうと思へば今でも王になれるのだ。何んで毛唐等から封ぜられるのを待たうや。それに余が王となつたら、日本の天子樣を何うしようと曰ふのだッ。馬鹿めが」と。そこで行長を招び、そしり責めて曰ふのに「其の方は余を欺し失せて、我が日本

に恥辱を與へ居つた。余は其の方と明の使者とを一緒にして皆誅殺して終ふつもりだ」と。行長は懼へ上つて、この罪を三人の奉行になすりつけ、手紙を數通出して其の證據とした。承兌も亦之を助けて辯解してやつたので、誅殺の事はやつと止められることゝなつた。併し秀吉の怒はそんな事では中々解けなかつた。

【語釋】徘衣（一說に徘は緋の誤ならんと。それだと赤色の衣となる。）〇七人（家康・秀俊・利家・秀家・輝元・秀元・秀信。）〇章服（其位に應じた禮服。）〇册書（爵位封號を與へる時の詔勅書。）〇扯裂（扯は撦の俗字。音シヤ、裂く義。）〇髯虜（明人を罵つていふ言葉。）〇諉（すりつけること。）

卽夜、命加藤淸正・大谷吉隆・石田三成・增田長盛、逐明・韓使者、賜資糧遣歸、使謂之曰「若亟去、告而君。我將再遣兵屠而國也」。遂下令西南四道、發兵十四萬人、以明年二月、悉會故行臺。柳川調信私囑黃愼曰「太閤意已決矣。速獻三道、使王子來謝。不則貴國復被禍矣」。惟敬猶疑其虛喝。已而見沿道治兵狀、則大驚奔去。

【訓讀】卽夜、加藤淸正・大谷吉隆・石田三成・增田長盛に命じて、明・韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣歸せしめ、之に謂はしめて曰く「若亟に去り、而の君に告げよ。我れ將に再び兵を遣はし、而の國を屠らんとす」と。遂に令を西南四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以て、悉く故の行臺に會せしむ。柳川調信、私に黃愼に囑して曰く「太閤の意已に決せり。速に三道を獻じ、王子をして來り謝せしめよ。不らずんば則ち貴國復禍を被らん」と。惟敬、猶ほ其の虛喝を疑ふ。已にして沿道の兵を治むる狀を見て、則ち大に驚き奔り去る。

【通釋】其の晩すぐ加藤淸正・大谷吉隆・石田三成・增田長盛等に命じて、明と韓の使者を逐拂はせ、路用、食糧拵

を與へ、本國へ歸らせた。そして使者に言はしめて曰ふのに「お前等は早く歸つて、お前等の君に告げよ。余は再び汝等の國を攻め屠らうとしてゐる」と。遂に命令を西南四道に下し、兵十四萬人を繰り出し、來年二月迄に悉く前の那古耶の行營に集まらせた。柳川調信が私に黃愼に言ひ含めて曰ふのに「太閤の心は早や決まつて終つた。早く三道を獻上し、王子をして謝まりに來させよ。さもないと、また君の國は禍を受けねばならぬ」と。惟敬はやはりまだ空らおどしだと疑つてゐた。其の内に途筋で出兵準備をしてゐる樣を見て、大に驚き奔り去つた。

秀吉初養夫人姪秀秋爲子、出嗣小早川氏。於是以爲大將、以浮田秀家・毛利秀元副之、以黑田孝高充其參謀、以清正・行長充其先鋒、使行長立功自償。諸將皆前役所遣、已諳海外事宜。以故秀吉不復親出、自居伏見、遙授方略、置吏于那古耶、以司諸道糧運。

【訓讀】秀吉初め夫人の姪秀秋を養つて子と爲し、出して小早川氏を嗣がしむ。是に於て以て大將と爲し、浮田秀家・毛利秀元を以て之に副とし、黑田孝高を以て其の參謀に充て、清正・行長を以て其の先鋒に充て、行長をして功を立てゝ自ら償はしむ。諸將は皆前役に遣はす所、已に海外の事宜を諳んず。故を以て秀吉復親ら出でず、自ら伏見に居り、遙に方略を授け、吏を那古耶に置き、以て諸道の糧運を司らしむ。

【通釋】秀吉は初め夫人淺野氏の姪の秀秋を養つて、自分の後嗣息子としたが、後に小早川氏を嗣がせることに

した。そこで此の秀秋を以て大將とし、浮田秀家・毛利秀元を副將と　、黒田孝高を參謀に充て、淸正・行長を先鋒と定めて、行長をして功を立て、自ら今回の罪を償はせることにした。これ等の諸將は皆前の戰に出陣して居るので、もう海外の事狀は旣に諳記して居た。それ故秀吉は自分が出かけることはやめて、伏見の城中に留つて遠くから指圖をすることゝし、役人を那古耶に置いて、諸國の兵糧の運搬を司らしめた。

二年正月、明使者至明、作報。秀吉受封拜舞、和議全成。因私貫海外珍寶、號爲日本幣物。已而吳越將吏上變、告曰「秀吉先鋒加藤淸正、已擁二百艘上機張矣。」明主因詰方亨、得實。乃詰惟敬。惟敬慚謝、因曰「秀吉責韓而已矣。不久將去。」明不信。乃戒東北守備、復大募兵、遣邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉綎・董一元等、率而東下。諸將皆以智勇聞其國者也。

【讀】二年正月、明の使者明に至り、作り報ず。「秀吉封を受けて拜舞し、和議全く成る」と。因つて私に海外の珍寶を貫し、號して日本の幣物と爲す。已にして吳越の將吏變を上り、告げて曰く「秀吉の先鋒加藤淸正、已に二百艘を擁して機張に上る」と。明主因つて方亨を詰り、實を得。乃ち惟敬を詰む。惟敬慚謝し、因つて曰く「秀吉韓を責むるのみ。久しからずして將に去らんとす」と。明信ぜず。乃ち東北の守備を戒め、復大に兵を募り、邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉綎・董一元等を遣はし、率ゐて東下せしむ。諸將皆智勇を以て其の國に聞ゆる者なり。

通釈 二年の正月、明の使者は明に歸り着き、噓を報告した。「秀吉は封を受けて小躍して喜び拜し、和睦の相談は全部纏りました」と。そこで祕に海外の珍らしい品物を買ひ集めて、日本から寄越した贈物だと稱した。それから間もなく吳越の將吏が變事を傳へて告げていふには「秀吉の先鋒加藤清正は既に二百艘の軍艦をつれて機張に上陸しました」と。明王は方亨を責めて本統のことを知つた。そこで惟敬を問ひ詰めた。惟敬は恥ぢ入つて詫び、そこで曰ふには「秀吉は韓國を責めるだけです。間もなく、引き上げることでせう」と。併し明ではその言を信用しなかつた。そこで東北の守備を固め、再び大に兵を募り、邢玠・楊鎬・麻貴・楊元・劉綎・董一元等の將士を派して、其の兵を率ゐて東に向はせた。此等の諸將は智勇を以て明國中で名高い人々であつた。

語釈 買（買ひ取ること。）

我兩先鋒已濟海、幷其戍兵、行長軍釜山。清正自機張攻梁山、陷之、軍于西生浦。韓人懲創前役、逃竄駭散。清正榜諭之曰「太閤命吏、責問朝鮮王、屯兵東邊、以竢其報。汝民各安其居、勿敢擾亂」。二月、孝高奉秀秋至釜山、因山海之勢、列壘寨、聯舟艦、以爲根據之地、出令禁暴掠。而諸道望風潰奔。時韓地荒廢、無糧可因。我海運亦未達。諸將以故不輒進。聲言朝鮮獻三道如約、乃止不復深入。

訓読 我が兩先鋒已に海を濟り、其の戍兵を幷せ、行長は釜山に軍す。清正は機張より梁山を攻めて之を陷し

れ、西生浦に軍す。韓人、前役に懲創し、逃竄駭散す。清正榜し之を諭し曰く「太閤、吏に命じて、朝鮮王を責問し、兵を東邉に屯し以て其の報を竢つ。汝民、各々其の居に安んじ、敢て擾亂すること勿れ」と。二月、孝高、秀秋を奉じて釜山に至り、山海の勢に因り、壘寨を列ね、舟艦を聯ね、以て根據の地と爲し、令を出して暴掠を禁ず。而して諸道、風を望んで潰奔す。時に韓の地荒廢し、糧の因る可き無し。我が海運も亦未だ達せず。諸將、故を以て輒く進まず。朝鮮、三道を獻ずる、約の如くせば、乃ち止りて復深く入らずと聲言す。

〔通釋〕我が兩先鋒は、既に海を渡つて、朝鮮に踏み入り、其處に留つて守つて居た所の兵を合併して、行長は釜山に陣取つた。清正は機張から梁山へ進んで、之を陥れ、そして西生浦に陣取つた。朝鮮人は前の戰にこりごりして居るので、逃げかくれたものもあるし、驚いて何處かへ行つて終ふものもあつた。そこで清正は立札をして諭すには「太閤は役人に命じて朝鮮王に責め問はせらるゝことあつて、それで兵を東部に駐め其の返事を待つて居るのだ。故に汝等人民はいづれも自分の處に安心して止まつて居れ。決して騒ぎ立てたりするな」と。二月孝高は秀秋を奉じて釜山に着き、山や海の形勢を見計らつて、とりでを連ね、舟をならべ、そこを根據地と定め命令を出して亂暴をしたり、掠奪をやつたりするのを禁じた。すると諸道は、却つて此の樣子に畏れて、崩れ潰え逃げうせた。當時、朝鮮では土地が荒れ果てゝ食糧を得ることが出來なかつた。又味方の海上からの運搬物もまだ到着しなかつた。それで諸將は容易に進むことをしなかつた。そして朝鮮が約束通り三道を獻上するならば、兵を止めて、もう深入りはしないと言ひ觸らした。

韓王使李元翼守鳥嶺、而自奔海州、告急於明。明君臣歸罪於石星、奪其官、且議曰、

「割地之議、出於惟敬之託言。忠淸韓之府藏、全羅・慶尙韓之門戶。皆其重地、而明之海路亦恃爲藩屛焉。今予之秀吉、秀吉以爲取韓犯明之資。彼之舟帆、晨發夕至、天津・登萊、非明之有也」因宥惟敬、使往更爲說以弭和兵。淸正・行長使人返告韓不獻地。秀吉報曰「當俟韓穀熟、進入全羅、以攻諸城。必攻破而後已」且戒行長等曰「前使我不得志者、全羅水軍也。此行必報之」

通釋 韓王、李元翼をして鳥嶺を守らしめ而して自ら海州に奔り、急を明に告ぐ。明の君臣、罪を石星に歸し其の官を奪ひ、且つ議して曰く「地を割くの議、惟敬の託言より出づ。忠淸は韓の府藏、全羅・慶尙は韓の門戶なり。皆其の重地にして、明の海路も亦、恃んで藩屛と爲す。今之を秀吉に予へば、秀吉以て韓を取り明を犯すの資と爲さん。彼の舟帆、晨に發し夕に至り、天津・登萊は、明の有に非ざるなり」と。因つて惟敬を宥し、往いて更に爲めに說いて和兵を弭めしむ。淸正・行長、人をして、返つて韓の地を獻ぜざるを告げしむ。秀吉報じて曰く「當に韓の穀の熟するを俟ち、進んで全羅に入り以て諸城を攻むべし。必ず攻め破つて後に已めん」と。且つ行長等を戒めて曰く「前に我をして志を得ざらしめしは、全羅の水軍なり。此の行必ず之に報ぜよ」と。

通譯 韓王は李元翼に鳥嶺を守らせ、そして自身は海州に逃げて、急を明に知らせた。明の君臣は、罪を石星に歸し、其の官職を奪ひ取り、又相談して曰ふには「元來朝鮮の地を日本へやるといふ相談は、惟敬の一時の便

官から出た話である。忠清道は朝鮮の財物の集まる處、全羅・慶尚の二道は朝鮮の入口である。共に朝鮮としては重要な土地であり、明の通路も亦此等の土地を籬とも恃んでゐる大事な處である。今之を秀吉に與へたならば、秀吉は朝鮮を取つたり、明を攻めたりする根據とするだらう。彼の船が朝に朝鮮を出たら、夕方には明に着く。さうするともう天津や登萊などは、明國の所有ではなくなつて終ふ」と。そこで仕方がないので惟敬を詐し、更に日本軍へ遣つて、色々辯解して軍隊を引上げる樣に言はせた。清正と行長は人を秀吉の處へやつて、朝鮮が土地を獻上しないことを報告させた。秀吉は通知を出して曰ふには「朝鮮の穀物が熟するのを待つて、それから全羅に進み、段々諸城を攻めるやうにいたせ。きつと攻め落して終へ」と。そして行長等を戒めて曰ふには「前の戰で思ふ樣にならなかつたのは、全羅の水軍のためであつた。今度は是非之に仕返しをせよ」と。

語釋　海州（黃海道。）〇天津（支那の地名。直隸省。）〇登萊（支那地名。山東省。）

惟敬在南原。明主數責其效。韓人亦指目之曰「是左右賣國、反覆之臣也。」因明欺和、而使韓受其弊、惟敬大窘。又聞石星已下獄、則恐、因度以爲「行長主和、清正主戰。不若先退清正」因遺書清正曰「三國媾和、將歸無爲。而足下勸太閤敗之。明主命邢總督、以精銳七十萬、將首擊足下。足下速請和弭兵。不然禍不旋踵」清正答書曰「吾每病朝鮮兵羸弱不足與較。今當明軍作一快戰、吾所願已」惟敬得書、不知所爲。乃因

行長欲投歸於我。行長許之。邢玠在遼東。聞之曰「彼入日本、必爲我腹心之害者」乃令楊元伏三千人、要其走路捕之。尋被誅。而我與明遂絶。

訓讀 惟敬南原に在り。明主數其の效を責む。韓人も亦之を指目して曰く「是れ左右、國を賣る反覆の臣なり。明を罔ひ和を欺き而して韓をして其の弊を受けしむ」と。惟敬大に窘む。又石星已に獄に下ると聞き則ち恐れ、因つて度つて以爲へらく「行長は和を主とし、清正は戰を主とす。先づ清正を退くるに若かず」と。因つて書を清正に遣つて曰く、「三國媾和し、將に無爲に歸せんとす。而るに足下太閤に勸めて之を敗る。明主、邢總督に命じ、精鋭七十萬を以て、將に首として足下を擊たしめんとす。足下速に和を請ひ兵を弭めよ。然らずんば、禍、踵を旋さず」と。清正答書して曰く「吾れ每に朝鮮の兵は羸弱にして、與に較ぶるに足らざるを病ふ。今、明軍に當り一快戰を作すは、吾が願ふ所のみ」と。惟敬、書を得て爲す所を知らず。乃ち行長に因つて我に投歸せんと欲す。行長之を許す。邢玠、遼東に在り。之を聞いて曰く「彼れ日本に入らば、必ず我が腹心の害を爲す者なり」と。乃ち楊元をして、三千人を伏せ、其の走路を要して之を捕へしむ。尋いで誅せらる。而して我れ明と遂に絶つ。

通釋 惟敬は南原に居た。明主は幾度も幾度も早く良い結果を得たいと催促して來た。韓人も亦惟敬を指し見て曰ふには「此の男はどちらにも巧いことを言つて、國を賣る、全く節操のない家來だ。一方では明に嘘をつき、一方では日本を欺して、そして朝鮮にそのとばしりを與へるのだ」と。惟敬は非常に苦しい立場に陷つた。又石星が既に獄に下されたと聞いて恐れを抱き、そこで計つて思ふには「行長は和睦を主とし、清正は戰を主

として居る。故に先づ清正をのけて終ふのが良い方法だ」と。因つて手紙を清正にやつて曰ふには「三國は和睦の相談が出來て、間もなく平和にならうとした。所が、貴殿は太閤に勸めて折角の和睦を破つた。それで明主は邢總督に命じて、強い七十萬の兵を率ゐ、第一に貴公を斃たしめようとして居る。貴公は早く和睦を願つて戰をやめなさい。若しさうでないと禍は立ちどころに來るでせう」と。清正は返事をやつて曰ふには「自分はいつも朝鮮の兵が弱すぎて、くらべものにならないのを殘念に思つて居る。今、明の軍隊に當つて痛快に戰ふのは、自分の願ふ所だ」と。惟敬は此の手紙を受けて、どうしたらいゝかわからなくなつた。そこで行長に賴んで日本に逃げ込まふと考へた。行長は此のことを許した。邢玠は遼東に居た。此の話を聞いて曰ふには「彼が日本に行つたなら、きつとこちらの病根をなす者である」と。そこで楊元に三千人の部下をつけて、これをひそませ・逃げ路に待ち受けて捕へさせた。ついで殺して終つた。かくて日本は明國と全く交通を絶つことゝなつた。

語釋　南原（全羅道。）

明軍已至全羅。楊元在南原、陳愚衷在全州、韓將元鈞在閑山・唐島、水陸相援、以守全羅。七月、我水軍諸將議攻唐島。藤堂高虎・脇坂安治先發。韓以數百艘逆擊。高虎・安治親揮槍力戰。加藤嘉明後至、遇敵一大艦。艦上列卒、張弓持滿擬之。嘉明拔刀躍入其艦。敵不敢發。嘉明立斬數人、遂奪其艦。諸將因奮擊、大破之。元鈞收兵守

閑山。而明將楊鎬・麻貴等繼至。韓令鈞進擣釜山。初鈞與李舜臣並將水軍。行長間使人告韓曰「清正首敗媾。吾深嫉之。今孤軍先濟。宜襲執之」韓王乃命鈞・舜臣。舜臣不肯。鈞劾其逗留。王召舜臣、下之獄。鈞於是獨將。及受此命、不得不自進。乃合水路諸軍赴釜山。

【訓譯】明軍已に全羅に至る。楊元は南原に在り。陳愚衷は全州に在り。韓將元鈞は閑山・唐島に在り。水陸相援け以て全羅を守る。七月、我が水軍の諸將、議して唐島を攻む。藤堂高虎・脇坂安治、先づ發す。韓、數百艘を以て逆へ擊つ。高虎・安治、親ら槍を揮つて力戰す。加藤嘉明後れ至り、敵の一大艦に遇ふ。艦上に卒を列ね、弓を張り滿を持して之に擬す。嘉明、刀を拔き躍つて其の艦に入る。敵敢て發せず。嘉明立ちどころに數人を斬り、遂に其の艦を奪ふ。諸將因つて奮擊し、大に之を破る。元鈞兵を收めて閑山を守る。而して明將楊鎬・麻貴等、繼いで至る。韓、鈞をして進んで釜山を擣かしむ。初め鈞、李舜臣と、並に水軍に將たり。行長、間に人をして韓に告げしめて曰く「清正、首として媾を敗る。吾れ深く之を嫉む。今、孤軍先づ濟る。宜しく襲うて之を執るべし」と。韓王、乃ち鈞・舜臣に命ず。舜臣肯ぜず。鈞、其の逗留を劾す。王、舜臣を召し、之を獄に下す。鈞、是に於て、獨り將たり。此の命を受くるに及んで、自ら進まざるを得ず。乃ち水路の諸軍を合せて釜山に赴く。

【通釋】明の軍隊は既に全羅に着いた。楊元は南原にゐた。陳愚衷は全州に居た。朝鮮の大將元鈞は閑山・唐島に居つた。海軍と陸軍とお互ひに援け合ひ全羅を守つた。七月、日本の海軍の諸大將は、相談して、唐島を攻めた。藤

堂高虎・脇坂安治が先づ出發した。朝鮮では數百艘の水軍を以て迎へ擊つた。高虎や安治は自身で槍を揮ひ、力を盡して戰つた。加藤嘉明は後から來たが、敵の大戰艦に出會つた。其の船の上には兵卒を並べ、弓をいつぱいにひき絞つて、こちらを狙つて居た。嘉明は刀を拔いて、其の船に躍り込んだ。敵は弓を射たうともしなかつた。嘉明は忽ち數人を斬り倒し、遂に其の船を占領した。諸將も此によつて奮ひ戰ひ、散々に打ち破つた。元鈞は兵をまとめ閑山を守つた。明の大將楊鎬や麻貴等が後から繼いで到着した。韓では元鈞をして、進んで釜山を突かせた。初め元鈞は李舜臣と一緒に水軍の大將であつた　行長は秘に人をやつて韓に告げしめて曰ふには「清正は首として媾和を破つたのである。自分は深く之を憎んで居る。然るに今孤立の軍を以て第一番に朝鮮に渡つた。之を攻めて生捕つたらよからう」と。そこで韓王は清正を伐つことを鈞と舜臣とに命令した。舜臣は之を聞き入れなかつた。鈞は舜臣が王命があり乍ら留まつて進まぬことを王にあばいた。王は舜臣を呼んで牢屋に入れた。それで鈞が一人で大將となることゝなつた。だから今此の釜山攻擊の命令を受けるに至つては、鈞は自ら進まぬわけにはいかなくなつた。そこで水陸の諸軍を合せて釜山に向つた。

語釋　全州（全羅道。）

行長聞之、八月、伏兵于加德、以舟兵逆擊于絕影島。會日暮風濤大起。我軍佯退。鈞縱兵冒濤而進。比至加德、飢渴下舟取飲。伏兵起、行長返之、夾擊大敗鈞軍。鈞逃至巨濟。行長復夜襲之、遂斬鈞、乘勝西向、連陷南海・順天、自豆恥津上陸。而清正兵自

西生浦、歷慶州入全羅。諸城望其旗曰「鬼上官至矣」不戰而潰。清正進與行長合、攻黃石城陷之。守將郭䞭・趙宗道等皆死。

訓讀 行長、之を聞き、八月、兵を加德に伏せ、舟兵を以て絕影島に逆へ擊つ。會〻日暮れ風濤大に起る。我が軍佯り退く。鈞、兵を縱ち濤を冒して進む。加德に至る比、飢渴し、舟を下つて飲を取る。伏兵起り、行長、之に返し、夾擊して大に鈞の軍を敗る。鈞逃れて巨濟に至る。行長、復夜之を襲ひ、遂に鈞を斬り、勝に乘じて西に向ひ、連に南海・順天を陷れ、豆恥津より陸に上る。而して清正の兵は西生浦より慶州を歷て全羅に入る。諸城、其の旗を望んで曰く「鬼上官至る」と。戰はずして潰ゆ。清正進んで行長と合し、黃石城を攻めて之を陷る。守將郭䞭・趙宗道等皆死す。

通釋 行長は之を聞いて、八月、兵を加德島にかくして置き、別に小舟に乘せた兵で、絕影島まで出て行つて攻擊した。偶〻日は暮れ、風と波が非常に高くなつた。我が軍は佯つて退却した。鈞は兵を繰り出し、波を乘り越えて進んで來た。加德島邊まで來て、腹が減つたり、咽喉が乾いたりしたので舟を下つて飲み食ひして居た。伏兵が急に起り、行長も引き返して夾み擊ちして、大いに鈞の軍を破つた。鈞は逃げて巨濟洋に行つた。行長は再び夜になつて之を襲ひ、遂に鈞を斬り殺し、勝つた勢に乘じて、續けざまに南海や順天を陷れ、豆恥津から上陸した。そして清正の兵は西生浦から、慶州を通つて全羅に入つた。諸城の敵兵は其の軍旗を見て曰ふには「鬼上官が來た」と、戰はないで崩れた。清正は進んで行長と一緒になり、黃石城を攻めて之を陷れた。城の

守將郭嶸や、趙宗道等は此の時皆討死した。

【語釋】加德（巨濟島の東北角。）○絕影島（釜山の南。）○南海（慶尙道の島。）○豆恥津（全羅道。）○慶州（慶尙道の東南。）○黃石城（全羅道。）

我軍乃二道竝進。清正從雲峯、浮田秀家繼之。行長從密陽、毛利秀元繼之。兵各五萬。會於南原。韓元帥權慄軍雲峯。望清正軍、棄守而逃。我諸將使島津義弘・加藤嘉明絕全州援路、而合軍入南原、投書楊元、約戰期。元高壘深塹、悉衆捍禦。諸將疾攻兩晝夜、已而退兵窺城兵倦且息、則復進、伏卒一面、而三面塡塹踏藉而登。元在帳中、裸跣走。其所率遼東突騎數千、爭門馳出。伏兵要之、奮刀斫馬足。適月明。明騎莫得脫者。韓將李福男等皆死。我軍進向全州。州民素苦陳愚衷徵求。及聞南原陷、皆遁走。明兵阻之、多爲韓人所傷。愚衷遂棄城走。會麻貴遣牛伯英等援南原、不及。與愚衷合兵、軍于公州。我諸將因糧於全州、終議入國都。

【通釋】我が軍乃ち二道竝び進む。清正は雲峯よりし、浮田秀家之に繼ぎ、行長は密陽よりし毛利秀元之に繼ぐ。兵各〻五萬、南原に會す。韓の元帥權慄、雲峯に軍す。清正の軍を望み、守を棄てゝ逃る。我が諸將、島津義弘・加藤嘉明をして、全州の援路を絕たしめ而して軍を合せて南原に入り、書を楊元に投じて戰期を約す。元、壘を

高くし塹を深くし、衆を悉して捍禦す。諸將疾く攻むること兩晝夜。已にして兵を退く。城兵の倦み且つ息ふを窺ひ、則ち復進み、卒を一面に伏せて、三面は塹を塡め、踏藉して登る。元、帳中に在り。裸跣して走る。其の率ゐる所の遼東の突騎數千、門を爭つて馳せ出づ。伏兵之を要し、刀を奮ひ馬足を斫る。適〻月明なり。明騎脫するを得る者莫し。韓將李福男等皆死す。我が軍進んで全州に向ふ。州民素より陳愚衷の徵求に苦しむ。南原陷ると聞くに及び、皆遁れ走る。明兵之を阻み、多く韓人の傷つくる所と爲る。愚衷遂に城を棄てゝ走る。會〻麻貴・牛伯英等を遣はし南原を援く。及ばず。愚衷と兵を合せ公州に軍す。我が諸將、糧に全州に因り、終に國都に入るを議す。

通釋　そこで我が軍は二道から並んで進んだ。清正は雲峰から進み、浮田秀家が其の後につゞき行長は密陽から進んで毛利秀元がその後につゞいた。兵力は各五萬であつた南原で落ち合ふことにした。韓の元帥權慄は雲峰に陣取つて居た。清正の軍勢を遠くから見て守を棄てて逃げ走つた。我が諸將は島津義弘と加藤嘉明をして全州の援兵の來る路を絕たせ、そして軍勢を合せて南原に入り、手紙を楊元の所にやつて、戰の日取を約束した。楊元は城壘を高くし、堀を深め、そして有り丈の兵で防いだ。日本の諸將は手きびしく攻めること二日二晩。それから間もなく一旦兵を退いた。城中の兵が疲れて休んで居るのを見て、再び進み、兵卒を一面にかくし、そして三面は堀を埋め、踏み越えて城壁に登つた。元は其の時帳の中に居た。驚きあわてて、裸素足で逃げ出した。元が率ゐて居た遼東の騎兵隊數千人も、出口を爭つてかけて出た。伏兵が之を待ち伏せして、刀を奮つて馬の足を斷ち切つた。丁度其の時は月が照つて居た。明の騎兵に逃れることの出來た者は無かつた。又韓の將李福男等は皆討死した。我が軍は進んで全州に向つた。全州の民は、元來陳愚衷が兵を募つたり、食糧を求めたりす

ることに依つて、隨分苦しんで居た。南原が既に陷つたと聞いて、皆逃げ走つて終つた。明兵は其の逃げるのを邪魔して、韓人の爲めに却つて多くの者を傷つけられた。愚衷はとう／＼城を棄てて逃げた。丁度其の時麻貴が牛伯英等を遣はして、南原を援けさせた。併しもう間に合はなかつた。だから愚衷と其の兵を合せて公州に陣取つた。我が諸將は食糧を全州から得ることにして、遂に國都に入るといふ相談を進めた。

語釋 雲峯（全羅道。）○密陽（慶尚道。）○公州（忠清道。）

韓王聞水陸軍皆敗、謂鳥嶺之守無益也、使李元翼引兵徑出忠清、以沮我軍鋒、復起李舜臣統三道水軍。舜臣至錦島、與我將菅正陰、遇于碧波亭下。以大礮乘潮來攻。正陰敗死。舜臣因與明水軍將陳璘、軍古今島、以扼我水軍。而我陸軍一隊以秀元爲將、黒田長政爲先鋒、進迫國都。九月、軍于全義館、擊明將解生于稷山。明將楊登山・牛伯英、來衝我陣。長政將後藤基次・栗山利安、揮槍拒之。殺傷相當。登山・伯英退與生合、濟川斷橋。我兵絶流而渡、擊走之。明軍復大至。長政將母里友信・原種良等力戰。秀元亦至、擊卻明軍。

訓讀 韓王水陸の軍皆敗ると聞き、鳥嶺の守益なしと謂ふや、李元翼をして兵を引き徑に忠清に出で、以て我が

軍鋒を沮ましめ、復李舜臣を起して三道の水軍を統べしむ。舜臣、錦島に至り、我が將菅正陰と碧波亭の下に遇ふ。大礮を以て潮に乘じ來り攻む。正陰敗死す。舜臣因つて明の水軍の將陳璘と、古今島に軍し、以て我が水軍を扼す。而して我が陸軍の一隊は、秀元を以て將と爲し、黑田長政を先鋒と爲し、進んで國都に迫る。九月、全義館に軍し、明將解生を稷山に擊つ。明將楊登山・牛伯英、來つて我が陣を衝く。長政の將後藤基次・栗山利安、槍を揮つて之を拒ぐ。殺傷相當る。登山・伯英退いて生と合し、川を濟り橋を斷つ。我が兵流を絕ちて渡り、擊つて之を走らす。明軍復大に至る。長政の將母里友信・原種良等力戰す。秀元も亦至り、擊つて明軍を郤く。

通釋　韓王は、水陸の軍が皆敗けたと聞いて、それでは最早鳥嶺の守も無效だと思つたので、李元翼に兵をつれて眞直に忠淸道に出て、我が軍の先鋒を遮らせ、李舜臣を再び任用して、三道の水軍を總べ括らせた。舜臣は錦島に來て、我が將の菅正陰と碧波亭の下で出會つた。大砲を放ちながら、潮時の流に乘つて攻めて來た。正陰は敗れて討死した。そこで舜臣は明の水軍の將陳璘と共に、古今島に陣を構へて、我が海軍を防ぎ止めた。そして我が陸軍の一隊は秀元を大將に戴き、黑田長政を先鋒として國都に向つて迫つた。九月、全義館に陣取り、明將の解生を稷山といふ所で攻めた。明の將楊登山や牛伯英が、やつて來て我が陣を突いた。すると長政の部下の將後藤基次・栗山利安は槍を揮つて、之を防いだ。彼我の殺傷相同じく、互角であつた。登山・伯英は退いて解生の軍と合し、川を渡つて、其の橋を落した。我が兵は流を橫切つて渡り、擊つて敵を走らせた。その內に明軍が再び大擧して來た。長政の將、母里友信や原種良等が力を盡して戰つた。秀元も亦到着して、明軍を擊つて退郤せしめた。

語釋　錦島（珍島ならんといふ說がある。）○碧波亭（珍島の東岸。）○古今島（全羅道の南岸。）○全義館・稷山（忠淸道。）

於是、明軍在國都者、不敢出。我軍亦持重不進。天漸寒。十月、清正退守蔚山、行長退守順天。諸將連營、與釜山相爲聲援。明乃遣李如梅、來取谷城、遂攻毛利秀包于星州。不能取。秀包亦以兵少退守求禮。十一月、邢玠入韓、聚議都城、以爲和兵持重、若待秀吉親濟者、其志不在小。宜及今擊之。會明諸道募兵皆至。乃分爲三、李如梅將左軍、高策將中軍、李芳春・解生將右軍、明三十三將與韓七將、分屬三軍、以楊鎬・麻貴統之。糧餉火器、皆極豐備。期以十二月進攻焉。我諸將聞之、益修城壘。清正巡視西生諸寨、而留裨將加藤清兵衛、與毛利氏援卒、俱修蔚山。

〔譯文〕是に於て明軍の國都に在るもの、敢て出でず。我が軍も亦持重して進まず。天漸く寒し。十月、清正退いて蔚山を守り、行長退いて順天を守る。諸將營を連ねて、釜山と聲援を相爲す。明乃ち李如梅を遣はし、來つて谷城を取り、遂に毛利秀包を星州に攻む。取ること能はず。秀包も亦兵少なきを以て、退いて求禮を守る。十一月邢玠韓に入り、都城に聚議し、以爲へらく、和兵持重して、秀吉の親ら濟るを待つもの、若し。其の志小に在らず。宜しく今に及んで之を擊つべしと。會〻明の諸道の募兵皆至る。乃ち分つて三と爲し、李如梅を左軍に將とし、高策を中軍に將とし、李芳春・解生を右軍に將とし、明の三十三將と、韓の七將とを三軍に分屬し、楊鎬・麻貴を以て之を統べしむ。糧餉火器、皆豐備を極め、十二月を以て進み攻めんと期す。我が諸將之を聞き、益々

城壘を修む。清正西生の諸寨を巡視し、而して裨將加藤清兵衞を留め、毛利氏の援卒と俱に蔚山を修めしむ。

通釋 そこで、國都に居た明軍は出ようとしなかつた。我が軍も亦重々しく構へて進まず休戦の狀態となつた。此の頃氣候は段々と寒くなつた。十月、清正は蔚山に後退して守り、行長は順天に退いて守つた。そして諸將は陣營を連ねて釜山と互ひに聲援した。明はそこで李如梅を寄越して、谷城を取り、そして遂に毛利秀包を星州で攻めた。併し取ることは出來なかつた。秀包も亦兵が少ないので退いて求禮を守つた。十一月に邢玠が韓に來て國都の城で、諸將と相會して相談を開き考へるには、日本兵は持重して秀吉の親ら朝鮮に渡るのを待つて居るやうだ。其の志は小さいものではない。今の内に之を擊つて終ふのがいゝといふことであつた。其の時丁度明の各地から集めた兵隊が皆到着した。そこで之を三つに分けて、李如梅を左軍の將、高策を中軍の將、李芳春と解生とを右軍の將と定め、又明の三十三人の將と韓の七人の將とを三軍に分けて從はせ、楊鎬と麻貴をして之を統べさせた。食糧や鐵砲の類も皆豐富に備へ付けを終り、十二月進軍して攻擊しようと期して居た。我が諸將は之を聞いて、益々城壘を堅固にした。清正は西生に在る多くのとりでを見廻りに出かけ、副將の加藤清兵衞を留めて置いて、毛利の援兵と一緒に蔚山の城を修復せしめた。

語釋 谷城（全羅道。）

明諸將議曰「秀吉諸將、清正最勇悍。先克清正、則餘從風解」。乃聲向順天、以牽行長、而諸軍會慶州、留高策于彥陽、以絕釜山援路。而李如梅・解生等、皆萃于蔚山。蔚山

土木未竣。其役卒駭明軍至、入告清兵衞。清兵衞出戰、陷伏大敗、入城嬰守。淺野左京大夫率毛利氏將太田政信・宍戶元繼等、將往蔚山監役。行至彥陽、與高策夾嶺而舍、未相知也。比曉我斥兵上嶺、爲明先鋒所獲。我軍乃覺。政信・元繼說曰「衆寡懸絕、不若疾走入蔚山也」。大夫曰「幸長提兵至此、未視明人之旗而逃、何面目復見太閤哉。公等欲走卽走。吾當死於此矣」。乃遣其將太田・岡野・龜田・森島四人、率銃隊進、逆擊明先鋒卻之。

【訓讀】明の諸將議して曰く「秀吉の諸將、清正最も勇悍なり。先づ清正に克たば則ち餘は風に從つて解けん」と。乃ち順天に向ふと聲し、以て行長を牽き、而して諸軍慶州に舍し、高策を彥陽に留め、以て釜山の援路を絕つ。而して李如梅・解生等皆蔚山に萃まる。蔚山の土木未だ竣らず。其の役卒明軍の至るに駭き、入つて清兵衞に告ぐ。清兵衞出でゝ戰ひ、伏に陷りて大に敗れ、城に入りて嬰守す。淺野左京大夫、毛利氏の將太田政信・宍戶元繼等を率ゐ、將に蔚山に往き役を監せんとす。行いて彥陽に至り、高策と嶺を夾んで舍し、未だ相知らず。曉くる比我が斥兵嶺に上り、明の先鋒の獲る所と爲る。我軍乃ち覺る。政信・元繼說いて曰く「衆寡懸絕、疾く走つて蔚山に入るに若かざる也」と。大夫曰く「幸長兵を提げて此に至り、未だ明人の旗を視ずして逃る、何の面目あつて復太閤に見えんや。公等走らんと欲せば卽ち走れ。吾は當に此に死すべし」と。乃ち其の將太田・岡野・龜田・森

島の四人を遣はし、銃隊を率ゐて進み、明の先鋒を逆へ撃つて之を卻く。

【通釋】明の諸將は相談して曰ふには「秀吉の大將の內で清正が一番勇ましく強い。先づ清正に勝つたならば、あとの軍勢は風に從つて守を解いて逃げるだらう」と。そこで順天に向ふのだといひふらし、行長を牽制し、そして諸軍は慶州に集合し、高策を彦陽に留めて釜山よりの援路を絶ち切らせた。そして李如梅や解生等は皆蔚山に集まつた。然るに蔚山の土木工事はまだ完成しなかつた。其の人夫共が明軍の來たのに驚いて、城に入つて清兵衞に告げ知らせた。清兵衞は城を出て戰つたが、伏兵に引掛つて大敗北をし、城に入つて立て籠つた。淺野左京大夫(幸長)は毛利の將太田政信や宍戸元繼等を率ゐて蔚山に行つて工事を檢分しようとした。彦陽に着いて、高策と山を夾んで宿營したが、まだお互ひには知らないで居た。夜明け頃日本の物見の兵が嶺に上つて明の先鋒に捕へられた。そこで我が軍は初めて明兵が山の向側に居ることを覺つた。すると政信と元繼が說いて曰ふには「彼の大勢と我の小勢とまるでお話になりませんから、早く走つて蔚山に入り込んで終ふのが一番良いと思ひます」と。大夫は「余が兵を率ゐて此處まで來てまだ明軍の旗も見ないで逃げたならば、どの面さげて太閤にお目にかゝれるか。君等は逃げようと思ふならば、勝手に逃げるがいゝ。自分はどうしても此處で討死をする覺悟だ」と。そこで其の部下の將太田・岡野・龜田・森島の四人をやつて、銃隊を引きつれて明の先鋒を迎へ擊たせ、之を退けた。

大夫在高阜。望見策軍踰嶺也。恐其戰沒、使人召還之。不肯。奮擊斃數百人而死之。獨龜田脫歸、獻所獲甲首。且曰「明兵之衆、望之無際。請君速退」。大夫怒曰「吾豈聞衆

而退哉。自揚徽號麾衆而進。將士觀之爭赴明軍。大夫身被十餘創、猶進不已。龜田力諫。使二從士回其轡、而以刀鞘鞭馬。馬奔蔚山。策兵追躡。岡田某・福永某、返戰而死。清兵衛望見、出城迎入。元繼爲明軍所隔、自間路入島山。島山、蔚山別堡也。

訓讀 大夫高阜に在り、策の軍、嶺を踰ゆるを望見す。其の戰沒を[illegible]れ、人をして之を召還せしむ。肯ぜず。奮擊數百人を斃して之に死す。獨り龜田脫れ歸り、獲る所の甲首を獻ず。且つ曰く、「明兵の衆、之を望むに際無し。請ふ宿速に退け」と。大夫怒つて曰く、「吾れ豈に衆を聞いて退かんや」と。自ら徽號を揚げて衆を麾き、進む。將士之を視て、爭うて明軍に赴く。大夫身十餘創を被る。猶ほ進んで已まず。龜田力諫す。從士をして其の轡を回さしむ。而して刀鞘を以て馬に鞭つ。馬蔚山に奔る。策の兵追躡す。岡田某・福永某、返り戰つて死す。清兵衛望見して城を出で、迎へ入る。元繼明軍の隔つる所と爲り、間路より島山に入る。島山は蔚山の別堡なり。

通釋 左京大夫は高い岡の上に居た。高策の軍が嶺を越えるのを遠くから見て居た。そして其の四人の將が戰死するのを心配して、人をやつて之を呼び返へさせた。併し承知しなかつた。奮ひ戰つて數百人を殺して、とう〳〵其處で討死した。只一人龜田は脫れ歸つて、切り取つた首を獻上した。そして曰ふには「明の軍勢は、望み見た所、果てがない位澤山居ります。どうか早速逃げて下さい」と大夫は怒つて曰ふのに「俺は敵勢が多いと聞いて逃げられようか、決して逃げないぞ」と。自ら旗印を押し立て、軍勢を指揮して進んだ。將士は之を見て爭つて敵中へ突込んだ。大夫は身に十箇所餘の創を被つた。それでも猶ほ進んで止まなかつた。龜田は一生懸命

之を諫めた。二人の從者に大夫の馬の轡を引き返へさせた。そして刀の鞘で馬を打つた。すると馬は蔚山の方角に飛び出した。高策の兵は之を追ひ掛けた。岡田某や福永某は引き返して戰つて討死した。清兵衛は之をのぞみ見て城から出て迎へ入れた。元繼は明軍に隔てられて、拔け路から島山に入つた。島山は蔚山の外の小城である。

時楊鎬・李如梅等、已破蔚山外郭。大夫代清兵衛率厲將士、嬰壁守之。明兵以大夫爲清正也、欲必獲之、攻擊甚急。大夫自放銃、無不命中。時開門突戰。殺傷過當。二城之間有川。李芳春・解生泛兵艦以絶之。城兵銃破其五艘、溺數千人。而敵勢不衰。麻貴・茅國器、鼓衆攀壁、前者墜、後者登、晝夜不歇。城兵欲告急於清正。清正時在機張。相去三日程、敵衆充塞道路。大夫曰「誰可往者」近臣木村某奮請往。大夫壯之、予以善馬。已出門。明兵麕集。木村、一騎馳突萬衆中、一日一夜、達機張。見清正告急。清正大驚、投袂而起。左右或止之曰「蔚山以孤城當大敵之衝、而我寡兵援之、終不能保。不若棄之也」清正曰「彈正囑我曰『緩急幸援我兒。』今餒之敵、何以立天下。」乃率見兵五百人、人負糧食、登舟赴援、與明候船戰江中、走之。清正自蒙銀兜鍪、杖薙刀、立船

首ニ指‐麾ス士卒ヲ。明韓ノ諸軍指目シテ、莫シ敢テ近ヅク者。遂ニ入ル蔚山ニ。

訓讀 時に楊鎬・李如梅等、已に蔚山の外郭を破る。大夫清兵衛に代つて將士を率勵し、壁に嬰りて之を守る。明兵大夫を以て清正と爲すや、必ず之を獲んと欲し、攻撃甚だ急なり。大夫自ら銃を放ち、命中せざるは無し。時に門を開いて突戰ふ。殺傷過當なり。二城の間に川有り。李芳春・解生兵艦を泛べて以て之を絶つ。城兵銃して其の五艘を破り、數千人を溺らす。而して敵勢衰へず。麻貴・茅國器、衆を鼓し、壁を攀ぢ、前者は墜ち、後者は登る。晝夜歇まず。城兵急を清正に告げんと欲す。清正時に機張に在り。相去ること三日程にして、敵衆道路に充塞す。大夫曰く「誰か往く可き者ぞ」と。近臣木村某奮つて往かんと請ふ。大夫之を壯とし、予ふるに善馬を以てす。已に門を出づ。明兵齊集す。木村、一騎萬衆の中を馳突し、一日一夜にして、機張に達す。清正に見えて急を告ぐ。清正大に驚き袂を投じて起つ。左右或は之を止めて曰く「蔚山は孤城を以て大敵の衝に當る。而して我が寡兵之を援くるも、終ひに保つ能はざらん。之を棄つるに若かざるなり」と。清正曰く「彈正我れに囑して曰く『緩急あらば幸ひに我が兒を援へ』と。今之を敵に斃せば、何を以て天下に立たん」と。乃ち見兵五百人を率ゐて、人ごとに糧食を負ひ、舟に登りて赴き援け、明の候船と江中に戰ひ之を走らす。清正自ら銀兜鍪を戴り、薙刀を杖つき、船首に立ちて士卒を指麾す。明韓の諸軍指目して、敢て近づく者莫し。遂に蔚山に入る。

通釋 その時、楊鎬や李如梅等は既に蔚山の二の丸を破つた。大夫は清兵衛に代つて將士を率ゐ勵まし、城壁に立て籠り守つた。明の兵は大夫を清正だと思ひ、必ず之を獲たいと盛に攻撃した。大夫は自ら鐵砲を撃つたが命中しない丸はなかつた。時に門を開いて突撃した。殺傷した數は相當以上の數に上つた。蔚山と其の外城島山

との間には、川があつた。李芳春と解生とは兵艦を浮かべて、其の間を絶ち切つた。すると城兵は鐵砲で其の内の五艘を打ち沈め、數千人を水に溺れさせた。併し敵の勢は少しも衰へなかつた。麻貴や茅國器は衆を鼓舞して城壁にはひ登り、前の者が辷り落ちると、後の者が登るといふ有樣であつた。それを晝も夜も歇めなかつた。城中の兵は急を清正に告げ度いと思つた。其の時清正は機張に居つた。機張までは相去ること三日を要する里程であつた。敵が行く道々に、いつぱいに滿ちふさがつて居た。大夫が曰ふのに「誰か行かれる者はゐないか」と。近臣の木村某といふもの、奮ひ立つて自分が行き度いと申し出た。大夫はそれは誠に勇ましいと賞めて、善い馬を一頭與へた。やがて木村は門を出た。明兵は群り集つて來た。木村は只一騎で萬人の中を馳せ進み一日一晩で早くも機張に着いた。清正に面會して急を告げた。清正は大に驚いて、袂を振つて勢よく起ち上つた。左右の家來は之をとゞめて曰ふには「蔚山は孤城でありながら。大敵の打つて出る要路に當つて居ります。そして今我々の少ない兵力で之を援けても、結局は支へることは出來ません。之は見棄てた方が得策です」と。清正が曰ふのに「幸長の父長政が余に賴んで曰ふには『急な場合には何分とも我が倅を助けてやつて呉れ』と。今之を敵に見捨てゝ殺したとなると後日余はどうして天下に立つことが出來ようか」と。そこで有り合せの兵五百人を引きつれ、各人に食料を背負はせ、舟に乘つて助けに赴き、明の見張船と川の中で戰つて、之を退けた。清正は銀製のかぶとをかぶり、薙刀を杖について、舳に立つて士卒を指揮した。明韓の諸軍は指し見て居るだけで、近づかうとする者もなかつた。清正は遂に蔚山城に入つた。

語釋 二城（蔚山、島山。）○木村某（賴母。）

鎬貴謂將士曰「清正定入城矣。猶檻虎而刺之也」。明日、合諸軍蟻附而上。清正令士卒投大石巨材、撃卻之。卽夜、與數百騎襲明軍、大獲而還。敵更起飛樓、以火筒・佛郎機百道竝攻。城壘震裂。清正與大夫堅守不屈。鎬貴知其不可力取、乃下令休戰、合圍十晝夜、斷我汲道。城兵飢渴、皆嚼紙、煎壁土、刺馬飲其血。馬盡、乃飲溺。夜出城外、搜明人尸、取其所佩糗糧牛炙食之。天大雪、士卒皸瘃、有墮指者。而清正意氣自若。益修守具、用銃及紙皷、日斃明兵數百千人。鎬貴夜設伏、而曉焚營退走數里、以誘城兵。城兵欲追。清正不許曰「彼舉火以退、退不設殿。不以夜而以曉。是將誘我而殲之也」。久之明伏稍稍出、終復圍之。浮田氏卒有亡在明軍者。呼語城上人曰「楊經理願媾和、欲與加藤公面議之。期城外百步相見」。清正欲往。大夫曰「敵情不可測。公受太閤命、爲一方重寄。勿輕出貽笑外國。雖然、不出示之怯也。度彼未識公面。僕請爲公代行」。衆遂兩止之。故紓會期、以竢我援兵至。

〔訓讀〕鎬貴將士に謂つて曰く「清正定めて城に入る。猶ほ虎を檻して之を刺すがごとし」と。明日諸軍を合せ

蟻附して上る。清正士卒に令し、大石巨材を投じ、擊つて之を卻く。卽夜、數百騎と明軍を襲ひ、大に獲て還る。敵更らに飛樓を起し、火筒・佛郎機を以て百道竝び攻む。城壘震裂す。清正大夫と堅く守つて屈せず。鎬貴其の力取す可からざるを知り、乃ち令を下して戰を休め、合圍すること十晝夜、我が汲道を斷つ。城兵飢渴し、皆紙を嚙み、壁土を煎じ、馬を刺して其の血を飲む。馬盡く。乃ち溺を飲む。夜城外に出で、明人の尸を搜り、其の佩ぶる所の糗糧牛炙を取りて之を食ふ。天大に雪ふり、士卒皸瘃、指を墜す者あり。而るに清正意氣自若たり。益々守具を修め、銃及び紙礮を用ひ、日に明兵數百千人を斃す。鎬貴夜伏を設けて、曉に營を焚き、退き走ること數里。以て城兵を誘ふ。城兵追はんと欲す。清正許さずして曰く「彼火を擧げ以て退き、退くに殿を設けず。夜を以てせずして曉を以てす。是れ將に我れを誘ひて之を殲さんとするなり」と。之を久しうして明の伏稍稍出で、終に復之を圍む。浮田氏の卒亡けて明軍に在る者あり。呼んで城上の人に語げて曰く、楊經理媾和を願ふ。加藤公と之を面議せんと欲す。城外百歩を期し相見ん」と。清正往かんと欲す。太夫曰く「敵情測る可からず。公太閤の命を受け、一方の重寄爲り。輕しく出で、笑を外國に貽す勿れ。然りと雖も、出でざれば之に怯を示す。度るに彼れ未だ公の面を識らず。僕請ふ、公の爲めに代り行かん」と。衆遂に兩つながら之を止む。故らに會期を緩うし、以て我が援兵の至るを竢つ。

通釋　楊鎬や麻貴が其の將士に向つて曰ふには「清正は確實に城に入つた。それは宛かも虎を檻に入れて之を刺す樣なものだ」と。翌日、諸軍を一緒に合せて、蟻のやうにべた一面に城壁を這ひ上つた　清正は士卒に命令して大石や大きな材木を投げさせ、之を退けた。その夜清正は又數百騎と共に明軍を襲つて、隨分獲物を得て歸つた。敵は更に高い櫓を組み立て、小銃や西洋製の大砲で方々から竝んで攻め立てた。城壘は爲めに震へ裂け

た。清正は大夫と共に堅く守つて屈服することをしなかつた。楊鎬や麻貴も遂に力を以ては此の城を拔くことは出來ないと覺り、そこで命令して戰をやめ、夜晝十日の間、城を取り圍んで、我が籠城の兵の水を汲む道を斷つた。城の兵は腹が減り、咽喉が乾いたので、皆、紙を嚼んだり、壁土を煮て食べたり、又馬を刺し殺して其の血を飲んだりした。馬もやがてなくなつた。次には小便を飲んだ。夜は城の外へ出で明兵の死骸を探して、其の持つて居る乾飯や燒いた牛肉などを取つて食つた。折から大雪が降つたので、士卒は皸や霜焼を出して、指を落す者もあつた。清正はその心少しも動かなかつた。益々守り道具を整へ、鐵砲や紙筒で毎日明兵數百千人宛を斃した。楊鎬・麻貴は夜、伏兵を置き、朝になつて陣屋を燒いて數里も逃げ走つて、城の兵をおびき出さうとした。城兵は之を追撃したいと思つた。清正は許さないで曰ふには「彼は火を放つて退いたが、退くのに殿軍の備へがない。又夜中に逃げないで、朝になつてから逃げ出した。是はきつと我々をおびき出して、皆殺しにする算段だらう」と。暫くすると明の伏兵は段々に顯はれ出で來て、終に再び城を取り圍んだ。浮田氏の兵卒で明軍に逃げて行つた者があつた。城の上の人を呼んで曰ふには「明軍の大將楊經理は和睦を願つてゐます。加藤清正公と面會して相談したいと思つてゐます。城の外百歩の所でお目にかゝりませう」と。清正は行かうと思つた。すると大夫が曰ふのに「敵の様子は測り知られません。加藤公は太閤の命令を受けて一方の重任を引き受けて居られる。此の際輕々しく城を出で、萬一のことがあつて笑ひ草を外國に殘すやうなことがあつてはなりませぬ。併し又、誰も出て行かなかつたなら、敵に臆病を見せることになる。考へて見るに向ふではまだ加藤公の顏を知つて居りません。我が輩が代つて行き度いと思ふ」と。多くの人々は、遂にそのどちらをも引き止めた。そこで故意に面會の時期を長びかせて、援兵の來るのを待つて居た。

語釋 佛郎機（佛蘭西製の大砲。）○皸瘃（ひゞ切れ、しもやけ。）○紙礮（紙で貼り抜いた大砲。）

黒田孝高在梁山。使使告釜山曰「蔚山急矣。即陷諸城隨之。不可不赴援。」諸將然之。豐臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其子高良・脇坂安治等、將騎卒五萬、自彥陽・昌原分道赴援。而行長自海上會之。三年正月、秀秋等至彥陽、擊破高策、與昌原軍皆赴蔚山。行長益裝空艦、蔽海而至。楊鎬聞我軍自三面至、挺身先遁。麻貴・解生等乘夜解圍。長政使後藤基次晨出候軍。得一馬蕤于水涯。返報曰「是日本制。我兵已有騎渡者。不可後矣。」長政即馳躡明軍。藤堂高良等揮槍繼之。清正與大夫、乃開門合擊。敵衆崩駭。獨其將吳惟忠・茅國器、殿而回戰。吉川廣家奮擊走之。明軍大走、遺棄糧仗蔽野。

訓釋 黒田孝高梁山に在り。使をして釜山に告げしめて曰く「蔚山急なり。即し陷らば諸城之に隨はん。赴き援けざるべからず」と。諸將之を然りとす。豐臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其子高良・脇坂安治等、騎卒五萬に將として彥陽・昌原より道を分つて赴き援ふ。而して行長は海上より之に會す。三年正月、秀秋等彥陽に至り、擊つて高策を破り、昌原の軍と皆蔚山に赴く。行長益〻空艦を裝し、海を蔽うて

至る。楊鎬我が軍三面より至ると聞き、身を挺して先づ遁る。麻貴・解生等、夜に乘じて圍を解く。長政、後藤基次をして晨に出で、軍を候はしむ。一馬鞵を水涯に得たり。返り報じて曰く「是れ日本の制なり。我が兵已に騎渡する者あり。後るべからず」と。長政卽ち馳せて明軍を躡す。藤堂高良等槍を揮つて之に繼ぐ。清正大夫と乃ち門を開いて合擊す。敵衆崩駭す。獨り其の將吳惟忠・茅國器、殿して回り戰ふ。吉川廣家奮擊して之を走らす。明軍大に走り、糧杖を遺棄して野を蔽へり。

通釋 黑田孝高は梁山に居た。使を釜山にやつて告げて云ふには「蔚山が危い。若し蔚山が落城するやうなことがあると、他の諸城も之に隨つて次ぎ〳〵に落ちるだらう。故に蔚山へ速かに援けに行かねばならぬ」と。諸將も之に贊成した。豐臣秀秋・毛利秀元・黑田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎其の子高良・脇坂安治等が五萬の騎兵に將となつて、彦陽と呂原とから道を別々にして援けに赴いた。そして行長は海上の方から之に一緒になつたのである。三年正月、秀秋等は彦陽に着き、高策を打ち破り、呂原の軍と共に蔚山へ向つた。行長は益々空船を空船でないやうに見せかけ、海にいつぱいになつてやつて來た。楊鎬は日本軍が三方面から寄せて來ると聞いて、一人拔け出し最初に逃げ出した。麻貴・解生等は夜に乘じて圍を解いた。長政は後藤基次をして朝出て敵軍の様子を見させた。すると川岸で一足の馬沓を拾つた。歸つて來て報告して曰ふには「是は日本風に出來て居ます。して見ると日本兵で、もう川を馬で渡つた者があるのである。遲れてはなりませぬ」と。長政は直ちに馳せて明軍を追つた。藤堂高良等は槍を揮り廻しながら、之につゞいた。清正と大夫は、そこで門を開いて共どもに攻め立てた。敵勢は崩れ駭いた。只其の將吳惟忠と茅國器だけが、殿軍となつて引き返して戰つた。吉川廣家が奮ひ戰つて之を走らせた。明軍は散々に敗けて逃げ、糧食や兵器の捨てられたものが、野原を蔽うていつ

ばいになつた。

諸將之救蔚山也、明候我空虛、一軍襲梁山、爲黑田孝高擊卻之。一軍襲釜山、浮田秀家使立花宗茂邀于般丹、燒而走之。明主得蔚山敗聞、與其下議曰、「是役也、謀之經年。傾海內力、加以全韓之兵、期於必克。今乃如此。罪當歸經理。」乃罷楊鎬、以萬世德代之、與鄧子龍・張芳監・芳威等、率楚兵往助邢玠。秀吉得蔚山捷聞、賜手書於清正賞之、爲餽糧食。

訓讀 諸將の蔚山を救ふや、明我が空虛を候ひ、一軍は梁山を襲ひ、黑田孝高の爲めに之を擊ち卻けらる。一軍は釜山を襲ひ、浮田秀家、立花宗茂をして般丹に邀へしめ、燒いて之を走らす。明主蔚山の敗聞を得、其の下と議して曰く「是の役や、之を謀ること年を經たり。海內の力を傾け、加ふるに全韓の兵を以てして必克を期す。今乃ち此くの如し。罪、當に經理に歸すべし」と。乃ち楊鎬を罷め萬世德を以て之に代へ、鄧子龍・張芳監・芳威等と、楚の兵を率ゐて往いて邢玠を助けしむ。秀吉蔚山の捷聞を得、手書を清正に賜ひて之を賞し、爲めに糧食を餽る。

通釋 諸將が蔚山を救ひに集中すると、明軍は一方が空いたのを見すまして、明の一軍は梁山を襲ひ、却つて黑田孝高に卻けられた。一軍は釜山を襲つたが、浮田秀家が立花宗茂をやつて般丹で迎へさせ、燒打ちにして之

を追つ拂つた。明兵は蔚山で敗北したと聞いて、部下の者と相談して曰ふには「此の戰はあしかけ二年にもなつた。國中の力を傾けた上に、尙ほ全韓の兵を足して、必ず勝つことを目的とした。それが今や斯くの如き態たらくである。この罪はどうしても經理に負はせねばならぬ」そこで楊鎬を免職にして萬世德を之に代らせ、鄧子龍・張芳監・芳威等と共に楚の兵を率ゐて邢玠を助けにやつた。秀吉は蔚山の勝報を得て喜び、自筆の感狀を清正に與へて賞め稱へ、糧食を送つてやつた。

語釋 般丹（慶尙道。）

三月、秀吉携秀頼及夫人以下遊醍醐。命前田玄以掌供帳、務使豐盛、勿有遺憾。四月、遣使諭諸將、留秀秋・行長・清正及島津義弘・黒田長政・左京大夫等十餘將、其餘盡能歸。其留者、分爲四屯。秀秋守釜山。而蔚山在其右、清正守之。順天在其左、行長守之。泗川在其前、義弘守之。四城兵凡十萬。明兵亦可十萬。世德與邢玠議、令李如梅當義弘、劉綎當行長、麻貴當清正、陳璘以水軍出其後。已而召如梅、以董一元代之。相持未戰。是月、秀頼進從二位、爲權中納言。五月、秀吉有疾。六月、外師能者至。乃召見慰勞、論其賞罰。

【訓讀】三月、秀吉、秀頼及び夫人以下を携へて醍醐に遊ぶ。前田玄以に命じて供帳を掌らしめ、務めて豐盛ならしめて遺憾あること勿らしむ。四月使を遣はして諸將に諭し、秀秋・行長・清正及び島津義弘・黑田長政・左京大夫等の十餘將を留め、其の餘は盡く罷め歸らしむ。其の留まる者は、分ちて四屯と爲す。秀秋は釜山を守る。而して蔚山は其の右に在りて、清正之を守り、順天は其の左に在りて、行長之を守り、泗川は其の前に在りて、義弘之を守る。四城の兵凡そ十萬。明兵も亦十萬可り。世德、邢玠と議し、李如梅をして義弘に當り、劉綎をして行長に當り、麻貴をして清正に當り、陳璘をして水軍を以て其の後に出でしむ。已にして如梅を召し、董一元を以て之に代へ相持して未だ戰はず。是の月、秀頼從二位に進み、權中納言と爲る。五月、秀吉疾有り。六月、外師の罷むる者至る。乃ち召し見て慰勞し、其の賞罰を論ず。

【通釋】三月、秀吉は秀頼と夫人や其の以下の人々を伴れて醍醐へ遊びに行つた。前田玄以に命じて色々の支度を掌らせ、出來る丈け充分に立派に、そして何でも不足のないやうにさせた。四月、諸將の所へ使をやつて。秀秋・行長・清正及び島津義弘・黑田長政・左京大夫等の十人餘りの大將を殘し、其の他は全部歸らせた。殘つた將は四つの屯營に分れた。秀秋は釜山を守つた。そして蔚山は其の右で清正が之を守り、順天は左で行長が守り、泗川は前にあつて義弘が之を守つた。四城の兵力は凡そ十萬であつた。明の兵力も亦十萬位であつた。世德は邢玠と相談して、李如梅をして義弘に當らせ、劉綎をして行長に當らせ、麻貴をして清正に當らせ、そして陳璘には海軍を率ゐせて其の後に出るやうにさせた。それから間もなく如梅を呼び返して董一元に代らせ、お互ひに對陣するだけで、まだ戰にはならなかつた。是の月、秀頼は從二位に進み、權中納言に任ぜられた。五月、秀吉が病に罹つた。六月、外國から歸つて來ることになつてゐた將士が到着した。そこで呼び入れて其の勞を慰め、又

其等の將士の手柄や失敗を論評した。

語釋 泗川（慶尚道）

七月、秀吉病篤、召徳川公、諭之曰「外國未服、而吾罹此疾、吾死則難作、非卿莫以定之。吾今日以天下託卿、卿爲我努力。秀頼幼弱、亦煩卿保護、至其成長、當立與不當立、一在卿之心。」徳川公歔欷曰「殿下百歳之後、孰不奉嗣君者、雖然人心不測、殿下宜運其神算、以建萬世之安。家康不才、不敢當重任。」曰「吾熟思之、莫若卿者、卿勿避也。」徳川公固辭而退。秀吉遂召石田三成・増田長盛、告之。二人諫曰「殿下百戰取天下、而一日予之他人。是胡爲也。今天下猛將謀臣、無不被殿下恩者、其於輔嗣君、何有。」

通釋 七月、秀吉病篤し。徳川公を召して之を諭して曰く「外國未だ服せず。而して吾れ此の疾に罹る。吾れ死せば則ち難作らん。卿に非ざれば以て之を定むる莫し。吾れ今日、天下を以て卿に託す。卿、我が爲に努力せよ。秀頼幼弱、亦卿の保護を煩す。其の成長に至つて、當に立つべきと當に立つべからざるとは、一に卿の心に在り」と。徳川公、歔欷して曰く「殿下百歳の後、孰か嗣君を奉ぜざる者ぞ。然りと雖も人心測られず　殿下

宜しく其の神算を運して以て萬世の安きを建つべし。家康不才、敢て重任に當らず」と。曰く「吾れ之を熟思するに、卿に若く者莫し。卿避くる勿れ」と。徳川公固辭して退く。秀吉遂に石田三成・增田長盛を召して之を告ぐ。二人諫めて曰く「殿下百戰して天下を取り、而して一日にして之を他人に予ふ。是れ胡爲るものぞや。今や天下の猛將謀臣、殿下の恩を被らざる者無し。其の嗣君を輔くるに於て何か有らん」と。

通釋　七月、秀吉の病氣は重くなつた。徳川公を呼んで諭して曰ふには「外國はまだ服從しない。而るに余は此んな病氣に罹つた。自分が死んだならば、きつと騷動が持ち上るだらう。貴公でなければそれを鎭める者は居ない。自分は今天下を貴公に任す。貴公はどうか自分の爲めに努力してもらひ度い。秀頼は幼小で、之も亦貴公の保護を煩し度い。あれが大きくなつた時、天下の將軍になるか、ならぬかは一に貴公の心次第で、どうともよろしく取計つて下され」と。徳川公は泣きしやくつて曰ふには「殿下がお歿くなりになつた後は、誰が後嗣の君を戴かないものが御座いませう。きつと後嗣の秀頼公を奉ずるのではあるが、併し、人の心といふものは、分らぬものであります。殿下はよろしくその優れた賢い計畫を運らして、萬世までも安泰になる基礎をお建てになるのがよろしい。家康は誠に才能のない者ですから、決して此の重い役目には當りませぬ」と。秀吉は曰ふのに「自分はよく〳〵考へて見るに、貴公より外に人はない。どうか辭退しないで呉れ」と。それでも徳川公は固く斷つて引き下つた。秀吉は遂に石田三成・增田長盛を呼んで、此の話を告げ知らせた。二人は諫めて曰ふのに「殿下は諸方で戰つて、苦心して天下を取られました。それをたつた一日で雜作なく、他人に與へようとなさる。是れは一體何んといふ仕儀で御座いますか。今天下の勇ましい大將や謀のうまい家來は、皆殿下の御恩を受けて居るのです、其等の者共が、御世嗣の君を輔けるといふことは當然なことであります」と。

於是定大老・奉行。奉行五人如故所置。徳川公及前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝爲五大老、以中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴爲三中老、小事決於奉行、大事決於大老。大老・奉行或有不協、則中老居間和解之。使片桐且元・小出秀正傅秀頼、密囑二人曰、「吾起人奴至爲關白。孰非國恩哉。吾與明構兵、禍結弗解。吾深悔之。彼聞吾死、或大擧來報。國朝自古未嘗受外國侵辱。及我時受焉、吾深恥之。是吾所以托國於家康。至我家存亡、未暇恤也。雖然、家康必不負我。汝輩謹保護秀頼、莫使生釁隙焉。」又使木村重成・薄田兼相・渡部尚副二人。分親兵爲七隊、以速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高爲隊長、馬標旌旗盡傳之秀頼、使母衣騎郡良列・卒將津川左近掌之。

【訓讀】是に於て、大老・奉行を定む。奉行五人は故置く所の如し。徳川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老と爲し、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を以て三中老と爲し、小事は奉行に決し、大事は大老に決す。大老・奉行或は協はざる有らば、則ち中老・間に居て之を和解せよと。片桐且元・小出秀正をして秀頼に傅たらしめ、密に二人に囑して曰く「吾れ人奴より起つて、關白と爲るに至る。孰か國恩に非ざらんや。吾れ明と兵

を構へ、禍結んで解けず。吾れ深く之を悔ゆ。彼れ吾が死するを聞かば、或は大擧して來り報いん。國朝古より未だ曾て外國の侵辱を受けず。我が時に及んで受くるは吾れ深く之を恥づ。是れ吾れ國を家康に托する所以なり。我が家の存亡に至つては、未だ恤ふるに暇あらざるなり。然りと雖も、家康は必ず我に負かじ。汝が輩、謹んで秀頼を保護し、釁隙を生ぜしむる莫れ」と。又木村重成・薄田兼相・渡邊尙をして二人に副たらしむ。親兵を分つて七隊と爲し、速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高を以て隊長と爲し、馬標、旌旗は盡く之を秀頼に傳へ、母衣騎郡良列・卒將津川左近をして之を掌らしむ。

【通釋】そこで大老や奉行の職を定め、奉行五人は前に置いたと同じやうにし　徳川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老とし、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を三中老とし、小さい事は奉行が決裁し、天下の大事は大老が取りきめることにした。若し大老と奉行とで意見が合はない場合は中老が其の仲に居て、仲裁するのである。片桐且元と小出秀正とは秀頼のお守役となし、秀吉が秘に二人に賴んで曰ふには「自分は下男から身を起して、關白となつたのだ。皆國の恩でないものはない。自分は明と戰爭をして、戰爭は未だに結んで解けない。これは深く後悔に堪へない所である。明國は自分が死んだと聞いたら、或は大擧押し寄せて返報するかも知れない。わが日本は古來まだ一度たりとも外國に侵され辱しめられたことはないのだ。自分の時になつてそのやうな事があつては、自分は深く恥とするのだ。さればこそ自分は天下を以て家康に任せようとしたわけなのである。自分の家が存續するか亡びるかといふやうなことは、決して心配してゐない。併し家康はきつと自分に背くやうなことはないと思ふ。お前方も謹んで秀頼を護り、仲たがひなど生じないやうに注意せよ」と　又木村重成・薄田兼相・渡邊尙の三人を、二人のお守の補助役とした。お側付の兵を七隊に分けて、速水守久・伊東長次・青木一

郵・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高を隊長と定め、馬じるしや旗の類は皆秀賴に讓り渡し、母衣騎の部良列と足柄大將の津川左近とに之を掌らせた。

〔語釋〕母衣騎（矢を防ぐものを背に負ふ勇猛なる騎士。）

八月、盡會大老・奉行以下爲誓。誓曰「虛心協謀、務輔嗣子、勿樹私黨、勿忘公義、勿變更、勿漏泄、勿不告而結婚、勿不告而交質。嗣子六歲、未能親政。前田保之於大坂、而德川視事於伏見、封邑行罰、皆俟嗣子之長。」命淺野彈正・石田三成曰「汝赴朝鮮收我兵。不能收則遣家康。家康有不可往則遣利家。二人遣一、雖有百萬敵、不能尾也。」十三日、疾大篤。將瞑已而張目曰「勿使我十萬兵爲海外鬼。」言畢而薨。年六十三。群臣秘喪、使前田玄以密葬之于阿彌陀峯。九月三日、德川公與諸侯盟、無貳於嗣君。遂使淺野・石田以遺命赴肥前、密召在韓諸將。

〔譯文〕八月、盡く大老・奉行以下を會し誓をなす。誓に曰く「心を虛しうして謀を協せ、務めて嗣子を輔け、私黨を樹つること勿れ。公義を忘るゝ勿れ。變更する勿れ。漏泄する勿れ。告げずして婚を結ぶ勿れ。告げずして質を交ふる勿れ。嗣子六歲・未だ政を親らすること能はず。前田は之を大坂に保し、而して德川は事を

伏見に視、邑を封じ罰を行ふこと、皆嗣子の長ずるを竢て」と。淺野彈正・石田三成に命じて曰く「汝、朝鮮に赴き我が兵を收めよ。收むる能はざれば則ち家康を遣はせ。家康往くべからざる有れば則ち利家を遣はせ。二人一を遣はせば、百萬の敵有りと雖も尾すること能はざるなり」と。十三日、疾大に篤し。將に瞑せんとす。已にして目を張つて曰く「我が十萬の兵をして海外の鬼と爲らしむる勿れ」と。言畢つて薨ず。年六十三なり。群臣、喪を秘し、前田玄以をして密に之を阿彌陀峯に葬らしむ。九月三日、德川公諸侯と、嗣君に貳無きを盟ひ、遂に淺野・石田をして、遺命を以て肥前に赴き、密に在韓の諸將を召さしむ。

〔通釋〕八月、全部大老奉行以下の家來を集めて誓をさせた。其の誓の言葉に曰ふには「心を虚しくし、力を協せて謀をなし、務めはげんで嗣子を助け、勝手に黨を組んではならぬ。公の義理を忘れるな。從來の式例を更めるな。機密を漏らすな。お上に告げずに緣を結ぶな。お上に告げずに人質を交換するな。嗣子は六歳でまだ親しく政事をとられない。前田は大阪で之を守り立て、そして德川は、伏見で政事を取り、土地を與へたり罰を行ふことは、皆嗣子の成長するのを待つて、それから後に行ふやうにせよ」と。淺野彈正と石田三成とに命じて曰ふには「汝等朝鮮に行き、我が兵を引上げさせよ。引上げることが出來ないならば家康をやれ。若し家康が萬一行かれないならば利家をやれ。二人の内どちらか一人をやつたら、百萬の大軍があつても、後を追つかけることは出來ないぞ」と。十三日には病氣が非常に重くなつた。最早目をとぢて息を引くのかと見えた。暫くして目を見張つて、曰ふには「我が十萬の兵を外國で殺してはならぬぞ」と。さう言ひ終つて薨じた。年は六十三歳であつた。家來は皆々喪をかくし、前田玄以をして秘に阿彌陀峰に葬らせた。九月三日、德川公は諸侯と共々世嗣に二心のないことを誓ひ合ひ、遂に淺野・石田をして遺言にもとづいて肥前に行かせ、秘に朝鮮にゐる諸將を召し

壁を堅くして敢て出でず。清正屢ゝ出でゝ戰ひ、撃つて貴の兵を走らす。立花宗茂、釜山に在り。自ら請うて、五百人を以て往いて清正を救ふ。明の五千人に元濆に値ふ。曉霧に乘じ薄撃して之に克ち、遂に北ぐるを追ふ。或人、衆寡敵せざるを以て之を止む。宗茂曰く「敵の馬足亂る。追ふ可し。追はざれば、我が寡きを視すなり」と。追撃して復之に克つ。既に舍し、明の囚を逸し、五伏を設け以て待つ。曰く「吾れ乃ち寡を視して之を誘ふなり」と。夜半明兵來り襲ふ。伏起つて復之に克つ。明日未だ蔚山に至らざる數十里にして、清正と夾んで麻貴を撃ち、大に之に克つ。

通釋 清正も亦蔚山の工事を竣へ、食糧も多く、兵士も勇氣に溢れて、人々皆戰を待ち望んで居た。九月、麻貴が温川に來た。前の敗戰に懲りて、城壁を堅固にして、決して出でゝ戰はうとはしなかつた。それで清正の方から度々出て行つて戰ひ、攻め撃つて麻貴の兵を走らせた。立花宗茂はこの時釜山に居た。自分から願ひ出て五百人の兵を率ゐて清正を救ひに來た。元濆といふ處で明の五千の兵と出會つた。朝霧がかゝつて居て、先がよく見えないのを利用して、ずつと近寄つて攻撃して之に打ち勝つた。遂に逃げるのを追はうとした。すると或人が、向ふは多く、こちらは少いから、とても相手にならないと言つて引き止めた。宗茂は曰ふのに「敵の隊伍は亂れて居る、追撃していゝのだ。若し追撃しないならば、其の事が却つてこちらの少ない兵力を示すことになるのだ」と。追撃して再び勝つた。既に宿舍に着いてからは、明の捕へられた者どもを放してやり、五個所に伏兵を置いて待つて居た。そして言ふには「自分は此の樣にして、兵力の少ないことを見せて、敵を誘ふのだ」と。果して夜中頃に明の兵が襲來した。伏兵が起つて又々之に打ち勝つた。翌日、蔚山へはまだ數十里もある地點で、清正と共に麻貴の軍を夾み撃ちにして大勝利を博した。

語釋 溫井・元濆（慶尚道。）○前敗（蔚山の大敗。）

是時義弘及子忠恆在新寨、與董一元夾晉江而軍。孛國器聞島津氏與豐臣氏爲宿仇、以爲可間也。乃作檄數秀吉罪、遣辯士以搖義弘。義弘叱而郤之。國器又說一元曰「義弘築望津・東陽・泗川・永春・昆陽・金海・固城・新寨八壘。勢如長蛇、望津其首也。撃其首、餘易制耳」。一元然之。會明捕虜郭國安在望津。送款於一元、約爲內應擧火爲信。至期國器引兵臨江。我兵亦出寨臨江。已而寨中火起。吾兵顧而救之。明兵乃渡、陷望津。忠恆在新寨、欲赴援。義弘曰「未可」。望津兵退守泗川。而一元已分兵襲永春・昆陽、燒其積聚、悉軍渡江、遂乘夜襲泗川。我守將出戰、斬明驍將李寧・盧得功、潰圍走新寨。忠恆復請赴援。義弘曰「未可」。一元已取數壘、而島津氏不出。意甚輕之、進燒東陽倉。火晝夜不滅。遂向新寨。國器止之、勸先攻金海・固城、以奪其羽翼。不聽。

訓讀 是の時義弘及び子忠恆、新寨に在り、董一元と、晉江を夾んで軍す。孛國器、島津氏の豐臣氏と宿仇たるを聞き、以て間すべしと爲す。乃ち檄を作つて秀吉の罪を數め、辯士を遣はして以て義弘を搖す。義弘叱して

之を卻く。國器、又一元に說いて曰く「義弘、望津・東陽・泗川・永春・昆陽・金海・固城・新寨の八壘を築く。勢長蛇の如し。望津は其の首なり。其の首を擊たば餘は制し易きのみ」と。一元之を然りとす。會〻明の捕虜、郭國安、望津に在り。欵を一元に送り、約して內應を爲し、火を擧げて信と爲す。期に至つて國器兵を引いて江に臨む。我が兵も亦寨を出で、江に臨む。已にして寨中火起る。吾が兵顧みて之を救ふ。明の兵乃ち渡り、望津を陷る。忠恒新寨に在り、赴き援けんと欲す。義弘曰く「未だ可ならず」と。望津の兵退いて泗川を守る。而して一元、已に兵を分ちて、永春・昆陽を襲ひ、其の積聚を燒き、軍を悉して江を渡り、遂に夜に乘じて泗川を襲ふ。我が守將出で、戰ひ、明の驍將李寧・盧得功を斬り、圍を潰して新寨に走る。忠恒復赴き援けんと請ふ。義弘曰く「未だ可ならず」と。一元已に數壘を取る。而して島津氏出でず意甚だ之を輕んじ、進んで東陽の倉を燒く。火、晝夜滅せず。遂に新寨に向ふ。國器之を止め、先づ金海・固城を攻め以て其の羽翼を奪はんことを勸む。聽かず。

通釋 此の時、義弘と其の子忠恒は新寨に居て、董一元と晉江を夾んで陣取つてゐた。茅國器は、島津が豐臣に對して舊い怨があると聞いて、間を割くことが出來ると思ひ込んだ。そこで廻し文を作つて秀吉の罪を書き並べ、辯舌のうまい者を寄越して、義弘の心を搖かさうとした。義弘は叱り飛ばして之を受附けなかつた。國器は又一元に說いて曰ふには「義弘は望津・東陽・泗川・永春・昏陽・金海・新寨などの八つのとりでを造らへた。其の樣子は大蛇の樣である。その內で望津は一番大事な首にあたる所だ。それを擊つたならば、あとは制御し易い」と。一元もこの說に贊成した。すると丁度明の捕虜の郭國安といふ者が望津に居た。彼は一元に內通して裏切を約束し、火を擧げて合圖としようと言つた。約束の時期になると、國器は兵を率ゐて川のほとりに出た。我が兵も亦とりでを出て江水の邊に出た。すると間もなく、とりでの中で火があがつた。我が兵はふり返つて之を消さうと

した。其の内に明兵は川を渡つて望津は破れて終つた。忠恆は新寨に居て、援けに行き度いと思つたが義弘が曰ふのに「まだいけない」と。望津の兵は退いて泗川を守つた。其の間に一元は兵を分けて永春と昆陽を襲ひ、其處にあつた軍需品を燒き拂ひ、軍を一緒に合せて川を越え、遂に夜を利用して泗川を攻めた。城を守つて居た我が將は城を出て戰ひ、明の強い大將李寧や盧得功を斬り殺し、敵の圍を突き破つて新寨へ走り込んだ。忠恆は再び援けに行き度いと願つた。義弘は「まだいけない」と言つて許さない。一元はもう數個所のとりでを落した。而して島津氏はまだ戰を交へない。そこで心に大に之を輕蔑し、進んで東陽の倉を燒いた。其の時の火は晝夜燃え續けてゐた。遂に一元は新寨に向つた。國器は之をとめて、先づ金海と固城を攻めて新寨の羽翼に當るものを取れと勸めた。併し聞き入れなかつた。

語釋 新寨・晉江（慶尚道）

十月朔、一元合兵、以國器及葉邦榮・彭信古爲先鋒、以藍芳威爲後軍、攻新寨、自卯至巳、以木砲摧大門及城墻、薄塹拔柵。城兵殊死戰。會砲炸烟焰四迸。明陣亂。義弘目忠恆曰、可以出矣。忠恆唯而起、與數千騎闢門直衝明陣。明陣皆披靡。而國器・邦榮、以萬人橫入城。義弘豫勒五千人迎擊走之。芳威望見先走。明軍遂大潰。義弘・忠恆追奔逐北、斬首三萬餘級。明兵爭走相擠、伏尸二百餘里。我軍以亡糧、不復窮

追。追至望津。乃還。而秀吉之訃適至。諸將潛相告言、稍稍治歸裝。而明都御史在呉者、諜知秀吉沒、報告明主。明主大喜、擧朝相賀。於是趣邢玠等躡我軍。郭國安亦走告之明群帥。群帥創新寨之敗、不敢進。

訓讀　十月朔、一元兵を合せて國器及び葉邦榮・彭信古を以て先鋒と爲し、藍芳威を以て後軍と爲し、新寨を攻め、卯より巳に至り、木砲を以て大門及び城墻を摧き、塹に薄り柵を拔く。城兵殊死して戰ふ。會々砲炸け烟焰、四に迸る。明の陣亂る。義弘、忠恆に目して曰く「以て出づべし」と。忠恆、唯して起ち、數千騎と門を闢いて直に明の陣を衝く。明の陣皆披靡す。而して國器・邦榮、萬人を以て横に城に入る。義弘豫め五千人を勒して、迎へ擊つて之を走らす。芳威、望見して先づ走る。明軍遂に大に潰ゆ。義弘・忠恆、奔るを追ひ北ぐるを逐ひ、斬首三萬餘級。明兵爭ひ走り相擠し伏尸二百餘里。我が軍糧亡きを以て復窮追せず。追うて望津に至つて乃ち還る。而して秀吉の訃適々至る。諸將潛に相告言し、稍稍歸裝を治む。而して明の都御史の呉に在る者、諜して秀吉の沒せしを知り明主に報告す。明主大に喜び擧朝相賀す。是に於て、邢玠等を趣し、我が軍を躡せしむ。郭國安も亦走つて之を明の群帥に告ぐ。群帥新寨の敗に創りて、敢て進まず。

通釋　十月一日一元は兵を皆合せて、國器や葉邦榮・彭信古を先鋒部隊とし、藍芳威を後備隊として新寨に攻め寄せ、午前の六時から十時までの間、木砲を以て大門や垣根を打ち摧き、堀に間近く攻め寄つて逆茂木を拔き取つた。城の兵は死を決して戰つた。折しも明軍の大砲が裂け破れて、煙や焰が四方に飛び出した。明軍の陣形が

亂れた。義弘はすぐに忠恆に目くばせをして曰ふには「今こそ打つて出る時だ」と。忠恆は合點して身を躍らし、數千騎と共に門を押し開いて眞直に明の陣地へ突き進んだ。明の陣は忽ちに皆道を披いて靡き伏した。然るに國器と邦榮とは一萬の兵をつれて正合から城に押入らうとした。義弘は前々から五千の兵をまとめて置いて、之を迎へ撃つて退けた。芳威は遠くから此等の樣子を見て、先づ逃げ出した。明軍はとう／＼滅茶／＼に破られて終つた。義弘と忠恆は逃げて行く敵兵を追つかけて、首を斬ること三萬以上であつた。明兵は先を爭つて逃げ走り、お互ひに押し合つて、地に伏した死骸は二百里餘りも續いた。併し我が軍は糧食が乏しかつたので、此の上追ひ詰めることは止めた。望津まで追つかけて、歸つたのである。其時丁度秀吉の死んだ知らせが着いた。諸將は内々に相知らせ、そろ／＼歸り支度に取掛つた。そして又明の都御史で呉に居た者が、間者を放つて秀吉の死んだのを嗅ぎ付け、明主に知らせた。明主は非常に喜び、朝廷の人々は殘らずお互ひに祝ひ合つた。そこで邢玠等を督促して、我が軍を追撃させた。捕虜の郭國安も亦走つて秀吉の死去の事を明の大將連に知らせた。大將達は新寨の敗北に懲りて、進出しようとしなかつた。

語釋 木砲（木で作つた大砲。）

當是時、我邦訛言。明大擧扼我兵歸路。徳川・前田二老、皆欲親往。衆議止之。使藤堂高虎代之。來至行臺、得新寨捷書、乃止。而釜山軍已從秀秋、還對馬。清正・義弘、次收兵還。行長亦欲還。而劉綎復來圍之。清正與義弘返撃、拔行長、皆上舟。陳璘・鄧子龍・

李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、以兵艦數千艘要之海中。清正已去。義弘鬪且卻、至加德島。明兵四集於行長。行長厲士卒止戰。會明人失火器、反中其船。我兵因奮擊鏖其兵、斬子龍。舜臣來救。亦射殺之、進圍璘。幾獲之、而蠶・文煥繼至、銃炮交發、盡焚我船。行長上一島、奪敵寨據之。明兵艦環守焉。行長乘夜獨遁、歸於義弘。義弘返、載其餘衆、與蠶・明宰戰、擒明宰而還、皆至加德。劉綎以生兵來攻。義弘・行長擊卻之。明軍不敢復追躡我軍。盡達對馬。

【釋】是の時に當り、我が邦訛言す、明大擧して我が兵の歸路を扼すと。德川・前田の二老、皆親ら往かんと欲す。衆議之を止む。藤堂高虎をして之に代らしむ。來つて行臺に至り、新寨の捷書を得て、乃ち止む。而して釜山の軍已に秀秋に從つて對馬に還る。清正・義弘次いで兵を收めて還る。行長も亦還らんと欲す。而して劉綎復來つて之を圍む。清正・義弘と返り擊ち、行長を拔き皆舟に上る。陳璘・鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、兵艦數千艘を以て之を海中に要す。清正已に去る。義弘鬪ひ且つ卻き、加德島に至る。明兵行長に四集す。行長士卒を厲して止め戰ふ。會〻明人火器を失し、反つて其船に中る。我が兵、因つて奮擊して其の兵を鏖にし、子龍を斬る。舜臣來り救ふ。亦射て之を殺し、進んで璘を圍む。幾ど之を獲んとして、蠶・文煥繼ぎ至り、銃炮交〻發し、盡く我が船を焚く。行長一島に上り、敵寨を奪つて之に據る。明の兵艦環守す。行長夜に乘じて獨り遁れ、

義弘に歸す。義弘返り、其餘衆を載せ、蠶・明宰と戰ひ、明宰を擒にして還り、皆加德に至る。劉綎、生兵を以て來り攻む　義弘・行長擊つて之を卻く。明軍敢て復追躡せず。我が軍盡く、對馬に達す。

通釋　此の當時、我が國內では間違つた噂を立てた。それは明が大兵を擧げて、我が日本兵の歸り路を押へてゐるといふのであつた。德川・前田の二大老は、皆自分で親ら助けに行かうと思つた。多勢の者は之を止めさせる意見であつた。藤堂高虎をして代つて行かせた。高虎は假本營に到着すると、新寨で島津が勝つたといふ報知を得て、國內の噂は誤傳だと知つたので、そのまま渡海を止めた。そして釜山の軍は既に秀秋に從つて對島へ歸り着いた。次いで清正と義弘が兵を收めて歸途についた。行長も亦歸らうと思つて居た。すると劉綎は再びやつて來て行長を取り圍んだ。清正は義弘と共に引き返して綎を擊ち、行長を救ひ出して、一同皆、船に乘つた。すると鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰の面々が兵艦數千艘を浮べて、之を海中に待ち受けて居た。清正はもう去つた後であつた。義弘は戰ひながら段々退いて加德島に着いた。そこで明兵は取り殘された行長に四方から擊つて掛つた。行長は士卒を元氣づけて、止まつて戰つた。偶々明兵が火器の扱ひ方を間違つて卻つて自分の船に丸が中つた。我が兵はそれに因つて奮ひ戰ひ、其の兵を皆殺しにして、子龍を斬つた。舜臣が救ひに驅け付けた。之も射殺し、進んで璘を取り圍んだ。もう少しのことで之を生捕らうとしたが、蠶や文煥が引續いて來て鐵砲や大砲を次々と打つて、すつかり我が船を燒いて終つた。行長はとある島に上り、敵の寨を占領して、此處に立て籠つた。明の兵艦は之を取り卷いて守つて居た。行長は夜を利用して單身逃げ出し、義弘の所へ來た。義弘は引き返して、行長の殘した兵士を船に載せ、蠶・明宰等と戰ひ明宰を生捕つて引き上げ、一同加德島に着いた。劉綎が新手の兵を率ゐて攻めて來た。義弘と行長は之を擊ち退けた。明軍はもう追ふこともしなかつた。我が軍は全部

對島に到着した、

語釋 一島（南海島）

十一月、諸將整軍至那古耶。兩奉行迎之、宣秀吉遺命。諸將皆泣。三成曰「公等詣伏見、當各之國。來秋會同、以茗讌相招」清正曰「諸君好爲茗讌。我守孤城七年矣。勞悴纔存。毋茗毋酒。當炊稗粥答之耳」三成嗛之。先是行長德清正救順天也、欲釋憾焉。清正曰「吾亦欲之矣。如子善治部何」自是相讎益深。於是諸將相率詣伏見、謁秀頼。諸老慰勞之、令罷之國。以嗣君猶幼、國家多難、不敢自逸、竢明年去。明年、大老、奉行論征韓功、賜義弘以公田在薩摩者四萬石。清正・行長以下、得賞有差。

訓釋 十一月、諸將、軍を整へて那古耶に至る。兩奉行之を迎へ、秀吉の遺命を宣ぶ。諸將皆泣く。三成曰く「公等伏見に詣り、當に各々國に之くべし。來秋會同し、茗讌を以て相招かん」と。清正曰く「諸君好んで茗讌を爲す。我れ孤城を守ること七年、勞悴纔に存す。茗毋く酒毋し。當に稗粥を炊いで之に答ふべきのみ」と。三成之を嗛む。是より先き、行長、清正の順天を救ふを德とするや、憾を釋かんと欲す。清正曰く「吾も亦之を欲す。子、治部に善きを如何」と。是より相讎とすること益々深し。是に於て諸將相率ゐて伏見に詣り、秀頼に謁す。諸老之を慰勞し、罷めて國に之かしむ。嗣君猶幼く、國家多難なるを以て敢て自ら逸せず、明年を竢つて去る。

明年大老・奉行、征韓の功を論じ、義弘に賜ふに公田の薩摩に在る者四萬石を以てす。清正・行長以下賞を得る差あり。

通釋 十一月、諸將は軍容を立派に整へて那古耶に着いた。淺野・石田の兩奉行は之を迎へて、秀吉の遺言を述べた。諸將は皆泣いて悲しんだ。暫くして三成が曰ふのに「貴公等は先づ伏見に行き、それから各自、御自分の國へ戻るやうにし給へ。來年の秋には皆集つて茶の湯の會を催して、相互に招待し合ふことにしよう」と。清正がいふのに「諸君は茶の湯の會が好きだ。自分は蔚山の孤城を守ること正に七年であつた。今は疲れやつれて、やつと生き永らへて居るのだ。お茶も無い、又酒も無い。まあ稗のお粥でも炊いて御返禮をしよう」と。三成はこの言葉を聞いて心の內に怨み惡んだ。是より前に、行長は、清正が順天を救つて呉れたのを有り難く思ひ、遺恨を捨てゝ仲良くしようと考へた。併し清正は曰ふのに「自分はさうありたいと思つては居る。併し君は三成と懇意だから駄目だ」と言つた。これからお互ひに讎とすること益々深まつて行つた。是に於いて、諸將は連れ立つて、伏見に來り、秀頼に面會した。大老・中老の諸公は色々勞を慰め、それが濟むと引き上げて、皆、自らの領分へ行かせることにした。併し諸將は世嗣の君がまだ幼く、又國內が物騷がしかつたので、強ひて自分の休息を求めようとはしないで、翌年を待つて立ち去ることにした。翌年になると、大老や奉行は征韓諸將の手柄を評議し、義弘には公田の內薩摩に在る分、四萬石を與へた。清正・行長以下賞を賜はること各々差等があつた。

語釋 公田(お上の田地。)

日本外史新釋卷十六終

日本外史新釋 卷十七

德川氏前記

豐臣氏下

慶長四年正月十日、前田利家奉秀頼、徙大坂、抱坐正廳。德川公以下、牧伯・將吏來謁之。德川公還、居伏見第、視事。五奉行更遣兵守城。皆如秀吉遺命。而德川氏威權獨熾。利家謂其侮己、乃忿恚、欲罷就國。細川忠興爲利家戚屬、引遺命諫止之。是月二十一日、大老・奉行、連署詰德川公曰「足下行事多可疑者。背太閤遺令、與伊達・福島・蜂須賀三家、私結婚姻。是欲何爲也。宜解政就國」。又詰三家。三家不服。三家與黑田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡諸將、皆嫉石田三成、爭附德川氏、仇視

他ノ侯伯ヲ。三中老議シテ曰ク「遺命ニ所謂居ツテ間ニ和解セヨトハ者、在リト於此ニ。」二月、乃チ請ウテ大老・奉行ニ尋ム盟ヲ于伏見ニ。

訓讀　慶長四年正月十日、前田利家、秀頼を奉じて大坂に徙り、抱いて正廳に坐す。德川公以下の牧伯・將吏來つて之に謁す。德川公還つて伏見の第に居つて事を視る。五奉行更〻兵を遣はして城を守る。皆秀吉の遺命の如くす。而して德川氏の威權獨り熾なり。利家其己を侮ると謂ひ、乃ち忿恚して、罷めて國に就かんと欲す。細川忠興、利家の戚屬たり。遺命を引いて之を諫止す。是の月二十一日、大老・奉行、連署して德川公を詰めて曰く「足下の行事疑ふべきもの多し。太閤の遺令に背き、伊達・福島・蜂須賀の三家と、私に婚姻を結ぶ。是れ何をか爲さんと欲する。宜しく政を解き國に就くべし」と。又三家を詰る。三家服せず。三家、黑田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と、皆石田三成を嫉み、爭つて德川氏に附き、他の侯伯を仇視す。三中老、議して曰く「遺命に所謂、間に居つて和解せよとは此に在り」と。二月、乃ち大老・奉行に請うて、盟を伏見に尋む。

通釋　慶長四年正月十日、前田利家は秀頼を奉じて大阪に移り、之を抱きかゝへて大書院に坐した。德川公以下の大名諸役人が入つて來てお目通りをした。德川公は伏見の邸に戻つて政事を見た。五奉行は順番に兵を出して伏見城を守つた。すべて秀公の遺命通りにした。所が德川氏の威權は特に盛となつた。利家は家康が自分を侮つてゐると想像して腹を立て、後見の役を止めて本國に歸らうとした。細川忠興は利家の緣家であつた。秀吉の遺命を引いて之を諫め止めた。この月の二十一日に、大老・奉行が連名で德川氏を責めて曰ふには「貴公の行動に

は疑はしい所が澤山ある。太閤の遺命に反いて勝手にこつそり伊達・福島・蜂須賀の三家と縁組をした。是は何ういふ積りであるか。早速政權を引き渡して歸さるゝが宜しい」と。又三家をも責め問うた。三家はそれに服しなかつた。この三家は、黑田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と共に、皆石田三成を憎んで、我れ勝ちに徳川氏に付き、他の大名達を仇敵視してゐた。三中老が相談して曰ふには「御遺言に、間に立つて仲裁せよとあるのは、こゝのことだ」と。そこで二月、大老と奉行に、伏見で再び盟を温めるやうに頼んだ。

語釋 正廳（表座敷、大座敷といふ意味から、正式に政治を取る場所を指す。當時の大書院。）

利家有疾。加藤清正與細川忠興・淺野左京大夫、勸利家、輿疾赴伏見。三月、徳川公亦往大坂。利家病甚。扶而起、泣囑之曰「吾將旦夕入地。願公盡心以輔嗣君。」徳川公曰「諾。」利家次子利政、欲刺徳川公。爲其兄利長所止。三成等會議于小西行長宅。曰「內府專橫、蔑視嗣君。諸老所共憤也。不可不速除之。」行長因建襲擊之策。前田玄以素通欵徳川氏。故發異議沮之。三成又欲以火器襲之伏見第。延細川忠興告謀。忠興復沮止之、走告徳川氏、教之徙居于向島。行長曰「諸公明文墨、而暗兵機。乃爲豎

子所誑」。大谷吉隆聞諸奉行之謀、謂増田長盛曰「吾視諸公所爲、不務利嗣君、而專害内府。内府苟貳於嗣君、宜俟其罪著而討之。天下誰有棄此歸彼者哉。今自我開釁、彼則有辭。是不獨自禍、乃禍嗣君也」。長盛以告三成。三成弗肯。

【訓讀】利家、疾有り。加藤清正、細川忠興・淺野左京大夫と、利家に勸め、疾を輿して伏見に赴かしむ。三月、徳川公も亦大坂に往く。利家病甚し。扶けられて起き、泣いて之に囑して曰く「吾れ將に旦夕地に入らんとす。願はくは公、心を盡し以て嗣君を輔けよ」と。徳川公曰く「諾」と。利家の次子利政、徳川公を刺さんと欲す。其の兄利長の止むる所と爲る。三成等、小西行長の宅に會議して曰く「内府專横、嗣君を蔑視す。諸老の共に憤る所なり。速に之を除かざるべからず」と。行長、因つて襲撃の策を建つ。前田玄以素より欵を徳川氏に通ず。故に異議を發して之を沮む。三成又火器を以て之を伏見の第に襲はんと欲す。細川忠興を延いて謀を告ぐ。忠興復之を沮止し、走つて徳川氏に告げ、之をして向島に徙り居らしむ。行長曰く「諸公、文墨に明にして兵機に暗し。乃ち豎子の誑す所と爲る」と。大谷吉隆、諸奉行の謀を聞き、増田長盛に謂つて曰く「吾れ諸公の爲す所を視るに、嗣君を利するを務めずして、專ら内府を害す。内府苟も嗣君に貳あらば、宜しく其の罪の著はるるを俟つて之を討つべし。天下誰か此を棄て、彼に歸する者あらんや。今、我より釁を開かば、彼れ則ち辭あらん。是れ獨り自ら禍するのみならず、乃ち嗣君に禍するなり」と。長盛以て三成に告ぐ。三成肯んぜず。

【通釋】利家は丁度其の時病氣であつた。加藤清正は、細川忠興・淺野左京大夫と共に利家に勸め、疾をおして

輿で伏見に行かせた。三月、德川公も大阪に出向いた。利家は病氣が重態に陥つた。人に扶けられて起き上り、涙を流して家康に頼んで曰ふには「私はもう今日明日に息を引き取ると思ふ。貴公どうぞ一心に世繼の君を助けて下されよ」と。家康は「承知致した」と曰つた。利家の次男の利政が德川公を刺さうとした。併し兄の利長に止められた。三成等は小西行長の家で會議をして曰ふには「内府はわが儘勝手で世繼の君を無いがしろにしてゐる。諸大老は皆腹を立てゝゐるのだ。早くやつゝけて終はねばならぬ」と。行長はそれで家康を急に攻め殺す策をたてた。所が前田玄以は以前から德川氏に内應してゐた。異議を出して邪魔立てをした。三成は又火繩銃で伏見の邸を不意討したいと思つた。細川忠興を近づけて謀を話した。忠興もやはりそれをさへぎりとめて、直ぐ樣それを德川氏に知らせ、向島に移るやうにさせた。行長が曰ふには「諸公は文事には達してゐられるが、どうも軍の機略に通じない。却つて奴家康に欺されてゐるのだ」と。大谷吉隆は諸奉行の謀を聞き、增田長盛に向つて曰ふには「私は諸公の爲され方を見ると、世繼の君のお爲めになるやうにしないで、内府をとつちめようと許りしてゐる。一體内府が若君に二心を抱いてゐるといふなら、その罪の證據が明かに見えて來た時、討つが宜しい。さうなれば、正しいこちらを棄てゝ、誰が德川方に屬くなど、天下のどこにあらう。今こちらから仲違ひをしかけたなら、向ふには（無實の罪といふ）言ひ草が出來る。それでは諸君御自分方の損になる許りでなく、却つて世繼の君に禍を及ぼすことになる」と。長盛はそれを三成に話した。三成はその言ふことをきかなかつた。

語釋　内府（内大臣。家康。）〇向島（大阪）

文祿之役、三成・長盛・吉隆在朝鮮。聞淺野・黑田來、就議軍事。兩人方圍碁不顧三成等。三成等怒而出。兩人收局、問侍者曰「三奉行何不來」。侍者告故。乃使人呼返之。三成等不肯。爲惡言而去、終惡兩人於秀吉。兩人之子深銜之。於是、與加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興、連署罪狀三成、請誅之。德川公不許。乃如大坂、請於利家。利家疾篤。三成方視之。七將不得逞。乃各、自治兵欲擊殺之。未發也。

訓讀 文祿の役に、三成・長盛・吉隆朝鮮に在り。淺野・黑田來ると聞き、就いて軍事を議せんとす。兩人方に碁を圍んで三成等を顧みず。三成等怒つて出づ。兩人局を收め、侍者に問うて曰く「三奉行何ぞ來らざる」と。侍者故を告ぐ。乃ち人をして之を呼び返さしむ。三成等肯んぜず。惡言を爲して去り、終に兩人を秀吉に惡す。兩人の子深く之を銜む。是に於て、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と、連署して三成を罪狀し、之を誅せんと請ふ。德川公許さず。乃ち大坂に如き利家に請ふ。利家、疾篤し。三成方に之を視る。七將逞するを得ず。乃ち各〻自ら兵を治めて之を擊殺せんと欲す。未だ發せず。

通釋 文祿の役で、三成・長盛・吉隆は朝鮮に居た。淺野と黑田が來たと聞いて、軍事の相談にその宿所に行つた。所が二人は丁度碁を打つてゐて、三成達を構はなかつた。三成達は腹を立てゝ歸つて終つた。所で二人が碁盤を仕舞ひ、侍者に「三奉行はどうして來ないのか」ときいた。侍者が事の次第を話した。人をやつて呼び返

させた。三成らは承知しなかつた。惡口を吐いて歸り、終には二人を秀吉に惡く言つた。そこでこの二人の倅（淺野幸長・黑田長政）までそれを怨んでゐた。この時になつて、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と連名し、三成の罪狀を竝べ立てゝ誅殺のことを大老に願ひ出た。德川公はそれを許さなかつた。そこで大阪に行つて利家に賴んだ。利家は病氣が重態であつた。丁度三成が來て看病してゐた。それで七將はたうとう逢ふことが出來なかつた。そこで銘々に軍隊を整へて三成を攻め殺さうとした。併しまだ兵を起すに至らなかつた。

閏月三日、利家疾革。奮呼曰「天下洶洶。吾不目嗣君成立而死。死不瞑矣」遂卒。衆推共長子利長代之、列四大老之下。七將曰「大納言既沒。三成必出」欲要擊之。或走告三成。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹五家、皆善於三成。佐竹義宣自伏見馳至、弔前田氏、因見三成于浮田氏曰「寧自歸於內府」。攜詣德川公。德川公納之。七將聞之憤惋、追至伏見。或說德川公勿除三成。德川公大悟、遂諭七將弭兵。七將不得已聽之。又諭三成解政權、就封澤山。七將欲要擊之。見德川氏兵護送、乃止。上杉景勝與三成通謀、約俟明歲東西擧兵、以討德川氏。四月、太閤廟成。詔賜號豐國明神。

【訓讀】閏月三日、利家、疾革なり。奮呼して曰く「天下洶洶たり。吾れ嗣君の成立を目せずして死す。死するも瞑せず」と。遂に卒す。衆、其の長子利長を推して之に代らしめ、四大老の下に列す。七將曰く「大納言既に沒す。三成必ず出でん」と。之を要擊せんと欲す。或ひと走つて三成に告ぐ。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家、皆三成に善し。佐竹義宣、伏見より馳せ至り、前田氏を弔し、因つて三成を浮田氏に見て曰く「寧ろ自ら內府に歸せよ」と。攜へて德川公に詣る。德川公之を納る。七將之を聞いて憤惋し、追うて伏見に至る。或ひと德川公に說いて三成を除く勿らしむ。德川公大に悟り、遂に七將に諭して兵を弭めしむ。七將已むを得ずして之を聽く。又三成に諭して政權を解き、封に澤山に就かしむ。七將之を要擊せんと欲す。德川氏の兵の護送するを見て乃ち止む。上杉景勝、三成と謀を通じ、明歲を竢ちて、東西兵を擧げ、以て德川氏を討たんと約す。四月太閤の廟成る。詔して、號を豐國明神と賜ふ。

【通釋】閏月三日、利家の病氣が危篤になつた。利家は一生懸命に聲を出して曰ふには「天下はどよめき騷いでゐる。己は世繼の君の生ひ立ちを見ないで死んで行く。死んでも死に切れない」と。たうとう亡くなつた。皆はその長男の利長を推薦して父に代らせ、四大老の末に列せしめた。七將が曰ふには「大納言が最早死んで終つた。三成も必定出て來るだらう」と。そして待ち伏せして討ち取らうとした。或る人が走つて三成に知らせた。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家は、前から皆三成と仲が好かつた。佐竹義宣は伏見から驅けつけて前田氏に悔を述べ、それから浮田氏の邸で三成に會つて曰ふには「いつそ內府の所に逃げ込め」と。そこで三成をつれて德川公の所へ行つた。德川公はそれを受け入れた。七將はそれをきいて口惜しがり、伏見まで追つかけて行つた。或る人が德川公に、三成を殺させぬやうにと言つた。德川公は（自分が漁父の利を占める爲めに三成の存在

が必要であることに）はたと氣が付き、たうとう七將に諭して軍を止めさせた。七將は仕方なく承知した。徳川公はまた三成を諭して奉行の政權に關係することをやめ、澤山の領地に歸らせた。七將は又それを待ち伏せして討たうとした。徳川氏の軍隊が護送して行くのを見て、止めた。上杉景勝は三成と共謀し、明年になつたら、東西から兵をあげて徳川氏を討たうと約束した。四月、太閤の廟が落成した。詔を下して豐國明神と名を賜つた。

自秀頼徙大坂、伏見城無主。五月、黒田長政・堀尾吉晴等、請徳川公入城如太閤故事。六月、毛利・浮田以下外征諸將、皆謁歸。七月、前田・上杉・佐竹三家亦之國。徳川氏久不覲秀頼。頗有物議。淺野・片桐等數促之。辭以疾。八月、乃往、遂留居西城。西城時爲秀頼嫡母淺野氏所居。於是淺野氏遜於京師。有流言、淺野彈正・大野治長・土方雄久、援前田氏以圖徳川氏。十月、放治長于下野、雄久于常陸、寘彈正于武藏府中、下令北伐前田氏。細川忠興爲謝之。徳川氏徴前田利長母爲質。十一月、徙之江戸。増田長盛・長束正家爭之曰「遺令勿不告而交質。盍與諸老議」弗肯。利長泣而奉令。是歳、徳川公加封細川忠興・堀尾吉晴各五萬石。

訓讀 秀頼大坂に徙りしより、伏見城に主なし。五月、黒田長政・堀尾吉晴等、徳川公の城に入つて太閤の故

事の如くせんことを請ふ。六月、毛利・浮田以下外征の諸將皆謁歸す。七月、前田・上杉・佐竹の三家も亦國に之く。德川氏久しく秀頼に覲せず。頗る物議あり。淺野・片桐等數〻之を促す。辭するに疾を以てす。八月、乃ち往き、遂に留つて西城に居る。西城は時に秀頼の嫡母淺野氏の居る所たり。是に於て淺野氏京師に遜る。流言あり、淺野彈正・大野治長・土方雄久、前田氏を援けて以て德川氏を圖ると。十月、治長を下野に雄久を常陸に放ち、彈正を武藏の府中に寘き、令を下して北前田氏を伐つ。細川忠興、爲めに之を謝す。德川氏、前田利長の母を徵して質と爲す。十一月、之を江戸に徙す。增田長盛・長束正家之を爭うて曰く「遺令に、告げずして質を交ふる勿れと。盍ぞ諸老と議せざる」と。肯んせず。利長泣いて令を奉ず。是の歳、德川公、封を細川忠興・堀尾吉晴に加ふること各〻五萬石なり。

〔通釋〕秀頼が大阪城に移つてから、伏見城には主人がなかつた。五月、黑田長政・堀尾吉晴等が、德川公が、太閤時代のしきたりの樣に伏見城に居ることを請うた。六月、毛利・浮田以下、朝鮮征伐に行つた諸將が、皆秀頼に拜謁しに歸國をした。七月、前田・上杉・佐竹の三家も本國に返つた。德川氏は長らく秀頼に參覲しなかつた。それが大層評判になつた。淺野・片桐等が度々催促をした。所が病氣だと言ひ立てゝ斷つた。八月になると出かけて來て、そのまゝ西の丸に留つてゐた　西の丸は當時、秀頼の嫡母淺野氏の居つた所である。德川公が留つてゐるので、淺野氏は京都に隱居をした。この時分、流言があつて、淺野彈正・大野治長・土方雄久の三人が前田氏に加擔して德川氏を滅ぼさうとしてゐるといふことであつた。十月、治長を下野に、雄久を常陸に追放し、彈正は武藏の府中に置き、前田氏を北伐する命令を下した。細川忠興が前田氏の爲めに詫びをした。德川氏は前田利長の母を呼びよせて人質とし、十一月にそれを江戸に移した。增田長盛と長束正家が抗議をして曰ふには

「太閤の御遺言に、無斷で人質をやり取りしてはならぬとある。何故諸大老と相談をされないのか」と。徳川公は聞き入れようとしなかつた。利長は泣いて命に從つた。是の歳、徳川公は細川忠興と堀尾吉晴に夫々五萬石を加增した。

語釋 嫡母（庶子より父の正妻を指していふ。）〇府中（この時淺野氏の領地。）

五年春、徳川公戒上杉景勝西上。答曰「我受太閤遺旨、鎭守東陲。何受內府令也」。乃數其背盟十罪。徳川公大怒、議東伐上杉氏。夏、以其義女妻黑田長政、留兵於伏見、而自將諸軍東下。三成欲起兵乘其後。會大谷吉隆自其邑敦賀會師。三成使人要之、告以其謀。吉隆極言其非計。三成不肯。吉隆乃訣去、低回久之曰「吾與治部共仕太閤、舊相好也。今知其事不克、棄之非義」。乃還。三成大喜、與長束正家皆赴大坂、見增田長盛定議。秋、遂移書遠近曰「內府有罪。嗣君命討之。苟念太閤恩誼者、宜來戮力」。毛利輝元以下侯伯、來會者四十餘人。時東西諸侯妻子、皆在大坂。三成收之城中、使輝元・長盛守大坂、浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等、將四萬人攻伏見城、小野木重勝等將二萬人攻田邊城、毛利秀元與長束正家・僧惠瓊、將三萬人攻阿濃

津、京極高次等將二萬人徇北陸。

訓讀 五年春、徳川公、上杉景勝に西上を戒む。答へて曰く「我れ太閤の遺旨を受け、東陲を鎮守す。何ぞ内府の令を受けんや」と。乃ち其の盟に背く十罪を數む。徳川公大に怒り、東上杉氏を伐たんと議す。夏、其の義女を以て黒田長政に妻はせ、兵を伏見に留め、而して自ら諸軍に將として東下す。三成兵を起して其の後に乘ぜんと欲す。會ゝ大谷吉隆、其の邑敦賀より師に會す。三成人をして之を要せしめ、告ぐるに其の謀を以てす。吉隆其の非計を極言す。三成肯んせず。吉隆乃ち訣し去り、低回すること久しくして曰く「吾れ治部と共に太閤に仕ふ。舊相好し。今、其の事克たざるを知つて、之を棄つるは義に非ず」と。乃ち還る。三成大に喜び、長束正家と皆大坂に赴き、增田長盛を見て議を定む。秋、遂に書を遠近に移して曰く「内府罪有り。嗣君命じて之を討たしむ」。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、宜しく來つて力を戮すべし」と。毛利輝元以下の侯伯、來り會する者四十餘人。時に東西諸侯の妻子、皆大坂に在り。三成、之を城中に收め、輝元・長盛をして大坂を守らしむ。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等、四萬人に將として伏見城を攻め、小野木重勝等二萬人に將として田邊城を攻め、毛利秀元・長束正家・僧惠瓊と、三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等二萬人に將として北陸を徇へしむ。

通釋 五年春、徳川公は上杉景勝に西上するやうに注意した。すると景勝が答へて曰ふには「余は太閤の遺旨を受けて東邊を鎮護してゐる。内府の命令などを聞いてたまるか」と。そこで家康が盟に背いた十ケ條の罪を責めた。徳川公は非常に腹を立て上杉氏を東伐しようと議した。夏、その養女を黒田長政に縁付け、伏見に軍隊を

殘しておいて、自身諸軍を率ゐて東下した。三成は兵を起して其の留守につけ込まうとした。丁度その時大谷吉隆が領地の敦賀から德川氏の軍に加勢する爲め出て來た。三成は人をやつて彼を待ちうけ、自分の謀を話させた。吉隆は言を極めてその計の拙いことを說いた。併し三成は承知しなかつた。そこで吉隆は別れて出たが、やや暫し行きつ戻りつした後に、曰ふのに「俺は治部と一緒に太閤へ仕へた。元からの仲善しだ。今事の成功せぬのが分つてゐるからといつて彼を棄てるのは道でない」と。そこで立ち戻つて來た。三成は非常に喜び、長束正家と皆で大阪に行き、增田長盛に會つて相談を定めた。秋、いよ／＼遠近の諸侯に手紙を廻して曰ふには「內府は罪を犯してゐる故、お世繼の君が彼を討つやうに命ぜられた。苟且にも太閤の御恩誼を忘れぬものは、早速出て來て協力さるゝが宜しい」と。毛利輝元以下の大名の集り來たもの四十餘人。當時東西の諸大名の妻子は皆大阪に居つた。三成はそれらを城中に捕へ、輝元と長盛をして大阪を守らせた。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等は四萬人を率ゐて伏見城を攻め、小野木重勝等は二萬人の將となつて田邊城を攻め、毛利秀元は長束正家・僧惠瓊と共に三萬人を率ゐて阿濃津を攻め、京極高次等は二萬人を率ゐて北陸を威服させることになつた。

語釋　田邊（丹後）

吉隆在敦賀。招北莊・大正寺・小松三城下之。前田利長與弟利政、爲德川氏攻拔大正寺、遂欲攻北莊。北莊乞援於敦賀。吉隆乃自將赴援。或曰「堀尾氏兵守府中而在我後。不先取之、則進退皆難」。吉隆曰「北莊陷、則小松孤立矣。至若府中、則不必取也。

亦不可取也。卽可取也、不可不分兵守之。分則兵寡。以寡對衆、是爲難耳。且彼必不敢要我矣。是我使敵守城也。我旣卻北兵、以存諸城、則彼不攻而下矣」卽夜五更、馳至北莊。利長姊夫中川宗伴在京師。將赴北陸。吉隆要而執之、令爲書給利長曰「內府西上。將士多叛之、大坂兵逆擊之美濃。走之。遂發舟師、將取加賀。公宜早爲之備。」利長得書疑懼、引兵卻。府中果遂降於吉隆。會、高次等至、合兵復大正寺、遂定越前、置守而南。

訓讀　吉隆敦賀に在り。北莊・大正寺・小松の三城を招いて之を下す。前田利長、弟利政と、德川氏の爲に攻めて大正寺を拔き、遂に北莊を攻めんと欲す。北莊、援を敦賀に乞ふ。吉隆乃ち自ら將として赴き援く。或ひと曰く「堀尾氏の兵、府中を守つて我が後に在り。先づ之を取らずんば、則ち進退皆難からん」と。吉隆曰く「北莊陷らば、則ち小松孤立す。府中の若きに至つては、則ち必ずしも取らざるなり。亦取るべからざるなり。卽し取るべくば、兵を分つて之を守らざるべからず。分てば則ち兵寡し。寡を以て衆に對す、是れ難しと爲すのみ。且つ彼れ必ず敢て我を要せず。是れ我れ敵をして城を守らしむるなり。我れ旣に北兵を卻けて以て諸城を存すれば、則ち彼れ攻めずして下らん」と。卽夜五更、馳せて北莊に至る。利長の姊夫中川宗伴京師に在り。將に北陸に赴かんとす。吉隆要して之を執へ、書を爲り利長を紿かしめて曰く「內府西上す。將士多く之に叛き、大坂の

兵、之を美濃に逆へ撃つて之を走らす。遂に舟師を發し、將に加賀を取らんとす。公、宜しく早く之が備を爲すべし」と。利長、書を得て疑懼し、兵を引いて卻く。府中果して遂に吉隆に降る。會〻高次等至り、兵を合せて大正寺に復り、遂に越前を定め、守を置いて南す。

通釋 吉隆は敦賀に居つて、北莊・大正寺・小松の三城を誘つて降服せしめた。前田利長は、弟利政と共に、德川氏の爲めに大正寺を攻め落し、その足で北莊を攻めようと思つた。北莊は敦賀に援助を求めた。そこで吉隆は自身軍隊を率ゐて援けに行つた。或る人が彼に曰ふには「堀尾氏の兵が府中を守つて我が背後にゐます。先きにこつちを取らなければ進むにも退くにも困ることになります」と。吉隆が曰ふには「北莊が落城したら小松が孤立して終ふから放つておけぬ。府中など取る必要はない。亦取ることも出來まい。もし取り得るとしても兵を分けてそれを守らねばならぬ。兵を分ければ味方が少くなる。小勢で多勢に對することゝなる。だから戰がしにくゝなる。それに府中の兵はきつと我が軍を待ち伏せして撃つことはせぬだらう。かうなると、我が軍は、敵に城を預けて守らせておくやうなものだ。我が軍が北陸兵を追ひはらつて諸城を無事に保つてゐるなら、府中などは攻めずとも降參して來る」と。その晩午前四時頃に馬をとばせて北莊に行つた。利長の姉の夫中川宗作は京都に居つた。丁度北陸に行かうとしてゐた。吉隆は待ち伏せしてつかまへ、次の書面を書かせて利長を欺かせて曰ふには「内府が西上して來た。その將士は多數彼にそむき大阪の兵が美濃まで出かけて關東軍を討ち退けた。遂に大阪方は舟軍を出して加賀を占領しようとしてゐる。貴方は早くその準備を爲されるがよい」と。利長はその手紙を讀み疑ひおそれて退却した。すると府中は案の定吉隆に降服した。そこへ丁度高次等もやつて來たので、兵を合せて大正寺に歸り、つひに越前を平定し、守兵を置いて南に向つた。

語釋 大正寺（加賀） ○小松（若狹） ○府中（越前）

吉隆致三成招織田秀信。秀信以岐阜降。於是、三成導諸將至大垣。秀家等拔伏見來會焉。德川公至下野、聞變不爲驚。然以諸將質在大坂頗疑之、使人問其去就。諸將皆奮欲擊三成。乃誓曰「公苟不渝太閤約、善視嗣君、則僕等力戰必梟治部」。諸將乃先發、首攻岐阜下之。三成與島津義弘援之。不及。東軍陣赤坂。秀家欲夜襲之。三成弗聽。秀元拔阿濃津、來陣南宮山。秀秋來陣松尾山。

訓讀 吉隆・三成をして織田秀信を招かしむ。秀信岐阜を以て降る。是に於て、三成諸將を導いて大垣に至る。秀家等伏見を拔いて來り會す。德川公下野に至り、變を聞いて爲めに驚かず。然れども諸將の質の大坂に在るを以て頗る之を疑ひ、人をして其の去就を問はしむ。諸將皆奮つて三成を擊たんと欲す。乃ち誓つて曰く「公、苟も太閤の約を渝へず、善く嗣君を視ば、則ち僕等力戰して必ず治部を梟せん」と。諸將乃ち先づ發し、首に岐阜を攻めて之を下す。三成、島津義弘と之を援く。及ばず。東軍、赤坂に陣す。秀家夜之を襲はんと欲す。三成聽かず。秀元、阿濃津を拔き、來つて南宮山に陣す。秀秋來つて松尾山に陣す。

通釋 吉隆は三成に織田秀信を招かせた。秀信は岐阜を以て降參した。そこで三成は諸將の先導をして大垣ま

で行つた。秀家等は伏見を陥れて、そこへ集つた。徳川公は下野まで行つた時、變事を聞いたが別に驚きもしなかつた。併し、諸將の人質が大阪に居るので、餘程彼等の心事を疑ひ、他人をしてその去就を聞かせた。所が諸將は皆元氣よく、三成を撃たうと賛成した。そこで一同約束して曰ふは「もし公にして太閤の命を變へずに、善く世嗣の君の世話をされるといふならば、我々は奮鬪してきつと治部を梟首にして見せます」と。そこで諸將は先發し、最初岐阜を攻めて陥れた。三成は島津義弘と共に援けに行つた。併し間に合はなかつた。東軍は赤坂に陣取つてゐた。秀家がそれを夜襲しようとした。併し三成がきかなかつた。秀元は阿濃津を陥れ、南宮山まで來て陣取つた。秀秋は松尾山に來て陣取つた。

語釈 赤坂・南宮山・松尾山（美濃）

初秀頼與生母淀君居大坂、而嫡母淺野氏稱北廳居京師、庶母京極氏稱松城君居大津。北廳之兄曰木下家定、家定子爲秀秋。及兵起、北廳使人戒秀秋曰、「内府不利秀頼、則力拒之。非然則勿負之。」秀秋遂送款於江戸。松城君之弟爲京極高次。高次受封大津、與徳川氏嗣子並娶淀君之妹。亦送款江戸。及岐阜陥、吉隆召北陸諸將會大垣。高次後發、馳歸大津、擧兵應徳川氏。立花宗茂・筑紫廣門赴大垣、比至石部聞之、返陣勢多。會毛利秀包等來自大坂。則合兵攻高次。淀君遣二女、使諭松城

君及ビ高次夫妻ニ一。不レ肯ンゼ。宗茂等攻メテ奪フ二其ノ郛ヲ一而シテ城未ダレ下ラ也。

【訓読】初め秀頼、生母淀君と大坂に居り、而して嫡母淺野氏、北廳と稱して京師に居り、庶母京極氏、松城君と稱して大津に居る。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子を秀秋と爲す。兵起るに及び、北廳、人をして秀秋を戒めしめて曰く「内府、秀頼に不利ならば、則ち力めて之を拒げ。然るに非ずば則ち之に負く勿れ」と。秀秋、遂に欵を江戸に送る。松城君の弟を京極高次と爲す。高次、封を大津に受け、德川氏の嗣子と竝に淀君の妹を娶る。亦欵を江戸に送る　岐阜陷るに及び、吉隆、北陸の諸將を召して大垣に會せしむ。高次後れて發し、馳せて大津に歸り、兵を擧げて德川氏に應ず。立花宗茂・筑紫廣門大垣に赴き、石部に至る比ろ、之を聞き、返つて勢多に陣す。會ゝ毛利秀包等大坂より來る。則ち兵を合せて高次を攻む。淀君二女を遣はして、松城君及び高次夫妻に諭さしむ。肯んぜず。宗茂等、攻めて其郛を奪ふ。而して城未だ下らざるなり。

【通釋】初め秀頼は生母の淀君と大阪に居り嫡母の淺野氏は北廳と稱して京都に居り、庶母の京極氏は松城君といつて大津にゐた。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子が秀秋である。此の度の兵亂が起つたに就て、北廳は人をやつて兄の子の秀秋に注意を與へて曰ふには「内府が秀頼に對して不利を致すやうならば、力を盡して防ぐがよい。さうでない場合には内府に背くやうなことをなさるな」と。秀秋はその言によつて、遂に江戸に内應した。松城君の弟で京極高次である。高次は大津に領地を持ち、德川氏の嗣子（秀忠）と同じく、共に淀君の妹を娶つてゐた。これも亦江戸に内通してゐた。岐阜が陷ると、大谷吉隆は北陸の諸將を大垣に集合させた。高次は後れて出發したが、大津に馳せ歸つて、全軍をつれて德川氏に應じた。立花宗茂と筑紫廣門は大

垣に行かうとして、石部につく頃、高次が徳川に味方したことを聞いて勢多に戻つて陣取つた。丁度其の時毛利秀包等が大阪から來た。それで兵を合せて高次を攻めた。淀君は二人の婦人をやつて、松城君と、高次夫婦を諭させた。併し承知しなかつた。宗茂等は攻めて、城の外郭を占領した。けれども城はまだ落ちなかつた。

語釋 庶母(父の妾をいふ。)○石部(近江)○二女(孝藏主、女監阿茶。)

徳川公分兵爲二、自將一軍由海道、使其嗣子秀忠將一軍由山道、命彈正少弼助之。關西從風而靡、爭先送款。山道之軍、進至小室、招眞田昌幸。初昌幸赴會津、至犬伏而大坂檄至。長子信幸曰「吾受關東殊遇。請東矣。西軍卽敗、吾爲父弟乞命。」幸村曰「太閤舊誼不可背也。寧西而死、不東而生。」昌幸曰「欲東者東。欲西者西。而吾與西者也。」乃遣信幸之江戸、而自與幸村、以兵三千歸上田。東軍三萬陣于小室。信幸從在其軍。以書招其父弟。不肯。居四日、東軍來攻上田。城帶川。昌幸壅其上流、伏兵險阻、出戰佯走。東軍爭追、陷伏而亂。乃決其壅。水大至。東軍不能濟。幸村以突騎蹙之、遂大敗其軍、使不得進者三日。其海道軍竢之、亦遲回數日。以其久不至、乃獨進陣于赤阪。秀家與三成計、亦設伏而挑戰、敗其前軍而退。

訓讀　徳川公兵を分ちて二と爲し、自ら一軍に將として海道由りし、其嗣子秀忠をして一軍に將として山道由りせしめ、彈正少弼に命じて之を助けしむ。關西、風に從つて靡き、先を爭つて欵を送る。山道の軍進んで小室に至り、眞田昌幸を招く。初め昌幸、會津に赴き、犬伏に至つて、大坂の檄至る。長子信幸曰く「吾れ關東の殊遇を受く。請ふ東せん。西軍卽し敗るれば、吾れ父弟の爲に命を乞はん」と。幸村曰く、「太閤の舊誼、背くべからざるなり。寧ろ西して死すとも、東して生きじ」と。昌幸曰く「東せんと欲するものは東せよ。西せんと欲するものは西せよ。而して吾は西に與する者なり」と。乃ち信幸を遣はして江戸に之かしめ、而して自ら幸村と兵三千を以て上田に歸る。東軍三萬小室に陣す。信幸從つて其軍に在り。書を以て其父弟を招く。肯ぜず。居ること四日、東軍來つて上田を攻む。城、川を帶ぶ。昌幸其上流を壅ぎ、兵を險阻に伏せ、出で戰つて佯り走る。東軍爭ひ追ひ、伏に陷つて亂る。乃ち其壅を決す。水大に至り東軍繼ぐ能はず。幸村、突騎を以て之に蹙り、遂に大に其軍を敗り、進むを得ざらしむるもの三日。其海道の軍之を竢ち亦遲回すること數日。其久しく至らざるを以て、乃ち獨り進んで赤阪に陣す。秀家、三成と計り、亦伏を設けて戰を挑み、其前軍を敗つて退く。

通釋　徳川公は兵を分けて二隊とし、自身その一隊を率ゐて東海道から進み、嗣子の秀忠に他の一隊を率ゐさせて中山道を進ませ、彈正小弼に命じてそれを助けさせた。關以西の諸大名は勢に壓されて一齊に關東軍に靡き、我れ勝ちに好を通じた。山道の軍は小室まで進み至り、眞田昌幸を招いた。これより前、昌幸は會津に向ふ途中、犬伏まで來ると大阪からの三成の檄文を手にした。長男の信幸が曰ふには「私は關東の特別な待遇を受けてゐます　私は關東に味方しませう。もし西軍が敗れたら、私はお父さんと弟の爲め命乞ひを致しませう」と。

幸村が曰ふには「太閤の古い恩義に背いてはならぬ。たとひ西に味方して死なうとも、東に附いて生き長らへ度くはない」と　昌幸が曰ふには「東に附き度い者は東に附け。西に附き度いものは西に附け。だが私は西に味方する者ぢや」と。そこで信幸を江戸に行かせ、そして自分は幸村と一緒に、三千の兵をつれて上田に歸つた。東軍三萬人が小室に陣取つてゐた。信幸は從つてその軍中にゐた。手紙をやつて父と弟とを招いた。二人は勿論承知しなかつた。上田に來て四日經つた。東軍（中山道軍）が上田を攻めて來た。城はまはりに川が流れてゐた、昌幸はその上流をふさぎ、險阻な所に伏兵をおいて、城から出て戰ひ、わざと敗けて逃げた。東軍は矢鱈に追ひかけ、伏兵に陷つて亂れた。そこでその堰を切り放つた。水はどつと流れて、東軍は軍隊を續けることが出來なくなつた。幸村は襲擊騎をつれて追ひつめ、遂に大に其の軍を破りて、三日の間といふもの、進むことの出來ぬやうにした。海道の軍は、それを待つてゐて又五六日も愚圖ついて遲くなつた。何時まで經つても來ないので、單獨に進んで赤阪に陣取つた。秀家は三成と相談し、又伏兵をおいて戰をしかけ、その前衞を打ち破つて退却した。

語釋　小室（信濃）　○犬伏（上野）　○海道軍（即ち家康の軍。）

於是、諸將大議決戰。秀家・吉隆欲固守大垣以竢田邊・大津兵。島津義弘欲夜襲赤阪。三成恃其衆皆不聽。欲出戰于關原、夜赴南宮、請秀元夾擊東軍。秀元素通款東軍。佯諾之。三成遂赴松尾、奬厲秀秋。秀秋已與東軍約爲內應。亦佯諾之。吉隆疑秀

秋有ㇾ異、以二其兵一陣二松尾山下一。吉隆有二惡疾一。以ㇾ絹蔽ㇾ面、輕服坐ㇾ轎、戒二其左右一曰「及ㇾ敗速斬二我頭一。」旦日、兩軍大戰二關原一。自ㇾ辰至ㇾ未。東軍數、卻。而秀元・秀秋皆觀望不ㇾ戰。東兵窪島某馳白二徳川公一曰「秀秋似ㇾ背ㇾ約。請更爲ㇾ計。」徳川公驚曰「我悔ㇾ爲二小兒所一ㇾ賣。」使下窪島向二松尾山一發ㇾ礮促上ㇾ之。

訓讀 是に於て、諸將大に戰を決せんと議す。秀家・吉隆、固く大垣を守つて以て田邊・大津の兵を竢たんと欲す。島津義弘・夜赤阪を襲はんと欲す。三成其の衆を恃んで皆聽かず。關原に出で戰はんと欲し、夜、南宮に赴き、秀元に東軍を夾擊せんと請ふ。秀元素より欵を東軍に通ず。佯つて之を諾す。三成遂に松尾に赴き、秀秋を奬厲す。秀秋已に東軍と內應を爲さんと約す、亦佯つて之を諾す。吉隆、秀秋の異あるを疑ひ・其兵を以て松尾山の下に陣す。吉隆惡疾有り、絹を以て面を蔽ひ、輕服にて轎に坐し、其左右を戒めて曰く「敗に及ばば、速に我が頭を斬れ」と　旦日、兩軍大に關原に戰ふ。辰より未に至る、東軍數ゝ卻く。而るに秀元・秀秋、皆觀望して戰はず、東兵窪島某馳せて徳川公に白して曰く「秀秋約に背くに似たり、請ふ更に計を爲せ」と。徳川公驚いて曰く「我れ小兒の賣る所と爲るを悔ゆ」と。窪島をして、松尾山に向ひ礮を發して之を促さしむ。

通釋 そこで諸將は大に決戰の計を相談した。秀家と吉隆は大垣を固守して、田邊・大津の兵の來るのを待たうと主張した。島津義弘は赤阪を夜襲しようと主張した。併し三成は多勢を恃んでどの說にも承知しなかつた。關原に出で戰はうといふ希望を懷き、夜、南宮に行き、秀元に東軍を挾み擊ちにする樣に賴んだ。所が秀元

は前から東軍に內通してゐた。偽つて承諾した。三成はそれから松尾にも行つて秀秋を激勵した。秀秋もすでに東軍に內應の約束がしてあつた。これも亦偽つて承諾した。吉隆は秀秋が異心を抱いてゐるらしいことを疑つて、自分の軍隊を松尾山の下に陣した。吉隆は癩病だつた。うす絹を顏にかけ、甲冑をつけずに身輕にして駕籠に坐り、左右の侍臣に戒めて曰ふには「戰が破れたら直ぐ俺の首を斬れ」と。その翌朝、兩軍は關原で激戰した。午前八時から午後二時まで續いた。そして東軍は度々退却した。而るに秀元・秀秋は皆形勢を眺めて戰はなかつた。東兵の窪島某は馬をとばせて德川公に知らせて曰ふには「秀秋は約束に背く樣に見えます。どうか計畫を變更さるゝやう」と。德川公は驚いて曰ふには「己は小僧に欺されて殘念だ」と。窪島をして秀秋の陣のある松尾山に向つて大砲を放つて催促させた。

黑田長政亦使人責秀秋。秀秋乃以兵八千・銃手六百、下山擊吉隆。吉隆怒呼曰「豎子背恩忘義。不可舍也。」以六百人直衝其麾下。戶田重政・平塚爲廣、助吉隆大破秀秋、斬東軍監使奧平貞治。而脇坂・朽木・小川・赤座等皆應秀秋、與東將藤堂高虎・織田長孝等三面逼之。重政・爲廣皆戰死。吉隆隊將湯淺五介、退告之吉隆。吉隆曰「吾可以死矣。勿使敵傳吾元。」遂自殺。五介刎之、使侍臣某藏之泥中、而騈冒高虎陣死。吉隆二子、吉胤・吉之、姪賴繼皆力戰、返見空轎、相泣欲死。從者諫之。乃走欲守敦賀。

無肯納者。遂走大阪。頼繼尋病死。

訓讀 黑田長政も亦人をして秀秋を責めしむ。秀秋乃ち兵八千・銃手六百を以て、山を下つて吉隆を撃つ。吉隆怒り呼んで曰く「豎子、恩に背き義を忘る。舍す可からざるなり」と。六百人を以て直に其麾下を衝く。戸田重政・平塚爲廣、吉隆を助けて大に秀秋を破り、東軍の監使奥平貞治を斬る。而して脇坂・朽木・小川・赤座等、皆秀秋に應じ、東將藤堂高虎・織田長孝等と、三面より之に逼る。重政・爲廣皆戰死す。吉隆の隊將湯淺五介、退いて之を吉隆に告ぐ。吉隆曰く「吾れ以て死すべし。敵をして吾が元を傳へしむる勿れ」と。遂に自殺す。五介之を剄し、侍臣某をして、之を泥中に藏めしめ、而して騈んで高虎の陣を冒して死す。吉隆の二子吉胤・吉之、姪頼繼皆力戰し、返つて空轎を見、相泣いて死せんと欲す。從者之を諫む。乃ち走つて敦賀を守らんと欲す。肯て納るゝ者なし。遂に大坂に走る。頼繼尋いで病死す。

通釋 黑田長政も人をやつて秀秋を責めさせた。そこで秀秋もとう／＼兵八千と鐵砲隊六百人をつれて山を下り、吉隆を撃つた。吉隆は腹を立てゝ怒鳴つて曰ふには「小僧め恩に背き義を忘れてゐる。許し難い奴だ」と。六百人の手勢で眞つ直に秀秋の旗下を突き攻めた。戸田重政と平塚爲廣は吉隆を助けて大に秀秋を破り、東軍の軍目附奥平貞治を斬つた。しかし脇坂・朽木・小川・赤座等が皆秀秋に味方し、東將の藤堂高虎・織田長孝らと三方から吉隆に迫つた。重政・爲廣は共に戰死した。吉隆の隊將の湯淺五介が退いてそれを吉隆に知らせた。吉隆が曰ふには「おれの死ぬべき時だ。敵におれの首を持つて行かせてはならぬぞ」と。遂に自殺をした。五介は吉隆の首を落し、侍臣の某に泥の中に隱させ、二人一緒に高虎の陣に飛び込んで討ち死した。吉隆の二子、吉胤と

吉之、それに姪の頼繼は皆力戰して返つて見ると、空駕籠になつてゐるので、互に涙を流し死なうとした。從者が之を諫めて止めた　そこで走つて敦賀を守らうとし思つた。誰れこそ進んで迎へ入れるものもゐなかつた。遂に大阪に走つた。頼繼は間もなく病死をした。

東軍以秀秋內應乘勢齊進。西軍遂大敗。秀家怒、欲與秀秋決鬪。明石守重諫曰「君爲元帥。何自爲匹夫行也」秀家曰「吾不翅惡秀秋也。輝元不親出。秀元亦持兩端。事可知矣。吾有一死報太閤而已」守重曰「縱諸將皆叛、君宜獨據其國以輔嗣君。徒死何爲」秀家乃走。其將長河內某死之。秀秋薄義弘。義弘擊走之曰「吾雖敗不肯卻走」以殘兵五百薄東軍而南。東軍爲動。東將井伊直政等追躡。又擊走之。敵衆尾不止。阿多盛淳代義弘死。義弘得間踰鰐尾嶺而去。

【訓讀】東軍、秀秋の內應を以て、勢に乘じて齊しく進む　西軍遂に大に敗る。秀家怒り、秀秋と決鬪せんと欲す。明石守重諫めて曰く「君は元帥たり。何ぞ自ら匹夫の行を爲すや」と。秀家曰く「吾れ翅に秀秋を惡むのみならざるなり。輝元親ら出でず。秀元も亦兩端を持す、事知るべし。吾れ一死太閤に報ゆる有るのみ」と。守重曰く「縱ひ諸將皆叛くも、君は宜しく獨り其國に據り以て嗣君を輔くべし。徒死何をか爲さん」と。秀家乃ち

走る。其將長河內某之に死す。秀秋、義弘に薄る。義弘、撃つて之を走らせて曰く「吾れ敗ると雖も肯て卻き走らず」と。殘兵五百を以て東軍に薄つて南す。東軍爲めに動く。東將、井伊直政等追躡す。又撃つて之を走らす。敵衆尾して止まず。阿多盛淳、義弘に代つて死す。義弘、間を得て鱒尾嶺を踰えて去る。

通釋 東軍は秀秋の內應で、調子に乘つて一齊に進んだ。西軍は遂に大敗した。秀家は怒つて秀秋と勝負を決しようとした。明石守重が諫めて曰ふには「貴方は總司令官である。何でその樣な詰らぬ人間の眞似をされるか」と。秀秋が曰ふには「余は不屆者と思ふのは秀秋許りではないのだ。輝元は自分で出て來ない。秀元もどつち付かずの態度でゐる。萬事は知れてゐる。余は一死もつて太閤に報ゆるのみである」と。守重が曰ふには「たとひ諸將が殘らず叛いても、貴方だけは是非領地に立てこもつて世繼の君を輔佐されねばなりません。犬死したとて致し方がありません」と。そこで秀家も逃げることにした。その將の長河內某がその際に討死した。秀秋は義弘に攻めよせた。義弘は彼を追ひ退けて曰ふには「己はたとひ敗け樣とも、退却なんぞはしないぞ」と。殘兵五百をつれて、東軍に肉薄して南に進んだ。東軍はその爲めに動搖した。東將井伊直政等が後をつけた。又撃ち退けた。敵の軍勢は後をつけて止めない。阿多盛淳が義弘の身代りになつて死んだ。義弘はその際に鱒尾嶺を起えて逃げ去つた。

語釋 鱒尾峠（近江）

三成走匿伊吹山。散從者曰「吾欲自大坂航、赴薩摩以計再擧也。汝等宜伏匿以待時。」三成遂採拾充饑、行四日、患泄。至石橋村、就所知農夫某。某舍匿之。或者戒某曰

「聞子匿治部。今田中吉政在井口索之甚急。事露、子必逮禍矣。」農夫曰「無之。」三成隔障聞之、謂農夫曰「吾終不可脫。汝盍出告。」農夫使之遁走。三成曰「吾病矣。不能寸步。恐累汝。汝第速自首。」農夫乃之井口告吉政。吉政遣卒捕之。

訓讀 三成走つて伊吹山に匿れ、從者を散じて曰く「吾れ大坂より航し、薩摩に赴いて以て再擧を計らんと欲するなり。汝等、宜しく伏匿して以て時を待つべし」と。三成、遂に採拾して餧に充て、行くこと四日、泄を患ふ。石橋村に至り、知る所の農夫某に就く。某之を舍匿す。或者某を戒めて曰く「聞く子、治部を匿すと。今、田中吉政、井口に在つて之を索むること甚だ急なり。事露はるれば、子必ず禍に逮ばん」と。農夫曰く「之なし」と。三成障を隔てゝ之を聞き、農夫に謂つて曰く「吾れ終に脫るべからず。汝盍ぞ出でゝ告げざる」と。農夫之をして遁れ走らしむ。三成曰く「吾れ病む。寸步する能はず。恐らくは汝を累さん。汝、第だ速に自首せよ」と。農夫乃ち井口に之いて吉政に告ぐ。吉政、卒を遣はして之を捕ふ。

通釋 三成は逃走して伊吹山に隱れ、從者を解散して曰ふには「自分は大阪から舟に乘り、薩摩に行つて再擧を計らうと思つてゐる。お前達はどこにでも隱れて時を待つてゐてくれよ」と。三成は遂に食物もなくなり、木の實などを拾つて饑を凌ぎ、步き行くこと四日にして下痢に罹つた。石橋村にまで行つて、知合の農夫某の家に賴つた。某は三成をかくまつた。或る者がその農夫に戒めて曰ふには「聞けばお前は治部をかくまつてゐるといふ話だ。今田中吉政が井口にゐて、三成を非常にやかましく探してゐる。もし露顯したら、きつとお前にも禍

が降りかゝつて來るだらう」と。農夫は「そんな覺えはない」と答へた。三成は襖越しにその話を聞き、農夫に向つて曰ふには「余はどの道逃げ終せることは出來ないのだ。お前はどうして知らせに行かないのだ」と。農夫は三成を落さうとした。三成が曰ふには「余は病氣だ。一寸も歩くことは出來ぬ。ぐづ〳〵してゐると、お前に累を及ぼすことになる。お前は直ぐ自首して出るやうに」と。そこで農夫は井口に行つて吉政に知らせた。吉政は兵卒をやつて捕へさせた。

語釋　石橋村・井口（近江）

初、三成之握權也、吉政事之甚恭。三成既被捕、呼吉政如故。曰「吾欲報先君知遇、與上杉・毛利等倶擧事。一敗至此。命也。願得速自裁。」吉政請之徳川氏。乃命醫治其疾。其父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆在澤山、自殺。長束正家走保水口。東兵來逼誘出之、迫使自殺。僧惠瓊亦被捕。皆囚于東營。諸將帥爭折辱三成。獨淺野左京大夫視之憫然。脱其短襖衣之曰「子雖我仇也、同爲豐臣氏臣。吾不忍乘其困加以無禮。」徳川氏聞之、心敬憚大夫。義弘之南走、經伊賀・大和、行破土兵而至大坂、欲與輝元・長盛倶城守。二人不答。乃取其質、航歸薩摩。

【訓讀】初め三成の權を握るや、吉政之に事ふること甚だ恭し。三成既に捕へられ、吉政を呼ぶこと故の如し。曰く「吾れ先君の知遇に報いんと欲し、上杉・毛利等と倶に事を擧げて一敗此に至る。命なり。願はくは速に自裁するを得ん」と。吉政之を德川氏に請ふ。乃ち醫に命じて其の疾を治せしむ。其の父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆澤山に在つて、自殺す。長東正家走つて水口を保つ。東兵來り逼り之を誘出し、迫つて自殺せしむ。僧惠瓊も亦捕へらる。皆東營に囚ふ。諸將帥爭つて三成を折辱す。獨り淺野左京大夫之を視て憫然たり。其の短襖を脫ぎ之に衣せて曰く「子は我が仇なりと雖も、同じく豐臣氏の臣たり。吾れ其の困に乘じて加ふるに無禮を以てするに忍びず」と。德川氏之を聞き、心に大夫を敬憚せり。義弘の南走するや、伊賀・大和を經、行々土兵を破つて大坂に至り、輝元・長盛と倶に城守せんと欲す。二人答へず。乃ち其の質を取り、航して薩摩に歸る。

【通釋】初め三成が政權を握つた時に、吉政は之に仕へるに慇懃を極めてゐた。三成は捕へられてからも、元の通りに吉政を目下の者の樣に呼んだ。そして曰ふには「余は先殿(太閤)の理解ある待遇に報いようと思つて、上杉・毛利等と一緒に事を擧げて、一度に敗軍してこんな始末になつた。出來ることなら早く自殺させて貰ひ度いものだ」と。吉政がその旨を德川氏に賴んだ。そこで醫者に命じて三成の病氣を癒させた。彼の父晴成・兄重成・子重家・姪の朝成は皆領地の澤山にゐて自殺した。長東正家は走つて水口を守つた。東兵が追ひ迫つて來ておびき出し、更に追ひつめて自殺させた。僧惠慶も亦捕へられた。皆東軍の陣屋に囚へておいた。諸將帥は我も〳〵と三成を凌辱した。唯だ一人淺野左京大夫のみは彼を見つめて不憫に思つた。その陣羽織を脫いで三成に着せて曰ふには「君は私の仇だが、共に豐臣氏の家來である。私はその落ち目につけ込んで、無禮を加へるには忍

びない」と。徳川氏はそれを聞いて、心中に大夫を敬ひ憚つた。義弘が南に落ち延びた時、伊賀・大和を通り、途々士兵を破つて大阪につき、輝元・長盛と共に城を守らうとした。併し二人は返答しなかつた。そこで城中の人質を取り戻して、舟に乘つて薩摩に歸つた。

先是、田邊・大津皆下。立花宗茂引兵、東至草津、聞敗、還入京師、使人謂木下家定曰「貴息之事不可言也。子猶右嗣君、則請共守大坂。」家定曰「子先往。」乃閉門自守。宗茂遂至大坂、使謂輝元曰「公苟城守、願扞一面。」輝元曰「議而後答。」宗茂罵曰「今日復何議。」乃欲歸其國。將士曰「公所以酬豐臣氏足矣。」因勸降德川氏。乃送降焉、亦航歸柳川。

【訓讀】是より先き、田邊・大津皆下る。立花宗茂、兵を引いて東草津に至り、敗を聞き、還つて京師に入り、人をして木下家定に謂はしめて曰く「貴息の事言ふ可からざるなり。子、猶ほ嗣君を右けば、則ち請ふ共に大坂を守らん」と。家定曰く「子先づ往け」と。乃ち門を閉ぢて自ら守る。宗茂遂に大坂に至り、輝元に謂はしめて曰く「公苟も城守せば、願はくは一面を扞がん」と。輝元曰く「議して後答へん」と。宗茂罵つて曰く「今日復何をか議せん」と。乃ち其國に歸らんと欲す。將士曰く「公の豐臣氏に酬ゆる所以は足れり」と。因つて徳川氏に降るを勸む。乃ち降を送り、亦航して柳川に歸る。

通釋 これ以前に田邊も大津も皆降參した。立花宗茂は兵を率ゐて東の方、草津まで行つたが、西軍の敗戰を聞いて京都に戻り、人をやつて木下家定に曰はせるには「御子息(秀秋)のことは何とも話にならぬ。けれども貴公がやはり秀頼公をお助けになるならば、一つ御一緒に大阪を守りませう」と。家定が曰ふには「貴公先きに行かれよ」と。そこで門を閉めて自分の家を守つてゐた。宗茂は遂に大阪まで行つて、輝元に使をやつて曰ふには「貴殿がもしも城を守られるならば、拙者にどうか一方を防がせて貰ひ度い」と。輝元がいふのに「相談してからお答へしよう」と。宗茂は罵つて曰ふには「今になつて何の相談がある」と。そこで自分の本國に歸らうと思つた。その將士が曰ふには「殿が豐臣氏に對する恩報じは最早十分で御座います」と。因つて德川氏に降參することをすゝめた。そこで降參の使ひを出して舟に乘つて柳川に歸つた。

語釋 貴息之事(家定の子の秀秋が德川に内應したこと。)○柳川(筑後)

秀家經近江、爲土兵所困、獨從二人竄土窟中。聞捕者至、欲自殺。從者止之、請其寶刀、出告東軍、以秀家既死、獻刀爲證。秀家至大坂、聞其國已覆沒、竟走薩摩。其妻前田氏、利長妹也。大歸加賀。後數年、利長問得其實、告之江戶。乃責前告者。告者請死。釋之。島津忠恒請宥秀家死、流八丈島。前田利政據能登、九鬼嘉隆據志摩、並抗東軍。利政除籍、嘉隆自殺。

【訓讀】秀家近江を經、土兵の困しむる所と爲り、獨り二人を從へて土窟中に竄る。捕者至ると聞き自殺せんと欲す。從者之を止め、其の寶刀を請ひ、出でゝ東軍に告ぐるに秀家既に死するを以てし、刀を獻じて證と爲す。秀家大坂に至り、其の國已に覆沒すと聞き、竟に薩摩に走る。其の妻前田氏は利長の妹なり。加賀に大歸す。後數年、利長問うて其の實を得、之を江戸に告ぐ。乃ち前の告ぐる者を責む。告ぐる者死を請ふ。之を釋す。島津忠恒、秀家の死を宥さんと請ふ。八丈島に流す。前田利政能登に據り、九鬼嘉隆志摩に據り、並に東軍に抗す。利政は籍を除かれ、嘉隆は自殺す。

【通釋】秀家は近江を通り、大兵に攻め苦しめられ、二人の家來だけつれて岩屋の中に隱れてゐた。捕手が來たのを聞いて自殺しようとした。從者はそれを押し止め、その寶刀を貰ひ受け、岩屋を出て東軍の者に、秀家は最早死にましたと申し出で、その寶刀を差出して證據とした。秀家は大阪に逃れ歸り、自分の領國備前が最早東軍の手に渡つたと聞いて、遂に薩摩に走つた。その妻の前田氏は利長の妹である。不縁になつて加賀へ戻つてゐた。數年經つてから、利長が問ひ訊して事實（秀家は生きて薩摩に逃げたといふ）が分つたので、早速江戸に知らせた。江戸方では、前に秀家の死を知らせた從者を責めたゞした。その者は死罪を求めた。併し許してやつた。島津忠恒は秀家の死を赦免するやうに願ひ出た。その故に八丈島に流した。前田利政は能登に立てこもり、九鬼嘉隆は志摩に據り、皆東軍に抵抗した。結局利政は諸侯の名籍を削られ、嘉隆は自殺した。

是役也、小西行長首應三成。三成以其更事倚賴之。行長爲人自殖而薄士。士不樂爲之用也。及敗陣亂不可禁。乃走至糟川。逢僧林藏主者曰「吾攝津守也。吾德女矣」

僧曰、公盍自刄。行長曰、吾奉耶蘇教、不可自刄。僧乃執而告之。是歳冬、與三成・惠瓊皆斬于京師。加藤淸正初知三成必擧事、止德川氏東行。不聽。乃歸其國。逢大坂檄至。曰、是佞豎託幼主、以濟其私也。乃發兵、攻小西氏城邑、盡幷之。會、黑田孝高攻略近國。因合兵、降筑紫廣門等、遂臨薩摩。島津義久已降德川氏。森勝信其弟勝永、出小倉、走匿土佐。上杉景勝與伊達政宗・最上義光戰而勝之。佐竹義宣觀望不出。及聞上國敗、皆降德川氏。

【訓讀】是の役や、小西行長、首として三成に應ず。三成、其事に更るを以て之に倚頼す。行長人と爲り自殖して士に薄くす。士、之が用を爲すを樂しまず。敗に及び陣亂れて禁ずべからず。乃ち走つて糟川に至る。僧林藏主なる者に逢うて曰く「吾は攝津守なり。吾れ女に德せん」と。僧曰く「公盍ぞ自刄せざる」と。行長曰く「吾れ耶蘇教を奉ず。自刄すべからず」と。僧乃ち執へて之を告ぐ。是の歳冬、三成・惠瓊と皆京師に斬らる。加藤淸正初め三成必ず事を擧ぐるを知り、德川氏の東行を止む。聽かず。乃ち其國に歸る。大坂の檄至るに逢つて曰く「是れ佞豎、幼主に託して以て其私を濟すなり」と。乃ち兵を發し、小西氏の城邑を攻めて盡く之を幷す。會々黑田孝高、近國を攻略す。因つて兵を合せて筑紫廣門等を降し、遂に薩摩に臨む。島津義久已に德川氏に降る。森勝信、其弟勝永、小倉を出で、走つて土佐に匿る。上杉景勝は伊達政宗・最上義光と戰つて之に勝つ。佐竹

義宣は觀望して出でず。上國の敗を聞くに及び、皆德川氏に降る。

〔通釋〕關ケ原の戰役で、小西行長は第一に三成に加擔した。三成は、行長が軍事に經驗がある爲めに、彼を賴みにしてゐた。然るに行長は性來利己主義で部下に冷淡であつた。部下は彼の爲めに快く働く氣がなかつた。戰が敗れると、その陣の足並が亂れて何んとしても止めることができなかつた。そこで糟川に逃げ延びた。僧の林藏主といふ者に出逢つて曰ふには、「余は攝津守だ。お前に施しをしてやらう」と。僧が曰ふには「貴方はなぜ自殺せられないのか」と。行長が曰ふには「余は耶蘇教を宗旨にしてゐる。だから自殺することは出來ぬ」と。そこで僧は彼を捕へて知らせた。この年の冬、三成・惠瓊と一緒に京都で斬られた。加藤清正は初めから三成が必ず事を起すのを知り、德川氏の東に向ふのを止めた。併し承知しなかつた。そこで領國に歸つた。大阪から三成の檄文が來たのを見て曰ふには「これは口達者な小僧が年若な主人に事よせて野心を遂げようとするのだ」と。そこで兵を發して小西氏の城邑で肥後にあるものを攻めて、全部占領して終つた。丁度其の時、黑田孝高が近國を攻め平らげてゐたので、兵を合せて筑紫廣門等を攻め降し、そのまゝ薩摩に迫つた。その時島津義久は最早德川氏に降つてゐた。森勝信とその弟の勝永は小倉を出て土佐に逃げ隱れた。上杉景勝は伊達政宗・最上義光と戰つて之に勝つた。佐竹義直は形勢を觀望して出て來なかつた。上方に於ける味方の敗北を聞いて、皆德川氏に降參した。

〔語釋〕糟川（近江）○佞豎（三成をさす。）

先レ是、德川氏既捷、將レ入二京師一。諸將先進至二大津一。福島正則議曰「吾輩知三三成擧レ事非二

郎君意。故右內府討之。今三成既敗矣。內府或遂謀不利於郎君、則吾以死拒之。淺野・加藤等皆然之。乃入京師。德川公至大津、置關于日岡、以其臣伊奈圖書守之。正則使使大津、爲關吏所辱。使者復命而自殺。正則怒、以其首贈井伊直政。直政驚、斬關卒數人謝之。正則愈怒曰「百卒不直一士。必得圖書頭。如不見許、吾將爲我所欲爲也。」圖書聞之自殺。既而德川公入大坂、不問秀賴。遂大行慶讓、削毛利輝元之六國、放增田長盛于高野。眞田昌幸與子幸村亦遁高野。以秀秋功最大、封浮田氏故地。尋病狂死國除。其父家定削邑、兄勝俊・利房皆奪封。兄延俊獨邑于豐後。

訓讀　是より先き、德川氏既に捷ち、將に京師に入らんとす。諸將先づ進み大津に至る。福島正則議して曰く「吾が輩知る、三成の事を擧ぐるは郎君の意に非るを、故に內府を右けて之を討つ。今三成、既に敗る。內府或は遂に郎君に不利を謀らば、則ち吾れ死を以て之を拒がん」と。淺野・加藤等皆之を然りとす。乃ち京師に入る。德川公大津に至り、關を日岡に置き、其臣伊奈圖書を以て之を守らしむ。正則、使を大津に使はし、關吏の辱しむる所と爲る。使者復命して自殺す。正則怒り、其首を以て井伊直政に贈る。直政驚き、關卒數人を斬つて之を謝す。正則愈ゝ怒つて曰く「百卒は一士に直らず。必ず圖書の頭を得ん。如し許されずば、吾れ將に我が爲さん

と欲する所を爲さんとす」と。圖書之を聞いて自殺す。既にして徳川公大坂に入り、秀頼を問はず。遂に大に慶讓を行ひ、毛利輝元の六國を削り、增田長盛を高野に放つ。眞田昌幸、子幸村と亦高野に遁る。秀秋の功最も大なるを以て、浮田氏の故地に封ず。尋いで狂を病んで死し國除かる。其父家定、邑を削られ、兄勝俊・利房皆封を奪はる。兄延俊獨り豐後に邑す。

【通釋】これより以前、徳川氏は關ケ原に勝つて京都に入らうとした。諸將が先づ大津まで來た。福島正則は相談して曰ふには「吾が輩はよく知つてゐるが、三成が事を起したのは若君の御意志ぢやないのだ。だから俺は內府に加擔して討つたのだ。併し今三成はもう負けて終つた。この上內府が若君に爲めにならぬことをし出したら、俺は死を賭して邪魔をする積りだ」と。淺野・加藤等は皆それに贊成した。そこで京都に入つた。徳川公は大津まで來て、日岡に關所を置き、家來の伊奈圖書に守らせた。正則は使を大津にやつた所が、その使は關所の役人に侮辱された。使者は歸つて使命を報告した上で自殺を遂げた。正則は立腹してその首を井伊直政に贈つた。直政は驚いて、關所の番卒五六人を斬つて詫びをした。正則は益〻怒つて曰ふには「百人の足輕も一人の武士の値打はない。是非共伊奈圖書の首を申し受け度い。もしそれが許されなければ、吾が輩はしたいと思ふことを實行するが、どうか」と。圖書はそれを聞いて自殺をした。さうかうする內に、徳川公は大阪に入つたが、秀頼に一言の挨拶もせず、大に賞罰を行ひ、毛利輝元の六國を減らし增田長盛を高野に追放した。眞田昌幸は子の幸村と共に之れ亦高野に逃れた。秀秋の功は最も大きいので、浮田氏の元の領地に封じた。その後、秀秋は氣が狂つて死に、其の領地は取り上げられた。その父の家定は領地を減らされ、兄の勝俊・利房は皆領地を奪はれた。兄延俊だけが豐後に領地を持つてゐた。

語釋　日岡（山城）　○六國（安藝、石見、出雲、因幡、伯耆、隱岐。）　○浮田氏故地（備前、美作。）

當是時、徳川公威權益熾。七道將士皆會江戸、留其孥爲質。而秀頼獨食攝津・河內・和泉六十餘萬石。初片桐且元・小出秀正、憂諸奉行擧事、而不能制也。東西之軍未接、二人亟發使者赴關東、分疏其意。諸奉行要之、使攻阿濃津。使者亦恐嫌怯避、終從之。徳川公怒。秀正退居岸和田、尋病卒。且元獨傅、盡心輔導、未嘗離左右。

訓譯　是の時に當り、徳川公威權益と熾なり。七道の將士皆江戸に會し、其孥を留めて質と爲す。而して秀頼獨り攝津・河內・和泉の六十餘萬石を食む。初め片桐且元・小出秀正、諸奉行の事を擧ぐるを憂ひて制する能はず。東西の軍未だ接せざるや、二人亟に使者を發して關東に赴き、其意を分疏せしむ。諸奉行之を要して阿濃津を攻めしむ。使者も亦、怯避を嫌はるゝを恐れ、終に之に從ふ。徳川公怒る。秀正退いて岸和田に居る。尋いで病んで卒す。且元獨り傅たり。心を盡して輔導し、未だ嘗て左右を離れず。

通釋　此の當時、徳川公の威望權力は益ゝ盛になつた。全國七道の將士は皆江戸に集まり、その妻子を江戸に留め置いて人質にした。そして秀頼のみは攝津・河內・和泉の六十餘萬石を領してゐるに過ぎなかつた。初め片桐且元と小出秀正は諸奉行が事を起すのを心配したが、止めることは出來なかつた。東西の軍がまだ接觸する迄に至らない頃、この兩人は急いで使者を關東に立てゝ、自分達の眞意を言譯をさせた。所が諸奉行がそれを待ち

受けて阿濃津を攻めさせた。使者も憶病で逃げると疑はれるのを恐れて、その言付に從つた。徳川公は（その爲めに且元・秀正の眞意を知らないで）腹を立てゝゐた。秀正は岸和田に退隱してゐた。次いで病死した。且元だけがお守役となつてゐた。心を盡して世話をやき、決して秀頼の傍を離れることをしなかつた。

語釋 未ㇾ接（關原の前のこと。）〇阿濃津（伊勢）〇岸和田（和泉）

八年三月、徳川公爲二大將軍一。四月、秀頼陞二内大臣一、叙二從一位一。七月、將軍以二其孫女一妻二秀頼一。命二且元一迎ㇾ之、令三大坂加二且元封萬石一。且元以二嗣君幼一辭不ㇾ受。尋如二江戸一。將軍面諭ㇾ勿ㇾ辭ㇾ封。十年四月、秀頼遷二右大臣一。將軍讓二職其嗣子秀忠一。五月、前將軍在二京師一。諷二北廳一使三秀頼來二見淀君一。母子相依、不ㇾ欲二分離一。又恐二其有一ㇾ變、固辭不ㇾ遣。

訓讀 八年三月、徳川公大將軍と爲る。四月、秀頼内大臣に陞り、從一位に叙せらる。七月、將軍其の孫女を以て秀頼に妻はす。且元に命じて之を迎へしめ、大坂をして且元に封萬石を加へしむ。且元、嗣君幼きを以て辭して、受けず。尋いで江戸に如く。將軍面のあたり封を辭する勿れと諭す。十年四月、秀頼右大臣に遷さる。將軍、職を其の嗣子秀忠に讓る。五月、前將軍京師に在り。北廳に諷して、秀頼をして來見せしむ。淀君母子相依り、分離を欲せず。又其の變あらんを恐れ、固辭して遣らず。

通釋 八年三月、徳川公が大將軍になつた。四月、秀頼は内大臣に昇り、從一位に叙せられた。七月、將軍は

その孫娘（秀忠の娘千姫）を秀頼に縁付けた。且元に江戸まで迎へに來させた。大阪方に言ひつけて且元に一萬石を加增させようとした。且元は秀頼君がまだ幼少なので斷つてお受けしなかつた。それから間もなく江戸に行つた。將軍は面と向つて、加封を辭退せぬやうにと諭した。十年四月、秀頼は右大臣に敍された。將軍は跡取りの秀忠に職を讓つて隱居した。五月、前將軍は帝都に居つた。秀頼の嫡母北廳にそれとなく話して秀頼に會ひに來させようとした。併し淀君は母子互に深く頼り合つてゐて、暫らくも離れ度がらなかつた。又變事の起るのを心配して、固く斷つて秀頼を京都にやらなかつた。

十三年二月、秀頼患痘。福島正則自安藝馳至、日夜看護。先是、正則謂結城秀康曰、「公太閤養子。於大坂郎君為兄弟。將軍百歲後、公善遇郎君。老奴亦當竭力周旋。」秀康疑其有異志、絕之。初秀吉造金馬數十。一馬當鈑金千枚。藏之大坂城中、以備軍須。十五年、秀頼以東旨再興方廣寺、以繼先志。以且元監役。所費鉅萬、多鎔金馬充費。

【訓讀】十三年二月、秀頼痘を患ふ。福島正則安藝より馳せ至り、日夜看護す。是より先き、正則、結城秀康に謂つて曰く「公は太閤の養子。大坂の郎君に於て兄弟たり。將軍百歲の後、公善く郎君を遇せよ。老奴も亦、當に力を竭して周旋すべし」と。秀康其異志あるを疑つて之と絕つ。初め秀吉、金馬數十を造る。一馬は鈑金千枚

に當る。之を大坂城中に藏して以て軍須に備ふ。十五年、秀頼、東旨を以て再び方廣寺を興し、以て先志を繼ぐ。且元を以て役を監せしむ。費す所鉅萬、多く金馬を鎔して費に充つ。

通釋 十三年二月、秀頼は疱瘡を患つた。福島正則は安藝から驅けつけて來て、夜晝看護をした。それより前に、正則は結城秀康に向つて曰ふには「貴方は太閤殿下の御養子です。大阪の若君とは御兄弟である。將軍（家康）亡き後は、善く若君の御世話をお願ひ申します。老奴も一生懸命に膽入り至すで御座らう」と。秀康は正則が家康に對して陰謀のあることを疑つて手を切つて終つた。以前秀吉は金の馬を數十を造つた。その一頭が大判金千枚に相當した。それを大阪城中にしまつて軍用金の準備としてゐた。十五年、秀頼は關東方の希望により、父の志を繼いで方廣寺を再興することになつた。且元に工事の監督をさせた。費用は數萬兩もかゝつたが、その大部分は例の金の馬を鎔して間に合せた。

語釋 金馬（黄金の分どう。）○鈑金（いたがね、おほばんきんのこと。）○繼先志（太閤が東大寺に擬して作り、慶長二年の地震にて破壞した、それ以來大成しなかつたのを太閤の志を繼いで後之を成さしめたのである。）

是時、關東工役數起。福島・加藤・淺野・池田諸家、每助其役。清正赴江戶、多率士卒、又必過省秀頼。因置邸於大坂如故。凡邦俗男子必剃其鬚髯、而清正長髯自喜。前將軍使一親將以其私謂之曰「以予觀於公、有可去者三。長髯一也。大坂邸二也。東行從兵三也。」清正曰「吾戎服著銅面、有髯、以爲之藉、則肅然無有搭摭之患。撤大坂邸

是棄二太閤舊誼一。不下以レ兵自從上、緩急不レ及レ事。皆不レ可レ去也」

【訓讀】是の時、關東の工役數々起る。福島・加藤・淺野・池田の諸家、毎に其役を助く。清正江戸に赴くに、多く士卒を率ゐ、又必ず過つて秀頼を省す。因つて邸を大坂に置くこと故の如し。凡そ邦俗、男子は必ず其鬚髯を剃る。而るに清正長髯自ら喜ぶ。前將軍、一親將をして、其私を以て之に謂はしめて曰く「予を以て公を觀るに去る可き者三あり、長髯一なり。大坂の邸二なり。東行に兵を從ふ三なり」と。清正曰く「吾れ戎服して銅面を著く、髯あつて以て之が藉と爲せば、則ち肅然として搖撼の患あるなし。大坂の邸を撤するは是れ太閤の舊誼を棄つるなり。兵を以て自ら從へざれば、緩急事に及ばず。皆去る可からざるなり」と。

【通釋】此の時、關東方の工事が頻繁に起つた。福島・加藤・淺野・池田の諸家はいつもその工事に合力してゐた。清正は江戸に行く時は多數の兵を連れ、又必ず大阪の秀頼の許へ立ち寄つて見舞をした。その爲め、相變らず大阪に邸を置いてゐた。又一般に當時の風として男子は定つてあごひげ、頰ひげを剃るのであつた。清正は長い頰ひげを蓄へて喜んでゐた。前將軍家康はある懇意な大將に言ひつけて、其大將の意見として清正に曰はせるには「貴方に對する私の意見を申述べると、あなたには廢むべきものが三件あります。長髯が一つです。大阪の邸が一つです。江戸に行く時軍隊を伴ふのが一つです」と。清正が曰ふには「私は武裝する時銅の面覆ひを着ける。頰ひげを下敷きにするとぴつたりしてぐらぐら搖れることが御座らぬ。大阪の邸を取りこはすことは太閤殿下の古い御恩誼を棄てることになる。軍隊をつれてゐなければ急場の間に合ひ兼ねます。そんな譯で折角だが何れも廢めるわけに行き申さぬ」と。

十六年三月、前將軍在京師。使織田長益來諭召見秀賴。淀君不肯。北廳使清正及淺野左京大夫促之。二將因啓曰、「臣輩以死守郎君。必無慮矣。」且元亦自京師馳還、苦諫之。淀君乃遣秀賴。二十八日、溯淀入京師。二將以弓銃夾岸而北。福島正則稱疾守大坂。前將軍使其二子義直・賴宣迎之東寺。二將以下二十一人、徒歩護輿、入二條城。

訓讀 十六年三月、前將軍京師に在り。織田長益をして、來諭して秀賴を召見せしむ。淀君肯んぜず。北廳清正及び淺野左京大夫をして之を促さしむ。二將因つて啓して曰く「臣が輩、死を以て郎君を守る。必ず慮無し」と。且元も亦京師より馳せ還り、之を苦諫す。淀君乃ち秀賴を遣はす。二十八日、淀を遡つて京師に入る。二將、弓銃を以て岸を夾んで北す。福島正則、疾と稱して大坂を守る。前將軍其二子義直、賴宣をして之を東寺に迎へしむ。二將以下二十一人、徒歩して輿を護し、二條城に入る。

通釋 十六年三月、前將軍は京都にゐた。織田長益をして大阪に行つて話をつけ、秀賴を呼びつけさせようとした。淀君が承知しなかつた。北廳は、清正と淺野左京大夫をしてそれを催促させた。そこで二將は淀君に申し上げて曰ふには「私共が死を賭して若君を守護します。必ず御心配は御座いませぬ」と。且元も京都から馳せ歸り、淀君に考へ直す樣に痛く諫めた。そこで淀君はやつと秀賴を京都にやつた。二十八日、淀川を上つて

京都に入つた。清正と淺野の二將は弓鐵砲を用意して兩岸からその舟を夾んで北に向つた。福島正則は病氣だと言ひ立て丶伴に立たずに大阪を守つた。前將軍は二人の子供の義直と賴宣に、秀賴を東寺に出迎へさせた。前記の二將以下二十一人の者が、徒歩で輿を護つて二條城に入つた。

語釋 義直（後に尾張侯となる。）○賴宣（後に紀伊侯になる。）

前將軍出迎之門、相見于正殿。前將軍南鄉坐、關東將士及諸侯伯、擁衞左右。秀賴北鄉坐、二將在其後。秀賴贈前將軍、以名刀二口・駿馬一匹・黃金三百枚及錦緞若干。其公族・將領皆有所遺。前將軍答以二刀・三鷹・十馬。饗畢。清正曰「淀君遲歸。請辭矣」前將軍使其女壻池田輝政賜酒於二將。既罷。扶秀賴出、謁北廳、拜豐國廟、視方廣寺役、自伏見上舟。清正獻酒賀焉。歸其邸、出短刀于懷、泣曰「吾今日、聊報太閤之恩矣」四月、義直・賴宣來大坂報秀賴北上也。秀賴迎而饗之。

訓讀 前將軍出で丶之を門に迎へ、正殿に相見る。前將軍南鄉して坐し、關東の將士及び諸侯伯、左右を擁衞す。秀賴北鄉して坐し、二將其後に在り。秀賴前將軍に贈るに、名刀二口・駿馬一匹・黃金三百枚及び錦緞若干を以てす。其公族・將領に皆遺る所あり。前將軍答ふるに二刀・三鷹・十馬を以てす。饗畢る。清正曰く「淀君歸

を遲つ。請ふ辭せん」と。前將軍其女壻池田輝政をして酒を二將に賜らしむ。既にして罷む。秀頼を扶けて出で、北廳に謁し、豐國廟を拜し、方廣寺の役を視、伏見より舟に上る。清正酒を獻じて賀す。其邸に歸り、短刀を懷より出し、泣いて曰く「吾れ今日、聊か太閤の恩に報ず」と。四月、義直・頼宣大坂に來る。秀頼の北上に報ゆるなり。秀頼迎へて之を饗す。

【通釋】前將軍は門まで出迎へて、大書院で會見をした。前將軍は南向きに坐り、關東方の將士並びに諸大名はその左右を圍んで衞つた。秀頼は北向に坐り、二將が背後に控へた。秀頼は前將軍に、名刀二口、駿馬一頭、黃金三百枚及び錦と緞子若干を贈つた。又其一門の武將達にも何れも土產物があつた。前將軍はその返禮として刀二口、鷹三羽、馬十頭をおくつた。饗宴が濟んだ。清正が曰ふのに「淀君が歸りを待たれて居ります。お暇を戴き度う御座います」と。前將軍は壻の池田輝政に言ひ付けて、二將に酒を與へさせた。それが濟むと秀頼を介添して、邸を立ち出で、北廳にお目通りをし、豐國廟に參詣し方廣寺の工事を視察し、伏見から舟に乘つた。清正は酒を獻じて無事を祝つた。自分の邸に歸ると、懷から短刀を取り出し、淚を流して曰ふには「俺は今日太閤殿下の御恩を少し許り報じた」と。四月義直と頼宣が大阪に來た。これは秀頼の來訪に報ゆる爲めである。秀頼は迎ひ入れて饗應をした。

【語釋】南鄕坐、北鄕坐（南面は天子の位にて、北面は臣下の位なれば、それと通ずる氣持があつたのであらう。）

六月、清正病卒。清正嘗謂レ人曰「前田利家晚志二儒學一、招三吾及浮田秀家・淺野幸長一、語次擧二論語託孤寄命之章一。我爾時不レ知二其何謂一。乃者讀而思レ之、略有レ所レ曉。當二今之世一

不念此語者、恐陷不義也。清正既卒。淺野父子相繼病卒。

【訓讀】六月、清正病んで卒す。清正嘗て人に謂つて曰く「前田利家晩く儒學に志し、吾れ及び浮田秀家・淺野幸長を招く。語次、論語の託孤寄命の章を擧ぐ。我れ爾の時其何の謂なるを知らず。乃者讀んで之を思ひ、略ぼ曉る所あり。今の世に當り、此の語を念はざる者は、恐らくは不義に陷らん」と。清正既に卒す。淺野父子、相繼ぎ病んで卒す。

【通釋】六月、清正は病死した。清正は以前人に向つて曰ふには「前田利家は晩年になつて儒學に心を向けてゐたが、自分と浮田秀家・淺野幸長を招いたことがある。その時の話の序に、論語の「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべし」の章を引いて示した。自分はその時は何ういふ理由か分らなかつた。此の頃、論語を讀んで考へると、大體分つた樣な氣がする。今のやうな時世に此の文句を念頭に置かぬ者は、多分不義の道に陷るであらう」と。その清正も死んで終つた。淺野父子も續いて病死した。

【語釋】託孤寄命（論語、泰伯篇に、「可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人歟、君子人也」とある。朱子の註に、「其の才は以て幼君を輔け、國政を攝すべし。其の節は死生の際に至つて奪ふべからず、君子といふべし」とある。）

十八年、秀頼以東旨、加片桐且元・大野治長祿各五千石。且元與木村重成・薄田兼相及七隊長、以遺命保護秀頼、服事關東甚謹。而治長者淀君乳母子也。織田長益者淀君季父也。皆見親信、寖與且元相軋。十九年正月、彗星見東方。二月、大坂天主

閣烟起。衆趨救則無矣。使韓人李文長筮之。遇艮之益。曰「尋兵失疆、喪其貞良、敗我殺鄕。」再筮遇臨之坎。曰「人面鬼口、長舌如斧、斲破瑚璉、殷商絶後」秀頼大懼、命巫禳之。

訓讀 十八年、秀頼東旨を以て、片桐且元・大野治長に、祿各〻五千石を加ふ。且元、木村重成・薄田兼相及び七隊長と、遺命を以て秀頼を保護し、關東に服事すること甚だ謹む。而して治長は淀君の乳母の子なり。織田長益は、淀君の季父なり。皆親信せられ、寖く且元と相軋る。十九年正月、彗星東方に見ゆ。二月、大坂の天主閣に烟起る。衆趨り救へば則ち無し。韓人李文長をして之を筮せしむ。艮の益に之くに遇ふ。曰く「兵を尋ゐて疆を失ひ、其貞良を喪ひ、我を殺鄕に敗る」と。再筮するに、臨の坎に之くに遇ふ。曰く「人面鬼口、長舌斧の如く、瑚璉を斲破し、殷商後を絶つ」と。秀頼大に懼れ、巫に命じて之を禳はしむ。

通釋 十八年、秀頼は關東の内命で、片桐且元と大野治長とに夫々祿高五千石を加増した。且元は木村重成、薄田兼相及び七隊長と共に、太閤の遺命によつて秀頼を保護し、關東に對しては非常に注意深く、その意に逆らはざらんことを心懸けてゐた。そしてこの治長は淀君の乳母の子であつた。織田長益は淀君の末の叔父であつた。何れも淀君から信用せられ、親まれてゐたが且元との關係は段々圓滑でなくなつた。十九年正月、帚星が東の空に見えた。二月、大阪城の天主閣から烟があがつた。皆走つて消しに行くと何も無かつた。韓人の李文長に占はせて見た。艮の卦が益の卦に行くといふのであつた。易の文句に曰ふには「兵を用ひて領地を失ひ、忠良

な臣下を失ひ、秦が殽に於て晉に敗れたやうなことになる」と。又占つて見ると、今度は臨の卦が坎の卦に行くといふのであつた。易の文句に「人面をしてはゐるが鬼の口で、その長き舌は斧の如く自在である、宗廟の祭器を破壞して、殷國が亡んで祀を絶つたやうになる」と　秀頼は非常に恐ろしくなつて、みこに之を禳ひ除かせた。

語釋 七隊長（速水守久、伊東長次、青木一重、眞野宗信、中島氏種、野々村吉安、堀田正高。）○遇艮之益（䷳艮。䷩益。初爻、第三爻、第五爻の三爻が變化してゐる。艮は艮爲山といつて、山が二つ重つてゐる。だから兼山といふ。動かざる山の如しといふ象である。大阪城が靜つとしてゐれば間違ひはないことを示す。益は風雷益といつて、風と雷とが、吹いたり鳴つたりして、段々それが增して行くことを現はしてゐる。大阪方が風ならば關東方は雷となつて互ひに大雷風の騷ぎを生ずるを示してゐる。つまり動かないものが驚て動いて大波瀾を來すことを示してゐるのである。）○尋兵失彊云々（此は漢焦貢の易林によつて判斷するのである。敗殽鄕とは左傳昭公三十三年に、秦の穆公が蹇叔の諫めを用ひず孟明視、西乞術、白乙丙の三人を遣はし鄭を伐ち、晉の爲めに殽で手酷く破られたことが記されてある。このやうに豐臣氏が要らざる兵を用ひて土地を失ひ、貞良の臣を失ふことをいつたのである。）○遇臨之坎（䷒臨。䷜習坎。臨は地澤臨と申して上から下に臨む卦である。習坎は坎爲水と申して、坎が重なるから習坎といふのである。坎は陷で險である。これは險難が重なり來ることを表はしてゐる。豐臣は初め群諸侯に高處から臨んでゐるが、それが驚て險難に赴くといふことを示してゐるのである。）○人面鬼口云々（これも易林に據つたのである。人面鬼口で、差し出口で、それは斧がものを破るがやうに事を破る恐ろしい佞辯。以上は淀君にあてゝいふのである。瑚璉は宗廟の祭に黍稷を盛る器で、それを破壞するとは豐臣氏の祀を斷たしめるといふこと。そしてそれは殷商の國が斷絕したやうに豐臣氏を亡して終ふといふこと。）

四月、方廣寺成。乃鑄洪鐘、命東福寺僧淸韓銘之。五月、遣片桐且元赴駿河、告成請慶。前將軍曰「右府爲願主。宜親往慶之」因命其親臣本多正純、以女爲且元婦、慰勞遣歸。且元大喜復命。卜八月三日、公卿以下皆會。縱四方民觀儀。將發行。會前將軍覽鐘銘稿大怒。曰「銘有國家安康之句。是截我名也。序有大小釋迦迭爲主伴之語。

是レ欲スルレ代ラントレ我ニ也。秀頼何ノ意ゾ、乃チ敢テ詛フトレ我ヲ」

訓讀 四月、方廣寺成る。乃ち洪鐘を鑄る。東福寺の僧清韓に命じて之に銘せしむ。五月、片桐且元を遣はして駿河に赴き、成を告げて慶を請はしむ。前將軍曰く「右府、願主たり。宜しく親ら往いて之を慶すべし」と。因つて其の親臣本多正純に命じ、女を以て且元の婦と爲し、慰勞して遣歸す。且元、大に喜び復命す。八月三日を卜して公卿以下皆會す。四方の民を縱して儀を觀しむ。將に行を發せんとす。會〻前將軍、鐘銘の稿を覽て大に怒る。曰く「銘に、國家安康の句あり。是れ我が名を截るなり。序に大小の釋迦、迭に主伴と爲るの語あり。是れ我に代らんと欲するなり。秀頼何の意ぞ、乃ち敢て我を詛ふ」と。

通釋 四月、方廣寺が落成した。大釣鐘を鑄た。東福寺の僧の清韓に命じて銘文を作らせた。五月、片桐且元を駿河にやつて、落成を報告し供養せられんことを請うた。前將軍が曰ふには「右府（秀頼）が願主だ。御自分で出向いて供養されるが宜しい」と。そこで譜代の家來の本多正純に命じてその娘を且元の倅の嫁にさせ、勞つて歸してやつた。且元は非常に喜び、歸つて前將軍の言葉を報告した。八月三日を選んで、公卿以下皆集つた。又遠近の民に自由に儀式を見物しても宜いことにした。そしてこれから秀頼の行列が大阪を出發しようとするといふ時になつた。丁度其の頃前將軍が鐘の銘の草稿を見て非常に怒つた。曰ふには「銘に『國家安康』の文句がある。これは自分の名を斷ち切つたのである。又銘の序文に『大小の釋迦迭に主伴と爲る』といふ句がある　これは秀頼が自分に代つて天下を支配しようといふ下心である。秀頼は如何なる量見なれば、かく自分を呪ふのであるか」と。

【語釋】鐘銘稿（鐘の銘はその鐘の功德を稱ふる意味を韻文にて表はした文辭。この鐘銘には左の文句がある。「洛陽東麓、舍那道場、聳空瓊殿、横虹畫梁、參差萬瓦、崔嵬長廊、玲瓏八面 焜燿十方、境象兜夜、刹甲扶桑、新鐘高掛、爾音永彰、響應遠近、律中宮商 十八聲慢、百八聲忙、夜禪晝誦、夕燈晨香、五界聞竺、遠寺知湘、東迎素月、西送斜陽、玉筍堀地、豐山降霜、告怪於漢、救苦於唐、靈異惟夥、功用無量、所庶幾者、國家安康、四海施化、萬歲傳芳、君臣豐樂、子孫殷昌、佛門柱礎、法社金湯、英檀之德、山高水長」）〇大小釋迦迭爲二主伴一（もとは藥上大釋迦、藥中小釋迦、互爲二主伴一といひ、大小の佛弟子が互に主從となるといふことを言ふ。）

德川氏京尹板倉勝重馳使告之且元、停其慶會。且元大驚曰、「是非右府所知也。託之淸韓、偶然及此耳。臣不學、成卽附工。罪無所逃。今大儀垂成、萬衆已聚。而遽停之、恐驚民耳目。伏願且畢禮、尋毀滅銘文、然後臣甘心伏誅毋悔也。」勝重不肯曰、「是成訕也。」遂停儀。物情騷然。且元召問淸韓。淸韓不服。乃使淸韓赴駿河陳謝、而自與其弟元重・大野治長繼赴之。前將軍執淸韓、命板倉重昌如京師、令五山僧詰疏銘文。僧多證其訕。且元至鞠子驛、留不敢入。九月、有命、遣歸治長、而獨召且元詰責之。且元陳謝甚力。

【訓讀】德川氏の京尹板倉勝重、使を馳せて之を且元に告げ、其慶會を停む。且元大に驚いて曰く「是れ右府の知る所に非ざるなり。之を淸韓に託し、偶然此に及ぶのみ。臣不學、成つて卽ち工に附す。罪逃るゝ所なし。今、大儀成るに垂んとし、萬衆已に聚る。而して遽に之を停めば、恐らくは民の耳目を驚かさん。伏して願はく

は、且く禮を畢へ、尋いで銘文を毀滅し、然る後臣甘心して誅に伏す悔毋きなり」と。勝重肯んぜずして曰く「是れ詛を成すなり」と。遂に儀を停む。物情騒然たり。且元召して清韓に問ふ。清韓服せず。乃ち清韓をして、駿河に赴いて陳謝せしめ、而して自ら其の弟元重・大野治長と繼いで之に赴く。前將軍清韓を執へ、板倉重昌に命じて京師に如かしめ、五山の僧をして銘文を註疏せしむ。僧多く其の詛を證す。且元鞠子驛に至り、留つて敢て入らず。九月、命あり。治長を遣歸し而して獨り且元を召して之を詰責す。且元陳謝甚だ力む。

通釋 徳川氏の京都代官（京都所司代）板倉勝重が使を飛ばせて、その旨を且元に知らせ、その供養の會を中止させた。且元は非常に驚いて曰ふには「これは右府秀頼公の御存知なさらぬことです。清韓に頼んで作らせて思ひがけなくこんな始末になつたのです。私は學問を知らぬ爲め、銘文が出來るとすぐ鑄させたのです。この責任を私は逃れることは出來ません。が只今大儀式は準備が全部出來上つて、大勢の人ゝが最早集まつてをります。今突然式を中止したならば、恐らく人民達の耳目を驚かすことになりませう。お願でございます兎も角も儀式を終へさせて下さい。式が濟んだら直ぐに銘文を削り取つて終ひます。その後に私は滿足して誅に伏しまして、聊かも悔ゆる所は有りません」と。勝重は承知しないで曰ふには「それでは呪をなし遂げることになります」と。遂に儀式を中止した。世間の樣子は何となく物騒がしかつた。且元は清韓を呼んで問うた。清韓は自分の意言を申し立てゝ服しなかつた。且元は、清韓に駿河に行つて詫びをさせ、自分も、弟の元重や大野治長と續いて駿河に行つた。前將軍は清韓を押し込め、板倉重昌に命じて京都に行かせて五山の學僧に銘文に註釋をさせた。僧は多くは前將軍の意に媚びて、銘文中に呪の意味あることを證據立てた。且元は鞠子驛まで行つたが、そこに逗留して駿府には遠慮して入らうとしなかつた。九月、命令が出て治長を歸し、且元だけを呼びつけて、

詰り問うた。且元は分疏やらお詫びやら一生懸命でやつた。

【語釋】五山（天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五寺。）○註疏（註も疏も本文の間に挿んで本文の意味を解釋したるものなるも、疏は註を足らずとして更にそれを解說したものである。十三經註疏の如し。）○鞠子（駿河）

淀君聞且元等不得見、遣其乳母大藏與尼正永赴謝。二女欲專辨銘辭、急習其句讀、且誦且行。至則召入、溫言慰藉、不復及銘辭。使往江戶省夫人淺井氏。二女大喜出意外。既還駿河、與且元皆告歸。許之。二女請答書。曰「既面諭之矣。」乃皆辭上途。有命、獨止且元、使本多正純・僧天海言之曰「將軍意終不可解。右府何以爲信、表其無他。」且元曰「願受教。」二人不答。且元曰「請赴江戶、取將軍旨。」二人入白焉。曰「將軍意亦與我同耳。汝宜歸而熟籌之。」且元遂辭去、馳及二女於土山驛。

【訓讀】淀君、且元等見るを得ずと聞き、其乳母大藏と尼正永とを遣はして赴き謝せしむ。二女專ら銘辭を辨ぜんと欲し、急に其句讀を習ひ、且つ誦し且つ行く。至れば則ち召し入れ、溫言慰藉し、復銘辭に及ばず。江戶に往いて、夫人淺井氏を省せしむ。二女大に喜んで意外に出づ。既に駿河に還り、且元と皆歸を告ぐ。之を許す。二女答書を請ふ。曰く「既に之を面諭せり」と。乃ち皆辭して途に上る。命あり、獨り且元を止め、本多正純・僧天海をして之に言はしめて曰く「將軍の意終に解く可からず。右府何を以て信と爲して、其他なきを表する」

と。勝元曰く「願はくは教を受けん」と。二人答へず。勝元曰く「請ふ江戸に赴いて將軍の旨を取らん」と。二人入つて白す。曰く「將軍の意も亦我と同じきのみ。汝宜しく歸つて之を熟籌すべし」と。勝元遂に辭し去り。馳せて二女に土山驛に及ぶ。

通釋 淀君は勝元等が前將軍に會ふことが出來ずにゐると聞いて、自分の乳母の大藏と尼の正永とを遣はして詫びさせた。この二人の婦人は銘の文句を辯解しようといふ考で一杯なので、急にその句讀を稽古し、行く途々も暗記をしながら旅をした。駿府につくと直ぐ樣召し入れて、物柔らかく勞り慰めて銘の文句のことには少しも觸れなかつた。江戸に行つて奧方淺井氏を見舞はせた。二人は大喜びで案外な思ひをした。その中に駿府に歸つて來て、勝元と共に皆で暇乞ひをした。前將軍は之を許した。二人は返事の手紙を戴きたいと請うた。すると前將軍は曰ふのに「最早や直かに會つて話したわけだから、別段文は要るまい」と。それで皆暇乞ひして出發した。所が命令が出て、勝元だけは止めて置かせ、本多正純と僧の天海をして言はせるのに「將軍（秀忠）の御心がどうしても解けない。右府殿は何を證據にされて、異心の無いことを表はすお積りか」と。勝元が曰ふには「どうぞお教へを願ひ度い」と。二人は返事をしなかつた。勝元が曰ふには「では江戸に行つて將軍の御考を承り度う存ずる」と。二人が引つ込んでその由を申上げた。すると「將軍の考も私と同じだから別に行く必要はない。お前はまあ大阪に歸つて、よく〳〵考へて見るが宜からう」といふ言葉であつた。勝元はそこで遂に駿府を辭し去り、馬を急がせて、土山驛で二人の婦人に追ひ付いた。

語釋 大藏（大野治長の母。）○正永（渡邊糺の母。）○夫人淺井氏（淺井氏は淀君の妹にて秀忠夫人。）○將軍意亦與レ我同耳（前に「將軍意終不可解」とあつて、家康の心は解けたが秀忠が承諾せぬといふことを暗に言つてゐる。それは勿論秀忠に話した家康の老獪さである。）○土山驛（近江）

二女乃悉語之以前將軍懇諭狀曰「國事莫復足慮者」且元曰「吾所聞則大異諸。前將軍逼我、以右府表信。吾揣其意、蓋有三策焉。淀君東與妹氏同居上策也。右府往依婦翁中策也。避大坂徙他下策也。三策行一、庶幾無事」二女不言。退而相言曰「前將軍豈至於此。是市正欲賣我君也」密馳書告大坂曰「且元形跡可疑」且元不之知也。使二女先還、而自入京師、與板倉勝重議事。淀君聞二女報、憤恚曰「吾雖太閤妾也、於右府爲生母。何屈辱關東哉。寧與右府枕城而死」乃欲誅且元。遂擧兵。治長・長益力贊之。

【訓讀】二女乃ち悉く之に語るに、前將軍懇諭の狀を以てして曰く「國事復慮るに足るもの莫し」と。且元曰く「吾が聞く所は則ち大に諸に異なり。前將軍我に逼るに、右府の信を表するを以てす。吾れ其意を揣るに、蓋し三策あり。淀君東して妹氏と同じく居るは上策なり。右府往いて婦翁に依るは中策なり。大坂を避けて他に徙るは下策なり。三策一を行はゞ、庶幾はくは事無からん」と。二女言はず。退いて相言つて曰く「前將軍豈に此に至らんや。是れ市正我が君を賣らんと欲するなり」と。密に書を馳せて大坂に告げて曰く「且元の形跡疑ふ可し」と。且元之を知らざるなり。二女をして先づ還らしめ、而して自ら京師に入り、板倉勝重と事を議す。淀君

二女の報を聞き、憤恚して曰く「吾れ太閤の妾なりと雖も、右府に於ては生母たり。何ぞ關東に屈辱せんや。寧ろ右府と城を枕にして死せん」と。乃ち且元を誅し遂に兵を擧げんと欲す。治長・長益力めて之を贊す。

通釋 二人の女はそこで且元に、前將軍が懇ろに諭された次第を詳しく話して曰ふには「國家の事はもう心配は要りませぬ」と。且元が曰ふには「私の聞いた所は大變それと違つてゐます。前將軍は私に右府樣が是非共證據を差出すやうにと迫られました。私はその意味を考へ申すに、三つの策が有る樣に思ひます。淀君樣が關東に行かれて、妹御の秀忠夫人と一緒に暮されるのが一番上策です。右府樣が行つて舅秀忠殿の所に居られるのは中の策です。大阪を避けて他所に移るのは下の策です。尤もこの中のどれか一つを實行すれば多分無事に相濟むことゝ思ひます」と。二人の女はそれには返事をしなかつた。兩婦人はそこを退つてから問ひ合ふのに「あんなに自分達に親切にして下された前將軍がどうしてそんな難題を吹き掛けることがありませうか。是れは市正殿が我が君を德川氏に賣る積りに違ひない」と。人知れず急書を大阪にやつてその旨を知らせて曰ふには「且元の行動には疑はしい所があります」と、且元はそんなことゝは少しも知らなかつた。この二人は先きに大阪に歸らせ、自分は京都に入つて、所司代の板倉勝重と相談をした。淀君は二人の知らせを聞いて非常に立腹して曰ふには私は太閤殿下の妾ではあるけれ共、右府殿に對しては生母である。關東などに恥かゝされてよいものか。いつそ右府殿と一緒に城を枕にして死んだ方がよい」と。そこで且元を誅して、いよ〳〵事を擧げようとした。治長と長益は熱心にそれに贊成した。

語釋 妹氏（上にある淺井氏。）○婦翁（妻の父。秀賴の夫人、千姫は秀忠の女たること前にある。）○市正（且元）

已而且元至、謁秀頼陳三策。秀頼禀之淀君。淀君使人諭且元曰「竢後日面議。」至期、且元朝服將出。會〻其臣小島某自外來告曰「淀君信讒言、猜公有貳於關東也、欲伏兵要之、遂擧大事。」且元大息曰「噫、年少輩詿誤我君、自速亡滅耳。」治長傳內旨、召之甚急。且元遂稱疾不出。治長知謀泄、恇懼曰「彼素掌管鑰、諳城內有無。卽起兵奪城、不可悔也。不若先發誅之。」乃令七隊長赴攻之。七隊長皆不肯曰「市正忠勇無比。誅之、是絶嗣君手足也。」於是、一城大擾。兵士聚片桐氏者三百餘人。治長患之、欲離間其兄弟、諭元重攻且元。元重答曰「家兄誠懷攜貳、吾將大義滅親。不必煩公等。公等忌害忠臣、又使人推刄於同氣。未能奉令也。」

訓讀 已にして且元至り、秀頼に謁して三策を陳ぶ。秀頼之を淀君に禀す。淀君人をして且元に諭さしめて曰く「後日を竢つて面議せん」と。期に至り、且元朝服して將に出でんとす。會〻其臣小島某外より來り告げて曰く「淀君讒言を信じ、公の關東に貳ありと猜ひ、兵を伏せて之を要し、遂に大事を擧げんと欲す」と。且元大息して曰く「噫、年少輩我が君を詿誤し、自ら亡滅を速くのみ」と。治長內旨を傳へ、之を召すこと甚だ急なり。且元遂に疾と稱して出でず。治長謀泄れしを知り、恇懼して曰く「彼れ素より管鑰を掌り、城內の有無を諳んず。

卽し兵を起して城を奪はゞ、悔ゆ可からざる　り。先づ發して之を誅するに若かず」と。乃ち七隊長をして之を赴き攻めしむ。七隊長皆肯んぜずして曰く「市正忠勇無比。之を誅するは、是れ嗣君の手足を絕つなり」と。是に於て、一城大に擾る。兵士片桐氏に聚る者三百餘人。治長之を患ひ、其の兄弟を離間せんと欲し、元重を諭して且元を攻めしむ。元重答へて曰く「家兄誠に攜貳を懷かば吾れ將に大義親を滅せんとす。必ずしも公等を煩はさず。公等忠臣を忌害し、又人をして刄を同氣に推さしむ。未だ令を奉ずる能はざるなり」と。

通釋 その內に且元も到着して秀賴に目通りをして三つの策を述べた。秀賴はそれを淀君に申し上げた。淀君は人をやつて且元に諭させるには「何れ後日になつて面談しよう」と。その定めの日になつて且元が禮服を着けて出かけようとした。丁度其處へ家來の小島某が外から歸つて來て知らせて曰ふには「淀君樣は讒言をお取上げになり、殿が關東に二心を抱いてゐると疑つてゐられます。それで伏兵をして殿を待ちかまへ、殿を襲つて、その勢で大事を起さうとしてゐられます」と。且元は大息して曰ふのに「あゝ、若い者共が我が君を欺き誤り奉つて、我れと我が自ら滅亡を急ぐのだ」と。治長は淀君の內命を傳へて、非常に嚴しく彼を召した。且元は病氣だと言つて遂に出なかつた。治長は謀の發覺したいを知り、痛く恐怖の念に驅られて曰ふには「彼は元々鍵を預つてゐて、城內の案內をよく知つてゐる。もし彼が兵を起して城を奪はれたら後悔しても追つ付かぬ。何より先きに彼を誅して終ふが宜い」と。そこで七隊長に且元を攻めさせようとした。所が七隊長は何れも承知せずして曰ふには「市正は忠勇雙ひなき大將である。彼を殺すのは世繼の君の手足を絕つに等しい」と。さういふわけで城中は大變な騷ぎになつた。兵士の中で片桐の方へ集まる者が三百餘人になつた。治長は大に心配し、その兄弟を仲違ひさせ樣と思つて、弟の元重に且元を攻めさせた。元重が答へて曰ふには「家の兄貴が本當に謀叛心

を抱いたなら、私はその時こそ大義の上から、骨肉の親を滅することも辭さない。何も貴公等のお指圖を待ちません。一體貴公等は忠臣を目の仇にして兄弟に刄を向けさせようとしてゐるのだ。到底御命令に從ふことは出來ぬ」と。

秀頼近臣今木某、潛來說且元曰「內城八門、公管其六。今夜潛兵奪城、逐治長兄弟、而請命於關東。關東猶不釋、則翼我君擧兵耳。願公速斷之」。且元顰蹙曰「吾特欲待讒人來攻而自殺也。苟如公所言、則長被反名矣」。因令部下曰「卽及於戰、勿使矢嚮內城」。明日七隊長諭且元、納質弭兵、退就其邑。且元從之。十月朔、與治長交質、盡獻城門管鑰、致事而去。七隊長送至大和川上、還質訣飲。且元曰「吾苦心運籌、欲利豐臣氏。吾上策而見聽、吾則請地築第于江戶之郊、故宏其規模、以延數年。我君未壯、而前將軍大耋。吾策不亦善乎。區區之心、未遑盡明。乃卒至於此」。因相鄕泣哭、顧望而別。且元遂歸其邑茨城。遠近騷擾。

訓讀 秀頼の近臣今木某、潛に來り且元に說いて曰く「內城八門、公其六を管す。今夜、兵を潛めて城を奪ひ、治長兄弟を逐つて、命を關東に請へ。關東猶ほ釋さずば、則ち我が君を翼けて兵を擧げんのみ。願はくは公

速に之を斷ぜよ」と。且元、顰蹙して曰く「吾れ特讒人の來り攻むるを待つて自殺せんと欲するなり。苟も公の言ふ所の如くば、則ち長く叛名を被らん」と。因つて部下に令して曰く「卽し戰に及ぶも、矢をして內城に嚮はしむる勿れ」と。明日七隊長且元に諭し、質を納れ兵を弭め、退いて其の邑に就かしむ。且元之に從ふ。十月朔治長と質を交へ、盡く城門の管鑰を獻じ、事を致して去る。七隊長送つて大和川の上に至り、質を還して訣飮す。且元曰く「吾れ心を苦しめて籌を運し、豐臣氏を利せんと欲す。吾が上策にして聽かるれば、吾れ則ち地を請ひ第を江戸の郊に築き、故に其の規模を宏にして以て數年を延べん。我が君は未だ壯ならず。而して前將軍は大に耋す。吾が策亦善からずや。區區の心、未だ盡く明すに遑あらず。乃ち卒に此に至る」と。因つて相鄕ひて泣哭し、顧望して別る。且元遂に其の邑茨城に歸る。遠近騷擾す。

【通釋】秀頼の近臣の今木某が、こつそりと且元の所に來て話すには「本丸の八門の中、六門は貴公が取締つて居られます。今夜そつと兵を率ゐて城を奪ひ取り、治長兄弟を追ひ拂ひ、關東に命令をお仰ぎなさい。それでも關東が許さなかつたなら、我が君を助けて兵を擧げたら宜いのです。どうぞ直ぐ樣御決斷下さい」と。且元は不機嫌に顏をしかめて曰ふには「私は只、奸佞の徒が攻めて來るのを待つて自殺を遂げようと思つてゐるのだ。假りにも貴公の言はるゝやうなことをすれば、何時の世までも謀叛人の名を受けることになる」と。そこで部下に命じて曰ふには「もし戰が起つても、本丸に矢を向けてはならぬ」と。翌日、七隊長は且元に向つて、人質を差し出し兵を解散し、その領地に退き去る樣に諭した。且元はそれに從つた。十月一日、治長と人質を交へ、城門の鍵を全部差し出し、事務をすつかり引き繼いで去つた。七隊長は大和川の邊まで送つて行き、人質を戻して別れの酒盛をした。且元が曰ふには「自分は非常に苦心をし計略を運らし、豐臣家に利益有らしめようとした。私

の上策が關東に承諾されたら、私は願ひ出て江戸の郊外に土地を貰つて邸を建て、わざと家の規模を大きくして、工事に數年もかゝるやうにする積りだつた。我が君はまだ壯年（三十歳）にも達せられてゐない。前將軍はもう非常に年を取つてゐる。私の策を善いとは思はれぬか。色々と詰らぬことも考へたが、すつかり打明ける暇も無い中に、とう〳〵こんなことになつてしまつた」と。そこで向き合つて涙を下し、ふり返り〳〵別れて行つた。且元はかくして自分の領地茨城に歸つたが、遠近の者共はその爲めに大分ざわついた。

〔語釋〕耋（八十を耋といふ。こゝはたゞ老の意。）○不亦善乎（表面東行といふことにして、大袈裟な工事建築で手間取らせ、愚圖々々してゐる内に家康が死ぬる。すると群諸侯は皆こちらに集中するやうになる。といふ考へで亦善からずやと言つたのである。）

前將軍遂下令天下、共攻大坂。秀頼會諸將議拒守。先是、七隊長更候駿河。治長等疑之、頗收其兵。隊長皆怨望。於是、不出參其議。速水守久和解之。乃出。治長建議曰、「宜急擧事。天下比年、苦土木。擧皆思亂。至西諸侯、概皆浴先君恩澤。誰不來援者」。遂買城下及界浦漕粟、及火藥、移檄四方。關原敗後、潛匿所在者、若諸國獲罪亡命者、爭先來聚。眞田幸村自高野、長曾我部盛親自京師、後藤基次自南都、森勝永自土佐、其餘内藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川

賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人。治長以竹範鎔金馬、以募兵。飢寒之士僞姓名應募、旬日得五萬。而有土將士無一人應者。

訓讀　前將軍遂に令を天下に下し、共に大坂を攻む。秀賴諸將を會して拒守を議す。是より先き、七隊長更〻駿河に候す。治長等之を疑ひ、頗る其の兵を收む。隊長皆怨望す。是に於て、出でゝ其の議に參せず。速水守久之を和解す。乃ち出づ。治長建議して曰く「宜しく急に事を擧ぐべし。天下比年、土木に苦しみ、擧つて皆亂を思ふ。西諸侯に至つては、槪ね皆先君の恩澤に浴す。誰か來り援けざる者ぞ」と。遂に城下及び界浦の漕粟、及び火藥を買ひ、檄を四方に移す。關原の敗後、所在に潛匿する者、若しくは諸國の罪を獲て亡命せる者、先を爭うて來り聚る。眞田幸村は高野より、長曾我部盛親は京師より、後藤基次は南都より、森勝永は土佐より、其の餘內藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人なり。治長、竹範を以て金馬を鎔し、以て兵を募る。飢寒の士姓名を僞つて募に應じ、旬日に五萬を得たり。而して有土の將士は一人の應ずる者なし。

通釋　前將軍は遂に天下に命令を下して、共に大阪を攻めることになつた。秀賴は諸將を集めて防禦の方法を相談した。それより以前、七隊長は更代に駿河に御機嫌伺ひに出懸けてゐた。治長等は何か有るのではないかと疑つて、其の部下の兵をかなり減らして終つた。その爲めに隊長達は皆怨んでゐた。前將軍が攻めることゝなつても、七隊長はその相談に關係しなかつた。速水守久が間に立つて之を和解した。そこで漸く出て來た。治長が建議して曰ふには「早速兵を擧げるのが宜いと思ふ。此の頃は全國とも毎年色々の工事で難儀をしてゐて、皆亂

の起ることを希望してゐる。西國諸大名達は大抵先君の恩惠を蒙つてゐる。一人として助けに參らぬ者は無からう」と。そこで大阪城下及び界港にある米と火藥を買ひ上げ、檄文を四方に飛ばせた。關原の戰敗後、方々に潛み隱れてゐた者や、諸國の罪の爲め逃亡してゐた者共が我れ先きにと集まつて來た。眞田幸村は高野から、長曾我部盛親は京都から、後藤基次は南部から、森勝永は土佐から、その他内藤政勝・小倉行春・明石守重・御宿政友・塙直次・仙石宗也・岡部則綱・山川賢信・長岡興秋・北川宣勝等數百人に上つた。治長は竹の鑄型で例の金の馬を鎔かして、お金となし、それで兵を募つた。衣食に苦しんでゐる貧乏武士共が、姓名を僞つて之に應じて來た。十日間に五萬人にもなつた。而も領土を持つてゐる武將で募に應じたものは一人もなかつた。

【語釋】漕粟（舟によつて運漕し來れるもみごめの意。）○竹範（竹を型に爲し、之に金をとかし込み、竹ながしの金といふ。）

秀頼手書招諸國主。前田氏以下皆縛使者、以其書獻徳川氏。治長等意大沮。而事不可中止。乃颺言曰「諸侯伯、皆陰通款於我矣。東軍來夾而擊之耳」。遂修守備。壘高丈餘、十歩一樓、北帶淀川、柵于長柄・神崎二島、東控大和・木津二川、鴫野・今福以南至於鷺島、皆臨汗田爲壁、西據横港、連砦于川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓・諸處、列艦于海口、南穿空壕、交錯材木於壕內、以沮敵馳驅。七隊長曰「寨不可廣。廣則難守。況以一城抗天下、曠日持久。而驅市人糜糧食、毋爲也」。治長不聽。

訓読 秀頼手書して諸國主を招く。前田氏以下皆使者を縛し、其の書を以て徳川氏に獻ず。治長等意大に沮む。而れども事中止すべからず。乃ち颺言して曰く「諸侯伯、皆陰に欵を我に通ず。東軍來らば夾んで之を撃たんのみ」と。遂に守備を修む。壘の高さ丈餘、十歩に一樓、北は淀川を帯びて、長柄・神崎の二島に柵し、東は大和・木津の二川を控へ、鴫野・今福以南、鷺島に至るまで、皆汙田に臨んで壁を爲り、西は横港に據り、砦を川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓の諸處に連ね、艦を海口に列ね、南は空壕を穿ち、材木を壕內に交錯して、以て敵の馳驅を沮む。七隊長曰く「寨は廣くすべからず。廣ければ則ち守り難し。況んや一城を以て天下に抗し、日を曠しうして久しきを持するをや。而して市人を驅つて糧食を糜することは、爲す毋れ」と。治長聽かず。

通釋 秀頼は自筆の手紙を作つて、諸大名を招いた。前田氏以下、その手紙を貰つた者は皆その使者を縛り、其の手紙を徳川氏に差し出した。治長等は大に意氣沮喪した。けれども今更ら中止も出來なかつた。言ひ觸らして曰ふには「諸大名は皆、私かに我が軍に内通してゐる。東軍がやつて來たら夾み撃ちにして終ふ迄だ」と。いよ〳〵防禦準備を始めた。城中の壘の高さは一丈餘で、十間毎に櫓を一つの割で造つた。北は淀川を中に取つて長柄・神崎の二島に柵をめぐらし、東は大和川と木津川を控へて、鴫野・今福以南、鷺島まで、皆低田に臨んで壘壁を造り、西は横港を據り處にして、川場・博勞淵・葦島・福島・穢多・道頓の諸所に砦を連結し、船を港口に泣べ、南は空壕を掘り、材木をその濠の中に縦横に投げ込んで、敵の騎兵が馳せ廻ることのできぬやうにした。七隊長が曰ふには「とりでといふものは廣くすべきものでない。廣いといふと守り難いものです。ましてたつた一城で天下に對抗し、長い間持ちこたへて行かうといふのですもの。そして此の上町人まで追ひ使つて糧食

を無駄使ひするのは止した方がよいです」と。治長はきゝ入れなかつた。

語釋 其書（秀頼の手紙。）〇汙田（汙は低き意である。川に沿ひたる低き田である。）〇靡（無駄にすること。）

眞田幸村不喜受人約束。乃別築偃月城于玉造皐、開東西二門、募信濃遺民、得百五十人。秀頼又附以伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人守之。幸村因獻策曰、「臣聞、德川氏檄天下兵、以來攻我。我坐竢之、無他奇道。度關東・北國之兵、强半未至。宜以此時出大旆于天王寺、以勝永與臣爲先鋒、赴于山崎、使盛親・基次出大和路、扼宇治橋、攻拔伏見、縱火京師、以大關天下之衢路。則西國諸侯必有來屬者。是一奇也。」基次曰、「計雖善矣、非萬全者。本城壯固無匹。雖受天下兵、可支三五年。如此則敵必有內變。諸侯被先世恩者、必歸款於我。何必遠出。」衆然之。

訓讀 眞田幸村人の約束を受くるを喜ばず。乃ち別に偃月城を玉造の皐に築き、東西二門を開き、信濃の遺民を募つて百五十人を得たり。秀頼又附するに伊木遠・雄山川賢信・北川宣勝等五千人を以て之を守らしむ。幸村因つて策を獻じて曰く「臣聞く、德川氏天下の兵に檄して以て來り我を攻む。我れ坐して之を竢ち、他の奇道なし。度るに關東・北國の兵、强半未だ至らず、宜しく此の時を以て、大旆を天王寺に出し、勝永と臣とを以て先

鋒と爲して山崎に赴かしめ、盛親・基次をして大和路に出で、宇治橋を扼し、攻めて伏見を拔き、火を京師に縱ち、以て大に天下の衢路を閼さしむべし。則ち西國の諸侯必ず來り屬する者あらん。是れ一奇なり」と。基次曰く「謀善しと雖も、萬全の者に非ず。本城は壯固匹なし。天下の兵を受くと雖も、三五年を支ふべし。此の如くば則ち敵必ず内變あらん。諸侯、先世の恩を被る者、必ず欵を我に歸せん。何ぞ必ずしも遠く出でん」と。衆之を然りとす。

【通釋】眞田幸村は人に指圖されることを好まなかつた。以上の他別に玉造阜に出丸を築き、東西二門を開いて領國信濃の殘黨を募つて百五十人を得た。秀賴はそれに、伊木遠雄・山川賢信・北川宣勝等五千人をつけてそこを守らせた。幸村はそこで一策を上つて曰ふには「私は德川氏が全國の兵に檄文を廻して我が軍を攻めに來ると聞いてをります。然るにこつちはじつとそれを待つてゐて、別に妙計もありません。私が考へました所では、關東・北國の兵は大半まだ到着致しますまい。是非今の中に天王寺まで若君御自身打つて出られ、勝永と私とを先鋒にして山崎におやり下さい。盛親と基次をして大和路に出て宇治橋を抑へ、伏見を攻め落し、京都に火をつけて天下の要路を堰き止めさせるが宜しうございます。さうすれば西國の諸大名の中にはきつと我が軍に味方して來る者がありませう。これは一寸面白いと思ひます」と。基次が曰ふには「計略は中々善いが萬間違ひないといふ策ではない。本城の規模の大きく堅固なことは他に比較すべきものがありませぬ。全國の兵を引き受けても三年五年を支へることは出來ます。かく長い間支へてをる中には、敵方に必らず内輪の變事が起つて來ます。すれば諸大名中、先君の御恩を蒙つてゐる者は必ず味方について參りませう。何もそんなにして遠方まで討つて出ることはない」と。一同はそれに贊成をした。

語釋　偃月城（弦月の形をした城・出丸。呉の孫權が須濡塢を造り、一名を偃月塢といつた。形偃す月の如き故であるといふ。）

前將軍・將軍率諸侯伯相繼西上。獨留福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衞友于江戶、不許從軍。正則潛應大坂需、自其封安藝輸粟五萬石。其二姪正守・正鎮、皆入城守。以故最見疑。竹中重信受命自駿河赴江戶、諭旨正則。正則因以書諫秀賴曰「郎君因事忤關東旨、遂動兵馬。是自速亡滅也。願改其圖、奉淀君于關東、以計無事。不則老奴爲東軍先鋒、一舉拔城。君其勿悔。豐臣氏安危將決於此。願熟計之。」前將軍途覽其書、遂不許從。秀賴得書亦無所答。重信復受命赴安藝、使正則子正勝治兵會師。正則遙戒其老福島丹波・尾關石見曰「汝輩輔我兒以應郎君。莫以我爲也。郎君而成事、吾死不恨。不然則吾何以見太閤地下哉。」丹波欲從命。石見爭之曰「吾儕之於主公、猶主公之於右府也。吾儕何可禍主公哉。」遂擁正勝會東軍。蜂須賀家政既老。首迎謁東軍。

訓讀　前將軍・將軍、諸侯伯を率ゐて相繼いで西上す。獨り福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衞

友を江戸に留め、軍に從ふを許さず。正則潛かに大坂の需に應じ、其の封安藝より粟五萬石を輸す。其の二姪正守・正鎭、皆入つて城守す。故を以て最も疑はる。竹中重信命を受けて駿河より江戸に赴き、旨を正則に諭す。正則因つて書を以て秀頼を諫めて曰く「郎君、事に因つて關東の旨に忤ひ、遂に兵馬を動す。是れ自ら亡滅を速くなり。願はくは其の圖を改め、淀君を關東に奉じ以て無事を計れ。不らざれば則ち老奴、東軍の先鋒と爲り、一擧城を拔かん。君其れ悔ゆる勿れ。豐臣氏の安危、將に此に決せんとす。願はくは之を熟計せよ」と。前將軍途に其の書を覽るも、遂に從ふを許さず。秀頼書を得て亦答ふる所なし。重信復命を受けて安藝に赴き、正則の子正勝をして、兵を治めて師に會せしむ。正則遂に其の老福島丹波・尾關石見を戒めて曰く「汝が輩、我が兒を輔けて以て郎君に應ぜよ。我を以て爲す莫れ。郎君にして事を爲さば、吾れ死すとも恨みず。然らずんば則ち吾れ何を以て太閤に地下に見えんや」と。丹波命に從はんと欲す。石見之を爭うて曰く「吾が儕の主公に於ける、猶ほ主公の右府に於けるが如し。吾が儕何ぞ主公に禍すべけんや」と。遂に正勝を擁して東軍に會す。

蜂須賀家政既に老す。首として東軍に迎謁す。

通釋　前將軍・將軍は諸大名を率ゐて次ぎ〳〵と西上した。福島正則・黑田長政・加藤嘉明・平野長泰・谷衞友の五人だけは江戸に殘して置いて從軍することを許さなかつた。正則はひそかに大阪の要求に應じ、自分の領地安藝からもみ米五萬石を送つた。又二人の姪の正守と正鎭とが共に大阪に入城して守備についた。そんな譯で一番疑はれてゐた。竹中重友は命を受けて駿河から江戸に出向き、內命を傳へた。そこで正則は手紙を書いて秀頼を諫めて曰ふには「若君は此の度の事から關東の意向に逆ひ、遂に軍隊を動かさるゝことになりましたのは、御自分から滅亡を招くやうなもので御座います。どうぞそのお考へを改められ、淀君樣を關東にお移しゝて無事

を計られまするやう　然らざれば老奴は東軍の先鋒となつて、一息に大阪を攻め落しまするぞ。その時に後悔遊ばされざるやう願ひます。豐臣の安泰危難は此の際、お考へ一つによつて定まるのであります。どうぞよく〳〵お考へ召されよ」と。前將軍は西上の途中にその手紙を讀んだが、やはり從軍を許さなかつた。秀賴もその手紙を見て返事をやらなかつた。重信はまた命を受けて安藝に出向き、正則の子の正勝に、軍隊を纏めて大阪征伐の關東軍に加はらせようとした。正則は江戸から遙々家老の福島丹波と尾關石見に注意を與へて曰ふには「お前達は我が子を助けて、若君に味方せよ。私の眞似をしてぐづ〳〵してゐてはならぬ。若君がもしも成功遊ばされたる曉には　私はたとひ死んでも恨みはない。然らずんば私はどの顏をして太閤殿下に冥途でお目にかゝらうか」と。丹波はその命に從はうとした。石見はそれを爭つて曰ふには「我々が殿樣に對する態度は、殿樣が右府公に對する態度と同じであるべきである。我々はどうして主家に禍のかゝる樣な取計ひをしてよからうか」と。到頭正勝を守つて東軍に味方した。蜂須賀家政はこの時にはもう隱居してゐた。併し眞つ先に東軍を迎へて德川氏に謁した。

片桐且元嘗託其貲于界浦人宗薰。宗薰告城兵來掠界浦。且元乃遣兵二百援之。至尼崎城索舟。尼崎人疑而不許。大坂兵出擊且元。城兵亦不援。且元退守神崎。士民聞其叛大坂也、爭起要之、與城兵合擊遂鏖其兵。且元僅免。於是、前將軍至京師、召見之。且元辭曰「臣計輯和、乃開大隙。何以見爲」前將軍曰「兵起非汝罪。宜亟來此、

更ニ爲ス二後圖ヲ一。

訓讀　片桐且元嘗て其の貲を界浦の人宗薫に託す。宗薫、城兵來つて界浦を掠むと告ぐ。且元乃ち兵二百を遣はして之を援く。尼崎城に至り舟を索む。尼崎の人疑つて許さず。大坂の兵出でゝ且元を撃つ。城兵亦援けず。且元退いて神崎を守る。士民其の大坂に叛すと聞くや、爭ひ起つて之を要し、城兵と合撃して遂に其の兵を鏖にす。且元僅に免る。是に於て、前將軍京師に至り、之を召見す。且元辭して曰く「臣輯和を計り、乃ち大隙を開く。何を以て見ゆるを爲さん」と。前將軍曰く「兵起るは汝が罪に非ず。宜しく亟に此に來り、更に後圖を爲すべし」と。

通釋　片桐且元は前に自分の財産を界港の宗薫といふ人に預けておいた。その宗薫が、大阪城の兵が界港を荒しに來たと知らせた。且元は兵を二百人やつて宗薫を助けさせることにした。尼崎城まで行つて舟を索めた。尼崎の人は疑つて許さなかつた。所へ大阪の兵が來て且元を攻めた。尼崎城の兵は助けなかつた。且元は退いて神崎を守つた。士民は彼が大阪方に叛いたと聞いて、我も我もとやつて來て待ち受け、城兵と合せ撃つて遂に且元の兵を皆殺しにした。且元は辛うじて免れた。この時に前將軍は京都につき且元を召しよせた。且元は辭退して曰ふには「私は和解を骨折つて、ひどい仲違ひを出來して終ひました。今更お會ひする面目もありません」と。前將軍が曰ふには「今度の戰はお前の責任ではない。とに角早速こゝに來て、後々の策を立てるが宜しからう」と。

語釋　輯和（やはらぎあつむ。）

藤堂高虎爲東軍先鋒、來陣住吉。郡良列窺其孤軍、欲襲之。議不諧而止。良列又欲遣間諜縱火兩將軍營。亦不用。東軍患二島難濟、塞其上流。城兵出爭之。不克。十一月、池田氏兵自神崎濟。城兵出距。不利。幸村・基次等建議曰「將軍不日至天王寺。及其未陣襲之必克」治長曰「是可用之小戰。今與天下戰。始合失利、不可復振。不若致之堅城下而挫其鋒也」幸村等曰「以寡擊衆。自非出奇、何得勝乎」良列亦勸之。終弗聽。已而東軍悉至、列營四外。大凡五十萬許。治長發間使、誘舊屬諸將。諸將皆捕其使、獻之前將軍。

訓讀 藤堂高虎東軍の先鋒と爲り、來つて住吉に陣す。郡良列其の孤軍を窺ひ、之を襲はんと欲す。議諧はずして止む。良列、又間諜を遣はし、火を兩將軍の營に縱たんと欲す。亦用ひられず。東軍、二島の濟り難きを患へ、其の上流を塞ぐ。城兵出でゝ之を爭ふ。克たず。十一月、池田氏の兵神崎より濟る。城兵出で距ぐ。利あらず。幸村・基次等建議して曰く「將軍不日、天王寺に至らん。其の未だ陣せざるに及んで之を襲はゞ必ず克たん」と。治長曰く「是れ之を小戰に用ふべし。今天下と戰ふ。始め合せて利を失はゞ、復振ふべからず。之を堅城の下に致して其の鋒を挫くに若かざるなり」と。幸村等曰く「寡を以て衆を擊つ。奇を出すに非ざるよりは、何ぞ勝

を得んや」と。良列も亦之を勸む。終に聽かず。已にして東軍悉く至り、營を四外に列す。大凡五十萬許り。治長間使を發して舊屬の諸將を誘ふ。諸將、皆其の使を捕へ、之を前將軍に獻ず。

通釋 藤堂高虎は東軍の先鋒として、住吉に來て陣取つた。郡良列はその獨立部隊であること知つて襲はんとした。併し相談が纏まらないで止めた。良列は又忍びの者をやつて前將軍と將軍の陣屋に火をつけさせようとした。この謀も用ひられなかつた。東軍は長柄・神崎の二島へ川を渡つて上ることは中々困難だと考へて、淀川の上流を堰きとめた。城兵は出て行つてさうさせまいと爭つたが打ち負かすことが出來なかつた。十一月、池田氏の兵が神崎の方から川を渡つた。城兵は出て防いだ。併し敗れた。幸村・基次等が建議していふには「將軍がその內に天王寺にやつて來る。その軍隊がまだ陣を整備しない中に襲つたら、必ず捷を得ることができるだらう」と。治長が曰ふには「さういふやり方は小規模な戰爭には好い。今は天下を相手にしてゐるのだ。始めの合戰で負けると、後いつまでもそれが祟つて軍勢が振はなくなるものだ。敵を要害堅固なこの大阪城の下までおびき寄せて、その鋭鋒を挫くのが最もよいと思ふ」と。幸村等が曰ふには「小勢で多勢を擊つのです。奇計を考へ出さなくてはとても勝は難しいでせう」と。良列もそれを勸めた。治長はどうしても承知しなかつた。その內に東軍は全部到著して、四方に陣屋を並べた。全軍凡そ五十萬許りである。治長は祕密の使者を出して、前に豐臣方であつた諸將を誘つた。彼等は皆その使者を捕へて、前將軍に差出した。

語釋 二島（長柄、神崎。）〇四外（四方の城外。）

前將軍遣ハシテ書ヲ城內ニ使ムレ請ハレ和ヲ。不レ肯ンゼ。幸村ノ叔父信尹、從ツテ在リ東軍ニ。前將軍使下ムチ之ヲシテ入リテ諭シテ幸村ニ降ラ上

之。幸村答曰「關原之役、臣父子屬西軍、以寡兵抗大師、及敗遁逃、伏匿山野。右府不以臣陋劣、授臣以數千兵、使將一面。是知臣也。士爲知己者死。臣死不能負焉」信尹復命。再遣說之曰「苟降則封以信濃地、世世毋絶」幸村曰「爲我謝前將軍。臣一死報右府、不知其他。有如東西弭兵、臣當寄食叔父耳。不然則雖受日本之半、而不能奉命矣。願叔父勿復來也」

訓讀 前將軍、書を城内に遣はし、和を請はしむ。肯んぜず。幸村の叔父信尹從つて東軍に在り。前將軍之をして入つて幸村を諭して之を降さしむ。幸村答へて曰く「關原の役に臣が父子西軍に屬し、寡兵を以て大師に抗し敗るゝに及んで遁逃し、山野に伏匿せり。右府、臣の陋劣を以てせず、臣に授くるに數千の兵を以てし、一面に將たらしむ 是れ臣を知るなり。士は己を知るもの〻爲めに死す。臣死すとも負く能はず」と。信尹復命す。再び遣はして之に說かしめて曰く「苟も降らば則ち封ずるに信濃の地を以てし、世世絶つ毋からん」と。幸村曰く「我が爲に前將軍に謝せよ。臣、一死右府に報ず。其の他を知らず。東西、兵を弭むるが如きことあらば、臣當に叔父に寄食すべきのみ。然らずんば則ち日本の半を受くと雖も、而も命を奉ずる能はず。願はくは叔父、復た來る勿れと」。

通釋 前將軍は城内に手紙をやつて、和睦を願ひ出る樣にと言つた。併し承諾しなかつた。幸村の叔父の信尹

は、東軍に從つてゐた。前將軍は彼に城内に行つて幸村に降參するやうにと諭させた。幸村は答へて曰ふのに「關原の役に私父子は西軍に味方し、小勢の兵力で大軍に抵抗しましたが戰に敗けてからは逃げ出して邊鄙な在所に隱れてをりました。所が此の度、右府殿は私の愚かしき力量をも顧みず、數千の兵をお預け下され、一方の大將と爲されました。これは全く私をよく諒解して下さる爲めであります。武士は己を知つてくれる人の爲めに命を棄てるといふことであります。私はたとひ死んでも、右府殿に反くことは出來ませぬ」と。信尹はその通り報告した。前將軍は再び信尹を城中にやつて曰はせるには「只降參しさへすれば、信濃の國を領地と爲し、代々斷絕せぬ樣に取計つてやり度いが」と。幸村が曰ふには「私の代りに前將軍に禮を述べて下され。私は一死を捨てゝ右府殿の恩に報いる許りです。その外のことは存じませぬ。東西兩軍が戰爭を罷めた曉には、私は叔父上の食客になるばつかりです。戰爭が續く以上、日本の半分を頂戴しても仰せに從ふことはできません。どうぞ叔父さんはもうお出なさらぬやうに」と。

前將軍與木村重成父重茲有故。又招降之。重成不應。薄田兼相守穢多崎、蜂須賀至鎭來攻之。兼相飲於倡家。其兵留守、不支而走。兼相深以爲恥。已而鴫野柵爲上杉景勝所破、今福柵爲佐竹義宣所破。木村重成聞急、單騎出拒義宣。渡部尙與七隊長出拒景勝。秀頼自城樓望見之、顧基次往援重成。基次卽起。從士取鎧及之京橋。擐而馳。謂重成曰「公勞矣。僕請代之」。重成曰「事方殷。代將則陣亂。公老於兵者、何

爲是言也」基次乃陣其後、泛舟澤中、排楯放銃、橫擊義宣陣。重成因大破之、斃其老澁江正光。尚等亦擊破景勝前軍、竟不利退。重成・基次亦收兵。基次中丸、傷其左肋。捫之曰「吾創不至死。右府命厚矣」已而以柵難守、棄而入城。

訓譯 前將軍、木村重成の父重茲と故あり。又之を招降す。重成應ぜず。薄田兼相、穢多崎を守る。蜂須賀至鎭來つて之を攻む。兼相 倡家に飮す。其の兵留守し、支へずして走る。兼相深く以て恥と爲す。已にして鴫野の柵上杉景勝の破る所と爲り、今福の柵佐竹義宣の破る所と爲る。木村重成急を聞き、單騎出でゝ義宣を拒ぐ。渡部尙・七隊長と出でゝ景勝を拒ぐ。秀賴、城樓より之を望見し、基次を顧み、往いて重成を援けしむ。基次卽ち起つ。從士鎧を取り、之に京橋に及ぶ。擐して馳す。重成に謂つて曰く「公勞せり。僕請ふ之に代らん」と。重成曰く「事 方に殷なり。將を代ふれば則ち陣亂る。公は兵に老いたるもの 何ぞ是の言を爲すや」と。基次乃ち其後に陣し、舟を澤中に泛べ、楯を排して銃を放ち、橫に義宣の陣を擊つ。重成因つて大に之を破り、其老澁江正光を斃す。尙等も亦、景勝の前軍を擊破し、竟に利あらずして退く。重成・基次も亦兵を收む。基次丸に中り、其左肋を傷く。之を捫して曰く「吾が創死に至らず。右府の命厚し」と。已にして柵守り難きを以て、棄てゝ城に入る。

通釋 前將軍は木村重成の父重茲と友人關係であつた。重成をも招き降さうとした。重成は應じなかつた。薄田兼相は穢多崎を守つてゐた。蜂須賀至鎭が攻めて來た。丁度兼相は女郎屋で酒を飮んでゐた。部下の兵隊が守

つてゐたが、防き止められないで逃げ走つた。兼相は深くそれを恥ぢた。その内に鴫野の柵は上杉景勝に破られ、今福の柵は佐竹義宣に破られた。木村重成は今福の危急の知らせに、唯一騎走り出て義宣を防いだ。鴫野の方は渡部尙が七隊長と共に出張つて景勝を防いだ。秀頼は城の櫓からそれを打ち眺め、基次を振り返つて重成を援けに行くやうにと言つた。基次は卽坐に立ち上つて出かけた。從卒は鐙を持つて後追ひかけ、京橋で追ひついた。基次はそれを着けて馬を走らせた。重成に向つて曰ふには「貴公は疲れてをる。どうか僕に代らせてくれ」と。重成が曰ふには「今丁度眞最中だ。大將を代へると陣形が亂れる。貴公は戰略に長けた方であるのに、何故左樣なことを言はれる」と。基次はそこで後方に陣を構へ、沼の中に舟を出し、楯を竝べてその間から鐵砲を放し、側面から義宣の陣を擊つた。その援護射擊のお蔭で重成は大に敵を打ち破り、佐竹の家老の澁江正光を討ち取つた。尙等も景勝の前衞隊を擊破したが、到頭戰敗れて退却した。重成・基次も兵を引き纏めた。基次は銃丸に當り、その左肋を負傷した。その傷所を押へて曰ふには「この傷では死なずに濟んだ。右府殿の御運は強くあらせられる」と。その内にこれらの柵は守り難くなつたので、何れも放棄して城中に引き揚げた。

語釋　京橋（城北の備前島に架してある橋。）

片桐且元入軍備前島。而葦島・博勞淵、前後皆陷。池田・淺野・蜂須賀諸將自西北進。七隊長曰「吾輩固曰、廣者難守。適以增敵氣耳。宜棄天滿・川場・道頓港三寨、約之内城。治房以萬人守道頓港、獨不肯。卽夜諸將託軍議召之、遣基次等燒諸壘寨。治房、

部下驚走入城。基次伏死士誡曰「備前之軍其將年少氣鋭。必來於此。汝輩突起取之。」池田忠繼在福島望火、果欲馳入川場。其將花房職之曰「後藤多謀。必有伏也。」乃止。伏兵徒歸。基次曰「花房未死乎。」十二月、東軍入三寨。卽夜大野治長第失火。東軍意城兵有內應者、自京橋口進。城兵堅拒卻之。

【訓讀】片桐且元入つて備前島に軍す。而して葦島・博勞淵、前後皆陷る。池田・淺野・蜂須賀の諸將西北より進む。七隊長曰く「吾が輩固より曰く、廣ければ守り難しと。適〻以て敵の氣を增すのみ。宜しく天滿・川場・道頓堀の三寨を棄てゝ、之を內城に約すべし」と。治房・萬人を以て道頓堀を守り、獨り肯んぜず。卽夜諸將、軍議に託して之を召し、基次等を遣はして諸壘寨を燒かしむ。治房の部下、驚き走つて城に入る。基次死士を伏せ誡めて曰く「備前の軍、其の將年少く氣鋭し。必ず此に來らん。汝が輩突起して之を取れ」と。池田忠繼福島に在つて火を望み、果して馳せて川場に入らんと欲す。其の將花房職之曰く「後藤謀多し。必ず伏あらん」と。乃ち止む。伏兵徒に歸る。基次曰く「花房未だ死せざる乎」と。十二月、東軍三寨に入る。卽夜大野治長の第、火を失す。東軍、城兵に內應する者ありと意ひ、京橋口より進む。城兵堅く拒いで之を卻く。

【通釋】片桐且元は入つて備前島に陣取つた。そして葦島・博勞淵は前後して陷落した。池田・淺野・蜂須賀の諸將は西北から進んで行つた。七隊長が曰ふには「我々は前々から、守備區域が廣いと守り難いと言つてゐたのだ。やゝもすれば敵の元氣を增させる樣になるだけだ。こゝは一つ天滿・川場・道頓堀の三つの寨を放棄して、

その兵を本丸内に纏めておくやうにするがよい」と。治房は一萬人を率ゐて道頓堀を守つてゐたが、獨りその説に承服しなかつた。直ぐその晩、諸將は軍評定の口實で彼を呼びつけ、基次等をやつて諸所の壘や寨を燒き拂はせた。治房の部下は驚き走つて城に入つた。基次は決死隊を隱し、深く注意して曰ふには「備前池田氏の軍は、大將が年少氣鋭だ。必ずこゝに攻め寄せるに違ひない。そしたらお前達は飛び出して打ち破つて終へ」と。池田忠繼は福島に居つてその火を見付け、基次の言葉通り、馳せて川場に攻め入らうとした。その將の花房職之が曰ふには「後藤は策謀家故、きつと伏兵が御座いませう」と。そこでその襲撃は止めにした。伏兵は手持無沙汰で歸つて來た。基次が曰ふには「花房の奴まだ生きて居るな」と。十二月、東軍がその三寨に入つた。すぐその晩、大野治長の住居から火事が出た。東軍は城兵に内應をする者が有るのだと思つて、京橋口から進んで攻めた。城兵はよく拒いで之を退けた。

語釋　約二之内城一（約は、つゞめる、まとめおくの義。三寨の努力を内城に集結しおく意。）

幸村與前田利光對壘、出銃手于城外林中、日斃敵兵。利光先鋒奥村某欲奪林以爲功。幸村諜知之、潛收其兵。奥村至不見一人。城兵自銃眼指而笑曰「公等索狐兎乎」。奥村忿、踰濠攀壁。則銃矢交發、殺傷數百人。南條光明在南壁。其叔父與藤堂高虎相識。高虎約書于矢、射壁上招降之。叔姪合謀欲導高虎兵。期四日黎明。事覺。秀

賴與諸將議族誅之、而不更其幟、列銃以竢。黎明、藤堂氏・井伊氏合兵傅壁。加賀・越前兵亦逼幸村壘下。皆遇銃而敗。會々櫓上失火。敵二百人乘之而登。幸村擊鏖之。是日之戰、自卯至午、而城兵不損一人。織田長賴守星谷口。其卒私鬪。東軍乘喧疾攻。秀賴遣北川宣勝等、援擊卻東軍。

【訓讀】幸村、前田利光と壘を對し、銃手を城外の林中に出し、日に敵兵を斃す。利光の先鋒奧村某・林を奪つて以て功を爲さんと欲す。幸村諜して之を知り、潛に其の兵を收む。奧村至り一人を見ず。城兵銃眼より指して笑つて曰く「公等 狐兎を索むるか」と。奧村怒り、濠を踰え壁を攀づれば則ち銃矢交々發し、數百人を殺傷す。南條光明、南壁に在り。其の叔父、藤堂高虎と相識る。高虎書を矢に約し、壁上に射て之を招降す。叔姪 謀を合せて高虎の兵を導かんと欲す。四日の黎明を期す。事覺る。秀賴諸將と議して之を族誅し、而して其の幟を更へず。銃を列ねて以て竢つ。黎明、藤堂氏・井伊氏兵を合せて壁に傅く。加賀・越前の兵も亦幸村の壘下に逼る。皆銃に遇うて敗る。會々樓上火を失ふ。敵二百人之に乘じて登る。幸村擊つて之を鏖にす。是の日の戰、卯より午に至つて 城兵一人を損せず。織田長賴、星谷口を守る。其の卒私鬪す。東軍喧に乘じて疾く攻む。秀賴、北川宣勝等を遣はし・援け擊つて東軍を卻く。

【通釋】幸村は前田利光と向き合つて壘を構へてゐたが、鐵砲隊を城外の林中に出して、毎日敵兵を打ち殺してゐた。利光の前鋒の奧村某はその林を奪取して手柄を立てようと思つた。幸村は斥候によつてそれを察知し、そ

つと林中の兵を引き揚げて終つた。奥村は來て見ると一人も見えない。城兵が銃眼から顏を出して指し乍ら、笑つて曰ふには「貴公達は狐か兎でも探してゐるのかね」と。そこで大に腹を立て、濠をこえ、城壁に攀ぢ上つて來た。すると城の上から鐵砲丸や矢を釣瓶打ちに放したので、殺傷すること數百人であつた。南條光明は大阪城の側の城壁を守つてゐた。その叔父が藤堂高虎と識合であつた。高虎は手紙を矢に括つて城壁に射上げ、光明を招き降した。そこでこの叔父姪は共謀して高虎の兵を案内することになつた。其の時刻は四日の夜明と定めた。所がそれが發覺した。秀頼は諸將と相談して、その一族殘らず誅殺した。そしてその幟はわざとそのまゝにして（如何にも光明が守つてゐる樣に見せかけて）夜明を待つた。夜明になると、藤堂氏・井伊氏が兵を合せて城壁に近づいて來た。加賀・越前の兵も幸村の壘の下に攻め寄せた。何れも鐵砲丸の見舞を受けて敗れた。丁度その折、城の櫓の上で火を失した。敵二百人がそれに乘じて登つて來た。幸村は攻め擊つて皆殺しにした。此の日の戰は卯の刻（午前六時）から午の刻（午後零時）まで續いたが、城兵は一人も損害が無かつた。織田長頼は星谷口を守つてゐた。所がその兵卒が喧嘩をした。東軍がそのどさくさに乘じて烈しく攻め寄せた。秀頼は北川宣勝等を遣り、援け擊つて東軍を卻けた。

語釋 銃眼（鐵砲を發射する爲め、城壘の牆壁に設けたる凹形、又は穴。）○星谷口（城門の名。）

東軍於是、自天王寺口穴地而進。城兵亦穴地而拒之。東軍休戰、毎夜發砲而閧。城兵亦發砲而閧。前將軍數遺書於織田長益、勸和、要三事。曰「毀羅城、塡周池、若徙封

大和。若以淀君為質。皆不肯。然城兵聞和議起、守備頗怠。而東使至愈頻。長益・治長以秀頼旨使答之曰「雖果成和、而諸客兵不忍棄之。願得益封」議乃輟。

訓讀 東軍是に於て、天王寺口より地に穴して進む。城兵も亦地に穴して之を拒ぐ。東軍戰を休め、毎夜砲を發して鬨す。城兵も亦砲を發して鬨す。前將軍數々書を織田長益に遺つて和を勸め、三事を要して曰く「羅城を毀ち周池を塡めん。若しくは封を大和に徙さん。若しくは淀君を以て質と爲せ」と。皆肯んせず。然れども城兵和議起ると聞いて、守備頗る怠る。而して東使至ること愈々頻なり。長益・治長、秀頼の旨を以て使をして之に答へしめて曰く「果して和を成すと雖も、而も諸客兵は之を棄つるに忍びず。願はくは封を益すを得ん」と。議乃ち輟む。

通釋 東軍はそこで、天王寺口から地中に穴を掘つて進んだ。城兵も穴を掘つてそれを防いだ。東軍は戰を止めて終つて、毎晩・大砲を放つてはときの聲を擧げた。城兵も大砲を打つては、ときの聲を擧げた。前將軍は度度織田長益に手紙を送つて和睦を勸め、次の三ケ條の一つを要件とした。卽ち二の丸を破壞して外堀を塡めること。でなければ大和に領地替へをすること、然らずんば淀君を人質にすること。だが、どれも承知しなかつた。けれ共城兵は和議が起つたと聞いて、守備が餘程好い加減になつて來た。そこへ持つて來て、關東方の使者は益々頻繁にやつて來た。長益と治長とは秀頼の内命で使者に返事をさせて曰ふには「誠に和睦が出來ても、諸所の客分の兵隊達を棄て丶終ふのは可哀相だ。その扶持料に祿を增して貰ひ度い」と。この和睦話はそこで中止となつた。

語釋 天王寺口（城の南方。）○客兵（諸方面から新たに募つた兵。）

塙直次・長岡貞安、請大野治房曰、受圍日久。不一出戰、軍氣何得振。今備前・阿波兵陣本街橋南北。宜分兵襲之。治房曰、吾亦欲之。夜戰利於寡。寡而分之、恐不能克。宜專襲其一軍。乃揀壯士百餘、申暗令、以直次・貞安將之、出斫阿波營、斬其將中村重勝。治房與御宿政友出迎之橋上而還。

訓讀 塙直次・長岡貞安、大野治房に請うて曰く「圍を受くること日久し。一たび出で戰はずんば、軍氣何ぞ振ふを得ん。今、備前・阿波の兵、本街橋の南北に陣す。宜しく兵を分つて之を襲ふべし」と。治房曰く「吾も亦之を欲す。夜戰は寡に利あり。寡にして之を分つ、恐らくは克つ能はざらん。宜しく專ら其一軍を襲ふべし」と。乃ち壯士百餘を揀び、暗令を申べ、直次・貞安を以て之に將とし出でゝ阿波の營を斫り、其將中村重勝を斬る。治房、御宿政友と出でゝ之を橋上に迎へて還る。

通釋 塙直次と長岡貞安は大野治房に願ひ出て曰ふには「包圍されてから隨分日が經ちました。一度城を出て戰はないと士氣を盛んにすることが出來ません。今備前と阿波の軍が本街橋の南と北とに陣してゐます。兵を二手に分けて襲擊するが宜いと思ひます」と。治房が曰ふには「自分もさうしたいと思つてゐる。一體夜戰は小勢の方に勝目がある。併しその小勢を又二つに分けるといふが。それでは勝利を得ることは難しくなりはしないか

と思ふ。これは唯その片一方だけを襲ふ方がよい」と。そこで元氣一杯な兵隊百餘人を選拔し、暗號をよく定め、直次と貞安を指揮官にして、城を出で阿波軍の陣營に斬り込み、その大將の中村重勝を討ち取つた。治房は御宿政友と共に橋の上まで迎へに出て、一緒に城中に歸つた。

當是時、天下諸侯皆從東軍。未至者獨島津氏而已。京極高次子忠高從攻城。其母常光在京師。前將軍以其爲淀君妹也、使人迎之以講和議。又陰誘降城兵。淀君遂使治長・長益勸秀頼。秀頼召七隊長及新附將士議。或曰「關東之謀不可測也。宜嬰城二三年、以竢敵有變。」或曰「諸侯無援者、而城兵有貳者。以有貳之兵、守無援之城。而城內糧仗不足以支三年。不若媾和以爲後圖也。」治長・長益欲和、說秀頼甚力。秀頼曰「片桐且元爲我盡忠以計無事。汝輩乃沮之、勸我擧事。今何與前言相反也。」會常光氏至慫慂淀君、數往復傳東旨。終約逐客兵、塡周池。長益出子尚長、治長出子治德爲質。十九日、和成。翌夜、茶臼山下失火、延燒二十餘營。幸村曰「敵新和而懈備。宜掩擊之。」治長等不許。

【訓讀】是の時に當り、天下の諸侯、皆東軍に從ふ。未だ至らざる者獨り島津氏のみ。京極高次の子忠高從つて城を攻む。其母常光、京師に在り。前將軍其淀君の妹たるを以て、人をして之を迎へ以て和議を講ぜしむ。又陰に城兵を誘降す。淀君遂に治長・長益をして秀賴に勸めしむ。秀賴、七隊長及び新附の將士を召して議す。或ひと曰く「關東の謀測る可からざるなり。宜しく城に嬰る二三年、以て敵の變あるを竢つべし」と。或ひと曰く「諸侯の援くる者なく、而して城兵貳ある者あり。貳あるの兵を以て、援なきの城を守る。而して城內の糧仗は以て三年を支ふるに足らず。媾和して以て後圖を爲すに若かず」と。治長・長益和せんと欲し、秀賴に說くこと甚だ力む。秀賴曰く「片桐且元は我が爲に忠を盡し以て無事を計る。汝が輩乃ち之を沮み、我を勸めて事を擧げしむ。今何ぞ前言と相反するや」と。會々常光氏至り、淀君を慫慂し、數々往復して東旨を傳ふ。終に客兵を逐ひ、周池を塡めんと約す。長益は子尙長を出し、治長は子治德を出し質と爲す。十九日、和成る。翌夜、茶臼山の下火を失し、二十餘營を延燒す。幸村曰く「敵、新に和して備を懈る。宜しく之を掩擊すべし」と。治長等許さず。

【通釋】此の當時、全國の諸大名は皆東軍に從ひ、まだやつて來ないものは島津氏だけであつた。京極高次の子の忠高も從軍して城を攻めて居た。その母の常光といふ者は京都に居た。淀君の妹に當るので、前將軍は人を迎へにやつて和睦の相談をさせた。又ひそかに城兵を誘つて降參させようとしたりしてゐた。遂に淀君は治長と長益をして秀賴に降伏を勸めさせた。秀賴は七隊長並びに今度新たに味方についた將士を召して相談をした。或る者が曰ふには「關東の謀は中々見通しがつかず、當てになりませぬ。こゝ二三年籠城して、敵方に變事の起るのを待つてをるが宜しい」と。又或る者が曰ふには「諸大名には一人も援けに來る者がなく、城兵には二心を抱く者がある。二心のある軍隊で孤立無援の城を守るのです。且つ城內の兵糧武器も三年を持ちこたへるには不

足です。媾和して後の事は又後で計畫するのがよいと思ひます」と。治長と長益は和睦を欲し、非常な熱心で秀頼に說得した。秀頼が曰ふには「片桐且元は自分の爲に忠義を盡して無事を計つてくれた。お前達はそれを邪魔して、私に兵を起すことを勸めた。今の言葉は前とは裏腹ではないか」と。折から常光氏が城中にやつて來て淀君にすゝめ、度々往復して關東方の意向を傳へた。それで終に他所から加勢に來てゐる客兵を逐ひ出し、周圍の堀を塡めることを約束した。長益は子の尙長を出し、治長は治徳を出して人質とした。十九日に和議が成立した。その翌晩、茶臼山の麓で火事を出して二十餘りの陣屋に延燒した。幸村が曰ふには「敵は今度和睦が出來た許りで防備を怠つてゐる。どつと不意討をかけるがいゝ」と。治長等はそれを許さなかつた。

語釋 茶臼山(天王寺の西。)

二十日、前將軍遣板倉重昌、將軍遣阿部正次、入莅誓焉。秀頼遣木村重成、出莅誓焉。而以郡良列爲之副。重成年少有風儀。盛服騎馬、抵茶臼山營、自轅門下馬。關東諸將設臚幕中、引重成。重成不揖而入。永井直勝・土井利勝擯之、使坐下座。重成不顧而進、叙秀頼旨、然後退伏。前將軍曰「是常陸介子乎。何酷肖父也」因問其齡。曰「二十二矣」曰「然則與右府同年矣。往日鷂野・今福之戰、壯勇無雙」重成慨然對曰「臣有遺憾焉」已而誓書出。押血糢糊。重成曰「淀君婦人、恐有疑焉。敢請更面刺鮮血」前將

軍鍼於指曰「年老血枯。」重成爲不聞者遂取血誓、拜謝而退、禮諸將乃還。

訓読 二十日、前將軍、板倉重昌を遣はし、將軍、阿部正次を遣はし、入つて誓に莅ましむ。秀頼、木村重成を遣はし、出で、誓に莅ましむ。而して郡良列を以て之が副と爲す。重成、年少くして風儀あり。盛服、馬に騎し、茶臼山の營に抵り、轅門より馬を下る。關東の諸將、臚を幕中に設け、重成を引く。重成揖せずして入る。永井直勝・土井利勝之を擯し、下座に坐せしむ。重成顧みずして進み、秀頼の旨を敍し、然る後、退き伏す。前將軍曰く「是れ常陸介の子か。何ぞ酷だ父に肖たるや」と。因つて其齢を問ふ。曰く「二十二なり」と。曰く「然らば則ち右府と同年なり。往日、鴫野・今福の戰には壯勇無雙なりし」と。重成慨然として對へて曰く「臣、遺憾あり」と。已にして誓書出づ。押血糢糊たり。重成曰く「淀君は婦人、恐らくは疑ふあらん、敢て請ふ更に面のあたり鮮血を刺せ」と。前將軍指に鍼して曰く「年老い血枯る」と。重成聞かざる者の爲して遂に血誓を取り、拜謝して退き、諸將に禮して乃ち還る。

通釋 二十日、前將軍は板倉重昌を遣はし、將軍は阿部正次を遣はして城中に入つて誓の場に臨席させた。秀頼は木村重成を遣はして、城を出て誓の場所に赴かせた。郡良列が重成の介添に爲つた。重成は年が若いが風采威儀が立派であつた。大禮服を着けて馬に乗り、茶臼山の本營に着いて陣門より馬を下りた。關東の諸將は陣幕の中に坐席を設けておいて重成を引き入れた。重成は會釋もせずに幕中に入つた。永井直勝と土井利勝が彼を案内して下座に着かせようとした。彼は構はずに進んで秀頼の意向を述べ、それが終つてから後に退いて拜伏した。前將軍が曰ふには「これが常陸介（木村重茲）の子息か。何とよく親爺に似られたことぢや」と。そこで年

を尋ねると曰ふには「二十二で御座います」と。曰ふには「それならば右府殿と同年ぢやな。先達の鴫野・今福の戰はまことに雙びない勇壯ぢやつた」と。重成は無念さうに答へて曰ふには「私はまだ心殘りなことが御座います」と。その内に誓書が持ち出された。血判が薄ぼんやりしてゐた。重成が曰ふには「淀君は御婦人です。疑はれるやうなことがあるかも知れませぬ。失禮乍ら今一應この面前にて鮮血をお出し下さいますやう」と。前將軍は指を針で刺して曰ふには「年を取つて血が少なくなつた」と。重成はそれを聞かない振りをして遂に血判誓文を受取り、禮を言ひ挨拶をして退り・諸將にも挨拶して立ち戻つた。

語釋 莅レ誓（その場に立ち合ひて誓ふことをいふ。此の際には兩方で行つた。）○臚（列、陳と同義。こゝの所は着座の順を定めた。列席の順列。）○不レ揖而入（豐臣家の使者だから揖しなかつた。）○有二遺憾一（敵將佐竹義宣を討ち取らなかつたことをいふ。）

且日、東軍發二卒十萬人一、躡二外城一塡二空壕一、以二吏七名一監レ焉。是日、島津氏始至二兵庫一。居二二日一、治長與二長益一俱往謁二兩營一。前將軍見二治長一面稱二揚之一曰「卿年少、能爲二秀賴一擧レ事。何其壯哉。吾欲下上野介事二將軍一猶上レ卿也」。上野介者本多正純也。因命二正純一請二其上衣一。遠近傳以爲レ榮。治長意氣益驕。其夜、前將軍遽入二京師一。吏請レ夷二壕淺深一。前將軍哂而對曰「使二三歲小兒一可レ得二上下一耳」。初城中諸將約レ塡二周池一以爲、止二西南外壕一。居數日、外壕既塡、遂及二內壕一。城中大驚、皆咎二治長一。治長使二人出詰一監吏一。吏對曰「吾輩受レ命塡二周池一。

以爲周者周内外之謂也。是時、將軍猶在岡山。治長自馳赴岡山。岡山將吏皆曰「是大御所命已」。治長乃馳使京師、因板倉勝重請之。勝重曰「本多正純主此事。我所不與也」。還詣正純。正純稱疾不出面。往復數回、而東軍益〻興卒、晨夜督責以至明春、塹壘皆夷。獨存牙城而已。

【訓讀】旦日、東軍、卒十萬人を發し、外城を隳ち穴壕を塡め、吏七名を以て監す。是の日、島津氏始めて兵庫に至る。居ること二日、治長、長益と倶に往いて兩營に謁す。前將軍、治長を見て面のあたり之を稱揚して曰く「卿、年少くして、能く秀頼の爲に事を擧ぐ。何ぞ其れ壯なるや。吾れ上野介をして、將軍に事ふること猶卿がごときを欲するなり」と。上野介は本多正純なり。因つて正純に命じて、其上衣を請はしむ。遠近傳へて以て榮と爲す。治長、意氣益々驕る。其夜、前將軍遽に京師に入る。吏、壕を夷ぐるの淺深を請ふ。前將軍、哂つて對へて曰く「三歲の小兒をして上下するを得可からしむるのみ」と。初め城中の諸將、周池を塡むるを約し以爲へらく、西南の外壕に止ると。居ること數日、外壕既に堙め、遂に內壕に及ぶ。城中大に驚いて皆治長を咎む。治長、人をして出で、監吏を詰らしむ。吏對へて曰く「吾が輩、命を受けて周池を塡む。以爲へらく、周とは內外を周るの謂なり」と。是の時、將軍猶ほ岡山に在り。治長自ら馳せて岡山に赴く。岡山の將吏皆曰く「是れ大御所の命のみ」と。治長乃ち使を京師に馳せ、板倉勝重に因つて之を請ふ。勝重曰く「本多正純此の事を主る。我が與らざる所なり」と。還つて正純に詣る。正純疾と稱して出で面せず。往復數回、而して東軍、益々卒を興

し、晨夜督責して以て明春に至り、塹壘皆夷ぐ。獨り牙城を存するのみ。

通釋 翌日、東軍は人夫十萬人を繰り出し、外城をぶちこはし、空濠を塡め、七人の役人で監督をさせた。この日島津氏がやつと兵庫まで來た。二日經つて、治長は長益と共に、前將軍と將軍の陣屋へ夫々拜謁に往つた。前將軍は治長に會つて目の前で褒めそやして曰ふには「貴方は年が若いに拘らず、秀賴の爲めに大事を擧げることがお出來なされて何ん共お壯んなことゝ感服した。私は上野介をして、將軍秀忠に事へること、そなたが秀賴公に事へたやうに事へて貰ひ度いと思つてゐますのぢや」と。この上野介といふのは、本多正純のことである。そこで正純に命じて、治長の羽織を貰ひ受けさせた。遠近一帶の人々は傳へ聞いて光榮なことゝ思つた。治長は益々驕り傲ぶる樣になつた。その夜、前將軍は急に京都に入つた。監督の役人は堀をどの位まで塡めたら宜しいかと尋ねた。前將軍は笑つて答へて曰ふには「三つ兒にも上つたり下つたり出來る位にして終へばよい」と。初め城中の諸將は周りの堀が塡める約束をしたものゝ、內心は西と南の外堀だけのことゝ考へてゐた。數日經つと外堀はすつかり塡まつて終ひ、內堀の方に移つて來た。城中では大層吃驚して皆治長を咎めた。治長は人をやつて監督の役人を詰責させた。役人が答へて曰ふには「我々は只命令を受けて周りの堀を塡めてをるのだ。考へて見た所、周りといへば、內城外城の周りのことだ」と。此の時將軍はまだ岡山の陣に居つた。治長は自分で大急ぎで岡山に行つた。諸將が皆曰ふには「それは大御所の命令なのだ」と。治長はそこで京都に使を飛ばせて、板倉勝重を通じて談判させた。勝重が曰ふには「本多正純の管轄だ。私は關係して居らぬ」と。そこで戾つて正純の所へ行つた。正純は病氣だといつて、對面しなかつた。かく往つたり來たり幾度もしてゐる中に、東軍は益々人夫を增やし、朝早くより夜遲くまで嚴しく急かせ、翌春になると、堀も壘も皆平らになつて終つた。たゞ本城だけ

がぽつんと建つてゐるだけになつた。

語釋 兩營（家康、秀忠の兩營。）

元和元年正月、兩將軍皆東歸。諸國兵罷之國。淀君游嬉恬安、而荒殘之餘、將士莫所仰給。物議囂然。三月、遣青木一重及大藏正永、請賑於關東。關東不報。客兵交勸秀頼母子再擧。曰「去歲擧天下攻我。而不能取。是世所共知也。今而再擧必有歸者。」乃召募遠近、得十二萬人。上下大喜。於是、大議戰備。數日未決。眞田幸村進曰「今日之事、兩言決耳。可戰也。不可守也。猶有急襲京師、挾天子以令天下而已。」治長兄弟不聽。七隊長乃說曰「城壕隳廢、誠不可比前役。此地三面迫水、而南接平野。敵每至自南。請以我兩軍、迎彼兩帥、直衝突麾下。其勝敗天也。」議終決。乃急繕守備、柵于外城舊趾、穿塹二尺。四月、東軍先鋒已至京師。兩將軍兼程西上、飛檄諸侯、復急赴大坂。留一重等不遣。使常光氏來言曰「弭兵徙大和七年、則吾修大坂如故、還予之。」不答。

【訓讀】元和元年正月、兩將軍皆東歸す。諸國の兵罷めて國に之く。淀君、游嬉恬安、而して荒殘の餘、將士給を仰ぐ所莫し。物議囂然たり。三月、青木一重、及び大藏正永を遣はし賑を關東に請ふ。關東報ぜず。客兵交ゝ秀頼母子に再擧を勸む。曰く「去歳、天下を擧げて我を攻む。而して取る能はず。是れ世の共に知る所なり。今にして再擧せば必ず歸する者あらん」と。乃ち遠近に召募して十二萬人を得たり。上下大に喜ぶ。是に於て、大に戰備を議す。數日未だ決せず。眞田幸村進んで曰く「今日の事、兩言にして決するのみ。戰ふ可きなり。守る可からざるなり。猶ほ急に京師を襲ひ、天子を挾んで以て天下に令する有るのみ」と。治長兄弟聽かず。七隊長乃ち説いて曰く「城壕隳廢し、誠に前役に比すべからず。此の地、三面水に迫つて、南は平野に接し、敵毎に南より至る。請ふ我が兩軍を以て彼の兩師を迎へ、直に麾下に衝突せん。其の勝敗は天なり」と。議終に決す。乃ち急に守備を繕ふ。外城の舊趾に柵し、塹を穿つこと二尺。四月、東軍の先鋒已に京師に至る。兩將軍、程を兼ねて西上し、檄を諸侯に飛ばし、復急に大坂に赴かしむ。一重等を留めて遣らず。常光氏をして來り言はしめて曰く「兵を弭めて大和に徙ること七年ならば、則ち吾れ大坂を修むること故の如くして之を還し予へん」と。答へず。

【通釋】元和元年正月、兩將軍は並びに東歸した。諸國の軍隊も夫々解散して國に歸つた。淀君は浮き〳〵遊び興じて至極暢氣に暮してゐたが、戰敗の後で何もかもすつかり荒れ果てゝゐるので、將士は俸祿を頂戴することも出來なかつた。色々の噂が喧しくなつた。三月、青木一重と大藏正永をやつて關東に救助を請うた。關東では返答もしなかつた。客兵共はかはる〲秀頼母子に再擧を勸めた。曰ふには「去年は全國總懸りでこゝを攻めました。併し落城させることが出來ませんでした。世間ではそのことをよく承知してゐます。今再擧したらきつと

味方に附く者がありませう」と。そこで遠近一帶に兵を召し募つた所、十二萬人を得た。上下一同は非常に喜んだ。そこで色々と戰備の相談をした。五六日經つても中々定まらなかつた。眞田幸村は進み出て曰ふには「今回の事は二た言で定る。『進んで戰ふべきである。退いて守るべきではない』。計略は只一つ、急いで京都を襲ひ取り、天皇を背景にして天下に命令を下すことだけである」と、治長兄弟は承知しなかつた。七隊長がそこで說いて曰ふには「城も堀も壞されたり塡められたりして、前の戰の時とはとても比較になりません。此の土地は三方水に接して南だけが平野に續いてゐるので、敵は何時も南からやつて來ます。だから我が二手の軍を以て敵の兩軍を夫々引き受け、いきなり敵の旗下に突き入りませう。その勝敗は天運です」と。相談は遂にそれと定つた。そこで急に防備を直した。昔の外城の跡に柵をめぐらし、壕を二尺許り掘つた。四月、東軍の先鋒が早くも京都に到着した。兩將軍も二日路を一日にして急いで西上し、檄文を諸侯に飛ばし、又もや急いで大阪に向はせた。使の一重等は留め置いて還さなかつた。常光氏をして大阪に行つて曰はせるには「戰爭をやめて大和に移り、七年も經つたならば、大阪城を昔通りにすつかり直してお返し致しますが」と。大阪方は返辭もしなかつた。

語釋　元和（後水尾天皇の年號。）○兩言（可戰也。不可守也。）○兩帥（家康、秀忠。）

於是、分軍爲三、大野治長領一軍、七隊長及後藤基次隸之。大野治房領一軍、長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也隸之。木村重成領一軍、眞田幸村・渡部尙・明石守重隸之。秀頼具旗鼓、親按視南郊、上茶臼・岡山、指揮三軍所嚮。士氣頗奮。然治長矜持太

甚、以淀君命抑沮諸將、軍議屢變。長益父子出奔京師。治長益專。治長一夜過櫻門前。有人刺之。不中走。治長卒追殺之。旦日、檢戸、治房部卒也。城中莫不相猜防。前將軍潛使人招重成。重成不應。其女兄夫猪飼某應城中召募、創病歸鄕。重成遺書及物、訣之曰「城中近狀無復足觀。諸謀議皆決於母氏。我輩所陳一切不聽。天下永爲家康之有可知也已。家康與僕有舊。使板倉伊賀數招僕。僕受先君命以屬嗣君。而懷二心、心所不安。故雖無一所聊賴、且因循在此。特願速戰死。復何言哉。此刀僕所常佩服。經數十戰、未嘗蹉跌者、今以贈公。幸愛護之」。諸將皆以治長之故、鞅鞅不樂。皆如重成意。

訓讀 是に於て、軍を分ちて三と爲し、大野治長一軍を領し、七隊長及び後藤基次之に隷す。大野治房一軍を領し長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也之に隷す。木村重成一軍を領し、眞田幸村・渡部尙・明石守重之に隷す。秀頼、旗鼓を具へて、親ら南郊を按視し、茶臼・岡山に上り、三軍の嚮ふ所を指揮す。士氣頗る奮ふ。然るに治長の矜持太甚しく、淀君の命を以て諸將を抑沮し、軍議屢〻變ず。長益父子京師に出奔す。治長益〻專なり。治長一夜、櫻門の前を過ぐ。人あり之を刺す。中らずして走る。治長の卒追うて之を殺す。旦日戸を檢すれば治房

の部卒なり。城中、相猜防せざる莫し。前將軍潜に人をして重成を招かしむ。重成應ぜず。其女兄夫猪飼某、城中の召募に應じ、創病にて鄕に歸る。重成、書及び物を遣り、之に訣して曰く「城中の近狀、復觀るに足るなし。諸の謀議皆母氏に決す。我が輩の陳ぶる所一切聽かれず。天下永く家康の有と爲ること知るべきのみ。家康僕と舊あり。板倉伊賀をして數〻僕を招かしむ。僕先君の命を受けて以て嗣君に屬す。而して二心を懷藏するは心の安んぜざる所。故に一も聊賴する所なしと雖も、且く因循して此に在り。特速に戰死せんと願ふのみ。復何をか言はんや。此の刀は、僕の常に佩服する所。數十戰を經て未だ嘗て蹉跌せざるもの、今以て公に贈る。幸に之を愛護せよ」と。諸將皆治長の故を以て、鞅鞅樂しまず。皆重成の意の如し。

通釋 そこで總勢を三軍に分け、大野治長がその一軍を指揮して、七隊長と後藤基次とがそれに屬した。大野治房が一軍を指揮し、長曾我部盛親・森勝永・仙石宗也の三人がそれに屬した。木村重成が一軍を指揮して、眞田幸村・渡部尙・明石守重がそれに屬した。秀頼は旗や太鼓をすつかり整へて親ら南の郊外を視察してまはり、茶臼山と岡山に上つて三軍の向ふべき所を指圖した。士氣大に振つた。所が治長は非常に威張つて、淀君の命を受けては諸將を抑へ邪魔し、一旦決められた戰の評議でも度々變更された。長益父子は京都に出奔して終つた。其の後治長は益我儘になつた。治長が或る晩櫻門の前を通つた、人がとび出して彼を刺さうとした。屆かなかつたので逃げ出した。治長の兵卒が追ひかけて殺した。翌朝死骸を檢べると治房の部下の兵卒であつた。かくの如き有樣なので、城中の者はお互ひに疑ぐりの眼を以て見、用心をし合はぬものはなかつた。前將軍はひそかに人をやつて重成を招かせた。重成は應じなかつた。その姉婿の猪飼某は、召募に應じて城中に來てゐたが、創が惡くなつて鄕里に歸ることになつた。重成は手紙と物品を贈つて別を告げて曰ふには「近頃城中の有樣は口

にも言へぬやうな事計りです。色々の計畫相談は皆淀君殿の考で定つてゐます。吾々の言ふことは一切きかれません。天下が永く家康のものとなつて終ふことは明白なことです。家康は私と古い關係があります。板倉伊賀をして度々私を招かせました。私は先君の命令を受けて嗣君を守り立てゝゐるのです。二心を懷くのはまことに氣持の惡いことです。だから、心賴みにすることは一つもないに拘らず、こゝにぐづ〳〵してゐるのです。この上は唯一時も早く戰死したいだけです。もう外に希望は有りません。此の刀は私がいつも持つてゐたものです。數回の戰に未だ一度も失敗りをしたことのないものですが、今貴方にお贈り致します。どうか大事にして下さい」と。諸將は皆治長のお蔭で氣が滅入つて不愉快な思ひをしてゐた。皆重成の考と同じであつた。

語釋　櫻門（本丸入口の門。）○女兄夫（姉婿）○母氏（淀君をさす。）

兩將軍既至京師。大坂間細狙擊之。皆不成。乃遣大野道見、縱火界浦、奪東軍據資。遣大野治房、以萬人入大和、攻郡山、走其守將筒井定慶。聞淺野氏舉紀伊軍至、因誘其國民、乘虛起兵。紀伊軍乃還救。治房尾之。先鋒塙直次戰于樫井、戰死。治房赴援。不及。既而東軍來自大和・河內。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗爲前鋒。諸隊長執前議、欲迎之南郊。基次不可曰「野戰勝敗以衆寡決。今以寡擊衆。不若邀

之險阻。臣請以萬人扼國府嶺、擊挫其先鋒。先鋒既挫、後軍必退、頓南都・郡山、不能輒進。吾因其變以制其勝。至受大軍於曠原、臣所不知也」。從之、授基次兵一萬四千陣平野、又遣薄田兼相・渡部尙繼之。兩將軍使人誘基次曰「苟啓東兵、則封以播磨」。基次拜謝曰「今東西決戰。使西强東弱、則歸東矣。今東强西弱。去弱就强臣之所耻也。雖然東旨之辱亦不可不報。報以速死。臣速死、城亦速陷。所以報也」。

訓讀　兩將軍既に京師に至る。大坂の間細之を狙擊す。皆成らず。乃ち大野道見を遣はし、火を界浦に縱つて東軍の據資を奪ふ。大野治房を遣はし、萬人を以て大和に入り、郡山を攻めて其守將筒井定慶を走らす。淺野氏、紀伊の軍を擧げて至ると聞き、因つて其國民を誘ひ、虛に乘じて兵を起さしむ。紀伊の軍乃ち還り救ふ。治房之に尾す。先鋒塙直次、樫井に戰つて戰死す。治房赴き援く。及ばず。既にして東軍、大和・河內より來る。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗前鋒たり。諸隊長、前議を執つて之を南郊に迎へんと欲す。基次可かずして曰く「野戰の勝敗は衆寡を以て決す。今寡を以て衆を擊つ。之を險阻に邀ふるに若かず。臣請ふ萬人を以て國府嶺を扼し、擊つて其先鋒を挫かん。先鋒既に挫けば後軍必ず退き、南都・郡山に頓し、輒く進む能はず。吾れ其變に因つて以て其勝を制せん。大軍を曠原に受くるに至つては、臣の知らざる所なり」と。之に從ひ、基次に兵一萬四千を授けて平野に陣し、又薄田兼相・渡部尙を遣はして之を繼がしむ。兩將軍人をして基次を誘は

しめて曰く「苟も東兵を啓かば、則ち封ずるに播磨を以てせん」と。基次、拜謝して曰く「今、東西戰を決す。西強く東弱からしめば、則ち東に歸せん。今東強く西弱し。弱を去り強に就くは臣の耻づる所なり。然りと雖も東旨の辱なきも、亦報いざるべからず。報ゆるに速に死するを以てせん。臣速に死せば、城も亦速に陷らん。報ゆる所以なり」と。

通釋 兩將軍が既に京都に到着した。大阪方の忍びの者が二人を狙ひ擊ちにした。共に成功しなかつた。そこで大野道見をやつて界浦に放火し、東軍の兵糧を奪ひ取らせた。大野治房をして一萬人を率ゐて大和に入らせ、郡山を攻めて守將の筒井定慶を驅逐せしめた。淺野氏が紀伊の兵を擧つて攻めて來るとき、その國人を誘つて虛に乘じて兵を起させた。そこで紀伊の軍はそれを救ひに還つた。治房はその後を追ひかけた。先鋒の塙直次が樫井に戰つて戰死をした。治房は援けに行つた。併し間に合はなかつた。その內に東軍は大和・河內の兩方面から押し寄せた。水野勝成・藤堂高虎・井伊直孝・伊達政宗が先鋒であつた。大阪方の諸隊長は前に定めた相談を主張して、これらの東軍を南郊に迎へ討たうとした。基次は反對して曰ふには「平野に於ける戰の勝敗は多勢と小勢といふことで定まります。今小勢で多勢を擊つのであります。險阻な所に迎へるのが最も宜しいです。一つ私に一萬の兵隊で國府嶺を抑へ敵の先鋒を打ち破らせて下さい。先鋒が挫けたら後軍も必ず退き、南都の郡山に駐屯して容易には進むことが出來ぬでせう。かうして我軍は敵勢に變化の起るのをまつて勝を制することが出來ます。大軍を廣い平野に迎へたりすることは私として、その何處に可なる所があるか知りません（不可なり）」と。一同はその意見に從ひ、基次に一萬四千の兵を與へて平野に陣取らせ、又薄田兼相と渡部尙に續かせた。兩將軍は人をやつて基次を誘はせて曰ふには「もし東兵の手引さへしたなら播磨の領主にしてやるが」と。

基次は禮を述べてそれを斷つて曰ふには「今東軍と西軍が決戰に臨んでゐます。もしもこの際西が強く東が弱かつたなら自分は東の味方につきます。今は東が強く西が弱い。弱い方を離れて強い方に就くのは自分の恥とする所です。けれども關東方の有難い御沙汰にも報いねばなりません。私は早く死ぬことによつてそれに報い度いと思ひます。私が早く死んだなら、城も早く陷るでせう。それがお禮心です」と。

語釋 淺野氏（長政第二子長晟。）○樫井（和泉）○前議（七隊長の主張した說。）○國府嶺（河内大和の境。）○東旨之辱（關東のありがたい思召。）

五月五日、基次勒兵夜發。失道出古市。軍士恟懼。基次曰「此地據林臨水。戰守皆便。宜飮馬以待旦。」旦日治長出助基次。幸村陣道明寺、重成陣若江、盛親陣矢尾。基次不知敵有後繼。不告衆而進、至片山。與水野勝成遇、擊破之。尙・兼相來援。連戰未決。陸奧・美濃・伊勢諸軍夾擊基次。基次盡亡其兵、以十一騎在山腹。使使訣兼相曰「子勉之。吾將死也。」乃復進、中銃殪。還至柏原死。兼相恥前役之敗、亦奮擊而死。治長來援大敗、大谷吉胤戰沒。

訓讀 五月五日、基次兵を勒して夜發す。道を失つて古市に出づ。軍士恟懼す。基次曰く「此の地、林に據り水に臨む。戰守皆便なり。宜しく馬に飮かひて以て旦を待つべし」と。旦日、治長出で、基次を助く。幸村道明

寺に陣し、重成若江に陣し、盛親矢尾に陣す。基次、敵後繼あるを知らず、衆に告げずして進み、片山に至つて水野勝成と遇ひ、撃つて之を破る。尙・兼相來り援く。連戰未だ決せず。陸奥・美濃・伊勢の諸軍、基次を夾撃す。基次盡く其兵を亡ひ、十一騎を以て山腹に在り。使をして兼相に訣せしめて曰く「子、之を勉めよ。吾れ將に死せんとするなり」と。乃ち復進み、銃に中つて殪る。還り、柏原に至つて死す。兼相、前役の敗を恥ぢ、亦奮擊して死す。治長來り援け、大に敗れ、大谷吉胤戰沒す。

【通釋】五月五日、基次は勢揃ひをして夜中に出發した。道を間違へて古市に出たので、部下の者共は騷ぎ恐れた。基次が曰ふには「此の場所は林を控へ、水に臨んでゐる。戰ふにも守るにも共に便利な所だ。馬に水をやつて夜の明けるのを待つがよい」と。朝になると治長がやつて來て基次に加勢をした。幸村は道明寺に陣取り、重成は若江に陣取り、盛親は矢尾に陣取つてゐた。基次は敵に後繼の有ることに氣が付かないで、他の隊に默つて單獨に進み、片山まで行つて水野勝成と出會つてそれを擊ち破つた。尙と兼相が援けに來た。連りに戰つて勝敗何れとも定らなかつた。陸奥・美濃・伊勢の諸軍が基次を夾み擊にした。基次は全部、部下の兵士を死なせて終ひ、只十一騎をつれて山の中腹にをつた。基次は使を兼相の許へやつて、別を告げさせて曰ふには「貴公一つ奮發してくれ。吾が輩は討死に定つた」と。そういつてまた前進し、銃丸に當つて倒れた。柏原まで返つてそこで死んだ。兼相はこの前の戰（冬の陣）に敗けたのを恥ぢてゐて、これも亦、奮擊して討死した。治長は援けにやつて來たが大敗し、大谷吉胤は戰死した。

【語釋】古市・道明寺・若江・矢尾・片山・柏原（河内）○前役之敗（磯多崎を守り妓樓に遊んで敗けたことをいふ。）

幸村聞急馳至。徇使人迎而告之曰「吾衆創殘、子請承之」幸村諾而進、橫邀陸奧軍。陸奧軍長騎戰。勁騎八百、馬上發銃、乘烟馳突、無不摧破。伊達氏毎以此得志於東國。幸村諳知之。乃引兵上譽田東阜。阜中有凹處。就布陣焉、命其兵皆脫冑委槍、坐以俟指麾。陸奧軍稍〻近。幸村令曰「冑」。及相去數十步。令曰「執槍」。敵發銃、且馳至、遇槍而沮。又令曰「皆起」。敵兵大潰而走。幸村轉陣南阜、收兵與徇更〻殿而退。盛親上矢尾堤望藤堂氏旗、乃退伏堤下。敵先鋒二將以爲走也。徑田上堤。則盛親大呼起、擊走之。重成游兵亦來援、遂斬其二將。

【訓讀】幸村、急を聞いて馳せ至る。徇、人をして迎へて之に告げしめて曰く「吾が衆創殘、子請ふ之を承けよ」と。幸村諾して進み、橫に陸奧の軍を邀ふ。陸奧の軍騎戰に長ず。勁騎八百、馬上銃を發し、烟に乘じて馳突し、摧破せざるなし。伊達氏毎に此を以て志を東國に得たり。幸村、之を諳知す。乃ち兵を引いて譽田の東阜に上る。阜中に凹處あり。就いて陣を布き、其兵に命じて皆冑を脫ぎ槍を委て、坐して以て指麾を俟たしむ。陸奧の軍稍〻近づく。幸村令して曰く「冑せよ」と。相去ること數十步に及ぶ。令して曰く「槍を執れ」と。敵、銃を發し且つ馳せ至り、槍に遇うて沮む。又令して曰く「皆起て」と。敵兵大に潰えて走る。幸村轉じて南阜に陣し、兵を收めて、徇と更〻殿して退く。盛親、矢尾堤に上つて、藤堂氏の旗を望み、乃ち退いて堤下に伏

す。敵の先鋒の二將以て走るとなす。田を徑つて堤に上れば、則ち盛親大に呼んで起ち、擊つて之を走らす。重成の游兵も亦來り援け、遂に其二將を斬る。

【通釋】幸村は急を聞いて馳せつけた尙は人をやつて迎へさせて曰はせるには「我が勢は最早散々の手追故、貴公一つ引き受けて下され」と。幸村は承知して進み、陸奥の軍を橫合から迎へた。陸奥の軍は騎戰に熟練してゐた。八百人の勇敢な騎兵が馬上から鐵砲を放ち、その烟に乘じて突進し、向ふ所打ち破らぬものは無かつた。伊達氏は常に此の戰法を用ひて東國に成功してゐた。幸村はそれを兼ねてよく知つてゐた。兵を引いて譽田の東側の岡に上つた。岡の中に窪んだ所があつた。幸村はそこに陣を布き、部下の兵士に命じて皆冑をとり、槍を下に置いて、腰を下して待たせた。陸奥の軍が幾らか近づいて來た。幸村は號令をかけて曰ふには「冑をかぶれ」と。それから距離が數十歩になる。すると又號令して曰ふには「槍を執れ」と。敵は鐵砲を放ち、且つ同時に突進して來たが、槍の立ち竝んでゐるのを見て氣おくれした。すると又號令を下して曰ふには「皆立て」と。敵勢は散々に崩れて逃げ走つた。幸村は東の岡から南の岡に移り、兵士を引き纏めて、尙と交代に殿をして退却した。盛親は矢尾堤に上つて藤堂氏の旗を望んだので、後に退つて堤の蔭に隱れた。敵の先鋒の二將は、西軍が逃げたのだと思ひ込んだ。田の中を橫切つて堤に上ると、盛親は大聲にわめいて擊ちかゝり、敵を追ひ拂つた。重成の遊擊隊も援けに來て、遂にその二將を討ち取つた。

【語釋】遇槍而沮（坐つて槍を備へてゐるから馬が腹を刺されて進むことが出來ぬ。）〇二將（藤堂高刑・同良勝。）

重成與井伊直孝相距若江堤。擊破其前隊。重成揮槍挺進、所向皆靡。斬敵將山口

重信等三十餘人。而其兵死傷略盡。乃據隴而息。敵以生兵乘之。飯島某扼重成曰「盍還城。」重成掉頭而進、遂死之。直孝部兵取其頭獻之前將軍。前將軍檢之。冑纓無餘、而頭髮有香。前將軍歎惜曰「是預決死也。」重成伯父宗明戰于山田村敗退。井伊氏・藤堂氏合勢逼盛親。盛親亦敗退。增田盛次止戰。盛次長盛子也。嘗仕尾張、前役從東軍。東軍勝則憂、敗則喜。是役、入城屬盛親。以父猶在不名而死。盛親與幸村等自平野退、縱火聚落而入城。

【訳】重成、井伊直孝と若江堤に相距ぎ、撃つて其前隊を破る。重成、槍を揮つて挺進し、向ふ所皆靡く。敵將山口重信等三十餘人を斬る。而して其兵死傷略盡く。乃ち隴に據つて息ふ。敵・生兵を以て之に乘ず。飯島某・重成を扼めて曰く「盍ぞ城に還らざる」と。重成、頭を掉つて進み、遂に之に死す。直孝の部兵其頭を取つて之を前將軍に獻ず。前將軍之を檢す。冑纓餘なくして、頭髮香あり。前將軍歎惜して曰く「是れ預め死を決するなり」と。重成の伯父宗明・山田村に戰ひ敗れ退く。井伊氏・藤堂氏・勢を合せて盛親に逼る。盛親も亦、敗れ退く。增田盛次止り戰ふ。盛次は長盛の子なり。嘗て尾張に仕へ、前役には東軍に從ふ。東軍勝てば則ち憂へ、敗るれば則ち喜ぶ。是の役に、城に入つて盛親に屬す。父猶ほ在るを以て名のらずして死す。盛親、幸村等と平野より退き、火を聚落に縱つて城に入る。

通釈 重成は井伊直孝と相對して若江堤に防いでゐて、敵の前隊を撃ち破つた。重成は槍を振つて拔きんで進み、向ふ所、皆ひるんだ。彼は敵將山口重信等三十餘人を斬つた。自分の兵も死んだり負傷したりして殆んど無くなつた。そこで岡に上つて休んでゐた。敵は新手の兵でそこへつけ込んで來た。飯島某が重成を引き止めて曰ふには「何故城にお歸りになりませぬか」と。重成は頭を振り立てゝ奮然と進み、遂に討死を遂げた。直孝の部下の兵隊がその首を取つて前將軍に獻上した。前將軍が之を實檢した。冑の紐は結び切りで先は切つて餘さず。髪の毛には香をたき込んであつた。前將軍は非常に歎き惜しんで曰ふには「これは兼ねて死を覺悟してゐたのだ」と。重成の伯父宗明が山田村に於て戰つて敗退した。井伊氏と藤堂氏が軍勢を合せて盛親に迫つて來た。そして盛親も敗退した。增田盛次が留まつて戰つた。盛次は長盛の子供であつた。以前尾張に仕へ、冬の陣には東軍に從つた。そして東軍が勝てば浮かぬ顔をし、敗ければ喜んでゐた。此の度の戰には城に入つて盛親の下についてゐた。けれども父長盛がまだ(高野に)生きてゐたので、(父に災厄のかゝらぬ様に)名を名乘らないで死んだ。盛親は幸村等と平野から退却し、村落に火をかけて城に入つた。

三處之軍皆敗、將帥多死。城中失色。諸將議曰「今日期會皆失、各自為戰。所以不得志。明日、諸軍合力一戰、可以決雌雄也。」秀頼諮之幸村。幸村曰「臣請陣茶臼山、以誘敵。明石掃部自川場出今宮之南、擧火敵背、夾擊其中軍、而主公建旗鼓繼之、事或克矣」從之。旦日、幸村與渡部尙・大谷吉之等、出陣茶臼山、森勝永・竹田永應陣天王

寺南郡良列執桐號牙旗在其後。治長與七隊長陣毘沙門池南。治房與御宿政友陣岡山。津川左近執金瓢馬表在其後。東軍彌漫山野、左右竝進。前將軍統左、將軍統右。少將忠直・前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等爲先鋒。前將軍召候騎問敵狀。對曰「其陣甚堅。又待秀賴親出、頗有鬪志」。乃命質子大野治德作書、贈其父治長。

訓讀 三處の軍皆敗れ、將帥多く死す。城中、色を失ふ。諸將議して曰く「今日期會皆失し、各自戰を爲す。志を得ざる所以なり。明日諸軍、力を合せて一戰し、以て雌雄を決す可きなり」と。秀賴之を幸村に諮る。幸村曰く「臣請ふ。茶臼山に陣して以て敵を誘はん。明石掃部、川場より今宮の南に出で、火を敵の背に擧げて、其中軍を夾擊し、而して主公、旗鼓を建てゝ之に繼がば事或は克たん」と。之に從ふ。旦日、幸村、渡部尚・大谷吉之等と、出でゝ茶臼山に陣し、森勝永・竹田永應、天王寺の南に陣す。郡良列・桐號の牙旗を執つて其後に在り。治長、七隊長と毘沙門池の南に陣し、治房、御宿政友と岡山に陣す。津川左近、金瓢の馬表を執つて其後に在り。東軍、山野に彌漫し、左右竝び進む。前將軍左を統べ、將軍右を統ぶ。少將忠直・前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等先鋒爲り。前將軍候騎を召して敵狀を問ふ。對へて曰く「其陣甚だ堅し。又秀賴の親ら出づるを待ち、頗る鬪志あり」と。乃ち質子大野治德に命じて書を作り、其父治長に贈らしむ。

通釋 かく大阪方の三箇所（道明寺・若江・矢尾）の軍は皆敗北し、大將共が多勢死んだ。城中の一同は顏色を失つた。諸將が相談して曰ふには「今日は約束の手筈が皆外れ、銘々ばら／＼の戰をしたので失敗したのだ。

明日は諸軍が協力して一戰を試み、勝敗を決めねばならん」と。秀頼はそれを幸村に相談した。幸村が曰ふには「私は一つ茶臼山に陣取つて敵を誘ふ樣にさせて戴き度いものです。明石掃部は川場から今宮の南に出で敵の背後に烽火を擧げて中軍を前後から夾み撃ちにし、それから主公は旗を立て太鼓を打つて後から續かれたら、首尾よく參るかも知れません」と。その意見に從ふことになつた。翌日、幸村は渡部備・大谷吉之等と共に城を出て茶臼山に陣取り、森勝永と竹田永應は天王寺の南に陣取つた。郡良列が桐の印の大將旗を押し立てゝその後に控へた。治長は七隊長と共に毘沙門池の南に陣取り、治房と御宿政友が岡山に陣取つた。津川左近は金の千成瓢箪の馬じるしを押し立て、その後に控へた。東軍は山野一面にふさがつて、兩翼が竝び進んだ。前將軍は左軍を指揮し、將軍は右軍を統帥した。少將忠道・前田利光・本多忠朝・小笠原秀政等が先鋒であつた。前將軍は騎兵の斥候を召して敵の樣子を問うた。斥候は答へて曰ふのに「陣は非常に堅固であります。その上秀頼が自身で出陣するのを待つてをつて、鬪志頗る旺んであります」と。そこで人質の大野治德に手紙を書かせ、父治長に屆けさせた。

語釋　期會（時を刻して集まること。）○毘沙門池（天王寺の附近にある。）

治長時巡視至茶臼山。幸村曰「天下之事決於今日。公宜促主公出。主公出則軍氣自倍。川場軍亦當赴期。」治長諾而反城。則秀頼已在櫻門。擐緋甲、穿錦袍、千槍十旌左右成列、鞍於馬而竢。如秀吉東征之儀。將士踴躍。俄而治德書至。曰「聞城中有約

內應者。欲族右府出擧事。謹勿出」治長危懼、止秀賴而又往、欲與幸村議。東軍左先鋒已來逼。勝永等以銃手相挑。幸村止之、登高而望曰「中軍何不來也」因召其子大助曰「吾族在東。治長常猜我。我當死於此。汝往侍右府、以明我無貳心」大助時年十六。請止俱死。幸村叱曰「汝而死、誰明我志。盍殉右府乎」大助攬涕而去。敵兵益〻逼。而中軍及川場兵皆不至。幸村謂大谷吉之曰「事皆睽矣。是我死日已」麾兵而進、縱橫血戰。敵衆交〻至。幸村終死之。年四十六。吉之等皆死。

訓讀 治長・時に巡視して茶臼山に至る。幸村曰く「天下の事今日に決す。公、宜しく主公を促し出づべし。主公出でば則ち軍氣自ら倍し、川場の軍も亦當に期に赴くべし」と。治長諾して城に反れば、則ち秀頼已に櫻門に在り。緋甲を擐し、錦袍を穿ち、千槍十旒左右に列を成し、馬に鞍して竢つ。秀吉東征の儀の如し。將士踴躍す。俄にして治德の書至る。曰く「聞く、城中に內應を約する者あり。右府の出づるを竢つて事を擧げんと欲すと。謹んで出づる勿れ」と。治長危懼し、秀頼を止めて又往き、幸村と議せんと欲す。東軍の左先鋒已に來り逼る。勝永等銃手を以て相挑む。幸村之を止め、高きに登つて望んで曰く「中軍何ぞ來らざるや」と。因つて其子大助を召して曰く「吾が族東に在り。治長常に我を猜す。我れ當に此に死すべし。汝往いて右府に侍し、以て我が貳心無きを明にせよ」と。大助、時に年十六。止つて俱に死せんと請ふ。幸村叱して曰く「汝にして死せ

ば、誰か我が志を明にせん。盍ぞ右府に殉ぜざるや」と。大助、涕を攬して去る。敵兵益〻逼る。而るに中軍及び川場の兵皆至らず。幸村、大谷吉之に謂つて曰く「事皆睽く。是れ我が死日のみ」と。兵を麾いて進み、縱橫血戰す。敵衆交〻至る。幸村終に之に死す。年四十六。吉之等皆死す。

通俗 その時、治長は戰線を巡視して茶臼山まで來た。幸村が曰ふには、「今日は天下分目の戰です。貴公は主公の出陣を催促されねばならぬ。主公が出陣されゝば軍氣は自然倍加し、川場の軍(明石守重の軍)も時刻を違へず馳せ付けるでせう」と。治長は承諾して城に戻ると、秀頼は最早櫻門まで出てゐた。身には緋縅の鎧をつけ、錦の直垂を着、千本の槍に十流の旗がその左右に列を成して、馬に鞍を置き出陣を待つてゐた。その有樣は丁度秀吉が東征に出發する時の儀容と同じであつた。將士は皆足を踏みならして勇み立つた。すると程なく治德の手紙が屆いて來た。書中に曰ふには「聞けば城中に裏切の約束をした者が有るさうです。右府殿が出陣さるゝのを待つて事を擧げようと思つてゐるさうです。氣を付けてお出にならぬ樣に」と。治長は非常に不安を感じ、秀頼を止めて置いて又出懸け、幸村と相談しようと思つた。所が東軍の左軍の先鋒が早くも押し寄せて來た。勝永等は銃手を出してあべこべに戰を挑んだ。幸村はそれを止め、高い所に上つて望んで曰ふには「中軍はどうして來ないのだらう」と。そこで倅の大助を呼びよせて曰ふには「わが一族は東國にゐる爲めに、治長はいつも己を疑つてゐる。己はこゝに討死することにする。お前は戻つて右府殿のおそばに仕へ、己に二心の無かつたことを明に致せ」と。大助は時に十六歲であつた。止まつて父と同じく討死したいと願つた。幸村は叱つて曰ふには「汝まで死んで終つたら誰が己の志を明にする者があらう。何故行つて右府殿に殉死を仕らぬか」と。大助は涙を押へて戻つて行つた。敵兵は益〻迫つて來た。然るに中軍及び川場の隊がどちらも來ない。幸村は大

谷吉之に向つて曰ふには「何事も皆喰違ひになつた。今日は己の討死の日だ」と。兵を指揮して進み、縦横に必死の戰をした。敵の兵が後から後からとやつて來た。幸村は遂に討死した。年四十六であつた。吉之等も皆討死した。

【語釋】川場軍（明石守重の軍。）○東征之儀（北條征伐の時の儀式。）○吾族在東（信幸德川に仕ふ。信幸は幸村の兄。）

御宿政友初仕越前、後歸大坂。於是、遺書忠直曰「臣無善馬。君猶記舊情、則願賜一匹。以戰死」。忠直予之以馬。政友騎焉、自岡山至幸村營、則戰已酣矣。曰「此亦不可以死乎」。躍馬冒陣而死。勝永與忠朝戰、擊大破之、斬忠朝。遂助永應、與秀政戰、又斬之。明石守重以驍騎三百、自川場赴約、與東將水野勝成遇、交綏而南。聞茶臼山敗、則轉出生玉、與阿部氏・高木氏戰、不利而走。東軍右先鋒逼岡山。治房擊破其先隊、轉逼將軍麾下。勝永・永應亦犯前將軍麾下。井伊氏・藤堂氏橫擊勝永。勝永退。治長代進、要以銃手。不能遏。七隊長邀戰走之。

【訓讀】御宿政友初め越前に仕へ、後に大坂に歸す。是に於て、書を忠直に遺つて曰く「臣善馬無し。君猶ほ舊情を記せば、則ち願はくは一匹を賜へ。以て戰死せん」と。忠直之に予ふるに馬を以てす。政友焉に騎し、岡山

より幸村の營に至れば、則ち戰已に酣なり。曰く「此れ亦以て死す可からざらんや」と、馬を躍らせ陣を冒して死す。勝永、忠朝と戰ひ、擊つて大に之を破り、忠朝を斬る。遂に永應を助け、秀政と戰つて、又之を斬る。明石守重、驍騎三百を以て川場より約に赴き、東將水野勝成と遇ひ、交綏して南す。茶臼山の敗を聞き、則ち轉じて生玉に出で、阿部氏・高木氏と戰ひ、利あらずして走る。東軍の右先鋒岡山に逼る。治房擊つて其の先隊を破り、轉じて將軍の麾下に逼る。勝永・永應も亦前將軍の麾下を犯す。井伊氏・藤堂氏、勝永を橫擊す。勝永退く。治長の軍代り進み、要するに銃手を以てす。遏むる能はず。七隊長邀へ戰ひ之を走らす。

通釋 御宿政友は初め越前に仕へ、後大坂方になつたのである。今度の戰になつて手紙を忠直に送つて曰ふには「私には善い馬がありませぬ。貴方が今にも古い好を忘れずにゐられたならばどうぞ一頭お惠み下さい。その馬に乘つて戰死を遂げ度う存じます」と。忠直は彼に馬をやつた。政友はその馬に乘つて岡山から幸村の陣屋まで來て見ると戰は最早眞最中であつた。そこで曰ふのに「こゝは討ち死をするに不足の無い所だ」と。馬を躍らし敵陣に切り込んで死んだ。勝永は忠朝と戰つて大勝を博し、忠朝を討ち取つた。それから永應を助けて秀政と戰ひ、秀政をも斬つた。明石守重は駿足の騎兵三百人を率ゐて川場から約束通りの行動（東軍の背後に出ること）に出て、東將の水野勝成と出會つたが相引になつて南に向つた。そこで茶臼山の敗報を聞き、方向を變へて生玉に出で、阿部氏・高木氏の軍と戰つて負け戰になつて走つた。東軍の右先鋒が岡山に迫つて來た。治房はその先隊を打ち破り、方向を變へて將軍の旗下に迫つた。勝永・永應も、前將軍の旗下に攻め込んだ。井伊氏と藤堂氏が勝永の軍を橫合ひから攻めた。勝永は退いた。治長の軍がそれに代つて進み、銃手を出して迎へ討たせた。けれども防ぎ止めることが出來なかつた。七隊長が迎へ戰つて漸く之を走らせた。

語釋　生玉（天王寺の北。）

時日已過午。前將軍使人入城議和。曰「徙封大和弭兵。」淀君乃使秀賴召還治長及速水守久。二人旋旗入城。諸軍望見相驚擾。曰「城中有變也。」東軍乃齊進。城兵大潰。秀賴在櫻門。據胡床迎見治長・守久。大助亦至。叙幸村遺命。語未畢。潰兵大至。秀賴曰「我將出戰決死。」守久止之曰「潰兵塡路。不可出戰。徒死徒隷手。寧嬰壁固守。力窮而死。爲未晩也。」秀賴從之。返坐于千席館。東軍鼓譟逼城。城中有應之者。焚大野治長第。京口門先破。我庖人大隅某謀反。縱火于庖。延及殿宇。城兵大擾。諸門皆破。

訓讀　時に日已に午を過ぐ。前將軍人をして城に入り和を議せしむ。曰く「封を大和に徙し兵を弭めん」と。淀君乃ち秀賴をして、治長及び速水守久を召し還さしむ。二人、旗を旋して城に入る。諸軍望み見て相驚擾して曰く「城中、變あるなり」と。東軍乃ち齊しく進む。城兵大に潰ゆ。秀賴櫻門に在り。胡床に據つて、治長・守久を迎へ見る。大助も亦至り幸村の遺命を叙ぶ。語未だ畢らざるに潰兵、大に至る。秀賴曰く「我れ將に出で戰ひ死を決せんとす」と。守久之を止めて曰く「潰兵路に塡つ。出で戰ふ可からず。徒に徒隷の手に死せんよりは、寧ろ壁に嬰つて固守し、力窮つて死する、未だ晩からずと爲す」と。秀賴之に從ひ、返つて千席館に坐す。

東軍鼓譟して城に逼る。城中之に應ずる者あり。大野治長の第を焚く。京口門先づ破る。我が庖人大隅某反を謀り、火を庖に縱つ。延いて殿宇に及ぶ。城兵大に擾れ、諸門皆破る。

通釋 その時すでに十二時を過ぎてゐた。前將軍は人を城中にやつて和睦のことを相談させた。その言葉に曰ふには「大和に領地替へをすることにして戰を止めよう」と。そこで淀君は秀頼をして治長と速水守久を呼び返させた。この二人は旗の向きを變へて城に入つた。諸軍はそれを望み見て、皆々動搖して曰ふには「城中に何か變事があるのだ」と。東軍はそれに乘じて一齊に進んだ。城兵はひどく崩れた。秀頼は櫻門にゐた。胡床に腰かけて治長と守久とを引見した。大助もやつて來て幸村の遺命を話した。その言葉のまだ終らぬ中に崩れ立つた兵隊がどし／＼と逃げ込んで來た。秀頼が曰ふには「余は城を出て決死の戰をしようと思ふ」と。守久はそれを止めて曰ふには「散々に負けた兵隊共が路一杯になつてゐます。出で戰ふことは出來ませぬ。下司下郎の手にかゝつて詰らぬ死に態をなさるよりも、城壁を頼みにして嚴重に防禦し、力盡きて死んでも遲いことはありませぬ」と。秀頼はその意見に從ひ、城内に戻つて千疊敷に坐つてゐた。東軍は太鼓を打ち鬨の聲をあげて城に押し寄せて來た。城中に内應するものがをつて、大野治長の住居を燒いた。京口門が最初に破れた。城中の料理人の大隅某が謀叛を企て、臺所に火をかけた。その火は本殿の方まで延びた。城兵は大騷ぎをなし、諸門は全部破れて終つた。

郡良列・津川左近、擧馬表・牙旗、至千席館、跪稽首而言曰「臣等當死於城外。顧所掌表幟、先君所以傳於主公。五畿七道四海之外、苟有目者無不覩而識之。委之敵

人傳觀播弄、將貽羞萬世矣。故謹奉還耳。」良列將自殺。顧謂守久曰「去歲之役、吾獻策、欲襲敵前軍、縱火牙營。而公等弗聽。是終天之憾。事已至此。言之無益。」因卸甲、脫其母衣、置之床上曰「是先君之賜。今而致之。吾事畢矣。」遂割腹死。其子兵藏又死。眞野宗信・中島氏種、相繼自殺。野野村吉安、將入內城。火熾不可前。乃自殺於二城橋上。堀田正高纔得歸第。手刃妻子而出。遇加賀兵坌入于廳、乃健鬪而死。

訓讀 郡良列・津川左近、馬表・牙旗を擎げて、千席館に至り、駢跪稽首して言つて曰く「臣等當に城外に死すべし。顧ふに掌る所の表幟は、先君以て主公に傳ふる所、五畿七道、四海の外、苟も目有る者は之を識らざるは無し。之を敵人に委せば傳觀播弄將に羞を萬世に貽さんとす。故に謹んで奉還するのみ」と。良列將に自殺せんとす。顧みて守久に謂つて曰く「去歲の役に吾れ策を獻じ、敵の前軍を襲ひ火を牙營に縱たんと欲す。而るに公等聽かず。是れ終天の憾なり。事已に此に至る。之を言ふも益無し」と。因つて甲を卸し、其の母衣を脫ぎ、之を床上に置いて曰く「是れ先君の賜。今にして之を致す。吾が事畢れり」と。遂に腹を割いて死す。其の子兵藏又死す。眞野宗信・中島氏種、相繼いで自殺す。野野村吉安、將に內城に入らんとす。火熾にして前む可からず。乃ち二城の橋上に自殺す。堀田正高纔に第に歸るを得。妻子を手刃して出づ。加賀の兵、廳に坌入するに遇ひ、乃ち健鬪して死す。

通釋 郡良列と津川左近は夫々預かつてゐる馬表と大將旗を差し立てゝ千疊敷にやつて來て、そこに並んで膝をつき、拜伏して曰ふには「私共は城外にて討死致すべき所、考へて見るとお預かり申上げた馬表と旗は先君が主公に御傳へになつたものであります。日本全國五畿七道はおろか、海外に於ても、日のある限りの者は見て覺えて居らぬ者はありませぬ。かゝるものが敵の手に渡し、それからそれへと見物にされ、いぢり廻されては、萬世の後までも恥を殘すことになります。それ故恭しく返上仕る次第で御座います」と。良列はそこで自殺を遂げようとした。守久の方に振り向いて曰ふには「去年の戰(冬の陣)に、俺は一策をおすゝめして、敵の前軍を襲ひ本營に火をつける樣にと申上げたことがある。所が貴公はそれに耳を傾けなかつた。これが實に天地のあらん限りの思ひ殘りだ。最早かくなつても言ふも益なきことだ」と。そこで鎧を外し、母衣を脱ぎ、それを床の上に置いて曰ふには「これは先君の下され物である。今御返し申上げる。私の爲すべきことは、最早これで終つた」と。そのまゝ割腹して死んだ。その子の兵藏も死んだ。眞野宗信・中島氏種も續いて自殺した。野々村吉安は本丸に歸らうとした。火勢が猛烈で進むことができなかつた。二の丸の橋の上で自殺を遂げた。堀田正高は辛うじて自分の住居に歸ることが出來、妻子を手にかけて殺して出て行つた。丁度加賀の兵が本座敷に亂れ込む所に出會つたので、奮戰して討死した。

語釋 傳觀播弄(手から手へ傳へて弄ぶこと。)〇二城(二の丸)

秀頼奉淀君、將自殺于天主閣。守久止之曰「勝敗常也。請暫待之」。乃自觀月樓上于東櫓、烟燄隨至。治長從之園莊倉中、與守久・勝永共護之。治長猶恃和議、致書兩將

軍曰「群臣願自殺以全右府母子之命。」因使人奉夫人徳川氏致東軍。東軍既取夫人、使四將來監護倉外、命片桐且元錄倉中人名、欲出秀賴母子。四將發銃於倉中以示絕。倉中皆哭。秀賴悽然謂守久・勝永曰「吾爲太閤嫡子。而至於此。天也。」乃自刄而薨。年二十三。勝永剄之。淀君抱秀賴首悲號、使氏家道喜殺己。於是、道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應、及堀・伊藤・成田・森島・加藤・高橋・土肥・寺尾・片岡・垣原・小室・淺井・中高等二十餘人、皆殉之。治長・重成・渡部尙、並有母。與北畠氏・湯川氏等婦女十人皆死。秀賴之未死、眞田大助隨其所之。衆諭之曰「舊臣且有逃者。子客將之子、不必殉之。盍出走。」對曰「我父命我、必與右府偕死。」終就倉外、藉藁而坐、不食者一晝夜。竢秀賴死、乃自殺。

【訓讀】秀賴、淀君に奉じ、將に天主閣に自殺せんとす。守久之を止めて曰く「勝敗は常なり。請ふ暫く之を待て」と。乃ち觀月樓より東櫓に上れば、烟燄隨ひ至る。治長、之を園莊の倉中に徙し、守久・勝永と、共に之を護る。治長猶ほ和議を恃み、書を兩將軍に致して曰く「群臣願はくは自殺して以て右府母子の命を全うせん」と。因つて人をして夫人德川氏を奉じて東軍に送致せしむ。東軍既に夫人を取り、四將をして來つて倉外を監護せし

め、片桐且元に命じて倉中の人名を錄し、秀賴母子を出さしめんと欲す。四將、銃を倉中に發し、以て絕を示す。倉中皆哭す。秀賴、悽然として、守久・勝永に謂つて曰く「吾れ太閤の嫡子たり。而して此に至る。天なり」と。乃ち自刄して薨ず。年二十三。勝永之を剄す。淀君、秀賴の首を抱いて悲號し、氏家道喜をして己を殺さしむ。是に於て、道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應、及び堀・伊藤・成田・森島・加藤・高橋・土肥・寺尾・片岡・垣原・小室・淺井・中高等二十餘人、皆之に殉ず。治長・重成・渡部尙、竝に母有り。北畠氏・湯川氏等の婦女十人と皆死す。秀賴の未だ死せざるや、眞田大助其の之く所に隨ふ。衆之に諭して曰く「舊臣すら且つ逃るゝ者有り。子は客將の子、必ずしも之に殉ぜざれ。盍ぞ出で走らざる」と。對へて曰く「我が父、我に命ずるに必ず右府と偕に死せよ」と。終に倉外に就き、藁を藉いて坐し、食はざること一晝夜、秀賴の死を竢ち乃ち自殺す。

【通俗】秀賴は淀君を案內して、天主閣で自殺しようとした。守久はそれを止めて曰ふには「勝敗は常の習であります。どうぞ今暫らくお待ち下さい」と。さう言はれたので、觀月樓から東櫓に上ると、烟や焰が後を追ふ樣に近づいて來た。治長は二人を庭の倉の中に移し、守久・勝永と共に護つてゐた。治長は今になつてもまだ和議を賴みにし、兩將軍に手紙を持たせて曰ふには「何卒私共家來達は自殺をさせて頂き、右府殿母子の命をお助け致し度い」と。因つて秀賴夫人德川氏を東軍に送り屆けさせた。東軍は最早夫人を受取つて終つたので、四人の大將（井伊直孝・安藤重信・石川正次・本多正純）をよこして倉の外を警護させ、片桐且元に命じて倉中の人名を書き記させ、秀賴母子を出してやらうと思つた。所が警護に來た四將が倉の中に鐵砲を打ち込み絕交の意を示したので、倉中の者は皆口々に泣き悲しんだ。秀賴はいかにも心悲しき樣子にて守久・勝永に向つて曰ふには

「余は太閤の嫡男の身である。かゝる末路に落ちたのも天命である」と。さう言つて自刄して果てた。年二十三。勝永が介錯を承つて首を落した。淀君は打ち落された秀頼の首を抱きかゝへ、聲を絞つて哀泣し乍ら、氏家道喜に自分を殺させた。道喜・治長・守久父子・勝永兄弟・津川左近・竹田永應、及び堀・伊藤・成田・森島・加藤・高橋・土肥・寺尾・片岡・埴原・小室・淺井・中高等二十餘人が皆殉死をした。治長・重成・渡部尙は共に母親がゐた。これ等の婦人は北畠氏・湯川氏等の婦人十人と共に皆死んだ。秀頼が未だ死なぬ前、眞田大助はどこでも秀頼の行く所について行つた。皆が彼に諭して曰ふには「古い家來ですら逃げたものが有る。貴公は客分の大將の子だから、必ずしも殉死をすることはない。早く出て逃げたら如何だ」と。大助は答へて曰ふのに「私の父が、必ず右府殿と一緒に死ぬ樣と命ぜられたのです」と。いよ〳〵秀頼が倉の中に入つてからは倉の外に行つて藁を敷いて坐り、一晝夜の間物を食はず、秀頼の死んだのを待つて自殺を遂げた。

東軍諸將爭赴牙營、賀戰捷。小出三尹秀正子也。時侍前將軍側。前將軍指城中火、謂之曰「如何」。三尹瞀然俛首曰「臣不忍視」。諸將或有愧色。秀頼有一男一女。皆庶出。未知所在。東軍懸金大索之。男名國松。甫八歲。與其保田中某匿伏見農人橋畔。或睹其美質也、捕而獻之。斬于六條磧。田中持之號慟、竟殉之。京極氏捕獻其女。蜂須賀氏捕長曾我部盛親于男山。受命縛之二條城西門數日。斬于磧、徇而梟之。大坂

市尹水原石見匿二條城側。藤堂高虎捕之。石見殺三人而死。渡部倘與治長約爲後圖、走至近江。聞秀頼薨、乃自殺。治長任子後皆賜死。治長弟治氏初與兄不協。往仕前將軍。至是自殺。使人以暴疾聞。治氏弟道見磔于界浦。治氏兄治房與明石守重・仙石宗也逃去。伊東長次・青木一重並被赦。眞田幸村妻在紀伊。爲所捕獻。亦被赦、削髪爲尼。其餘大坂遺臣七十二人、卒六百人。諸出質、及通款城中者皆被誅夷。増田長盛以子故賜死配所。

【訓譯】東軍の諸將爭うて牙營に赴き、戰捷を賀す。小出三尹は秀正の子なり。時に前將軍の側に侍す。前將軍城中の火を指し、之に謂つて曰く「如何」と。三尹、瞥然首を俛して曰く「臣視るに忍びず」と。諸將或は愧色有り。秀頼一男一女有り。皆庶出なり。未だ所在を知らず。東軍、金を懸けて大に之を索む。男を國松と名づく。甫めて八歳、其の保田中某と伏見農人橋の畔に匿る。或ひと其の美質を睹るや、捕へて之を獻ず。六條磧に斬る。田中、之を持して號慟し、竟に之に殉ず。京極氏、捕へて其の女を獻ず。蜂須賀氏、長曾我部盛親を男山に捕へ、命を受けて之を二條城の西門に縛すること數日。磧に斬り、衒へて之を梟す。大坂の市尹水原石見、二條城の側に匿る。藤堂高虎之を捕ふ。石見三人を殺して死す。渡部倘、治長と後圖を爲さんと約し、走つて近江に至る。秀頼薨ずと聞き、乃ち自殺す。治長の任子は後皆死を賜ふ。治長の弟治氏、初め兄と協はず。往い

て前將軍に仕ふ。是に至つて自殺し、人をして暴疾を以て聞せしむ。治氏の弟道見は界浦に磔せらる。治氏の兄治房は、明石守重・仙石宗也と逃れ去る。伊東長次・青木一重は竝に赦さる。眞田幸村の妻紀伊に在り。捕獻する所と爲る。亦赦され、髪を削つて尼と爲る。其の餘の大坂の遺臣七十二人、卒六百人、諸〻の出でゝ質となり、及び款を城中に通ぜし者は皆誅夷せらる。增田長盛は子の故を以て死を配所に賜ふ。

通釋 東軍の諸將は爭つて本營に出かけて、捷ち戰の祝辭を述べた。小出三尹は秀正（秀賴の傅たりし人）の子である。その時、前將軍の側に侍つてゐた。前將軍は城中の火を指し三尹に向つて曰ふには「どういふ氣持ぢや」と。三尹はちらりと一目見やつたゞけで顏を伏して曰ふには「私は見て居るに耐へませぬ」と。諸將の中には羞恥の色を浮べる者もあつた。秀賴には一男一女があつた。共に妾腹であるが、その行衞が分らなかつた。東軍は懸賞金付きで大に探した。男の子は國松といふ名であつた。漸く八歳で、守役の田中某と共に、伏見の農人橋の附近に隱れてゐた。或る者が、その優れた生れ付きを目にして、捕へて差し出した。六條河原で斬つた。田中は亡骸に縋つて聲を放つて悲しみなげき、そのまゝ殉死を遂げた。京極氏は娘の方を捕へて差し出した。蜂須賀氏は長曾我部盛親を男山で捕へ、命を受けて彼を二條城の西門に數日の間縛つて置いた。それから河原で首を落して見せしめにした上に獄門にかけた。大坂の町奉行水原石見は二條城のそばに隱れて居つた。藤堂高虎が捕へようとした。石見は三人を殺して死んだ。渡部尚は治長と後日の企てを約束し、近江まで逃げて行つた。秀賴が死んだと聞いて自殺した。治長の人質は後に皆自殺を命ぜられた。治長の弟の治氏は以前兄と不仲であつた。その爲め前將軍の方に仕へてゐた。それもこの時自殺を遂げ、人をやつて急病の爲めだと申させた。治氏の弟の道見は界浦で磔刑になつた。治氏の兄の治房は明石守重・仙石宗也と共に逃げ去つた。伊東長次・

青木一重は共に許された。眞田幸村の妻は紀伊に居つた。人に捕へられて差し出された。許されて髪を剃り尼となつた。その他の大坂の遺臣七十二人と兵卒六百人、及び城中に好を通じた者は皆誅殺された。増田長盛はその子の盛次が大坂に味方した理由に依つて、配所高野山に於て自殺を仰せ付かつた。

【餘論】愧色（舊君に背いて德川氏に附いてゐるから愧ぢた。）○其女（秀頼の女は時に七歳、秀頼の夫人天樹院をして子養せしめたといふ。又一説に、松崎上人の弟子となり、練仁院と號し、道德堅固の譽があつたといふ。）○任子（入質のこと。治德をさす。）

兩將軍收二城內燼餘一、得二金二萬八千枚・銀二十四萬兩一、以二金馬各二一賜二井伊直孝・藤堂高虎一、以賞二其功一。爲二片桐且元一置二邸駿府一、徙居焉。且元愧慙成レ疾、未レ至而卒。是役也、加藤嘉明・黑田長政皆請而從。木下利房立レ功自贖、得レ復二其邑一。松下重綱亦以レ功得レ益二其邑一。重綱祖父之綱、即秀吉微時所レ仕者也。之綱死、子吉綱嗣。關原之役、屬二德川氏一。其子爲二重綱一。至レ是再益レ邑、至二二萬石一。

【訓讀】兩將軍、城內の燼餘を收め、金二萬八千枚・銀二十四萬兩を得、金馬各二を以て井伊直孝・藤堂高虎に賜ひ以て其の功を賞す。片桐且元の爲めに邸を駿府に置き、徙り居らしむ。且元、愧慙疾を成し、未だ至らずして卒す。是の役に、加藤嘉明・黑田長政皆請うて從ふ。木下利房、功を立てゝ自ら贖ひ、其の邑を復するを得たり。松下重綱も亦、功を以て其の邑を益すを得たり。重綱の祖父之綱は即ち秀吉の、微なりし時仕へし所の者

なり。之綱死し、子吉綱嗣ぐ、關原の役、徳川氏に屬す。其の子を重綱と爲す。是に至つて、再び邑を益し、二萬石に至る。

通釋 兩將軍は城内の燃え殘りを整理し、金二萬八千枚、銀二十四萬兩を得た。その他例の金の法馬二つ宛を井伊直孝と藤堂高虎とに下賜して、その功を賞した。片桐且元の爲めに邸を駿府に設けてそこへ移り住むやうにさせた。且元は心に深く恥ぢて悶々の餘、病を起し、そこに到着せぬ中に死んだ。此の夏の陣に、加藤嘉明・黑田長政は共に願ひ出て從軍した。木下利房は功を立て、罪の償ひをなし、その領地を取り戻すことが出來た。松下重綱も手柄に依つて領地を增すことが出來た。重綱の祖父の之綱は、卽ち秀吉が嘗て微賤であつた時に仕へた人である。之綱が死んで子吉綱が嗣いだ。關原の役に徳川氏に味方した。その子は重綱といつた。此の度の戰に依つて再び加增されて二萬石になつた。

語釋 木下利房（北廳の兄、家定の次男、關原の役に西軍に屬し、大敗後封を奪はれた。この時に至つてそれを復したのである。）

凡前後之役、豐臣氏舊臣從攻城者甚衆。獨福島正則不從。二年、前將軍薨。五年、正則褫封、放于信濃。時正則在江戶邸。將軍在京師。使使者來就第傳命。正則默然久之曰、「使前將軍在、則吾將一言焉。今復何言。」乃起入內。內中騷擾。久之挈其兩女子出、流涕謂使者曰、「吾欲與足下決死也、將先殺女兒。終不忍加刃。當甘心受命。」因赴

配所。將軍又使使率山陽・南海諸侯、收其封安藝・備後。其老臣留守廣島城、不肯奉命。竢正則書至、乃致城而去。其弟正賴爲大和宇多城主。先四年、褫封。寬永八年、故加藤清正子忠廣亦奪其封肥後、放于出羽。十四年、故小西行長遺臣、起兵肥前伏誅。

訓讀 凡そ前後の役、豐臣氏の舊臣の從つて城を攻むる者甚だ衆し。獨り福島正則從はず。二年・前將軍薨ず。五年、正則封を褫はれ、信濃に放たる。時に正則江戸の邸に在り。將軍京師に在り。使者をして來つて第に就いて命を傳へしむ。正則默然たること之れを久しうして曰く「前將軍をして在らしめば、則ち吾れ將に一言せんとす。今復何をか言はん」と。乃ち起つて內に入る。內中騷擾す。之れを久しうして其の兩女子を挈げて出で、流涕して使者に謂つて曰く「吾れ足下と死を決せんと欲するや、將に先づ女兒を殺さんとす。終に刃を加ふるに忍びず。當に甘心命を受くべし」と。因つて配所に赴く。將軍又使をして山陽・南海の諸侯を率ゐて、其の封安藝・備後を收めしむ。其の老臣、廣島城に留守し、肯て命を奉ぜず。正則の書至るを竢ち、乃ち城を致して去る。其の弟正賴、大和の宇多城主たり。先だつこと四年、封を褫はる。寬永八年、故加藤清正の子忠廣も亦其の封肥後を奪はれ、出羽に放たる。十四年、故小西行長の遺臣、兵を肥前に起し誅に伏す。

通釋 一體この前後二度の戰に、豐臣氏の舊臣で德川氏に味方して大坂を攻めた者は非常な多數であつた。唯だ福島正則だけは從はなかつた。二年、前將軍が薨去した。五年、正則は領地お取上になつて信濃に追放され

た。その時正則は江戸の邸にゐた。將軍は京都に居た。そして將軍は使者を彼の邸によこして命令を傳へさせた。正則は暫く默つてゐたが、曰ふには「前將軍が生きてゐられたら、私は一言したいことがあつた。けれ共今となつては言ふも益がない」と。さう言つて起ち上つて内に入つた。所が奥に物騷がしい音がした。暫くして正則は二人の娘を引いて出て來て、使者に向つて曰ふには「私は貴殿と決鬪せんとの存念で、先づ娘を殺さうと致したが、いかにも刄を加へるに忍びない。この上は甘んじて命をお受け申す」と。斯くて配所へ行つた。將軍は又使をやり、山陽・南海の諸大名を率ゐて、その領地の安藝・備後を取り上げさせた。正則の家老は廣島城を留守して命に從はうとしなかつた。正則の手紙が屆いたので、城を明け渡して立ち去つた。その弟の正頼は宇多の城主であつた。これより四年前に既に領地を取上げられた。寛永八年、故加藤清正の子の忠廣も領地の肥後を奪はれて出羽に追放された。十四年には故小西行長の遺臣が肥前に兵を起して誅せられた。（かくて豐臣氏關係の舊臣は全部片附いたわけである。）

豐臣氏既亡、有令毀豐國廟、獨存東山方廣寺及高臺寺。高臺者北廳所建、以祈秀吉冥福也。加藤・福島氏以其親屬助役、爲秀吉立一小祠。秀吉在時、雖有所嬖、皆置之別宮、獨與北廳同居。北廳佐秀吉定天下、多所裨益。常戒之曰「願良人勿忘藁席瓦缻時也」。及秀吉薨、則削髮。視秀頼猶其自出、使親屬諸將輔翼之、未嘗與關東開

ノ塋。北廳與諸將前後皆沒シテ而秀頼孤立シテ以至於亡矣。高臺之祠至今猶有秀吉夫妻ノ像云フ。

訓讀 豐臣氏既に亡び、令有つて豐國廟を毀ち、獨り東山の方廣寺及び高臺寺を存するのみ。高臺は、北廳の建てゝ以て秀吉の冥福を祈りし所なり。加藤・福島氏其の親屬を以て役を助け、秀吉の爲めに一小祠を立つ。秀吉在るの時、嬖する所有りと雖も、皆之を別宮に置き、獨り北廳と同居す。北廳、秀吉を佐けて天下を定め、裨益する所多し。常に之を戒めて曰く「願はくは良人、藁席瓦缻の時を忘るゝ勿れ」と。秀吉薨ずるに及び、則ち髮を削る。秀頼を視ること猶其の自出のごとく、親屬諸將をして之を輔翼せしめ、未だ嘗て關東と釁を開かず。北廳、諸將と前後皆沒して秀頼孤立し、以て亡ぶるに至る。高臺の祠、今に至つて猶ほ秀吉夫妻の像ありと云ふ。

通釋 かくて豐臣氏は亡んだが、軈て命令があつて豐國神社を取りこはし、唯だ東山の方廣寺と、高臺寺とだけを殘しておいた。高臺寺は秀吉の冥福を祈るために北廳が建てた寺である。加藤・福島兩氏が親戚關係からその工事を助けて、秀吉の爲めに小さな祠を一つ建てた。秀吉は在世時代に氣に入りの女があつても皆、別の御殿に置き、唯だ北廳だけと同居してゐた。北廳は秀吉が天下を平定するに就て内助の功が多かつた。いつも秀吉を戒めて曰ふには「どうぞ良人、あの藁を敷いて瓦器で三々九度をした時分の事を忘れないで下さい」と。秀吉が亡くなると髮を剃り落した。秀頼に對しては全く己れの腹を痛めた子のやうに思ひ、緣續きの諸將をして彼をかばひ助けさせ、一度も關東と氣拙い間柄になつたことが無かつた。その北廳も諸將と相前

後して皆死んで秀頼は孤立になつて終ひ、とう〳〵滅亡の運命に立ち至つたのである。高臺寺の祠には、今日でもまだ秀吉夫妻の像が有るといふことである。

叙説 本論は、太閤が早く天下を得たのは早く失ふ所以であることを論じてある。

外史氏曰、余遊東山、謁太閤像於高臺之祠。祠門蓋以征韓艦材造之云。嘗讀韓人所紀。曰明遣使者窺太閤相貌。矮而黑、無他異。唯見其目光炯炯射人、不可仰視。今觀其像、如信然者。嗚呼使太閤生於女直・靺鞨間、而假之以年、則烏知覆朱明之國者、不待覺羅氏哉。蓋其爲人、酷肖秦皇・漢武、而雄才大略遠出其右。

訓讀 外史氏曰く、余れ東山に遊び、太閤の像に高臺の祠に謁す。祠門は蓋し征韓の艦材を以て之を造ると云ふ。嘗て韓人の紀する所を讀む。曰く「明、使者を遣はして太閤の相貌を窺はしむ。矮にして黑く、他の異なる無し。唯だ其の目光炯炯として人を射、仰ぎ視る可からざるを見る」と。今其の像を觀るに、信に然る者の如し。嗚呼、太閤をして女直・靺鞨の間に生れしめ、而して之に假すに年を以てせば、則ち烏んぞ朱明の國を覆へす者、覺羅氏を待たざるを知らんや。蓋し其の人と爲り、酷だ秦皇・漢武に肖て、雄才大略は遠く其の右に出づ。

通釋　外史氏が曰ふのに、私は東山に遊んで、そこの高臺寺に於て太閤の像を見たことがある。この祠の門は何んでも、征韓當時の軍艦の古材で造つたのだといふことだ。私は嘗て韓人の書いたものを讀んだことがある。それに次のやうに曰つてある。「明が使者をやつて太閤の容貌姿勢を探らせた。所が丈は低く、色黒く、別に人に異つた所は無かつた。唯だその眼光が鋭く人を射すやうで、仰いで見ることが出來なかつた」と。今自分もその像を見ると、全くさうであつたやうに思はれる。あゝ若しこの太閤をして女直・靺鞨の種族の中に生れさせ、且つ相當の長壽を保たせたならば、明の國を亡ぼすに愛親覺羅氏の手を待たなかつたかも知れぬと考へる。思ふに彼の性格は非常に秦の始皇帝と漢の武帝に似て居り、そしてその雄才大略は遙かにこの二者を凌いでゐる。

語釋　韓人所紀（鮮人柳成龍の懲毖錄を指す。）○炯炯（光り輝やく樣。）○女直・靺鞨（共に北狄の種族名、今の滿洲人種の古名。）○朱明（明室の姓は朱氏なるが故に明を朱明といふ。）○覺羅氏（清の太祖、姓は愛親覺羅、名は奴兒哈赤（ヌルハチ）といふ。明の萬曆中に兵を起し、世宗に至つて四百州を平定す。）○雄才大略（雄拔な才と偉大な謀。）

夫漢武乘豐富、馭區宇、不論可也。秦皇挾六世之積威、蹶衰殘之六國、孰與太閤之徒手奮起制服群雄。然過用其民力、以取絕嗣之禍者、則與秦等。彼藉累葉之烈、猶且不免。況以匹夫暴起者乎。然以匹夫得天下、非如承祖業而重失之者。土地非其固有。故不惜分其利也。人民非其固畜。故不愛用其力也。夫其不愛民力、固足以招危亡、而不惜地利、又不可以計久安。此二者其勢相持、而其禍相因也。

【訓讀】夫れ漢武は豐富に乘じて區宇を馭す。論ぜずして可なり。秦皇は六世の積威を挾んで、衰殘の六國を蹶す。太閤の徒手奮起して群雄を制服するに孰與れぞや。然れども其の民力を過用して、以て絕嗣の禍を取る者は、則ち秦と等し。彼れ累葉の烈を藉つて、猶ほ且つ免れず。況んや匹夫を以て暴に起る者をや。然れども匹夫を以て天下を得るは、祖業を承けて之を失ふを重んずる者の如きに非ず。土地は其の固有に非ず。故に其の利を分つを惜まざるなり。人民は其の固畜に非ず。故に其の力を用ふるを愛しまざるなり。夫れ、其の民力を愛まざる、固より以て危亡を招くに足る。而して地利を惜まざる、又以て久安を計る可からず。此の二者其の勢相持し、而して其の禍相因るなり。

【通釋】元來、漢の武帝は文・景二帝の豐富な富を受けつぎ、それを利用して天下を思ふまゝに制馭したのである。その勞はそれ程でもなく今これを論ずるにも當らない。秦の始皇帝はそれ以前六代の間に積まれた威力を、そのまゝ恃んで弱り果てた六國を亡ぼしたのである。太閤が無一物から奮ひ起つて、群雄を制御服從したのに比べると、どんなものぢや、迚も比べものにはならぬ。けれども太閤は民力を使ひ過ぎて後目を絕やすやうな禍に逢着したが、その點は秦と同じである。彼れ始皇は代々の威烈を利用したのであるが、それでも尚ほこの禍を免れなかつたのである。まして地位なき一介の男の身から成り上つた者に於てをやである。けれども、匹夫の身からして天下を得たのであるから、先祖代々の事業を承けついで、少しでも失ふまいと大事にしてゐる者とは大變な違ひである。土地は彼が元來有してゐたものではない。だからその利益を人に分ち與へることはちつとも惜しまない。又人民は元來彼が養つてゐたものではない。だから人民の力を愛惜するといふ樣な心が無い。一體民力を愛惜しないだけでも、危機滅亡を招くに充分である。それを又領土の利益といふものをも惜しまないでゐ

たのでは、到底久しい間の安泰を計ることは出來ないのである。此の民力と地利の二者は、その勢互に相持ち合つてゐる關係にあるもので、それから起る禍も互に相原因となるものである。

【語釋】區宇（宇内の義。）〇六世（孝公・惠文王・武王・昭襄王・孝文王・莊襄王。）〇六國（楚・燕・齊・趙・韓・魏。）

【餘論】以上第一段、太閤の雄才大略を述べて、民力地利の忽にすべからざることを論ず。

然其初之所以速得天下者、無所愛惜也。譬如閭巷之人、博而獲大勝。使其不勝一窶人耳。苟勝矣、乃大揮霍之、招其朋類、醉飽喧呼、務取快一時。唯然。故暴富而人不怨。太閤起人奴而主大國、固已踰其所望。乃遭遇變故、投機赴會、動得如意。皆初念之所不至。而四顧當時將帥、皆其儕輩、或其所不敢比肩。一旦立其上、而常恐其不服己也。以爲吾由微賤而得司利權。苟自封殖而不分於人、人將吾爭。而吾志不可速成也。故割膏腴、頒金帛、動擧數州之地、以賞戰功。視之不啻如糞土。彼其鼓舞奔走一世之豪俊、以驟獲志於天下者、用此術也。

【訓讀】然れども其の初の速に天下を得る所以は、愛惜する所無ければなり。譬へば閭巷の人、博して大勝を獲るが如し。其をして勝たざらしめば、一窶人のみ。苟も勝たんか、乃ち大に之を揮霍し、其の朋類を招き、醉

飽喧呼、務めて快を一時に取る。唯だ然り。故に暴に富んで人怨みず。太閤、人奴より起つて大國に主たる、固より已に其の望む所に踰ゆ。乃ち變故に遭遇し、機に投じ會に赴き、動けば意の如きを得。皆初念の至らざる所。而して當時の將帥を四顧するに、皆其の儕輩、或は其の敵て比肩せざる所なり。一旦其の上に立ちては、常に其の己に服せざるを恐るゝなり。以爲へらく、吾れ微賤よりして利權を司るを得たり。苟も自ら封殖して人に分たざれば、人將に吾と爭はんとす。而して吾が志速に成る可からざるなりと。故に膏腴を割き、金帛を頒ち、動もすれば、數州の地を擧げて以て戰功を賞す。之を視ること啻に糞土の如きのみならず。彼れ其れ一世の豪俊を鼓舞奔走せしめ、以て驟に志を天下に獲し者は、此術を用ひたればなり。

通釋 併し乍ら彼が初め速に天下を取れた理由は、彼が民力と地利とを惜しまなかつたが爲めである。譬へて見れば恰度市井の人が、賭博をして大勝を得たやうなものである。若し勝なかつたなら一箇の貧乏人に過ぎない。若し勝たうものならそれこそ、大に儲けたものを撒き散らして友達を呼び集め、したゝか飲み食ひ、わめき騷いで、ひたすら一時の愉快を貪るのである。唯だそれだけのことである。だから急に財產家になつても人が別に怨みもせぬのである。太閤は人の召使から身を起して大國の主となつた時、それだけでも彼れとしては當初の望みを越えてゐたのである。それが突然の變事に逢ひ、(信長弑逆)その機會を巧みに利用し、一擧手一投足すべて意の如くなることを得た。これ等は皆當初思ひもよらなかつたことなのである。そして當時の大將共を見廻して見ると、何れも自分の同輩か、然らずんば肩を並べることの出來なかつた目上の者であつた。されば一度彼等の上に立つ上からは、常に彼らが自分に服從せぬのではあるまいかと心配してゐた。そして自分で考へるには、自分は微賤の者から、利益權力を自由にすることが出來る樣な自分になつた。もし自分だけ懷を肥して人に分

配しなかつたならば、人は必ず嫉妬を起して自分と爭ひを起すやうになるだらう。さうなると自分の志を速く達成するわけにはゆかなくなると。それ故に、肥えた土地や金帛を分ち與へ、ともすれば數ケ國の地を與へて戰功を賞したりした。そしてそれを視ること殆んど糞土ほどにも思はなかつたのである。彼が一世の豪傑英俊を鼓舞奔走させて、非常な速さで天下に志を遂げることの出來たのは、全く此の術を用ひたのである。

語釋 揮霍（俗意に、輕卒に財物を散ずること。）○此術（割二膏腴一云々をさしていふ。）

餘論 以上第二段、太閤の地利を惜しまなかつたことを敘ぶ。

然吾糞土授之、彼亦糞土受之。未嘗德我。而以爲當然。彼之所求無窮、而我之所有有盡。以有盡、供無窮。其勢、不得不取之於海外、以塞之。於是、七道之民、裹其未愈之瘡痍、以趨不可知之地、連年無所成而其力竭矣。而柩肉未冷、群雄各有自立之心。蓋無足怪者。故太閤之不愛民力、由其不惜地利。而其禍遂至於此。皆其自取爾。

訓讀 然れども吾れ糞土として之を授け、彼も亦糞土として之を受く。未だ嘗て我を德とせず。而して以て當然と爲す。彼の求むる所窮なくして、我の有する所盡くるあり。盡くるあるを以て、窮なきに供す。其の勢之を海外に取つて以て之を塞がざるを得ず。是に於て、七道の民其の未だ愈えざるの瘡痍を裹んで、以て知る可からざるの地に趨き、連年成る所なくして其の力竭く。而して柩肉未だ冷ならざるに、群雄各自立の心あり。

蓋し怪むに足る者なし。故に太閤の民力を愛まざるは、其の地利を惜まざるに由る。而して其の禍遂に此に至る。皆其の自ら取れるのみ。

【通釋】けれども、こちらが糞土同樣の考へで與へるならば、向ふでも糞土同樣の考へで受けるものである。別段これを有難がるものでもない。それ所か却つて當然のことのやうに思ふものである。されば彼等の求める所は限りないが、こちらの有する所には限りがある。限りあるもので、限りない慾望を滿足させようとすることになる。必然の勢として、どうしても日本國外から取つて來てそれに宛てがはねばならない。そこで七道の民はまだ癒り切らぬ傷を布に包んで、未知不案内の土地に遠征し、連年功果の無い中にその力を盡し果した。そして太閤の亡骸がまだ冷え切らぬ内に、群雄は各自立の志を抱いて豐臣氏に背き去るに至つた。思ふにこれは少しも不思議なことではない。故に考へて見ると、太閤が民力を愛惜せずに朝鮮征伐などを行つたのは、元來彼が地利を愛惜しなかつた爲め、他に支給するに不足を感じて起つたことである。そしてその結果としてかゝる禍を招くに至つた。皆自分の所爲である。

【餘論】以上第三段、太閤の民力を惜しまなかつたことを叙ぶ。

雖然、以太閤之雄才大略、八歲定六十餘國。則以其餘力、逞之海外、固其宜也。豈唯太閤爲然。當時猛將謀夫雄傑之士、布滿天下。天下已集、而其桀驁巧狙、喜事好功之心、猶未已也。譬之鷙鷹俊狗、其噬嚙搏擊之力、用而有餘、則必至逼人。故朝鮮之

役、是令天下群雄肆其噬嚙搏擊、以殺其力者也。然徒殺其力、而使其無所獲、則彼將不復我之馴服而反施其噬嚙搏擊於我。嗚呼、養之而不得其術、安往而可也。能飽之、而不能節之。能發縱指示之、而不能收而寧之。故太閤之於群雄、苟制服之一時耳。豈長久之計哉。其所以速得天下、乃其所以速失之也。梁武帝有言。自吾得之、自吾失之。無復所恨。則太閤其亦無所恨耶。

訓讀 然りと雖も、太閤雄才大略を以て、八歳にして六十餘國を定む。則ち其の餘力を以て之を海外に逞しうするは固より其れ宜なり。豈に唯だ太閤のみ然りと爲さんや。當時・猛將謀夫、雄傑の士、天下に布滿す。天下已に集つて、其の桀驁巧狙事を喜み功を好むの心、猶ほ未だ已まず。之を鷙鷹俊狗に譬へんに、其の噬嚙搏擊の力、用ひて餘有れば、則ち必ず人に逼るに至る。故に朝鮮の役は、是れ天下の群雄をして其の噬嚙搏擊を肆にして以て其の力を殺がしむる者なり。然れども徒に其の力を殺いで、其をして獲る所無からしめば、則ち彼れ將に復我に之れ馴服せずして、而して反つて其の噬嚙搏擊を我に施さんとす。嗚呼、之を養つて其の術を得ず。安に往いて可ならんや。能く之を飽かしめて、之を節する能はず。能く之を發縱指示して、收めて之を寧んずる能はず。故に太閤の群雄に於けるは、苟に之を一時に制服するのみ。豈に長久の計ならんや。其の速に天下を得たる所以は、乃ち其の速に之を失ふ所以なり。梁の武帝言へる有り「吾より之を得て、吾より之を失ふ。

復恨む所無し」と。則ち太閤も其れ亦恨む所無きか。

通釋 然し乍ら、太閤の雄才大略を以て八年間に日本六十餘ケ國を平定した。その餘力を以て海外にまで手を出し思ふ存分にすることは、固よりさうあるべきである。（餘力のやり場なのであつて）これは何も太閤だけに限つたことではない。當時は猛將謀夫雄傑の士は天下に充滿してゐた。天下一統の後になつても、その惡强くてずるい連中の事を好み功を好む心は、まだ無くなつてはゐなかつた。譬へて見れば、荒ら〳〵しい鷹やはげしい犬のやうなもので、その噛み合ひ擊ち合ふ力に餘裕があれば、必ず鋒を轉じて人に向つて來るものだ。さういふわけで朝鮮の役は天下の群雄に、各自のかみ合ひ擊ち合ふ力を思ふ存分に發揮させて、その力を殺がせたものなのである。けれ共、たゞ矢鱈にその力を殺ぐ許りで、少しも利益を得しめなかつたならば、彼らは我に馴れ服しないで、却つてその噛み合ひ擊ち合ふ力を我に向けて來るものである。嗚呼、秀吉は彼等を養ふことは養つたがその手段を誤つた。あんな遣り方では何處へ往つて、何をやつて見ても巧く行かないのが當り前だ。人々を十分に滿足せしめることは出來ても、適宜に調節することはなかつた。解き放つて指示することは出來たが（朝鮮に兵を出して働かせることは出來たが）、手の中に收めて安んぜしめることは出來なかつた。だから太閤の群雄に對する關係は、ほんの一時の制服に過ぎぬ。決して長久を保つ計ではない。卽ち彼が速く天下を得たことが、却つて早く天下を失つた譯なのである。梁の武帝の言葉に「自分で獲得して自分で喪失するのであるから、少しも遺憾はない」といふことがある。して見れば、太閤にしても同じことで、失つて見た所で少しも遺憾は無いことであつたらう。

語釋 桀驁巧狙（桀は荒々しきこと、凶暴に當る。驁は驕りて馴れぬこと、悍に當る。巧は惡達者なること。又僞ること。僞に當る。狙はわるがしこきこと。狡に當る。）○鷙鷹（鷙は荒き、猛き、疾き等の意。）○發縱指示

（漢の高祖蕭何の功を評した言。）○梁武帝有ㇾ言（南北朝時代の梁なり。武帝名は蕭衍、齊主寶巻暴虐にして、南康王寶融は兵を江陵に起し、遂に帝位に代つた。之を和帝といふ。和帝蕭衍を遣はして東征せしめた。蕭衍は建康を下し、相國梁王となり遂に和帝の位を簒つた。是卽ち梁の武帝である。武帝後佛教に心醉し政務に介意せず、梁朝は次第に衰弱して侯景の叛亂に及んで上下悉く瓦解するに至つた。侯景が臺城を陷れた時、武帝は安臥して動かず、嘆息して斯の言を發したといふ。）

餘論 以上第四段、太閤の策は一時の策で、早く天下を得た所以が早く失つた所以であることを論ず。

日本外史新釋卷十七終

日本外史新釋 卷十八

徳川氏正記

徳川氏一

我徳川氏出於新田義重。義重者清和天皇八世裔也。天皇之孫經基始賜姓源氏。降爲武臣。其玄孫義家。義家子義國、居上野。食新田・足利諸邑。生義重及義康。義重氏新田、義康氏足利。共助宗子源頼朝、以王命討滅平氏。頼朝爲征夷大將軍、開府關東、令義重守寺尾城。義重有五男。其第四曰義季。義季食徳川邑、因氏焉。稱徳川四郎。義季生頼氏。頼氏叙從五位下、任參河守、食世良田。因又號世良田氏。

訓読 我が徳川氏は新田義重より出づ。義重は、清和天皇八世の裔なり。天皇の孫經基、始めて姓を源氏と賜

ひ、降つて武臣と爲る。其の玄孫は義家。義家の子義國、上野に居り、新田・足利の諸邑を食む。義重及び義康を生む。義重は新田を氏とし、義康は足利を氏とす。共に宗子源賴朝を助け、王命を以て平氏を討滅す。賴朝征夷大將軍と爲り、府を關東に開き、義重をして寺尾城を守らしむ。義重に五男あり。其の第四を義季と曰ふ。義季德川の邑を食み、因つて氏とす。德川四郎と稱す。義季、賴氏を生む。賴氏、從五位下に叙せられ參河守に任ぜられ、世良田を食む。因つて又世良田氏と號す。

通釋 我が德川氏は新田義重から出てゐる。この義重は清和天皇の八世の子孫である。天皇の御孫の經基が始めて源氏といふ姓を賜はつて、武臣の列に降つた。この經基の玄孫は義家で、義家の子の義國は上野に居つて、新田足利の諸邑を有してゐた。義國は義重と義康を生んだ。義重は新田を姓とし、義康は足利を姓とした。共に本家の跡目たる源賴朝を助け、朝廷の命令によつて平氏を討ち亡した。賴朝は征夷大將軍と爲つて、關東に幕府を開き、新田義重に寺尾城を守らせた。この義重に五人の男子があつた。その第四子を義季といつた。義季は德川の村を領し、その緣で德川を姓とした。そして德川四郎と稱してゐた。義季が賴氏を生んだ。賴氏は從五位下に叙せられ、參河守に任ぜられ、世良田を領した。その爲め世良田氏とも號した。

語釋 我（德川氏を親しむ辭。山陽先生は德川時代の人であるから）○八世（貞純親王・經基・滿仲・賴信・賴義・義家・義國・義重）○新田・足利・寺尾・德川・世良田（上野）

賴氏生敎氏、敎氏生家時、家時生滿義、滿義生政義、政義生親季。當是時、宗子新田義貞奉後醍醐帝詔旨、討北條氏于鎌倉。滿義助之、自稻村崎入擊破賊將安東昌貫。北條氏既滅。足利尊氏反、天下武人皆黨之。獨新田氏擧族勤王。官軍數失利、帝

播遷南山。義貞戰沒、宗黨多死王事。帝崩。遺詔益眷新田氏、以圖恢復。後村上帝嗣立。義貞子義興・義宗、擧義上野・信濃間、不克、死。政義父子蓋殉之矣。

訓讀 頼氏敎氏を生み、敎氏家持を生み、家持滿義を生み、滿義政義を生み、政義親季を生む。是の時に當り、宗子新田義貞、後醍醐帝の詔旨を奉じて、北條氏を鎌倉に討つ。滿義之を助け、稻村崎より入つて賊將安東昌貫を擊ち破る。北條氏既に滅ぶ。足利尊氏反し、天下の武人、皆之に黨す。獨り新田氏は擧族王に勤む。官軍數〻利を失ひ、帝、南山に播遷す。義貞戰沒し、宗黨多く王事に死す。帝、崩ず。遺詔して、益〻新田氏を眷し、以て恢復を圖らしむ。後村上帝嗣いで立つ。義貞の子義興・義宗、義を上野・信濃の間に擧げ、克たずして死す。政義父子蓋し之に殉ず。

通釋 頼氏は敎氏を生み、敎氏は家持を生み、家持は滿義を生み、滿義は政義を生み、政義は親季を生んだ。この當時、本家の新田義貞が後醍醐天皇の詔を戴いて北條氏を鎌倉に於て討つた。滿義はそれを助け、稻村ケ崎から鎌倉に攻め込んで、賊將安東昌貫を打ち敗つた。かくて北條氏は亡んで終つた。足利尊氏が謀叛をして、天下の武家は悉く彼に組した。新田氏のみは一族全部勤王であつた。官軍は屢〻敗戰して、後醍醐天皇は谷野に還幸せられた。義貞は戰死し、一族一黨も大部分勤王の爲めに討ち死した。天皇が崩御遊ばされた。その時御遺言の詔書によつて益〻新田氏を信任せられ、帝業の恢復を圖らしめられた。後村上帝が次にお立ちになつた。義貞の子の義興と義宗とが上野・信濃の邊に義兵をあげたが、戰敗れて討ち死した。政義父子（政義と親季）が之に殉じたといふことである。

尊氏孫義滿爲征夷大將軍、開府京師、以族氏滿管領關東。親季子曰有親、爲右京亮。元中中、同宗族從義宗子貞方、匿信濃。爲氏滿所覺、遣兵鏖之。有親與貞方脫走、入陸奧起兵。氏滿大兵來擊、我衆潰。有親挈其二子逃入上野祝人村、匿舊識民家。聞鎌倉執事上杉氏遣吏募索新田氏族甚急、欲手刃二子而自殺。會々僧尊觀來過。變容貌、從之而西。尊觀者蓋後村上帝子。帝無子、養龜山帝孫恒明。及帝生子、恒明避爲僧。是爲尊觀。後爲相摸藤澤寺主、周遊諸國。謂新田氏先朝所眷也、爲謀所以保護之。乃權以有親及其長子、爲己徒弟狀、有親呼德阿彌、長子呼長阿彌、皆削髮。少子猶幼、未削髮。呼德壽。竝攜之去、過參河寓大濱村寺。時尚連歌。

訓讀　尊氏の孫義滿、征夷大將軍と爲り、府を京師に開き、族氏滿を以て關東を管領せしむ。親季の子を有親と曰ふ。右京亮と爲る。元中中、宗族と同じく義宗の子貞方に從つて、信濃に匿る。氏滿の覺る所と爲り、兵を遣はして之を鏖にす。有親、貞方と脫走し、陸奧に入つて、兵を起す。氏滿の大兵來り擊つて我が衆潰ゆ。有親、其の二子を挈へ、逃れて上野の祝人村に入り、舊識の民家に匿る。鎌倉の執事上杉氏、吏を遣はして新田氏の族を募り索むること甚だ急なりと聞き、二子を手刃して自殺せんと欲す。會々僧尊觀來り過ぐ。容貌を變じ、之に從つ

て西す。尊觀は蓋し後村上帝の子なり。帝、子なし。龜山帝の孫恒明を養ふ。帝、子を生むに及んで、恒明避けて僧と爲る。是を尊觀と爲す。後に相摸の藤澤寺の主と爲り、諸國を周遊す。新田氏は先朝の眷する所なるを謂ひ、爲に之を保護する所以を謀る。乃ち權に有親及び其の長子を以て、己が徒弟の狀と爲し、有親を德阿彌と呼び、長子を長阿彌と呼び、皆髮を削る。少子猶ほ幼にして、未だ髮を削らず。德壽と呼ぶ。並に之を携へて去り參河を過り、大濱村の寺に寓す。時に連歌を尙ぶ。

【通釋】尊氏の孫の義滿は征夷大將軍と爲つて京都に幕府を開き、一族の氏滿に關東を總括して政治せしめた。親季の子を有親といつた。右京亮と爲つた。元中年間に一族の者と共に義宗の子の貞方に從つて信濃に隱れてゐた。氏滿はそれを察知、兵をやつて皆殺しにせんとした。有親は貞方と共に脫走し、陸奧に入つて兵を起した。氏滿の大軍がやつて來て我が味方は全敗した。有親はその二人の子を連れて上野の祝人村に逃げ込み、古くから知合の民家に隱れた。所が鎌倉の執事の上杉氏が役人をよこして非常に嚴重に新田氏の一族を探索してゐるといふことを聞き、二人の子を手にかけて自殺を遂げようとした。丁度其の時僧の尊觀といふ人がその家に立ち寄つた。有親は顏や姿を變へ、(僧形と爲つて)尊觀に從つて西行した。尊觀といふのは思ふに後村上天皇の御子である。天皇には皇子が在らせられなかつた。龜山天皇の御孫恒明親王を御皇子にせられた。その後皇子がお生れになつたので、恒明親王は遠慮して僧と爲られた。それが尊觀である。後、相模の藤澤寺の住持と爲つて諸國を巡つて歩いた。新田氏は先代後醍醐帝が信任せられた者であるので、その子孫の爲めに保護の手段を講じてやられたのである。そこで有親とその長男とを自分の弟子の樣にして、有親に德阿彌と名をつけ、長男を長阿彌と名づけた。兩方共頭を剃つた。弟の方はまだ小さかつたのでまだ髮を剃らなかつた。それは德壽と名をつけた。こ

の三人をば共に連れてその地を離れ、參河の國に行つて大濱村の寺に一時泊つてゐた。その當時連歌が盛であつた。

語釋　元中（後龜山天皇の年號。）　○二子（親氏・泰親。）　○連歌（一人が三十一字歌の上句又は下句をつくり、一人之に應じて下句又は上句を連ねて一首を成すもの。）

寺僧與近村諸豪爲歌會、以娯尊觀。松平・酒井兩村長亦與焉。而長阿彌充書手、徳壽周旋執事。兩村長熟視徳壽容止、相語曰「是非凡種也」。微叩之尊觀。尊觀察其無他、具語以故。村長皆有女無男。欲分贅二子。尊觀許之。於是、徳壽養於松平氏。及長命名泰親。築室松平村、以奉有親焉。長阿彌亦蓄髮、名親氏、稱雅樂助。後生子廣親。是爲酒井氏也。

訓讀　寺僧、近村の諸豪と歌會を爲し、以て尊觀を娯ましむ。松平・酒井兩村の長も亦與る。而して長阿彌は書手に充て、徳壽は周旋して事を執る。兩村長徳壽の容止を熟視し、相語つて曰く「是れ凡種に非ざるなり」と。微かに之を尊觀に叩く。尊觀其の他なきを察し、具に語るに故を以てす。村長皆女あつて男なし。分つて二子を贅せんと欲す。尊觀之を許す。是に於て、徳壽は松平氏に養はる。長ずるに及んで名を泰親と命ず。室を松平村に築いて、以て有親を奉ず。長阿彌も亦、髮を蓄へ、親氏と名づけ雅樂助と稱す。後に子廣親を生む。是を酒井氏と爲す。

通釋 その寺の僧が、近村の豪族達と歌會を開いて、尊觀を慰めた。松平・酒井の二村の村長もそれに參加した。そして長阿彌は書記の役になり・徳壽はとり持ち雜用をした。二人の村長は徳壽の容貌態度をじつと見てゐて、話し合つて曰ふには「これは普通の人の種ではない」と、そこで人知れず尊觀に訊ねた。尊觀はこの二人に他心の無いことを察して、詳しくわけを話した。この村長等は娘があつて息子が無かつた。この二人の子を夫々入り婿させようと思つた。尊觀はそれを承諾した。徳壽は松平氏の婿になつた。成長してから、泰親と名をつけた。松平村に家を拵へて父有親をもてなした。長阿彌も髪を伸ばして親氏と名を付け、雅樂助と稱した。後に廣親といふ子を生んだ。これが酒井氏である。

語釋 松平・酒井(參河) ○贅(男が女家に入るをいふ。)

泰親養父信重稱太郎左衛門。泰親襲稱之。爲村長。闢榛莽。達道路。性壯武。喜施。振貸貧民而不責償。鄰近親附。泰親因從容謂衆曰。「吾爲仇敵追蹙。流寓至此。稍得安處。願積歳月。闢地聚衆。興復先業。諸君能助我乎」衆對曰。「敢不死生以之」其中有嘗有罪宥死者五人。糾衆略中山七邑獻之。泰親分其歳入賞之。新田氏遺臣稍多來從者。後花園帝永亨中。大納言平實照以罪貶參河。泰親善視之。及其赦歸。護入京師。實照爲奏請授一官。朝廷憚足利氏。不輒許。後敕除州目代。遂任參河守。叙從五

位下、復世良田氏

訓讀 泰親の養父信重、太郎左衞門と稱す。泰親襲いで之を稱す。村長と爲つて、榛莾を闢き道路を達す。性壯武、施を喜び、貧民に振貸して償を責めず。鄰近親附す。泰親、因つて從容として衆に謂つて曰く「吾れ仇敵に追蹙せられ、流寓此に至り稍安處を得たり。願はくは歲月を積み、地を闢き衆を聚め、先業を興復せん。諸君能く我を助くるか」と。衆對へて曰く「敢て死生、之を以てせざらんや」と。其の中に嘗て罪あつて死を宥されしもの五人あり。衆を糾し中山の七邑を略して之を獻ず。泰親、其の歲入を分つて之を賞す。新田氏の遺臣、稍來り從ふ者多し。後花園帝の永亨中、大納言平實照、罪を以て參河に貶せらる。泰親善く之を視る。其の赦され歸るに及び、護つて京師に入る。實照爲に一官を授けんことを奏請す。朝廷、足利氏を憚り輒く許さず。後敕して州の目代に除し、遂に參河守に任ず。從五位下に叙せられ、世良田氏に復す。

通釋 泰親の養父の松平信重は太郎左衞門と稱してゐた。泰親はそれを襲名した。村長になり、藪を切り開き道路を通じた。その性質は活潑勇敢で、施しを好み、貧民に貸出しをして返却を強ひなかつた。附近の者が皆なついた　泰親は因つて打ち解けて皆の衆に向つて曰ふには「私は敵に追ひかけられ、あちこち流れ歩いたが、此の地に來てどうやら落付場所を見付けた。どうか追々と土地を切りとり人を集めて先祖代々の仕事（勤王）を再び興し度いものだ。諸君は立派に私を助けて下さるか」と。皆の者が答へて曰ふには「どうして命を賭けて致さではおきませぬ」と。その人々の中に、前に罪が有つて、死罪を許された者が五人ゐた。この五人が人々を集め、中山の七村を攻め取つて獻じた。泰親はその七村の歲入を分配して褒美とした。その內に新田氏の昔の家來が、

だん〳〵仕へて來て、それが大分多くなつた。後花園天皇の永享年間に、大納言の平實照が罪有つて參河に流された。泰親はよく之を世話した。實照が赦されて歸るとき、護衛して京都に行つた。實照は役をお授け下さるやうに奏請した。朝廷では足利氏に御遠慮なされて直ぐには許されなかつた。後、參河の目代に任官し、遂に參河守に任命された。從五位下に叙せられ、世良田氏を再び名乗ることになつた。

語釋 榛莽（榛は雜木、莽は雜草繁茂せるもの、荒蕪を意味す）〇振貸（錢穀を施したり貸したりすること）

泰親有六男。使長子信廣襲居松平村。謂次子信光武類己、以爲嗣。幼字次郎三郎。初守岩津、嗣立居岡崎、稱和泉守。善用兵、攻大給・北給、幷之、又襲取安祥。寬正六年、額田民作亂。州守護細川成之不能定。幕府下敎於和泉守。一戰平之。和泉守生男女四十餘人、親戚蕃衍。次子親忠嗣。幼字竹千代、長稱藏人。居岩津。厲精爲政。常謂其老臣曰、先考嘗謂、養一士多於獲一邑。然混忠邪、濫賜予、則徒費民力耳。明應二年、擧母・寺部・上野・八草・伊保五城、合兵來攻。藏人以三千人邀擊于伊田、破之。建寺鴨田、名大樹寺、以弔陣亡士。

訓讀 泰親六男あり。長子信廣をして、襲いで松平村に居らしむ。次子信光、武己に類すと謂ひ、以て嗣と爲

す。幼字は次郎三郎。初め岩津を守り、嗣ぎ立つて岡崎に居り、和泉守と稱す。善く兵を用ひ、大給・北給を攻めて之を幷せ、又襲つて安祥を取る。寛正六年、額田の民亂を作す。州の守護細川成之定むる能はず。幕府、敎を和泉守に下す。一戰に之を平ぐ。和泉守男女四十餘人を生み、親戚蕃衍す。次子親忠嗣ぐ。幼字は竹千代、長じて藏人と稱し岩津に居る。精を厲まし政を爲す。常に其の老臣に謂つて曰く「先考嘗て謂ふ、一士を養ふは一邑を獲るより多ると。然れども忠邪を混じ、賜予を濫すれば、則ち徒に民力を費すのみ」と。明應二年、擧母・寺部・上野・八草・伊保の五城、兵を合せて來り攻む。藏人三千人を以て伊田に邀へ撃ち、之を破る。寺を鴨田に建て、大樹寺と名づけ、以て陣亡の士を弔ふ。

【通釋】泰親に六人の男子があつた。長男の信廣に松平村の長の役を繼がせた。次男の信光が武勇の點で自分に似てゐるといふので、世良田氏の後目にした。幼名は次郎三郎といつた。初め岩津を守つてをつたが、父を相續してから、岡崎に居つて和泉守と稱した。兵を用ふることが上手で、大給・北給を攻め取り、又安祥を襲ひ取つた。寛正六年、額田の人民が亂を起した。州の守護職の細川成之は平定することができなかつた。幕府は和泉守に討伐の命を下した。唯一戰で之を平げた。和泉守は男女四十餘人を生み、親類が益々殖えた。次男の親忠相續をした。幼名は竹千代、成長して藏人と稱し岩津に居つた。これが精を出して政治をした。常にその老臣に向つて曰ふには「亡き父上が嘗て、一人の武士を養ふのは一つの村を手に入れるより優つてゐると仰せられたことがある。併して忠臣惡人の區別をしないで濫りに物を與へた所で、それは徒に民力を費やすだけで利益にはならない」と。明應二年に擧母・寺部・上野・八草・伊保の五城が兵を合せて攻めて來た。藏人は三千人の兵で伊田に迎へ討つて破つた。そして鴨田に寺を建て、大樹寺と名づけて戰沒の武士を弔つた。

【語釋】岩津・岡崎・大給・北給・安祥・額田・鴨田（參河）〇先考（信光）〇明應（後土御門天皇の年號。）

藏人生九男。曰、親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乘淸。而親長守岩津、乘元守大給。長親爲嗣、居安祥稱藏人。除出雲守。定西參河而東參河猶屬今川氏親。氏親者、駿河守護也。永正三年、氏親與其將北條長氏、率大兵來攻。八月攻岩津。出雲守將五百騎赴救。謂其騎曰「衆寡不敵。如何」衆請前決死。出雲守曰「汝等世盡忠我家。而我未能厚報。今亦爲吾決死。吾所深愧」因以大桶貯酒、泛杯數十、自飮一盃瀉餘瀝桶中曰「事急。不暇觴各人。交就飮之」衆感奮、夜渡矢矧河、襲駿河軍。宇都宮忠茂曰「我必捷矣」果捷之、收軍西岸。氏親・長氏遁去。戸田憲光以田原降。出雲守問忠茂曰「何以知捷」曰「長氏負寵侮士。士無鬪志。是以知之」忠茂者、新田義貞將泰藤五世孫也、後因其所居稱大久保氏。

【訓讀】藏人九男を生む。曰く、親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乘淸。而して親長は岩津を守り、乘元は大給を守る。長親は嗣と爲り、安祥に居て藏人と稱す。出雲守に除せらる。西參河を定む。而して東參河

は猶ほ今川氏親に屬す。氏親は、駿河の守護なり。永正三年、氏親其の將北條長氏と、大兵を率ゐて來り攻め、八月岩津を攻む。出雲守、五百騎に將として赴き救ふ。其の騎に謂つて曰く「衆寡敵せず。如何」と。衆、前んで死を決せんと請ふ。出雲守曰く「汝等世〻忠を我が家に盡す。而して我れ未だ厚く報ゆる能はず。今亦吾が爲めに死を決す。吾れ深く愧づる所なり」と。因つて大桶を以て酒を貯へ、杯數十を泛べ、自ら一盃を飲み餘瀝を桶中に瀉いで曰く「事急なり。各人に觴するに暇あらず。交〻就いて之を飮めよ」と。衆感奮し、夜、矢矧河を渡り駿河の軍を襲ふ。宇都宮忠茂曰く「我れ必ず捷たん」と、果して之に捷ち、軍を西岸に收む。氏親・長氏、遁れ去る。戸田憲光、田原を以て降る。出雲守忠茂に問うて曰く「何を以て捷を知る」と。曰く「長氏寵を負んで士を侮る。士鬪志なし。是を以て之を知る」と。忠茂は、新田義貞の將泰藤五世の孫なり、後其の居る所に因つて大久保氏と稱す。

通釋　藏人は九人の男子を生んだ。親長・乘元・長親・親房・超譽・親光・長家・長忠・乘清。長男の親長は岩津を守り、次男の乘元は大給を守つた。三男の長親は相續人になつて安祥に居り、藏人と稱した。出雲守に任ぜられた。そして西參河を平定した。東參河はまだ今川氏親に屬してゐた。氏親は駿河の守護職であつた。永正三年、氏親は、その將の北條長氏と共に大軍を率ゐて攻め寄せ、八月には岩津を攻めた。出雲守は五百騎を率ゐて助けに行つた。その部下に向つて曰ふには「とても人數では太刀打は出來ぬ。どうしたものだらう」と。皆は進んで死を擲たんことを請うた。出雲守が曰ふには「お前達は代々我が家に忠義を盡してくれた。私はまだそれに厚く報いることが出來ないでゐる。然るに今亦、私の爲めに決死の覺悟をしてくれた。私は非常に恥ぢ入る次第だ」と。そこで大きな桶に酒を入れ、盃を數十個浮かしてその一を自分からとつて飮み、盃に殘つた雫を桶の中にそ

そいで曰ふには「急場の事だ。皆銘々に盃をやるわけにゆかぬ。順々にこの桶から酒を飲んでくれよ」と。皆はその言葉に奮ひ立ち、夜、矢矧河を渡つて駿河の軍を襲うた。宇都宮忠茂が曰ふには「我が軍はきつと勝ちます」と。その言葉通りに勝つて、川の西岸に軍隊を集めまとめた。氏親と長氏は逃げ去つた。戸田憲光は田原を以て降參した。出雲守が忠茂に問うて曰ふには「何うして勝ち軍が分つてゐたのか」と。答へて曰ふには「長氏は寵を恃んで武士共を侮つて居りました。それで武士共も戰爭をする氣が有りません。そこを見て味方の勝を知つたのであります」と。忠茂は新田義貞の將、泰藤の五代の孫である。後、領地の名をとつて大久保氏と稱した。

【語釋】永正（後柏原天皇の年號。）

出雲守生五男。曰、信忠・親盛・信定・利長・義春。出雲守老、信忠爲嗣。仍居安祥。任左京亮。左京亮不恤政。嬖臣用事、國内皆叛。群臣交諫弗聽。因相聚謀廢立。左京亮覺之、親戮一人。左京亮生三男。曰、清康・信孝・康孝。乃召群臣曰「我悔吾非。而不可追也。清康雖幼有器局。宜以代我」大永三年、老于大濱。

【訓讀】出雲守五男を生む。曰く、信忠・親盛・信定・利長・義春。出雲守老し、信忠嗣と爲る。仍ほ安祥に居る。左京亮に任ぜらる。左京亮政を恤へず。嬖臣事を用ひ、國内皆叛く。群臣交々諫むれども聽かず。因つて相聚り廢立を謀る。左京亮之を覺り、親ら一人を戮す。左京亮三男を生む。曰く、清康・信孝・康孝。乃ち群臣を召して曰く「我れ吾が非を悔ゆ。而れども追ふ可からざるなり。清康幼しと雖も、器局あり。宜しく以て我に代る

べしと。大永三年、大濱に老す。

通釋 出雲守は五人の男子を生んだ。信忠・親盛・信定・利長・義春である。出雲守が隱居すると、信忠が相續した。やはり安祥に居た。左京亮に任ぜられた。左京亮は政治のことに關らなかつた。寵臣共が勝手に事務を取り行つてゐた爲め、國内の人心が皆離れた。群臣は交々諫めたけれ共、言ふことをきかなかつた。そこで皆寄り集つて左京亮を廢し別人を立てることを相談した。左京亮はそれに氣が付いて、その一人を手討にした。左京亮には三人の男子が有つた。清康・信孝・康孝といつた。彼は手討にした後、群臣を召して曰ふには「余は自分の過ちを後悔してゐる。併しもう遲い。清康はまだ幼年であるが才能もあり度量も大きい。余に代つてやるのには最も適任であらう」と。自分は大永三年、大濱に隱居した。

語釋 一人(首謀者。) ○大永(後柏原天皇の年號。) ○大濱(參河)

清康立。仍居二安祥一。小字次郎三郎。幼聰達。每レ見二舊臣一、訪二古今成敗戰鬪事一、憑レ膝捋レ鬚以爲レ樂。或問二某何在一、聞二其死且戰沒一、輒痛二傷之一。嘗當レ食受レ謁。呼レ衆前レ之、以二其所レ御椀一飲二之酒一。衆不レ敢。清康曰「人生等耳。或爲レ君、或爲レ臣。分可レ隔、情可レ隔乎」强注レ之。皆霑醉。退相謂曰「今日之酒、吾輩頸血也」時族松平親貞據二岡崎及山中一以掠二傍近一。大久保忠茂曰「先拔二山中一、則岡崎不レ攻而下」乃夜襲取二山中一。親貞輒降。以二岡崎一爲二參河要地一、

徙居之。國人稱曰岡崎公。遂徇下西參河豪傑五十餘姓。欲賞忠茂、問其所欲。不答。强而後、答曰、願賜城下市租。岡崎公許之。而疑其貪也。忠茂盡召市人、以君命除其市稅。四方商旅聞之爭至。岡崎終以是富實矣。

訓讀 清康立つ。仍ほ安祥に居る。小字は次郎三郎。幼にして聰達。舊臣を見る毎に、古今の成敗戰鬪の事を訪ひ膝に憑り鬚を捋つて以て樂と爲す。或は某は何くに在るかと問ひ、其の死且つ戰沒するを聞けば、輒ち之を痛傷す。嘗て食するに當つて謁を受く。衆を呼んで之を前め、其の御する所の椀を以て之に酒を飲ましむ。衆敢てせず。清康曰く「人生は等しきのみ。或は君と爲り、或は臣と爲る。分は隔つべきも情は隔つべけんや」と。强ひて之に注ぐ。皆霑醉し、退いて相謂つて曰く「今日の酒は、吾が輩の頸血なり」と。時に族松平親貞、岡崎及び山中に據つて以て傍近を掠む。大久保忠茂曰く「先つ山中を拔かば、則ち岡崎は攻めずして下らん」と。乃ち夜、山中を襲ひ取る。親貞輒ち降る。岡崎は參河の要地たるを以て、徙つて之に居る。國人稱して岡崎公と曰ふ。遂に西參河の豪傑五十餘姓を徇へ下す。忠茂を賞せんと欲し、其の欲する所を問ふ。答へず。强ひて後、答へて曰く「願はくは城下の市租を賜へ」と。岡崎公之を許す。而して其の貪を疑ふ。忠茂盡く市人を召し、君命を以て其の市稅を除く。四方の商旅之を聞いて爭ひ至る。岡崎終に是を以て富實なり。

通釋 清康が後日を相續した。やつぱり安祥に居住してゐた。幼名は次郎三郎といふ。小さい時から利悧であつた。古い家來に會ふと、きつと昔から今に至るまでの成功失敗や戰爭の話をねだり、その膝によりかゝり、鬚

をひねつて面白がつてゐた。又誰々は何處にゐるかなどゝ問ひ、その者が病死とか戰死とかしたと聞くと、常に非常に悼んだ。或る時、食事最中に面謁を願ふ者があつた。すると彼はその者共を呼び入れ、近づけて、自分が飮んでゐた椀で、酒を飮ませたりした。皆は遠慮した。すると清康が曰ふには「人間は皆平等なものだ。今は君と爲り或は臣と爲つてゐる。その境遇の上では隔てを置くにしても、その情合に於ては隔たりはない」と。無理やりに酒をついだ。皆は十分に醉うて退出し、お互ひに曰ふには「今日飮んだ酒は、卽ち吾々の頸の血である」と。（戴いた大酒に感激して、命を捨てるから、酒がやがて頸の血になるわけ）時に一族の松平親貞が岡崎及び山中に立て籠り、附近を掠奪した。大久保忠茂が曰ふには「先づ山中の方を陷れたら、岡崎は攻める迄もなく降參するでありませう」と。そこで夜、山中を攻めて占領した。そこで親貞が忽ち降參した。岡崎は參河の大事な地點なので、清康はそこへ移つた。參河の國の人は彼を岡崎公といふやうになつた。それから遂に西參河の豪傑共五十餘家を服從せしめた。忠茂に賞を與へようと思つて、何を欲しいか尋ねた。忠茂は返事をしなかつた。無理に聞くとやつと答へて曰ふには「何卒御城下の町の商賣稅を下され度い」と。岡崎公はそれを許した。彼の貪慾を疑はしくも思つた。所が忠茂は商人を殘らず呼び集め、岡崎公の命令だとて、商業稅を免除してやつた。各地の旅商人はその噂を聞いて我れ勝ちに岡崎にやつてきた。岡崎はそんなことから財政の豐かな町となつた。

語釋　霑醉（十分に醉ふこと。）○山中（參河）

享祿二年、吉田城主牧野傳藏、欲ニ起レ兵幷ニ西參河一。岡崎公將レ兵擊レ之、出ニ伊奈一。伊奈城主本多正忠迎降。正忠之先曰ニ助秀一。居ニ豐後本多鄕一。子孫邑ニ于尾張一。尋徙ニ參河一。擧族

仕徳川氏。而正忠尤大。岡崎公幷其兵、進縱火御油。傳藏濟吉田川、毀舟而戰。我兵不利、本多信重戰死。佐野與八請退。岡崎公不肯曰「彼勝而驕。可破也」。乃進戰。與八死之。叔父信定等力戰遂破之、斬傳藏。遂攻吉田。正忠攻破其東門、遂陷之。岡崎公入城撫士民、遂攻下叛將戸田憲光、平東參河而還、會飮于伊奈。正忠獻盤殺。藉用葵三葉。岡崎公視而悅曰「吾凱旋得此。自今當以此爲徽號」。初徳川氏因宗族、以中黑爲號。於是兼用三葵。是歲、出兵於尾張、略織田氏地、取品野以賜信定。

訓讀 享祿二年、吉田の城主牧野傳藏、兵を起して西參河を幷せんと欲す。岡崎公、兵に將として之を擊ち、伊奈に出づ。伊奈の城主本多正忠迎へ降る。正忠の先を助秀と曰ふ。豐後の本多鄕に居る。子孫尾張に邑す。尋いで參河に徙り、擧族徳川氏に仕ふ。而して正忠尤も大なり。岡崎公其の兵を幷せ、進んで火を御油に縱つ。傳藏吉田川を濟り、舟を毀ちて戰ふ。我が兵利あらず、本多信重戰死す。佐野與八退かんと請ふ。岡崎公肯んぜずして曰く「彼れ勝つて驕る。破るべきなり」と。乃ち進み戰ふ。與八之に死す。叔父信定等力戰し遂に之を破り傳藏を斬つて、遂に吉田を攻む。正忠攻めて其の東門を破り、遂に之を陷る。岡崎公城に入つて士民を撫し、遂に叛將戸田憲光を攻め下し、東參河を平げて還り、伊奈に會飮す。正忠、盤殺を獻ず。藉くに葵三葉を用ふ。岡崎公視て悅んで曰く「吾れ凱旋して此を得たり。今より當に此を以て徽號と爲すべし」と。初め徳川氏、宗族

に因り、中黑を以て號と爲す。是に於て三葵を兼用す。是の歲、兵を尾張に出だし織田氏の地を略し、品野を取り以て信定に賜ふ。

通釋　亨祿二年、吉田の城主牧野傳藏が、軍を起して西參河を取らうとした。岡崎公は之を伐つ爲めに軍隊を率ゐて先づ伊奈に出かけた。伊奈の城主本多正忠が出迎へて降參した。正忠の祖先は助秀といつた。豐後の本多にゐた。その子孫は尾張に領地を持つてゐた。その後參河に移つて一族全部德川氏に仕へた。正忠は中でも一番大家であつた。岡崎公はその兵を合せ、進んで御油に火をつけた。傳藏は吉田川を渡り、舟をこはして返らぬ覺悟で戰つた。我が兵は戰敗れ、本多信重は戰死した。佐野與八が退却し度いと申し出た。岡崎公は承知しないでいふには「敵は軍に勝つて得意になつてゐる。今打ち破ることができる」と。そこで進んで戰つた。與八は討死をした。叔父の信定等が奮闘して遂に敵を破り、傳藏を斬り、更らに進んで吉田城を攻めた。正忠はその東門を攻め破つて遂に之を陷れた。岡崎公は城に入つて士民をいたはり、それから叛將戶田憲光を攻め下して東參河を平定し、伊奈に戻つて酒宴をした。正忠は鉢に盛つた肴を獻じた。肴の下に葵の葉を三枚敷いてあつた。岡崎公はそれを見て喜んで曰ふには「私は凱旋して此の御馳走に預つたのである。今後は此の葵をば紋所に致さう」と。初め德川氏は新田氏の一族である所から中黑の紋所を用いてゐた。これより三つ葵を兼用するやうになつた。此の年、尾張に出兵して織田氏の地を領し、品野といふ所を取つて信定に與へた。

語釋　亨祿（後奈良天皇の年號。）○吉田・伊奈・御油（參河）○品野（尾張）

三年、攻熊谷重長于宇理。自攻北門。信定以從子親次爲先鋒、攻南門死。初我僕人

岩瀬者殺人。岡崎公愛其勇、宥死逐之。時在城中。夜縦火為内応。我兵遂抜城。賞禄岩瀬。重長走、保高力、称高力氏。遂来降。

訓読 三年、熊谷重長を宇理に攻め、自ら北門を攻む。信定、従子親次を以て先鋒と為し、南門を攻めて死す。初め我が僕人岩瀬なる者人を殺す。岡崎公其の勇を愛し、死を宥して之を逐ふ。時に城中に在り。夜、火を縦つて内応を為す。我が兵遂に城を抜く。岩瀬を賞禄す。重長走り、高力を保ちて高力氏と称す。遂に来り降る。

通釈 三年、熊谷重長を宇理に攻め、自身水門を攻めた。信定は甥の親次を先鋒とし、南門を攻めて討死した。以前岡崎公の下僕の岩瀬といふ者が人を殺したことがある。公は彼の膽勇を愛してゐたので死を許して追放に処した。この岩瀬がこの時城中に居つた。夜、城に火をつけて内応した。我が軍は遂にこの城を陥れた。岩瀬は褒美に禄を貰つた。重長は逃げて高力を守つて、高力氏と称した。終に降参して来た。

天文二年、与廣瀬・寺部二城主戦于岩津破之。冬、信濃人来侵。迎撃大破之。岡崎公嘗夢。有文、在其握曰是。覚而問衆。衆莫知其解。有僧横外者。曰「是字日下人也。日下以一人握之。公将大興乎。然握而未啓。在其子孫乎」。岡崎公大喜、為建龍海禅寺。

訓読 天文二年、廣瀬・寺部の二城主と岩津に戦ひ之を破る。冬、信濃の人来り侵す。迎へ撃つて大に之を破る。岡崎公嘗て夢む。文あり、其の握に在つて是と曰ふ。覚めて衆に問ふ。衆其の解を知るなし。僧横外なる者あり。曰く「是の字は日下の人なり。日下、一人を以て之を握る。公将に大に興らんとす。然れども握つて未だ

啓かず。」其の子孫に在らんか」と。岡崎公大に喜び、爲に龍海禪寺を建つ。

通釋 天文二年に、廣瀨・寺部の二城主と岩津で戰つて之を破つた。その冬信濃の者が侵入して來た。これも打ち破つた。岡崎公は或る時夢を見た。それは自分の握つた掌の中に是といふ文字がある夢であつた。目がさめてから皆に問うた。誰もその意味の分るものがゐなかつた。僧の橫外といふ者がゐた。曰ふには「是といふ字は日の下の人と書く。日の下を一人の人が握つてゐる形である。公は將來大に成功されるであらう。けれども掌を握つてゐてまだ開かれぬ。これは子孫の代になるのかも知れない」と。岡崎公は非常に悦び、橫外の爲めに龍海禪寺を建てゝやつた。

語釋 廣瀨・寺部（河參）

岡崎公威名日著。甲斐國主武田信虎、遣使通好。美濃・尾張諸城主亦有願附者。公一日慨然言於將士曰「我家與足利氏族望相敵。爲其所剪滅削跡屈勢以至於此。今仇家衰亂。天下之事可知矣。冀藉汝衆之力、糾合義兵、樹幟皇都、得一雪累世之恥。今我東有今川氏。西有織田氏。先攻織田氏、以開西上之路。宜厲兵峙糧以竢吾令。」衆奮躍聽命。

訓讀 岡崎公威名日に著る。甲斐の國主武田信虎、使を遣はして好を通ず。美濃・尾張の諸城主も亦、附を願ふ

ものあり。公、一日慨然として將士に言つて曰く「我が家は足利氏と族望相敵す。其の勇滅する所と爲り、跡を削り勢を屈し、以て此に至る。今や仇家衰亂す。天下の事知るべし。冀はくは汝衆の力を藉り、義兵を糾合し、幟を皇都に樹て、一たび累世の恥を雪ぐを得ん。今我れ東に今川氏あり。西に織田氏あり。先づ織田氏を攻めて、以て西上の路を開かん。宜しく兵を厲まし糧を峙み以て吾が命を竢つべし」と。衆奮躍して命を聽く。

【通釋】岡崎公の威光名聲は日増しに高くなつた。甲斐の武田信虎は使をよこして交誼を求めた。美濃・尾張の諸城主にも味方せんと願ふ者があつた。公はある日慨いて將士に向つて曰ふには「我が家は新田の子孫で、足利氏と家柄は同じである。然るに足利氏に攻め亡ぼされ、身を匿してびく／＼し乍ら今日まで經過した。今仇の足利氏は衰へ亂れて手も足も出ない。天下のことは如何なるか自ら明瞭である。どうぞ一つお前方の力を借り、仇討の兵を集め、旗を京都に立て丶代々の恥をば一度に雪ぎ度いものである。所が目下、我が國の東には今川氏が居る。西には織田氏が居る。先づ織田氏を攻め破つて、西上の路を開くことにしよう。それには兵器をみがき、糧食を蓄へて、私の命令の出るのを待つてゐてくれ」と。皆は奮ひ躍つてその命令に從つた。

十月、勒兵萬人、自將西上、入森山。信定居上野、稱疾不從。初信定負勢驕士。落合某者、因事抗之。衆爲危之。公曰「士者、先公以來所愛養、叔父傲之非也。彼不屈撓可嘉」信定銜之。親次之死信定不救。又爲公所誚責、深懷慚恚。於是、欲乘虛作亂。將士請且止西伐。公曰「何足介意。今大擧徒歸、士氣沮敗、納侮四隣也」遂欲進攻淸洲。國老

安倍定吉從軍數、以書勗信定。有流言、定吉與信定通謀。定吉謂子彌七曰「衆嫉我寵、造作語言。主公必察之。即不察見誅、愼勿以爲怨。宜俟時鳴冤」十二月、軍中馬逸。衆大騷。彌七奉刀侍公側。謂定吉已被殺、惶急拔刀弑之。植村榮安自傍誅彌七。定吉聞之將自殺。松平信孝止之。時出雲守猶在。將士護喪歸、請命焉。

【訓讀】十月、兵萬人を勒し、自ら將として西上し、森山に入る。信定上野に居り、疾と稱して從はず。初め信定、勢を負み士に驕る。落合某なる者、事に因つて之に抗す。衆、爲に之を危む。公曰く「士は先公以來愛養する所、叔父之に傲るは非なり。彼れ屈撓せざるは嘉すべし」と。信定之を銜む。親次の死するや信定救はず。又公の誚責する所と爲る。深く慙恚を懷く。是に於て、虛に乘じ亂を作さんと欲す。將士且く西伐を止めん事を請ふ。公曰く「何ぞ意に介するに足らん。今、大擧して徒に歸らば、士氣沮敗し、侮を四隣に納れん」と。遂に進んで清洲を攻めんと欲す。國老安倍定吉、軍に從ひ、數書を以て信定を勗めしむ。流言あり、定吉、信定と謀を通ずと。定吉、子彌七に謂つて曰く「衆、我が寵を嫉み、語言を造作す。主公必ず之を察せん。卽し察せずして誅せらるゝも、愼んで以て怨と爲す勿れ。宜しく時を俟つて冤を鳴らすべし」と。十二月、軍中馬逸す。衆大に騷ぐ。彌七刀を奉じて公の側に侍す。定吉、已に殺さると謂ひ、惶急して、刀を拔き之を弑す。植村榮安傍より彌七を誅す。定吉之を聞いて將に自殺せんとす。松平信孝之を止む。時に出雲守猶ほ在り。將士喪を護つて歸り、命を請ふ。

通釋 十月、兵士一萬人を揃へ、自ら大將となつて西に向ひ、森山といふ處に入つた。其の時信定は上野に居つて、病氣だと言つて、軍に加はらなかつた。この以前信定は勢をかさにきて高ぶつた態度が多かつた。落合某といふ者が、或る事によつて信定と爭つた。それで多くの人々が心配して居た。岡崎公が曰ふには「我が士は父上の時以來、愛し養つて居る者であるから、叔父が、此の士に高ぶるのは宜しくない。又彼れ落合が叔父に屈しなかつたのは、感心なことだ」と。信定は此の事を怨みに想つてゐた。又親次が死んだ折、信定は之を助けなかつた。これも岡崎公から叱られた。深く恥ぢ入り、心の中に怒りが燃えたぎつてゐた。そこで此の度西上の虚に乘じて反亂を起さうと思つた。岡崎公の將士達がしばらく西に攻め上るのを控へるやうに願つた。公が曰ふには「少しも心にかけることはない。今兵士を澤山集めてから、空しく引き返したならば、兵の元氣は崩れ、又四方の國々からは侮られるだらう」と。遂に進んで清洲を攻めようとした。其の時、家老の安倍定吉は從軍して居て、度々手紙をやつて信定に勉勵するやう忠告した。すると定吉が信定と謀を通じ合つて居ると噂が立つた。定吉は子の彌七に向つて曰ふには「人々は自分が公から愛せられるのを嫉んで、この噂を立てたのであらう。併し御主人はきつと此の事をお察しになる。若し不幸にして殺されるやうなことがあるとしても、愼んで御主公を怨むではないぞ。時を待つて無實の罪を訴へるのがよろしいぞ」と。十二月に、軍中で馬が逃げ出した。人々が大層騷ぎ廻つた。彌七は其の時、公の刀を捧げてお側に附き隨つて居た。此の騷ぎは父の定吉が殺されたのだと思ひ込んで、急ぎあわてゝ、刀を拔き公を殺害して終つた。植村榮安は時を移さず傍から躍りかゝつて不臣彌七を屠つた。父の定吉は此の有樣を聞いて自害しようとした。松平信孝は之をおさへた。其の時、祖父の出雲守長親はまだ存生中であつた。將士は岡崎公のなきがらを護衛して歸り、其の指圖を仰いだ。

語釋 森山（尾張）○因レ事抗レ之（清康が散樂を催した時、落合喜兵衞先づ至り、閒違へて信定の席に就いた。信定が來て之を責めたので、喜兵衞は驚いて、詫り、その席を去らうとした所が、又叱つて席を立てと促した。そこで怒つてこんどは居直つて頑としてその席を去らなかつた。）○親次之死（宇理の戰で死んだ）

初岡崎公娶青木氏、生廣忠。乃立之。以定吉無罪、宥使傳之。織田信秀聞我內變、舉兵來侵。我見兵八百、以季父康孝爲將、迎戰伊田。植村榮安先進。高力重長及子長安戰死。信秀戰敗、請和而去。信定有寵於出雲守。遂圖自立。定吉奉廣忠、出奔伊勢。信定遂立居上野、自結於織田氏。定吉密與弟正定及大久保忠茂子忠俊・酒井廣親孫正親・正親從子忠次・石川清兼・石川數正・成瀨正義通謀、請援於今川氏、以納廣忠。五年冬、護入牟呂參河人多往歸之。

訓讀 初め岡崎公青木氏に娶り、廣忠を生む。乃ち之を立つ。定吉罪なきを以て宥して之に傳たらしむ。織田信秀我が內變を聞き、兵を擧げて來り侵す。我が見兵八百、季父康孝を以て將と爲し、迎へて伊田に戰ふ。植村榮安先んじ進む。高力重長及び子長安戰死す。信秀戰敗れ、和を請うて去る。信定、出雲守に寵あり。遂に自立を圖る。定吉、廣忠を奉じ、伊勢に出奔す。信定遂に立ちて上野に居り、自ら織田氏に結ぶ。定吉密に弟正定、及び大久保忠茂の子忠俊・酒井廣親の孫正親・正親の從子忠次・石川清兼・石川數正・成瀨正義と謀を通じ、援

を今川氏に請ひ以て廣忠を納る。五年冬、護つて牟呂に入る。參河の人多く往いて之に歸す。

通釋 岡崎公は青木氏の女と結婚して廣忠を生んだ。そこで廣忠を後嗣に立てた。そして定吉は罪がないので一切の行き掛りを許して其のお守役にきめた。織田信秀はこちらの內部のごた〳〵を知つて、兵を引きつれて攻め寄せた。其の時こちらの手許の兵は八百人ゐたので、廣忠の末の叔父に當る康孝を大將として伊田に迎へ擊つた。植村榮安は先登を切つて進んだ。高力重長と其の子長安は戰死した。遂に戰は信秀方の負けとなり、信秀は和睦を願つて歸つた。信定は出雲守の覺えがめでたかつた。遂に自立を計畫した。定吉が廣忠をつれて伊勢に落延びた。信定はとう〳〵自立して上野に居り、自分から進んで織田氏と提携した。定吉は內密に弟の正定や大久保忠茂の子の忠俊・酒井廣親の孫正親・正親の甥忠次・石川清兼・石川數正・成瀨正義など言ふ面々と謀を通じ、今川氏に援けを求めて、廣忠を國に迎へさせた。五年冬、廣忠を護つて牟呂に到着した。參河の人は澤山やつて來て、廣忠に從つた。

語釋 康孝（信忠の三男。）〇伊田・牟呂（參河）

六年、信定來攻。忠俊伴從其軍、射書城上、期以四月迎之。信定危疑。宣言曰「我初無害姪孫之意。徒誅諸亂人而已」乃引兵還。數與將士誓。忠俊三上誓書、而密告岡崎留守松平信孝。信孝曰「吾亦欲之。未得間耳。念公等事不成死、誰繼之者。吾且至身焉」乃稱疾赴有馬。五月、忠俊等密迎廣忠入岡崎。將士爭謁。出雲守聞之喜曰「吾恐

駿河兵因以侵我。故距之耳。兒我嫡曾孫也。因命信定折節事之。信定不得已來謁。信孝亦歸。廣忠任參河守。忠俊以下受賞。忠次稱左衞門尉。自父氏次稍積功勞。於是娶參河守妹。尤見親重。七年、信定卒。衆心乃定。定吉羞爲逆家。自絕其嗣。婢有身。出嫁井上氏。井上氏實安倍氏胤也。

訓讀 六年、信定來り攻む。忠俊、佯つて其の軍に從ひ、書を城上に射て、期するに四月之を迎ふるを以てす。信定危疑す。宣言して曰く「我れ初より姪孫を害するの意なし。徒諸の亂人を誅するのみ」と。乃はち兵を引いて還る。數將士と誓ふ。忠俊三たび誓書を上り、而して密に岡崎の留守松平信孝に告ぐ。信孝曰く「吾も亦之を欲す。未だ間を得ざるのみ。念ふに公等、事成らずして死せば、誰か之に繼ぐ者ぞ。吾れ且く身を全うせん」と、乃ち疾と稱して有馬に赴く。五月、忠俊等密に廣忠を迎へて岡崎に入る。將士爭ひ謁す。出雲守之を聞き、喜んで曰く「吾れ駿河の兵の因つて以て我を侵すを恐る。故に之を距ぐのみ。兒は我が嫡曾孫なり」と。因つて信定に命じ、節を折つて之に事へしむ。信定已むを得ずして來り謁す。信孝も亦歸す。廣忠參河守に任ぜらる。忠俊以下賞を受く。忠次、左衞門尉と稱す。父氏次より稍功勞を積む。是に於て參河守の妹を娶り、尤も親重せらる。七年、信定卒す。衆心乃ち定る。定吉、逆家たるを羞ぢ、自ら其の嗣を絕つ。婢身む有り。出でゝ井上氏に嫁す。井上氏は實は安倍氏の胤なり。

通釋 六年、信定が攻めて來た。すると忠俊は佯つて其の軍隊に從つて手紙を弓で城の上に射上げて、四月に

なつたら廣忠を迎へませうと言ひ送つた。信定も心配になる點があつた。言ひふらして曰ふには「自分は初めから甥の子廣忠をやつゝける意思はなかつた。只謀反をする多くの奴等を殺さうとするだけだ」と。そこで兵を引きつれて返つて行つた。そして何度も何度も將士と誓約をした。忠俊は三度誓書を差出して置きながら、密に岡崎の留守役松平信孝に四月に廣忠を迎へると通知した。信孝が曰ふには「自分も廣忠を迎へようとは思つて居る。併しまだ其の時機を得られないだけだ。考へるに、貴公達が成功しないで死ぬやうなことがあつたなら、誰が其の後を受けつぐのだ。だから自分はしばらく身を安全に保つて後日の爲めに備へよう」と。そこで一計を案じて病氣といふことにして、有馬の溫泉に行つた。五月、忠俊等はこつそり廣忠を迎へて岡崎に來た。すると多くの將士は吾れ先きにとお目通りに出た。出雲守は之を聞いて喜びの聲を擧げて曰ふには「自分は駿河の今川勢が、之に乘じてこちらを侵略するのを恐れた。何とかして之を防がうと、苦心したのであつた。廣忠は自分の正統の曾孫なのだから決して粗末にしたわけではない」と。因つて信定に、自分の考をまげて、廣忠に事へるやうに命じた。信定は仕方がないので來つて面會をした。信孝も亦有馬から歸つた。廣忠はそこで參河守に任ぜられた。忠俊以下功のあつた者は賞をもらつた。忠次は左衞門尉と言つた。父の氏次の時から次第に手柄を重ねて來たが、此の時になつて參河守の妹を妻にもらひ、一番親しみ重んぜられた。七年、信定が死んだ。人々の心は安定した。定吉は息子のために主家に叛いた家となつたのを恥ぢて自分から子孫を絶やした。しかしその下女で種を宿したものがあつた。井上氏に嫁いで行つた。だから井上氏は眞實は安倍氏の系統である。

語釋 有馬（攝津）○因以侵レ我（今川氏が廣忠を納れることを名義として岡崎に攻め込むのである。）○逆家（其の子の彌七が淸康を弑したので、逆臣の家といふことゝなる。）

九年六月、織田氏兵來、攻㆓松平長家于安祥㆒。參河守使㆘松平康信等援㆒之。不レ利。長家

及松平康忠・林政緣等皆死。松平利長・松平忠繼苦戰卻之。十年、參河守娶刈谷城主水野忠政女。十一年、歲次壬寅。十二月二十六日、生男子岡崎。有奇質。出雲守視之曰「此兒必揚名於天下。」令酒井正親・石川清兼舉之、因故事命幼字竹千代。是歲、秋、織田氏復來侵、乞援於今川氏。今川氏遣僧大原、以三萬人來救、與戰于小豆坂。互有勝敗。冬又來侵。內藤清長擊卻之。十二年、水野忠政卒。子信元叛、附織田氏。參河守難今川氏之意、與之絕婚、再娶戶田憲光女。

訓讀 九年六月、織田氏の兵來り、松平長家を安祥に攻む。參河守、松平康信等をして之を援けしむ。利あらず。長家及び松平康忠・林政緣等皆死す。松平利長・松平忠繼苦戰して之を卻く。十年、參河守、刈谷の城主水野忠政の女を娶る。十一年歲壬寅に次す。十二月二十六日、男を岡崎に生む。奇質有り。出雲守之を視て曰く、「此の兒必ず名を天下に揚げん」と。酒井正親・石川清兼をして之を舉げしめ。故事に因つて、幼字を竹千代と命ず。是の歲秋、織田氏復來り侵す、援を今川氏に乞ふ。今川氏僧大原を遣はし、三萬人を以て來り救ひ、與に小豆坂に戰ひ互に勝敗有り。冬又來り侵す。內藤清長擊つて之を卻く。十二年、水野忠政卒す。子信元叛き、織田氏に附く。參河守今川氏の意を難り、之と婚を絕ち再び戶田憲光の女を娶れり。

通釋 九年六月、織田氏の兵が松平長家を安祥に攻めた。參河守は松平康信をして援けさせたけれども、負け

た。長家は松平康信・林政縁等は皆戰歿した。しかし松平利長や松平忠繼は苦戰して敵を退却させた。十年、參河守は刈谷の城主水野忠政の娘を妻に迎へた。十一年は壬寅のとしまわりとなる。其の十二月二十六日に岡崎で男の子を生んだ。其の子は並々でない性質があつた。出雲守は之を見て曰ふのに「此の子はきつと天下に名前を揚げるに違ひない」と、酒井正親と石川清兼とに之を養育させた。祖先の例を取つて幼名を竹千代とつけた。此の年の秋に織田氏が再び攻めて來た。そこで今川氏に助けを請うた。今川氏は僧大原に三萬人の兵を授けて救ひに向はせ、小豆坂で戰つてお互ひに勝つたり敗けたりした　冬に又々攻め寄せた。此の時は内藤清長が之を撃ち卻けた。十二年、水野忠政が死んだ。子の信元は叛いて織田氏に從つた。參河守は今川氏の思惑を憚つて、水野の娘と離婚し、戸田憲光の娘と再婚した。

【語釋】故事（六世の祖親忠の幼字を竹千代といつた。そして代々皆幼字を竹千代と言つたその例に傚つたのである。）○小豆坂（參河）

十三年八月、出雲守卒。織田信秀遣族敏宗攻安祥。敗去。信秀自將代攻拔之。佐崎城主松平忠倫叛降、爲信秀守上輪田、以逼岡崎。十四年、參河守自將擊尾張兵于清暇、走之追至安祥與城兵戰、大敗、殆不免。本多忠豊止戰死之。參河守得脫。取忠豊金扇馬表、置之牙營、以旌其忠。松平信定子清定、據上野叛。初酒井正親兄忠尚、讒人而不遂。慚而退居。於是往歸清定。參河守攻之。不利。

訓讀 十三年八月、出雲守卒す。織田信秀、族敏宗を遣はして安祥を攻めしむ。敗れて去る。信秀自ら將として代り攻めて之を拔く。佐崎城主松平忠倫叛き降り、信秀の爲に上輪田を守り、以て岡崎に逼る。十四年、參河守自ら將として、尾張の兵を清畷に擊つて之を走らせ、追つて安祥に至り、城兵と戰つて、大に敗れ、殆ど免かれず。本多忠豐止り戰つて之に死す。參河守脫るゝを得たり。忠豐の金扇馬表を取つて、之を牙營に置き以て其の忠を旌す。松平信定の子清定、上野に據つて叛く。初め酒井正親の兄忠尙、人を讒して遂げず。慚ぢて退居す。是に於て、往いて清定に歸す。參河守之を攻む。利あらず。

通釋 十三年八月、出雲守が歿した。織田信秀は一族の敏宗を遣はして安祥を攻めさせた。併し敗北して歸つた。信秀は今度は自分から大將となつて代つて攻め之を破つた。佐崎の城主松平忠倫は叛いて敵に降り信秀の爲めに上輪田を守り、岡崎に攻め寄せた。十四年、參河守は自ら大將となつて、尾張方の兵を清畷で打ち破り、之を敗走させ、追擊して安祥に來り、城の兵と大に戰ひ、却つて大敗を喫し、殆んど命も危かつた。本多忠豐が踏み止つて戰ひ、遂に戰死した。其の間に參河守は逃げ延びることが出來た。そこで忠豐の金の扇の馬じるしを、本陣に置いて、其の忠義を表彰した。松平信定の子清定が、上野に立て籠つて叛いた。初め酒井正親の兄の忠尙は、人をあしざまに讒言したが、成功しなかつたことがあつた。それが爲めに恥ぢて隱居して居た。その忠尙はこゝで出掛けて行つて清定に從つた。參河守は之を攻めた。併し勝つことは出來なかつた。

語釋 佐崎・上輪清・清畷（參河）

十五年三月、近臣岩松八彌醺、入公寢爲逆。不成。參河守拔刀逐之。八彌走出。植村

榮安入。遇之橋上相搏墮濠。松平信孝提槍來、臨濠曰「子縱之。我刺之」。榮安曰「縱則逸。併我刺之」。信孝猶豫。榮安遂斬八彌。九月、參河守自將攻上野。大久保忠俊ノ姪兒忠世力戰。清定・忠尙皆降。置清定于櫻井令忠尙守上野。時松平信孝負功橫肆。親戚死者、輒幷其邑。衆謂復生一信定矣。十六年正月、信孝如駿河。衆請乘其不在、收其邑。從之。信孝至。無所歸。訴之今川氏。今川氏詰參河將士。將士告故。信孝乃走輪田、依松平忠倫、終降織田氏。酒井忠尙復叛應之。

【訓讀】十五年三月、近臣岩松八彌酗し、公の寢に入つて逆を爲す。成らず。參河守刀を拔いて之を逐ふ。八彌走り出づ。植村榮安入る。之に橋上に遇ひ、相搏つて濠に墮つ。松平信孝槍を提げて來り、濠に臨んで曰く「子之を縱て。我れ之を刺さん」と。榮安曰く「縱たば卽ち逸せん。我を併せて之を刺せ」と。信孝、猶豫す。榮安遂に八彌を斬る。九月、參河守自ら將として上野を攻む。大久保忠俊の姪兒忠世力戰す。清定・忠尙、皆降る。清定を櫻井に置き、忠尙をして上野を守らしむ。時に松平信孝、功を負んで橫肆なり。親戚の死する者は、輒ち其の邑を併す。衆、復一の信定を生ずと謂へり。十六年正月、信孝駿河に如く。衆、其の在らざるに乘じて其の邑を收めんと請ふ。之に從ふ。信孝至る。歸る所無し。之を今川氏に訴ふ。今川氏參河の將士を詰る。將士故を告ぐ。信孝乃ち輪田に走り、松平忠倫に依つて、終に織田氏に降る。酒井忠尙復叛て、之に應ず。

通釋 十五年三月、お側附の家來岩松八彌といふ者、酒に醉つて心が狂ひ、公の寢室に押し入つて公を殺さうとした。成功はしなかつた。參河守は刀を拔いて之を追ひ拂つた。八彌は飛び出して逃げた。丁度植村榮安が城に入らうとした。之と橋の上で出會ひ、組討をして濠に墮ちた。松平信孝は槍を取り出して走せ來り、濠をのぞき込んで曰ふには「貴公八彌をはなせよ、自分が一刺で刺し殺して終ふから」と。榮安が曰ふのに「放したら逃げてしまう。自分と一緒に突き刺して終へ」と。信孝はたぢろいだ。然かし榮安は遂に八彌を斬り殺すことが出來た。九月、參河守は自ら大將となつて上野を攻めた。大久保忠俊の甥の忠世がよく戰つた。清定や忠尙は皆降參した。それで清定を櫻井に居らせ、忠尙には上野を守らせた。其の時松平信孝は手柄を鼻にかけて、我儘勝手をやつた、親戚で死んだ者があると直ぐに其の領地を自分のものにした。それで人々は又一人信定が出たと言ひ合つた、十六年正月。信孝が駿河に出掛けた。人々は其の留守の間に領地を取り上げる樣に願つた。參河守はその申出に從つた。信孝は歸つて來た。併し落ちつく處がなかつた、今川氏に此の由を訴へた。今川氏は參河の將士を問ひ詰めた。將士連はその譯を話した。信孝はそこで輪田に遁れ、松平忠倫に賴つて終に織田氏に降參して終つた。酒井忠尙は再び叛いてこれ等と一味になつた。

語釋 酗（音ク。酒に醉うて怒ること。）○櫻井（參河）○信定至（變事を聞いて來たのである。）○詰（なぜ信孝の邑を收めたかと詰る。）

九月、我兵攻二信孝一、戰二于亙邑一。鳥居忠宗死レ之。以レ亙賜二忠宗父忠吉一。忠吉八世祖忠景、與二栗生顯友者一、事二新田義貞一。及レ敗、共匿二于亙一。至二忠吉一、與二栗生某一俱出、仕二岡崎公一。栗生

後爲大番頭。十月、忠倫將導尾張兵取岡崎。參河守遣刺客殺之。織田信廣代守輪田。益築六砦。參河守乞援於今川義元。義元徵質子。乃以世子竹千代應之。生六年矣。與諸將士質五十餘人、東赴駿河。外舅戸田憲光陰通款尾張。伴以好迎館于觀潮坂、馳使告尾張曰「公欲取參河、則莫若奪是質。」信秀大喜、遣其將林正成等赴田原、以錢五百貫賜憲光。岡崎人森平太者、爲正成部卒、潛來我館、戒曰「戸田氏以郎君爲奇貨。公等未之知乎。」因告以故。我衆不信。

訓讀　九月、我が兵信孝を攻め、亙邑に戰ふ。鳥居忠宗之に死す。亙を以て忠宗の父忠吉に賜ふ。忠吉八世の祖忠景、栗生顯友なる者と新田義貞に事ふ。敗るゝに及び共に亙に匿る。忠吉に至り、栗生某と倶に出でゝ岡崎公に仕ふ。栗生、後に大番頭と爲る。十月、忠倫、將に尾張の兵を導いて岡崎を取らんとす。參河守刺客を遣はして之を殺す。織田信廣代つて輪田を守る。六砦を益し築く。參河守援を今川義元に乞ふ。義元、質子を徵す。乃ち世子竹千代を以て之に應ず。生れて六年なり。諸將士の質五十餘人と、東駿河に赴く。外舅戸田憲光、陰に款を尾張に通ず。伴つて好を以て迎へ、觀潮坂に館し、使を馳せて尾張に告げて曰く、「公參河を取らんと欲せば、則ち是の質を奪ふに若くは莫し」と。信秀大に喜び、其の將林正成等を遣はして田原に赴き、錢五百貫を以て憲光に賜ふ。岡崎の人森平太といふ者、正成の部卒と爲り、潛に我が館に來り戒めて曰く、「戸田氏、郎君を以て奇

貨と爲す。公等未だ之を知らざるか」と。因つて告ぐるに故を以てす。我が衆信ぜず。

通釋 九月、我が兵は信孝を攻めて、互邑で戰つた。鳥居忠宗は此の時戰死した。互邑は忠宗の父忠吉に賜はつた。忠吉の八代前の先祖の忠景といふのは、栗生顯友といふ者と一緒に新田義貞に事へた。敗北した時に共に互邑に匿れた。それが忠吉の時になつてから、栗生某といふ者と一緒に岡崎公に出仕したのである。そして栗生は後に大番頭となつた。十月、忠倫は尾張の兵を案内して、岡崎を取らうとした。參河守は刺客をやつて、忠倫を殺して終つた。そこで織田信廣が、代つて輪田を守ることゝなつた。それで六ケ所の砦を增築した。參河守は今川義元に援助を頼んだ。義元は人質を要求した。そこで跡嗣の竹千代をやつて、其の要求に應じた。竹千代は年がやつと六歳であつた。諸將士の人質五十餘人の者と一緒に、東の方駿河に向つた。すると參河守の舅である戸田憲光が、密に尾張方に內通した。伴つて好意を見せて、竹千代等を迎へ、觀潮坂に泊り使を尾張に馳せて知らせて曰ふには「公が參河を取らうと思ふならば、此の人質を奪つて終ふのが一番良い」と。信秀は大層喜んで部下の將林正成等を田原に遣り、又憲光には錢五百貫を與へた。此の時岡崎の人で、森平太といふ者が、正成の部下の兵卒となつて居たが、密にわが館にやつて來て、曰ふには「戸田氏は若君を食ひ物にしようとして居る。あなた方はまだ知らないのか」と。さうして色々と其の譯を物語つた。然し我が將士は其れを信じようとはしなかつた。

語釋 互邑・田原（參河）○信廣（信長の兄。）○外舅（廣光の後妻の父だから。）○觀潮坂（遠江）○奇貨（よいしろもの史記の字面。）

旦日、憲光來說曰「此至二駿河一多二大川一、雨而暴漲。不レ若レ由二海路一也。」衆從レ之、護二世子一上レ船。

正成乘別船從其後、轉舵至熱田。岸上有兵、與從船相招。天野康景猶幼。在世子傍。覺變、乃謂其僕曰「平太之言信矣。比上岸汝亟混敵兵、走歸岡崎、具白所見。」已而上岸。正成納世子於大宮司。康景僕走歸告故。上下大驚。康景之先、亦新田氏遺臣也。已而信秀使至、曰「貴息在西。公宜背東鄉西。不則非貴息利。」參河守答曰「欲殺卽殺。吾曷以一子故、失信鄰國哉。」信秀怒、錮世子於天王坊、備其艱苦。生母水野氏、再嫁於尾張人久松俊勝、與熱田近。遣家士平野某・竹內某存問之、給以衣物。

訓讀 旦日、憲光來り說いて曰く、「此より駿河に至るは大川多く、雨ふつて暴漲す。海路に由るに若かざるなりと。衆、之に從ひ、世子を護つて船に上る。正成、別船に乘じて其の後に從ひ、舵を轉じて熱田に至る。岸上に兵あり、從船と相招く。天野康景、猶幼なり。世子の傍に在つて、變を覺り乃ち其の僕に謂つて曰く「平太の言、信なり。岸に上る比、汝亟に敵兵に混じ、走つて岡崎に歸り、具に見る所を白せ」と。已にして岸に上る。正成、世子を大宮司に納る。康景の僕、走り歸つて故を告ぐ。上下、大に驚く。康景の先も、亦新田氏の遺臣なり。已にして信秀の使至り、曰く「貴息西に在り。公宜しく東に背いて西に鄉ふべし。不らざれば則ち貴息の利にあらず」と。參河守答へて曰く「殺さんと欲せば卽ち殺せ。吾れ曷んぞ一子の故を以て、信を鄰國に失はんや」と。信秀怒り、世子を天王坊に錮し、其の艱苦を備にす。生母水野氏、再び尾張の人久松俊勝に嫁す。熱田

と近し。家士平野某竹内某を遣はして之を存問せしめ、給するに衣物を以てせり。

通釋 翌日、憲光が來て曰ふには「此處から駿河に行くには、途中に大川が澤山あつて、それに雨が降つた爲めに川水が溢れて居る。舟で海を渡つた方がよろしい」と。一同はそれに從ひ、世嗣を護りながら船に乘つた。正成は別の船に乘つて、其の後に從ひ、舵の方向を變へて熱田に着いた。すると岸の上に兵士がゐた。正成の船と相呼應した。天野康景はまだ幼なかつた。世嗣の側について居ていち早く變事を見拔き、自分の下僕に向つて曰ふには「平太の言つたことは本當であつた。船が岸に着く頃、お前は素早く敵兵の中に紛れ込み、そして岡崎に走り歸つて、詳しく此の樣子を申し上げろ」と。やがて船が着いて、一同は岸に登つた。正成は世嗣を熱田の大宮司の家に入れた。康景の下僕が走り歸つて此の由を知らせた。岡崎では上も下も皆非常に驚いた。康景の先祖も、同じく新田氏の舊臣であつた。間もなく信秀の使者が來て曰ふのに「御子息は今、西に居られる。公は東の今川氏に背いて西の織田氏に附かれるのが良い。若しさうでないと御子息の爲めにも不利益でござらう」と。參河守が答へて曰ふのに「殺さうと思ふならば殺して吳れ。自分はどうして一人の息子のために隣國に對して信義を失ふやうなことが出來ようか」と。信秀は之を聞いて怒り、世嗣を天王坊に押し込めて、散々苦しみを嘗めさせた。所が世嗣の生みの母水野氏は尾張の人の久松俊勝と再婚して居た。その人の居る所は熱田と近かつた。家來の平野某・竹内某の二人をやつて、世嗣を見舞はせ、着物をやつたりしてゐた。

語釋 多二大川一（大井川 天龍川）○天王坊（名古屋萬松寺内。）

十七年三月、今川義元將トシテレ兵ニ來リ援ケル、至二安祥ニ一。參河守幷セ二其ノ前軍ヲ一、擊ツテ二尾張ノ兵ヲ于小豆坂ニ一、走ラス

之。酒井正親獲敵將鳴海大學。而織田信廣猶留守安祥。四月、松平信孝來攻岡崎。大久保忠俊・酒井正親等伏兵、射殺之。參河守泣曰「盍生致之」。是月、復擊破尾張兵于重原、遂攻八草・梅坪。信秀自將來、至西野。我兵堅壁不出。信秀侮之、進次柳河。我兵設伏雨射。長坂信政先馳之。信秀大敗走。信政素以勇著。岡崎公嘗曰「長坂每戰血於槍」。因呼曰長坂血槍。

訓讀 十七年三月、今川義元兵に將として來り援け、安祥に至る。參河守其の前軍を幷せ、尾張の兵を小豆坂に擊つて之を走らす。酒井正親敵將鳴海大學を獲たり。而して織田信廣猶留つて安祥を守る。四月、松平信孝來つて岡崎を攻む。大久保忠俊・酒井正親等、兵を伏せ、射て之を殺す。參河守泣いて曰く「盍ぞ之を生致せざる」と。是の月、復擊つて尾張の兵を重原に破り、遂に八草・梅坪を攻む。信秀、自ら將として來り西野に至る。我が兵、壁を堅くして出でず。信秀、之を侮り、進んで柳河に次す。我が兵伏を設けて雨射す。長坂信政、先之に馳す。信秀、大に敗走す。信政素より勇を以て著る。岡崎公嘗て曰く「長坂は戰ふ每に槍に血ぬる」と。因つて呼んで長坂の血槍と曰ふ。

通釋 十七年三月、今川義元は大將となつて援けに來り、安祥に着いた。參河守は其の先鋒部隊を幷せて、小豆坂で尾張の兵を擊つて、打ち破つた。酒井正親は敵の大將鳴海大學を生捕つた。併し織田信廣はそれでもまだ踏

み止まつて安祥を守つてゐた。四月、松平信孝が岡崎に攻め寄せた。大久保忠俊や酒井正親等が伏兵を設けて信孝を射殺した。すると參河守は泣いて「どうして生捕りにしなかつたのか」と殘念がつた。此の月、再び重原で尾張勢を打ち破つて、遂に八草や梅坪にまで攻め寄せた。すると信秀は自ら大將となつて乘り出し、西野へやつて來た。我が兵は城壁を固めて出なかつた。すると、信秀は之を輕蔑し、進んで柳河に行つて兵を止めた。我が兵は待ち伏せして、雨霰と矢彈を射掛けた。長坂信政が先頭となつて馳せ向つた。信秀は遂に散々に敗けて落ち延びた。信政といふのは元來勇氣を以て有名な將であつた。岡崎公が或る時、曰ふには「長坂は戰爭のある度に槍に血ぬらなければ承知しない」と。それで人々は長坂の血槍と言つてゐた。

【語釋】重原・八草・梅坪・西野・柳河（參河）○血槍（血槍九郎と稱した。）

十八年三月、參河守卒。年二十四。訃至熱田。世子哀慕如成人。參河守性猜忌、將士不親。及卒聚議。或曰「與尾張和速迎世子。」或曰「駿河强大。宜修舊好徐計迎之」議未決。今川義元聞我喪曰「織田氏擁孤兒臨參河。參河必附之。」急遣其將朝比奈泰能、來守岡崎。將士乃附駿河、攻安祥不利。本多忠豐子忠高死之。

【訓讀】十八年三月、參河守卒す。年二十四。訃、熱田に至る。世子、哀慕すること成人の如し　參河守、性猜忌、將士親しまず。卒するに及び聚議す。或は曰く「尾張と和し速に世子を迎へん」と。或は曰く「駿河は强大

なり。宜しく舊好を修め、徐に計つて之を迎ふべし」と。議未だ決せず。今川義元、我が喪を聞いて曰く「織田氏、孤兒を擁して參河に臨まば、參河必ず之に附かん」と。急に其の將朝比奈泰能を遣し、來つて岡崎を守らしむ。將士乃ち駿河に附き、安祥を攻む。利あらず。本多忠豐の子忠高之に死す。

通釋 十八年三月、參河守が亡くなつた。年は二十四であつた。死去の通知が熱田に着いた。世嗣の哀しみ慕ふ樣子はまるで大人のやうであつた。參河守は元來性質が邪推深く人を忌む風があつた。それがために將士の親しむ者はなかつた。死んだので集つて相談をした。或る者は曰ふのに「尾張方と和睦して、早く世嗣を呼ぶがいい」と。又或る者は「駿河の方が强い。舊の好を修めゆつくり考を定めてから世嗣を迎へるやうにした方が良い」と言つた。中々相談が決まらないで居た。すると今川義元はこちらの不幸を聞きつけて曰ふには「織田氏が若し、みなし兒を抱へて參河に赴いたならば、參河はきつと織田氏に附くだらう」と。急いで其の將の朝比奈泰能を寄越して、岡崎を守らせた。そこで岡崎の將士は駿河方に附いて、安祥を攻めた。併し負けて終つた。本多忠豐の子の忠高は此の時討死した。

十一月、義元益、發レ兵、使三僧大原助攻二安祥一。時信秀已沒、子信長嗣。發レ兵會戰、遇レ伏敗走。城兵出救。我兵與二援軍一夾擊破レ之、追レ北取二其郛一。信廣僅嬰二內城一。信長至二鳴海一、不二敢進一。大原遣レ使謂レ之曰「公坐視二信廣一。盍下以二竹千代一易上レ之」。信長不レ許。林正成・平手政秀皆諫。乃許レ之。於レ是尾張・駿河會二盟于笠寺一、信廣西歸、而嗣君得レ歸二岡崎一。居十餘日、往質二

于駿河。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長・植村榮政等二十餘人、養卒百餘人從之。義元置之于宮崎、使來島某監焉。遣其兵守參河諸城、以松平重吉・鳥居忠吉監租賦、輸之於駿河、諭將士曰「竹千代猶幼。我當權領國務、竢其長返予。」自是每有兵戰、驅參河人爲先鋒、平時命以賤役。將士不敢辭勞。獨願嗣君早還國。嗣君在宮崎、供給甚薄、衣食不足。鳥居忠吉家素富。常送錢帛、又遣其次子元忠侍之。

訓讀 十一月、義元益々兵を發し、僧大原をして助けて安祥を攻めしむ。時に信秀已に沒し、子信長嗣ぐ。兵を發して會戰し、伏に遇うて敗走す。城兵出で救ふ。我が兵援軍と夾み擊つて之を破り、北ぐるを追つて其の郛を取る。信廣僅に內城に嬰る。信長鳴海に至り、敢て進まず。大原使を遣はし之に謂つて曰く「公坐ながら信廣を視る。盍ぞ竹千代を以て之に易へざる」と。信長許さず。林正成・平手政秀皆諫む。乃ち之を許す。是に於て尾張・駿河、笠寺に會盟し、信廣は西に歸り、而して嗣君は岡崎に歸るを得たり。居ること十餘日、往いて駿河に質たり。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・阿部正次・高力清長・植村榮政等二十餘人、養卒百餘人之に從ふ。義元之を宮崎に置き、來島某をして監せしむ。其の兵を遣はして參河の諸城を守り、松平重吉・鳥居忠吉を以て租賦を監し、之を駿河に輸せしめ、將士に諭して曰く「竹千代猶幼なり。我れ當に權に國務を領し、其の長ずるを竢つて返し

予ふべし」と。是より兵戰ある每に、參河の人を驅つて先鋒と爲し、平時は命ずるに賤役を以てす。將士敢て勞を辭せず。獨り嗣君の早く國に還るを願ふ。嗣君宮崎に在り、供給甚だ薄く、衣食足らず。鳥居忠吉家素より富む。常に錢帛を送り、其の次子元忠を遣はし之に侍せしむ。

通釋 十一月、義元は益々兵隊を繰り出し、僧大原をして助けて安祥を攻めさせた。其の時、信秀は既に死んで、子の信長が後を嗣いでゐた。兵を出して戰ひ、伏兵に遇つて敗れ遁げたと、城内の兵士が出て來て之を救つた。併し我が兵は援兵と夾み撃ちして其れを破り、逃げるのを追ひ掛けて城の外郭を占領した。信廣は辛うじて本丸を守るに過ぎなかつた。信長は鳴海に着き、最早强ひて進まうとはしなかつた。大原は使をやつて曰ふには「貴下はたゞぢつとして信廣を棄てる氣で居られる。何故竹千代と交換しないのか」と。信長は聽かなかつた。けれども林正成や平手政秀等が皆それを諫めた。それで遂に信長は承知した。そこで尾張方(織田)と駿河方(今川)とが笠寺に集つて盟をなし、信廣は西に歸り、世嗣の君は岡崎に歸ることが出來た。併し世嗣の君は岡崎に居ること十日餘りで、今度は駿河に人質となつて往つた。酒井重忠・天野康景・平岩親吉・安部正次・高力淸長及び植村榮政等の二十餘人と小もの百人餘の者が附き從つて行つた。義元は之を宮崎に住まはせ、來島某といふ者に監督させた。又其の兵を派遣して參河の諸城を守らせ、松平重吉と鳥居忠吉に租税を監督させ、その租税は駿河に送り屆けさせ、そして將士に諭して曰ふには「竹千代はまだ幼少である。自分が一時、國の政務を預り、竹千代が成人した曉はきつと返してやる」とこの後は戰爭がある度に、參河人を使つて先鋒となし平生は賤しい役に當てゝ使つた。參河の將士は決して骨折を惜まなかつた。只々世嗣の君が早く生長して國に還るのを願ふばかりであつた。世嗣の君は宮崎では手當が非常に少なく衣食も不充分であつた。鳥居忠吉は其の家元來金持である。いつも

金錢や着物を仕送し、又次男の元忠をやつて仕へさせた。

語釋 坐視信廣（信廣の危險を救ひもしないで坐視する意。）○養卒（召し使ひの下僕。）○宮崎（駿河）

二十年、嗣君甫十歲。五月五日、出遊安倍河原、觀兒童石戰。一群百五十人、一群倍之。觀者爭就其衆者。嗣君在僕背、命就其寡者。僕怪問故。嗣君曰「衆者自恃其衆、寡者自知其寡。寡者勝矣。」果如其言。義元聞之曰「所謂將門出將者也。」二十三年、嗣君始擐甲。弘治元年、義元出兵尾張、攻蟹江。松平眞乘・大久保忠俊等七人力戰。二年正月、嗣君加元服。義元爲賓、使其族將關口親永理髮、命名元信、稱次郞三郞。妻以親永女。參河將士來賀。或獻駿馬。乃納諸將軍足利義輝、賜手書及佩刀。僧大原、義元庶父。爲清見寺主、而數將兵。嗣君從讀書史、受兵法焉。二月、松平義春代嗣君統師攻奧平貞延于日近、死之。嗣君聞之、濺泣嘆惜。左右感動。義元又城福釜、使酒井忠次等八將守之。尾張將柴田勝家來攻。大久保忠世弟忠佐等善戰、幾得勝家。

訓讀 二十年、嗣君甫めて十歲。五月五日、出でゝ安倍河原に遊び、兒童の石戰を觀る。一群は百五十人、一

群は之に倍す。觀る者爭うて其の衆き者に就く。嗣君僕背に在り。命じて其の寡き者に就かしむ。僕怪みて故を問ふ。嗣君曰く「衆き者は自ら其の衆を恃み、寡き者は自ら其の寡を知る。寡き者勝たん」と。果して其の言の如し。義元、之を聞いて曰く「所謂將門將を出す者なり」と。二十三年、嗣君、始めて甲を擐す。弘治元年、義元、兵を尾張に出し、蟹江を攻む。松平眞乘、大久保忠俊等七人力戰す。二年正月、嗣君元服を加ふ。義元、賓と爲り、其の族將關口親永をして髪を理めしめ、名を元信と命じ、次郎三郎と稱し、妻はすに親永の女を以てす。參河の將士來り賀す。或人駿馬を獻ず。乃ち諸を將軍足利義輝に納る。手書及び佩刀を賜ふ。僧大原は義元の庶父なり。淸見寺の主と爲り、而して數兵に將たり。嗣君、從つて書史を讀み、兵法を受く。二月、松平義春、嗣君に代つて師を統べ、奥平貞延を日近に攻めて、之に死す。嗣君之を聞き、泣を濺いで嘆惜す。左右感動す。義元又福釜に城き、酒井忠次等の八將をして之を守らしむ。尾張の將柴田勝家來り攻む。大久保忠世の弟忠佐等善く戰ひ、幾ど勝家を得んとす。

【通釋】二十年、世嗣の君が漸く十歳になつた。五月五日、安倍河原に出て遊び、近所の子供等の石合戰を見物した。片方は百五十人位で、他の方はその倍位あつた。見物の子供等は我れ先きにと其の多い方に味方した。嗣君は下郎に負ぶさつて居た。指圖して同勢の少い方に味方させた。下郎が不思議に思つて、其の理を伺つた。嗣君が曰ふには「味方の多い方は、人數の多いのを恃んで氣が弛み、少い方は初めから其の少いのを知つて、力を盡す。少い方がきつと勝つだらう」と。果して其の言葉の通りであつた。義元は此の事を聞いて曰ふには「よく世間で言ふ大將の家に大將が生れるといふ通りだ」と。二十三年に嗣君が始めて鎧の着初めをした。弘治元年に義元は尾張に兵を出して、蟹江を攻擊した。松平眞乘や大久保忠俊等の七人の將が力を

盡して戰つた。二年正月、嗣君が元服の式を擧げた。義元が烏帽子親となり、其の一族の大將關口親永に髮を上げる役をさせ、本名を元信と名づけ、通稱を次郎三郎と言ひ、そして親永の娘を妻とさせた。參河の將士連は駿河へやつて來てお喜びを申し上げた。其の中で或る人が立派な馬を獻上した。そこでこれを時の將軍足利義輝に獻納した。將軍家からは自筆の手紙と太刀を下された。僧大原は義元の叔父である。淸見寺の住持をしてゐたが、度々大將となつてゐた。嗣君は此の人について經書や歷史の書物を習ひ、又兵法も授けられた。二月、松平義春は嗣君に代つて兵隊を統べ、日近といふ所で奧平貞延を攻めたが戰死した。嗣君はこの事を聞いて涙を流して嘆き惜まれた。左右につき從ふ者も深く心を動かされた。義元は再び福釜に城を築いて、酒井忠次などの八人の大將に其處を守らせた。尾張の將柴田勝家が攻め寄せた。大久保忠世の弟の忠佐等が善く戰つて、殆ど勝家を生捕りにする所であつた。

語釋　安倍河原（駿河）○將門出將（史記孟嘗君傳の語。）○弘治（後奈良天皇の年號。）○蟹江（尾張）○日近・福釜（參河）

是歲、嗣君年十六。從容謂義元曰「僕幼離國、流寓尾張・駿河、有年於此矣。願得一歸鄕里、拜掃先人墳墓也。」義元許之。於是始歸岡崎。參河父老聞而大喜、爭出迎之。駿河將山田某在內城。嗣君避之入外城、以延見將士。鳥居忠吉離次進、握嗣君手曰「臣老矣。不能效驅馳。特爲郎君置倉廩峙糧食。郎君以此多養兵士、揚武四方。臣或

保ニ餘年一、猶得ニ親目一レ之。因嗚咽而泣。嗣君亦泣。嗣君於レ是更ニ名元康一、稱ニ藏人一。三年春、復如ニ駿河一。

訓讀 是の歲、嗣君年十六。從容として義元に謂つて曰く「僕、幼より國を離れ、尾張・駿河に流寓すること此に年あり。願はくは一たび鄕里に歸り、先人の墳墓を拜掃するを得ん」と。義元之を許す。是に於て、始めて岡崎に歸る。參河の父老聞いて大に喜び、爭ひ出でゝ之を迎ふ。駿河の將山田某、內城に在り。嗣君之を避けて外城に入り、以て將士を延見す。鳥居忠吉、次を離れて進み、嗣君の手を握つて曰く「臣老いたり。驅馳を效す能はず。特に郎君の爲に倉廩を置いて糧食を峙む。郎君此を以て多く兵士を養ひ、武を四方に揚げよ。臣或は餘年を保ち、猶親しく之を目するを得ん」と。因つて嗚咽して泣く。嗣君も亦泣く。嗣君、是に於て、名を元康と更め藏人と稱す。三年春、復駿河に如く。

通釋 此の年、嗣君は年十六歲であつた。ゆつくり落着いた態度で、義元に向つて曰ふには「私は幼年の頃から國を離れて、尾張や駿河に人質となつて、渡り步くこと隨分久しいものです。どうぞ一度鄕里に立ち歸つて父の墓參を致させて下さいませぬか」と。義元は快よく之を許した。こゝに始めて岡崎に歸ることが出來た。參河の年寄連は嗣君がお歸りになると聞いて非常に喜び、先きを爭つてお出迎へをした。其の時駿河の大將山田某といふ者が本丸に止まつて居た。嗣君はそれを避け、二の丸に入つて將士連と面會した。鳥居忠吉は列を離れて進み出で、嗣君の手を取つて曰ふには「私はもう年を取つて終ひました。戰場で働くことは出來ませぬ。唯若君の爲めに米倉を設けて兵糧を貯へて置きました。どうか若君はこれを以て兵士を澤山養ひ、そして武名を四方

に轟かせて下さい。私が若し生き永らへて居りましたならば、或は其の時の御樣子を拜見することも出來ませう」と。さう言つて咽び泣いた。嗣君も亦老臣の心を察して涙を流した。嗣君は此の時名前を元康と改め、藏人と稱した。三年春、再び駿河に人質となつて歸つて行つた。

【語釋】元康（元は今川義元の偏名を取つたのであつたが、こんど清康の康を取つて元康とつけたのである。）

永祿元年、義元謂嗣君曰「西參河公舊領也。而其諸城多叛歸信長。子盡擊而復之。」嗣君曰「固所願也。」二月歸岡崎、盡會宗族・將士議戰。先攻寺部、縱火外郭。城將鈴木重教出戰、不決。本多重次先登、其一子・二弟皆死。嗣君勵衆奮前、擊走重教、斬首百餘級。遂攻廣瀨。信長遣其將津田兵庫來救。大久保忠世與鬪斬之。石川清兼說曰「郎君始臨陣、兩戰兩勝。斯已多矣。宜全勝養威也。」乃凱旋岡崎。使松平家次守品野。三月、尾張兵攻之。家次夜襲擊、獲五十餘人來獻。後松平信一代守、又襲敗敵兵。四月、嗣君復如駿河。義元遺佩刀賀捷、納山中邑三百貫。是冬、本多廣孝・石川清兼・天野景隆、往請義元曰「小主人漸長。願如約。」義元諾而未果。二年三月、關口氏生世子信康。

【訓讀】永祿元年、義元嗣君に謂つて曰く「西參河は公の舊領なり。而るに其の諸城、皆叛いて信長に歸す。子盍ぞ擊つて之を復せざる」と。嗣君曰く「固より願ふ所なり」と。二月岡崎に歸り、盡く宗族・將士を會して戰を議す。先寺部を攻めて、火を外郭に縱つ。城將鈴木重教出で戰ひ、決せず。本多重次先登し、其の一子・二弟、皆死す。嗣君、衆を勵まして奮ひ前み、擊つて重教を走らす。首を斬ること百餘級。遂に廣瀨を攻む。信長其の將津田兵庫を遣はして來り救ふ。大久保忠世、與に鬪つて之を斬る。石川清兼說んで曰く「郎君始めて陣に臨み、兩戰兩勝す。斯れ已に多し。宜しく勝を全うして威を養ふべし」と。乃ち岡崎に凱旋す。松平家次をして品野を守らしむ。三月、尾張の兵之を攻む。家次、夜襲擊し、五十餘人を獲て來り獻ず。後に松平信一代つて守り又襲うて敵兵を敗る。四月、嗣君復駿河に如く。義元、佩刀を遺つて捷を賀し、山中邑三百貫を納る。是の冬、本多廣孝・石川清兼・天野景隆、往いて義元に請うて曰く「小主人、漸く長ぜり。願はくは約の如くせん」と。義元諾して未だ果さず。二年三月、關口氏、世子信康を生む。

【通釋】永祿元年、義元は嗣君に向つて曰ふのに「西參河は貴公の舊領地である。而るに其處の諸城は皆叛いて信長に從つて居る。貴下はどうして之を攻擊して取り戾さないのだ」と。嗣君が曰ふには「前から考へて居たところです」と。二月、岡崎に歸つて、一族の者や將士連を全部集めて戰の相談をした。先づ最初に寺部を攻めて城の外圍ひに火をつけた。城の大將鈴木重教は城を出て戰つたが勝負が決まらなかつた。本多重次は眞先に攻め寄せ、其の一人の子、二人の弟は討ち死した。すると嗣君は味方を勵まして勇氣を奮ひ進み、散々攻擊して重教を伐ち退けた。此の時首を斬つた數が百餘りであつた。その勢で廣瀨に迫つた。信長はその將の津田兵庫を遣はして助けさせた。大久保忠世が之と戰つて斬り捨てた。石川清兼は喜んで曰ふには「若君は初陣であるのに

二度戰つて二度とも立派に勝たれた。此れでもう澤山だ。此の上は大勝利に疵をつけないで、威勢を張るやうにしたが良い」と。そこで岡崎に凱旋した。松平家次に品野を守らせた。三月、尾張の兵が之を攻めて來た。家次は夜中に敵を襲ひ、五十人餘りの兵を生捕り、岡崎に來て之をお目に掛けた。その後、松平信一が代つて守つたが、此の人も亦敵を襲撃して破つた。四月、嗣君は又々駿河に行つた。すると義元は太刀を呉れて勝利を祝ひ、又山中邑のあがり三百貫を與へることにした。此の冬、本多廣孝・石川清兼及び天野景隆の三人が、駿河に來て義元に願つて曰ふには「若主人も漸く大人となりました。どうかお約束の通りに、參河を返して下さい」と。義元は承知はしたが、その儘にしてまだ約を果さないでゐた。二年三月、夫人の關口氏が後日相續となるべき信康を出產した。

【語釋】永祿（正親町天皇の年號。）〇關口氏（嗣君の妻。）

義元時有西上之志。織田信長聞之、修鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部諸城、分兵守之。鳴海・大高・沓掛、皆降於義元。義元遣鵜殿長持守大高、岡部長教守鳴海。已而大高告糧竭。義元使嗣君納糧焉。而城左右皆敵寨。衆難之。嗣君時年十八。以千騎護運而往。値信長在鳴海。使鳥井信吉・杉浦勝吉等候視之。信吉曰、敵欲邀戰。勝吉曰、彼不下山。是不欲戰也。嗣君然之、乃分兵爲向寺部・梅坪、縱火邑里、鷲津・丸根

兵望烟馳援。嗣君則以麾下八百爲三隊、納糧大高、收兵而還。信長視我陣整、不敢犯。是歳嗣君再徇西參河、復赴駿河。

訓讀 義元時に西上の志あり。織田信長之を聞いて、鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部の諸城を修め、兵を分つて之を守る。鳴海・大高・沓掛、皆義元に降る。義元、鵜殿長持を遣はして大高を守り、岡部長敎をして鳴海を守らしむ。已にして大高、糧竭くるを告ぐ。義元、嗣君をして糧を納れしむ。而るに城の左右は皆敵寨なり。衆、之を難んず。嗣君時に年十八。千騎を以て運を護つて往く。信長の鳴海に在るに値ふ。鳥井信吉・杉浦勝吉等をして之を候視せしむ。信吉曰く「敵邀へ戰はんと欲す」と。勝吉曰く「彼れ山を下らず。是れ戰を欲せざるなり」と。嗣君、之を然りとし、乃ち兵を分つて寺部・梅坪に向ふ爲して、火を邑里に縱つ。鷲津・丸根の兵烟を望んで馳せ援く。嗣君則ち麾下八百を以て三隊と爲し、糧を大高に納れ、兵を收めて還る。信長、我が陣の整ふを視て、敢て犯さず。是の歳、嗣君、再び西參河を徇へ、復駿河に赴く。

通釋 其の頃、今川義元は京都へ討つて上らうとする志があつた。織田信長は之を知ると、鷲津・丸根・大高・沓掛・鳴海・梅坪・寺部などの諸城を修繕し、兵隊を分けて守つた。鳴海や大高・沓掛などの城は、いづれも義元に降服した。義元は鵜殿長持をやつて大高の城を、又岡部長敎には鳴海の城を守らせた。暫くすると、大高城で兵糧が無くなつたことを通じて來た。義元は嗣君に兵糧を屆けさせることにした。然るに城の左右は皆敵方の壘であつた。人々は非常に六ケ敷いことだと思つた。嗣君は其の時、年十八歳であつた。千騎を率ゐて運送の兵糧を護つて行つた。すると信長が鳴海に居るのに出會つた、鳥井信吉や杉浦勝吉等に其の樣子を覗はせた。信吉が曰

ふには「敵は迎へ撃たうとするやうである」と。勝吉が曰ふには「敵は山を下りて來ない。戰はうとするのではない」と。嗣君は勝吉の言に贊成して、そこで兵を分けて寺部と梅坪に向ふ眞似をして村里に放火した。鷲津や丸根の敵兵は烟の揚るのを見て、走つてそちらの方へ援けに行つた。嗣君は其の隙に乘じて、部下の兵八百人を三隊に分け、兵糧を大高に納め、そして兵を纏めて歸還した。信長は、こちらの陣形が立派に整つて居るのを見て、強ひて攻め寄せようとはしなかつた。此の年、嗣君は二度目の西參河平定をやつて、そしてまた駿河に歸つて往つた。

三年五月、義元將四萬騎攻信長、至池鯉鮒、使嗣君攻丸根城。城兵爭出。嗣君曰「彼寡於我。當守而戰、是決死也。我撓以弓銃、乘機拔之、可也」既而前鋒戰酣。麾下繼之、遂斬城將佐久間盛重。贄氏信先登、遂拔其城。駿河將朝比奈泰能亦拔鷲津。義元既取諸城、以大高當敵衝、欲得一勇將守之。問之於衆。衆曰「松平藏人其人也」乃使嗣君守大高。而自進陣桶峽、恃勝不設備。信長乘風雨、潛兵自間道襲擊。義元敗死。其諸將聞變皆走。駿河兵在大高者亦逃亡。

訓讀 三年五月、義元四萬騎に將として信長を攻め、池鯉鮒に至り、嗣君をして丸根城を攻めしむ。城兵爭ひ出づ。嗣君曰く「彼、我より寡し。當に守るべくして戰ふは、是れ死を決するなり。我れ撓すに弓銃を以てし、

機に乘じて之を拔く、可なり」と。既にして前鋒、戰酣なり。麾下之に繼ぎ、遂に城將佐久間盛重を斬る。贄氏信、先登し、遂に其の城を拔く。駿河の將朝比奈泰能も亦鷲津を拔く。義元既に諸城を取り、大高は敵の衝に當るを以て、一勇將を得て之を守らしめんと欲す。之を衆に問ふ。衆曰く「松平藏人は其の人なり」と。乃ち嗣君をして大高を守らしめ、而して自ら進んで桶峽に陣す。勝を恃み備を設けず。信長風雨に乘じ、兵を潛めて間道より襲擊す。義元敗死す。其の諸將、變を聞いて皆走る。駿河の兵の大高に在る者も亦逃亡す。

通釋 三年五月、義元は四萬騎を從へて、信長を攻め、池鯉鮒に到着して、嗣君に丸根城を攻擊させた。城の兵は無二無三に出て戰はうとした。嗣君が曰ふには「敵は味方より小勢である。城に立て籠つて戰ふのが當然であるのに、今城を出て戰ふといふ其の戰法は、正に決死の覺悟だ。故に弓や鐵砲を射掛けて之をへこまし、隙を見て城を落すがよろしい」と。時間が經つにつれて、前衞隊は盛に火花を散らして戰ひ眞最中であつた。それから部下の兵も前鋒に續いて大いに戰ひ、遂に城の守將佐久間盛重を斬り殺し、贄氏信が眞つ先きに城に登つて、遂に其の城を陷落させた。駿河の大將朝比奈泰能も鷲津城を攻め拔いた。今川義元は此の時既に多くの城を占領したのであつたが、其の內で大高城は敵の攻め寄せて來る眞正面に當るので、誰か勇猛な大將に此處を守らせたいと考へた。之を人々に相談した。多くの人々が曰ふには「松平藏人こそ、打つてつけの人だ」と。其の議に從つて嗣君に大高を守らせ、そして自身は桶狹に進んで陣を構へた。然るに今迄の勝利に心が驕つて、嚴重な備へを設けなかつた。信長は荒れ狂ふ風雨を利用し、近道から軍隊をこつそり進め、出し拔けに襲ひ擊つた。義元は敗れ討死した。部下の大將連は此の變事を聞き傳へると一同逃げ腰になつた。駿河の兵で大高城を守つて居た者もさつさと引上げた。

我將士說嗣君曰「今川公既死。我獨爲誰守。不若全兵而歸也」嗣君曰「當審其實、然後班師。急遽解走、而事若出謬傳、則貽笑天下矣」水野信元在刈谷。私使來告曰「信長獲義元、將遂復諸城。宜乘夜速去」嗣君曰「水野雖我舅氏、而敵部將也。未可輕信」遣人偵之。報曰「信矣」衆爭勸還。嗣君曰「夜行恐失道。宜竢月出。彼能來、我亦能戰」頃之月出。乃整兵東還。士寇爭起。本多百助數返戰、達于今村。將入岡崎城。以爲義元在時、未有還我之言。今乘其死取之不義也。駐軍于大樹寺三日、駿河戍兵棄城去。嗣君曰「彼棄而我取可矣」二十三日遂入。

訓讀 我が將士嗣君に說いて曰く「今川公既に死す。我れ獨り誰の爲めに守らん。兵を全うして歸るに若かざるなり」と。嗣君曰く「當に其の實を審にして然る後に師を班すべし。急遽解走して、事若し謬傳に出づれば則ち笑を天下に貽さん」と。水野信元刈谷に在り。私に來り告げしめて曰く「信長義元を獲て、將に遂に諸城を復せんとす。宜しく夜に乘じて速に去るべし」と。嗣君曰く「水野は我が舅氏なりと雖も而も敵の部將なり。未だ輕々しく信ずべからず」と。人を遣はして之を偵はしむ。報じて曰く「信なり」と。衆爭つて還るを勸む。嗣君曰く「夜行は恐らくは道を失はん。宜しく月の出づるを竢つべし。彼れ能く來らば、我れ亦能く戰はん」と。

頃して月出づ。乃ち兵を整へて東に還る。士寇爭ひ起る。本多百助、數〻返り戰ひ、今村に達す。將に岡崎城に入らんとす。以爲へらく、義元在る時、未だ我に還すの言あらず。今其の死に乘じて之を取るは、不義なり」と。軍を大樹寺に駐むること三日、駿河の戍兵城を棄てゝ去る。嗣君曰く「彼れ棄てゝ我れ取るは、可なり」と。二十三日、遂に入る。

通釋 我が將士は嗣君に說いて曰ふのに「今川公が最早歿くなられました。今、我々丈が、誰れの爲めに此處を守る必要がありませうか。斯くなる上は兵を害ふことなく、歸るのが一番の策であります」と。嗣君が曰ふには「必ず、今川氏が死んだといふ眞實を突き止めてから、軍隊を引き上げるやうにしなければならぬ。急ぎあわてゝ逃げて、若し誤傳だと判つたなら、天下の物笑ひとなるだらう」と。水野信元は其の時刈谷に居つた。密に使を寄越して曰ふには「信長は義元を打ち取つて、これから段々諸城を恢復しようとして居る。だから夜を利用して急いで去るのがよいと思はれる」と。嗣君は「水野は自分の叔父ではあるが、然かもれつきとした敵方の一方の大將である。故に其の言を輕々しく信ずることは出來ない」と。人をやつて樣子を探らせた。その報告に「實際のことです」とあつた。人々は喧しく歸ることを勸めた。嗣君は「夜の行軍は或は道に迷つたりするから、月の出るのを待つて出發するのがいゝ。彼が勇敢に進んで來たら、こちらも勇敢に戰ふまでだ」と言ひ切つた。暫くすると月が登つた。そこで兵を揃へて東を指して歸途に着いた。すると其の士兵がわれ勝ちに起つて伐つてかかつた。本多百助が何度も引き返して之と戰ひ、其の內に本隊は今村に到着し將に岡崎城に入らうとした。其の時嗣君は考へるのに、義元がまだ存生中には、岡崎を自分に返すといふ話は無かつた。それだのに今其の死を幸として岡崎を取るといふことは、誠に義理を缺くことである。そこで、大樹寺に軍隊を止めて置くこと三日に及

んだ。駿河方の岡崎城を守つて居た兵が、城を棄てゝ引き上げた。嗣君が曰ふには「彼が城を捨てた後で、自分が此の城を取るのは、何等差支がない」と。二十三日遂に岡崎に入城した。

語釋　今村（參河）

嗣君六歳出國、十四年而得復歸焉。士民讙呼、國内諸城主來謁者、相踵於門。而其屬織田氏者、不肯降。嗣君乃將兵攻擧母・梅坪・廣瀨。廣瀨兵距于拂楚坂。我兵奮擊走之、遂攻沓掛、縱火城下而還。城兵追躡。大久保忠俊殿而還。鳥居元忠有首功。嗣君欲賞之以功狀。辭曰「功狀者、游士所以藉口也。臣矢不事二君。莫用功狀爲也」

訓讀　嗣君、六歳にして國を出で、十四年にして復歸るを得たり。士民讙呼し、國内の諸城主來り謁する者、門に相踵ぐ。而れども其の織田氏に屬するものは、肯て降らず。嗣君乃ち兵に將として擧母・梅坪・廣瀨を攻む。廣瀨の兵、拂楚坂に距ぐ。我が兵、奮擊して之を走らせ、遂に沓掛を攻め、火を城下に縱つて還る。城兵、追躡す。大久保忠俊殿して還る。鳥居元忠首功あり。嗣君之を賞するに功狀を以てせんと欲す。辭して曰く「功狀は游士の口を藉る所以なり。臣矢つて二君に事へず。功狀を用ふるを爲す莫れ」と。

通釋　嗣君は六歳の時に國を出て、十四年間を人質として過して、今再び自國に歸ることが出來たのである。いづれの階級の人々も喜んで嗣君を迎へ、又國内の澤山の城主で岡崎に來て拜謁する者は、城門に引き續いた。併し國内の城主でも、織田氏に從つて居る者は中々降服しなかつた。嗣君は大將となつて擧母・梅坪・廣瀨の諸城を

攻めた。廣瀨の兵は拂楚坂といふ所で食ひ止めようとした。併し我が兵は奮ひ戰つて、其の兵を走らせ、遂に沓掛に攻め寄つて城下に火をつけて返つた。城の兵は後を追つて來た。大久保忠俊が殿を引き受けて戻つて來た。此の時鳥居元忠が第一番の手柄を立てた。嗣君は感狀をやつて賞めようとした。これを斷はつて曰ふには「感狀といふものは、浪人が仕官を求める口實にするものです。私は誓つて二君に仕へることは致しません。どうか感狀を與へるといふことは、控へて下さい」と。

【語釋】拂楚坂（參河）

六月、信長謂水野信元曰「吾既獲義元、以爲子之甥當不戰而降。今乃强項如此。」信元恐嫌疑、發兵攻岡崎。嗣君邀戰于石瀨。兩軍皆相識。故接戰尤厲。松井忠次傷股于銃。進斬其銃卒。明日戰刈谷下、交綏。復攻寺部・擧母、皆拔之、進至山中、攻醫王山寨。久松俊勝先登。敵以槍鏦其肩。俊勝擧刀截槍幹、入寨縱火。衆繼之。遂取寨。嗣君乃使人言於義元子氏眞曰「公爲先公一戰。僕請先焉」不答。氏眞昏懦。嬖臣三浦義鎮、義鎮生父小原鎮實、竝專國政、讒德川氏有異心。氏眞又覗岡崎勢寖熾、有猜防之心。四年二月、水野信元來侵。復邀戰石瀨破之、遂攻廣瀨・伊保。板倉重定據中島

不下。遣松平好景攻之。重定退保岡城、遂走佐脇。乃以其邑賞好景。

訓讀 六月、信長、水野信元に謂つて曰く「吾れ既に義元を獲て、以爲へらく、子の甥は當に戰はずして降るべしと。今乃ち强項なること此くの如し」と。信元嫌疑を恐れ、兵を發して岡崎を攻む。嗣君石瀨に邀へ戰ふ。兩軍皆相識る。故に接戰尤も厲し。松平忠次股を銃に傷け、進んで其の銃卒を斬る。明日、刈谷の下に戰ひ、交綏す。復寺部・擧母を攻めて、皆之を拔き、進んで山中に至り、醫王山の寨を攻む。久松俊勝先登す。敵、槍を以て其の肩を鑱す。俊勝刀を擧げて槍幹を截り、寨に入つて火を縱つ。衆之に繼ぐ。遂に寨を取る。嗣君乃ち人をして義元の子氏眞に言はしめて曰く「公、先公の爲に一戰せよ。僕、請ふ、先たらん」と。答へず。氏眞、昏懦なり。嬖臣三浦義鎭、義鎭の生父小原鎭實並に國政を專にし、德川氏異心有るを譖す。氏眞又岡崎の勢寖く熾なるを視て、猜防の心あり。四年二月、水野信元來り侵す。復石瀨に邀へ戰つて之を破り、遂に廣瀨・伊保を攻む。板倉重定中島に據つて下らず。松平好景を遣はして之を攻めしむ。重定、退いて岡城を保ち、遂に佐脇に走る。乃ち其の邑を以て好景を賞す、

通釋 六月、信長は水野信元に向つて曰ふには「自分は既に義元を滅したので、お前の甥（參河の嗣君）などは、戰はずに降參して來ると思つて居た。今此の樣に强情を張つて、頭を下げて來ない」と 信元は疑はれるのを恐れて、兵を發して岡崎に攻め寄せた。嗣君は石瀨に迎へ擊つた。兩軍共に皆顏見知りであつた。その爲めに擊ち合ひが非常に猛烈であつた。松平忠次は、鐵砲で股をやられた。進んで自分を打つた銃卒を斬り殺した。翌日、刈谷の城下に戰つて相引きになつた。再び寺部や擧母を攻めて皆之を陷れ、進んで山中に行つて醫王山の

取手を攻めた。久松俊勝が先頭に立つた。敵は槍で其の肩を刺した。すると俊勝は刀を振り上げて、槍の柄を切り、壘の中に入つて火を放した。人々が之に續いて登つた。遂に此壘を占領して終つた。嗣君はそこで義元の子である氏眞の所へ、人をやつて曰はせるには「貴下は父君の爲めに弔合戰をしなさい。其の時は私は先鋒を承りませう」と。併し返答はしなかつた。元來氏眞は愚かで心が弱い。お氣に入りの家來三浦義鎭と、其の生みの親小原鎭實が二人で國の政治を勝手氣儘に料理し、德川方が謀反の心を持つて居ると、あしざまに告げ口をした。氏眞自身も亦、岡崎の勢が日に〳〵盛になるのを見て、そねんだり用心したりする氣持が有つたのである。四年二月、水野信元が侵入して來た。又々之を石瀨に迎へ擊つて破り、遂に廣瀨や伊保を攻め圍んだ。板倉重定は中島に立て籠つて容易に下らなかつた。それで松平好景をやつて之を攻めさせた。重定は退いて一時岡城を保つたが、遂に佐脇に逃げた。そこで重定の領分を好景に賞として與へた。

語釋 石瀨・醫王山・中島・佐脇(參河)

信長素有霸心。欲出兵京畿。而武田信玄在甲斐、北條氏康在相摸、皆窺其後。信長患之。會水野信元往說之。曰「僕甥以氏眞故抗於尾張。其實怨氏眞。可誘爲我黨。而彼雖小弱、天質剛銳、必不肯請和。公以力取之、恐費歲月。不若自我結和。使彼當東面、而公專略其西、霸業成矣」信長大喜曰「是得我心」乃使瀧川一益來就石川數正、求和。信元又使使來勸之。嗣君召諸將士議之。酒井忠次曰「我以微力介二大國、而

圖自立焉。非便計也。氏眞忘仇廢武沈溺酒色。不足與有爲明矣。與信長和便。嗣君曰「念固如何可背舊好乎」。

訓讀 信長素より覇心有り。兵を京畿に出さんと欲す。而して武田信玄は甲斐に在り、北條氏康は相模に在つて、皆其の後を窺ふ。信長、之を患ふ。會〻水野信元往いて之に說く。曰く「僕の甥、氏眞の故を以て尾張に抗す。其の實は氏眞を怨む。誘つて我が黨と爲すべし。而して彼れ小弱と雖も、天質剛銳、必ず和を請ふを肯ぜず。公、力を以て之を取らば、恐らくは歲月を費さん。我より和を結ぶに若かず。彼をして東面に當らしめ、而して公は專ら其の西を略せば、覇業成らん」と。信長、大に喜んで曰く「是れ我が心を得たり」と。乃ち瀧川一益をして來つて石川數正に就いて和を求めしむ。信元、又使をして來つて之を勸めしむ。嗣君、諸將士を召して之を議す。酒井忠次曰く「我れ微力を以て二大國に介し、而して自立を圖る。便計に非るなり。氏眞、仇を忘れ武を廢して、酒色に沈溺す。與に爲すあるに足らざるや、明なり。信長と和する便なり」と。嗣君曰く「念ふに固より如何ぞ舊好に背くべけんや」と。

通釋 信長はもと〳〵天下に覇を唱へたいといふ志があつた。畿內地方に軍隊を繰り出したいと思つてゐた。武田信玄が甲斐に居り、又北條氏康が相模に居て、いづれも信長の後を狙つて居た。信長は之を心配して居た。すると偶然水野信元が來て說いて曰ふには「私の甥は氏眞の爲めに尾張に敵對をして居ります。併し其の本心は却つて氏眞を怨んで居るのですから、誘つて此方の仲間とすることが出來ます。彼は年は若いけれども、生れつき氣強く又素早いから、きつと和睦を自分から願ふことはしますまい。然し公が力づくで之を取らうとすれば

相當長い月日を費すでせう。今はこちらから和睦を結ぶに越したことはありません。そして彼に東の方、武田や北條に當らせ、公は專心西の方を平定なされば、お望みの霸業は出來上るだらうと思ひます」と。信長は大層喜んで曰ふのに「これこそ、自分の思ふ通りだ」と。そこで、瀧川一益をやつて、石川數正のところに行つて和睦を求めさせた。信元も別に使を出して和睦をすゝめさせた。嗣君は諸將士を集めて此の事を相談した。酒井忠次が曰ふには「我が國は微力で、駿河・尾張の二大國の間に挾まれ、而かも獨立しようと圖つてゐます。これは都合の良いことではありません。然るに駿河の氏眞は親の仇を忘れ、武備を固めず、酒や女に溺れ浸つて居ります。共に力を合せて、事をするには足りない人間であるのは、明らかなことであります。ですから、信長と和睦を結ぶ方が都合の良いことです」と。すると嗣君が曰ふに「併しさうはいふものゝ、昔の好みに背くことは出來ないと思ふ」と。

石川家成・酒井正親曰「忠次言是也。嚮義元伴爲好意、歲收我食、月戰我兵、而每餧我於敵鋒。丸根・大高之事、可以見已。宜速許尾張矣。質之在駿河者、取之非難。氏眞重與我絕。必不能害也」嗣君曰「及吾幼時、我舊臣多膏鋒鏑。吾常傷於心」因泣下。終許和。信長大喜、定國界、解兵戍、遂請嗣君來盟。許之。酒井忠尚在上野、聞之、恐其質之死于駿河也、乃來說曰「信長意難測。可和、不可往。今君室家皆在駿河。彼何信我

乎。」嗣君曰、「業已定レ約。不レ當レ背也。」忠尚不レ懌。乃去。左右慮二其反一、請二追而誅一レ之。嗣君曰、「彼言自有レ理。且未二必反一。」忠尚稱レ疾不レ出。

訓讀 石川家成・酒井正親曰く「忠次の言是なり。嚮に義元、佯つて好意を爲し、歳に我が食を收め、月に我が兵を戰はせ、而して毎に我を敵鋒に餧す。丸根・大高の事、以て見るべきのみ。宜しく速に尾張に許すべし。質の駿河に在るもの、之を取るは難きに非ず。氏眞、我と絶つを重んず。必ず害する能はざるなり」と。嗣君曰く「吾れ幼時に及び、我が舊臣多く鋒鏑に膏す。吾れ常に心に傷む」と。因つて泣下る。終に和を許す。信長、大に喜び、國界を定め、兵戍を解き、遂に嗣君の來盟を請ふ。之を許す。酒井忠尚、上野に在り。之を聞き、其の質の駿河に死するを恐るゝや、乃ち來り說いて曰く「信長の意測り難し。和す可くして、往く可からず。今、君の室家、皆駿河に在り。彼れ何ぞ我を信ぜんや」と。嗣君曰く「業已に約を定む。背くべからざる也」と。忠尚懌ばず。乃ち去る。左右其の反を慮り、追うて之を誅せんと請ふ。嗣君曰く「彼の言自ら理あり。且つ未だ必ずしも反せじ」と。忠尚、疾と稱して出でず。

通釋 すると石川家成と酒井正親が曰ふには「忠次の言ふことは正しいのです。初め義元は嘘を吐いて好意を見せたが、其の實は、年々我が糧食を取り、月々我が兵を戰場に使つて、そしていつも我が軍を敵の槍玉の餌食にしたのです。丸根や大高の戰爭が之を證明して居ます。だから早速尾張と和睦するのがよろしい。又人質となつて駿河に行つて居る者を、取り返すのは六ケ敷いことではありません。何となれば、氏眞はこちらと交を絶つのを非常に重大なことだと思つて居ります。だからきつと殺したりすることは出來ますまい」と。嗣君が曰ふ

には「自分がまだ幼少の頃、我が舊臣は隨分刀の切尖や矢尻の錆となつた。自分はいつでも心に之を傷ましく思つて居た」と。思はずはら〳〵と涙を落した。そして終に和睦を許すことになつた。信長は非常に喜び國の境界を定めたり、守りの兵隊を廢したりして、最後に嗣君が尾張に來て誓ひをすることを求めて來た。それで其の事を承諾した。酒井忠尚は上野に居た。此の事を聞き傳へ、自分の駿河に出して居る人質が殺されるのを心配し、そこで岡崎にやつて來て曰ふには「信長の眞底の氣持は判つたものではありません。和睦はしていゝが、尾張に乘り込むことは極めて危險です。卽ち今若君の御家内は殘らず駿河に居られます。だから、信長はどうしてこちらを信じませうか」と。嗣君が曰ふには「最早約束をして終つた後では、之に背くことは出來ない」と。忠尚は快からず思つた。お附の者は忠尚の謀反を案じて、追つかけて殺すことを願ひ出た。嗣君が曰ふには「彼の言ふことには條理がちやんと立つて居る。且つ又きつと謀反をするとは限るまい」と。忠尚は其の後病氣と言つて上つて來なかつた。

信長修道供帳。至期、嗣君從百餘騎赴尾張。信長使林通勝等迎之熱田。嗣君憩于正海寺、遂至清洲、入城門。觀者喧騰。本多忠高子忠勝、小字平八郎、時年十四。擧薙刀先驅、厲聲曰「我君來此。汝輩胡無禮也。」衆皆讋伏。信長出迎、導入內城。植村榮政操刀而從。衛士叱之。榮政瞋目曰「吾植村新六也。奉主人刀。何渠叱乎。」信長揮衛士曰「我聞新六名久矣。勿怪。」乃盟曰「兩家戮力、征討東西、織田有天下、德川爲之屬國、

德川有天下、織田爲之屬國。遂饗嗣君信長賜寶刀於榮政曰、汝今日擧動、如樊噲在鴻門。畢饗而還。信長郊送、使通勝等來謝岡崎。氏眞聞之怒、使使來詰。酒井正親使人往駿河、因三浦義鎭謝曰、參河之拏、皆在駿河。豈有貳心。獨病尾張日强大、勢將及我。故佯和以紓旦夕耳。氏眞不能詰。

訓讀　信長道を修めて供帳す。期に至り、嗣君百餘騎を從へて尾張に赴く。信長、林通勝等をして之を熱田に迎へしむ。嗣君正海寺に憩ひ、遂に清洲に至り、城門に入る。觀る者喧騰す。本多忠高の子忠勝、小字は平八郎、時に年十四。薙刀を擧げて先驅し、聲を厲して曰く「我が君此に來る。汝が輩胡ぞ無禮なる」と。衆皆讋伏す。信長出で迎へ導いて內城に入る。植村榮政、刀を操つて從ふ。衞士之を叱す。榮政目を瞋らして曰く「吾は植村新六なり。主人の刀を奉ず。何渠ぞ叱するか」と。信長、衞士を揮いて曰く「我れ信六の名を聞くこと久し。怪む勿れ」と。乃ち盟つて曰く「兩家、力を戮せて東西を征討し、織田天下を有たば、德川之が屬國と爲り、德川天下を有たば、織田之が屬國と爲らん」と。遂に嗣君を饗す。信長寶刀を榮政に賜うて曰く「汝が今日の擧動、樊噲が鴻門に在りしが如し」と。饗を畢へて還る。信長、郊送し、通勝等をして來り岡崎に謝せしむ。氏眞之を聞いて怒り、使をして來り詰めしむ。酒井正親人をして駿河に往かしめ、三浦義鎭に因つて謝して曰く「參河の拏、皆駿河に在り。豈に貳心あらんや、獨り尾張の日に强大にして、勢將に我に及ばんとするを病ふ。故に佯り和して以て旦夕を紓ぶるのみ」と。氏眞詰る能はず。

〔通釋〕信長は道路を修繕したり、宿々に手配して饗應の準備をした。約束の時機になると、嗣君は百餘騎の兵を伴れて尾張に出掛けた。信長は林通勝等に命じて、熱田まで出迎へさせた。嗣君は正海寺で一寸休憩し、遂に清洲に着いて城門に入つた。見物の者共ががや／＼と騒ぎ立てた。すると、本多忠高の子忠勝幼名平八郎といふ者、年僅に十四であつたが、薙刀を振り擧げて先拂ひをしながら、大聲に叫んで曰ふには「我が君のお通りだ。汝等どうしてその様に無禮な態度をするか」と。人々は一同恐れ入つてひれ伏した。信長は迎へに出て案内して本丸に入つた。植村榮政が刀を持つて嗣君を守り從つた。城の番兵が之を咎めた。すると榮政は怒つて目をつり上げて曰ふには「自分は植村新六だ。主人公の刀を持つて居るのに、どうして咎めだてするか」と信長は其の番兵を揮つて止めて曰ふには「私は新六の名前は前から聞いて居る。怪しまなくともよろしい」と。そこで誓を取り交はして曰ふには「尾張・參河の兩家が、力をあはせて西と東を平らげ、若し織田が天下を取つたら、徳川は其の屬國となり、又若し徳川が天下を取つたなら、織田が其の屬國とならう」と。其れが濟むと、嗣君を御馳走することになつた。信長は其の席上、榮政に寶刀を呉れて曰ふには「お前の今日の動作は鴻門の會盟に於ける樊噲のやうであつた」と。御馳走が終ると、やがて引上げた。信長は城外まで見送り、そして通勝等に岡崎まで行つて禮を述べさせた。氏眞は此の事を聞いて腹を立て、使を寄越して問ひ詰めさせた。酒井正親は人を駿河にやつて三浦義鎭を通じて詫びさせて曰ふのに「參河の妻子眷屬は皆駿河に居るのです。どうして二心を抱くやうなことがございませう。只尾張の勢が日に日に強くなつて、其の勢が、追々とこちらにも及んで來さうになつて居ます。それで止むなく欺いて和睦を結んで、暫くの間の息をつきたい丈けなのです」と。氏鎭は最早其以上問ひ詰めることは出來なかつた。

語釋　樊噲（項羽と劉邦が鴻門に會つた時、劉邦が危險だつたので樊噲が帷幕の内に入つて急を救つた。名高い鴻門の會の故事。）

先是、吉良義諦守東條、牧野成定守西尾、以黨氏眞、欲圖岡崎。三月、嗣君攻東條。不下。使松平好景以中島備之。東參河豪姓、菅沼・奥平・設樂・西鄕諸族、皆背氏眞來降。四月、義諦攻酒井忠尙于上野。好景救之。義諦窺其虛、徑襲中島。好景還戰走之。至善明堤、遇敵大至。遂戰死。嗣君築津平・小牧、命松井忠次・本多廣孝守之、以備東條。五月、氏眞攻東參河。諸豪善距。七月、嗣君自將攻牛窪、使別將攻鳥屋。鳥屋陷。本多忠勝與叔父忠眞從軍。忠眞鏦斃一人、顧忠勝取其首。答曰、「孺子不欲因人成功。」自斃一人馘之。忠眞啓狀曰、「平八郎將行、爲君用也。」嗣君大喜。

訓讀　是より先き、吉良義諦は東條を守り、牧野成定は西尾を守り以て氏眞に黨し、岡崎を圖らんと欲す。三月、嗣君東條を攻む。下らず。松平好景をして中島を以て之に備へしむ。東參河の豪姓、菅沼・奥平・設樂・西鄕の諸族、皆氏眞に背いて來り降る。四月、義諦、酒井忠尙を上野に攻む。好景之を救ふ。義諦其虛を窺ひ徑に中島を襲ふ。好景還り戰つて之を走らす。善明堤に至り、敵の大に至るに遇ふ。遂に戰死す。嗣君、津平・小牧に築き、松井忠次・本多廣孝に命じて、之を守らせ、以て東條に備ふ。五月、氏眞東參河を攻む。諸豪善く距ぐ。七月、

嗣君自ら將として牛窪を攻め、別將をして鳥屋を攻めしむ。鳥屋陷る。本多忠勝、叔父忠眞と軍に從ふ。忠眞鎗して一人を斃し、忠勝を顧みて其の首を取らしむ。答へて曰く「孺子人に因つて功を成すを欲せず」と。自ら一人を斃して之を獻る。忠眞狀を啓して曰く「平八郎は將に行く〳〵君の用を爲さんとす」と。嗣君大に喜ぶ。

通釋 此れに先立つて、吉良義諦は東條を守り、牧野成定は西尾を守つて、氏眞に味方し、岡崎を滅ぼさうと思つて居た。三月、嗣君が東條を攻めた。併し落城しなかつた。松平好景をして中島に在つて之に備へさせた。東參河の豪家の菅沼・奧平・設樂・西鄉など言ふ人々は皆氏眞に背いて、こちらへ降つて來た。四月、義諦は上野に來て、酒井忠尙を攻めた。好景はそれを助けに來た。すると義諦は好景の留守を覗つて直に中島を襲擊した。好景は歸つて來て、一戰を交へ、之を走らせた。所が善明堤まで來ると、敵が大勢やつて來るのに出會つた。それで遂に戰死して終つた。嗣君は津平や小牧に城を築いて、松平忠次と本多廣孝に命じて之を守らせ、そして東條の押へとした。五月、氏眞は東參河を攻めた。多くの豪族は見事に之を拒いだ。七月、嗣君は自ら兵に將となつて、牛窪を攻め、別働隊の大將に鳥屋を攻めさせた。鳥屋は陷つた。其の時、本多忠勝が、叔父の忠眞と一緒に軍に從つて居た。忠眞が一人の敵を槍で刺し殺して、忠勝に其の首を取らせようとした。忠勝が答へて曰ふには「私は人の力を借りて手柄を立てたくはありません」と。自分で一人の敵を殺して其の首を切つた。忠眞は其の有樣を申し上げて曰ふには「平八郎はゆく〳〵君の御役に立つやうになるでせう」と。嗣君は非常に喜んだ。

語釋 東條・西尾・善明堤・浦平・小牧・牛窪・鳥屋（參河）〇因レ人成レ功（史記平原君傳中に因レ人成レ事の語がある）

五月、荒川ノ城主吉良賴持、與ニ兄義諦一有レ郤。因ニ酒井正親一請レ降。俱攻ニ拔西尾一、走ニ牧野成

定、遂攻東條。東條裨將富永景通、陣藤波畷、欲攻小牧。忠次・廣孝皆來合於正親、邀撃景通。景通引弓擬廣孝。廣孝直前刺殺之。餘兵皆走。追北至城、降義諦而還。嗣君以義諦邑賜正親、以景通邑賜廣孝、以津平賜忠次。使鳥居忠吉・松平信一守東條。妻頼持以異母妹。

訓讀 五月、荒川の城主吉良頼持、兄義諦と郤あり。酒井正親に因つて降を請ふ。倶に攻めて西尾を拔き、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻む。東條の裨將富永景通、藤波畷に陣し、小牧を攻めんと欲す。忠次、廣孝、皆來つて、正親に合し、邀へて景通を撃つ。景通、弓を引いて廣孝に擬す。廣孝、直に前み刺して之を殺す。餘兵皆走る。北ぐるを追うて城に至り、義諦を降して還る。嗣君、義諦の邑を以て正親に賜ひ、景通の邑を以て廣孝に賜ひ、津平を以て忠次に賜ふ。鳥居忠吉、松平信一をして、東條を守らしむ。頼持に妻はすに異母妹を以てす。

通釋 五月、荒川の城主の吉良頼持が、兄の義諦と折合が惡かつた。酒井正親を頼んで、降服したいと願ひ出て來た。そこで一緒になつて西尾を攻め落し、牧野成定を走らせ、遂に東條を攻めた。すると東條の副將富永景通は藤波畷に陣取り、小牧を攻めようとした。忠次や廣孝が皆來合せて、正親と一緒になつて景通を迎へ撃つた。景通は弓を引きしぼつて、廣孝を狙つた。廣孝は突き進んで之を刺し殺した。他の兵は皆逃げた。逃げるのを追つ掛けて東條の城に至り、義諦に降參させて引き上げた。嗣君は義諦の領地を正親に與へ、景通の領地を廣孝に與へ、又津平を忠次に與へた。鳥居忠吉と松平信一には東條を守らせた。頼持に腹違ひの妹をやつた。

語釋 荒川・藤波畷（參河）

五年三月、嗣君使松平清善攻西郡。不利。更使久松俊勝・松井忠次等攻之。忠次招甲賀間諜十八人、入城擧火。外兵應之。城將鵜殿長持走。追虜其二子。命俊勝守西郡。駿河兵來爭。不能取。氏眞欲殺我質。以我外家關口親永爲豪宗、不敢發。石川數正欲往護質。度嗣君不許、留書而往。聞氏眞甚惜鵜殿氏二子、則因親永請易質。許之。乃馳使還報。嗣君大喜、送二子於駿河。數正乃奉關口氏世子信康而歸。已而氏眞悔之、怒殺親永、擁我將士質、以誘降之。我將士無一人應者。即盡串殺其質。嗣君聞之哀痛。

訓讀 五年三月、嗣君松平清善をして西郡を攻めしむ。利あらず。更に久松俊勝・松井忠次等をして、之を攻めしむ。忠次、甲賀の間諜十八人を招き、城に入つて火を擧げしむ。外兵之に應ず。城將鵜殿長持走る。追うて其の二子を虜にす。俊勝に命じて西郡を守らしむ。駿河の兵來り爭ふ。取る能はず。氏眞我が質を殺さんと欲す。我が外家關口親永の豪宗たるを以て、敢て發せず。石川數正往いて質を護らんと欲す。嗣君の許さざるを度り、書

を留めて往く。氏眞甚だ鵜殿氏の二子を惜むと聞き、則ち親永に因つて質を易へんと請ふ。之を許す。乃ち使を馳せて還り報ず。嗣君大に喜び、二子を駿河に送る。數正乃ち關口氏世子信康を奉じて歸る。已にして氏眞之を悔い怒つて親永を殺し、我が將士の質を擁して、以て之を誘降せんとす。我が將士一人の應ずる者なし。即ち盡く其の質を串殺す。嗣君之を聞いて哀痛す。

通釋 五年三月、嗣君は松平清善に西郡を攻めさせた。併し負けた。更に久松俊勝と松井忠次をして攻めさせた。忠次は有名な甲賀郡の間者十八人を召しよせて、城に潛り込んで、火をつけさせた。外の兵が之に應じて攻め寄せた。城將鵜殿長持は逃げ出した。又之を追つ掛けて其の二人の子供を生捕つた。そこで俊勝に命じて西郡を守らせた。すると駿河の兵が押し寄せて來て爭つた。それで攻め取ることは出來なかつた。氏眞はこちらの人質を殺さうと思つた。夫人の里方の關口親永が、勢力のある家柄であつたので、憚つて無暗に手出しをすることを控へて居た。石川數正は出かけて人質の人々を守護しようと思つた。嗣君は多分それを許さないだらうと考へたので、置手紙をして出掛けた。所が氏眞が鵜殿氏の二人の子供が生捕りにされたのを非常に殘念がつて居ると聞き込んだので、親永に頼んで、人質を交換したいと申し出た。氏眞は之を承知した。そこで急ぎ使の者を走らせてこのことを知らせた。嗣君は大層喜び鵜殿氏の二子を駿河に送り返した。そこで數正も夫人關口氏と世子の信康をつれて岡崎に歸つて來た。暫くすると氏眞は之を後悔して、腹立ちの餘り親永を殺し、そしてこちらの將士連の人質を種にして、我が將士を誘ひ降さうとした。併し一人も之に應ずる將士はなかつた。早速其の人質を皆串刺しにして殺して終つた。嗣君は此の事を聞いて痛々しいまでに嘆き哀しんだ。

語釋 外家（舅外）

四月、引間城背氏眞來降。七月、嵩山亦降。已而皆爲駿河兵所拔。九月、駿河將朝比奈泰長來襲五本松、殺其城主西郷正勝。正勝子元正在月谷。聞變馳援、見父已死、赴駿河軍死。其弟清員爲泰長所捕。行、歷萬丈谷、奮袂自投、遂脫歸因菅沼定盈告狀。嗣君命承父兄後。辭曰「臣兄有遺孤。臣請佐焉。」嗣君義而許之。嗣君自將攻板倉重定于佐脇。佐脇與牛窪・楡木合兵、距于坂井。我前軍敗走。渡部守綱・夏目正吉殿戰。嗣君聞敗馳救、擊斬重定、拔佐脇・八幡二寨。六年二月、遣松井忠次、攻拔岩略寨、三月、自將與駿河將小原鎭實戰于小坂井、破之。五月、放鷹近郊、至深溝。故松平好景子伊忠在焉、邀而饗之。賜之以鷹曰「長澤要地也。武田信玄所窺、非汝莫以當之」乃從守長澤。

訓讀 四月、引間城、氏眞に背いて來り降る。七月、嵩山も亦降る。已にして皆、駿河の兵の拔く所と爲る。九月、駿河の將朝比奈泰長、來つて五本松を襲ひ、其の城主西郷正勝を殺す。正勝の子元正月谷に在り。變を聞いて馳せ援け、父の已に死せしを見て、駿河の軍に赴いて死す。其の弟清員、泰長の捕ふる所と爲る。行くゆ

く萬丈谷を歷、袂を奮つて自ら投じ、遂に脫れ歸つて、菅沼定盈に因つて狀を告ぐ。嗣君、命じて父兄の後を承けしむ。辭して曰く「臣の兄に遺孤有り。臣請ふ、佐けん」と。嗣君、義として之を許す。嗣君自ら將として、板倉重定を佐脇に攻む。佐脇、牛窪・楡木と兵を合せて、坂井に距ぐ。我が前軍敗走す。渡部守綱・夏目正吉殿戰す。嗣君敗を聞いて馳せ救ひ、擊つて重定を斬り、佐脇・八幡の二寨を拔く。六年二月、松井忠次を遣はして、攻めて岩略寨を拔く。三月自ら將として、駿河の將小原鎭實と小坂井に戰つて、之を破る。五月、鷹を近郊に放ち、深溝に至る。故の松平好景の子伊忠焉に在り、邀へて之を饗す。之に賜ふに鷹を以てして曰く「長澤は要地なり。武田信玄の窺ふ所、汝に非ざれば以て之に當る莫し」と。乃ち徙つて長澤を守らしむ。

【通釋】四月、引間城は氏眞に叛いて降服した。七月、嵩山も同じく降つた。けれども間もなく其れ等の城はいづれも駿河の兵に攻め落された。九月、駿河の大將朝比奈泰長が來て、五本松を攻め、其の城主西鄉正勝を殺した正勝の子の元正は、月谷に居て、此の變事を聞き、馳せて助けに向つたが、父が既に討ち死したのを見て、駿河の軍中に突き入つて戰死した、其の弟の清員は泰長の爲めに生捕りにされた。途中萬丈谷を通り過ぎる時、袂を振り切つて、谷へ飛び下り、遂に逃げ歸つて菅沼定盈を通じて有りし次第を申し上げた。嗣君は清員に命じて父と兄の後を嗣がせしめることにした。辭退をして曰ふには「私の兄には、忘れ形見があります。私はどうかそれを助けたいものです」と。嗣君は其れは義理に合つたことだと言つて許した。嗣君は自ら大將となつて、佐脇で板倉重定を攻めた。佐脇では牛窪や楡木と軍を合せて、坂井で防戰した。我が先鋒隊は敗けて逃げた。渡部守綱や夏目正吉が殿をしつゝ戰つた。嗣君は敗戰と聞いて、馳せて助けに向ひ、盛んに攻擊して重定を斬り殺しそして佐脇・八幡の二つの壘を攻め落して終つた。六年二月、松井忠次をやつて、岩略の壘を陷れた。三月、嗣

君自ら大將となつて駿河の將の小原鎭實と、小坂井で戰つて、之を破つた。五月、近郊で鷹狩をやつて、深溝まで行つた。故の松平好景の子の伊忠が此處に居て、喜び迎へて御馳走をした。此の人に鷹を與へて曰ふには「長澤は大切な土地である。武田信玄が狙つて居る所だ。併し、お前の外には其處を守る適當な大將が居ない」と。そこで長澤に移らせて、そこを守らせることにした。

〔語釋〕引間・嵩山（遠江）〇五本松・月谷・萬丈谷・阪井・八幡・岩略・小坂井・深溝・長澤（參河）

十月、使菅沼定顯城于佐崎。糧儲未備。邑中有上宮寺。爲一向宗。頗饒資糧。定顯徵之。寺僧不聽。乃奪之。僧怒、檄同宗鍼崎・野寺・土呂三寺、合衆得千餘人、攻菅沼氏、刼剽而去。定顯訴之。乃命酒井正親、捕其主謀、斬以徇。僧徒益怒、大招聚門徒、將士、係其宗、若欲救親戚、修仇怨者、往往歸之。矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信・其弟正重等數百人。吉良義諦據東條、其弟頼持據荒川、酒井忠尙據上野、松平家次據櫻井、夏目正吉據野羽、一時並叛。僧分之牌、書曰「進一歩生極樂、卻一歩墮地獄」刻日來攻。嗣君大驚、分兵守諸城。大久保忠俊、與從子忠世・忠佐以下、守輪田、酒井正親守西尾、松平伊忠守深溝、本多廣孝・松井忠次守土井、松平清

善守竹谷、松平家忠守形原、松平信一守藤井、松平親俊守福釜、酒井忠次砦于上野傍、毎賊出、擧烽相報。嗣君觀烽即馳救。賊輒逃走。

訓讀 十月、菅沼定顯をして佐崎に城かしむ。糧儲未だ備らず。邑中に上宮寺あり。一向宗たり。頗る資糧饒し。定顯之を徵す。寺僧聽かず。乃ち之を奪ふ。僧怒り、同宗鍼崎・野寺・土呂の三寺に檄し、衆を合せて千餘人を得、菅沼氏を攻め、劫剽して去る。定顯之を訴ふ。乃ち酒井正親に命じて其の主謀を捕へ、斬つて以て徇ふ。僧徒益〻怒り、大に門徒を招聚す。將士の其の宗に係り、若しくは親戚を救つて仇怨を修めんと欲する者は、往往之に歸す。矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信・其の弟正重等數百人なり。吉良義諦は東條に據り、其の弟賴持は荒川に據り・酒井忠尚は上野に據り、松平家次は櫻井に據り、夏目正吉は野羽に據つて一時に竝び叛く。僧之に牌を分ち、書して曰く「一歩を進まば極樂に生じ一歩を卻かば地獄に墮ちん」と。日を刻して來り攻めんとす。嗣君大に驚き、兵を分つて諸城を守らしむ。大久保忠俊は、從子忠世・忠佐以下と輪田を守り、酒井正親は西尾を守り　松平伊忠は深溝を守り、本多廣孝・松井忠次は土井を守り、松平清善は竹谷を守り、松平家忠は形原を守り、松平信一は藤井を守り、松平親俊は福釜を守る。酒井忠次は上野の傍に砦して、賊の出づる毎に烽を擧げて相報ず。嗣君烽を觀て卽ち馳救ふ。賊輒ち逃れ走る。

通釋 十月、菅沼定顯に佐崎の城を築かせた。兵糧の貯がまだ充分でなかつた。其の村の中に、上宮寺といふ寺があつた。宗旨は一向宗であつた。糧食が非常に澤山あつた。定顯は之を取り上げようとした。寺の僧達は承知しなかつた。それで、之を奪ひ取つた。すると僧は腹を立てゝ、鍼崎・野寺・土呂の同宗の寺に廻し文を飛ば

し、人々を合せて千人餘の同勢が出來たので、菅沼氏を攻め掠奪して立ち去つた。定顯が此の事を訴へて來た。そこで酒井正親に命じて、其の發頭人を捕へ之を斬り殺しとなへ示した。すると僧達は益々腹を立て、大に歸依者を呼び集めた。將士の中でも其の宗旨の者、又は親戚を救つて仇を報いたいと思ふ人々は、往々これに味方するのがあつた。卽ち矢田作十郎・馬場小平太・蜂谷貞次・渡部守綱・本多正信、及び其の弟の正重等數百人である。又吉良義諦は東條に立て籠り、其の弟頼持は荒川に、酒井忠尙は上野に、松平家次は櫻井に、夏目正吉は野羽に立籠つて、同時に一緒に謀叛した。僧達は此の人々に位牌を配り、それにかう書いておいた。「一歩でも進んで戰つたならば、極樂に往生が出來るが、反對に一歩でも卻くならば地獄に落されるだらう」と。斯くて日取を定めて攻め寄せようとして居た。嗣君は非常に驚き、兵を分けて諸城を守らせた。大久保忠俊は甥の忠世や忠佐其の他の者と輪田を守り、酒井正親は西尾を、松平伊忠は深溝を、本多廣忠と松井忠次は土井を、松平清善は竹谷を、松平家忠は形原を、松平信一は藤井を、松平親俊は福釜を守つた。そして酒井忠次は上野の近所に壘を作つて、敵が出る度びに烽火を揚げてお互ひに知らせ合つた。嗣君は烽火の揚るのを見ると、直ぐ樣馳せ向つて助けた。それですぐに賊は破られて逃げ走つた。

語釋　野羽・土井・竹谷・形原・藤井（參河）

石川數正與諸公族攻上野、土井兵攻東條、藤井兵攻土呂・鍼崎。皆有功。深溝兵攻野羽。野羽城兵乙部某導而陷城、擒正吉。乙部請曰「臣所以爲導者、欲活正吉也。」伊

忠亦請之。嗣君終釋正吉、祿之。酒井忠次招戸田某、亦以爲導、攻野寺、破其後門。

訓讀 石川數正は諸公族と上野を攻め、土井の兵は東條を攻め、藤井の兵は土呂、鍼崎を攻む。皆功有り。深溝の兵は野羽を攻む。野羽の城兵乙部某、導いて城を陷れ、正吉を擒にす。乙部請うて曰く「臣の導を爲す所以の者は、正吉を活さんと欲するなり」と。伊忠も亦之を請ふ。嗣君終に正吉を釋して、之を祿す。酒井忠次、戸田某を招き、亦以て導と爲して野寺を攻め、其の後門を破る。

通釋 石川數正は一族の人々と上野を攻め、土井を守つて居た兵は東條を攻め、又藤井に居た兵は土呂や鍼崎を攻めた。いづれも手柄があつた。深溝に居た兵が野羽を攻めた。野羽の城兵の乙部某といふ者が案内し、城を陷れ又城將の夏目正吉を生捕つた。すると乙部が願つて曰ふには「私が案内をしたわけは、正吉を助け度い爲めです」と。松平伊忠も亦此の事を願ひ出た。嗣君は遂に正吉を許して扶持を與へた。酒井忠次は戸田某を呼んで、同じ樣に案内として野寺を攻めて、其の後門を打ち破つた。

十一月、鍼崎賊攻輪田。忠俊邀戰于小豆坂。嗣君馳救、大破之。阿部忠政善射。渡部守綱與筧正重皆傷。水野忠重追蜂谷貞次。貞次揮槍返之。忠重卻。嗣君親進迫之。貞次卻。松平金助追而詬之。貞次曰「吾畏主公。豈畏汝哉」。縱殪金助、將馘。嗣君呵之。貞次怖而走。筧正重追平岩親吉、射中其耳。將馘。又呵之。亦怖而走。忠俊進攻鍼崎、

陣于伊田。大久保忠世、與本多正重、以銃相擬。忠世先發。正重傷走。賊議曰「爭戰不決。宜分兵於妙國寺、扼其歸途、夾撃陷之淖中。」蜂谷貞次忠俊壻也。痛其覆滅、獨騎低回寺前。忠俊悟之、引兵還輪田。十二月、嗣君攻佐崎、與矢田・馬場戰、走之。天野康景斬馬場。閏月、本多重次・高力清長、攻土呂、本多廣孝・松井忠次、攻東條、皆有功。賞功分邑、賜忠次松平氏、尋築砦于佐崎傍。

訓讀 十一月、鍼崎の賊、輪田を攻む。忠俊、小豆坂に邀へ戰ふ。嗣君馳せ救ひ、大に之を破る。阿部忠政善く射る。渡部守綱、筧正重と皆傷つく。水野忠重、蜂谷貞次を追ふ。貞次、槍を揮つて之に返す。忠重卻く。嗣君親ら進んで之に迫る。貞次卻く。松平金助、追うて之を詬る。貞次曰く「吾れ主公を畏る。豈に汝を畏れんや」と。鏦して金助を殪し、將に馘らんとす。嗣君之を呵す。貞次、怖れて走る。筧正重・平岩親吉を追ひ、射て其の耳に中つ。將に馘らんとす。又之を呵す。亦怖れて走る。忠俊進んで鍼崎を攻め、伊田に陣す。大久保忠世、本多正重と、銃を以て相擬す。忠世先づ發す。正重傷ついて走る。賊、議して曰く「爭戰決せず。宜しく兵を妙國寺に分ち、其の歸途を扼し、夾撃して之を淖中に陷るべし」と。蜂谷貞次は忠俊の壻なり。其の覆滅を痛み、獨り騎して寺前に低回す。忠俊、之を悟り、兵を引いて輪田に還る。十二月、嗣君、佐崎を攻め、矢田・馬場と戰つて、之を走らす。天野康景、馬場を斬る。閏月、本多重次・高力清長は土呂を攻め、本多廣孝・松井忠次は

東條を攻め、皆功有り。功を賞し邑を分ち、忠次に松平氏を賜ふ。尋いで砦を佐崎の傍に築く。

【通釋】十一月、鍼崎の敵が輪田を攻めた。忠俊は之を小豆坂に迎へて戰つた。嗣君が馳け附けて大に之を打破つた。阿部忠政は弓の名手であつた。賊將渡部守綱は筧正重などゝ一緒に皆負傷した。水野忠重は、蜂谷貞次を追ひ掛けた。貞次は槍を振り廻し乍ら引き返して來た。忠重は引き退いた。そこで、嗣君は自身で之に進み寄つた。今度は貞次の方が退いた。そこで松平金助が追ひ掛けて行つて、口ぎたなく之を罵つた。貞次が曰ふには「俺は主公を畏れる丈けである。どうして貴様などを畏れるものか」と、槍で金助を突き刺し首を掻き斬らうとした。併し嗣君が之を叱り飛ばした。それで怖がつて逃げて終つた　筧正重が平岩親吉を追うて、其の耳に矢を射當てた。其の首を將に斬り取らうとした。すると嗣君が又叱りつけた。これも怖れをなし逃げて行つた。忠俊は進んで鍼崎を攻撃し、伊田に兵を止めて居た。大久保忠世と敵將の本多正重とが、お互に鐵砲で狙ひ合つた。忠世の方が先づ發した。正重は傷を負うて逃げ出した。賊共は相談して曰ふには「戰の勝負は中々決らない。だからこれは妙國寺に兵を分け、敵の歸り途を堰き止めて、挾み撃ちにして泥の中に追ひ落すのが良い」と。蜂谷貞次は忠俊の婿であつた。參河方が賊の計に罹つて顚覆滅亡するのを心に病み、一人馬に乗つて寺の前を行きつ戻りつして居た　忠俊は之を見て、賊の謀を悟り、兵を引いて輪田に歸つた。十二月、嗣君は佐崎を攻めて、敵將の矢田や馬場等と戰ひ、之を走らせた。天野康景が馬場を斬り殺した。閏の十二月に、本多重次や高力清長は土呂を攻め、又本多廣孝・松井忠次は東條を攻めていづれも手柄を樹てた。其の手柄を賞めて土地を分ち與へ、忠次には松平の姓を賜つた。やがて佐崎の近傍に砦を築いた。

【語釋】低回（心ありげな態度を示して立ち去らせるのである）

七年正月三日、水野信元來賀正。會佐崎賊焚岡太平。嗣君望之謝信元上馬而出。信元不忍去。以其卒從。嗣君使上輪田兵當鍼崎、而直出小豆坂、與賊遇。近藤新一射中嗣君轡。嗣君怒親陷賊陣。與信元兵合、擊斬其二將。土呂・鍼崎・野寺賊、合攻輪田。忠俊・忠世防戰被創。嗣君單騎赴援。踵馳者三十八騎、鵜殿康孝戰死。賊黨渡部守綱進逼嗣君。其甥內藤正成侍側呼曰「事已至此、不能恤私親」。乃射仆之。賊兵豨突而進。嗣君甚危。賊黨土屋長吉謂其儕輩曰「吾以門徒故、敢敵主君。今不忍視其危。吾寧墮地獄矣」。乃倒鋒當嗣君馬前、防賊戰死。會日暮。兩軍交綏。嗣君還、脫其甲、得二銃丸。命收長吉尸、葬于輪田。

訓讀 七年正月三日、水野信元來つて正を賀す。會〻佐崎の賊、岡太平を焚く。嗣君、之を望み、信元に謝し馬に上つて出づ。信元去るに忍びず。其の卒を以て從ふ。嗣君、上輪田の兵をして鍼崎に當らしめ、而して直に小豆坂に出で、賊と遇ふ。近藤新一、射て嗣君の轡に中つ。嗣君怒り、親ら賊陣を陷る。信元の兵と合し、擊つて其の二將を斬る。土呂・鍼崎・野寺の賊、合して輪田を攻む。忠俊・忠世、防戰して創を被る。嗣君單騎赴き援く。踵いで馳する者三十八騎。鵜殿康孝戰死す。賊黨渡部守綱、進んで嗣君に逼る。其の甥內藤正成、側に

侍し、呼んで曰く「事已に此に至る、私親を恤ふる能はず」と。乃ち射て之を仆す。賊兵豨突して進む。嗣君甚だ危し。賊黨土屋長吉、其の儕輩に謂つて曰く「吾れ門徒の故を以て、敢て主君に敵す。今其の危きを視るに忍びず。吾れ寧ろ地獄に墮ちん」と、乃ち鋒を倒にして嗣君の馬前に當り、賊を防いで戰死す。會〻日暮る。兩軍交綏す。嗣君還り、其の甲を脫すれば、二銃丸を得たり。命じて長吉の尸を收めて、輪田に葬らしむ。

【通釋】七年正月三日、水野信元が來て、新年の挨拶を申し上げた。其の時丁度、佐崎の賊が岡太平を焚いた。嗣君は遠くからそれを見、信元に會釋して立ち上り、馬に乘つて出かけて行つた。信元は之を見て、歸る氣持になれない。自分の兵士を引きつれて、嗣君に從つた。嗣君は上輪田の兵をして鍼崎に當らせ、そして眞直に小豆坂に出て賊兵と出會つた。近藤新一は嗣君の鐙に射當てた。嗣君は怒つて自身で敵の陣を打ち破つた。信元の兵と合し、攻擊して二人の敵將を斬り捨てた。土呂・鍼崎・野寺の賊共は聯合して輪田に攻め寄せた。忠俊や忠世が防ぎ戰つて、負傷した。嗣君は只一騎助けに向つた。後に踵いて馳せ從ふ者が三十八騎あつたが、鵜殿康孝は戰死した。賊の大將渡部守綱は進んで嗣君の側に迫つて來た。其の甥の內藤正成が嗣君のお側について居たが、大聲に叫んで曰ふには「最早斯くなる上は、親類だと言つて容赦は出來ない」と。そこで守綱を射仆した。賊の兵は荒れ狂つた猪の樣に突き進んで來た。嗣君は頗る危くなつた。すると賊方の土屋長吉は仲間の者どもに向つて曰ふには「我々は門徒宗であるところから、主君に敵對したのである。今主君の危いのを見て居るわけにはゆかない。自分は寧ろ地獄に落ちても、此の場合主君を助けぬことは出來ない」と。そこで鋒先を向けかへて、嗣君を庇うて馬前に立ち塞がり賊を防ぎ、遂に戰死を遂げた。其の時丁度日が暮れた。兩軍共に引き退いた。嗣君は歸つてから、其の甲冑を脫いで見ると、二個の彈丸が出て來た。命じて長吉の死骸を取寄せ、輪田に埋葬させた。

二月、西尾兵合水野氏援軍、戰于櫻井・野寺、破之。嗣君自討野寺賊、設伏破之。數日佐崎賊可三百、以矢田爲將、犯岡崎。嗣君密戒銃隊曰「賊所以困我者、以有矢田也。彼負勇、每先士卒。宜狙擊之」。及戰交、矢田中丸斃。餘賊潰走。自是賊衆沮喪、互相悔責、勸本多正信・蜂谷貞次請降。貞次就大久保忠俊乞焉。忠俊因說嗣君曰「方今群雄務厲兵拓地。而我有內變。國兵半爲仇讐。有如鄰國乘隙來侵、傾覆不旋踵。不若容其自新、使各效力」。嗣君聽之。

語釋 豨突（豨は猪に同じ。猪の如く猛く進むこと。）

訓讀 二月、西尾の兵、水野氏の援軍と合して、櫻井・野寺に戰ひ、之を破る。嗣君自ら野寺の賊を討ち、伏を設けて之を破る。數日にして佐崎の賊三百可り、矢田を以て將と爲し岡崎を犯す。嗣君密に銃隊を戒めて曰く「賊の我を困むる所以は、矢田有るを以てなり。彼れ勇を負み、每に士卒に先んず。宜しく之を狙擊すべし」と。戰交ふるに及び、矢田、丸に中つて斃る。餘賊潰走す。是より賊衆沮喪し、互に相悔責し、本多正信・蜂谷貞次に勸めて降を請はしむ。貞次、大久保忠俊に就いて乞ふ。忠俊因つて嗣君に說いて曰く「方今、群雄務めて兵を厲し地を拓く。而るに我れ內變有り。國兵の半は仇讐と爲る。鄰國隙に乘じて來り侵すが如き有らば、傾覆踵を旋らさ

ず共の自新を容れて、各々力を效さしむるに若かず」と。嗣君之を聽す。

通釋 二月、西尾の兵は、水野氏の援兵と聯合して、櫻井や野寺で戰ひ、其を打ち破つた。嗣君は自ら野寺の賊を討ちに出かけ、伏兵を設けて、之を破つた。數日後に佐崎の賊兵三百ばかりが、矢田を大將として岡崎に攻め寄せた。嗣君は密に鐵砲隊の者に注意を與へて曰ふには「賊がこちらを惱ますのは、矢田が居るからである。矢田は勇氣に任かせて、いつも士卒の先頭に立つて働いて居る。其處を狙打つが宜しい」と。戰爭をやり出すと矢田は丸に當つて死んだ。其の他の賊共は總崩れとなつて逃げ走つた。これから後は、賊共は意氣が衰へて、お互に後悔したり責任をなすり合つたりして、本多正信や蜂谷貞次に勸めて降服を願ふ樣にさせた。貞次は大久保忠俊の所へ行つて降服を願つた。そこで忠俊は嗣君に說いて曰ふのに「昨今諸方の英雄は一生懸命軍隊を練り、土地を廣くすることを計つて居ります。然るに我國には內亂があります。國中の半分は讐となつて居ります。此の時に、若し隣國などが其の際に乘じて侵略する樣なことがあれば、我が國の顚覆することは、瞬く間もないほど、早く定つて終ひませう、だから今は、彼等の後悔して改めた心を許してやつて、銘々に國家の爲めに盡力させるやうにするに越したことはありません」と。嗣君はそれを聞き入れた。

語釋 自新（前非を悔い行を改める）

貞次乃與レ衆議、請二三事一。曰「將士復レ祿」。曰「僧徒安堵」。曰「渠帥減レ死」。嗣君曰「所レ請皆允。獨渠帥不レ可レ赦」。忠俊泣諫曰「去歲以來、臣宗族幾殲。公欲二恤而賞一レ之、願賜二此輩之命一、以

爲前鋒、攻吉良・荒川、立功償罪。則疆土日拓矣。水野信元亦以爲請。嗣君勉從之、召貞次・守綱以下于輪田、徵盟賜書焉。使石川家成率鍼崎降將赴土呂、呼而諭之。賊投兵而降。佐崎・野寺相繼皆降。乃逐正信等五人、及諸惡僧、以其餘爲先鋒、攻東條・荒川。義諦・賴持請降。不許。皆西走。

訓讀 貞次乃ち衆と議し、三事を請ふ。曰く「將士は祿を復せん」。曰く「僧徒は安堵せん」曰く「渠帥は死を滅ぜん」と。嗣君曰く「請ふ所皆允さん。獨り渠帥は赦すべからず」と。忠俊泣いて諫めて曰く「去歲以來、臣が宗族幾ど殲く。公恤んで之を賞せんと欲せば、願はくは此の輩の命を賜うて以て前鋒と爲し、吉良・荒川を攻め、功を立て、罪を償はしめよ。則ち疆土日に拓けん」と。水野信元も亦、以て請を爲す。嗣君勉めて之に從ひ、貞次・守綱以下を輪田に召し、盟を徵し書を賜ふ。石川家成をして、鍼崎の降將を率ゐて土呂に赴き、呼んで之を諭さしむ。賊、兵を投じて降る。佐崎・野寺、相繼いで皆降る。乃ち正信等五人及び諸惡僧を逐ひ、其の餘を以て先鋒と爲し、東條・荒川を攻めしむ。義諦・賴持降を請ふ。許さず。皆西走す。

通釋 貞次はそこで衆と相談し、降服するについて、次の三ケ條を願ひ出た。即ち一つ、將士の扶持を前の通りにすること。一つ、僧侶は御咎めなく本寺に落ち着くことの出來るやうにすること。一つ、謀叛人の大將株は死刑を赦すこと」と。すると嗣君が曰ふには「願出のことは、皆聞き届ける。只大將株は許すことは出來ない」と。忠俊は泣いて諫めて曰ふのに「昨年以來といふもの、私の一族は殆んど死に絶えました。わが君が之を不愍に

思つて恩賞を下さらうと思はれるならば、どうか願はくは其の御心を以て、此れ等の人々の命をお與へ下され、そして前鋒として吉良や荒川を攻めさせ、手柄を立てゝ、今迄の罪を償ふやうにさせて下さい。さすれば、國土は日々に大きくなるわけでございます」と。水野信元も亦助命のことを願つた。嗣君は蟲を抑へて其の意見に從ひ、貞次・守綱以下の面々を輪田に召し呼んで、誓文を取り、又本領安堵の墨附きを賜つた。石川家成をして鍼崎で降參した將士を率ゐさせ、土呂に行つて敵を呼び出して說きさとさせた。賊兵は兵器を投げ捨てゝ降參した。佐崎や野寺も續いて皆降參した。そこで賊の大將本多正信等五人の者と多くの惡僧共を逐ひ拂ひ、其の餘の兵を先鋒として東條や荒川を攻めさせた。義諦と賴持は降參を願ひ出た。併し許さなかつた。それ故皆西の方に逃げ去つた。

【語釋】吉良・荒川（吉良義諦 荒川賴持）

是役也、榊原康政先登於上野。康政之先曰仁木義長、居伊勢榊原邑。其裔清長從參河、仕藏人親忠。康政其孫也。幼沈深喜書。是歲、甫十六。成瀨正義與弟正一、每戰有功。二人嘗獲罪、出奔甲斐。已而來歸。嗣君待之如故。二人感激。故戰最力。

【訓讀】是の役や榊原康政、上野に先登す。康政の先を仁木義長と曰ひ、伊勢の榊原邑に居る。其の裔清長、參河に從り、藏人親忠に仕ふ。康政は、其の孫なり。幼より沈深にして書を喜む。是の歲、甫めて十六。成瀨正義、弟正一と、戰ふ每に功有り。二人嘗て罪を獲て甲斐に出奔す。已にして來り歸す。嗣君之を待つこと故の如し。二

人感激す。故に戰最も力む。

通釋 此の戰爭に於て、榊原康政は、上野で魁の功名を立てた。康政の先祖は仁木義長と言つて、伊勢の榊原村に住んでゐた。其の子孫の清長の時になつて、參河に移り住み、藏人の親忠に仕へたのである。康政は其の清長の孫に當つて居る。少さい時から落着いた性質で讀書を好んだ。此の年やつと十六歳であつた。成瀨正義は弟の正一と戰爭に出る度に、いつも手柄を立てた。此の二人は或る時罪を犯したので、甲斐に逃げて行つた。間もなく又歸つて來た。嗣君は以前と同じ樣に此の二人を待遇した。二人は深く心を動かしてそれに感じて居た。其の爲めに戰ふ時は最も力を盡したのであつた。

嗣君既定西參河、三月、出兵東參河。四月、小笠原康元以幡豆、牧野定成以牛窪、戸田重定以楡木、皆降。乃築砦于一宮、使本多信俊守之、以逼吉田・田原。五月、氏眞將兵一萬、陣佐脇・八幡二邑、分其五千攻一宮。信俊告急。嗣君自將二千人赴援、過二邑間、至本能原、部伍嚴整、兵鋒甚鋭。氏眞不敢犯。其兵圍一宮者、解退。信俊尾撃破之。明日、嗣君復逼氏眞營前而還。氏眞引去。自是不能復出。六月、嗣君使酒井忠次率牛窪・楡木・幡豆兵攻吉田。本多忠勝先登、蜂谷貞次戰死。城將小原鎭實終致城去。以賜忠次。本多廣孝攻田原、取其郛。城將朝比奈元智亦致城去。以賜廣孝。六月、

酒井忠尙復叛。命廣孝・忠次討之。城兵醜其數叛、相率出降。忠尙奔駿河、尋死。是歲、攻御油・寺部、皆取之。長篠・築手・段嶺三邑皆降。

〔訓讀〕嗣君、既に西參河を定め、三月、兵を東參河に出す。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成は牛窪を以て、戸田重定は楡木を以て、皆降る。乃ち砦を一宮に築き、本多信俊をして之を守らしめ、以て吉田・田原に逼る。五月、氏眞、兵一萬に將として、佐脇・八幡の二邑に陣し、其の五千を分つて一宮を攻めしむ。信俊、急を告ぐ。嗣君、自ら二千人に將として赴き援け、二邑の間を過ぎて、本能原に至る。部伍嚴整、兵鋒甚だ鋭し。氏眞敢て犯さず。其の兵の一宮を圍む者解いて退く。信俊、尾擊して之を破る。明日、嗣君復氏眞の營前に逼つて還る。氏眞、引いて去る。是より復出づる能はず。六月、嗣君、酒井忠次をして、牛窪・楡木・幡豆の兵を率ゐて吉田を攻めしむ。本多忠勝先登し、蜂谷貞次戰死す。城將小原鎭實終に城を致して去る。以て忠次に賜ふ。本多廣孝田原を攻めて、其の郛を取る。城將朝比奈元智も亦城を致して去る。以て廣孝に賜ふ。六月、酒井忠尙復叛く。廣孝・忠次に命じて之を討たしむ。城兵、其の數〻叛くを醜み、相率ゐて出で降る。忠尙、駿河に奔り、尋いで死す。是の歲、御油・寺部を攻めて皆之を取る。長篠・築手・段嶺の三邑皆降る。

〔通釋〕嗣君は既に西參河を平定したので、三月、東參河に兵を出した。四月、小笠原康元は幡豆を以て、牧野定成は牛窪を以て、戸田重定は楡木を以て皆降參して來た。そこで一宮に砦を築き、本多信俊に其處を守らせ、そして吉田と田原に攻め寄せた。五月、駿河の氏眞が一萬の兵に大將となつて、佐脇と八幡の兩村に陣取り其の五千人を分けて、一宮を攻めさせた。信俊は一宮の危急を知らせた。嗣君は自ら二千人を率ゐて援けに驅け附け

佐脇と八幡村との間を通つて本能原に着いた。隊伍が嚴しく整ひ、兵の勢が非常に強かつた。氏眞は進んで戰はうとはしなかつた。其の一宮を圍んで居た兵も、圍みを解いて逃げ出した。信俊は追擊して之を破つた。翌日嗣君が再び氏眞の兵營の前まで攻め寄せて歸つて來た。氏眞は兵を引きつれて去つて行つた。此れ以來駿河方は二度と寄せて來ることは出來なくなつた。六月、嗣君酒井忠次をして、牛窪・楡木・幡豆の兵を率ゐて、吉田を攻めさせた。其の時本多忠勝が眞先に敵の中へ踏み込み、蜂谷貞次は討死した。城將小原鎭實は遂に城を明け渡して逃げた。それで其の城は忠次に賜はつた。本多廣孝が、田原を攻めて、其の外廓を取つた。城將朝比奈元智も亦城を渡して逃げた。それでそのまゝ其の城は廣孝に賜はつた。六月、酒井忠尚が再び叛いた。廣孝と忠次に命じて之を擊たせた。城の兵は忠尚が幾度も叛くのを憎んで、皆一緒に誘ひ合つて城を出て降參した。忠尚は駿河に逃げ走り、間もなく死んだ。又此の歲には、御油や寺部を攻めて皆占領した。長篠・築手・段嶺の三村も皆降參した。

語釋 幡豆・一宮・吉田・田原・本能原・長篠・築手・段嶺(參河)

八年春、嗣君盡定參河。乃置奉行三人、掌國內政刑。以作左衞門本多重次、與左衞門高力淸長、三郎兵衞天野康景充之。重次剛直、淸長慈祥、康景沈重善謀。民爲之語曰「佛高力、鬼作左、彼此無偏天三郎。」先是嗣君既與今川氏絕。以元康之名義元所命也、改名家康。取遠祖義家偏名也。烏居忠吉爲嗣君奏京師、請襲先世官爵。九

年十二月、詔敍從五位下、任參河守。

【訓讀】八年春、嗣君盡く參河を定む。乃ち奉行三人を置いて、國内の政刑を掌らしむ。作左衞門本多重次・與左衞門高力清長、三郎兵衞天野康景を以て之に充つ。重次は剛直、清長は慈祥、康景は沈重にして善く謀る。民之が語を爲して曰く「佛高力、鬼作左、彼此偏無きは天三郎」と。是より先き、嗣君旣に今川氏と絕つ。元康の名は義元の命ずる所なるを以て、名を家康と改む。遠祖義家の偏名を取るなり。鳥居忠吉、嗣君の爲に京師に奏し、先世の官爵を襲がんと請ふ。九年十二月、詔して從五位下に敍し、參河守に任ぜらる。

【通釋】八年春、嗣君は參河を全部平定した。そこで奉行と云ふ役人を三人置いて、國内の政治刑罰を取り扱はせた。本多作左衞門重次と高力與左衞門清長及び天野三郎兵衞康景の三人が之に當つた。重次は意志強く、正直で、清長は惠深い、お人善しで、康景は落着いた性質で謀がうまかつた。人々は之を歌の文句にして曰ふには「佛高力、鬼作左、彼此偏なきは天三郎」と。是より以前、嗣君は旣に駿河の今川氏と交際を絕つた。元來元康といふ嗣君の名前は今川義元が附けて吳れたのであるから、(交際を絕つたので)此の度家康と改名した。家康の家といふ字は、遠い先祖源義家の家といふ一字を取つたのである。鳥居忠吉は嗣君の爲めに、朝廷に申し上げて、先代の官位や爵祿を繼承致し度いと願ひ出た。九年十二月、詔があつて、從五位下に敍せられ、參河守に任命された。

【語釋】佛高力（慈悲深いから佛に比す）○鬼作左（剛强善く罵るから鬼に比した）○參河守（これから以後は名を直書しないで參河守と稱し、左京大夫となると大夫と書し、侍從になれば侍從といひ、少將になれば少將と書す、これは例言に斷つてある書き方である）

十年五月、參河守爲世子信康、娶織田信長女。信長使佐久間信盛來送女、參河守

之定國也、武田信玄使使修好。是歲、使其將山縣昌景來言曰「請戮力滅氏眞、我取大井河以東、公取大井河以西。」參河守許之。十一年正月、詔遷參河守爲左京大夫。三月、大夫出兵遠江、攻久能。使高力清長說城將宗能降之。松下・二股・高藪三族皆降。進攻堀川拔之、遂取宇津山、城于見附。八月、織田信長西略近江、來乞援兵。大夫使松平信一以二千餘人往。信長將木下秀吉等、攻箕作城。城固不拔。信一疾攻、冒矢石而進、大呼曰「參河人松平信一先登矣。」諸隊繼登。城遂陷。信長面褒信一曰「卿可謂膽生毛矣。」賜桐號胴服。十二月、大夫入遠江、欲取井伊谷。谷中豪族伊井直親、以讒言爲氏眞所殺。其故部菅沼・近藤・鈴木三族、皆屬大夫。大夫遂取刑部。

【訓讀】十年五月、參河守世子信康の爲に、織田信長の女を娶る。信長佐久間信盛をして來つて女を送らしむ。參河守の國を定むるや、武田信玄使をして好を修めしむ。是の歲、其の將山縣昌景をして來り言はしめて曰く「請ふ力を戮せて氏眞を滅し、我は大井河以東を取らん、公は大井河以西を取れ」と。參河守之を許す。十一年正月、詔して參河守を遷して左京大夫と爲す。三月、大夫兵を遠江に出して、久能を攻む。高力清長をして、城將宗能に說いて之を降らしむ。松下・二股・高藪の三族皆降る。進んで堀川を攻めて、之を拔き、遂に宇津山を取つて

見附に城く。八月、織田信長、西、近江を略し、來つて援兵を乞ふ。大夫、松平信一をして、二千餘人を以て往かしむ。信長の將木下秀吉等、箕作城を攻む。城固うして拔けず。信一疾く攻め、矢石を冒して進み、大に呼んで曰く「參河の人松平信一、先登す」と。諸隊繼いで登る。城遂に陷る。信長面のあたり信一を褒めて曰く「卿、膽に毛を生ずと謂ふべし」と。桐號の胴服を賜ふ。十二月、大夫遠江に入り、井伊谷を取らんと欲す。谷中の豪族伊井直親、讒言を以て氏眞の殺す所と爲る。其の故部菅沼・近藤・鈴木の三族、皆大夫に屬す。大夫遂に刑部を取る。

通釋　十年五月、參河守は世嗣信康の爲めに、織田信長の女を娶つた。信長は佐久間信盛をして、娘を送つて來させた。參河守が國を平定した時、武田信玄は使者を寄越して交際を求めさせた。此の年、信玄は、その部將の山縣昌景を遣はして曰はせるには「願はくは力を合せて氏眞を攻め滅し自分の方では大井河の東を取ります。貴公は大井河の西をお取りなされ」と。參河守は之を承知した。十一年正月、詔があつて、參河守の役を移して、左京大夫となされた。三月、左京大夫は遠江に出兵して久能を攻めた。高力清長をして城將宗能に說いて降參を奬めさせた。松下・二股・高藪の三族が皆降參した。進んで堀川を攻めて落し、遂に宇津山をも取つて、見附といふ處に城をこしらへた。八月、織田信長は西へ進んで近江を取らうと計り、援兵を出して、呉れろと賴んで來た。大夫は松平信一をして二千人の兵を連れて行かせた。信長方の大將木下秀吉等が、箕作城を攻めた。けれども、城の守りが固くて攻め落すことが出來なかつた。すると松平信一はきびしく攻め寄せ矢や石彈を潛り拔けて進み、大聲に叫んで曰ふには「參河の住人松平信一が一番驅けをしたぞ」と、諸隊はその後から續いて城に登つた。城は遂に陷つた。信長は面前で信一を褒めて曰ふには「お身は所謂膽に毛を生ずると言ふ樣な、恐ろしく膽力の

ある人だ」と。桐の紋のついた胴着を賜はつた。十二月、大夫は遠江に攻め入つて、井伊谷を取らうと思つた。すると其の谷中の豪族の伊井直親といふ者が讒言にあつて、氏眞の爲めに殺された。その爲めに伊井の故の組下であつた菅沼・近藤・鈴木の三族が皆氏眞に叛いて大夫に從つた。大夫は遂に刑部をも取つた。

語釋 久能（駿河） ○堀川・宇津山・見附・井伊谷・刑部（遠江） ○箕作（近江） ○膽生レ毛（膽力の強いこと。）

先レ是、引間城主飯尾某、密通二款於我一。事覺被レ殺。其部下以レ城來降。又爭レ事相殺。於レ是、大夫入二引間一、益二其壘壁一、立爲二根據一。遂招二降馬伏・高天神二城一。是時武田信玄已入二駿河一、逐二氏眞一。氏眞奔二遠江一。朝比奈泰能、守二掛川城一、以迎レ之。三浦義鎮・小原資久、棄二氏眞一、而獨保二花澤一。甲斐將秋山晴近、濟二大井河一、招二久能一。久能不レ下。奥平・菅沼迎二戰于見附一。我兵不レ利。大夫使三人誚二晴近一曰「汝何敢背レ約。不二亟引去一、我親出撃レ之」。晴近懼引去。大夫遂攻二掛川一。城險食足。不レ可二輒拔一。乃連レ砦備レ之、退陣二見附一。是歲、奏請レ復二徳川氏一。十二年正月、詔報可。自レ是徳川爲レ宗、松平爲レ族。

訓讀 是より先き、引間城主飯尾某、密に款を我に通ず。事覺れて殺さる。其の部下、城を以て來り降る。又事を爭ひ相殺す。是に於て大夫引間に入り、其の壘壁を益し、立てゝ根據と爲す。遂に馬伏・高天神の二城を招降

す。是の時、武田信玄已に駿河に入り、氏眞を逐ふ。氏眞遠江に奔る。朝比奈泰能、掛川城を守り、以て之を迎ふ。三浦義鎭・小原資久、氏眞を棄てゝ、獨り花澤を保つ。甲斐の將秋山晴近、大井河を濟つて、久能を招く。久能下らず。奥平・菅沼、迎へて見附に戰ふ。我が兵利あらず。大夫人をして晴近を誚めしめて曰く「汝、何ぞ敢て約に背ける。亟に引き去らずば、我れ親ら出でゝ之を擊たん」と。晴近懼れて引き去る。大夫遂に掛川を攻む。城險にして食足る。輒く拔くべからず。乃ち砦を連ねて之に備へ、退いて見附に陣す。是の歲、奏して德川氏に復せんと請ふ。十二年正月、詔して、報可す。是より德川を宗と爲し、松平を族と爲す。

通釋 是より先きに、引間城主の飯尾某が、祕に我に內通した。其の事がばれて飯尾は殺された。飯尾の部下の兵が城を擧げて降參して來た。所がその部下同志が或る事で爭をなし互に殺し合つた。そこで大夫は引間に入つて、城の壘壁を增築し、其處を根據地と定めた。そして遂に馬伏と高天神の二城を招き降した。此の時、武田信玄は旣に駿河に侵入して氏眞を追つた。氏眞は遠江に逃げた。朝比奈泰能は掛川城を守つて居て氏眞を迎へ入れた。三浦義鎭と小原資久の二人は氏眞をふり棄て、獨り花澤を守つた。甲斐の大將秋山晴近は大井河を渡つて、久能を招き降さうとした、併し久能は降參しなかつた。奥平と菅沼の二將が之を見附に迎へて戰つた。併し我が兵は負け戰であつた。大夫は人をやつて晴近を責めて曰ふには「お前はどうして約束に背いたのか。大井河を越したから若しすぐにも兵をつれて去らないならば、余は自身擊ちに出掛けるぞ」と。晴近は畏れて引き去つた。大夫は遂に掛川を攻めた。掛川城は險阻で其の上に兵糧が充分だつた。それで簡單に之を落すことは出來なかつた。そこで砦を其の近所に列べ備へ、退いて見附に陣取つた。此の年朝廷に申上げて德川の姓に復したいと願つた。十二年正月、詔があつてお許しが出た。此れから德川を本家の姓とし、松平を一族の姓ときめた。

語釋 花澤（駿河）

是月、復攻掛川、使使謂信玄曰「掛川則僕力能舉之。前日之約如何」。信玄答曰「不敢渝」。大夫乃徙陣于天王山、以逼掛川。氏眞啗久能宗能父宗明以利、欲夾擊我軍。宗明諾而告之宗能。宗能不從。氏眞之使復至、戒期。宗明父子密謁大夫告之。大夫使佯期焉、而夜伏兵城外、候敵出起鬪、獲其五將、尾而入城。城兵堅拒不得入。二月、退陣見附、降濱名・都築二城。三月、復攻掛川。泰能等出戰于西宿。我諸將擊破之、追走至城、以竹楯環攻。城兵以舟師出我軍後。鳥居元忠・榊原康政等邀擊走之。大夫退入引間、使三奉行下令三條、禁鹵掠、按據士民。會氣賀盜起。遣兵誅其首謀、盡赦餘黨。遠江民歸心焉。

訓讀 是の月、復掛川を攻め、使をして信玄に謂はしめて曰く「掛川は則ち僕の力もて能く之を擧げん。前日の約如何」と。信玄答へて曰く「敢て渝らず」と。大夫乃ち徙つて天王山に陣し、以て掛川に逼る。氏眞、久能宗能の父宗明に啗すに利を以てし、我が軍を夾擊せんと欲す。宗明、諾して之を宗能に告ぐ。宗能從はず。氏眞の使復至つて期を戒む。宗明父子、密に大夫に謁して之を告ぐ。大夫佯り期せしめて、夜、兵を城外に伏せ、敵の

出づるを候ひ、起つて鬪ひ、其の五將を獲、尾して城に入る。城兵堅く拒ぎ入るを得ず。二月、退いて見附に陣し、濱名、都築の二城を降す。三月、復掛川を攻む。泰能等出で、西宿に戰ふ。我が諸將、擊つて之を破り、走るを追うて城に至り、竹楯を以て環り攻む。城兵、舟師を以て我が軍後に出づ。鳥居元忠・榊原康政等、邀へ擊つて之を走らす。大夫、退いて引間に入り、三奉行をして、令三條を下さしめて、鹵掠を禁じ、士民を按撫す。會〻氣賀の盜起る。兵を遣はして其の首謀を誅し、盡く餘黨を赦す。遠江の民心を歸せり。

【通釋】此の月、再び掛川を攻め、使を信玄の所へやつて曰ふには「掛川は自分一人の力で、大丈夫取ることが出來る。前の約束はどうか」と。信玄は答へて曰ふのに「決して約束は變へぬ」と。そこで大夫は天王山に移つて陣をかまへ、掛川に攻め寄せた。氏眞は久能宗能の父の宗明を利益でおびき出し我が軍を夾み擊ちにしようと思つた。宗明は承知して此の事を宗能に知らせた。宗能は從はなかつた。すると氏眞の使がまた來て期日を約束した。しかし宗明父子は祕に大夫に面會して此のことを告げた。大夫は一計を授け、偽つて期日を約束させて置き夜城外に兵を伏せ、敵の出て來るのを候ひ、急に起き上つて戰ひ、敵の五人の大將を生捕り、敵の後をつけて城に入らうとした。しかし城の兵は極力防戰して、入ることは出來なかつた。二月、退いて見附に陣取り、濱名都築の二城を降參させた。三月、又々掛川を攻めた。泰能等は城を出て、西宿で戰つた。我が諸將は擊つて之を破り、逃げ走るのを追つかけ城まで來り、竹製の楯を以て矢彈を防ぎながら、城を取り卷き、攻め立てた。城兵は舟に乘つた兵を繰り出し我が軍の背後を衝いた。鳥居元忠や榊原康政等が迎へ擊つて之を走らせた。大夫は引き下つて引間城に入り、三人の奉行に命じて三ケ條の命令書を出させ、物品をかすめることを禁じたり、又地方の人民を落着かせるやうにした。其の時丁度氣賀で一揆が起つた。兵をやつて其の發頭人を殺し他の殘黨の者は

全部罪を赦した。それで遠江の民は徳川氏に心を寄せた。

語釈 三奉行（高力・本多・天野） ○氣賀（遠江）

氏眞度掛川終不可守、欲走依北條氏康。氏康其舅也。乃因酒井正親・石川家成乞和。大夫答曰「某幼爲尊翁所扶持。不敢失舊誼。讒者所間、以至構兵。今信玄欲併駿河・遠江。公若以遠江見附某、某當與氏康謀、納公於駿河」因送誓書。五月、使松平家忠護送氏眞、至戸倉、授之於北條氏。

訓読 氏眞、掛川の終に守るべからざるを度り、走つて北條氏康に依らんと欲す。氏康は、其の舅なり。乃ち酒井正親、石川家成に因つて和を乞ふ。大夫答へて曰く「某幼にして、尊翁の扶持する所と爲る。敢て舊誼を失はず。讒者に間せられて、以て兵を構ふるに至る。今、信玄、駿河・遠江を併せんと欲す。公、若し遠江を以て某に附せらるれば、某、當に氏康と謀り、公を駿河に納るべし」と。因つて誓書を送る。五月、松平家忠をして氏眞を護送せしめ、戸倉に至つて、之を北條氏に授く。

通釈 氏眞は掛川を到底守り終うせないと考へたので、北條氏康の許に走り、頼らうと思つた。氏康は氏眞の妻の父に當つて居る。そこで氏眞は酒井正親と石川家成を通じて和睦を乞うた。大夫が答へて曰ふのに「私は幼少の時、御尊父のお世話を受けた。強ひて昔の恩義を忘れようとは思はない。併し、讒言する者に離間されて

兵を構へ、戰爭するやうになつたのである。今甲斐の武田信玄が、駿河と遠江を取らうとして居る。貴下が若し私に遠江を預けられるならば、私はきつと氏康と相談して貴下を駿河にお屆け申さう」と。そこで誓文を書き送つた。五月、松平家忠に氏眞を戸倉まで護送させ、北條氏に引き渡させた。

〔語釋〕戸倉（伊豆）

大夫於是取遠江、以掛川賜石川家成、自從五百人、巡視郡縣。甲斐將山縣昌景、將兵三千、自駿府至金谷、遇大夫。下馬而拜、覩我寡單、心動、託忿爭反襲之。大夫走就險隘、撃斬其前鋒八騎。昌景引去。大夫大怒、遣兵攻駿府。昌景棄壘走。乃使使氏康、謀復氏眞。氏眞舊臣岡部正綱等、修府城守之。六月、以天方・飯田不奉我令、攻取之。十一月、信玄與氏康戰勝之、降正綱、取駿河、分兵據小山。大夫使松平眞乘援掛川以攻小山。

〔訓讀〕大夫是に於て遠江を取り、掛川を以て石川家成に賜ひ、自ら五百人を從へ、郡縣を巡視す、甲斐の將山縣昌景、兵三千に將として、駿府より金谷に至り、大夫に遇ふ。馬を下つて拜し、我が寡單を覩て心動き、忿爭に託して反り之を襲ふ。大夫、走つて險隘に就き、撃つて其の先鋒八騎を斬る。昌景引き去る。大夫、大に怒り兵を遣はして駿府を攻む。昌景、壘を棄てゝ走る。乃ち使を氏康に使し、氏眞を復するを謀る。氏眞の舊臣岡部

正綱等府城を修めて之を守る。六月、天方・飯田、我が令を奉ぜざるを以て攻めて之を取る。十一月、信玄、氏康と戰つて之に勝ち、正綱を降し、駿河を取り、兵を分つて小山に據る。大夫、松平眞乘をして掛川を援け、以て小山を攻めしむ。

通釋 大夫はこゝで遠江を手中に收め、掛川を石川家成に與へ、自ら五百人の士卒を從へて、地方郡縣を見廻りに出掛けた。其の時、甲斐の大將の山縣昌景は、三千の兵を率ゐ駿府から金谷へやつて來て、大夫と出會つた昌景は馬を下りて大夫に禮をしたが、我が兵の小勢で且つつゞく者のない有樣を見て、遽に討ち取らうといふ心が動き、喧嘩に言ひがゝりをつけて、引返して不意に襲擊した。大夫は走つて險しい狹い所に依つて、敵の前鋒の八騎を斬り捨てた。昌景は兵を引いて去つた。大夫は此の事から非常に立腹して、兵を遣はして駿府を攻擊させた。昌景は城壘を捨てゝ逃げ出した。そこで使を氏康の所へやつて、氏眞を呼び戻すことを相談した。氏眞の元の家來であつた岡部正綱等が駿府の城を修繕して守つてゐた。六月、天方や飯田が我が命令に從はないので、之を攻め取つた。十一月、武田信玄は氏康と戰つて勝ち、正綱を降參させて駿河を占領し、兵士を分けて小山に立て籠つた。大夫は松平眞乘に命じて、掛川を援助して、小山を攻めさせた。

語釋 金谷・天方・飯田・小山(遠江)

元龜元年正月、以遠江既定、徙居引間、改名濱松、使世子居岡崎、以撫參河。大夫威名大振。稱爲海道第一。是月、信玄攻拔花澤・小原、資久・三浦義鎭奔高天神。城主小

笠原長忠與之有故。而知大夫深惡二人、斬獻其首。大夫不賞。二月、信長使人來賀二國平定、且請援兵、擊朝倉義景。三月、信長先入京師。大夫將兵一萬繼之。四月、將軍足利義昭、饗信長及大夫。遂赴越前。信長自近江、大夫自若狹、會于敦賀、攻拔手筒、遂下金崎。會〻淺井長政叛應義景、欲夾擊信長。信長危懼、問大夫曰「爲之何如」。大夫曰「公第馳入京師。長政見事遲矣。必未扼歸路。至如義景、則留一猛將、與某合力、必不能尾也」。信長乃留羽柴秀吉、而夜走京師。數日、大夫與秀吉殿而退。信長將丹羽長秀・明智光秀在若狹。不能歸。大夫分兵救之、皆達于朽木。行〻擊土寇而入京師。五月、歸岡崎。

訓讀 元龜元年正月、遠江、既に定るを以て、徙つて引間に居り、名を濱松と改む。世子をして岡崎に居り以て參河を撫せしむ。大夫の威名、大に振ふ。稱して海道第一と爲す。是の月、信玄、攻めて花澤を拔く。小原資久、三浦義鎮、高天神に奔る。城主小笠原長忠、之と故あり。而して大夫の深く二人を惡むを知り、斬つて其の首を獻ず。大夫賞せず。二月、信長、人をして來つて二國の平定を賀せしむ。且つ援兵を請うて朝倉義景を擊つ。三月、信長、先づ京師に入る。大夫、兵一萬に將として之に繼ぐ。四月、將軍足利義昭、信長、及び大夫を饗す

遂に越前に赴く。信長は近江より、大夫は若狹より、敦賀に會し、攻めて手筒を拔き、遂に金崎を下す。會〻淺井長政、叛いて義景に應じ、信長を夾撃せんと欲す。信長、危懼し、大夫に問うて曰く「之を爲す何如」と。大夫曰く「公第馳せて京師に入れ。長政、事を見るに遲し。必ず未だ歸路を扼せじ。義景の如きに至つては、則ち一猛將を留め、某と力を合せば、必ず尾する能はざるなり」と。信長乃ち羽柴秀吉を留めて、夜、京師に走る。數日、大夫、秀吉と殿して退く。信長の將丹羽長秀、明智光秀、若狹に在り歸る能はず。大夫、兵を分つて之を救ひ、皆朽木に達す。行くゆく土寇を擊つて京師に入る。五月、岡崎に歸る。

通釋 元龜元年正月、遠江が既に平定したので、移つて引間に來り、地名を濱松と改めた。世子の信康をして岡崎に住ませて參河國を治めさせた。其の頃大夫の威力聲望が非常に振つて來た。東海道筋第一の大將と言はれた。同じ正月に、武田信玄は花澤を攻めて陷れた。小原資久と三浦義鎭の二人は高天神へ遁れた。其の城主の小笠原長忠は以前此の二人と緣故があつた。併し大夫が二人を深く惡んで居るのを知つて居たので、其の舊好を捨てゝ二人を斬り殺し首を大夫に奉つた。大夫は此の行ひを褒めなかつた。二月、織田信長が、人を遣はして遠・參二國の平定したことの祝ひを送つた、又別に援兵を賴んで朝倉義景を擊つた。三月、信長が先づ京都に入つた。大夫は一萬の兵を率ゐて其の後につゞいて入洛した。四月、將軍足利義昭が信長と大夫とを御馳走した。遂に越前に攻め入ることになつた。信長は近江から、大夫は若狹から進んで、敦賀で出會ひ攻めて手筒城を陷れ、遂に金崎をも降參させた。其の時丁度淺井長政が叛いて義景に味方し、信長を夾み擊ちしようとした。信長は危み懼れ、大夫に問うて曰ふには「どうしたらよいだらう」と。大夫が曰ふには「公は只だ急いで京都へ行かれよ。長政は軍の機を見るのに手ぬるい男です。きつとまだ歸り路を防ぎ止めては居りますまい。又義景などの如きは、

一人の強い大將を殘して私と力を合せて防げば、きつと公を追擊することなどは出來ません」と　そこで信長は羽柴秀吉を留めて、夜、京都へ向つて急いだ。數日後に大夫は秀吉と一緒に殿して引き退いた。信長の將丹羽長秀と明智光秀は、若狹に居た。それが歸ることが出來なくなつて終つた。そこで大夫は兵を分けて之を救ひ出し、一同朽木といふ所に到着した。又其の途々百姓一揆を平らげながら京都に入つた。五月、大夫は岡崎に歸つた。

〔語釋〕元龜（正親町天皇の年號。）

六月、信長擊淺井長政。復來乞援。大夫將兵赴之。朝倉義景使族景健援長政。信長、兵三萬五千、大夫兵五千、陣于龍鼻。長政兵八千、景健兵一萬五千、陣于大寄。信長夜議戰。大夫曰「某年少、不喜混戰。願當一面。」信長曰「然則當長政。顧公兵寡。我當分兵援之。」大夫曰「某領小國、慣用寡兵。且縱賜援兵、非素撫循、何爲用乎。」信長曰「使公獨當敵、吾將爲天下笑。請附一隊將。誰可者。」大夫乃請稻葉通朝。信長召通朝曰「汝爲德川所識拔。榮莫大焉。」因取一槍、贈大夫曰「相傳是爲鎭西八郎箭鏃。公源氏胄胤。請朝其以此指麾。」大夫喜而受之。於是分兵爲四。酒井忠次等爲前鋒、石川數正

等爲二次隊一、大夫自爲二中軍一、榊原康政・本多廣孝爲二左右翼一、稻葉通朝爲二後拒一。

訓讀 六月、信長、淺井長政を擊つ。復來つて援を乞ふ。大夫、兵に將として之に赴く。朝倉義景、族景健をして長政を援けしむ。信長の兵三萬五千、大夫の兵五千、龍鼻に陣す。長政の兵八千、景健の兵一萬五千、大寄に陣す。信長、夜、戰を議す。大夫曰く「某は年少、混戰を喜ばず。願はくは一面に當らん」と。信長曰く「然らば則ち長政に當れ。顧ふに公の兵寡し」と。大夫曰く「某は小國を領し、寡兵を用ふるに慣る。且つ縱ひ援兵を賜ふも、素より撫循せるに非ざれば、何ぞ用を爲さんや」と。信長曰く「公をして獨り敵に當らしめば、吾れ將に天下の笑と爲らんとす。請ふ、一隊將を附せん。誰か可なる者ぞ」と。大夫乃ち稻葉通朝を請ふ。信長、通朝を召して曰く「汝、德川の識拔する所と爲る。榮、これより大なるは莫し」と。因つて一槍を取つて大夫に贈つて曰く「相傳ふ、是れ鎭西八郎の箭鏃たりと。公は源氏の冑胤なり。詰朝、其れ此を以て指麾せよ」と。大夫喜んで之を受く。是に於て兵を分つて四と爲す。酒井忠次等前鋒と爲り、石川數正等次隊と爲り。大夫自ら中軍と爲り、榊原康政・本多廣孝、左右の翼と爲り、稻葉通朝、後拒と爲る。

通釋 六月、信長は淺井長政を擊つた。再び援兵を賴んで來た。大夫は兵を率ゐ、自ら大將となつて行つた。朝倉義景は一族の景健といふ者をして長政を援けさせた。此の時信長の兵は三萬五千人、大夫の兵は五千人で龍鼻といふ所に陣取つた。敵方長政の兵は八千、景健の兵は一萬五千で、大寄に陣取つた。信長は夜、戰ひの相談を開いた。大夫が曰ふには「私はまだ年が若いから、諸兵が入り亂れて戰ふといふことは好みません。出來るなら一方面を引き受けて戰ひたいものです」と。信長が曰ふには「それでは長政の軍に當つて貰ひませう。併し思

ふに貴公の兵は少い。私は兵を分けて貴公の方を援けねばならん」と。大夫が曰ふのに「私は小國を持つて居て小勢の兵を動かすのに慣れて居ます。又若し援兵を貸して下さるといふことになつても、前々から目をかけて馴らして置いたのでなければ、どうして役に立ちませうや」と。信長が曰ふに「貴下に、只獨りで敵に當らせたならば私は天下の物笑ひとなるだらう。どうか一人の隊將をつけることだけは承知して下されよ。ハテ誰がよいだらうか」と。そこで大夫は、稻葉通朝を指名した。信長は通朝を呼び寄せて曰ふのに「お前は德川殿からえらび出された。こんな名譽なことはないぞ」と。そして一本の槍を取り出して大夫に與へて曰ふには「此れは鎭西八郎のやじりだと代々傳へて居る。貴公は源氏の血筋である。明朝は此れを以て軍を指圖せられよ」と 大夫は喜んで此れを貰つた。そこで兵を分けて四隊とした。酒井忠次等が前軍、石川數正等が次の軍となり、大夫は自ら中軍を引き受け、又榊原康政と本多廣孝とは左右の翼となり、そして稻葉通朝が後備の軍となつた。

旦日、長政自東、景健自西、來至姉川。信長又使人來謂曰「吾深憎長政、欲甘心焉。願公當景健」。大夫曰「諾」。忠次諫曰「我所嚮已定。乃易之部伍必亂」。大夫曰「西衆而强、東寡而弱。舍東取西、吾所願已」。乃引兵而西、與景健夾姉川而陣。景健縱兵百餘先濟。本多忠勝在中軍。請曰「彼欲擊我橫。我當逆戰」。大夫曰「善」。命忠勝馳擊。大久保忠隣・安藤直次、踵馳擊走之。景健以全軍進。我前鋒卻。次隊承之、戰于河中。犬塚又內攬

敵槍相挽、遂奪而殺之。內藤正貞遣槍敵中、回馬取之。松平忠次爲敵射、矢貫左手。拔矢反射殪之。次隊卻。敵進、直逼麾下。麾下將士、拒戰不決。大夫怒、奮槍指麾、縱左右翼夾擊大破之。顧見信長軍敗、沿川而東、與後拒俱擊長政、又大破之。追北至大寄而還。信長大賞大夫功、目以武門棟梁。本田正信・渡部守綱等、亡在越前。悔而來歸、是役從有首功。

訓讀 旦日、長政は東より、景健は西より來つて姉川に至る。信長、又人をして來り謂はしめて曰く「吾れ深く長政を憎み、甘心せんと欲す。願はくは公、景健に當れ」と。大夫曰く「諾」と。忠次諫めて曰く「我れ嚮ふ所已に定る。乃ち之を易へば、部伍必ず亂れん」と。大夫曰く「西は衆にして強く、東は寡にして弱し。東を舍てて西を取るは、吾が願ふ所のみ」と。乃ち兵を引いて西し、景健と姉川を夾んで陣す。景健、兵百餘を縱つて先づ濟る。本多忠勝、中軍に在り。請うて曰く「彼れ我が横を擊たんと欲す。我れ當に逆へ戰ふべし」と。大夫曰く「善し」と。忠勝に命じて馳せ擊たしむ。大久保忠隣・安藤直次、踵いで馳せ、擊つて之を走らす。景健、全軍を以て進む。我が前鋒卻く。次隊之を承け、河中に戰ふ。犬塚又內、敵の槍を攬つて相挽き、遂に奪つて之を殺す。內藤正貞、槍を敵中に遣し、馬を回して之を取る。松平忠次、敵に射られ、矢左手を貫く。矢を拔き反し射て之を殪す。次隊卻く。敵進み直に麾下に逼る。麾下の將士拒ぎ戰つて決せず。大夫怒り、槍を奮つて指麾し、

左右の翼を縱つて夾撃し、大に之を破る。顧みて信長の軍敗るゝを見、川に沿うて東し、後拒と倶に長政を撃ち又大に之を破る。北ぐるを追ひ大寄に至つて還る。信長大に大夫の功を賞し、目するに武門の棟梁を以てす。本田正信・渡部守綱等、亡げて越前に在り。悔いて來り歸し、是の役に從つて首功あり。

通釋　翌日、長政は東の方から、又景健は西の方から攻め寄せて姉川に到着した。すると信長は再び人を寄越して曰ふには「自分は長政を深く憎んで居るから、今度こそ思ふ存分に打ち碎いてやりたいと思ふ。だから貴公はどうか景健に當つて下されよ」と。大夫は「承知しました」と答へた。忠次が諫めて曰ふには「我が軍の向ふ所はちやんと定つて居るのです。今こゝでこれを變へたなら兵の配置がきつと亂れるでせう」と。大夫が曰ふのに「西の軍は兵力が多くて強いが、東の方は兵も少くて弱い。だから弱い東をやめて強い西の軍に當るといふことは却つて自分の願ふ所だ」と。そこで兵を引きまとめて西に向つて進み、景健の軍と姉川を夾んで對陣した。景健が先づ百人餘りの兵を出して川を渡つた。本多忠勝は中軍に從つて居た。願ひ出て曰ふのに「彼は我が軍の側面を攻撃しようとして居ります。私は是非共此奴を迎へて戰ひませう」と。大夫が曰ふのに「よろしい」と。忠勝に命じて馳せ撃たしめた。大久保忠隣と安藤直次が又其のあとから續いて馳せ撃つて、敵を追ひ散らした。景健は全軍をつれて進み出た。我が軍の前鋒隊が引き下つた。すると次に控へた隊が引受けて河の中で戰つた。犬塚又内は敵の槍を握つて、引張り合ひをやつたが其の槍を奪ひ取つて敵を突き殺した。内藤正貞は槍を敵軍の中に落したが、馬を反して其れを取り戻した。又松平忠次は敵に射られて矢が左の手を貫いた。すぐその矢を拔き取つて射かへして敵を打取つた。次隊も引き下つた。敵は進んで直に旗本に逼つて來た。そこで大將直屬の將士どもは懸命に防ぎ戰つたが、中々勝負が附かない。大夫は腹を立てゝ例の槍を振り廻して下知し、左右兩翼の控への

兵を動かして夾み撃ち散々敵を破つた。振り返つて見ると信長の方は敗軍であつたので、川岸を傳つて東へ進み後備軍の稲葉通朝と一緒に長政を攻撃して又散々に之を打ち破つた。そして逃げる敵兵を追つかけて大寄まで行つて引き返して來た。信長は大に大夫の手柄を褒め、武家の旗頭と稱した。本田正信と渡部守綱は罪を獲て越前に逃げて居つた。後で自分の罪を悔い新めて歸參し、此の時の戰には第一番の手柄を樹てた。

語釋 姉川・大寄(近江)

八月、大風傷稼。我國最甚。命三奉行賑恤之。九月、信長攻一向賊于攝津。淺井・朝倉・六角氏竝起、絕其歸路。大夫使酒井忠次・石川家成赴救、數擊六角氏。事平乃歸。是時、信長已取近畿十餘州。而大夫僅得定參河・遠江以與強敵接壤也。

訓讀 八月、大風、稼を傷る。我が國最も甚し。三奉行に命じて之を賑恤せしむ。九月、信長一向の賊を攝津に攻む。淺井・朝倉・六角氏竝び起つて、其の歸路を絕つ。大夫、酒井忠次・石川家成をして赴きて救はしめ、數々六角氏を擊つ。事平ぎて乃ち歸る。是の時、信長已に近畿十餘州を取る。而るに大夫は僅に參河・遠江を定むるを得たり。強敵と壤を接するが以てなり。

通釋 八月、大風が吹いて農作物を害した。其の時遠江・參河の德川の領分内が最もひどくやられた。三奉行に命じて之を救恤させた。九月、信長は一向宗の一揆を攝津に攻めた。淺井・朝倉・六角の諸氏は一時に立つて、其の歸り路を絕ち切つた。大夫は酒井忠次と石川家成をやつて救けさせ、度々六角氏を攻擊した。騷ぎが全く收

まつてから歸つて來た。此の時分信長はすでに近畿地方の十餘國を占領して居た。而るに大夫は未だ僅かに參河と遠江の二ケ國を平定し得たに過ぎない。これは强敵と領地が隣合つて居たが爲めである。

日本外史新釋　卷十八終

日本外史新釋　卷十九

德川氏正記

德川氏二

初信長深畏武田信玄、事之甚謹。而信玄常欲西其兵、議曰「信長使家康當我、而自取易取之地、以致强大。今先獲家康、則信長隨手而亡。當是時、與信玄勁敵者、唯有北條氏康及越後國主上杉謙信。是歲冬、氏康卒、子氏政立。請和於信玄。信玄以其庇今川氏眞難之、使氏政殺之以表意。氏眞懼、航海來奔。大夫給以邑善遇之。氏眞素與謙信通好。勸大夫修幣焉。謙信喜答之、約夾攻信玄。大夫異父弟久松義勝、質駿河數年。爲信玄所奪、幽于甲斐。至是逃出、踏雪而歸。足指皆墮。大夫厚視之。信玄

於レ是決レ意絶レ我。而德川氏與二武田氏一始構レ難矣。

訓讀 初め信長深く武田信玄を畏れ、之に事ふること甚だ謹む。而して信玄常に其の兵を西せんと欲し、議して曰く「信長は家康をして我に當らしめ、而して自ら取り易きの地を取つて、以て强大を致す。今先づ家康を獲ば、則ち信長は手に隨つて亡びん」と。是の時に當り、信玄と勁敵たる者、唯だ北條氏康及び越後の國主上杉謙信あり。是の歳冬、氏康卒し、子氏政立つ。和を信玄に請ふ。信玄其の今川氏眞を庇ふを以て之を難じ、氏政をして、之を殺して以て意を表せしむ。氏眞懼れ、海に航して來り奔る。大夫、給するに邑を以てして善く之を遇す。氏眞素より謙信と好を通ず。大夫に幣を修むるを勸む。謙信喜んで之に答へ、夾んで信玄を攻めんと約す。大夫の異父弟久松義勝、駿河に質たること數年。信玄の奪ふ所と爲り、甲斐に幽せらる。是に至つて逃れ出で、雪を踏んで歸る。足指皆墮つ。大夫厚く之を視る。信玄是に於て意を決して我と絶つ。而して德川氏、武田氏と始めて難を構ふ。

通釋 初め信長は深く武田信玄を恐れ、その意に逆らはぬ樣、非常に注意して下手に交つてゐた。所で信玄は始終自分の軍隊を西に向けようとする希望を持つてゐたので、相談して曰ふには「信長は家康を己の方に當らせておいて、自分は取り易い土地を占領し、その結果今日の强大を來したのだ。だから先づ家康を討ち取れば、信長は直ぐ樣亡びて終ふに違ひない」と。當時信玄に取つて手剛い敵は、北條氏康と越後の國主たる上杉謙信のみであつた。此の年の冬、氏康は死に、子の氏政が立つた。氏政は信玄に和睦を求めた。信玄は氏政が今川氏眞を助けてゐるといふ理由でそれを承諾せず、氏政に、氏眞を殺して誠意を表明することを迫つた。氏眞はそれを聞

いて恐ろしくなり、海を渡つて(徳川方へ)逃げて來た。大夫は領地を與へて手厚く待遇した。所が氏眞は元々謙信と友好關係にあつた。大夫に勸めて、謙信に進物を贈り交を結ぶやうにさせた。謙信は喜んで之に應じ、信玄を夾み討ちにしようと約束した。大夫の異父弟の久松義勝は數年の間駿河の今川氏の人質になつてゐた。この義勝は信玄に奪はれて甲斐に押込められてゐた。それがこの時に逃げ出し、雪の中を歩いて歸つて來た。その爲め足の指は皆落ちて絕つた。大夫は丁寧に之を介抱してやつた。そこで信玄は決心して我が德川氏と斷絕した。德川氏と武田氏はこゝに始めて兵亂を起すことゝなつたのである。

【語釋】是歲(元龜元年。) ○異父弟(所生の母水野氏が久松氏に再嫁して生んだ弟。)

二年正月、大夫進從五位上、遷侍從。二月、信玄入遠江、三月攻高天神。小笠原長忠堅守。乃引兵去、令其將秋山晴近侵東參河、招降三族。獨菅沼定盈不降。四月、參河諸城多陷。我民叛應信玄。欲襲岡崎。侍從遣青山忠門擊平之。忠門戰死。侍從出陣于吉田、遣兵擊信玄將山縣昌景、走之。信長聞我與信玄交兵、甚危之。而不敢來援。使人來言曰「聞信玄數侵貴國。某當赴援以報去歲之勞。而以西事殷、未之果也。願濱松當敵衝。宜避徙岡崎。」侍從謝曰「某請徐計之。」使者出。侍從笑謂近臣曰「吾而去此、當蹋折刀劍不復用焉。信玄何足畏哉。」十二月、信玄兵侵吉田・榆木。侍從自將距

之。不敢戰而罷。三年正月、侍從入駿河。三月、上杉謙信將兵入信濃、以爲我聲援。

訓讀 二年正月、大夫從五位上に進み、侍從に遷る。二月、信玄遠江に入り、三月、高天神を攻む。小笠原長忠堅く守る。乃ち兵を引いて去り、其の將秋山晴近をして東參河を侵さしめ、三族を招降す。獨り菅沼定盈降らず。四月、參河の諸城多く陷る。我が民叛いて信玄に應じ、岡崎を襲はんと欲す。侍從、青山忠門を遣はし、擊つて之を平ぐ。忠門戰死す。侍從出でゝ吉田に陣し、兵を遣はして信玄の將山縣昌景を擊ち、之を走らす。信長我の信玄と兵を交ふるを聞き、甚だ之を危む。而れども敢て來り援けず。人をして來り言はしめて曰く「聞く、信玄數〻貴國を侵すと。某當に赴き援け以て去歲の勞に報ゆべし。而るに西事殷なるを以て、未だ之を果さず。顧ふに濱松は敵の衝に當る。宜しく避けて岡崎に徙るべし」と。侍從謝して曰く「某請ふ、徐に之を計らん」と。使者出づ。侍從笑ひ近臣に謂つて曰く「吾にして此を去らば、當に刀劍を蹋折して復用ひざるべし。信玄何ぞ畏るゝに足らんや」と。十二月、信玄の兵吉田・楡木を侵す。侍從自ら將として之を距ぐ。敢て戰はずして罷む。三年正月、侍從駿河に入る。三月、上杉謙信兵に將として信濃に入り、以て我が聲援を爲す。

通釋 二年正月、大夫は從五位上に進み、侍從の役に遷つた。二月、信玄は遠江に入り、三月、高天神を攻めた。所が小笠原長忠が堅く守つて屈しない。兵を引き上げ、その將の秋山晴近に東參河を侵略させて、長篠城主菅沼道壽と親戚關係にある三家を招き降した。その中の菅沼定盈のみが降伏しなかつた。四月、參河の諸城は多く陷つた。我が領民は叛いて信玄に味方して岡崎を襲はんとした。侍從は青山忠門を遣はしてそれを平定せしめた。所が忠門はその戰で討ち死をした。侍從は吉田に出陣し、兵を出して信玄の將山縣昌景を擊つて走らせた。

信長は、我が軍が信玄と交戰中と聞いてひどく不安心に思つた。さりとて援けに來ようとはしなかつた。人をよこして言はせるには「聞く所によれば信玄が度々貴國を侵す相だ。拙者は早速お助けに行き、去年のお骨折に報ゆべきであります。併し何分西の方の近畿のことが非常に忙しいので未だ果さずに居ります。考へて見るのに濱松は敵の打ち出る道筋に當つてゐます。こゝは避けて岡崎に移つた方が宜しいと思考します」と。侍從は禮を述べて曰ふには「ゆる〳〵と考へさせて戴きませう」と。使者が立ち出た。侍從は笑ひ乍ら近臣に向つて曰ふには「吾が輩が此の地を去る位ならば、刀を踏み折つて、もう使はぬことにする方がましだ。信玄などちつとも恐ろしいことはない」と。十二月、信玄の兵が吉田・楡木に攻め入つた。侍從は自身兵を率ゐてそれを防いだ。無理に戰をせずに罷めた。三年正月、侍從は駿河に攻め入つた。三月、上杉謙信は兵を率ゐて信濃に入り、我が軍に應援をした。

語釋 三族（菅沼の一族である松下・二股・高藪。一說に奥平・設樂・西郷の三族と。）○去歲之勞（姉川の戰のこと。）

十月、信玄將ニ兵三萬餘一來侵、拔ニ犇・飯田ノ二城一、陣ニ于袋井・見附一。內藤信成・大久保忠世將ニ四千人一至ニ西島一、與ニ信玄一遇。信玄曰「敵兵輕出。勿レ使ニ一人還一。」麾レ兵來逼。信成曰「濱松八千之兵、其半在ニ於此一。而衆寡不レ敵。一敗塗レ地、何以再戰。」乃退。侍從聞ニ前鋒危一、自出陣ニ馬籠一、使下本多忠勝率ニ精騎一往援上レ之。忠勝至ニ一言坂一。信成等欲レ退。甲斐ノ兵尾レ之、結而

不解。忠勝善用槍。所愛一槍、名曰蜻蛉。於是、忠勝戴鹿角冑、提蜻蛉、單騎馳入兩軍之間。兩軍乃開。終收兵而退、命卒積薪坂頭、而伏銃其側。敵至。銃發火起。敵不能復尾。時我兵多蒙唐首。信長所貽也。甲斐人爲之語曰「家康有過分者二。唐首也、平八也」

【訓讀】十月、信玄兵三萬餘に將として來り侵し、蘵・飯田の二城を拔き、袋井・見附に陣す。內藤信成・大久保忠世四千人に將として西島に至り、信玄と遇ふ。信玄曰く「敵兵輕〻しく出づ。一人をして還らしむる勿れ」と。兵を麾いて來り逼る。信成曰く「濱松八千の兵、其の半は此に在り。而して衆寡敵せず。一敗地に塗れば何を以て再戰せん」と。乃ち退く。侍從、前鋒の危きを聞き、自ら出でゝ馬籠に陣し本多忠勝をして精騎を率ゐ、往いて之を援けしむ。忠勝、一言坂に至る。信成等退かんと欲す。甲斐の兵之に尾し、結んで解けず。忠勝善く槍を用ふ。愛する所の一槍、名づけて蜻蛉と曰ふ。是に於て、忠勝、鹿角冑を戴き、蜻蛉を提げ、單騎馳せて兩軍の間に入る。兩軍乃ち開く。終に兵を收めて退き、卒に命じて薪を坂頭に積み、而して銃を其の側に伏す。敵至る。銃發し火起る。敵、復尾する能はず。時に我が兵多く唐首を蒙る。信長の貽る所なり。甲斐の人、之が語を爲して曰く「家康、分に過ぐる者二有り。唐首なり、平八なり」と。

【通釋】十月、信玄は兵三萬餘を率ゐて侵入し來り、蘵・飯田の二城を陷れて袋井・見附に陣取つた。內藤信成と大久保忠世は四千人を率ゐて西島まで來て信玄と遭遇した。信玄が曰ふには「敵兵は輕率に出て來た。一人も

殘らず討ち取つて終へ一と。軍を指揮して押し寄せて來た。信成が曰ふには「濱松城の八千の兵の半分は此處に居るわけだ。多勢に無勢で勝敗は明である。この大事な戰爭で一旦敗けたならば次の戰が非常に困難に成る」と。そこで退却をした。侍從は前鋒の危いことを聞いて、自ら馬籠まで出陣し、本多忠勝をして精鋭な騎兵を率ゐて援けに行かせた。忠勝が一言坂まで行つた。その時信成達が退却をしかけた。甲斐の兵が後をつけるので兩軍の戰はこぢれて定りが付かなかつた。忠勝は槍が上手であつた。截蜻蛉といふ槍を大事にしてゐた。この時鹿の角の前立の冑を戴き、この截蜻蛉を提げ、唯だ一騎馳せて兩軍の間に飛び込んで行つた。それが爲めに兩軍の間が切れた。それで忠勝は兵を引上げて退却し、兵卒に命じて薪を坂の上に積み上げさせ、鐵砲をその横に隱しておいた。其處へ敵がやつて來た。鐵砲を放し、その火で薪が燃え出した。敵はそれ以上後をつけることが出來なかつた。その當時、我が兵は唐首の冑を冠つてゐるものが多かつた。これは信長の贈つたものである。甲斐の人はその噂をして曰ふには「家康に過ぎたるものが二つある。唐毛の首。本多平八」と。

語釋 韉・西島・馬籠（遠江）〇一言坂（見附の西。）〇兩軍之間（武田徳川の間。）〇唐首（長毛を朱又は黒に染め、冑の上につけて四方に垂らし飾とするものである。犛牛の尾を以て製する。戰國時代の初め、犛牛の尾毛を珍重して唐毛の首と言つたが、後略して單に唐首といふ樣になつたのであらう。）

已而信玄遣其子勝頼等攻二股、馬場信房備我援路。侍從赴援、渡天龍河、不敢戰而歸。敵結筏河上、以絕城汲道。守將致城、收入濱松。我諸城多叛降信玄。信玄合兵逼濱松。乃令松平淸善往距宇津山。濱松諸將、勸請援於織田氏。侍從不欲之。諸將曰

「信長富五倍於我。而連請我援。我以二國抗強敵。未嘗請援。今而一請。何不可也」。侍從從之。十一月、信長乃遣佐久間信盛・平手汎秀等來援。相持踰月。十二月、信玄部兵四萬、陣于三形原、縱火濱松城外。侍從怒、欲出擊之。信盛牽其衣諫曰「寡君戒臣等曰、信玄老將也。其兵精強、天下無敵。德川欲出戰、汝當固止之」。侍從曰「嚮信玄入小田原、旄麾其門。而氏康不出。世傳以嗤之。今敵踏藉我城下。而不敢發一矢。非丈夫也。果然、則吾當削髮被緇耳」。諸將固諫而止。

訓讀　已にして信玄其の子勝頼等を遣はして二股を攻め、馬場信房をして我が援路に備へしむ。侍從、赴き援け、天龍河を渡り、敢て戰はずして歸る。敵、筏を河上に結び、以て城の汲道を絕つ。守將、城を致し、收めて濱松に入る。我が諸城多く叛いて信玄に降る。信玄、兵を合せて濱松に逼る　乃ち松平清善をして、往いて宇津山に距がしむ。濱松の諸將、援を織田氏に請ふを勸む。侍從之を欲せず。諸將曰く「信長の富、我に五倍す。而して連に我に援を請ふ。我れ二國を以て强敵に抗し、未だ嘗て援を請はず。今にして一たび請ふ。何ぞ不可ならんや」と。侍從之に從ふ。十一月、信長乃ち佐久間信盛・平手汎秀等を遣はして來り援けしむ。相持して月を踰ゆ。十二月、信玄、兵四萬を部し、三形原に陣し、火を濱松の城外に縱つ。侍從怒り、出でゝ之を擊たんと欲す。信盛其の衣を牽き諫めて曰く「寡君、臣等を戒めて曰く、信玄は老將なり。其の兵精强、天下に敵なし。德川出で

戰はんと欲せば、汝當に固く之を止むべし」と。侍從曰く「嚮に信玄、小田原に入り、旗共の門を摩す。而して氏康出でず。世傳へて以て之を嗤ふ。今、敵、我が城下を踏藉す。而して敢て一矢を發せざるは丈夫に非ざるなり。果して然らば、則ち吾れ當に髮を削り緇を被るべきのみ」と。諸將固く諫めて止む。

通釋 そのうちに信玄は子の勝頼等をやつて二股城を攻めさせ、馬場信房をして德川軍の援兵の來る道を防がせた。侍從はそれを救ひに行つて天龍河を渡つたが、無理な戰をせずに戻つて來た。敵は川上に筏をつないで城の汲水道を絶つた。守將（中根正照）は城を明け渡し、兵を引上げて濱松に入つた。我が諸城の中、叛いて信玄に降るものが隨分有つた。信玄は諸軍を合せて濱松に押寄せて來た。そこで松平淸善をして宇津山を防ぎに行かせた。濱松の諸將は織田氏に救を求めるやうに勸めた。侍從はそれを欲しなかつた。諸將が曰ふには「信長の富は當家の五倍も有る。それにも拘らず、始終こちらに救を求めて來ます。當家は僅か二箇國の兵力を以て強敵に刃向ひながら、まだ一度も救を求めたことはありません。今この場合に一度だけ賴むのであります。それに何の差支へが有りませう」と。侍從はそれを承知した。十一月、德川から賴んで來たので信長は佐久間信盛と平手汎秀等を救によこした。兩軍相對陣して月を越した。十二月、信玄は兵四萬を分けて、三形原に陣取り、濱松城外に火をつけた。侍從は立腹し、城を出てそれを擊たうとした。信盛は侍從の着物を引きとめ、諫めて曰ふには「私共の君が我々を戒めて曰はるゝに、信玄は老將である。軍隊もよりすぐりの強い兵士共で、天下に敵に立つものはない。德川殿が出て戰はうとする際には、貴樣達は固く止めよ、と言ひ附かりました」と。侍從が曰ふには「以前信玄は小田原に攻め入つた、その旗は城門の間際まで、立つ程であつた。併し氏康は城を出ないでぢつとしてゐた。これは世間で言ひ傳へて笑ひ草になつてゐる。今敵は我が城下を踏み荒らしてゐる。然るに思ひ切つ

て一本の矢も飛ばさない樣では男とは言はれぬ。そんな意氣地なしならば私は髪を剃り、墨染の衣を着て坊主にならねばならぬ」と。諸將は固く諫めて止めた。

語釋 二國（參河・遠江。）○三形原（遠江。濱松の北。）○寡君（信長をさす。）

二十二日、信玄退入井伊谷。侍從遂北出、陣三形原。日已晡。分兵八千為九隊、遣鳥居忠廣往覘敵狀。返報曰「信玄返軍而來。陣堅勢鋭。戰必不利。請速收兵。」侍從不聽。更使渡部守綱往。亦報曰「勿與戰。」侍從叱曰「人入我閫、蹴我枕。猶有臥而不較者哉。」命大久保忠佐・柴田康忠往挑戰。守綱止之。不肯而馳。與石川數正・本多忠勝・榊原康政、共擊敵將小山田昌行。走之。侍從以麾下與酒井忠次・大須賀康高擊山縣昌景。亦走之、追北而進。勝賴與馬場信房自傍進、逼我麾下。昌景・昌行皆返之。信玄自縱奇兵、橫擊我軍。軍亂。信玄乃鼓全軍而徐進。山岳為震。我軍終大敗。信盛走、汎秀死。數正與松平家忠止戰。不支。侍從切齒、口出沫、厲衆返擊。成瀨正義・本多忠眞・安藤基能・鳥居忠廣等、死者凡二百餘人。敵兵益逼。

訓譯 二十二日、信玄退いて井伊谷に入る。侍從遂に北に出で、三形原に陣す。日已に晡つ。兵八千を分つて九

隊と爲し、鳥居忠廣を遣はして往いて敵狀を覘はしむ。返り報じて曰く「信玄、軍を返して來る。陣堅く勢鋭し。戰必ず利あらず。請ふ速に兵を收めよ」と。侍從聽かず。更に渡部守綱をして往かしむ。亦報じて曰く「與に戰ふ勿れ」と。侍從、叱して曰く「人、我が閫に入つて我が枕を蹴る。猶ほ臥して較せざるものあらんや」と。大久保忠佐・柴田康忠に命じて、往いて戰を挑ましむ。守綱、之を止む。肯んぜずして馳す。石川數正・本多忠勝・榊原康政と、共に敵將小山田昌行を撃つて之を走らす。侍從、麾下を以て酒井忠次・大須賀康高と山縣昌景を撃つて亦之を走らせ、北ぐるを追うて進む。勝賴、馬場信房と傍より進み、我が麾下に逼る。昌景・昌行、皆之に返す。信玄自ら奇兵を縱ち、横に我が軍を撃つ。軍亂る。信玄乃ち全軍を鼓して徐に進む。山岳爲に震ふ。我が軍終に大に敗る。信盛は走り、汎秀は死す。數正、松平家忠と止り戰ふ。支へず。侍從切齒し、口沫を出だし、衆を厲まして返り撃つ。成瀬正義・本多忠眞・安藤基能・鳥居忠廣等、死する者凡そ二百餘人。敵兵益々逼る。

通釋 二十二日、信玄は退陣して井伊谷に入つた。侍從はいよ〳〵此に出て三形原に陣取つた。日は早や申刻(午後四時)になつてゐた。八千の兵を九隊に分け、鳥居忠廣を敵狀視察に遣はした。忠廣は歸つて報告して曰ふには「信玄は軍勢を引き返して來ました。その陣は堅固で勢も非常に強い樣であります。これと戰つては到底勝目は有りません。どうぞ早速軍をお引き下さい」と。侍從は承知しなかつた。又渡部守綱に行かせた。所が守綱も報告した上で、曰ふには「彼と戰ひなさらぬやう」と。侍從は叱りつけて曰ふのに「他人が己の臥室に入つて自分の枕を蹴つてゐる。それでも臥たまゝで立ち合はぬ者があるか」と。大久保忠佐と柴田康忠に命じて敵に戰をしかけさせた。守綱はそれを止めた。併し承知しないで馬を飛ばせた。石川數正・本多忠勝・榊原康政と共

に敵將小山田昌行を撃つて走らせた。侍從は旗下の兵を引きつれ、酒井忠次・大須賀康高と共に山縣昌景を撃つて之れをも走らせ、逃げるのを追ひかけて進んだ。勝頼は馬場信房と共に側から進み我が旗下に攻めよせた。一度逃げた昌景と昌行も共にそこへ軍を返して迫つて來た。信玄は自分の手下から奇兵を出して横合から我が軍を撃つた。我が軍は亂れ足になつた。そこで信玄は太鼓を鳴らして全軍に命令を傳へ、靜かに進軍を始めた。その軍聲に山岳も打ち震ふ位であつた。我が軍は遂に大敗北した。信長の援兵の中信盛は敗走し、汎秀は討死した。數正は松平家忠と共に止まつて戰つた。併し支へ切れずに退いた。侍從は齒を喰ひしばり、口からは泡を吹き、無我夢中に部下を激勵して返り撃つた。成瀨正義・本多忠眞・安藤基能・鳥居忠廣等、討死するものが二百餘人もあつた。敵兵は益々攻め寄せて來た。

侍從自度不脫、欲返決死。士多喪馬步從。夏目正吉在濱松、聞急馳至、諫曰「勝敗常事耳。此非大將授命之日。君第速走。臣請代焉。」乃扣其馬南向、以槍鐓策馬。馬走。正吉呼畔柳武重曰「子以我君免。」武重欲止共死。正吉揮而去之、自奮槍拒敵、苦戰而死。侍從得間而走、使忠世樹旗于犀崖以收敗軍。敵以爲大將、爭赴之。侍從因得達城。城門闔。武重大呼曰「君歸矣。盍開。」開而入。一城聞敗大擾。高木廣正得一髡首而還。侍從命貫之刀鋒、徇曰「兩軍鬪亂、吾獲信玄矣。」衆乃定。

訓読 侍從自ら脫せざるを度り、返りて死を決せんと欲す。士多く馬を喪ひ步して從ふ。夏目正吉、濱松に在り。急を聞いて馳せ至り、諫めて曰く「勝敗は常事のみ。此れ大將、命を授くるの日に非ず。君、第速に走れ。臣請ふ代らん」と。乃ち其の馬を扣へて南に向け、槍鐓を以て馬を策つ。馬走る。正吉、畔柳武重を呼んで曰く「子我が君を以て免れよ」と。武重止つて共に死せんと欲す。正吉揮して之を去らしめ、自ら槍を奮ひ敵を拒ぎ、苦戰して死す。侍從、間を得て走り、忠世をして旗を犀崖に樹て以て敗軍を收めしむ。敵以て大將と爲し爭つて之に赴く。侍從因つて城に達するを得たり。城門闔づ。武重、大に呼んで曰く「君歸れり。盍ぞ開かざる」と。開いて入る。一城、敗を聞き大に擾る。高木廣正、一髮首を得て還る。侍從命じて之を刀鋒に貫き、徇へて曰く「兩軍鬪ひ亂れ、吾れ信玄を獲たり」と。衆乃ち定る。

通釋 侍從は自分でも最早脫れぬ所と思ひ、敵中に返り討つて命を的の決戰をしようとした。部下の士は大部分馬を失つて徒步でお供をしてゐた。夏目正吉は濱松に居つた。急を聞いて飛んで來て諫めて曰ふには「勝敗は兵家の常であります。今は大將が討死をなさる時ではありません。君には他の事に構はず、直ぐお逃げ下さい。臣がお身代りを致します」と。さう言つて侍從の乘馬を捉へて南に向け、槍の石突で馬をひつぱたいた。馬は走り出した。正吉は畔柳武重を呼んで曰ふには「そなたは我が君をお連れして逃げてくれ」と。武重は止まつて一緖に死に度いと思つた。正吉は指圖をして無理に行かせ、自身槍を振りまはして敵を防ぎ、苦戰をして討死した。侍從はその隙に逃れ、忠世をして旗を犀崖に立てゝ敗れた軍勢を纏めさせた。敵は忠世を大將と思つて我勝ちにその方へ向つた。侍從はそのお蔭で濱松の城に達することが出來た。すると城門が閉つてゐた。武重は大聲で怒鳴つて曰ふには「我が君のお歸りなるぞ。何故門を開かぬか」と。城門が開いて主從は中に入つた。城中の者は

敗戰を聞いて皆騒ぎ亂れた。そこへ高木廣正が一箇の坊主首を取つて歸つて來た。侍從は彼に命じてそれを刀の先に突き通して觸れ廻させるには「兩軍の戰は混亂して、俺は遂に信玄の首を討取つた」と。一同はそれを聞いて漸く落着いた。

侍從下馬杖槍、慨然謂從者曰「吾恨爲尾張人所沮、戰失其時、乃取此挫衄矣」取腰間扇、以賜武重。都築秀綱妻、豫煮粥以犒士卒。賜之衣服。時已昏。或請闔門。侍從曰「後者安歸。且示敵怯、非計也」命開諸門、篝火而自飽食酣睡。鼻息如雷。敵方追北逼城。見門開、恐其有伏兵、不敢入。鳥居元忠・渡部守綱等三百人、出門而戰。敗兵自敵軍後譟而還。信玄乃退舍。忠世・康政行、破敵兵入城。本多重次喪馬、殪敵一騎、奪其馬還。初重次多儲糧仗。於是、衆賴以安焉。

訓譯 侍從、馬を下り槍を杖つき、慨然として從者に謂つて曰く「吾れ恨むらくは、尾張人の沮む所と爲り、戰其の時を失ひ、乃ち此挫衄を取れり」と。腰間の扇を取つて、以て武重に賜ふ。都築秀綱の妻、豫め粥を煮て以て士卒を犒ふ。之に衣服を賜ふ。時已に昏し。或ひと門を闔せんと請ふ。侍從曰く「後るゝ者安に歸らん。且つ敵に怯を示すは、計に非ざるなり」と。命じて諸門を開かしめ、火を篝して自ら飽食酣睡す。鼻息雷の如し。敵、方に北ぐるを追うて城に逼る。門開けるを見て其の伏兵あるを恐れ、敢て入らず。鳥居元忠・渡部守綱等

三百人、門を出で、戰ふ。敗兵、敵軍の後より譟して還る。信玄乃ち退き舍す。忠世・康政、行々敵兵を破つて城に入る。本多重次は馬を喪ひ、敵の一騎を殪し、其の馬を奪つて還る。初め重次、多く糧仗を儲ふ。是に於て、衆賴つて以て安んず。

【通釋】侍從は馬を下り、槍を杖ついて慨然として從者に向つて曰ふには「余は殘念なことに尾張の奴等（佐久間信盛・平手汎秀を指す）に邪魔をされて戰の時期を誤つた爲めに今日の敗北を招いた」と。腰に挿んだ扇を拔き取つて武重に賜はつた。都築秀綱の妻は前以て粥を煮ておいて士卒に振舞つた。それで之に衣服を賜はつた。その時分はもう夕暮になつてゐた。或る者が城門を閉めるように願つた。侍從が曰ふには「そんなことをしたならば後から歸つて來る者はどこに行くといふのだ。それ許りではない、敵にこちらの臆病を見せることになり、好い策ではない」と。命令を下して諸門を開いた儘にさせ、篝火をばたき、自分から鱈腹食べてぐう〳〵寐て終つた。その鼾が雷の樣であつた。敵はこちらの逃げるのを追つかけて城の側まで攻め寄せて來た。城門の開いてゐるのを見て、伏兵が有るかと恐れて敢て入つて來なかつた。鳥居元忠・渡部守綱等三百人が門を出て戰つた。味方の敗兵はその敵軍の後方から大聲にわめきながら戻つて來た。そこで信玄は退いて宿營した。忠世や康政は途々敵兵を破つて城に歸つて來た。本多重次は馬を失つたので、敵の騎馬武者を一人殺し、その馬を奪つて戻つて來た。重次は前に兵糧武器を澤山に藏つて置いた。それで一同の者はこの兵糧武器に依賴して安心をした。

侍從召諸將議守禦。忠世曰「敵新勝。當挫其鋒以振我軍氣」侍從然之、收城內銃手得十六人、以忠世及天野康景將之、五更登犀崖、亂射甲斐營。營亂、多陷谷死。信玄

曰「家康兵何强項也」。會石川家成自掛川入援。我軍稍振。侍從上城樓、望甲斐軍、顧富永某曰「汝以爲敵去留何如」。對曰「軍無輜重、竈不見烟。是必去矣」。明日、信玄果去、陣刑部。馬場信房謂之曰「臣檢敵屍、北首者俯、南首者仰。可以見家康訓練矣。向使主公與家康和、結以婚姻、以爲先鋒、則天下何足圖乎」。

訓讀 侍從、諸將を召して守禦を議す。忠世曰く「敵、新に勝つ。當に其の鋒を挫き以て我が軍氣を振はすべし」と。侍從、之を然りとし、城内の銃手を收めて十六人を得、忠世及び天野康景を以て之に將とし、五更犀崖に登り、甲斐の營を亂射す。營亂れ、多く谷に陷つて死す。信玄曰く「家康の兵、何ぞ强項なるや」と。會ゝ石川家成、掛川より入り援く。我が軍稍ゝ振ふ。侍從、城樓に上り、甲斐の軍を望み、顧みて曰く「汝、以て敵の去留何如と爲す」と。對へて曰く「軍に輜重なく、竈に烟を見ず。是れ必ず去らん」と。明日、信玄果して去り、刑部に陣す。馬場信房之に謂つて曰く「臣、敵屍を檢するに、北首の者は俯し、南首の者は仰ぐ。以て家康の訓練を見るべし。向に主公をして家康と和し、結ぶに婚姻を以てし、以て先鋒と爲らしめば、則ち天下何ぞ圖るに足らんや」と。

通釋 侍從は諸將を召して防禦の手段を相談した。忠世が曰ふには「敵はこん度勝つた許りであります。我が軍は是非共その鋒先を凹まして軍氣を煽り立てなくてはなりません」と。侍從はそれに贊成し、城内の銃手を集めて十六人となつたので、忠世と天野康景に之を指揮させて五更（午前四時）犀崖に登つて甲斐の陣屋を亂射させ

た。甲斐の陣屋が亂れてその兵は澤山谷に落ち込んで死んだ。信玄が曰ふには「家康の兵は何といふ負けず嫌ひだらう」と　丁度その時、石川家成が掛川から援けに來た。我が軍は幾らか勢が付いた。侍從は城の櫓に上つて甲斐の軍勢を遠く見渡し、富永某を振り向いて曰ふには「お前はこの氣勢を見て敵の動きがどうなるか分るか」と。富永某が答へて曰ふには「軍勢の中に輜重隊がなく、竈から烟が上つて居りませぬ。是れはきつと退却のしるしでありませう」と。翌日、その言葉の通りに信玄はそこを去つて刑部に陣取つた。馬場信房が信玄に向つて曰ふには「私は敵の死骸を検べて見た所、北向きに倒れてゐる者は俯伏しになり、南向きの者は仰のいて居ります。これを見ても家康の平常の訓練の如何を知ることが出來ます。若しも前に御主人公が家康と和睦をして婚姻關係で固く聯合し、家康を先鋒にしてゐられたら、天下を取ることは雜作のないことでしたらう」と。

【語釋】北首南首（甲斐軍は北、濱松軍は南、丸に中つて死ぬる者は仰のけに倒れるか、うつ伏しに倒れる。濱松軍は皆北に向つて背を敵に見せぬから、うつ伏しに倒れるときには首は北に向ひ、仰のけに倒れる時は首が南に向く譯である。）

天正元年正月、將軍足利義昭下二敎信玄一、使下與二信長及侍從一和上。信玄不レ肯。引レ兵攻二野田一。菅沼定盈與二援將松平忠正一堅守。敵蒙二竹楯一、用二龜甲車一。外城陷。乃退保二内城一。敵環二鹿砦一、鑿二地道一、以絶二井泉一。侍從自將救レ之。甲斐軍不レ可レ犯。退次二吉田一、馳レ使乞二援於信長一。信長不二敢出一。城中有二善レ笛者村松、善レ銃者鳥居一。村松夜上レ樓吹レ笛。敵數騎來二城外一聽レ之、標レ竿而去。鳥居晨起、見レ之曰「聞信玄喜レ音。得レ非レ是乎」。密定レ準安レ銃、逮レ夜使二村松復

吹笛。敵復來聽。銃發墮一騎。且日、敵中傳言、信玄有疾。來諭致城。定盈・忠正請出城自殺以免士卒。信玄許之。比出城伏起、被虜囚于長篠。誘降之。二人不屈。初奧平道文・菅沼正員・菅沼刑部置質於濱松。而叛降甲斐。於是、請歸二人以易其質。信玄乃使人來言。侍從許之。嘉二人守節、加其采邑。

【譯】天正元年正月、將軍足利義昭、教を信玄に下し、信長及び侍從と和せしむ。信玄肯んぜず。兵を引いて野田を攻む。菅沼定盈、援將松平忠正と堅く守る。敵、竹楯を蒙り、龜甲車を用ふ。外城陷る。乃ち退いて內城を保つ。敵、鹿砦を環し、地道を鑿り以て井泉を絕つ。侍從自ら將として之を救ふ。甲斐の軍犯すべからず。退いて吉田に次し、使を馳せて援を信長に乞ふ。信長敢て出でず。城中、笛を善くする者村松、銃を善くする者鳥居有り。村松、夜、樓に上つて笛を吹く。敵の數騎、城外に來つて之を聽き、竿を標して去る。鳥居、晨に起き、之を見て曰く「聞く、信玄、音を喜ぶと。是に非ざるを得んや」と。密に準を定めて銃を安き、夜に逮び村松をして復笛を吹かしむ。敵復來り聽く。銃發し一騎を墮す。且日、敵中に傳言す、信玄疾有りと。來つて城を致すを諭す。定盈・忠正、城を出で自殺し以て士卒を免さんことを請ふ。信玄之を許す、城を出づる比伏起り、虜へられて、長篠に囚はる。誘つて之を降さんとす。二人屈せず。初め奧平道文・菅沼正員・菅沼刑部、質を濱松に置く。而れども、叛いて甲斐に降る。是に於て、二人を歸し以て其の質を易へんと請ふ。信玄乃ち人をして來り言はしむ。侍從之を許す。二人の節を守るを嘉し、其の采邑を加ふ。

通釋 天正元年正月、將軍足利義昭は信玄に命令を下して、信長並びに侍從と和睦させようとした。信玄はそれを承諾しなかつた。兵を率ゐて野田を攻めた。城主の菅沼定盈は援將の松平忠正と共に堅固に守つた。敵信玄方は竹の楯をさしかざし。龜甲車を使用して攻め立てた。外ぐるわが陷つた。そこで退いて本丸を守つた。所が敵は逆茂木を立て廻し、地下道を掘つて水脈を破壞し、城中の井戸や泉の水を絶やした。侍從は自ら兵を率ゐて救ひに赴いた。甲斐の陣は堅くて手を付けることも出來なかつた。退いて吉田に宿り、使を飛ばして信長に救を求めた。併し信長は警戒して出なかつた。城中に笛の上手な村松といふ者と、鐵砲の巧い鳥居といふ者が居つた。村松がある晩、樓に上つて笛を吹いてゐた。敵の數騎が城外に來てそれを聽き、竿をしるしに立てゝ立ち去つた。鳥居は朝になつてそれを見て曰ふには「信玄は音樂が好きだと聞いてゐる。信玄が聽きに來たのではあるまいか」と。そつと覘を定めて銃を据ゑておき、夜になつてから復村松に笛を吹かせた。敵がまた聽きに來た。發砲して一騎を射落した。明くる日、敵中で信玄が病氣になつたと噂が立つた。使をよこして城を明け渡すやうに申入れて來た。定盈と忠正とが自分達は城を出て自殺するから、城内の士卒の命を助けて呉れと賴んだ。信玄はそれを許した。二人が城を出た時に伏兵が起り、捕虜となつて長篠に押し込められた。信玄方では誘つて降伏させようとした。二人は屈服しなかつた。初め奧平道文・菅沼正員・菅沼刑部の三人は濱松に人質を置いてゐた。併し徳川に叛いて甲斐に降參した。此の時、定盈と忠正の二人を歸して、自分達の人質と交換して貰ひ度いと願ひ出た。信玄は使をよこしてその旨を言はせた。侍從はそれを許した。そして二人が節義を固く守つたことを賞讚して領地を增してやつた。

語釋 龜甲車（十六卷朝鮮征伐の所に見ゆ。）〔鹿砦〕（枝のついてゐる樹木を植て作つた砦、枝が角のやうに見える。）

二月、信玄病創、分兵而去、使我叛將守七城以逼濱松。侍從曰「可使敵在我近郊哉。」三月、使世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能復其五城。餘皆解走。四月、信玄創復發、歸國。途卒。勝賴當國。祕不發喪。五月、侍從徇駿河。六月、巡二股、壁于城山。七月、攻菅沼正員于長篠、以火箭焚其城。正員退保子城。乃築壘熊山、留兵而還。八月、勝賴來援攻熊山。侍從自將邀戰。甲斐諸將退保險阻。侍從伏兵而佯遁。敵不敢出。遂去。城陷。正員出奔甲斐。敵將還助之、戍鳳來寺。又助奧平道文戍築手。

訓讀 二月、信玄創を病み、兵を分つて去り、我が叛將をして、七城を守り、以て濱松に逼らしむ。侍從曰く「敵をして我が近郊に在らしむべけんや」と。三月、世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能をして、其の五城を復せしむ。餘は皆解き走る。四月、信玄、創復發し、國に歸る。途に卒す。勝賴國に當る。祕して喪を發せず。五月、侍從駿河を徇ふ。六月、二股を巡り、城山に壁す。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火箭を以て其の城を焚く。正員退いて子城を保つ。乃ち壘を熊山に築き、兵を留めて還る。八月、勝賴來り援け熊山を攻む。侍從自ら將として邀へ戰ふ。甲斐の諸將、退き險阻を保つ。侍從、兵を伏せて佯り遁る。敵敢て出でず。遂に去る。城陷る。正員出で、甲斐に奔る。敵將還つて之を助け、鳳來寺を戍る。又奧平道文を助けて築手を戍る。

通釋 二月、信玄は創が惡くなり、兵を手分けして引き上げ、德川に叛いた大將共をして七城を守らせ、進ん

で濱松に迫らせた。侍從が曰ふには「我が近在に敵を居らせてはならんぞ」と。三月、世子信康・石川家成・平岩親吉・久野宗能をして七城の内五つ城を取り戻させた。餘の城も皆守備を解いて逃げ走つた。四月、信玄は創が再發した爲め國に向けて立つた。その途中で死んだ。勝賴が國事を掌ることになつた。併し父の死を隱して喪を發表しなかつた。五月、侍從は駿河を觸れ下した。六月、二股を巡視して城山に城を築いた。七月、菅沼正員を長篠に攻め、火矢でその城を燒き拂つた。正員は退却して出丸を守つた。それで壘を熊山に築いて、それに兵を留めて引き揚げた。八月、勝賴が助けに來て熊山の壘を攻めた。侍從は自ら兵を率ゐて迎へ戰つた。甲斐の諸將は退却して險阻な陣地を守つた。侍從は伏兵を置いて故意に逃げて見せた。敵もさる者で容易に出て來なかつた。遂にそこを引き揚げた。斯くて城は陷つた。正員は甲斐に出奔した。敵將は返つて來てそれを助け、鳳來寺を守つた。それから又、奧平道文を助けて築手を守つた。

語釋 熊山(河參)

道文之叛也、其子貞能諫之。及信玄去、道文危疑。貞能子信昌略涉書志、爲筮之。繇曰「蛇年之人死」道文謂「信玄生歲辛巳、必旣死也」遂決意歸款。勝賴在黑瀨、徵質於貞能。貞能不能拒、遣其少子。或告貞能有異心。武田信豐召之。貞能卽往。戒從者曰「未見我首勿動」入見信豐。信豐詰之。貞能笑曰「公莫信反間」信豐意解、與之圍棊、畢

局而出。勝頼軍監城道壽招之飲。又往。道壽使人出呼曰「奥平氏被誅」。從者不動。貞能出而歸城。乃擧族來奔。甲斐戍將追之。侍從遣本多廣孝・松平伊忠、迎之瀧山、擊破追兵、進戰築手下、又破之。勝頼怒、殺其質。十月、勝頼遣諸將擣濱松。留守本多重次等迎擊卻之。侍從乃還。勝頼出陣見附。不戰而去。

訓讀 道文の叛くや、其の子貞能之を諫む。信玄去るに及び、道文危疑す。貞能の子信昌、略〻書志に渉る。爲めに之を筮す。繇に曰く「蛇年の人死す」と。道文謂ふ「信玄の生歳は辛巳、必ず既に死せるなり」と。遂に意を決して款を歸る。勝頼、黑瀨に在り。質を貞能に徵す。貞能拒む能はず、其の少子を遣はす。或ひと、貞能異心ありと告ぐ。武田信豐之を召す。貞能卽ち往く。從者を戒めて曰く「未だ我が首を見ざれば動く勿れ」と。入つて信豐を見る。信豐之を詰る。貞能笑つて曰く「公、反間を信ずる莫れ」と。信豐意解け、之と碁を圍み、局を畢へて出づ。勝頼の軍監城道壽、之を招いて飲す。又往く。道壽、人をして出で呼ばしめて曰く「奥平氏誅せらる」と。從者動かず。貞能出でゝ城に歸る。乃ち擧族來り奔る。甲斐の戍將之を追ふ。侍從、本多廣孝・松平伊忠を遣はし、之を瀧山に迎へ、追兵を擊ち破り、進んで築手の下に戰ひ又之を破る。勝頼怒り、其の質を殺す。十月、勝頼、諸將を遣はして濱松を擣かしむ。留守本多重次等迎へ擊つて之を卻く。侍從乃ち還る。勝頼出でゝ見附に陣す。戰はずして去る。

通釋 道文が徳川氏に叛いた時、その子の貞能がそれを諫めたことがある。信玄が引揚げた時、道文は危ぶみ

疑つて來た。貞能の子の信昌は幾らか書物を讀んでゐた。そこで祖父の爲めに卜つて見た。判斷の言葉に曰ふには「蛇年の人が死ぬる」と。道文は信玄の生年が辛巳だからきつともう死んだに違ひないと思つた。遂に決心して德川方に好を通じた。勝賴は黑瀨に居つた。貞能に人質を求めた。貞能は斷ることが出來なかつたので、下の子を遣はした。或る者が、貞能には反心が有ると告げた。武田信豐は彼を召した。貞能は直ぐに出懸けて行つた。從者に注意して曰ふには「本當に俺の首を見ない中に騷ぎ出してはならぬ。(噂位で騷ぎ出すと却つて大變なことになる。)」と。入つて信豐に會つた。信豐が聞いたことを貞能に詰つた。貞能は笑つて曰ふのに「貴方は敵の廻し者の計略などを信用してはなりませぬ」と。信豐は心が解け、貞能と碁を圍み、貞能は勝負を濟まして退出した。勝賴の軍目付の城道壽が酒盛に彼を招いた。又出かけて行つた。道壽は人を外に出して、「奧平氏が誅せられた」と怒鳴らせた。併し從者は(貞能の言付を守つて)決して騷ぎ立てなかつた。貞能は無事に出て來て築手の城に歸つた。そこで一族の者が全部そこへ逃げて來た。甲斐の守將はそれを追ひかけた。侍從は本多廣孝と松平伊忠をやつて彼等を瀧山に迎へ、追うて來る兵を擊ち破り、進んで築手の城下で又それを破つた。勝賴は怒つて貞能の人質を殺した。十月、勝賴は諸將を派遣して濱松を攻擊させた。留守番の本多重次等が迎へうつてそれを退けた。侍從はそこで返つて來た。勝賴は自ら出かけて見附に陣取つた。併し戰ふに及ばずして走つた。

語釋　瀧山(遠江)

二年正月、侍從進正五位上。三月、上杉氏來修好。侍從修長篠城、復諸亡地。四月、攻乾城、遇雨引還。城兵尾擊、殿軍多死者。五月、勝賴大擧、來攻野田。城壁未修。菅沼定

盈棄城退。六月、勝頼進攻高天神。侍從乞援於信長。信長聞信玄定死、乃肯來援。勝頼疾攻、以利誘降城將小笠原長忠。長忠遂降。信長聞之、止次吉田。侍從赴謝。信長亦謝其扞信玄之勞、贈黄金二袋而去。侍從以長忠邑賜大須賀康高、使守馬伏壘。九月、勝頼將兵二萬來侵。侍從將兵七千陣于天龍河。我兵分爲二、一在上流、一在下流。欲竢敵渡夾擊之。甲斐諸將視我陣不可犯、勸勝頼退去。

【訓讀】二年正月、侍從正五位上に進む。三月、上杉氏來つて好を修む。侍從、長篠城を修め、諸くの亡地を復す。四月、乾城を攻め、雨に遇つて引き還る。城兵尾擊し、殿軍に死する者多し。五月、勝頼大擧し來り野田を攻む。城壁未だ修らず。菅沼定盈城を棄てゝ退く。六月、勝頼進んで高天神を攻む。侍從、援を信長に乞ふ。信長、信玄の定めて死するを聞き、乃ち肯て來り援く。勝頼疾く攻め、利を以て城將小笠原長忠を誘降す。長忠遂に降る。信長之を聞き、止つて吉田に次す。侍從赴き謝す。信長も亦其の信玄を扞ぐの勞を謝し、黄金二袋を贈つて去る。侍從、長忠の邑を以て大須賀康高に賜ひ、馬伏の壘を守らしむ。九月、勝頼兵二萬に將として來り侵す。侍從兵七千に將として天龍河に陣す。我が兵分れて二と爲り、一は上流に在り。一は下流に在り。敵の渡るを竢つて之を夾擊せんと欲す。甲斐の諸將我が陣の犯すべからざるを視、勝頼に勸めて退き去る。

【通釋】二年正月、侍從は正五位上に進んだ。三月、上杉氏が交誼を修めに來た。侍從は長篠城を修繕し、諸所の失つた土地を取り戻した。四月、乾城を攻めたが、雨に降られて立ち歸つた。すると城兵はそれを追擊して來

て味方の殿軍には討死した者が澤山出た。五月、勝頼が大兵を引きつれて來て野田を攻めた。城壁はまだ修繕が出來上つてゐなかつた。菅沼定盈は城を見棄てゝ退却した。六月、勝頼は進んで高天神を攻めた。侍從は信長に援軍を求めた。信長は信玄が確かに死んだことを聞いたので、漸く承知して援けに來た。勝頼は激しく攻め立て一方利益を餌にして城將の小笠原長忠に降伏を誘ひにかけた。長忠は遂に降伏した。信長はそれを聞いて、止つて吉田に宿した。侍從はそこへ出向いて禮を述べた。信長も、侍從は信玄を防いでくれた骨折を謝し、黄金二袋を贈つて歸つた。侍從は長忠の領地を大須賀康高に賜はつて、馬伏の壘を守らせた。九月、勝頼は二萬人の兵を率ゐて侵略して來た。侍從は兵七千を率ゐて天龍河に陣取つた。我が兵は二隊に分れ、一隊は上流にをり、一隊は下流に居つた。敵が川を渡るのを待つて之を夾み擊ちにしようと思つた。甲斐の諸將は我が軍の陣形の嚴重なのを見て勝頼に勸めて退き去つた。

【語釋】乾城（遠江）

三年正月、天野康景有二吉夢一。以爲三克二甲斐一之兆一。獻レ之。二十日、因命二連歌會一、著爲二恒例一。

二月、侍從出二獵城下一、見二一成童一。容貌秀俊。問レ之。對曰「井伊直親之孤子、名直政、幼字萬千代。育二於繼父松下清景一。」侍從曰「仕レ我否。」直政曰「奉レ命。」乃載歸、遂賜二其舊邑井伊谷一、統二故部曲一。是月、以二長篠一賜二奥平信昌一。井伊氏・奥平氏、皆南朝時屬二官軍一者也。侍從知二信昌可一レ用、使二松平伊昌助一レ之、益修二守禦一、以備二勝頼一。

【訓讀】三年正月、天野康景吉夢有り。以爲へらく、甲斐に克つの兆と。之を獻ず。二十日、因つて連歌會を命じ、著して恒例と爲す。二月、侍從、城下に出獵して一成童を見る。容貌秀俊、之を問ふ。對へて曰く「井伊直親の孤子、名は直政、幼字は萬千代。繼父松下清景に育せらる」と。侍從曰く「我に仕へんや否や」と。直政曰く「命を奉ぜん」と。乃ち載せて歸り、其の舊邑井伊谷を賜ひ、故の部曲を統べしむ。是の月、長篠を以て奧平信昌に賜ふ。井伊氏・奧平氏は、皆南朝の時官軍に屬せし者なり。侍從、信昌の用ふべきを知り、松平伊昌をして之を助けしめ、益々守禦を修めて、以て勝頼に備ふ。

【通釋】三年正月、天野康景は芽出度い連歌の夢を見た。甲斐に勝つ前兆と考へた。それで此の夢を奉つた。そこで、二十日連歌會を開かせ、それを行事の中に書き著して以後毎年の例とした。侍從は城下に狩に出て十五六の子供を見つけた。顔付が人並秀れて立派である。誰かと訊ねて見た。答へて曰ふには「井伊直親の孤子で名は直政、幼名は萬千代と云ひます。繼父、松下清景に養育されてをります」と。侍從が曰ふには「私に仕へる氣があるか、どうだ」と。直政が曰ふには「仰せに從つてお仕へ申します」と。そこで車に載せてつれ歸り、やがて井伊氏の舊領井伊谷を賜はつて、昔の部隊を支配させた。この月、長篠を奧平信昌に賜はつた。井伊氏・奧平氏は皆南北朝時代に官軍に從つた者である。侍從は信昌が役に立つ男であると知つて、松平伊昌に援助をさせ、愈々防備を固めて勝頼に對する守りとした。

【語釋】吉夢（康景の婢が連歌の發句を夢み、その詞に吉兆があつたのである。）　成童（十五歲位の童子。）

四月、勝頼侵ス宇理ヲ。我ガ吏人大賀彌四郎ナル者、以テ文無害ヲ起リ岡崎ノ胥徒ヨリ、至ル司ルニ二十餘邑ノ稅

務。竊懷異圖、與其黨小谷・倉地・山田三人謀、通款甲斐曰「臣掌岡崎管鑰。城之所有、世子與諸將質耳。請啓大師、挾質以臨濱松、無不降矣」。勝頼大喜、刻期來襲。山田中悔自首世子。世子使人伏其臥內聽之、盡得其實、急報之濱松。倉地・小谷知事覺逃。捕斬倉地、終執大賀、窮治服罪。乃反接馬上、徇之二城、先磔其妻子、然後生埋之地、而鋸其首。勝頼潛兵至楡木、聞大賀敗、轉掠楡木・牛窪。侍從距吉田、世子距法藏寺、擊卻之。

訓讀 四月、勝頼、宇理を侵す。我が吏人大賀彌四郎なる者、文無害を以て岡崎の胥徒より起り、二十餘邑の稅務を司るに至る。竊に異圖を懷き、其の黨小谷・倉地・山田の三人と謀り、款を甲斐に通ず。曰く「臣、岡崎の管鑰を掌る。城の有する所は、世子と諸將の質とのみ。請ふ、大師を啓かん。質を挾み以て濱松に臨まば、降らざるなからん」と。勝頼大に喜び、期を刻し來り襲はんとす。山田、中ごろ悔いて世子に自首す。世子人をして其の臥內に伏して之を聽かしめ、盡く其の實を得、急に之を濱松に報ず。倉地・小谷、事覺るゝを知つて逃る。捕へて倉地を斬り、終に大賀を執へ、窮治罪に服せしむ。乃ち馬上に反接し、之を二城に徇へ、先づ其の妻子を磔し、然る後に之を地に生埋して、其の首を鋸す。勝頼、兵を潛め楡木に至り、大賀の敗を聞き、轉じて楡木・牛窪を掠む。侍從は吉田に距ぎ、世子は法藏寺に距ぎ。擊つて之を卻く。

【通釋】四月、勝頼は宇理を侵略した。我が德川氏の役人で大賀彌四郎といふ者が、法の處置が大層公平であるといふので、岡崎の人夫から身を起して、二十餘ケ村の税取立の役を司るまでになつた。此の男が人知れず謀叛心を懷き、仲間の小谷・倉地・山田の三人と相談して、甲斐に内通した。曰ふには「私は岡崎城の鍵を預かつてをります。此の城に居る者は、世子と、諸將の人質だけです。一つ軍勢を御案内致させて下さい。この人質を捕へて行つて、濱松にお向ひなさるなら間違つても降參せぬことはありません」と。勝頼は大層喜んで、期日を定めて攻め込む手筈にした。所が山田は中途で後悔して世子に自首して出た。世子は人をやつて大賀の寢所に隱れて話を聞き取らせ、すつかり事實を知つて、急いで濱松に報告した。倉地・小谷は事が露見したと知つて逃げた。先づ倉地を捕へて斬り、終に大賀をも捕へ、嚴しく責めて罪を白狀させた。そこで馬上に後手に縛り上げ、岡崎・濱松の兩城を引き廻し、先づその妻子を磔刑に處し、それから彼を地中に生埋にして、その首を鋸で引き切つた。勝頼は兵を人に知れぬやうに率ゐて楡木まで來たが、大賀の失敗を聞いて、方向をかへて楡木と牛窪を掠奪した。侍從は之を吉田に距ぎ、世子は法藏寺に距いで、撃ち退けた。

【語釋】文無害（よく文法に則つて、人に傷害なきことをいふ。取捌の當を失はぬをいふ。一説に役の名前として見る。）○胥徒（小使）○臥内（山田の寢所の内。）○反接（後ろ手に縛り上ること。）○二城（濱松・岡崎。）

五月、勝頼大擧攻長篠、築壘于鳶巣山、分兵絶其饟道。信昌與伊昌、厲衆堅守。侍從使小栗大六乞援於信長。信長不果出。奥平貞能自往固請。信長許之。未至。信昌出

戰、卻敵、焚其竹栖。勝頼攻奪其甕城、益修攻具、鑿地道、環塹柵、攻擊連晝夜。信昌謂其衆曰「孰能出促援兵者」。鳥居勝高素倔強、稱強右衛門。進曰「臣請往矣」。信昌許之。夜縋而出、至侍從營、致信昌命曰「城兵未疲。鉛硝亦具。所缺者糧耳。不急救之、則信昌自殺以免士卒」。侍從召見、慰勞之曰「信長既在途。吾亦將以明日出」。因留勝高。自從辭曰「城中延領遲報。臣不忍留也」。卽夜馳歸、將踰柵入城。爲敵邏兵所執。勝頼命解縛諭之曰「汝往語城兵、信長・家康不能來。宜速出降也。則吾厚賞汝矣」。勝高曰「諾」。乃使甲士十餘人露刃擁之、至于城下。勝高仰城、大呼曰「諸君努力。大兵來援、不出三日」。言未畢、刃叢而死。勝頼益嚴防備、張索濠上、以防城兵逃出。

【訓讀】五月、勝頼大擧して、長篠を攻め、壘を鳶巣山に築き、兵を分ち其の饟道を絕つ。信昌、伊昌と衆を厲まして堅く守る。侍從、小栗大六をして援を信長に乞はしむ。信長出づるを果さず。奧平貞能、自ら往いて固く請ふ。信長之を許す。未だ至らず。信昌出で戰つて敵を卻け、其の竹栖を焚く。勝頼攻めて其の甕城を奪ひ、益〻攻具を修め、地道を鑿ち、塹柵を環し、攻擊晝夜に連る。信昌、其の衆に謂つて曰く「孰か能く出でゝ援兵を促す者ぞ」と。鳥居勝高、素より倔強、強右衛門と稱す。進んで曰く「臣請ふ、往かん」と。信昌、之を許す。夜、

縋して出で、侍從の營に至り、信昌の命を致して曰く「城兵未だ疲れず。鉛硝も亦具る。缺くる所の者は糧のみ。急に之を救はずんば、則ち信昌自殺し以て士卒を免れしめん」と。因つて勝高を留めて自ら從へんとす。辭して曰く「信長既に途に在り。吾れ亦、將に明日を以て出でんとす」と。侍從、召見し、之を慰勞して曰く「城中、領を延べて報を遲つ。臣、留るに忍びざるなり」と。卽夜馳せ歸り、將に柵を踰え城に入らんとす。敵の邏兵の執ふる所と爲る。勝賴命じて縛を解き、之を諭して曰く「汝往いて城兵に語げよ。信長・家康、來る能はず。宜しく速に出で降るべしと。則ち吾れ厚く汝を賞せん」と。勝高曰く「諾」と。乃ち甲士十餘人をして刃を露し之を擁し、城下に至らしむ。勝高、城を仰ぎ、大に呼んで曰く「諸君、努力せよ。大兵來り援くる、三日を出でず」と。言未だ畢らざるに、刃叢つて死す。勝賴、益々防備を嚴にし、索を濠上に張り以て城兵の逃出を防ぐ。

【通釋】五月、勝賴は大軍を率ゐて長篠を攻め、鳶巣山に壘を築き、部隊を分けて長篠城の糧道を斷ち切つた。信昌は伊昌と兵を督勵して固く守つた。侍從は小栗大六をして援を信長に賴ませた。併し信長は來るかと思つたら出ては來なかつた。奧平貞能が自分で出懸けて行つて是非にと賴んだ。信長は之を許した。けれどもまだ來なかつた。信昌は城を出て戰つて敵を退け、その竹の柵を燒いた。勝賴は攻めよせてその外城を奪ひ、益々攻め道具を整へ、地道を堀り濠や柵を圍らし、晝夜連續して攻撃した。信昌は其の部下の衆に向つて曰ふには「誰か出かけて行つて援兵を催促して來る者はゐないか」と。鳥居勝高は元來利かぬ氣の男で強右衛門と稱してゐた。進み出て曰ふのに「私に行かせて下さい」と。信昌はそれを許した。強右衛門は夜繩に縋つて城を出で侍從の陣屋に行つて信昌の命令を傳へて曰ふには「城兵はまだ疲れて居りません。火藥もたつぷり有ります。不足なものは糧食だけです。直ぐに救つて下さらなければ、信昌が自殺して士卒の命を免れるやうにすることでせう」と。

侍從は彼を召しよせて會ひ、慰勞して曰ふには「信長は最早出發して途中に居る。余も明日には出發しようとしてゐる」と。そこで勝高を留め自分のお供に加へんとした。勝高は辭退して曰ふのは「城中では首を長くして返事を待つてをります。私はこゝに留まつて安閑としてゐるに忍びません」と。すぐその晩馳せ歸り、すでに武田方の柵を越えて城に入らうとした。敵の巡廻の兵に捕はれた。勝賴は命じて縛を解き諭して曰ふには「お前は向ふへ行つて城兵にかう返事をせよ。信長も家康も來ることが出來ない。早く城を出て降參するが宜いと。さうすれば余はお前に手厚い褒美を取らせるであらう」と。勝高が曰ふには「承知しました」と。そこで鎧武者十餘人に刀の鞘を拂ひ、勝高を城下まで連れて行かせた。勝高は城を見上げ、大聲に叫んで曰ふのに「諸君努力し給へ。大軍が援けに來るのは三日以內だ」と。その言葉を言ひ切らぬ中に澤山の刀が集つて突き刺されて死んだ。勝賴は益〻防備を嚴重にし、索を濠の上に張つて城兵の逃げ出るのを防いだ。

語釋　甕城（甕城、俗にいふうまだし。）

十八日、侍從以騎卒二萬先進、陣高松。信長與長子信忠、合五萬衆陣設樂。信昌望見之、作書曰「城猶足堅守。請勿輕進損兵。敵若急攻、當鳴鐘報之」。使鈴木金七齎往。夜踰濠、以短刀截索、泅而來達。侍從獲書以告信長。信長甚憚甲斐人、植重柵、穿塹、守以鳥銃、使侍從亦倣之。大久保忠世其弟忠佐奉命、以銃手三百爲先鋒。

訓讀　十八日、侍從、騎卒二萬を以て先づ進み、高松に陣す。信長、長子信忠と、五萬の衆を合せ設樂に陣す。

信昌、之を望見し、書を作つて曰く「城猶堅守するに足る。請ふ輕々しく進みて兵を損ずる勿れ。敵若し急に攻めば、當に鐘を鳴して之を報ずべし」と。鈴木金七をして齎し往かしむ。夜、濠を踰え、短刀を以て索を截り泅いで來り達す。侍從、書を獲、以て信長に告ぐ。信長甚だ甲斐の人を憚り、重柵を植て、壍を穿ち、守るに鳥銃を以てし、侍從をして亦之に倣はしむ。大久保忠世其の弟忠佐、命を奉じ、銃手三百を以て先鋒と爲る。

通釋 十八日、侍從は騎兵、歩兵二萬人を率ゐて先づ進み、高松に陣取つた。信長は長子信忠と五萬の兵を合せ、設樂に陣取つた。信昌は遙にそれを見、手紙に書いて曰ふには「城はまだ固く守つて行くに充分であります。どうぞ輕率に進んで兵力をお損じにならぬやう。敵がもし急に攻めて來ましたら、鐘を鳴らしてお知らせすることに致します」と。鈴木金七に此の書を持つて行かせた。鈴木は夜濠を越え、短刀で索を切り、泳いで行き着いた。侍從は手紙を見て、以上の内容を信長に知らせた。信長は甲斐の兵にひどくおびえてゐて、幾重も柵を立て、濠を掘り、鳥銃でそれを守り、侍從にもその通りに眞似をさせた。大久保忠世とその弟の忠佐が命をかしこんで銃手三百人を率ゐて先鋒となつた。

參河卒小栗某、奔在甲斐。於是、爲勝賴使上國而還、竊懷歸志、過本多忠勝。忠勝攜謁。侍從授之密謀、使歸告勝賴、以援軍易與狀。勝賴大喜、欲戰。將佐皆諫。弗聽。乃分兵當城、使武田信實守鳶巣山、而自進渡瀧澤、勒兵爲十三隊。本多廣孝・酒井忠次相謂曰「我誘敵入死地矣」。成瀬正一嘗在甲斐、記敵旗幟。侍從召之、指甲斐軍、問曰

「左者爲誰」。曰「山縣昌景也」。問其右者。曰「馬場信房也」。問其中者。曰「公族也」。忠次因說曰「敵鋒嚮我、銳甚。請分兵遶出其背、焚鳶巢壘、使敵顧後則克矣」。侍從曰「善」。未告信長。信長數發候騎候敵。皆曰「兵衆而整。不可犯也」。一軍失色。

訓讀 參河の卒小栗某、奔つて甲斐に在り。是に於て、勝賴の爲めに上國に使して還り、竊に歸志を懷き、本多忠勝に過る。忠勝携へて謁す。侍從、之に密謀を授け、歸つて勝賴に告ぐるに、援軍與し易きの狀を以てせしむ。勝賴、大に喜び、戰はんと欲す。將佐皆諫む。聽かず。乃ち兵を分ち城に當り、武田信實をして鳶巢山を守らしめ、而して自ら進んで瀧澤を渡り、兵を勒して十三隊と爲す。本多廣孝・酒井忠次、相謂つて曰く「我れ敵を誘つて死地に入れん」と。成瀨正一、嘗て甲斐に在り。敵の旗幟を記す。侍從、之を召し、甲斐の軍を指して、問うて曰く「左の者を誰と爲す」と。曰く「山縣昌景なり」と。其の右なる者を問ふ。曰く「馬場信房なり」と。其の中なる者を問ふ。曰く「公族なり」と。忠次因つて說いて曰く「敵鋒、我に嚮ひ、銳甚し。請ふ、兵を分ち遶つて其の背に出で、鳶巢の壘を焚き、敵をして後を顧みしめば則ち克たん」と。侍從曰く「善し」と。未だ信長に告げず。信長、數〻候騎を發し敵を候ふ。皆曰く「兵衆くして整ふ。犯すべからざるなり」と、一軍、色を失ふ。

通釋 參河の兵卒の小栗某といふものが、出奔して甲斐に居つた。この時、勝賴の爲めに上方に使に行つて歸つて來たが、内々歸參の心を起し、本多忠勝の營に顏を出した。忠勝は之をつれてお目通りをした。侍從はこの

者に秘密の計略を授け、歸つて勝頼に、援軍の織田勢は恐るゝに足らぬといふことを言はせた。勝頼は大層喜んで戰はうと思つた。大將參謀達は皆之を諫めた。併し聞き入れなかつた。そこで兵を分けて城に當り、武田信實をして鳶巣山を守らせ、そして自分は進んで瀧澤を渡り、兵を手分けして十三隊とした。本多廣孝と酒井忠次は話し合つて曰ふのに「我々は敵を誘ひ出して、どうしても助からないやうにしてやらう」と　成瀬正一は以前甲斐に居つたことがある。敵の旗識しを憶えてゐた。侍從は之を呼びよせ甲斐の軍を指さし問うて曰ふのに「左の方にゐるのは誰であるか」と。曰く「山縣昌景です」と。その右の方は誰であるかと問うた。「馬場信房です」と。答へた。眞中は誰かと問ふ。「一門の人です」と答へた。そこで忠次が說いて曰ふのに「敵の鋒先が味方に向つてゐて非常に勢が強い。一つ兵を分け、ぐるりその背後に出て、鳶巣の壘を燒き、敵をして後を振り返らせるやうにしたら勝てるでせう」と。侍從が曰ふのに「それは好い計略だ」と。信長にはまだそのことを知らせなかつた。信長は度々斥候の騎兵を出して敵狀を偵察した。皆報告して曰ふには　兵數は多いし、よく整つてゐます。之を犯すことは不可能です」と。全軍恐怖して顏色を變へた。

二十日、信長召諸將問計。諸將氣沮、莫敢言者。忠次進曰「臣使人間視敵兵、寡羸。敗兆皆備。請明日決戰」信長曰「汝之勇、果如所聞」因命酒觴忠次、使傳之信忠曰「聞汝善撈蝦舞。爲我一爲之」忠次起舞。衆敲箙和之。舞畢、復議戰。忠次復進曰「是役係寡君國事。臣不敢辭讓」因進襲鳶巣之策。信長心善之。而恐其漏泄、佯叱斥忠次。忠次

弗憚。罷。已而信長陰召還之、附兵五千使往。侍從命松平伊忠・其子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次・奧平貞能、率三千人助忠次。約曰「至則擧燧」。忠次不歸舍而發、乘夜踰險、五更達壘下。伊忠謂家忠曰「我必戰死。汝全軀以事主公」。家忠泣請共死。伊忠叱曰「國恩未報。又絕先祀。忠孝安在」。乃分兵附之、訣飮而去。

訓讀 二十日、信長諸將を召し計を問ふ。諸將氣沮み、敢て言ふ者なし。忠次進んで曰く「臣、人をして敵兵を間視せしむるに、寡羸なり。敗兆皆備る。請ふ、明日決戰せん」と。信長曰く「汝の勇果して聞く所の如し」と。因つて酒を命じ忠次に觴し、之を信忠に傳へしめて曰く「聞く、汝、撈蝦舞を善くすと。我が爲に一たび之を爲せ」と。忠次起つて舞ふ。衆、簸を敲き之に和す。舞ひ畢り、復戰を議す。忠次復進んで曰く「是の役は寡君の國事に係る。臣敢て辭讓せず」と。因つて鳶巢を襲ふの策を進む。信長、心に之を善しとす。而れども其の漏泄を恐れ、佯り叱し忠次を斥く。忠次憚ばず。罷む。已にして信長陰に之を召還し、兵五千を附し往かしむ。侍從、松平伊忠・其の子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次・奧平貞能に命じ、三千人を率ゐ忠次を助けしむ。約して曰く「至れば則ち燧を擧げよ」と。忠次、舍に歸らずして發し、夜に乘じ險を踰え、五更、壘下に達す。伊忠、家忠に謂つて曰く「我れ必ず戰死せん。汝、軀を全くし以て主公に事へよ」と。家忠、泣いて共に死せんと請ふ。伊忠、叱して曰く「國恩未だ報ぜず。又先祀を絕つ。忠孝安に在る」と。乃ち兵を分ち之に附し、訣飮して去る。

通釋 二十日、信長は諸將を召して計略を尋ねた。諸將は皆意氣沮喪して進んで口を切る者とてゐなかつた。

忠次は進み出て曰ふのに「私は人をやつて敵兵を偵察させました所、兵數も少ないしそれに疲れてゐます。敗ける兆しがすつかり揃つてゐます。どうぞ明日は決戰を致し度いものです」と。信長が曰ふのに「お前の勇氣は果して聞いてゐた通りである」と。そこで酒を用意させ、忠次に盃を與へ、それを信忠に廻させて曰ふには「聞く所によると、お前は蝦すくひの舞が巧いさうだ。私の爲めに一度やつて見せてくれよ」と。忠次は立ち上つて舞をした。一同は箙を敲いて之に調子を合せた。舞ひ終つてから、又戰爭の相談をした。忠次は又進み出て曰ふには「此の度の戰は我が君の國事に關係することであります。私は決して遠慮は致しませぬ」と。さう斷つて、鳶巢を襲ふ計略を進言した。信長は心中にそれを好いと思つた。併し外に漏れるのを恐れ、表面わざと叱り付けて忠次を退けた。忠次は不愉快な面持で退つた。その會議はそれでお終ひになつた。その中に信長は人に知れぬ樣に忠次を呼び歸し、兵五千人を付けて出立させた。侍從は松平伊忠・其の子家忠・本多廣孝・菅沼定盈・阿部定次・奧平貞能に命じて三千人を率ゐて忠次を助けさせた。約束を定めて曰ふには「鳶巢に着いたら、のろしを打ち上げろ」と。忠次は自分の宿所にも歸らずに出發し、夜の間に乘じ、險阻な所を踏み越え午前四時頃に壘の下に達した。伊忠は家忠に向つて曰ふには「私はこんどはきつと戰死するだらう。お前は生き長らへて主公に仕へてくれよ」と。家忠は泣いて一緒に死に度いと願つた。伊忠は叱りつけて曰ふのに「未だ國恩にも報いてゐない。祖先の祭も絕つことになる。そんなことで忠孝の道は一體どこにあるか」と。そこで兵を分けて家忠に附けてやり別れの酒をくみ交して立ち去つた。

語釋　撈蝦舞（方今の鰕すくひに類したものであらう。）

味爽、忠次擧燧、大喊逼壘。信實惶遽出距。伊忠力戰死之。終破殺信實、遂焚諸砦。甲斐軍驚動。我兵觀燧大喜。織田氏將挑戰。忠佐謂忠世曰、「我主彼客。使彼先戰、我之恥也。」忠世曰、「然。」乃共出柵外、誘敵。敵左陣突騎三千先縱。我銃隊擊卻之。敵中軍繼至。忠世・忠佐、周馳健鬪。信長望其背旗徽號、使人來問曰、「一人以蝶爲徽、一人以鏡爲徽。其督衆也、如臂使指。敵乎、我乎。」侍從對曰、「蝶爲兄。鏡爲弟。皆僕家舊臣也。」信長歎曰、「德川氏何多佳士也。」當是時、爲二人所擊破者、皆轉赴信長前軍。敵右軍亦冒銃直進。信長前軍走入柵內。柵殆破。敵逼其麾下。侍從馳騎告信長曰、「公令諸隊齊發銃。我軍用槍橫擊、可以克也。」信長傳令。敵兵大沮。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等、攢槍接戰。甲斐諸軍遂大潰。信昌・伊昌、出長篠夾擊、幾獲勝頼。勝頼僅免。

訓讀 味爽、忠次、燧を擧げ、大に喊して壘に逼る。信實、惶遽出で距ぐ。伊忠、力戰して之に死す。終に信實を破殺し、遂に諸砦を焚く。甲斐の軍驚動す。我が兵、燧を觀て大に喜ぶ。織田氏將に戰を挑まんとす。

忠佐・忠世に謂つて曰く「我は主、彼は客。彼をして先戰はしむるは、我の恥なり」と。忠世曰く「然り」と。乃ち共に柵外に出で敵を誘ふ。敵の左陣の突騎三千先縦つ。我が銃隊、撃つて之を卻く。敵の中軍繼ぎ至る。忠世・忠佐、周馳健闘す。信長、其の背旗の徽號を望み、人をして來り問はしめて曰く「一人は蝶を以て徽と爲し、一人は鏡を以て徽と爲す。其の衆を督するや、臂の指を使ふが如し。敵か、我か」と。侍從、對へて曰く「蝶は兄たり。鏡は弟たり。皆僕が家の舊臣なり」と。信長、歎じて曰く「德川氏何ぞ佳士多きや」と。是の時に當り、二人の撃破する所と爲る者、皆轉じて信長の前軍に赴く。敵の右軍も亦銃を冒して直進す。信長の前軍、走つて柵内に入る。柵殆ど破る。敵、其の麾下に逼る。侍從、騎を馳せ信長に告げて曰く「公、諸隊をして齊しく銃を發せしめよ。我が軍、槍を用ひて横撃せば、以て克つべきなり」と。信長令を傳ふ。敵兵、大に沮む。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等、槍を攢めて接戰す。甲斐の諸軍遂に大に潰ゆ。信昌・伊昌・長篠を出でゝ夾撃し、幾ど勝頼を獲んとす。勝頼僅に免る。

通釋 夜の引き明けに忠次は烽を上げ、盛んに關を造つて壘に攻めよせた。信實は恐れあはて、城から出て防いだ。伊忠は奮戰して討死した。終に信實を打ち敗り殺して終ひ、その勢で諸所の砦を燒いた。甲斐の軍は驚いて動搖した。我が軍は烽の上つたのを見て大喜びであつた。織田氏方でも戰をしかけようとした。忠佐が忠世に向つて曰ふには「こちらは主軍で、あちらは客軍だ。向ふに先に戰はせるのは、我々の恥辱だ」と。忠世も曰ふのに「その通りだ」と。そこで一緒に柵の外に出て敵を誘ひかけた。敵の左陣の突撃騎が三千人、先づ飛び出して來た。味方の鐵砲組がそれを撃ち卻けた。續いて敵の中軍がやつて來た。忠世と忠佐はぐる〳〵馳廻つて、目覺ましい戰をした。信長はその指物の紋を打ち眺め、人を寄越して問はせて曰ふのに「一人は蝶を紋所

にし、一人は鏡を紋所にしてゐる。その部下を指揮することは、臂が指を使ふやうに自在を極めてゐる。敵方の者ですか、味方の者ですか」と。侍從は答へて曰ふのに「蝶の方が兄で、鏡の方は弟であります。何れも私の古くからの家來で御座います」と。信長は感歎して曰ふには「德川氏には何んと立派な武士の多いことではある」と。この時この二人にうち破られた者は、皆向きを變へて織田氏の前軍にかゝつて來た。敵の右軍も銃丸を冒して直進して來た。信長の前軍は走つて柵の中に逃げ込んだ。その柵も殆んど破れた　敵は旗下まで攻め寄せて來た。侍從は騎馬を飛ばせて信長に告げさせて曰ふには「貴公は諸隊に命じて一齊に銃を發射させて下さい。そして我軍が槍を用ひて側面から擊つてかゝります。確に勝利を得ることが出來ます」と。信長はその通り一齊射擊の命令を傳へた。敵はひどく勢を殺がれた。本多忠勝・松平忠正・鳥居元忠・榊原康政等が槍先きを揃へて接戰した。甲斐の諸軍は遂に大に潰滅した。信昌と伊昌は長篠城を出て夾み擊ちにして、殆んど勝賴を虜にしようとした。勝賴は危く逃れた。

是日、自卯至午、戰凡五十八合、斬首一萬餘級。武田氏宿將精兵略殲於此。侍從往說信長曰「今乘大勝之威、長驅追北、則甲斐・信濃可一擧取也」羽柴秀吉從在軍中。亦勸之。信長弗聽而去。侍從見信昌、賞其堅守、加賜釆邑、許以女妻之、遂大賞將士。數日親往岐阜謝。信長亦謝曰「卿之君臣、以寡擊衆、爲吾扞東面數年矣。不則吾安得定京畿哉。今勝賴一敗褫氣、不能復出頭。卿宜取駿河、遂及甲斐・信濃。吾亦當相

助焉。因見扈從將士曰「長髯將何不來。」蓋謂忠世也。忠佐在扈從。對曰「家兄有故、不得拜趨。」信長曰「吾子兄弟、長篠之戰、可謂絶類逸群矣。」手賜衣服、又賞忠次功、賜薙刀。侍從辭歸。

訓讀 是の日、卯より午に至り、戰凡て五十八合、斬首一萬餘級。武田氏の宿將、精兵、略此に殲く。侍從、往いて信長に說いて曰く「今、大勝の威に乘じ、長驅して北ぐるを追はゞ、則ち甲斐、信濃、一擧して取るべきなり」と。羽柴秀吉、從つて軍中に在り。亦之を勸む。信長聽かずして去る。侍從、信昌を見て、其の堅守を賞し、采邑を加賜し、女を以て之に妻はすを許し、遂に大に將士を賞す。數日にして親ら岐阜に往き謝す。信長も亦謝して曰く「卿の君臣、寡を以て衆を擊ち、吾が爲に東面を扞ぐこと數年なり。不らざれば則ち吾れ安んぞ京畿を定むるを得んや。今勝賴、一敗氣を褫れ、復頭を出だす能はず。卿宜しく駿河を取り、遂に甲斐・信濃に及ぶべし。吾れも亦當に相助くべし」と。因つて扈從の將士を見て曰く「長髯の將、何ぞ來らざる」と。蓋し忠世を謂ふなり。忠佐、扈從に在り。對へて曰く「家兄、故有り、拜趨するを得ず」と。信長曰く「吾子の兄弟、長篠の戰に、絶類逸群と謂ふべし」と。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞し、薙刀を賜ふ。侍從辭して歸る。

通釋 この日は午前六時頃から午まで合戰は全部で五十八回、斬首一萬餘級。武田氏の譜代の將と精銳な兵隊とはこの戰爭で殆んど盡きた。侍從は信長の所に出かけて說いて曰ふには「今、大勝の勢に乘じて、遠く敵を追ひかけて行つたら、甲斐と信濃は一度に攻め取ることが出來ませう」と。羽柴秀吉も從軍してゐた。秀吉も亦

それを勸めた。併し信長は承知しないで歸り去つた。侍從は信昌にあつて、彼がよく城を守つたことを賞し、領地を増加し、自分の娘を妻にやることを許した。それから將士共に盛んに褒美をやつた。數日たつてから岐阜に出かけてお禮を述べた。信長も禮を言つて曰ふには「貴公の君臣は小勢で多勢を撃ち、余のために東の方面を數年の間防いで下さつた。そうでなかつたならば余はどうして京畿地方を平定することが出來たでせう。今勝頼は一度の敗軍ですつかり意氣沮喪して、早頭をのし上げることは出來なくなりました。貴公は駿河を取り、その上甲斐・信濃を攻め取られたら宜いでせう。余も屹度御援助致すでせう」と。そしてお供の將士を見て曰ふには「あの頰鬚の長い大將はどうして來なかつたか」と。これは忠世のことを謂つたのである。弟の忠佐がお供の中にゐた。返事をして曰ふには「兄は差支があつて參ることが出來ませんでした。」信長が曰ふには「お前達兄弟が長篠の戰での手柄は誠に拔群と謂ふべきぢや」と。手づから衣服を賜ひ、又忠次の功を賞して薙刀を賜はつた。そこで侍從は暇を告げて歸つた。

六月、侍從攻二股。使忠世守蜷原砦以當之、轉至掛川攻光明城、使諸將逼其前、而自潛兵襲其後下之。七月、與世子信康攻諏訪原、至八月下之。城在田中・高天神之間、難其守。松平忠次請守。乃賜偏諱、改名康親、稱周防守、名城曰牧野。以武田氏比殷紂也。自是、勝頼數出、遂不能深入。侍從遂攻小山。酒井忠次曰「我已得二城、師暴

兵疲。不レ可レ不レ戢。勝頼慓悍過レ父。我攻二小山一、必來援レ之。前有二堅城一、後有二強敵一。取レ敗之道也。康親勸レ往。遂往。

訓讀 六月、侍從、二股を攻む。忠世をして蜷原の砦を守り以て之に當らしめ、轉じて掛川に至り、光明城を攻め、諸將をして其の前に逼らしめ、而して自ら兵を潛め其の後を襲つて之を下す。七月、世子信康と諏訪原を攻め、八月に至り之を下す。城は田中・高天神の間に在り。其の守を難んず。松平忠次、守らんと請ふ。乃ち偏諱を賜ひ、名を康親と改め、周防守と稱せしめ、城を名づけて牧野と曰ふ。武田氏を以て殷紂に比するなり。是より勝頼、數出づるも、遂に深く入る能はず。侍從、遂に小山を攻む。酒井忠次曰く「我れ已に二城を得、師暴し兵疲る。戢めざるべからず。勝頼、慓悍父に過ぐ。我れ小山を攻めば、必ず來つて之を援けん、前に堅城あり。後に強敵あり。敗を取るの道なり」と。康親往くを勸む。遂に往く。

通釋 六月、侍從・二股を攻めた。忠世をして蜷原の砦を守つてそれに當らせ、自分は轉じて掛川に至り光明城を攻め、諸將をして前方に肉迫させ、自分は潛かに兵を率ゐて、後方を襲ひ撃つて下した。七月・世子信康と諏訪原を攻め、八月に入つて之を下した。この城は田中と高天神（共に武田方の城）の間に在つて、非常に守備の困難な所であつた。松平忠次が守ることを願ひ出た。そこで本名の一字を賜はつて名を康親と改め、周防守と稱へさせ、城を牧野と名づけた。（牧野は周の武王が殷の紂王を亡ぼした所である）武田氏を殷の紂王に比したのである。この後勝頼は度々出て來たが、何時でも深く攻め込むことが出來なかつた。さて侍從は進んで小山を攻めようとした。酒井忠次が曰ふには「我が軍はすでに光明城・諏訪原の二城を陷れ、軍隊は風雨にさらされ疲勞を

してゐます。ひと先づ戈ををさめなければなりますまい。勝頼は素早く荒つぽいこと、父信玄以上です。今我が軍が小山を攻めたなら必ず援けに來るでせう。すると我が軍は前には堅固な城を控へ、背後に強敵を受けることになります。これは敗戰の憂目を見る仕方で御座います」と。康親は進み攻めることを勸めた。遂に小山に向つて進軍した。

語釋 蟾原（遠江）○堅城（小山をさす。）

九月、勝頼募兵二萬、陣大井河上。侍從曰「果如忠次言。」乃循河班師。城兵出躡。世子信康殿而退。勝頼不敢逼。自是世子常從軍。十月、使大久保忠世・榊原康政攻二股。踰月下之。遂取伯耆塚・八荒山。信長復下岩村。佐久間信盛與水野信元有郤。譖信元通岩村、欲殺之。信元懼來奔。侍從固請宥之。信長弗聽。遂賜死、使信盛取其邑、盡逐信元族人。獨其季子留匿參河。

通釋 九月、勝頼兵二萬を募り、大井河の上に陣す。侍從曰く「果して忠次の言の如し」と。乃ち河に循ひ師を班す。城兵出でゝ躡す。世子信康、殿して退く。勝頼敢て逼らず。是より世子、常に軍に從ふ。十月、大久保忠世・榊原康政をして、二股を攻めしむ。月を踰えて之を下し、遂に伯耆塚・八荒山を取る。信長復岩村を下す。佐久間信盛、水野信元と郤あり。信元岩村に通ずと譖し、之を殺さんと欲す。信元懼れて來り奔る。侍從固く之

を宥さんと請ふ。信長聽かず。遂に死を賜ひ、信盛をして其の邑を取らしめ、盡く信元の族人を逐ふ。獨り其の季子、留つて參河に匿る。

通釋 九月、勝頼は兵二萬を募り、大井河の附近に陣取つた。侍從が曰ふのに「やはり忠次の言つた通りであつた」と。そこで河に沿うて軍隊を返した。小山の城兵が出て來て後を追ひかけた。世子信康が殿をして退いた。勝頼は思ひ切つて攻め寄らなかつた。これから後は世子は何時も從軍した。十月、大久保忠世と榊原康政に二股を攻めさせた。翌月に入つて之を陷れ、續いて伯耆塚と八荒山を取つた。信長は又岩村を陷れた。佐久間信盛は水野信元と仲違ひであつた。信盛は信元が岩村と内通してゐると讒言して之を殺さうと計つた。信元は恐れて侍從の方へ逃げて來た。侍從は彼を赦免して貰ひ度いと固く請うた。信長は許さなかつた。遂に自殺を命じ、信盛をしてその領地を取らせ、又信元の一族を全部追放した。その末子が唯だ一人參河に留まつて隱れてゐた。

語釋 伯耆塚・八荒山（遠江）

四年春、侍從築城横須賀、使大須賀康高守焉、以久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉屬之。勝頼納糧于高天神。侍從自出、相距芝原、欲戰。内藤信成諫而止。乃交綏。上杉謙信出兵上野、遙爲應援。勝頼不敢南出。侍從乃納今川氏眞於駿河、使松平康親・松平家忠竝視其政。八月、自將拔樽井砦、使安倍光眞守之。五年八月、侍從入山梨、擊

甲斐將穴山信良破レ之。甲斐兵又攻二樽井一。光眞擊卻レ之。十月、侍從修二築濱松城一。十二月、侍從進二從四位下一、遷二右近衞少將一。

訓讀 四年春、侍從、城を横須賀に築き、大須賀康高をして守らしめ、久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉を以て之に屬す。勝頼、糧を高天神に納る。侍從自ら出で、芝原に相距ぎ、戰はんと欲す。内藤信成諫めて止む。乃ち交綏す。上杉謙信、兵を上野に出だし、遙に應援を爲す。勝頼敢て南に出でず。侍從乃ち今川氏眞を駿河に納れ、松平康親・松平家忠をして、並に其の政を視しむ。八月、自ら將として樽井の砦を拔き、安倍光眞をして之を守らしむ。五年八月、侍從、山梨に入り、甲斐の將穴山信良を擊つて、之を破る。甲斐の兵、又樽井を攻む。光眞擊つて之を卻く。十月、侍從、濱松城を修築す。十二月、侍從、從四位下に進み、右近衞少將に遷さる。

通釋 四年春、侍從は横須賀に城を築き、大須賀康高をして守らせ、久世廣宣・坂部廣勝・渥美勝吉の三人をその配下につけた。勝頼は高天神城に兵糧を運び入れた。侍從は自ら出陣して芝原に相對峙し、戰はうと思つた。内藤信成が諫めて之を止めた。そこで兩軍互に引き退いた。上杉謙信が上野に軍隊を出して遙に德川氏の應援をした。勝頼は敢て南に出ては來なかつた。そこで侍從は今川氏眞を駿河に入れ、松平康親と松平家忠の兩人をして政治の後見をさせた。八月、自ら兵を率ゐて、樽井の砦を陷れ、安倍光眞をしてそれを守らせた。五年八月、侍從は山梨に入り、甲斐の大將の穴山信良を擊つて之を破つた。甲斐の兵が、今度は樽井を攻めて來たが、守將の光眞がそれを擊ち退けた。十月、侍從は濱松城を修築した。十二月、侍從は從四位下に進み、右近衞少將に遷された。

六年三月、少將徇駿河、攻田中。井伊直政從軍、每戰先衆。與諸將破其外郭而還。八月、大須賀康高破甲斐兵于國安河。少將侵掠駿河、至持舟而還、過田中。恐其兵出尾、爲攻城狀。敵不敢出。我兵乃還。十一月、勝賴陣小山。少將陣馬伏、徙于總社。世子夜潛濟水、覘敵營歸、欲擊之。少將曰「據險之敵不可輕擊。」復交綏。七年正月、勝賴又入遠江。聞少將出乃去。四月、三子長丸生于濱松。母西郷氏。以故水野信元孤子土井利勝爲其侍臣。利勝從其母依土井氏、遂冒之也。

訓讀 六年三月、少將、駿河を徇へ、田中を攻む。井伊直政、軍に從ひ、戰ふ每に衆に先んず。諸將と其の外郭を破つて還る。八月、大須賀康高、甲斐の兵を國安河に破る。少將、駿河を侵掠し、持舟に至つて還り、田中を過ぐ。其の兵の出で尾するを恐れ、城を攻むるの狀を爲す。敵敢て出でず。我が兵乃ち還る。十一月、勝賴、小山に陣す。少將、馬伏に陣し、總社に徙る。世子、夜、潛に水を濟り、敵營を覘ひ歸り、之を擊たんと欲す。少將曰く「險に據るの敵は、輕〻しく擊つべからず」と。復交綏す。七年正月、勝賴又遠江に入る。少將の出づるを聞いて乃ち去る。四月、三子長丸、濱松に生る。母は西郷氏。故の水野信元の孤子土井利勝を以て其の侍臣と爲す。利勝、其の母に從つて土井氏に依り、遂に之を冒せるなり。

通釋 六年三月、少將は駿河を觸れ降し、田中を攻めた。井伊直政は軍に從つてゐたが、戰鬪の度びに先陣を

なした。諸將と共に田中城の外郭を破つて還つた。八月、大須賀康高は甲斐の兵を國安河で破つた。少將は駿河に侵入して掠奪し、持舟まで行つて引き返し、田中を通つた。その城兵が出て來て追撃するのを恐れ、城を攻めるやうな樣子を見せた。それで敵も思ひ切つて出なかつた。そこで我が軍は無事に歸つた。十一月、勝賴は小山に陣取つた。少將は馬伏に陣取り、總社に移つた。世子は夜、こつそり河を渡り、敵の陣屋を覗つて歸り、之を攻めようと思つた。少將が曰ふには「要害な場所に據つてゐる敵は輕率に討つてはならぬ」と。此の度も兩軍互に兵を引いた。七年正月、勝賴は又遠江に攻め入つた。少將が出陣したと聞いたので立ち去つた。四月、三男の長丸が濱松で生れた。母は西鄕氏である。故水野信元の孤子の土井利勝をお附きとした。利勝は父の死後母に從つて土井氏に賴り、遂にその姓を名乘ることになつたのである。

初世子信康爲人剛厲、至手刄近臣。酒井忠次・大久保忠世數諫。不聽。所生關口氏以妬悍被廢、居岡崎。其婦織田氏、亦妬而無男。又爲姑氏所離間、憤怨。是歲七月、織田氏遂作書、以姑氏陰事告信長。因疏世子十二罪。會忠次赴安土。信長示而問之。對曰「信。」信長怒、使歸告少將「關口氏與勝賴通、欲除卿以立世子。遂滅我也。卿其亟計之。」忠次過岡崎不入。世子憂悸。

訓読 初め世子信康、人と爲り性剛厲、近臣を手刄するに至る。酒井忠次・大久保忠世、數諫む。聽かず。所

生關口氏、妬悍を以て廢せられ、岡崎に居る。其の婦織田氏も亦妬にして男なし。又姑氏の離間する所と爲り、憤怨す。是の歳七月、織田氏遂に書を作り、姑氏の陰事を以て信長に告げ、因つて世子の十二罪を疏す。會〻忠次、安土に赴く。信長、示して之を問ふ。對へて曰く「信なり」と。信長怒り、歸つて少將に告げしむ「關口氏勝頼と通じ、卿を除き以て世子を立て、遂に我を滅さんと欲するなり。卿其れ亟に之を計れ」と　忠次、岡崎を過ぎて入らず。世子、憂悸す。

通釋 初め、世子信康は性質が剛情で荒つぽく、近臣を手にかけて斬る樣なことまであつた。酒井忠次・大久保忠世が度々諫めた。併し聽き入れなかつた。實母の關口氏は嫉妬深く執念深い性質であつたので、夫人を廢めさせて岡崎にゐた。その嫁(信康の妻)の織田氏(信長の娘)も悋氣深くて男の子が無かつた。これが又姑の爲めに仲を割かれて怒り怨んでゐた。此の年の七月、この織田氏は、遂に父信長に手紙を書いて、姑の祕密を知らせ、因つて夫たる世子の十二の惡事を箇條書にして述べ立てた。丁度その時、忠次が安土に行つた。信長はその手紙を見せて尋ねた。忠次が答へて曰ふには「本當の事です」と。信長は立腹し、歸つて少將に次のやうに告げさせた。「(世子の實母)關口氏は勝頼と内通し、其方を除いて世子を立て、その上私をも滅ぼさうと思つてゐます。其方は直ぐ樣適當な處置をなされるがよい」と。忠次は歸途、(世子の居城なる)岡崎を通つたが、城に寄らなかつた。世子は爲めに非常に氣をもんで恐れた。

語釋 姑氏陰事(關口氏、甲斐の醫某と姦し、遂に禍心を起し、世子を立てゝ好みを甲斐に通じ、共に信長を滅さんと謀る。某甲斐に行き勝頼に請ふ。勝頼大に悅び之を許す。侍女某之を織田氏に漏らす。織田氏之を信長に知らす。)

八月、少將至岡崎、放世子于大濱、使竢後命。其明、世子親來哀訴。不聽。平岩親吉爲

傅。請曰「世子材武。今遽殺之後必悔焉。臣爲傅母狀。願斬臣首以謝信長。」少將泣曰「喪我良臣、而兒終不免、悔更甚矣」數日、遷世子于堀江、遂遷二股、令忠世護焉、誅關口氏。信長意未解。九月望、終使世子自殺。年二十一。世咎忠世輩不曉少將意也。初少將姬人永見氏孕而獲罪、出産於其鄉。世子潛擧之、呼荻丸。三年而見之。少將不子也。本多重次抱持而賀曰「酷肖君。君處戰國、宜多子矣。臣請育焉」世子卒。時荻丸甫六歲。而立長丸爲世子。

【訓讀】八月、少將岡崎に至り、世子を大濱に放き、後命を竢たしむ。其の明、世子親ら來つて哀訴す。聽かず。平岩親吉傅たり。請うて曰く「世子材武。今遽に之を殺さば、後必ず悔いん。臣、傅と爲つて母狀なり。願はくは臣の首を斬り以て信長に謝せよ」と。少將泣いて曰く「我が良臣を喪つて、而して兒終に免れずば、悔更に甚だしからん」と。數日にして世子を堀江に遷し、遂に二股に遷し、忠世をして護らしめ、關口氏を誅す。信長、意未だ解けず。九月望、終に世子をして自殺せしむ。年二十一。世、忠世の輩、少將の意を曉らざるを咎む。初め少將の姬人永見氏、孕んで罪を獲、出でゝ其の鄉に産す。世子、潛に之を擧げ、荻丸と呼ぶ。三年にして之を見ろ。少將、子とせざるなり。本多重次、抱持して賀して曰く「酷だ君に肖たり。君、戰國に處る。宜しく子多かるべし。臣請ふ、育せん」と。世子、卒す。時に荻丸甫めて六歲。而して長丸を立てゝ世子と爲す。

通釋 八月、少將は岡崎に赴き、世子を大濱に置いて、後命を待たせた。その翌日、世子は自身で出かけて來て歎き訴へた。併し許さなかつた。平岩親吉は世子の附人であつた。願ひ出て曰ふには「世子は秀れた武勇有る方であります。今急いで殺して終つたなら、後日必ず悔いる日が參りませう。私はお附人となつてゐて不始末で御座いました。どうぞ私の首を斬つて、信長にお詫びをして下さい」と。少將は涙を落して曰ふには「今私の良臣(平岩を指す)を失ひ、そして子供も結局助からぬことになつたならば、悔は一層甚しいわけだ」と。數日經つて世子を堀江に移し、それから又二股に移し、忠世をして監督させ、そして關口氏を誅した。併し信長の心はまだ解けなかつた。九月十五日、遂に世子をして自殺せしめた。年二十一である。世人は忠世等が、子を殺させまいと苦慮した少將の意中を覺らなかつたのを非難した。これより前、少將の妾の永見氏が懷胎中、咎を蒙り、里方へ歸つて出産した。世子がこつそり引き取つて、荻丸と名を付けてゐた。三年經つてその子を少將に見せた。少將は自分の子として取り扱はなかつた。本多重次がそれを抱きかゝへて祝を述べて曰ふには「大層我が君に似てゐられます。主君は戰國の世にをらるゝのである。御子息は多い方が宜しう御座います。この御子は私がお育て申し上げませう」と。さて世子が亡くなつた。その時荻丸は漸く六歳であつた。そして三子の長丸を世子に立てた。

語釋 大濱・堀江(遠江)

先ㇾ是、上杉謙信卒、義子景虎、與二從子景勝一爭ㇾ國。景勝賂二武田勝賴一、合攻二殺景虎一。景虎ハ北條氏政ノ弟也。氏政怒、絕二勝賴一、遂來修ㇾ好。於ㇾ是、三國交、盟約曰「武田侵二伊豆一、則德川

出兵駿河、侵遠江、則北條出兵上野、侵美濃、則德川・北條竝向甲斐、使織田毋東顧也。」是月、勝賴・氏政相持于黄瀨河。少將聞之、自將入駿河。酒井忠次諫曰「踰險深入、其危不測。」少將曰「約不可違。且二人相持。而我乘其弊、必有利矣。」使忠次留陣瀨戶、而進過田中城、攻持舟拔之、縱火至由井。勝賴引兵來迎。氏政不敢尾。少將欲逆擊之。諸將諫曰「勝不可必。而敵城在背。」乃還。忠次爲殿。十一月、松平家忠伏兵瀧坂、擊破甲斐兵。

訓讀 是より先、上杉謙信卒し、養子景虎、從子景勝と國を爭ふ。景勝、武田勝賴に賂ひ、合せ攻めて景虎を殺す。景虎は、北條氏政の弟なり。氏政怒り勝賴に絕ち、遂に來つて好を修む。是に於て、三國交〻盟約して曰く「武田、伊豆を侵さば、則ち德川、兵を駿河に出さん。遠江を侵さば、則ち北條、兵を上野に出さん。美濃を侵さば、則ち德川・北條、竝に甲斐に向ひ、織田をして東顧するなからしめん」と。是の月、勝賴・氏政、黃瀨河に相持す。少將之を聞き、自ら將として駿河に入らんとす。酒井忠次諫めて曰く「險を踰え深く入る、其の危きこと測られず」と。少將曰く「約違ふべからず。且つ二人相持す。而して我れ其の弊に乘ぜば、必ず利あらん」と。忠次をして、留つて瀨戶に陣せしめ而して進んで田中城を過ぎ、持舟を攻めて之を拔き、火を縱ち由井に至る。勝賴、兵を引いて來り迎ふ。氏政敢て尾せず。少將、之を逆へ擊たんと欲す。諸將諫めて曰く「勝必すべからず。

而して敵城、背に在り」と。乃ち還る。忠次、殿と爲る。十一月、松平家忠、兵を瀧坂に伏せ、甲斐の兵を擊破す。

通釋 これより以前、上杉謙信が歿して、養子の景虎が謙信の甥の景勝と相續爭ひをした。景勝は武田勝頼に賄賂を送り、兩方から攻めて景虎を殺した。景虎は元、北條氏政の弟である。氏政は立腹して勝頼と絕交し、その上、德川方に來つて交を結んだ。そこで（織田・德川・北條）の三國は相互に盟約を結んで曰ふのに「武田が伊豆に侵入したなら、其の時德川は駿河に出兵する。遠江を侵して來たなら、北條は上野に出兵をする。美濃を侵したなら、德川・北條何れも甲斐に向ひ、織田をして東方を心配させないやうにしよう」と。この月、勝頼と氏政が黃瀨河（伊豆）に對陣した。少將はそれを聞いて、自身兵を率ゐて駿河に入らうとした。酒井忠次が諫めて曰ふには「（箱根）の險阻を越えて敵地深く入るのは、誠に危險千萬です」と。少將が曰ふには「約束は背くわけに行かぬ。又二人が對陣してゐるのだ。自分がその弱味につけ込んだら、きつとうまい事が有るだらう」と。忠次をして瀨戸に留まつて陣取らせ、自分は進んで田中城を通り過ぎ、持舟を攻めて之を陷れ、火を放ち、由井まで來た。勝頼は伊豆の兵を引きつれて來り迎へた。氏政は思ひ切つて追うては來なかつた。少將は之を逆へ擊たうとした。諸將が諫めて曰ふのに「必ず勝つとは決まつてゐません。それに敵の城（田中）が背後にあります」と。そこで引き返した。忠次が殿になつた。十一月、松平家忠は瀧坂に伏兵を設けて、甲斐の軍を擊ち破つた。

八年正月、少將進從四位上。三月、攻高天神、連砦逼之。五月攻田中、侵掠而還。持舟兵出、躡之。返戰大破之。七月、復攻田中。岡田元次曰「天將雨。大井必漲。請速收兵」。少

將乃濟河而還。其夜果雨。勝頼聞我攻田中、疾驅而至。河漲不得濟。九年二月、高天神兵、力屈而逃。我兵邀擊、斬守將岡部與行。初小笠原氏叛降甲斐。我監軍大河内政局不從。武田氏以利誘降。政局唾罵不顧。幽于石窟八年、至此得出。痿不能起。少將賞賜之。

訓読 八年正月、少將從四位上に進む。三月、高天神を攻め、砦を連ね之に逼る。五月、田中を攻め、侵掠して還る。持舟の兵出でゝ之を躡す。返り戰ひ大に之を破る。七月、復田中を攻む。岡田元次曰く「天將に雨ふらんとす。大井必ず漲らん。請ふ、速に兵を收めよ」と。少將乃ち河を濟つて還る。其の夜果して雨ふる。勝頼、我が田中を攻むると聞き、疾驅して至る。河漲つて濟るを得ず。九年二月、高天神の兵、力屈して逃る。我が兵、邀へ擊ち、守將岡部與行を斬る。初め小笠原氏叛いて甲斐に降る。我が監軍大河内政局從はず。武田氏、利を以て誘ひ降さんとす。政局、唾罵して顧みず。石窟に幽せらるゝこと八年、此に至り出づるを得。痿して起つ能はず。少將、之を賞賜す。

通釈 八年正月、少將は從四位上に進んだ。三月、高天神を攻め、砦を並べ連ねて之に迫つた。五月、田中城を攻め、侵し掠めて還つた。持舟の兵が出て來て、その後をつけた。我が軍は引き返して戰ひ、大に之を破つた。七月、また田中を攻めた。岡田元次が曰ふには「此の天氣では大雨になりさうです。すると必ず大井川に水が出るでせう。どうぞ直ぐ軍をお收め下さい」と。そこで少將は川を渡つて引き返した。その夜果して雨が降つた。

勝頼は我が軍が田中を攻めると聞いて、馬を飛ばせてやつて來た。川が出水してゐて渡ることが出來なかつた。九年二月、高天神の守備軍が、愈々閉口して逃げ出した。我が兵は之を迎へ擊つて、守將の岡部與行を斬つた。以前、小笠原氏が叛いて甲斐に降つたことがある。その時軍目付の大河内政局は從はなかつた。武田氏は利益を餌にして誘ひ降さうとした。政局は惡口雜言してそれを顧みなかつた。(それが爲め) 岩窟に幽閉されること八年であつた。此の時に漸く出ることが出來た。あしなえになつて起つことが出來なかつた。少將は物を賜つて之を賞した。

少將遂與織田氏議、大擧攻甲斐。十年二月、信長遣信忠、將前軍入信濃、而自繼之。少將將騎卒三萬五千入駿河、陣牧野、分兵攻遠目・鞠子・持舟・久能諸城、皆陷之。甲斐將穴山信良在江尻。少將遣長坂血槍、說降之。信良潛來謁、走還其邑。乃進陣江尻。遣人降田中守將依田信蕃。不肯。乃使信良以書諭之。三月、信蕃致城而去。府中守將武田信龍棄守遁。少將以信良爲鄉導、自市川入甲斐。所過毫毛不犯。沿道望風歸降。當是時、信忠已下信濃諸城、進入甲斐古府。北條氏政以兵三萬臨境上。勝賴逃無所之。乃以殘兵棲天目山。織田氏兵逼殺之、獻首信長。信長罵曰、豎子使乃

公不レ得レ高レ枕數年矣。今果何狀也。」傳至二我營一。少將下二胡床一、加レ禮曰「公以二五州主將一、而遂至二於此一。豈非レ天哉。」甲斐・信濃士民聞レ之、皆竊歸二心於徳川氏一。

訓讀 少將遂に織田氏と議し、大擧して甲斐を攻む。十年二月、信長、信忠を遣はし、前軍に將として信濃に入らしめ而して自ら之に繼ぐ。少將、騎卒三萬五千に將として駿河に入り、牧野に陣し、兵を分つて遠目・鞠子・持舟・久能の諸城を攻め、皆之を陷る。甲斐の將穴山信良、江尻に在り。少將、長坂血槍を遣はし説いて之を降す。信良、潛に來り謁し、走つて其の邑に還る。乃ち進んで江尻に陣し、人を遣はして田中の守將依田信蕃を降す。肯んせず。乃ち信良をして書を以て之を諭さしむ。三月、信蕃城を致して去る。府中の守將武田信龍、守を棄てゝ遁る。少將、信良を以て郷導と爲し、市川より甲斐に入る。過ぐる所、毫毛も犯さず。沿道、風を望んで歸降す。是の時に當り、信忠已に信濃の諸城を下し、進んで甲斐の古府に入る。北條氏政、兵三萬を以て境上に臨む。勝頼逃れ、之く所なし。乃ち殘兵を以て天目山に棲む。織田氏の兵逼つて之を殺し、首を信長に獻ず。信長罵つて曰く「豎子、乃公をして枕を高うするを得ざらしむること數年なり。今果して何の狀ぞや」と。傳へて我が營に至る。少將、胡床を下り、禮を加へて曰く「公、五州の主將を以てして、遂に此に至る。豈に天に非ずや」と。甲斐・信濃の士民之を聞き、皆竊に心を徳川氏に歸す。

通釋 少將は遂に織田氏と相談し、大軍を出して甲斐を攻めた。十年二月、信長は信忠を遣つて前軍の大將として信濃に入らせ、そして自分はその後に續いた。少將は、騎兵歩卒三萬五千に將となつて駿河に入り、牧野に陣取り、兵を分けて遠目・鞠子・持舟・久能の諸城を攻めて、皆これ等を陷れた。甲斐の大將穴山信良は江尻に居

つた。少將は長坂血槍を遣つて、之に説いて降伏させた。信良は人知れず來て少將に目通りをし、走つて自分の領地に歸つた。そこで少將は進んで江尻に陣取り、人を遣はして田中の守將、依田信蕃を降さんとした。依田は承諾しない。そこで信良をして手紙で諭させた。三月、信蕃は城を開け渡して去つた。府中城の守將、武田信龍も守を捨て、逃れた。少將は信良を道案內と爲し、市川から甲斐に入つた。その途中、通る所は塵一本も犯し取らなかつた。沿道の者共はその威風を望んでなづき降つた。此の時、信忠はすでに信濃の諸城を降し、進んで甲斐の古府に入つた。北條氏政が兵三萬を率ゐて國境附近に出た。勝頼は逃げ出したが、行くべき先きも無い。殘兵を引きつれて天目山に籠つた。織田氏の兵が攻め寄せて之を殺し、首を信長に獻じた。信長は罵つて曰ふやう「小僧、貴樣は乃公に枕を高くして安眠させなかつたこと數年に及んだ。今となつては何んたる態だ」と。その首が我が軍の陣屋まで送られて來た。少將は床几から下り、禮を爲して曰ふには「貴公は五ケ國の總大將の身を以て、遂にこんな有樣になられた。誠に天命如何とも爲し難いことである」と。甲斐・信濃の士民はこの話を聞いて、皆、ひそかに德川氏の方に心を傾けた。

語釋 遠目・鞠子・江尻（駿河）〇五州（甲・信・駿・兩毛。）

信長初誘武田氏諸將使叛、及勝頼死皆誅之。下令逮捕、期無遺類。少將潛庇之、多得免者。依田信蕃久守田中、以抗我兵。少將最嘉之、收隸部下。於是、少將會信長于諏訪、賀戰捷。信長曰「長篠之戰奪其爪牙。今日固易爲力。皆卿之力也」遂分武田氏

地、使少將取駿河。少將曰「今川氏眞寓居僕所。願割其半予之。」信長不許曰「子以兵力取駿河。何分之一寓公乎。」遂割甲斐一郡、賜穴山信良、使我統屬之。置瀧川一益于上野、經略關東、置河尻鎭吉于甲斐、森長可等于信濃、皆使受我節度。四月、信長焚惠林寺、鏖其僧徒、遂自海道西歸。少將供給甚豐。

訓讀 信長、初め武田氏の諸將を誘ひ叛かしめ、勝賴の死するに及び皆之を誅す。令を下して逮捕し、遺類なきを期す。少將潛に之を庇ひ、免るゝを得たる者多し。依田信蕃、久しく田中を守り以て我が兵に抗す。少將最も之を嘉し、收めて部下に隷す。是に於て、少將、信長に諏訪に會し、戰捷を賀す。信長曰く「長篠の戰に其の爪牙を奪ふ。今日固より力を爲し易し。皆卿の力なり」と。遂に武田氏の地を分ち、少將をして駿河を取らしむ。少將曰く「今川氏眞、僕の所に寓居す。願はくは其の半を割いて之に予へん」と。信長許さずして曰く「子、兵力を以て駿河を取る。何ぞ之を一寓公に分たんや」と。遂に甲斐の一郡を割き穴山信良に賜ひ、我をして之を統屬せしむ。瀧川一益を上野に置き、關東を經略せしめ、河尻鎭吉を甲斐に、森長可等を信濃に置き、皆我が節度を受けしむ。四月、信長、惠林寺を焚き、其の僧徒を鏖にし、遂に海道より西歸す。少將、供給甚だ豐なり。

通釋 信長は初め、武田氏の諸將を誘つて武田氏から叛かせて置いて、勝賴が死するや、皆彼らを誅殺した。又令を下して武田方の者を捕へ、同類の一人も無いやうにしようと心に期した。少將はひそかにそれを庇つて、その爲めに信長の手から免れ得た者も多かつた。依田信蕃は久しい間、田中城を守つて我が軍に抵抗した。少將

は彼を最も賞讃し、引き入れて配下にした。そこで少將は諏訪に於て信長に會ひ、戰捷を賀した。信長が曰ふには「長篠の戰に武田の爪牙たる宿將精兵を亡ぼして置きました。だから今度の戰は非常に樂でした。皆其方の力です」と。遂に武田氏の領地を分け、少將をして駿河を取らせた。少將が曰ふには「今川氏眞が私の所に寄寓して居ります。お差支無ければ、駿河を半分を彼にやり度いと思ひます」と。信長は許さないで曰ふには「君は君の兵力を使つて駿河を取つた。どうして居候殿などに分けてやる必要があらうか」と。遂に甲斐の一郡を割いて穴山信良に賜ひ、我が德川をして之を支配させることにした。瀧川一益を上野に置いて、關東を經營略取させ、河尻鎭吉を甲斐に、森長可等を信濃に置き、何れも德川の指揮を受けさせた。四月、信長は惠林寺を燒き、その僧徒を皆殺しにし、遂に東海道を通つて西に歸つた。少將の接待は非常に奮つたものであつた。

語釋 爪牙（武田氏の十六宿將及び精兵一萬人。）○寓公（諸侯が地を失つて他に寄食せる者。）○惠林寺（佐々木高定嘗て將軍義昭に勸めて信長を討たせた。佐々木氏滅び高定は甲斐の武田に奔り惠林寺に隱れた。それでこの寺を燒いたのである。）

五月、少將西往安土。穴山信良從焉。信長命吏除道、使明智光秀掌饗、饗于高雲寺、親饋之。使信良、及酒井・大久保・石川・井伊・本多・榊原六將侍食、召優人爲樂。因謂少將曰「卿盍遊觀京畿。吾亦當踵往」。少將與信良以小隊發。信長使長谷川秀一・京商茶屋晴延從之。經京師、至大坂。織田信孝將略南海、屯于大坂。迎饗焉。少將遂往界府、遣晴延入京師、以候信長。六月二日、將還入京師。本多忠勝先發。至枚方、逢一騎、

來近、則晴延也。回指謂忠勝曰「公不見夫烟乎。明智光秀作亂、右府已被弑矣。」忠勝大驚、回馬返報。少將已至飯盛山、望見二人、察其有異、留從隊、獨與五將挺前。二人告變。少將前晴延、悉問之。秀一亦來。十騎聚馬首、計無所出。

訓讀 五月、少將、西安土に往く。穴山信良從ふ。信長、吏に命じて道を除し、明智光秀をして饗を掌らしめ、高雲寺に饗し、親ら之に饋る。信良、及び酒井・大久保・石川・井伊・本多・榊原の六將をして侍食し、優人を召し樂を爲さしむ。因つて少將に謂つて曰く「卿、盍ぞ京畿に遊觀せざる。吾も亦、當に踵いで往くべし」と。少將、信良と小隊を以て發す。信長、長谷川秀一・京商茶屋晴延をして之に從はしむ。京師を經て、大坂に至る。織田信孝、將に南海を略せんとし、大坂に屯す。迎へて饗す。少將遂に界府に往き晴延を遣はし京師に入り、以て信長に候せしむ。六月二日、將に還つて京師に入らんとす。本多忠勝先發す。枚方に至り、一騎の來るに逢ふ。近づけば則ち晴延なり。回指して忠勝に謂つて曰く「公、夫の烟を見ざるか。明智光秀亂を作し、右府已に弑せらる」と。忠勝、大に驚き、馬を回して返り報ず。少將、已に飯盛山に至り、二人を望見し、其の異あるを察し、從隊を留め獨り五將と挺前す。二人、變を告ぐ。少將、晴延を前めて悉く之を問ふ。秀一も亦來る。十騎・馬首を聚む。計、出づる所なし。

通釋 五月、少將は西安土に赴いた。穴山信良がお供をした。信長は役人に命じて道路を掃除させ、明智光秀をして接待の事を掌らせ、高雲寺で饗應し、自身食事をすゝめた。信良及び、酒井・大久保・石川・井伊・本多・榊

原の六將に陪させ、樂師を召めて音樂を奏せしめた。それから少將に向つて曰ふには「貴公はいつそ畿内を見物して歩かれたら如何ですか。余も是非後から參ることにしませう」と。少將は信良と共に、小勢の兵をつれて出發した。信長は、長谷川秀一と京の商人茶屋晴延をして少將にお供をさせた。京都を通つて大阪に軍を留めてゐた。そこでこの一行を迎へて饗應した。少將はそれから界に行き、晴延を京都に遣つて信長に伺候させた。(當時信長は秀吉の中國征伐を助けん爲め、京都に館してゐる)。六月二日、いよ〳〵引き返して京都に入らうとした。本多忠勝が先發した。忠勝が枚方まで來ると、一騎が向ふからやつて來るのに出會つた。近づくとそれは晴延であつた。來た方をふりかへり指し乍ら忠勝に向つて曰ふには「貴公はあの烟を御覽になりませんか。明智光秀が謀叛をして、右大臣殿はもう弑せられました」と。忠勝は非常に驚き馬を引き返して報告した。その時少將は既に飯盛山まで來て居つたが、二人のやつて來るのを眺めて何か變事の起つたことを察し、お供の兵隊を留め、五人の大將と共に前に進み出た。二人が變事を報告した。少將は晴延を近づけて委細を訊ねた。秀一もその場にやつて來た。この十騎許りが馬の首を集めて相談を初めた　何んとも好い計略が出なかつた。

語釋　枚方・飯盛山（河内）

少將曰「吾義當立討光秀。而從兵至寡。今獨有入京自殺而已」。乃引隊北上、使忠勝前行。數里忠勝回轡、謂五將曰「僕欲敢獻異議。今光秀方得志、擁大軍據要地。吾浪戰貽禽、徒取笑天下、曷如歸國擧兵徐圖誅討哉。願公等勸之主公」。酒井忠次・石川

數正曰「老成之慮、乃出二於少壯之人一。吾輩慚愧」。乃勸二之少將一、且曰「光秀已扼二衢路一。宜レ取二間道一」。少將曰「我不レ諳二地利一。必爲二土寇所一レ困。終不レ若二自殺一」。秀一曰「此間士民素慣二臣使令一。臣能使二之導一」。晴延亦散レ金募レ之。大和人越智玄蕃、使二其臣吉川某爲二鄕導一。土寇乘レ夜起、侵二我輜重一。高力淸長數〻返戰攘レ之。穴山信良自懷二猜疑一、不レ欲二同行一。自二普賢谷一分レ道而去、至二草内渡一、爲二村民所一レ殺。

訓讀 少將曰く「吾れ義當に立どころに光秀を討ずべし。而れども從兵至つて寡し。今は獨京に入り自殺する有るのみ」と。乃ち隊を引いて北上し、忠勝をして前行せ・しむ。數里にして、忠勝轡を回し五將に謂つて曰く「僕、敢て異議を獻ぜんと欲す。今、光秀、方に志を得、大軍を擁し要地に據る。吾れ浪戰して禽を貽し徒に笑を天下に取るは、曷ぞ國に歸り兵を擧げ徐に誅討を圖るに如かんや。願はくは公等、之を主公に勸めよ」と。酒井忠次・石川數正曰く「老成の慮、乃ち少壯の人に出づ。吾が輩慚愧す」と。乃ち之を少將に勸め、且つ曰く「光秀已に衢路を扼せん。宜しく間道を取るべし」と。少將曰く「我れ地利を諳んぜず。必ず土寇の困しむる所と爲らん。終に自殺するに若かず」と。秀一曰く「此間の士民、素より臣の使令に慣る。臣能く之をして導かしめん」と。晴延も亦金を散じて之を募る。大和の人越智玄蕃、其の臣吉川某をして鄕導を爲さしむ。土寇夜に乘じて起り、我が輜重を侵す。高力淸長、數〻返り戰ひ之を攘ふ。穴山信良自ら猜疑を懷き、同行を欲せず。普賢谷より

道を分つて去り、草内渡に至り、村民の殺す所と爲る。

通釋 少將が曰ふには「自分は義として、直ぐに光秀を討たねばならぬ。けれども供の兵は極めて少數である。今は唯だ京都に入つて自殺するまでのことだ」と。そこで隊を引きつれて北上し、忠勝をも前行せしめ數里も行つてから、忠勝は馬の首を向けかへて、五將に向つて曰ふには「私は敢て異議を申し立てたいと思ひます。今や光秀は志を遂げて氣をよくしてゐる最中で、大軍を抱へて要害の地に立て籠つてゐます。我が軍が無駄な戰爭をして捕虜となつたりして、徒に天下の物笑ひなるよりも、ひと先づ歸國してから兵を擧げ、ゆつくりと誅討を企てる方が宜しくはないでせうか。どうぞ貴公等からこの事を主公にお勸め下さい」と。酒井忠次・石川數正が曰ふには「分別の有る考が却つて壯い人の方から出た。我々は全く愧ぢ入る次第だ」と。そこで之を少將に勸め、且つ曰ふには「最早光秀が路筋を押へてゐませう。この際拔道を通る方が宜しいです」と。少將が曰ふには「我々は土地の案内をよく知つてゐない。きつと土地の惡者に苦しめられるだらう。結局自殺をした方が宜い」と。秀一が曰ふには此の邊の士民は平素から私の指圖に從ひつけて居ります。これらの者をして案内致させませう」と。晴延も金をふりまいて人民を募つた。大和の人、越智玄蕃はその家來の吉川某をして案内をさせた。一揆が夜に乘じて起り、我が軍の輜重隊を侵して來た。高力清長が度々軍を返し戰つて之を退けた。穴山信良は邪推して疑惑を懷き同行を欲しなかつた。そこで信良は普賢谷から別路をとつて去つたが、草内渡まで行つて村民に殺された。

語釋 貽レ禽（自分から生捕られて、敵に與へること。）〇少壯之人（この時忠勝三十五歲。）〇普賢谷・草内渡（山城）

明日、少將至木津。不可渡。有二舟來。呼而欲乘。舟人不肯。忠次擬銃脅之。舟人怖、艤而載之。既濟、忠勝以槍鐓撞破其舟、以防追者。織田氏將山岡景隆帥衆來迎。已而光秀覺少將逃去、出兵諸路要之。本多正信聞少將當厄、馳至宇治河、與景隆議、諭茶商上林、發士人護入信樂、館于鰐尾氏。使士人馳還設篝火河上、宣言德川公將來於此。光秀斥兵聞之、萃以竢焉。而少將已入伊賀矣。初信長鏖伊賀人、獨匿我管內者得免。於是、其父兄相告來護、入伊勢、自白子浦上舟、七日達於參河大濱、入永井直勝家。將士迎賀。即日少將徵兵管內討光秀。美濃・尾張將士使使送款。或勸急取二國。少將曰「右府故國也。吾可乘亂利之乎」。十七日、進陣于熱田。聞羽柴秀吉以山陽兵入討、光秀已伏誅也、乃班師、論賞幾道扞衛之功。

訓讀 明日、少將、木津に至る。渡るべからず。二舟有り來る。呼んで乘らんと欲す。舟人肯んぜず。忠次、銃を擬して之を脅す。舟人怖れ、艤して之を載す。既に濟り、忠勝、槍鐓を以て其の舟を撞き破り、以て追ふ者を防ぐ。織田氏の將山岡景隆、衆を帥ゐて來り迎ふ。已にして光秀、少將の逃れ去るを覺り、兵を諸路に出だして之を要す。本多正信、少將厄に當ると聞き、馳せて宇治河に至り、景隆と議し、茶商上林に諭し、士人を發

し、護つて信樂に入り、鱒尾氏に館す。土人をして馳せ還り篝火を河上に設け、徳川公將に此に來らんとすと宣言せしむ。光秀の斥兵之を聞き、萃り以て族つ。而して少將は已に伊賀に入る。初め信長、伊賀の人を鏖にす。獨り我が管内に匿るゝ者、免るゝを得たり。是に於て、其の父兄相告げて來り護り、伊勢に入り、白子浦より舟に上り、七日にして參河の大濱に達し、永井直勝の家に入る。將士迎へ賀す。即日、少將、兵を管内に徵し、光秀を討つ。美濃・尾張の將士、使をして款を送らしむ。或ひと、急に二國を取るを勸む。少將曰く「右府の故國なり。吾れ亂に乘じて之を利す可けんや」と。十七日、陣を熱田に進む。羽柴秀吉、山陽の兵を以て入討し、光秀已に誅に伏すと聞くや、乃ち師を班し、畿道扞衞の功を論賞す。

【通釋】翌日、少將は木津に着いた。併し渡ることが出來なかつた。そこへ一艘の舟が出て來た。呼んで乘らうとした。船頭が承知しなかつた。忠次は銃を構へてそれを威しつけた。船頭は怖れをなし、舟仕度をしてこの一行を乘せた。既に渡つて終ふと、忠勝は槍の石突で舟底を突き破つて、追手の者に利用されぬやうにして置いた。織田氏の大將の山岡景隆が部下を率ゐて迎へに來た。その中に、光秀は少將が逃れ去つたことを覺り兵を諸道に出して待ち伏せさせた。本多正信は少將が難避してゐることを聞いて、急いで宇治河まで行き、景隆と相談し、茶商の上林といふ者を諭し、土地の者を徵發して少將を護らせて信樂に入り、鱒尾氏の家に宿した。それから土地の者をして馳せ返つて河の附近に篝火を支度させ、徳川公が間もなくこゝへ來ると言ひふれさせた。光秀の斥候兵がそれを聞き込み、集つて待つてゐた。その中に少將は伊賀に入つ、終つたのである。以前、信長は伊賀の人を皆殺しにしたことがある。その時我が徳川氏の領地に隱れた者だけは命が助かつた。そこで、少將が來たと云ふのでその父兄共が互に知らせ合ひ、やつて來て護衞し、伊勢に入り、白子浦から舟に乘り、七日に參河の大

濱に到着し、永井直勝の家に入つた。將士達が迎へに出て、無事を祝した。直ぐその日、少將は領内の兵を徴發して光秀を討伐することゝなつた。美濃・尾張(信長の舊國)の將士が使をよこして、好を求めて來た。或る者が、この際急いでこの二國(信長の舊國)を取つて終へと勸めた。少將が曰ふには「右府殿の舊領地である。自分は亂に乘じてそんな狡いことをして宜からうか」と。十七日、陣を熱田に進めた。羽柴秀吉が、山陽道の軍隊を率ゐて畿内に討ち込み、光秀が最早誅殺されたと聞いたので、軍を返し、上方で(光秀の亂で逃げ歸るとき)少將を保護し守つた功勞に對し評定して行賞した。

語釋 木津(山城) ○信樂(近江) ○白子浦(伊勢)

當是時、四方聞變騷擾。河尻鎭吉初藉信長威權、凌轢國人、每事行新法。國人囂然。及信長薨、鎭吉恇悸欲走。不敢。少將至參河之日、遣本多百助護鎭吉曰「子欲西歸、宜借道於我。」國人流言曰「本多圖河尻。」鎭吉乃饗百助、醉而殺之。國人乘之、攻殺鎭吉。森長可等皆棄守西走。於是甲斐・信濃、空虛無主。上杉景勝・北條氏政、竝出兵爭之。少將聞鎭吉死、遣酒井忠次・大須賀康高・成瀨正一入甲斐、以武田氏降將依田信蕃・岡部正綱爲介、竪旗於柏坂嶺、以招來國人。武田氏骨鯁之臣橫田尹松・城昌茂等相踵來歸。凡千餘人。少將皆予之印信、安堵如故。大村某者、欲導氏政兵入甲

斐。穴山氏部兵擊平之。又遣大久保忠世・石川康通・本多廣孝、將兵繼往、招諏訪頼忠・小笠原信嶺、皆降之。

訓讀　是の時に當り、四方、變を聞いて騷擾す。河尻鎭吉、初め信長の威權を藉り、國人を凌轢し、事每に新法を行ふ。國人囂然たり。信長の薨ずるに及び、鎭吉、恇悸して走らんと欲す。敢てせず。少將、參河に至るの日、本多百助を遣はし、鎭吉を護らしめて曰く「子、西に歸らんと欲せば、宜しく道を我に借るべし」と。國人、流言して曰く「本多・河尻を圖る」と。鎭吉乃ち百助を要し、醉はしめて之を殺す。國人、之に乘じ、攻めて鎭吉を殺す。森長可等皆守を棄てゝ西に走る。是に於て甲斐・信濃、空虛にして主無し。上杉景勝・北條氏政、並に兵を出だして之を爭ふ。少將鎭吉の死を聞き、酒井忠次・大須賀康高・成瀨正一を遣はし甲斐に入り、武田氏の降將依田信蕃・岡部正綱を以て介と爲し、旗を柏坂嶺に竪て、以て國人を招來せしむ。武田氏骨鯁の臣橫田尹松・城昌茂等相踵いで來り歸す。凡そ千餘人。少將、皆之に印信を予へ、安堵故の如し。大村某なる者、氏政の兵を導き甲斐に入らんと欲す。穴山氏の部兵、擊つて之を平ぐ。又大久保忠世・石川康通・本多廣孝を遣はし、兵に將として繼いで往き、諏訪頼忠・小笠原信嶺を招かしめ、皆之を降す。

通釋　此の時、各地方で變事を聞いて騷ぎ亂れた。甲斐に封ぜられた河尻鎭吉は、前から信長の威權を笠にきて領民を踏みつけ、事每に新規な規則を造つて處分してゐた。そのために領民は大に騷ぎ立てゝゐた。信長が弑せられると、鎭吉はひどくびく〳〵して逃げようと思つた。併し思ひ切つてそれもせずにゐた。少將が參河に着いた日に、本多百助を鎭吉の護衞に遣はして曰ふには「貴公、若し西に歸らうといふ希望ならば、我が領內を通行

するがよい」と。甲斐の人民は本多は「河尻を始末しに來たのだ」と。噂を立てた。そこで鎮吉は百助を馳走し酒に醉はせた上殺して終つた。國人はその騒ぎに乘じて鎮吉を攻め殺した。森長可等は皆守備を放つたらかして西に走つた。そこで甲斐・信濃の二箇國は主のないがら空きになつた。上杉景勝と北條氏政が兩方から兵を出してそれを取らうと爭つた。少將は鎮吉の死を聞き、酒井忠次・大須賀康政・成瀬正一を甲斐に遣り、武田の降將依田信蕃・岡部正綱の二人を仲介者にして、旗を柏坂嶺に立て、國人を招き寄せた。武田氏の硬骨の臣、横田尹松・城昌茂等が續々と歸服して來た。その數は凡そ千人であつた。少將はこれ等の者に皆・朱印の書付を與へ、故の通り本領に落付かせることにした。大村某が氏政の兵を案内して甲斐に入らうとした。穴山氏の部下の兵がそれを擊ち破つて平げた。又大久保忠世・石川康通・本多廣孝を遣はし兵を率ゐて後から引きつゞいて行かしめ、諏訪頼忠・小笠原信嶺を招かせ皆降服させた。

七月、少將留兵守駿河諸城、親將入甲斐。甲斐父老爭供芻糧。進陣于古府、撫循降附、分守諸要。遣忠次・忠世以下、以兵三千徇信濃、圍高島城。八月、氏政遣子氏直、將四萬騎入佐久郡。諸將聞之、退屯音骨、遂引還。初諏訪頼忠不服忠次。少將更遣忠世。乃服。二人頗有郤。於是、爭殿不決。衆和解之、六將更殿而退。氏直尾之。行七里、十餘合、我兵不損一人。氏直止陣若巫。少將乃措伏、自將數百騎、出淺生原。氏直不敢

進。

【訓讀】七月、少將兵を留めて駿河の諸城を守らしめ、親ら將として甲斐に入る。甲斐の父老爭つて芻糧を供す。進んで古府に陣し、降附を撫循し、諸要を分守す。忠次・忠世以下を遣はし、兵三千を以て信濃を徇へ、高島城を圍む。八月、氏政、子氏直を遣はし、四萬騎に將として佐久郡に入らしむ。諸將之を聞き、退いて音骨に屯し、遂に引き還る。初め諏訪頼忠・忠次に服せず。少將、更に忠世を遣はす。乃ち服す。二人頗る郤有り。是に於て、殿を爭つて決せず。衆、之を和解し、六將更〻殿して退く。氏直之に尾す。行くこと七里、十餘合。我が兵一人を損せず。氏直止つて若巫に陣す。少將乃ち伏を措き、自ら數百騎に將として、淺生原に出づ。氏直敢て進まず。

【通釋】七月、少將は兵を殘して駿河の諸城を守らせ、自身大將となつて甲斐に入つた。甲斐の壯者老人共は先を爭つて馬ぐさや兵糧を提供した。進んで古府に陣取り、降附した者を慰撫し從へ、諸所の要害を手分けして守らせた。忠次・忠世以下の者をして兵をつけて、信濃を觸れ下し、高島城を包圍した。八月、氏政は子氏直を四萬騎の大將として佐久郡に入らせた。諸將はそれを聞いて退いて音骨に軍を屯したが、遂に引き上げて歸ることになつた。初め諏訪頼忠は忠次に服しなかつた。少將が更に忠世を遣つた。それで初めて服從した。それが爲め忠世・忠次の二人は非常に仲が惡くなつた。この退陣に際しては、殿になることを爭つてどちらとも決らなかつた。皆はそれを仲直りさせ、六將が交代に殿して退いた。氏直は跡をつけて來た。七里の道程を行く間に十餘回の擊ち合ひをしたが、併し我が軍は一人も損しなかつた。氏直も遂に留まつて若巫に陣取つた。そこで少將は伏兵を

設け、自身數百騎を率ゐて淺生原に出た。氏直は敢て進まうとしなかつた。

語釋 音骨（信濃） ○六將（酒井忠次、大須賀康高、石川康通、大久保忠世、本田廣孝、岡部正綱。） ○若巫・淺生原（甲斐）

少將使鳥居元忠・水野勝成・松平清宗・三宅康貞守古府、而自陣新府。氏政遣弟氏忠・族氏勝、將數千騎入郡內。氏直潛遣使、告焉曰「古府兵寡。子攻取之、則新府隨潰、家康當自下山遁。」乃夾擊殲之。古府四將諜知其謀、以二千人邀擊之。氏忠・氏勝大敗遁去。少將望塵曰「我兵勝矣。」已而四將以首級三百還獻。命梟之新府郊外。氏直兵視之、皆其子弟親戚也。乃悲駭不欲鬪。少將賞四將、賜元忠以郡內。氏直砦于豆生田。參河人久世廣宣・甲斐人曲淵吉景、皆有功焉。氏政又遣弟氏規窺駿河。松平康親守三枚橋、本多重次守沼津、擊氏規破之。氏直數招甲斐人。甲斐人斬使者獻其書。

訓讀 少將、鳥居元忠・水野勝成・松平清宗・三宅康貞をして、古府を守らしめ、而して自ら新府に陣す。氏政、弟氏忠・族氏勝を遣はし、數千騎に將として郡内に入らしむ。氏直、潛に使を遣はし、告げて曰く「古府、兵寡し。子、之を攻め取らば、則ち新府隨つて潰え、家康、當に下山より遁るべし。乃ち夾擊して之を殲さん」と。

古府の四將、其の謀を諜知し、二千人を以て之を邀擊す。氏忠・氏勝、大に敗れ遁れ去る。少將、塵を望んで曰く「我が兵將てり」と。已にして四將、首級三百を以て還り獻ず。命じて之を新府の郊外に梟す。氏直の兵之を視るに、皆其の子弟親戚なり。乃ち悲駭して鬬ふを欲せず。少將、四將を賞し、元忠に賜ふに郡內を以てす。氏直、豆生田に砦す。參河の人久世廣宣・甲斐の人曲淵吉景、皆功有り。氏政、又弟氏規を遣はし駿河を窺ふ。松平康親は三枚橋を守り、本多重次は沼津を守り、氏規を擊つて之を破る。氏直、數〻甲斐の人を招く。甲斐の人、使者を斬り其の書を獻ず。

通釋　少將は鳥居元忠・水野勝成・松平清宗・三宅康貞に古府を守らせ、そして自分は新府に陣取つた。氏政は、弟氏忠・同族氏勝を數千騎の大將として郡內に入らせた。氏直はひそかに使をやつて知らせて曰ふには「古府は兵が少い。貴方がそこを攻め取つたら、新府の方も自然に潰れ、家康はどうしても下山から逃げ出すでせう。そこを夾擊ちにして全滅させよう」と。古府に居た四將が其の謀を忍びの者によつて知り、二千人を率ゐて之を迎へ擊つた。氏忠・氏勝は大敗を喫して逃げ去つた。少將は塵煙の起るのを見て曰ふには「我が軍が勝つたぞ」と。その內に四將が戻つて來て首級三百を獻じた。少將はそれを新府の郊外に梟首にするやうに命じた。氏直の兵がそれを見ると、皆自分達の子弟や親戚である。驚き悲しんで戰ふことを欲しなかつた。少將は四將を賞し、元忠に郡內を賜つた。氏直は豆生田に砦を設けた。參河の人、久世廣宣・甲斐の人曲淵吉景は、皆手柄を樹てた。氏政は又弟氏規をやつて駿河を覗はせた　松平康親は三枚橋を守り、本多重次は沼津を守り、氏規の軍を擊ち破つた。氏直は度々甲斐の人を招いた。甲斐の人はその使者を斬つてその手紙を徳川氏に獻じた。

語釋　下山・豆生田（甲斐）○四將（鳥居、水野、松平、三宅。）○三枚橋（伊豆、駿河の境。）

信濃人眞田昌幸・保科正直、初降北條氏。九月、少將使依田信蕃招降昌幸、合兵屯碓氷嶺、絶關東糧道。正直因酒井忠次來降、以高遠兵取箕輪、招諸城以屬我。氏直益窘。十月、氏政乃使氏規來請和曰、「公取甲斐・信濃、我取上野。」且請爲氏直娶少將女。少將許之。

【訓讀】信濃の人眞田昌幸・保科正直、初め北條氏に降る。九月、少將、依田信蕃をして昌幸を招降せしめ、兵を合せて碓氷嶺に屯し、關東の糧道を絶つ。正直、酒井忠次に因つて來り降り、高遠の兵を以て箕輪を取り、諸城を招き以て我に屬せしむ。氏直益〻窘む。十月、氏政乃ち氏規をして來つて和を請はしめて曰く「公は甲斐・信濃を取れ。我は上野を取らん」と。且つ氏直の爲に少將の女を娶らんと請ふ。少將、之を許す。

【通釋】信濃の人眞田昌幸・保科正直は初め北條氏に降つてゐた。九月、少將は依田信蕃をして昌幸を招き降させ、兵を合せて碓氷嶺に屯し、關東の糧道を絶ち切らせた。正直は酒井忠次を通して歸伏し、高遠の兵を率ゐて箕輪を取り、諸所の城を招いて我が軍の味方につけしめた。氏直は益〻困つて來た。そこで十月、氏政は氏規をして和睦を申し込みに來させて曰ふには「貴公は甲斐と信濃を取り給へ、我が輩は上野を取ることにする」と。その上に氏直の爲めに少將の息女を嫁に貰ひ度いと請うた。少將はそれを許した。

十一月、氏直撤兵、而修平澤砦。少將使人詰之曰、「我初欲取上野。遇和而止。今既和

而築。是僞和也」使諸將發兵赴之。北條氏兵懼、毀砦而去。是時上杉景勝既取河中島、築砦四外。少將遣依田信蕃・柴田康忠・菅沼大膳等、攻前山・高棚・小田井諸砦、拔之。於是、甲斐・信濃豪傑、盡屬我部下。少將檢其采邑、或依舊、或削之、使平岩親吉鎭甲斐、大久保忠世鎭信濃。務因武田氏舊制、無所更變。獨除其厚斂苛刑。建寺于田野、以弔勝頼。嘉小宮山内膳忠節、召其弟又七祿之、以其季弟爲僧者爲田野寺主、收山縣・土屋・原・一條、四族之兵、屬於井伊直政。軍裝皆用赤色。井伊氏兵自是勁矣。

訓讀　十一月、氏直、兵を撤して平澤の砦を修む。少將、人をして之を誚めしめて曰く「我れ初め上野を取らんと欲す。和に遇つて止む。今既に和して築く。是れ僞和なり」と。諸將をして兵を發し之に赴かしむ。北條氏の兵懼れ、砦を毀つて去る。是の時、上杉景勝既に河中島を取り砦を四外に築く。少將、依田信蕃・柴田康忠・菅沼大膳等を遣はし、前山・高棚・小田井の諸砦を攻め、之を拔く。是に於て、甲斐・信濃の豪傑、盡く我が部下に屬す。少將、其の采邑を檢し、或は舊に依り、或は之を削り、平岩親吉をして甲斐を鎭し、大久保忠世をして信濃を鎭せしむ。務めて武田氏の舊制に因り、更變する所なし。獨り其の厚斂苛刑を除く。寺を田野に建て以て勝頼を弔す。小宮山内膳の忠節を嘉し、其の弟又七を召して之に祿し、其の季弟の僧となる者を以て田野寺の主と爲し、山縣・土屋・原・一條、四族の兵を收め、井伊直政に屬せしむ。軍裝皆赤色を用ふ。井伊氏の兵是より勁し。

通釋 十一月、氏直は軍隊を引上げたが、平澤の砦を修理した。少將は使をやつてそのことを責めさせて曰ふには「自分は最初上野を取らうとした。和議が協うた爲めに止めたのである。然るに貴公は和睦をしながら砦を築いてゐる。これは僞の和睦である」と。諸將に命じ兵を發して平澤に赴かせた。北條氏の兵は恐れを爲し、砦を毀して歸つた。この時、上杉景勝は既に河中島を取り砦をその四方に築いてゐた。少將は依田信蕃・柴田康忠・菅沼大膳等を遣つて前山・高棚・小田井の諸砦を攻めて之を陷れた。そこで甲斐・信濃二國の豪傑は殘らず我が配下になつた。少將は彼らの領地を檢べ、或る者は故通りとし、或はそれを減らし、平岩親吉をして甲斐を治めさせ、大久保忠世に信濃を治めさせた。政治のやり方は務めて武田氏の舊來の制度を存し、それを變へぬやうにした。唯だ從來の嚴しい稅金と酷い刑罰とだけを廢した。田野に寺を建立して勝頼を弔つた。小宮山內膳の忠節を賞美し、その弟の又七を召して祿を與へ、その末弟の僧侶になつてゐた者を田野寺の住持にし、山縣・土屋・原・一條の四家の兵を收めて井伊直政の配下にした。彼らは戰時の服裝に何れも赤色を用ひた。井伊氏の軍はこれからめつきり強くなつた。

語釋 平澤・前山・高棚・小田井（信濃）

十二月、少將乃還濱松。以降附四人掌採訪。北條氏使納幣。織田氏故將柴田勝家亦使賀平定。十一年閏正月、賞松平康親功、賜河東二郡。二月、依田信蕃攻拔岩尾、而死之。少將祿其子、賜姓名松平康國。依康親例也。乃命大久保忠世助康國。

攻抜小室、走守將宇佐美定行。景勝不敢援。七月、北條氏迎女。酒井忠次護送之。八月、少將如甲斐、修法令。賜眞田昌幸以上田。昌幸侵上野、取沼田。十月、少將進正四位下、遷右近衞中將。

訓讀 十二月、少將、乃ち濱松に還る。降附四人を以て採訪を掌らしむ。北條氏、使をして幣を納れしむ。織田氏の故將柴田勝家も亦、使をして平定を賀せしむ。十一年閏正月、松平康親の功を賞し、河東二郡を賜ふ。二月依田信蕃、攻めて岩尾を拔いて之に死す。少將、其の子に祿し、姓名を松平康國と賜ふ。康親の例に依るなり。乃ち大久保忠世に命じ康國を助けしむ。攻めて小室を拔き、守將宇佐美定行を走らす。景勝敢て援けず。七月、北條氏、女を迎ふ。酒井忠次之を護送す。八月、少將、甲斐に如き、法令を修む。眞田昌幸に賜ふに上田を以てす。昌幸、上野を侵し、沼田を取る。十月、少將、正四位下に進み、右近衞中將に遷る。

通釋 十二月に入つて少將は濱松に返つた。今度歸服した四人の大將に地方檢察のことを掌らせた。北條氏が使をよこして進物を納めさせた。故の織田氏の大將の柴田勝家も使を立て平定の祝を述べさせた。十一年閏正月、松平康親の手柄を賞し、河東の二郡を賜つた。二月、依田信蕃が岩尾を攻め落して討死をした。少將はその子に知行を與へ、姓名を松平康國と賜つた　これは前の康親の例に依つたのである。そこで大久保忠世に康國を助けるやう命じた。そこで小室を攻め落し、守將の宇佐美定行を走らせた。景勝はそれを助けようともしなかつた。七月、北條氏が少將の息女を迎ひに來た。酒井忠次が護送した。八月、少將は甲斐に出向いて法律命令を整

理した。眞田昌幸に上田を賜つた。昌幸は上野に侵入して沼田を取つた。十月、少将は正四位下に進み、右近衛中将に遷つた。

語釋 岩尾・小室（信濃）○沼田（上野）

日本外史新釋　卷十九終

貞册（一）終

昭和六年四月十四日印刷
昭和六年四月十八日發行

第二十一回配本

【非賣品】

昭和漢文叢書
日本外史
(貞一)

不許複製

著作者　頼成一
東京市神田區北神保町十一番地
發行者　辻本卯藏
東京市牛込區榎町七番地
印刷者　竹内喜太郎

東京市神田區北神保町十一番地
發行所　弘道館
電話九段一三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所　日清印刷株式會社


為漢文叢
晉劉生仿



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03032 9957